



# Agile Product Lifecycle Management

管理者ガイド

v9.2.2.3

部品番号 E06150-01

2008 年 5 月

## 著作権および商標について

Copyright © 1995, 2008, Oracle. All rights reserved.

このプログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りが無いことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段 (電子的または機械的)、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987). Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図しておりません。このプログラムをかかえる目的で使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle、Agile は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行 (製品またはサービスの提供、保証義務を含む) に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

# 目次

---

著作権および商標について .....	ii
<b>概要 .....</b>	<b>1</b>
Agile PLM 管理者へようこそ .....	1
Agile PLM 管理者のマニュアル .....	1
Agile Product Lifecycle Management .....	2
管理機能 .....	2
管理者ノード .....	3
Java クライアントの管理者ノード .....	3
[例] ノード .....	6
Web クライアントの管理者ノード .....	6
Agile PLM 実装のためのガイドライン .....	7
Agile PLM 9.2.2 の管理者の新機能 .....	8
Agile PLM 9.2.2.1 の管理者の新機能 .....	8
Agile PLM 9.2.2.2 の管理者の新機能 .....	9
<b>管理者の基本事項 .....</b>	<b>11</b>
概要 .....	11
管理者として Agile クライアントにログインする .....	11
新規管理者ユーザーを作成する .....	12
データのフィルタリング .....	13
管理者レポート .....	14
Agile PLM で使用される日時 .....	16
サーバ レベル .....	16
クライアント レベル .....	16
例 .....	16
Java クライアントの管理者ユーティリティ .....	16
ユーザーに電子メールで通知する .....	17
グローバル置換 .....	17
オブジェクト履歴 .....	19
管理者設定のインポートとエクスポート .....	21
プロセスの拡張ライブラリ .....	23
Web クライアントの管理者ユーティリティ .....	23
クラスタ環境を管理する .....	24

クラスタ .....	24
キャッシュ ヘルス モニタ .....	25
ビジュアル テーマ .....	29
Agile PLM 変数 .....	31
デフォルト値変数 .....	31
権限マスクの条件変数 .....	32
ワークフローの割り当ておよびステータス タイプの変数 .....	33
ルーティング管理者変数 .....	34
多言語サポート .....	35
多言語機能でサポートされている管理者データ .....	35
多言語機能でサポートされていない管理者データ .....	37
多言語用にシステムを設定する .....	37
<b>クラス .....</b>	<b>39</b>
ビジネス オブジェクトに Agile PLM クラスを設定する .....	39
Agile PLM クラス構成 .....	40
ルーティング可能/不可能なオブジェクト .....	40
インストールされる Agile PLM クラス、基本クラス、およびサブクラス .....	41
オブジェクト タイプを無効にする .....	45
Agile PLM クラスを表示する .....	45
ライフサイクル フェーズをカスタマイズする .....	46
ライフサイクル フェーズを変更する .....	46
ライフサイクル フェーズを追加する .....	47
ライフサイクル フェーズを削除する .....	47
サブクラスを設定する .....	48
作業を開始する前に .....	49
サブクラスのプロパティを表示する .....	49
自動採番ソース プロパティを変更する .....	49
手動番号割り当てを禁止する .....	50
サブクラス名または説明を変更する .....	50
拠点別 BOM のプロパティを変更する .....	51
新規サブクラスを作成する .....	51
サブクラスを削除する .....	52
タブを設定する .....	52
[ユーザー定義 1] タブについて .....	53
[ユーザー定義 2] タブについて .....	53
タブを表示、非表示にする、または名前を変更する .....	53
タブの形式を変更する .....	54
フォーム タブの属性の順序を変更する .....	54
テーブル タブの属性の順序を変更する .....	56

[ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブを設定する .....	56
[ユーザー定義 1] タブと [ユーザー定義 2] タブを設定するためのガイドライン .....	56
属性、ユーザー設定フィールド、および読み取りフィールド .....	61
ユーザー定義のユーザー設定フィールド .....	61
読み取りフィールド .....	63
属性を定義する .....	65
属性のタイプについて .....	66
属性のプロパティを定義する .....	66
属性を設定する .....	70
表示幅の属性 .....	71
属性を変更する .....	71
複数のタブに共通する属性のプロパティを一致させる .....	72
デフォルト値を設定する .....	72
タブの属性を表示または非表示にする .....	72
フィールド ラベルまたはテーブルの列名を編集する .....	73
サブクラスまたは会社ロゴに対しカスタム アイコンを使用する .....	73
Agile ロゴを置換する .....	74
オブジェクトおよびファイルへの簡易アクセス .....	75
Agile で生成される簡易アクセス オブジェクト URL .....	75
ユーザーが生成するスマート オブジェクト URL の形式 .....	75
簡易アクセス オブジェクト URL を使用する .....	76
<b>文字セット、リスト、およびプロセス拡張 .....</b>	<b>77</b>
文字セット .....	77
文字セットの作成 .....	78
文字セットの変更 .....	78
リスト .....	79
ルーティング管理者リスト .....	79
いろいろなリストの種類 .....	81
リストを設定する .....	83
カスケード リストを作成する .....	86
プロセスの拡張 .....	86
プロセスの拡張ライブラリを使用する .....	87
プロセスの拡張をクラスに割り当てる .....	89
プロセスの拡張をワークフローのステータスに割り当てる .....	90
<b>自動採番 .....</b>	<b>91</b>
自動採番の使用方法 .....	91

自動採番ソースを変更する .....	91
自動採番ソースについて .....	92
自動採番ソースを設定する .....	94
自動採番の接頭辞または接尾辞を変更する .....	95
自動採番ソースの使用箇所を変更する .....	95
カスタム自動採番 .....	96
タイムアウト .....	96
新しい自動採番ソースを作成する .....	96
作業を開始する前に .....	96
自動採番ソースを削除する .....	97
<b>条件 .....</b>	<b>99</b>
再利用の条件について .....	99
再利用の条件を検索する .....	100
再利用の条件を表示する .....	100
条件ウィンドウとタブ .....	101
新規条件を作成する .....	101
既存の再利用の条件を変更する .....	103
再利用の条件で [対象アイテム] タブのフィールドを使用する .....	103
再利用の条件で [対象アイテム] タブのフィールドを指定した場合の変更の検索条件 .....	103
対象アイテムの名前における「アイテム」と「部品」の相違 .....	104
対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する .....	104
\$CURRENTREV と \$LATESTREV をアイテムの条件で使用する .....	105
\$CURRENTREV 変数の使用ルール .....	105
\$LATESTREV 変数の使用ルール .....	107
[タイトル ブロック.リビジョン] について .....	108
\$CURRENTREV および \$LATESTREV 条件を使用したアイテム関係の作成 .....	108
<b>ワークフロー .....</b>	<b>109</b>
ワークフローにより変更管理プロセスが自動化される方法 .....	109
ワークフローを変更する .....	110
ワークフローの基本 .....	110
ルーティング管理者 .....	110
その他のワークフローの基本 .....	111
できるだけ簡潔に .....	112
デフォルトのステータス ベースのワークフロー .....	113
ステータス タイプの定義 .....	113
[名前を付けて保存] で新規ワークフローを作成する .....	115
一般のワークフロー プロパティ .....	116
[一般情報] タブ .....	116

ワークフロー条件基準タイプ .....	117
ステータス条件基準タイプ .....	118
カスタム ワークフローを作成し、使用する .....	119
作業を開始する前に .....	120
ワークフローを作成する場合のガイドライン .....	121
新規ワークフローを作成する .....	122
新規ワークフローが有効にされた場合 .....	124
ユーザー グループに送信する .....	125
ステータス プロパティの定義 .....	125
終了時に検索条件が適用されない場合は通知する .....	125
手動による次の有効なステータス .....	126
自動昇格 .....	126
自動昇格が失敗した場合は通知する .....	127
アドホック承認者/オブザーバ .....	128
却下された場合はステータスを変更する .....	128
却下された場合は通知する .....	129
催促期間 .....	129
レビュー エスカレーション期間 .....	129
アクションに必要なコメント .....	131
検索条件プロパティの定義 .....	131
承認者とオブザーバ .....	131
条件使用状況 .....	131
デフォルトの変更分析者/コンポーネント エンジニア .....	132
当該ステータスになり次第通知する .....	132
リリース検証を実行する .....	133
必須フィールドの終了 .....	136
ワークフローの機能をテストする .....	136
ワークフローの検証分野 .....	136
テスト時のヒント .....	137
ワークフローを実働環境に適用する .....	137
ワークフローの適用に関するヒント .....	138
ワークフローの適用プロセス .....	138
アクティブなワークフローを変更する .....	138
有効なワークフローのプロパティを変更する .....	138
ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする .....	140

<b>ユーザーとユーザー グループ .....</b>	<b>141</b>
ユーザー .....	141
新規ユーザーを追加する .....	142
ユーザー名について .....	143
パスワードについて .....	144
管理者のノードとしての LDAP .....	145
ユーザー プロパティを変更する .....	145
定義済みユーザー プロパティ .....	147
ユーザーを削除する/削除を取り消す .....	152
アカウント規約.....	152
作業を開始する前に .....	152
アカウント規約を設定する .....	153
ユーザー グループ .....	154
新規ユーザー グループを作成する .....	155
ユーザー グループ プロパティ .....	156
ユーザー グループを変更する .....	157
ユーザー グループを削除する .....	158
ユーザー グループの削除を取り消す .....	159
エスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てる .....	160
変更の承認者としてユーザー グループを追加する .....	161
ユーザー グループをパートナーとして設定する .....	162
サブライヤ グループ .....	162
ユーザー モニタ .....	164
[ユーザー モニタ] ウィンドウを更新する .....	164
ユーザーセッションを終了する .....	164
<b>役割 .....</b>	<b>165</b>
役割について.....	165
権限マスクのグループとしての役割 .....	167
役割を表示する.....	169
[役割] ウィンドウを表示する.....	169
役割を表示する .....	170
役割使用のガイドライン .....	170
デフォルトの Agile PLM 役割.....	171
役割の例.....	174
限定された役割.....	175
役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス .....	175
セキュリティとメインテナンス推奨プラン .....	175
データベースのバックアップ手順 .....	176



役割を使用する.....	177
役割を変更する .....	178
属性の構築とテスト、読み取り/変更権限、役割 .....	179
新規役割を作成する .....	180
役割の例を使用する .....	182
役割を削除する .....	183
<b>権限と権限マスク .....</b>	<b>185</b>
権限と権限マスクについて .....	185
[権限] ウィンドウを表示する .....	185
[権限] ウィンドウで実行されるタスク .....	186
Agile PLM 権限 .....	187
特定の権限に関する詳細 .....	192
適用先機能 .....	192
管理者権限と適用先機能 .....	193
ダッシュボード管理 .....	194
プロジェクトの要約ページの設定 .....	194
ディスカバリ権限と読み取り権限 .....	195
ディスカバリ権限 .....	195
ディスカバリ権限と読み取り権限の関係 .....	197
フィールドレベルでの読み取り権限 .....	197
フィールドレベルでの読み取り権限 .....	198
変更権限 .....	199
変更の基本とルール .....	200
\$CURRENTREV を使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する .....	200
その他の権限の詳細 .....	203
承認者/オブザーバの追加と承認者/オブザーバの削除 .....	203
自分の添付ファイルのレッドライン: リリース 9.2.2.2 では無効 .....	203
他者の添付ファイルのレッドライン: リリース 9.2.2.2 では無効 .....	203
ステータスの変更 .....	203
エクスポート .....	204
全検索表示 .....	204
認可 .....	205
オーバーライド .....	205
フォルダ バージョンのページ権限 .....	206
権限委譲 (自分) .....	206
権限委譲 (他のユーザー) .....	207

拠点変更依頼の [名前を付けて保存] に関する制限.....	207
確認通知.....	207
権限マスクの構成要素.....	208
すべての権限マスクの要素となる権限、オブジェクト タイプ、および条件 .....	208
権限マスクの構成要素 1: 権限 .....	210
権限マスクの構成要素 2: オブジェクト タイプ .....	211
権限マスクの構成要素 3: 条件 .....	212
権限マスクの構成要素 4: 属性 .....	212
権限マスクを表示する .....	213
権限マスクのプロパティを表示する .....	214
権限マスクの条件変数を使用する .....	215
条件と適用先属性のオプションを組み合わせる .....	216
権限マスクを変更する .....	217
権限マスク条件を変更する .....	218
[適用先] プロパティを変更する .....	218
ユーザー作成条件を適用する .....	219
権限マスクを有効にする .....	220
新規権限マスクを作成する .....	220
作業を開始する前に .....	220
新規権限マスクを最初から作成する .....	221
[名前を付けて保存] を使用して権限マスクをコピーする .....	222
<b>一般システム設定.....</b>	<b>223</b>
スマートルール.....	223
スマートルールの設定を変更する .....	223
スマートルールの定義.....	224
Viewer とファイル .....	232
ファイルのページと保持のオプション .....	233
バナーとウォーターマークを印刷する .....	236
通知 .....	240
通知を編集する .....	240
件名と本文テキストを入力する .....	241
全文検索 .....	242
全文検索の制限.....	242
全文検索プロパティ .....	243
添付ファイルのインデックス .....	244
私の割り当て.....	244
単位 (UOM).....	246
計測カテゴリと単位を作成する .....	246
組織のプロファイル.....	247

通貨換算レート.....	247
ダッシュボード管理.....	248
ダッシュボード タブを表示する .....	249
ダッシュボード タブを追加する .....	249
ダッシュボード タブを削除する .....	249
オプションのタブにテーブルを追加する .....	249
オプションのタブにチャートを追加する .....	250
オプション テーブルのカスタム (URL) プロセス拡張を追加する .....	252
タブ内のテーブル行を再配置する .....	252
オプションのタブを表示する .....	253
<b>一般サーバ設定.....</b>	<b>255</b>
サーバの場所.....	255
Web クライアント通知を設定する.....	255
Java クライアントの通知を設定する .....	256
Agile ポータルの場所を指定する .....	256
Agile PLM におけるファイル管理.....	257
Agile ファイル管理サーバ.....	257
分散ファイル管理.....	257
ファイル管理セキュリティ .....	258
ファイル マネージャを設定する .....	260
ユーザーの優先ファイル マネージャを設定する.....	263
旧バージョンのファイルをパージする .....	264
データベース.....	264
LDAP .....	266
Agile PLM で LDAP に対して BEA WebLogic Server を設定する .....	266
LDAP ディレクトリでユーザーを作成する .....	267
拡張された LDAP .....	268
LDAP と Agile PLM を同期化する .....	269
LDAP 管理のユーザー プロパティ .....	269
Agile LDAP の設定ファイル.....	270
プリファレンス.....	272
プリファレンスの詳細.....	277
ライセンス .....	279
サーバ ライセンス .....	280
ユーザーライセンス .....	281
タスク モニタ .....	282
タスクの設定.....	283

<b>Product Collaboration の設定</b> .....	<b>287</b>
参照指示プリファレンス .....	287
参照指示範囲の展開縮小を許可する .....	288
参照指示範囲のインジケータ .....	288
参照指示と先行ゼロの使用 .....	289
マルチセグメントの参照指示 .....	289
アイテムの説明を改訂する .....	290
設計変更オブジェクトの設定 .....	291
各方法に対し、適切な変更権限マスクを設定する .....	291
Product Collaboration オブジェクト タブの設定に関する注意事項 .....	295
Product Collaboration に影響を与える Agile PLM 設定を設定する際の注意 .....	295
<b>添付ファイルの管理</b> .....	<b>297</b>
添付ファイルに関する企業のニーズを評価する .....	297
マークアップ サブクラス .....	297
添付ファイルに関する管理者設定 .....	298
Agile PLM におけるファイル管理 .....	298
スマートルール .....	298
プリファレンス .....	299
役割と権限を割り当てる .....	303
添付ファイル権限 .....	303
添付ファイルへの簡易アクセス URL を生成する .....	308
Agile で生成される添付ファイルへの簡易アクセス URL .....	309
ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL の形式 .....	309
簡易アクセス URL を使用して添付ファイルにアクセスする .....	313
<b>Product Cost Management の設定</b> .....	<b>315</b>
Product Cost Management の設定チェックリスト .....	315
出荷先の場所 .....	316
Product Cost Management の役割 .....	317
見積依頼取引条件 .....	317
見積依頼取引条件ノードを設定する .....	318
見積依頼取引条件内容を設定および保存する .....	318
ソーシング プロジェクト クラスで属性を表示する .....	319
見積依頼クラスで属性を表示する .....	319
見積依頼回答の [入札参加意思] 属性 .....	319
私のソーシング プロジェクトを変更するための条件を追加する .....	320
ソーシング プロジェクト マネージャ役割で、RFQ 権限を読み取るために条件を追加する .....	320
読み取り権限に条件を追加する .....	320

Product Cost Management のクラスを設定する .....	321
ユーザー設定フィールドを無効化する .....	321
ユーザー設定フィールド設定時のヒント .....	322
アイテム マスター ユーザー設定フィールドからソーシング プロジェクトヘデータを集める .....	322
ソーシング プロジェクトからアイテム マスターへ価格ユーザー設定フィールドを進める .....	328
価格計算 .....	329
プロジェクト分析から公表価格と見積履歴に、回答ユーザー設定フィールドを進める .....	331
BOM フィルタ を設定する .....	335
BOM フィルタの名前を設定する .....	336
<b>Product Portfolio Management の設定 .....</b>	<b>339</b>
PPM 固有の権限 .....	339
[テンプレートから作成] 権限 .....	339
[Microsoft Project] 権限 .....	339
[変更] 権限でプログラム コンテンツを追加する .....	340
ユーザー グループで割り当てアクションを有効化する .....	340
プロジェクトの要約表示を設定する .....	341
ステータス ノード .....	341
エンド ユーザーに対するステータス名の表示を変更する .....	342
ステータス ノード設定を変更する .....	342
スケジュール ステータス .....	342
コスト ステータス .....	344
品質ステータス .....	345
リソース ステータス .....	345
PPM スマートルールからの自動インストール .....	345
Agile PPM ユーザーに自動的に割り当てられるデフォルトの役割 .....	346
利用可能な Agile PPM 役割リストの決定方法 .....	347
UI 設定データ .....	347
ガント チャートにアクセスする .....	349
プロパティに適用された、特定ユーザーのアクションを管理する権限マスクを変更する .....	349
ガント チャートと Microsoft Project の権限に関する注意事項 .....	354
ガント チャートと Microsoft Project のオブジェクト権限を削除する .....	354
制限された削除権限を設定する .....	355
メニュー コマンド: [アクション]>[キャンセルへ変更] に必要な設定 .....	356
[一般情報] タブ [要約] テーブルに表示される差異 .....	356
成果物のオブジェクト クラス .....	357
計算属性を有効化する .....	358

Microsoft Project Integration のサポート .....	360
Microsoft Project 作業値を Agile PPM に作業日数として転送する .....	361
Microsoft Project 2002 と 2003 でカスタム Agile PPM サブクラスを使用する .....	361
Microsoft Project/Agile PPM 統合: MSPSyncMapping.propertiesファイル .....	362
<b>Agile Content Service を設定する .....</b>	<b>365</b>
Agile Content Service について .....	365
Agile Content Service のしくみ .....	365
Agile Content Service を設定する .....	366
転送用のワークフロー .....	368
デフォルトの自動転送のワークフロー .....	368
デフォルトのコンテンツ転送のワークフロー .....	368
公表されたデータを追跡する .....	369
送信先を設定および編集する .....	369
Agile 送信先 .....	369
FTP 送信先 .....	371
ファイル送信先 .....	372
HTTP および HTTPS 送信先 .....	373
JMS 送信先 .....	375
送信先を編集する .....	377
送信先をリセットする .....	377
送信先を削除する .....	377
イベントを設定および編集する .....	378
スケジュールされたイベント .....	378
ワークフロー イベント .....	379
イベントを編集する .....	380
イベントを削除する .....	380
フィルタを設定および編集する .....	381
フィルタを編集する .....	383
フィルタを削除する .....	384
確認通知受信者を設定および編集する .....	384
確認通知受信者を検証する .....	386
確認通知受信者を有効または無効にする .....	386
確認通知受信者を削除する .....	387
パッケージ サービスを設定および編集する .....	387
パッケージ サービスを編集する .....	388
回答サービスを設定および編集する .....	389
回答サービスを編集する .....	390
回答サービスを削除する .....	391
回答とプロセスの拡張 .....	391

Agile 対 Agile の公表に必要な設定 .....	391
Agile 対 Agile の公表を確認する .....	394
セキュリティについての考察事項 .....	396
コンテンツ転送の [作成者] フィールド .....	397
Agile PLM の役割を使用して、自動転送における送信先固有のコンテンツを定義する .....	397
<b>Product Governance &amp; Compliance の設定 .....</b>	<b>399</b>
Agile PG&C を設定する .....	399
Agile PG&C リリース 9.2.2.2 の新機能 .....	400
PLM リリース 9.2.2.1 の PG&C に追加された機能 .....	400
PLM リリース 9.2.2 の PG&C に追加された機能 .....	401
PG&C 設定チェックリスト .....	401
デklarレーション クラスの概要 .....	403
PG&C の統合コンポーネント .....	404
Log.xml ファイルの ComplianceRollup.log .....	404
Microsoft Excel ベース クライアントが正しくインストールされていることを確認する .....	405
PG&C のプロセス拡張を設定する .....	406
Excel 統合でサブスタンスと重量ロールアップを設定する .....	407
PG&C 固有の管理者ノードの設定 .....	408
単位 (UOM) を設定する .....	408
サインオフ メッセージを設定する .....	408
適合性ロールアップのスケジュール .....	408
適合性ロールアップのルールを設定する .....	409
一括開示 (完全、一部、未公表) と未報告サブスタンス .....	411
適合性状態の名前を変更する .....	412
サプライヤ デklarレーションのプロセス拡張 .....	412
含有基準のマッピング .....	413
PG&C クラスを設定する .....	415
PG&C ビジネス オブジェクトにおける [全体適合性] と [適合性の要約] .....	415
アイテムおよび製造元部品: サブスタンスと重量のロールアップと [子レベル] 属性 .....	415
含有基準: 除外規定を追加する .....	416
デklarレーション: デklarレーション名の長さ .....	416
アイテム: [適合性の確認が必要] 属性の削除 .....	416
部品と部品グループ: 最後のロールアップ属性が追加されてからの経過時間 .....	416
アイテムおよび製造元部品: 組成を非アクティブ化および再アクティブ化する .....	417
部品と部品グループ: 組成タイプ .....	417
アイテムおよび製造元部品: 組成とサブスタンスをインポートする .....	418

部品と部品グループ: マッピング機能 .....	418
部品グループ: 部品ファミリーを設定する .....	420
PG&C で PG&C ユーザーの役割と権限を定義する .....	421
ユーザーを [適合性管理者リスト] および [適合性検索] に追加する .....	422
サプライヤ読み取りアイテム権限 .....	422
デklarレーション ワークフローを RFI で使用する .....	423
PG&C でカスタム ワークフローを配置する .....	423
デklarレーション通知 .....	424
<b>アップグレード データベースの PG&amp;C オブジェクト、役割および権限への変更 .....</b>	<b>425</b>
PG&C ビジネス オブジェクト、役割、および権限マスクをアップグレードする .....	425
PG&C をアップグレードする (リリース 9.2.2) .....	425
適合性移行タスクと一括許容度% .....	426
PG&C ビジネス オブジェクトに追加される属性 (リリース 9.2.2) .....	427
[サブスタンス]>[一般情報] タブ .....	427
デフォルトの読み取り権限/変更権限 .....	428
PG&C をアップグレードする (リリース 9.2.1.3) .....	429
PG&C ビジネス オブジェクトに追加される属性 (リリース 9.2.1) .....	430
デklarレーション - カバー ページ .....	430
適合性管理者役割に追加される権限マスク (リリース 9.2) .....	431
読み取り権限マスクに追加される属性、基本クラス別 (リリース 9.2) .....	431
サブスタンス .....	431
変更権限マスクに追加される属性、基本クラス別 (リリース 9.2) .....	438
変更 (デklarレーション) .....	438



# はじめに

Oracle|Agile マニュアル セットには Adobe® Acrobat™ PDF ファイルが含まれます。[Oracle Technology Network \(OTN\) Web サイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) には、Oracle|Agile PLM の最新版の PDF ファイルがあります。この Web サイトのマニュアルは、その場で表示することもダウンロードして使用することもできます。また、使用しているネットワーク上の Oracle|Agile マニュアル フォルダに Oracle|Agile マニュアル (PDF) ファイルが格納されている場合もあります。詳細は、Agile 管理者にお問い合わせください。

---

**注意** PDF ファイルを表示するには、Adobe Acrobat Reader™ のバージョン 7.0 以降 (無料) を使用する必要があります。このプログラムは、[Adobe 社の Web サイト](http://www.adobe.com) (<http://www.adobe.com>) からダウンロードできます。

---

[Oracle Technology Network \(OTN\) Web サイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) は、Agile Web クライアントと Agile Java クライアントのいずれの場合も、[ヘルプ]>[マニュアル] の順に選択してアクセスできます。さらに疑問点がある場合やサポートが必要な場合は、[サポート](http://www.oracle.com/agile/support.html) (<http://www.oracle.com/agile/support.html>) にお問い合わせください。

---

**注意** Oracle|Agile PLM マニュアルに関する問題について Agile サポートにお問い合わせいただく前に、タイトル ページにある完全な部品番号をご準備ください。

---

## Oracle サポート サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800) 446-2398 にお電話ください。アメリカ国外からの場合は、+1-407-458-2479 にお電話ください。

## ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

## Readme

Oracle|Agile PLM の最新情報は、すべて [Oracle Technology Network \(OTN\) Web サイト](http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html) (<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>) にある Readme ファイルに記載されています。

## Agile トレーニング支援

Agile トレーニングの講義内容詳細については、[Oracle University Web ページ](http://www.oracle.com/education/chooser/selectcountry_new.html) ([http://www.oracle.com/education/chooser/selectcountry\\_new.html](http://www.oracle.com/education/chooser/selectcountry_new.html)) にアクセスしてください。

## ドキュメント内のサンプル コードのアクセシビリティについて

スクリーン リーダーは、ドキュメント内のサンプル コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかしスクリーン リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

## 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

## 概要

扱うトピックは次のとおりです。

▪ Agile PLM 管理者へようこそ .....	1
▪ Agile Product Lifecycle Management .....	2
▪ 管理機能 .....	2
▪ 管理者ノード .....	3
▪ Agile PLM 実装のためのガイドライン .....	7
▪ Agile PLM 9.2.2 の管理者の新機能 .....	8

## Agile PLM 管理者へようこそ

Oracle|Agile PLM (以降は Agile PLM または Agile と表記します) 向け『Oracle|Agile PLM 管理者ガイド』へようこそ。このマニュアルは、Agile PLM システムでユーザーおよびビジネス オブジェクトを設定するための完全リソースです。

## Agile PLM 管理者のマニュアル

Agile PLM マニュアル設定は、次の Web サイトでご覧いただけます:

<http://www.oracle.com/technology/documentation/agile.html>

Agile PLM 管理者は Java クライアントを使用してシステムを設定し、管理します。したがって、『Agile PLM 管理者ガイド』を読む前に、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』の第 2 章「Agile Java クライアントの操作」を読むことをお勧めします。一部の管理タスクは、Web クライアントを使用して実行できます (例: ユーザーを作成する)。ユーザー管理者タスクに割り当てられたユーザーは、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』の第 3 章「Agile Web クライアントの操作」をご覧ください。

『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』は、Agile 管理者が次の知識を得るためにも役立ちます。

- Agile PLM クライアントのユーザー インターフェースと操作
- Agile PLM ソリューションで使用される専門用語と概念
- 検索、ワークフロー、レポート、添付ファイル (つまり、ファイル管理) などの一般機能

**注意** すべての Agile PLM マニュアルは、Java クライアントで [ヘルプ]>[マニュアル] を選択すると、ご覧になることができます。

# Agile Product Lifecycle Management

Agile Product Lifecycle Management (PLM) セットは、以下の製品ソリューションを提供します。

- **Agile Product Collaboration (PC)** - 製品のライフサイクル全体を通し、社内組織と拡張されたサプライチェーンにわたって、プロダクト レコード情報に関する管理およびコラボレーションを実現します。Java クライアントおよび Web クライアントからアクセスします。
- **Agile Product Portfolio Management (PPM)** - プログラムと製品情報を統合し、製品のライフサイクルとプログラムのポートフォリオ全体にわたるビジネス プロセスを合理化します。Web クライアントからのみアクセスできます。
- **Agile Product Quality Management (PQM)** - 閉ループ方式の是正処置システムを使用して、顧客、製品、品質、規制情報を統合します。(以前の **Product Service & Improvement** です。) Java クライアントおよび Web クライアントからアクセスします。
- **Agile Product Cost Management (PCM)** - 製品ライフサイクル全体を通して製品コストを管理し、製品コストデータとプロセスを同期化します。Web クライアントからのみアクセスできます。Java クライアントで設定されます。
- **Agile Product Governance & Compliance (PG&C)** - アイテムや製造元部品などにより含まれた、すべてのサブスタンスおよびマテリアルの管理と追跡を行い、企業がサブスタンス制限とレポート要求を満たし、リサイクル可能製品を設計し、適合性コストを最低限に抑え、将来製品が非適合性を排除できるよう図ります。Web クライアントからのみアクセスできます。

各 Agile PLM ソリューションのしくみを理解するには、Agile PLM マニュアル セットのその他のマニュアルもお読みください。上述の各製品ソリューションに対し、それぞれ個別のマニュアルが用意されています。

## 管理機能

Agile Java クライアントの管理機能は、事業の形態に合わせて Agile PLM を設定し、適合させるために使用されます。管理者ノードを使用することで、ユーザーを管理したり、会社の要求条件に応じて Agile PLM の各部分を調整することができます。

- ユーザー、ユーザー グループ、役割、および権限は、すべて「再利用可能なオブジェクト」です。これらによって、以下のタスクなどにおいてユーザー アカウントが管理しやすくなります。
  - ユーザーを追加/削除する、またはユーザーを停止に設定する
  - ユーザーをユーザー グループに割り当てる (以前の部署およびグループの使用を統合する)
  - ユーザーに役割を割り当て、個々のユーザー向けに役割をカスタマイズする
  - 他のユーザーに対して、指定されたオブジェクトへの一時的なアクセス権限をユーザーが付与できるようにする
- 1 人または複数のユーザー管理者を作成し、ユーザー アカウントの管理を分担する
- パスワードの期限、長さ、ルール、ロックアウト、固有性に関するシステム全体のアカウント規約を確立する
- Agile PLM システムがユーザーのアクションにどう応答するかを決定する、システム全体のビジネス ルールを設定する
- 自動採番ソースを設定し、割り当てる

- 変更を送信するためのワークフローを作成する (各ワークフローには特定のステータスと設定が含まれ、各ステータスには特定の承認者、オブザーバ、必須フィールドが含まれる)
- 既存の Agile PLM クラスのサブクラスを作成し、新規オブジェクト タイプを作成する
- Agile PLM クラスやサブクラス向けに、新規フィールド (数字フィールドや通貨フィールドも含む) の入ったタブを作成する
- Agile PLM ユーザー、オブジェクト、および管理データに関するレポートを生成する

## 管理者ノード

このマニュアルでは、Agile PLM クライアントの管理機能に関する情報を提供しています。本書は、日々の作業において、参考資料として使用されることを想定しています。このマニュアルは、基本的には Java クライアントの [管理] タブに表示されるノードの構成に従っています。ほとんどの部分が、Java クライアントの管理者ノードについて記述されています。Web クライアントでのみ使用できる管理機能については、23 ページの「[Web クライアントの管理者ユーティリティ](#)」を参照してください。

## Java クライアントの管理者ノード

下表は、Java クライアントにある Agile PLM 管理者ノードが一覧表示されています。企業では、Agile PLM のビジネス ソリューションをすべて購入しているとはかぎりません。この場合、一部は非表示となります。

ノード	説明
データ設定	
クラス	ビジネス オブジェクトとその属性、ユーザー設定フィールド、およびその他のプロパティを定義し、管理します。
文字セット	テキスト属性を管理するために使用される有効な文字のリストを設定します。
リスト	複数のクラス間で使用されるリストを管理します。ユーザーやアイテムなどのオブジェクトの動的リストも含まれます。
プロセスの拡張	カスタム アクションを定義して、ユーザーに応じたワークフローによって起動されるカスタム アクション、Agile PLM クライアントを使用してアクセスできるカスタム ツール、カスタム自動採番、カスタム レポートを作成することにより、Agile PLM システムの機能を拡張します。
自動採番	Agile PLM でのオブジェクトの自動採番に使用する番号ソースを設定します。
条件	検索条件、権限マスク、ワークフロー設定に使用する条件オブジェクトを定義します。
ワークフロー設定	
ワークフロー	ワークフローを設定、変更、作成し、変更管理プロセスにおける変更の進行状況を追跡します。
ユーザー設定	
アカウント規約	システム全体のパスワードの期限、長さ、固有性を設定します。

ノード	説明
ユーザー	システムに新規 Agile PLM ユーザーを追加し、既存のユーザーのプロパティ (パスワード、ユーザー名、役割およびユーザー グループの割り当てなど) を変更します。
ユーザー グループ	ユーザー グループを定義し、ユーザーをグループに割り当てます。
サプライヤ グループ	見積依頼の処理中にサプライヤを選択します。管理者は、適切な役割を持つユーザーが利用するグローバル サプライヤ グループを設定します。
役割	Agile PLM でグループや個々のユーザーが実行できるアクションを制御する、デフォルトの役割とカスタマイズした役割を定義します。
権限	ユーザーの役割に組み込まれる権限と権限マスクを定義します。
ユーザー モニタ	現在ログインしているユーザーを表示し、ユーザー セッションを終了します。
削除されたユーザー	必要に応じて、削除されたユーザーの削除を解除します。削除されたユーザーのリストは、完全な検証記録のために維持されています。
削除されたユーザー グループ	必要に応じて、削除されたユーザー グループの削除を解除します。削除されたユーザー グループのリストは、完全な検証記録のために維持されています。
システム設定	
スマートルール	変更管理プロセスを一貫させるルールを管理します。
Viewer とファイル	Agile PLM オブジェクトに添付されるファイルのプリファレンスを定義し、レッドラインと添付ファイルに Viewer の設定、バナー、ウォーターマークを定義します。
通知	通知のアドレスとコンテンツに使用するテンプレートをカスタマイズします。
全文検索	添付ファイルの索引を管理します。
私の割り当て	ユーザーが Web クライアントのホームページの [私の割り当て] タブをクリックしたときに表示される内容を設定します。
UOM	単位を管理します。
組織のプロファイル	会社に関する有用な情報を保存します。
通貨換算レート	システム内通貨換算用の通貨換算レート テーブルを管理します。
ダッシュボード管理	ダッシュボードを有効または無効にし、タブの名前を変更します。
Product Cost Management - PCM ノードについては、第 12 章「Product Cost Management の設定」に記載されています。	
出荷先の場所	見積依頼の価格を定義する際に計算に入れるデータ。
見積依頼取引条件	サプライヤが見積依頼取引条件に電子的に合意するまで、そのサプライヤの見積依頼へのアクセスを制限します。
Product Portfolio Management - PPM ノードについては、第 13 章「Product Portfolio Management の設定」に記載されています。	

ノード	説明
ステータス ノード: コスト、品質、リソース、スケジュール	コスト、品質、リソース、スケジュールの分野におけるプロジェクトの目標が、現時点で達成されつつあるのか、現時点では達成されていないのか、目標からかなり外れているのかを報告します。
デフォルトの役割	ユーザーにタスクが委任されたとき、または Microsoft Project とそのユーザーおよび役割が Agile PLM に公表されたときに、どの役割を自動的にユーザーに割り当てるかを指定します。
UI 設定データ	プログラムの要約ページおよび [コンテンツ] タブのポップアップ ウィンドウを設定します。
Agile Content Service - ACS ノードについては、第 14 章「Agile Content Service の設定」に記載されています。	
確認通知受信者	転送の詳細をすべて指定したプロファイルを作成します。
送信先	転送の出力ファイルの送信先を定義します。
イベント	転送がいつ実行されるかを定義します。
フィルタ	転送の内容を定義します。
パッケージ サービス	Agile 対 Agile の通信を行うために Web サービス用のターゲット Agile PLM システムを設定します。これらのフィルタは、Agile PLM の [エクスポート] ウィザードでも使用されます。
回答サービス	データのリモート受信者からの受信確認。
Product Governance and Compliance - PG&C ノードについては、第 15 章「Product Governance & Compliance の設定」に記載されています。	
サインオフ メッセージ	デklarレーションをバイヤー/顧客に提出する場合に、情報サプライヤが合意し、サインオフする必要があるメッセージを定義します。
適合性ロールアップの スケジュール	システムでスケジュール済みロールアップが実行される頻度、および開始時刻を定義します。
適合性ロールアップの 役割の設定	デklarレーションに関するサプライヤの回答の要素を管理します。これらの要素は、適合性ロールアップの結果に影響を与える可能性があります。
サプライヤ デklar レーションのプロセス 拡張	情報サプライヤが受け取るデklarレーション要求のそれぞれのタイプで表示されるプロセス拡張を設定します。 <b>注意:</b> プロセス拡張自体はこのノード フォルダで定義されません。
サーバ設定	
場所	Agile アプリケーション サーバ、ファイル マネージャ、ポータルの場所を定義します。
データベース	データベースに関するシステム全体のプリファレンスを設定します。
LDAP	Lightweight Directory Access Protocol システムおよび専用の LDAP サーバを設定してユーザー アカウントを作成します。
プリファレンス	Agile PLM システム全体のプリファレンスを設定します。
ライセンス	サーバ ライセンスは製品に関連します。ユーザー ライセンスは、Java クライアントおよび Web クライアントの個々のユーザーに関連します。

ノード	説明
タスク モニタ	スケジュールされた特定のタスクの進行状況を管理し追跡します。
タスクの設定	レポートや全文検索の索引作成などの、スケジュールされた様々なアクティビティを管理します。
[例] ノード	
役割の例	すべてのデフォルトの役割の読み取り専用コピー
権限の例	すべてのデフォルトの権限の読み取り専用コピー
条件の例	すべてのデフォルトの条件の読み取り専用コピー

## [例] ノード

[例] ノードは、デフォルトの Agile PLM 役割、権限マスク、再利用条件のバックアップを提供する読取専用ノードです。例は有効化できませんが、システムにデフォルトの機能を復元するために使用することができます。たとえば、デフォルトの役割の 1 つを修正し、これが正しく機能していないことを発見した場合は、例を保存して元の役割を復元できます。

### 例のノードをアクティブ ノードとして保存するには:

1. [例] で [役割の例]、[権限の例] または [条件の例] をダブルクリックします。
2. フィルタ バーを使用して保存する例を表示します。
3. 例をダブルクリックして開きます。
4. [名前を付けて保存] ボタンをクリックします。[名前を付けて保存] ダイアログ ボックスが開きます。
5. 新しい名前を入力し、[OK] をクリックします。

### 例のノードをエクスポートするには:

1. [例] で [役割の例]、[権限の例] または [条件の例] をダブルクリックします。
2. フィルタ バーを使用してエクスポートする例を表示します。
3. 例を選択し、[エクスポート] ボタンをクリックします。
4. ファイルの名前を入力し、[保存] をクリックします。

**注意** エクスポートしたファイルを別の Agile PLM システムにインポートすることができます。例をインポートすると、この例はアクティブな役割、権限マスク、または再利用条件となります。管理データのインポートの詳細は、23 ページの「[管理者インポート](#)」を参照してください。

## Web クライアントの管理者ノード

下表は、Web クライアントにある Agile PLM 管理者ノードが一覧表示されています。企業では、Agile PLM のビジネス ソリューションをすべて購入しているとはかぎりません。この場合、一部は非表示となります。



ノード	説明
ユーザー管理	
ユーザー	システムに新規 Agile PLM ユーザーを追加し、既存のユーザーのプロパティ (パスワード、ユーザー名、役割およびユーザー グループの割り当てなど) を変更します。
ユーザー グループ	ユーザー グループを定義し、ユーザーをグループに割り当てます。
サプライヤ グループ	見積依頼の処理中にサプライヤを選択します。管理者は、適切な役割を持つユーザーが利用するグローバル サプライヤ グループを設定します。
削除されたユーザー	必要に応じて、削除されたユーザーの削除を解除します。削除されたユーザーのリストは、完全な検証記録のために維持されています。
削除されたユーザー グループ	必要に応じて、削除されたユーザー グループの削除を解除します。削除されたユーザー グループのリストは、完全な検証記録のために維持されています。
Web クライアント設定	
ダッシュボード管理	PLM ダッシュボードを設定します
プロジェクト要約設定	[要約] ページ レイアウトおよびウィジェットの設定
ビジュアルテーマ	色、フォント スタイル、サイズの定義など、すべてのユーザーの Web クライアント ユーザー インターフェースの表示を設定します。
トラブルシューティング	
キャッシュ ヘルス モニタ	管理者データに対するすべての変更が、クラスタ全体に正しく複製されていることを確認します。

## Agile PLM 実装のためのガイドライン

新しい Agile PLM システムを設定する際は、前述の表の一連の管理者ノードに従って PLM を設定します。この順序で各ノードのすべてを設定する必要はありませんが、会社のビジネス オブジェクト、ユーザー、システム全体の設定を開始する前に、管理者のすべてのノードを理解することが大切です。

ノード フォルダとノードのツリーが推奨される開始点ですが、包括的または認証されたシーケンスではありません。会社向けに Agile PLM の設定を開始し、そのプロセスが当初理解していた以上に拡張されている場合、オラクル社コンサルティングの Agile 担当または Oracle|Agile 販売代理店にご連絡ください。

設定時間は以下の要因により変わってきます。

- 設定する Agile ソリューションの数 ([システム設定] の下にソリューション固有のノードがありますが、各ユーザー用のソリューションの構成は、設定の範囲を超えるプロセスです)
- 作成する Agile [ユーザー] の数 (その [役割] と [権限] を含みます)
- 会社の製造プロセスの複雑性 ([クラス]、[自動採番]、[ワークフロー]、[場所] などのノードに反映されます)

Agile PLM を実働可能な状態に設定するには、1～数週間かかることもあります。Agile PLM を実際に起動する前に、十分なテストを行うことを強くお勧めします。

**重要**      オラクル社コンサルティングの Agile 担当には、Agile PLM のインストールと設定の協力を要請できます。

## Agile PLM 9.2.2 の管理者の新機能

このリストには、Agile PLM に対する 9.2.2 の追加機能と拡張機能のみが記載されています。これらの機能は、管理者 ([Java クライアント]>[管理] タブ) の設定で管理されます。PLM ユーザーの拡張機能は、リリース 9.2.2 のソリューションに関するユーザー ガイドを参照してください。

- [私の割り当て] という新規ノードが [システム設定] の下に追加され、その内容は 244 ページの「[私の割り当て](#)」で説明されています。
- また、[管理者] ツリーの [システム設定] の下で、[ダッシュボード管理] ノードが [Product Portfolio Management] フォルダから削除されました。ダッシュボード管理は、PPM ソリューション内のみでなく、PLM ソリューション全体で使えるようになりました (194 ページの「[ダッシュボード管理](#)」を参照)。管理者によるダッシュボード設定には、次のコンポーネントがあります。
  - 新しい [Microsoft Project] 権限による Microsoft Project に対するアクセス、使用、または変更
  - ダッシュボード プロセスの拡張の定義
  - ダッシュボードに対するオプションのタブの追加、設定、および表示
  - ダッシュボードのタブに対するテーブルの追加、設定、および表示
  - ダッシュボードのチャート ビューとテーブル ビューの設定
  - ダッシュボード データ モデル
  - ダッシュボード パーソナル テーブルの設定
- 新しい権限: [テンプレートから作成]、[Microsoft Project]、および [[ダッシュボード] タブ表示] が、PPM ソリューションの [プログラム マネージャ] と [プログラム管理者] の役割を拡張するために使用されます。
- Product Portfolio Management の拡張については、339 ページの「[Product Portfolio Management の設定](#)」で説明されています。
- Product Governance & Compliance の拡張については、399 ページの「[Product Governance & Compliance の設定](#)」で説明されています。
- PG&C アップグレード顧客用に追加された適合性移行タスクについては、283 ページの「[タスクの設定](#)」を参照してください。

### Agile PLM 9.2.2.1 の管理者の新機能

- [BOM 多段階重複] スマートルールでは、BOM 重複が可能かどうかを設定され、設計変更で検証されます。
- PG&C の [含有基準のマッピング] ノードでは、([部品]、[ドキュメント]、または [製造元部品] の) 各含有基準と [ユーザー定義 1] フィールドをマップでき、ユーザーは、部品の [ユーザー定義 1] で含有基準の適合性の結果を参照できます。

- 一括含有基準削除は管理者の設定で管理されませんが、この機能を使用すると、ユーザーは BOM の全レベル (アセンブリ、サブアセンブリ、または製造元部品に関連付けられているアイテム) で含有基準を削除できます (一部制限があります)。これについては、『PG&C ユーザー・ガイド』の「含有基準」の章に記載されています。

## Agile PLM 9.2.2.2 の管理者の新機能

- 条件の \$CURRENTREV および \$LATESTREV 変数の拡張 (このマニュアルの「条件」の章を参照)。
- 新しいシステム全体のプリファレンス: [ローカルファイルの保持]、[URL をハイパーリンクとして表示]、[ユーザーのデフォルト拠点を新規アイテムに追加]、[サインオフ ユーザー二重識別タイプ] (「サーバ設定」の章の「プリファレンス」を参照)。
  - [サインオフ ユーザー二重識別タイプ] を使用すると、ワークフローと他のサインオフでの複数のユーザー ID について会社の方針を実施できます。
- 新しいスマートルール: [添付ファイルの削除を許可] は、添付ファイルがビジネス オブジェクトから削除された場合の (参照されていない) ファイル フォルダのソフト削除に利用できます。
- 新しい権限: フォルダ バージョンのページ: この権限があるユーザーは、バージョンがチェックアウトされていない状態で、添付ファイルのレッドラインがなく、0 でない場合、[アクション] メニューから [フォルダ バージョンのページ] を選択できます。
- LDAP では、静的グループと動的グループの両方を Agile ユーザー グループと同期化できます。
- Web クライアント管理のビジュアル テーマが拡張されています (「管理者の基本事項」の章を参照)。
- Web クライアント管理のクラスタ ノードが復元されます (「管理者の基本事項」の章を参照)。
- [自動採番] 画面の [次の番号] フィールドに、オブジェクトに割り当てられる次の自動採番の値が表示されます。
- 条件に使用可能なファイル タイプ属性: 管理者は、アクセスを管理するために、添付ファイルのファイル タイプ属性に基づいて条件を定義できます。
- リリース検証によって、[1 つの製造元部品に複数アイテム] スマートルールがチェックされるようになりました。
- 問題サービス レポートの [対象アイテム] テーブルの追加フィールド: PSR の [対象アイテム] タブには、日付フィールドは含まれていませんでした。PSR の [対象アイテム] のフィールドは現在、パラレル QCR のフィールドと同じです。
- Agile Content Service (ACS) で、PQM およびサプライヤのオブジェクトがサポートされるようになりました。
- 拠点の [内製/購入] 属性は編集可能です。アイテムの [拠点] タブの [内製/購入] 属性は、アイテムがその拠点に対してリリースされている場合でも編集可能です (ユーザー権限によります)。アイテムがリリースされるとき、またはリリース検証が実施されるときに、拠点のプリファレンス [拠点 AML の許可] および [購入に AML が必須] の検証が行われます。
- [履歴] タブで、すべてのエクスポート アクションが記録されます。



# 管理者の基本事項

扱うトピックは次のとおりです。

■ 概要 .....	11
■ 管理者として Agile クライアントにログインする .....	11
■ 新規管理者ユーザーを作成する .....	12
■ データのフィルタリング .....	13
■ 管理者レポート .....	14
■ Agile PLM で使用される日時 .....	16
■ Java クライアントの管理者ユーティリティ .....	16
■ Web クライアントの管理者ユーティリティ .....	23
■ Agile PLM 変数 .....	31
■ 多言語サポート .....	35

## 概要

この章では、Agile 管理者のための基本情報、または管理者ユーザー インターフェースのノードでは指定されていない機能に関する情報について説明しています。

Agile PLM を管理するプライマリ クライアントは、Agile の Java クライアントです。ユーザー、ユーザー グループ、サプライヤ グループも、Agile の Web クライアントから管理できます。

Java クライアントを使用するには、まずこれをコンピュータにインストールする必要があります。Java クライアントは Java WebStart テクノlogyを使用してソフトウェアをダウンロードし、これを最新状態に保ちます。Java クライアントのインストールについては、アプリケーション サーバの『Agile PLM Installation Guide』、および会社で購入したサービスパックの Readme に記載されている特定の指示をご覧ください。

Web クライアントは Web ベースのアプリケーションです。ブラウザを使って Web クライアントを実行することができます。

Agile PLM クライアントの管理機能をご覧になるには、ユーザーに管理者権限マスクが与えられている必要があります。"admin" ユーザー アカウントは、すべての管理者ノードと設定を閲覧することができるよう、あらかじめ設定されています。管理者アカウントを使用して新規ユーザーを作成し、彼らに管理者の役割を割り当てることができます。詳細は、12 ページの「[新規管理者ユーザーを作成する](#)」を参照してください。

**重要** 193 ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」の情報を参照してください。すべての管理者に関連する権限マスクにとって重要な部分である [適用先] プロパティに関する情報が記載されています。現時点では、このページに説明されているすべての内容を把握する必要はありませんが、[適用先] プロパティについての知識を得ることは重要です。

## 管理者として Agile クライアントにログインする

セキュリティ上の理由により、管理者アカウントのパスワードは、自分だけが知りえるものに変更することができます。詳細は、146 ページの「[ユーザーのパスワードを変更する](#)」を参照してください。

### Agile Java クライアントを起動し、管理者としてログインするには:

1. デスクトップの Agile 9 アイコンをダブルクリックするか、[スタート | Agile9] を選択します。[ログイン] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. ユーザー名 admin (または administrator) とパスワード agile を入力します。ユーザー名は大文字と小文字を区別しませんが、パスワードは大文字と小文字を区別します。
3. [OK] をクリックします。ログイン プロセスが完了します。次の図のような Java クライアント ウィンドウが開き、通常はナビゲーション ウィンドウの前面に [検索] タブが表示されます。

**注意** ORMI 接続をプロキシできないプロキシ サーバを使用している場合、Java クライアントを起動できません。[Java Web Start] で設定を変更する必要があります。JWS の [ファイル] メニュー > [プリファレンス] > [全般] タブ > [プロキシ] セクション > [なし] と選択してください。

4. ナビゲーション ウィンドウで [管理] タブをクリック (左側) し、管理ノードを表示します。  
管理者権限マスク (または役割) を割り当てられていないユーザーの場合、[管理] タブは表示されず、[検索] タブと [分析とレポート] タブのみが表示されます。Java クライアントの [検索] タブと [分析とレポート] タブについては、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』の「Java クライアントの操作」の章で説明されています。


### Agile Web クライアントを起動し、管理者としてログインするには:

1. ブラウザを開きます。
2. Agile Web クライアントのブックマークがある場合はそれをクリックするか、次のような URL を入力します。

<http://webserver.domainname.com/Agile/PLMServlet>

**注意** Web サーバに対し完全なドメイン名を入力します。Web クライアント URL の大文字と小文字は区別されます。

[ログイン] ページが開きます。

3. ユーザー名 admin とパスワード agile を入力します。ユーザー名は大文字と小文字を区別しませんが、パスワードは大文字と小文字を区別します。
4. [ログイン] ボタンをクリックします。入力を間違えた場合は、[クリア] をクリックしてユーザー名とパスワードを再入力します。  
ログイン プロセスが完了します。
5. 最初にログインすると、[ユーザー プロファイル] ページが開きます。必要な情報を入力します。入力が完了したら、[保存] をクリックします。
6. この情報の入力を終わると、Agile Web クライアントが開きます。
7. メニュー バーの [ツール] ボタン  を選択し、[管理] を選択して Web クライアントの管理機能を開きます。[管理者ホーム ページ] が開きます。

## 新規管理者ユーザーを作成する

複数のユーザーに対し、Agile PLM システムを管理する権限を与えることができます。社内に複数の Agile PLM 管理者が必要かどうかに関係なく、管理者が作業できない場合に備えて少なくとも 1 人のユーザーを「補助」管理者として割り当てておくことをお勧めします。このセクションでは、Java クライアントまたは Web クライアントを使用し、新規ユーザーに管理者権限を割り当てる方法を説明しています。Agile PLM ユーザーの作

成方法とユーザー プロパティの設定方法に関する詳細は、141 ページの「[ユーザー](#)」を参照してください。

[管理者] の役割は、ユーザーに Agile PLM システム全体を管理する権限を与えます。[ユーザー管理者] の役割は、ユーザーの管理に限られます。Agile PLM の役割の詳細は、165 ページの「[役割](#)」を参照してください。


**重要** 管理者ユーザーが Java クライアント > 管理ツリーでどのノードを見るかを制御するため、管理者権限の [適用先] プロパティを理解しておくのは重要です。2 つの権限マスク、[管理者] と [ユーザー管理者用の管理アクセス] は [適用先] プロパティに依存します。193 ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」を参照してください。

Java クライアントで新規管理者ユーザーを作成するには:

#### Java クライアントを起動し、"admin" としてログインします。

1. [ユーザー設定] で [ユーザー] をダブルクリックします。[ユーザー] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[ユーザー作成] ダイアログ ボックスが開きます。
3. [ユーザー名] と [パスワード] を入力します。[ログイン パスワードの再入力] のフィールドでパスワードを再入力します。
4. [OK] をクリックします。新規ユーザーのセットアップ ウィンドウが表示されます。
5. [名前]、[姓]、[国/地域]、[電子メール] を入力します。
6. [役割] リストをクリックし、[管理者] の役割を選択して [OK] をクリックします。
7. 必要に応じてその他のユーザー プロパティを入力し、[保存] をクリックします。

#### Web クライアントで新規管理者ユーザーを作成するには:

1. ブラウザで、Web クライアント URL へ進み、"admin" としてログインします。
2. [ツール]>[管理]>[ユーザー] の順にクリックします。[ユーザー] ページが表示されます。
3. [作成] をクリックします。[ユーザー作成] ウィザードが開きます。
4. [ユーザー名] と [ログイン パスワード] を入力します。[ログイン パスワードの再入力] のフィールドでパスワードを再入力します。
5. [続行] をクリックします。[一般情報の入力] ページが表示されます。
6. [名前]、[姓]、[国/地域]、[電子メール] を入力します。
7. [役割] リストを開くには、フィールド右側の  ボタンをクリックします。
8. [管理者] の役割を選択し、[OK] をクリックします。
9. 必要に応じてその他のユーザー プロパティを入力し、[完了] をクリックします。

## データのフィルタリング

フィルタ バー（「テーブル検索」と呼ばれることもあります）を使用して、次のノードでオブジェクトを検索することができます。[リスト]、[検索条件]、[ユーザー]、[役割]、[権限] および [部品分類] ノードならびに [管理履歴] ウィンドウ（管理タブ ツールバーから利用可能）。



**Java クライアントでフィルタ バーを使用するには:**

1. フィルタ バーの [フィルタ条件] ドロップダウン リストで値を選択します。  
[フィルタ条件] リストは、フィルタ対象となるオブジェクトのタイプにより異なります。たとえば、ユーザーを検索している場合、[名前]、[姓]、[ユーザー ID]、[勤務先の電話番号]、[メール] などを選択することができます。
2. [条件] ドロップダウン リストから [含む]、[先頭から一致する]、[すべて表示] などの演算子を選択します。
3. テキスト ボックスに検索する値を入力します。
4. [適用] をクリックします。

[ユーザー] ノードは、Web クライアントでフィルタ バーを使用する唯一の管理ノードです。

**Web クライアントでフィルタ バーを使用するには:**

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー] の順に選択します。[ユーザー] ページが表示されます。
2. フィルタ バーの [フィルタ条件] ドロップダウン リストで値を選択します。  
[名前]、[姓]、[ユーザー ID]、[勤務先の電話番号]、[メール] を選択することができます。
3. [条件] ドロップダウン リストから [含む]、[先頭から一致する]、[すべて表示] などの演算子を選択します。
4. テキスト ボックスに検索する値を入力します。
5. [実行] をクリックします。

## 管理者レポート

管理者ノードの現在の設定を表示するために、管理者レポートを作成することができます。これらのレポートは、ナビゲーション ウィンドウの [分析とレポート] タブ > [標準レポート] フォルダ > [管理者レポート] サブフォルダで利用できます。これらのレポートは、特に Agile PLM コンポーネントを再設定する際に役立ちます。

下表は、Agile PLM 管理レポートが一覧表示されています。

レポート	説明
Agile クラス レポート	すべての Agile PLM クラスの現在の属性設定とデフォルトの属性設定を示します。Agile のシステム エンジニアが Agile PLM システムをアップグレードする場合に役立つツールです。
検索条件ライブラリ設定レポート	既存の再利用の条件とその使用箇所を表示します。
ログイン失敗レポート	システム ログインおよびワークフロー サインオフの試行に失敗したことで、各失敗の理由を表示します。



レポート	説明
プリファレンス設定レポート	[プリファレンス] と [Viewer とファイル] ノードの現在の属性とプロパティ設定を表示します。
権限マスク詳細レポート	各権限マスクを名前、説明、マスクが有効/無効であるか、マスクがどの役割で使用されるかにより区別して示します。[オブジェクト タイプ]、[適用先]、[検索条件] の値が利用できます。
役割と権限要約レポート	各役割を名前、説明、役割が有効/無効であるかにより区別して示します。また、各役割に割り当てられているユーザーや各役割の権限マスクの名前や説明を示します。
スマートルール設定レポート	各スマートルールの現在の設定を表示します。
使用中のサブクラス レポート	すべてのサブクラスと、その使用箇所が表示されます。グローバル検索、再利用の条件、ワークフロー、権限、および役割。
ユーザー グループ設定レポート	すべてのユーザー グループ、割り当てられたユーザー、各ユーザーに対する適切なユーザー プロパティを表示します。また、各グループのエスカレーション担当者でエスカレーション条件を表示したテーブルも含まれています。
許可された ACL レポート用ユーザー共有リスト	ユーザーに対してアクセスが許可されているオブジェクトおよび関連した役割を表示します。
ユーザー確認通知リストレポート	通知を受信するようにユーザーが確認通知しているクラス属性およびアクションを表示します。
ユーザー利用レポート	アクティブな各ユーザーに対して、ログイン回数やオンラインでのログイン時間の合計 (分) など、ユーザーが選択した時刻から現在に至るまでの一定期間中の使用状況を表示します。
ユーザー設定レポート	すべてのユーザーおよび各ユーザーのパスワードを除くプロパティを表示します。
ワークフロー設定レポート	既存のワークフローと各ワークフローのステータス リストのプロパティ (ステータス プロパティ、検索条件別プロパティ) をすべて表示します。

データベースを変更する場合、変更前と変更後と比較する目的でこれらのレポートを保存することができます。たとえば、Agile PLM システムをアップグレードする計画がある場合は、最初にアップグレードした Agile クラス レポートを作成して現在のクラス設定の記録を保存しておくことをお勧めします。その後、このレポートをアップグレード後に作成されたレポートと比較します。

#### 管理者レポートを作成するには:

1. [レポート] タブを選択し、[管理者レポート] ノード フォルダを展開します。
2. レポートをダブルクリックします。Agile Web クライアントが指定されたレポート ページ、たとえば [管理者レポート]-[ユーザー利用レポート] ページを開きます。
3. [実行] をクリックします。[パラメータの指定] ダイアログ ボックスが開きます。[ユーザー利用] レポートでは、「開始」と「終了」の時間範囲および情報を必要としているユーザーが必要です。

4. フィールドの入力が完了したら、[完了] をクリックします。メッセージ「サーバはレポートを生成しています。お待ちください。」が表示されます。
5. エンコード タイプを選択します。デフォルトのエンコード タイプはユニコード (UTF - 8) です。異なるエンコード タイプを使用する場合は、そのエンコード タイプをドロップダウン リストで選択します。準備ができたなら、[続行] をクリックします。
6. [名前を付けて保存] ダイアログ ボックスの指示に従ってファイルをディスクに保存し、そのファイルを保存する場所を選択します。
7. ファイル名を変更して、レポートの日時が含まれるようにします。例: User\_usage072604\_3PM.csv
8. ダウンロードが完了したら、ダイアログ ボックスの [閉じる] をクリックします。

## Agile PLM で使用される日時

### サーバ レベル

オブジェクト関連のイベント (Agile アプリケーション サーバ (AAS) で記録される) の日時形式は、国際標準に準拠しています。

標準の日付フォーマットは、年 (4 桁)/月/日 (yyyy/MM/dd) です。

標準の時刻形式は、時間 [GMT で 24 時間表記]:分 :秒、または hh:mm:ss。

### クライアント レベル

一方、Agile PLM クライアントの日時形式は、[推奨時間フォーマット]、[推奨日付フォーマット]、および [タイム ゾーン] のユーザー プロファイル設定によって異なります。詳細は、147 ページの「[定義済みユーザー プロパティ](#)」を参照してください。ユーザーが指定する設定は、日付の保存形式に影響を与えません。

### 例

オブジェクト関連のイベントは、AAS での発生順に Agile PLM に記録されます。ただし、オブジェクトの [履歴] タブには、イベント発生時点のローカル クライアント タイムが表示されます。つまり、Agile PLM クライアントによって記録された時間です。

たとえば、ジェリーがカリフォルニアのサンノゼで、午後 5 時に Agile オブジェクトを作成したとします。オブジェクトが作成されたサーバはサンノゼにあるため、そのサーバでは、オブジェクトの作成時刻は午後 5 時と記録されます。ジェリーの [タイム ゾーン] ユーザー プリファレンスは、ニューヨーク (米国東部) に設定されています。したがって、ジェリーのコンピュータでは、このオブジェクトの [履歴] タブに、ニューヨーク時間である午後 8 時にオブジェクトが作成されたことが示されます。

---

**注意** すべてのユーザーの [タイム ゾーン] は管理者が設定しますが、ユーザーはこの設定を変更できません。ユーザーはタイム ゾーンを適切に設定する必要があります。適切に設定されていない場合は、ビジネス オブジェクトの [履歴] に、誤った時間が表示されます。


---

## Java クライアントの管理者ユーティリティ

[管理] タブ ツールバーにあるボタンをクリックし、Java クライアントで様々な管理者動作を実行することができます。

**注意** Web クライアントの管理者機能には、複数の新しいノードが追加されています。これらのノードは、Java クライアントの管理者機能にはありません。新しいノードは、[ダッシュボードの設定]、[プロジェクト要約設定]、および [キャッシュ ヘルス モニタ] です。これらのノードについては、23 ページの「[Web クライアントの管理者ユーティリティ](#)」で説明 (または参照) されています。

## ユーザーに電子メールで通知する


[ユーザーに電子メールで通知] ボタン  を使用し、すべてのアクティブ (有効な) ユーザー、すべてのログイン中のユーザー、または選択した特定のユーザーに対して電子メールでメッセージを送ります。

[ユーザーに電子メールで通知] ボタンをクリックすると、[ユーザーに電子メールで通知] ウィンドウが表示されます。電子メールを次の受信者グループに送信することができます。

- [すべてのアクティブなユーザー]- 次回 Agile PLM にログインするときに表示される電子メール メッセージを、有効なユーザー全員に送信します。たとえば、新しいクラス、サブクラス、またはワークフローが使用可能になったことをすべての有効なユーザーに通知することができます。
- [ログインしているすべてのユーザー]- すぐに受信してほしい電子メール メッセージを、ログインしているすべてのユーザーに送信します。たとえば、Agile PLM システムがあと 10 分でダウンすることを、ログインしているすべてのユーザーに通知することもできます。
- [その他のユーザー]- 選択したユーザーに電子メール メッセージを送信します。ラジオ ボタンをチェックし、▼ をクリックしてアドレス帳を開き、メッセージを送信するユーザーを選択します。

[コンテンツ] フィールドにメッセージを入力して、[送信] をクリックします。このユーティリティは電子メール アプリケーションよりも「簡単な」コミュニケーション用のため、「ドラフト」機能はありません。

## グローバル置換


[グローバル置換] ボタン  では、ワークフローやエスカレーションのユーザーを別のユーザーと置換したり、権限の割り当てを移譲することができます。この機能を使用すると、ある従業員が退職したり、別の職務に異動した場合など、様々な状況で使用できます。グローバル置換では、次の作業も実行できます。

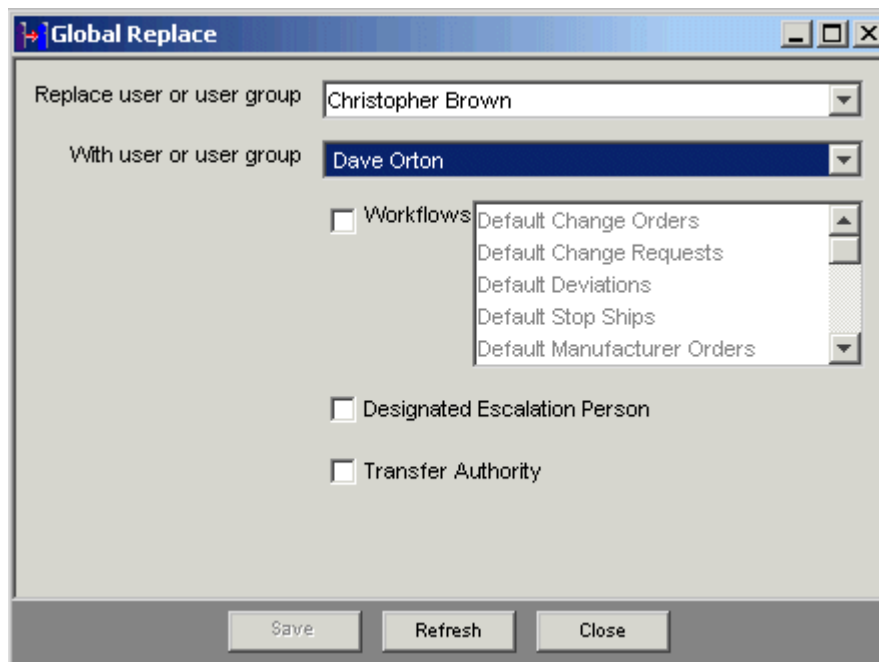
- 1 つのワークフローのユーザーを承認者、オブザーバ、またはルーティング管理者として置換します。ただし、この処理によって前述のユーザーが現在扱っている変更に関連するユーザーが置換されることはありません。現在扱っている変更に関連するユーザーの置換は、手動で行う必要があります。
- 1 人または複数のユーザー、またはユーザー グループに対するエスカレーション担当者を変更します。
- 1 人または複数のユーザー、またはユーザー グループに対する権限移譲ユーザーを変更します。[送信先ユーザー] を置き換えることはできますが、[送信元ユーザー] を置き換えることはできません。

[対象] と [置換後] ドロップダウン リスト内のユーザーには、既存のすべてのユーザー グループが含まれます。141 ページの「[ユーザーとユーザー グループ](#)」を参照してください。

## グローバル置換プロパティ

[グローバル置換] ウィンドウで設定を定義、または変更するには

1. [管理] タブ ツールバーの [グローバル置換] ボタン  をクリックします。[グローバル置換] ウィンドウが表示されます。



[グローバル置換] ウィンドウでは、次の値を指定できます。

プロパティ	説明
置換元ユーザーまたはユーザー グループ	置換の「対象」となるユーザーまたはユーザー グループです。ユーザーまたはユーザー グループをドロップダウン リストから選択します。
置換先ユーザーまたはユーザー グループ	「置換対象」のユーザーまたはユーザー グループと置換される、「置換後」のユーザーまたはユーザー グループです。ユーザーまたはユーザー グループをドロップダウン リストから選択します。
ワークフロー	ドロップダウン リストから特定のワークフローを選択します。すべてのワークフローにおいて、「置換対象」ユーザーのすべてのインスタンスを同じ「置換後」ユーザーに変更する場合は、[Ctrl] を押しながら [Shift] を押すか、または [Shift] を押しながらクリックして、すべてのワークフローを選択します。チェックボックスを選択すると、指定したワークフローの承認者、オブザーバ、変更分析者 (ルーティング管理者) に関して、対象のユーザーが置換後のユーザーで置換されます。
指定されているエスカレーション担当者	指定されているエスカレーション担当者として、「対象」のユーザーが「置換後」のユーザーで置換されます。(130 ページの <a href="#">「指定されているエスカレーション担当者」</a> を参照してください。)
権限委譲	「対象」のユーザーの変更を承認、または却下する権限を有するユーザーとして、「対象」のユーザーが「置換後」のユーザーで置換されます。(206 ページの <a href="#">「権限委譲 (自分)」</a> を参照してください。)

[ワークフロー] フィールドで複数のワークフローを選択している場合は、[保存] をクリックすると、次の確認メッセージが表示されます。「Are you sure you want to replace <Replace person> with <With person> for all Workflows?」

「対象」のユーザーがルーティング管理者で「置換後」のユーザーがルーティング管理者ではない場合、警告メッセージが表示されます。「対象」のユーザーがデフォルトのルーティング管理者プロパティで使用されている場合 (デフォルトの変更分析者など)、プロンプトで [はい] を選択して続行すると、この機能にはルーティング管理者でないユーザーが記入されます。この結果を希望しない場合は、プロンプトに [いいえ] と答え、より適切なユーザーを「置換後」のユーザーとして選択します。

ルーティング管理者の詳細は、110 ページの「[ルーティング管理者](#)」を参照してください。

## オブジェクト履歴

Agile PLM システムは複数の「履歴」を追跡しており、管理者のみが使用できる履歴とすべてのユーザーが使用できる履歴があります。以下のセクションで、これらのトピックについて説明します。

- オブジェクト履歴と管理オブジェクト履歴 - オブジェクト履歴は、そのオブジェクトの履歴のみを示します。オブジェクトとはユーザーと管理者ユーザーが実行したすべてのアクションのことで、管理者が関与するアクションは [管理者履歴] ウィンドウにも一覧表示されます。
- 管理者履歴 - Agile PLM のすべてのオブジェクトの管理アクションを記録します。[管理者履歴] は削除されたオブジェクトや設定の履歴も記録します。
- 削除されたオブジェクトの履歴 - オブジェクトが削除されても、履歴は保たれています。このタイプの履歴は、[管理者履歴] からアクセスすることができます。
- 以前の管理者履歴 - Agile PLM の以前のリリースで実行されたオブジェクト履歴を表示します。このタイプの履歴は、[以前の管理者履歴] にあります。

## オブジェクト履歴と管理オブジェクト履歴

Agile PLM のすべてのオブジェクトには、[履歴] タブがあり、作成、変更、削除など、実行された個々のアクションすべてが記録されています。[履歴] タブに記録されるデータはオブジェクト タイプによって異なります。Agile PLM 管理者が実行したアクションの履歴は、[管理者履歴] にも表示されます (20 ページの「[管理者履歴](#)」を参照)。

すべてのオブジェクトの [履歴] タブには、次の表に示す情報が記録されています。多くの種類の Agile オブジェクトでは、[履歴] タブに追加のフィールドがあります。

プロパティ	説明
アクション	作成、変更、削除などの実行されたアクション。
ユーザー	アクションを実行したユーザー。
ローカル クライアント タイム	アクションが実行された日付と時刻。
詳細	変更後のオブジェクト、プロパティ、またはアクションの詳細。

1 つのオブジェクトから別のオブジェクトへの割り当てまたは参照を記録するノードの管理オブジェクトに変更を加えた場合、その参照または割り当てを「所有する」オブジェクトに関する履歴が記録されます。次の表を参照してください。たとえば、あるユーザー (オブジェクト) に役割 (オブジェクト) を割り当てる場合、参照される役割オブジェクトをユーザー オブジェクトが所有することになるため、ユーザー オブジェクトの [履歴] タブが更新されます。

所有者 (履歴が記録されるオブジェクト)		参照、または割り当てオブジェクト
役割	所有	権限
権限	所有	条件
サブクラス	所有	番号ソース
ワークフロー条件ノード (条件基準、終了条件)	所有	条件
ユーザー	所有	役割

## 管理者履歴

管理オブジェクトに変更を加えた場合、そのアクションは [管理者履歴] ウィンドウの下で記録され、表示されます。[管理者履歴] は削除されたオブジェクトや設定の履歴も記録します。

**注意** [管理者履歴] には、ユーザー履歴やユーザー グループ履歴は含まれていません。

下表は [管理者履歴] ウィンドウのフィールドを説明しています。これらのフィールドは、Agile PLM 管理オブジェクトの履歴テーブル フィールドに類似しています。

フィールド	説明
アクション	作成、変更、削除などの実行されたアクション。
オブジェクト	ワークフロー、権限マスク、条件の名前など、アクションが実行されたオブジェクトの名前。
ユーザー名	アクションを実行したユーザー。ユーザー名はアクティブなリンクです。ユーザーのタブ付きページを開くには、ユーザー名をクリックします。
ローカル クライアント タイム	アクションが実行された日付と時刻。
詳細	変更後のオブジェクト、プロパティ、またはアクションの詳細。


## 管理者履歴のページ

[管理者履歴] はクリアまたはページできます。

**注意** よく知られている [削除] ボタンは、ここでは異なった動作を示します。[管理者履歴] ウィンドウから選択したラインを削除することはできません。これは、本来の「ページ」機能として動作します。ページはまた、[以前の管理者履歴] ウィンドウから記録を削除します。

管理者履歴をページするには:

**[管理] タブ ツールバーの [管理履歴] ボタン  をクリックします。**

- [管理者履歴] ウィンドウのツールバーで [ページ] ボタン  をクリックします。
- [既存の履歴をエクスポートしますか?] という質問に対して、3 つのオプションが表示されます。
  - 「はい」の場合、エクスポート ファイルとともにすべての履歴記録をページします。[はい] をクリックすると、[管理者履歴] のすべての記録はページされ、すべてのデータのエクスポート ファイルが作成されます。会社で検証を行っており、これらのアーカイブが必要とされている場合は、この手順をお勧めします。

- b. 「いいえ」の場合、エクスポート ファイルなしで、すべての履歴記録をパージします。[いいえ] をクリックすると、[管理者履歴] のすべての記録はパージされますが、エクスポート ファイルは作成されません。
  - c. 「キャンセル」の場合、パージをキャンセルします。[キャンセル] をクリックすると、操作は実行されません。
3. [はい] または、[いいえ] をクリックすると、[管理者履歴] のすべての記録はすぐにパージされます。検索することはできなくなります。


## 削除されたオブジェクトの履歴

オブジェクトや設定が削除された場合、そのオブジェクトや設定の履歴は [管理者履歴] に保持されます。ただし、そのオブジェクトや設定に関するデータは、[履歴] タブには保持されません。

たとえば、ワークフローのようなオブジェクトを削除した場合、削除操作を含めた履歴エントリは、[管理者履歴] に保持されます。ただし、そのワークフロー オブジェクトは存在しないため、そのオブジェクトに対する [履歴] タブは存在せず、そのワークフローに対する個々のオブジェクト履歴もなくなります。

たとえば、1 つの役割から、1 つの権限を削除する場合のように、1 つのオブジェクトから別のオブジェクトを削除する場合、権限の削除はその役割を参照する [管理者履歴] に記録されます。

## 以前の管理者履歴

Agile Product Collaboration の以前のバージョン (バージョン 8.5 以前) からアップグレードした場合、[以前の管理者履歴] ボタン  ([管理者履歴] ウィンドウのツールバー上) には、アップグレード前のデータベースに保存された管理者履歴情報が含まれています。この情報は、[以前の管理者履歴] ウィンドウに表示されているため、アップグレードを実行する前に管理者によるデータベースの変更に関する情報が必要な場合に、参照することができます。

## 管理者設定のインポートとエクスポート

管理者の複数のノードで、エクスポートとインポートが使用できます。

- データ設定
  - 条件
- ワークフロー設定
  - ワークフロー
- ユーザー設定
  - 役割
  - 権限

Agile PLM オブジェクトの定義データをファイルにエクスポートすることができます。Agile PLM オブジェクトの定義データ ファイルをインポートし、新規オブジェクトを作成することができます。例の役割などの例のオブジェクトのインポートやエクスポートはできません。

---

**注意** Agile PLM クライアントの [ツール] メニューから、[インポート] と [エクスポート] ユーティリティを使用して製品データ (Agile PLM システム メタデータではありません) をインポートおよびエクスポートすることができます。[インポート] および [エクスポート] のユーティリティは『Agile PLM インポートおよびエクスポート・ガイド』に記載されています。

---

**重要** テスト システムから実働システムに管理者データをインポートする場合、インポートされたデータができるかぎり完全なものとなるよう確認してください。

## エンコード タイプ

ワークフロー データをインポートまたはエクスポートする際、エンコード タイプを選択する必要があります。次のテーブルは、利用可能なエンコード タイプを一覧表示します。

値	コメント
西ヨーロッパ言語 (ISO)	ISO-8859-1
日本語 (Shift JIS)	SJIS
繁体中国語 (Big 5)	BIG5
日本語 (EUC)	EUC-JP
簡体中国語 (GB2312)	GB2312
ユニコード (UTF-8)	UTF8


## 管理者エクスポート

管理者設定のエクスポート機能は、オブジェクト作成に必要なデータをエクスポートします。ただし、すべてのプロパティがエクスポートされるわけではありません。たとえば、権限マスクのエクスポートでは、使用箇所の情報はエクスポートされません。エクスポートされたテキスト ファイルを確認すると、オブジェクトの各タイプについてエクスポートされたプロパティを判断することができます。

### 管理者データをエクスポートするには:

- 作業するノードを開きます。[ワークフロー]、[条件]、[役割]、または [権限] のいずれかです。
- エクスポートするオブジェクトを選択します。1 つのオブジェクト、またはテーブル内のすべてのオブジェクトをエクスポートすることができます。[ワークフロー]、[条件]、[権限] ウィンドウには [すべてエクスポート] ボタンがあります。

**注意** フィルタ バーのあるウィンドウ (13 ページの「[データをフィルタリングする](#)」を参照) で、ノードのすべてのオブジェクトを表示するには、[条件] のドロップダウン リストで、[すべて表示] を選択して、[適用] をクリックします。

- ウィンドウ ツールバーの [エクスポート]  ボタンをクリックします。  
ワークフロー エクスポートのみの場合、[エンコード タイプ] のダイアログ ボックスが表示されます。上のテーブルを参照してください。一般に使用されるエンコード タイプは、[西ヨーロッパ言語 (ISO)] です。別のエンコード タイプを使用する場合は、そのタイプをドロップダウン リストから選択し、[OK] をクリックします。

**注意** 後でファイルをインポートする際には、同じエンコード タイプを指定してください。

- 通常の [名前を付けて保存] でファイルに名前を付け、ディスクで保存する場所を選択します。識別しやすくするために、ファイル名を変更します。エクスポートするオブジェクト、日付、エンコード タイプを含めることもできます。例: ChangeOrderWorkflow072602\_ISO.txt
- 入力が完了したら、[保存] をクリックします。エクスポートしたファイルのデータを確認します。



## 管理者インポート


エクスポートされたテキスト ファイルをインポートし、Agile PLM システムでオブジェクトを作成することができます。

同じ名前のオブジェクトを 2 つ作成することはできません。たとえば、Agile PLM システムにすでに ABC という名前のワークフローがある場合、ABC という名前のオブジェクト データ ファイルをワークフローにインポートすることはできません。既存のオブジェクトを上書きするオプションもありますが、この場合、Agile PLM システムの既存のオブジェクトはインポートされたオブジェクトで置換されます。

一部のプロパティ (たとえばユーザー割り当てなど) はエクスポートされません。オブジェクト データのテキスト ファイルをインポートする場合、これらプロパティのない新しいオブジェクトを作成します (たとえばユーザー割り当てのないもの)。


**注意** インポートする前に、インポートするテキスト ファイルを開いて、エクスポートされたオブジェクトのプロパティを確認します。

### 管理者データをインポートするには:


1. 作業するノードを開きます。[ワークフロー]、[条件]、[役割]、または [権限] のいずれかです。
2. ウィンドウ ツールバーの [インポート]  ボタンをクリックします。[ファイルのインポート] ダイアログが開きます。

ワークフロー インポートのみの場合は、[ファイルのインポート] ダイアログに [エンコード タイプ] フィールドが含まれます。エンコード タイプがエクスポートされたワークフローのファイルと一致していることを確認します。

**注意** オブジェクトをエクスポートした時に使用したエンコード タイプと同じエンコード タイプを選択してください。同じエンコード タイプを使用しないとインポート結果の信頼性が低くなります。

3. [インポートするファイル] フィールドの横にある [参照] ボタン  をクリックして、インポートするファイルを検索し、選択します。[開く] をクリックします。
4. [OK] をクリックします。インポート処理には多少時間がかかります。インポートしたファイルのデータを確認します。

## プロセスの拡張ライブラリ

[ツール]>[プロセスの拡張] や [プロセスの拡張] ボタン  を使用して、[プロセスの拡張] ライブラリにアクセスします。Agile PLM システムにプロセスの拡張が導入されていない場合、[ツール] メニューではアイテムは利用できません。ボタンをクリックすると、「空」と表示されます。

プロセス拡張の設定方法の詳細は、86 ページの「[プロセス拡張](#)」を参照してください。Agile PLM システムのプロセス拡張の発展方法については、『Agile PLM SDKガイド』をご覧ください。

## Web クライアントの管理者ユーティリティ

ユーザーに [管理者] または [ユーザー管理者] 権限が割り当てられている場合、管理者または補佐のユーザー管理者は、Web クライアントで限定された管理者アクションを実行できます。[ツール]>[管理] の順にクリックして、次のフォルダとノードを表示します。

- ユーザー管理 - ユーザー ノードについては、141 ページの「[ユーザーとユーザー グループ](#)」で説明されています。
  - ユーザー
  - ユーザー グループ
  - サプライヤ グループ
  - 削除されたユーザー
  - 削除されたユーザー グループ
- Web クライアント設定
  - ダッシュボードの設定 - 194 ページの「[ダッシュボード管理](#)」を参照してください。
  - プロジェクト要約設定 - 194 ページの「[プロジェクトの要約ページの設定](#)」を参照してください。
  - テーマ - 「ビジュアル テーマ」を参照してください。
- サーバ設定
  - クラスタ - 24 ページの「[クラスタ](#)」を参照してください。
- トラブルシューティング
  - キャッシュ ヘルス モニタ - 25 ページの「[キャッシュ ヘルス モニタ](#)」を参照してください。

このセクションでは、Web クライアントに固有の Agile 管理者用のユーティリティについて説明します。

## クラスタ環境を管理する

Agile PLM の導入でクラスタ化サーバを使用する必要がある場合は、[クラスタ] ノードを使用してサーバをクラスタに追加したり、クラスタから削除することができ、[キャッシュ ヘルス モニタ] を使用して、クラスタのデータを同期化させることができます。会社がクラスタ化されたサーバのライセンスを取得していない場合、[管理] メニューに [クラスタ] または [キャッシュ ヘルス モニタ] ノードは表示されません。

クラスタ化されたサーバの導入とメンテナンスの詳細は、Agile ソリューション コンサルタントが情報を提供します。データの同期に関するその他の注意事項については、「Agile PLM Readme」を参照してください。

## クラスタ

[クラスタ] ノードは、クラスタ環境でサーバを管理するために使用されます。サーバをクラスタに追加するタスクでは、ステップ 4 は OAS に適用され、ステップ 5 は BEA WebLogic に適用されることに注意してください。

### クラスタ環境に 1 つのサーバまたは複数のサーバを追加するには:

1. クラスタ内のいずれかの管理サーバを起動します。
2. Web クライアントで (管理者ユーザーとして) >[ツール]>[管理]>[サーバ設定]>[クラスタ] ノードの順に選択し、[一般情報] タブで次の操作を実行します。
  - [サーバ ディスカバリ方式] を [スタティック] から [ダイナミック] に変更します。
  - IP 競合が発生しないように、[マルチキャスト IP] に「239」を入力し、クラスタの管理サーバの最後の 3 つの部分が付加します。たとえば、管理サーバの IP アドレスが 10.0.7.25 の場合、マルチキャスト IP は 239.0.7.25 に設定されます。
  - [データ レプリケーション方式] を [JMS] から [カスタム] に変更します。

3. [サーバ] タブで、[追加] 手順を使用して、1 つのサーバまたは複数のサーバを 1 つずつクラスタに追加します。
  - 管理サーバのサーバ名を入力し、[レプリケーション URL] を `rmi://<host>/ClusterService` に設定します。たとえば、管理サーバが `9214demo.agile.agilesoft.com` というコンピュータで実行されている場合は、[名前] を `9214demo` に設定し、[レプリケーション URL] を `rmi://9214demo.agile.agilesoft.com/ClusterService` に設定できます。
  - 他のフィールドは空白のままにしておきます。
4. クラスタが Oracle Application Server (WebLogic クラスタを使用している場合は、ステップ 5 に進んでください) で実行されている場合は、OC4J コンポーネント用のシステム プロパティ `agile.server.name` (カテゴリ起動パラメータ) を `$ORA_HOME/opmn/conf/opmn.xml` に追加します。

```
<data id="java-options" value="-Xrs -server
-Djava.security.policy=$ORACLE_HOME/j2ee/home/config/java2.policy
-Djava.awt.headless=true
-Dagile.server.name=<ステップ 3 で追加したサーバの名前>
```

完全な例として、2 つの OAS 管理サーバ `oascluster1.agile.agilesoft.com` と `oascluster2.agile.agilesoft.com` があるとします。ステップ 3 から、次の 2 つのサーバを追加します。Server 1 は、[名前] を `oascluster1` に、[レプリケーション URL] を `rmi://oascluster1.agile.agilesoft.com/ClusterService` に設定します。Server 2 は、[名前] を `oascluster2` に、[レプリケーション URL] を `rmi://oascluster2.agile.agilesoft.com/ClusterService` に設定します。次に、システム プロパティ `agile.server.name=oascluster1` を追加して、`oascluster1` の `opmn.xml` を変更し、システム プロパティ `agile.server.name=oascluster2` を追加して、`oascluster2` の `opmn.xml` を変更します。

5. BEA WebLogic クラスタを使用している場合は、次のステップに従います。システム プロパティ `agile.server.name` を `agileDomain/bin/startAgile.cmd` に追加します。次に、サンプル形式を示します。
 

```
-Djava.awt.headless=true -Dagile.server.name=<ステップ 3 で追加したサーバの名前> %DEBUG_OPTS%
weblogic.Server
```

完全な例として、2 つの WebLogic 管理サーバ `wlscluster1.agile.agilesoft.com` と `wlscluster2.agile.agilesoft.com` があるとします。ステップ 3 から、次の 2 つのサーバを追加します。Server 1 は、[名前] を `wlscluster1` に、[レプリケーション URL] を `rmi://wlscluster1.agile.agilesoft.com/ClusterService` に設定します。Server 2 は、[名前] を `wlscluster2` に、[レプリケーション URL] を `rmi://wlscluster2.agile.agilesoft.com/ClusterService` に設定します。次に、システム プロパティ `agile.server.name=wlscluster1` を追加して、`wlscluster1` の `startAgile.cmd` を変更し、システム プロパティ `agile.server.name=wlscluster2` を追加して、`wlscluster2` の `startAgile.cmd` を変更します。
6. すべての管理サーバ (ステップ 1 で起動したサーバも含む) を再起動します。
 

管理サーバにファイアウォールが設定されている場合は、次の TCP ポートを開きます。RMI バインディング用は 1099、RMI データ通信用は 9002 です。

#### クラスタ環境からサーバを削除するには:

1. Web クライアントで (管理者ユーザーとして) >[ツール]>[管理]>[サーバ設定]>[クラスタ] ノードの順に選択し、[サーバ] タブで、[削除] 手順を使用して、管理サーバを選択して削除します。

## キャッシュヘルス モニタ

Agile PLM 9.x では、各クラスタ サーバのアプリケーション設定に関連するすべてのデータがメモリにキャッシュされます。これは、管理キャッシュと呼ばれます。管理キャッシュ データの変更がクラスタ内のいずれかのサーバで発生すると、変更されたデータ アイテムに対するキャッシュを更新するよう、すべてのクラスタサーバにメッセージが送信されます。Agile PLM では、このメッセージのブロードキャストに Java Messaging Service (JMS) が使用されます。

一部の変更はクラスタ内のすべてのサーバに継承されない場合があることが確認されています。この現象はランダムに発生します。したがって、非継承の発生は予測不可能です。発生した場合の解決策は、クラスタ内のすべてのサーバを再起動することです。この問題に対する別の解決策が、キャッシュヘルスマニタと呼ばれるユーティリティです。

---

**注意**      キャッシュヘルスマニタユーティリティは、バックアップシステムとして設計されています。JMSサーバを使用する現在の方法も、プライマリデータ同期化メカニズムとしてそのまま使用できます。

---

キャッシュヘルスマニタには、次の主な機能があります。

1. 変更されたすべての [管理者] ノードおよび現在の同期化の状態を一覧表示する
2. 同期化を手動で、または自動的に開始する (27 ページの「[Java クライアント管理者を使用した自動同期化](#)」を参照)
3. キャッシュ同期化操作のログ機能をオンまたはオフにする
4. キャッシュ同期化操作メッセージが含まれているログファイルを表示する
5. 古いエントリをパージする

## キャッシュヘルスマニタの機能

すべての管理者 (設定関連) の変更が、新しいデータベース テーブルに入力されます。サーバの起動時に、キャッシュヘルスマニタでは、サーバ時間が最終更新時間 (LUT) として記録され、LUT より後に行われたすべての変更が監視されます。手動または自動のトリガが開始されると、LUT 以降のすべての変更が同期化され (すでに同期化されていない場合)、LUT が現在の時刻に更新されます。

クラスタ内のサーバにアクセスするには、管理者は、アプリケーション サーバ名とポートを使用して、各アプリケーション サーバに直接ログインする必要があります。たとえば、次の 3 つのサーバが含まれているクラスタがあるとします。

1. app1.abc.com
2. app2.abc.com
3. app3.abc.com

手動で監視および同期化するには、管理者は、次の URL を使用して各サーバにログインします。

4. <http://app1.abc.com:7777/Agile/PLMServlet>
5. <http://app2.abc.com:7777/Agile/PLMServlet>
6. <http://app3.abc.com:7777/Agile/PLMServlet>

この例では、デフォルトの Oracle Application HTTP ポートである 7777 が示されています。この部分を適切な値に変更してください。

[キャッシュヘルスマニタ] ページのボタン

[キャッシュヘルスマニタ] ページには、特定のアプリケーション サーバ名が一覧表示されます。このリストは、ユーザーの接続先のサーバの識別に役立ちます。特に、ユーザーがクラスタ内の各サーバに対して 1 つのブラウザ セッションを持つ場合に有効です。

[キャッシュヘルスマニタ] ページのボタンは、次のように、特定のイベントを有効にします。

[同期] - 特定のアプリケーション サーバのデータを同期化します。1 つ以上のオブジェクトの [ステータス] 欄に、[未同期] と表示された場合に使用します。[同期] ボタンをクリックすると、同期化が開始され、ステータスが [同期済み] に変更されます。

[更新] - そのページのデータを更新します。

[パージ] - データベースの CACHE\_SYNC\_LOG テーブル内の古いエントリをパージします。パージするエントリを選択する時間間隔は、ファイル agile\_home/agileDomain/config/agile.properties のプロパティ cache.syncevent.obsoletetime (分) で設定されます。デフォルト値は、144000 分 (100 日) です。このプロパティの変更では、サーバの再起動が必要です。

[パージ] では、パージの値より古いテーブル内のエントリがすべて削除されます。前述の値の場合は、144000 分より古いエントリがすべて削除されます。

[ログを有効化]/[ログを無効化] - ログ機能を有効または無効にします。トグル スイッチとして機能します。

[ログの表示] - 現在の同期化ログを表示します。このログには、同期化プロセス、同期化されたオブジェクト、および失敗 (ある場合) に関する情報が含まれています。

## Java クライアント管理者を使用した自動同期化

自動キャッシュ同期化を設定するには、管理キャッシュの同期タスクという新しいバックグラウンド タスクを有効にする必要があります。このタスクは、[Java クライアント]>[管理]>[サーバ設定]>[タスクの設定] で設定されます (283 ページの「[タスクの設定](#)」で説明されています)。

[タスクの設定] ページでタスクをダブルクリックすると、そのタスクに対する [タスクの設定] の [一般情報] ウィンドウが表示されます。管理キャッシュの同期タスクには、次のプロパティがあります。キャッシュ ヘルス モニタに固有のデフォルトも記載されています。

プロパティ	説明
名前	設定するタスクの名前。
タスクの間隔	サーバがタスクのステータスを更新した後の定期的な間隔を分で表します。デフォルトは 5 です。この場合は、ノード内の有効なすべてのタスクが 5 分おきに実行されます。
タスクの遅延時間	イベントを開始するまでの遅延時間を分で示します。デフォルトは 0 です。
タスクのルックバックウィンドウ	実行可能になったイベントを検索する際にタスク マネージャが何分前まで検索するかを指定します。デフォルトは 0 です。
タスクの最大イベント数	1 つのサーバで同時に実行できるイベントの数。デフォルトは 1 です。
タスクの失敗時の再起動	イベントの失敗後にそのイベントを再起動するかどうかを指定します。[はい] または [いいえ]。デフォルトは [いいえ] です。
タスクのアクセス サーバのロード	クラスタ内の異なるサーバにおいてイベントを同時に実行できるかどうかを指定します。[はい] または [いいえ]。デフォルトは [いいえ] です。
無効なタスク	タスクが無効 ([はい]) か、有効 ([いいえ]) かを示します。このプロパティは、タスクの設定およびテスト中は [はい] に設定できます。タスクを有効にする準備が整ったときに、[いいえ] に設定しなおす必要があります。デフォルトは [いいえ] です。

管理者で頻繁に変更を行わない場合、または管理者変更が特定の時間またはスケジュールされた時間に更新される場合は、クラスタの手動同期化がニーズと一致する可能性が高くなります。ただし、管理者で設定を頻繁に変更し、1 日中様々な間隔で入力される場合、この自動の管理キャッシュの同期タスクは、同期化に失敗した際、より構造化されたバックアップとなります。同期化に失敗した場合は、クラスタのサーバを再起動できるまで、キャッシュ ヘルス モニタ (手動または自動) を使用します。

## エラーのログを記録し、デバッグする

管理キャッシュ同期化に関連するイベントを追跡するメカニズムを提供するために、すべてのデバッグ メッセージを記録するログ機能を有効にすることができます。ログ機能がオフの場合、記録されるのは、キャッシュヘルス モニタで表示されたエラーと同期化の問題のみです。

管理者オブジェクトまたはビジネス オブジェクトがクラスタ内のサーバで変更されると、JMS サーバは、イベントの詳細を受信し、他のサーバにメッセージをブロードキャストするためのトリガとなります。

**注意** キャッシュ ヘルス モニタで、管理者オブジェクトが限定的に監視および同期化される場合 (例: 変更基本クラスまたは設計変更クラス)、ログ メカニズムでは、管理者オブジェクトとユーザー変更ビジネス オブジェクト (例: 変更された設計変更) の両方に関連するイベントが記録されます。これは、ビジネス オブジェクトに対する変更のサーバ全体への継承を追跡するために役立ちます。

次の 2 つのメッセージ (各メッセージはタイム スタンプで開始) がログ ファイルに記録されます (ログがオンの場合)。

```
2006-09-20 18:14:08,881 HttpRequestHandler-3096409 <Messenger:DEBUG> Sending message
<class:com.agile.pc.cmsserver.event.CMBatchEvent, content:Batch events:

event class:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent, content:object:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent
version:1 action: 4

event class:com.agile.pc.cmsserver.event.CMFTSSyncEvent, content:FTS sync object:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent
id:6010147 version:0

event class:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent, content:object:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent
version:1 action: 1

> to <topic:sync_topic> with property <name=APP_SRV_ID, value=6010141>

2006-09-20 18:14:10,222 HttpRequestHandler-3096409 <Messenger:DEBUG> Message was delivered to JMS
topic:sync_topic
```

最初のメッセージでは、変更されたオブジェクトの詳細が記録されます。2 番目のメッセージでは、JMS サーバがメッセージを受信したことが示されます。次に、JMS はこのメッセージを継承し、次の 3 つのメッセージが元のサーバ以外のすべてのサーバで記録されます。

```
2006-09-20 18:14:27,257 ApplicationServerThread-2 <SyncMDBBean:DEBUG> Received message from JMS
server.

2006-09-20 18:14:27,257 ApplicationServerThread-2 <SyncMDBBean:DEBUG> Message was sent by server with
ID:6010141, current server id is: 6010121

2006-09-20 18:14:27,257 ApplicationServerThread-2 <SyncMDBBean:DEBUG> Process event:com.agile.pc.cmsserver.event.CMBatchEvent, type --> 1, content --> Batch events:

event class:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent, content:object:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent
version:1 action: 4

event class:com.agile.pc.cmsserver.event.CMFTSSyncEvent, content:FTS sync object:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent
id:6010147 version:0

event class:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent, content:object:com.agile.pc.cmsserver.event.CMObjectEvent
version:1 action: 1
```

前述のログ メッセージを使用すると、同期化されていないデータを追跡できます。

手動/自動 (バックグラウンド スレッド) のトリガが発生すると、ログ機能がオフの場合でも、次のメッセージが同期化対象のすべての管理者ノードに表示されます。

### 手動トリガの場合:

2006-09-20 13:17:39,512 HttpRequestHandler-394365 <ADictionary:INFO> Admin cache sync > invalidate node:admin  
objid:7000 class id:-1 version: -1

### 自動トリガの場合:

2006-09-20 13:17:39,512 ApplicationServerThread-149 <ADictionary:INFO> Admin cache sync > invalidate node:admin  
objid:7000 class id:-1 version: -1

2 つのメッセージの相違点は、トリガのソースであることに注意してください。手動のケースでは、HTTP リクエストを送信しているため、ソースは `HttpRequestHandler` と表示されます。2 番目のケースでは、ソースがアプリケーション自体 (バックグラウンド スレッド) であるため、ソースは `ApplicationServerThread` と表示されます。

ログ機能は、`agile_home/agileDomain/config` ディレクトリの `log.xml` ファイルを使用して設定されます。

次の要素で、キャッシュ同期化のログが設定されます。

```
<appender name="CacheSyncLog"
class="org.apache.log4j.RollingFile Appender">
  <param name="File"
value="${agile.log.dir}/cachesync.log" />
  <param name="Append" value="true" />
  <param name="MaxFileSize" value="1MB"/>
  <param name="MaxBackupIndex" value="10"/>
  <layout class="org.apache.log4j.PatternLayout">
    <param name="ConversionPattern"
value="%d¥t¥t¥t¥t¥t¥t; %c{1}:¥p¥t¥m¥n"/>
  </layout>
</appender>
```

パラメータ	説明
ファイル	ログ ファイルの名前とパス。
追加	サーバ起動時に既存のファイルに追加または上書きします。
MaxFileSize	現在のファイルがアーカイブされ、新規ファイルが作成された後の最大ファイル サイズ。
MaxBackupIndex	アーカイブされる最大ファイル数。

## ビジュアル テーマ

[ビジュアルテーマ] ノードの設定を使用すると、色やフォント サイズの定義などの Web クライアント ユーザー インターフェースの表示を設定できます。この設定によって、Web クライアントの設定と導入されたその他のアプリケーションや企業で使用している色との間で整合性を保つことができます。

## スタイルの選択

[ビジュアルテーマ] ノードを使用すると、管理者は、すべての Web クライアントのエンドユーザーに対するビジュアル表示 (スタイル) を定義できます。スタイルを定義および変更するには、[ツール]>[管理]>[ビジュアルテーマ] の順に選択します。[スタイルの変更] ページが表示されます。

[スタイルの変更] ページの [スタイル テーマ] リスト ボックスには、現在利用可能なすべてのテーマが一覧表示されます。アスタリスク (\*) 付きのテーマは、デフォルトのテーマ (システム スタイル) であり、変更または削除できません。新しいテーマは、[名前を付けて保存] を使用して開発できます。

ドロップダウン リストからビジュアル スタイル テーマを選択し、次のアクション アイコンのいずれかを使用して変更を開始できます。

- [編集] をクリックして、選択したスタイル テーマを変更します。[スタイルのカスタマイズ] ページが表示されます。詳細は、「スタイルの変更」を参照してください。名前に「\*」を含むシステム スタイルは変更できません。
- [削除] をクリックして、選択したスタイル テーマを削除します。名前に「\*」を含むシステム スタイルは削除できません。
- [名前を付けて保存] をクリックして、選択したスタイル テーマを保存します。新しい名前を指定するプロンプトが表示されます。この方法を使用すると、デフォルトのシステム スタイルを変更したり、以前に変更したテーマから新しいスタイル テーマを作成できます。詳細は、「スタイルの変更」を参照してください。

スタイル テーマを変更した後は、他のアクションのために次の各ボタンを使用できます。

- [プレビュー] をクリックして、選択または変更した [スタイル テーマ] をプレビューします。自分のコンピュータでのみ、選択したスタイル テーマで Web クライアント インターフェースが表示されます(他のすべてのユーザーに対しては、現在のスタイル テーマでユーザー インターフェースが表示されます)。
- プレビューに表示されている内容に問題がない場合は、[グローバルに適用] をクリックして、選択したスタイル テーマを現在のスタイル テーマに設定します。すべてのユーザーに対する表示が変更されます。変更されるのは、特定のユーザーの画面が更新されたときか、ユーザーが Web クライアントに次回ログインしたときです。
- 変更しているスタイル テーマにさらに変更を加える場合は、[編集] をクリックします。選択した [スタイル テーマ] のプレビューをキャンセルするには、[キャンセル] をクリックします。[管理] ページに戻ります。

## スタイルの変更

ユーザーの Web クライアントで使用する色のテーマやフォント サイズは、次のように変更できます。名前に「\*」を含むシステム スタイルは変更できません。変更を入力し、[プレビュー] ボタンを使用してその結果を表示できますが、変更はできません。次のステップ 2 を参照してください。

**スタイル テーマを変更するには:**

1. Web クライアントで、[ツール]>[管理]>[ビジュアルテーマ] の順にクリックします。[スタイルの変更] ページが表示されます。
2. スタイル テーマの名前に「\*」が含まれていない場合にかぎり、変更するテーマを選択し、[編集] をクリックできます。[スタイルのカスタマイズ] ページが表示され、スタイルのプロパティが表示されます。  
  
デフォルトのシステム スタイルについては、変更するテーマを選択し、[名前を付けて保存] をクリックします。[新規スタイルとして保存] ダイアログが表示されます。新しいスタイル名を入力し、[保存] をク



リックします。これで、[スタイル テーマ] フィールドで新しい名前が選択され、[編集] をクリックすると、このスタイル テーマの変更を開始できます。

3. [スタイルのカスタマイズ] ページに、スタイル プロパティが一覧表示されます。このリストについては後で説明します。[スタイル プロパティ] の色を変更する場合は、[カラー ピッカー](ドロップダウン) ボタンをクリックし、色を選択してください。色合いをクリックすると、その HTML カラー コードが [値] フィールドに表示されます。そのプロパティに対する別の色合いをクリックするか、またはスタイル プロパティのリストで作業を続けることができます(選択した色合いは、[保存] をクリックしないと [サンプル] 欄に表示されません)。

[一般情報セクションのテキスト サイズ] プロパティでは、文字のポイント サイズが変更され、色合いは変更されないことに注意してください (「説明」を参照)。

4. 選択内容をプレビューする場合は、[保存] をクリックします。保存すると、前述のトピックで説明したように、[プレビュー] ボタンをクリックできます。

[スタイル テーマ] リストに新しいスタイルを保持しない場合は、削除できます。

次の表は、スタイル プロパティと、各プロパティで変更される Web クライアント インターフェースの部分を一覧表示します。

プロパティ	説明
上部ウィンドウの背景色	メイン ツールバーの背景色
フレームの縁の色	上部および下部ウィンドウのフレームの色
左ウィンドウ コントローラの背景色	左ウィンドウのコントロールの背景色
左ウィンドウの背景色	左ウィンドウの背景色[ログイン] ページの背景色も制御されます。
[アクティブ] タブの背景色	選択したタブの背景色
[アクティブ] タブのテキストの色	選択したタブのテキスト色
一般情報セクションの背景色	すべての情報エリアとエラー メッセージの背景色
一般情報セクションのテキストの色	情報エリアのテキスト色
一般情報セクションのテキスト サイズ	すべての情報エリアとエラー メッセージのテキスト サイズ
ラベルのテキストの色	すべてのフォーム ラベルとアクションのテキスト色
データのテキストの色	フォームとテーブルのデータのテキスト色
見出しのテキストの色	見出しタイプ属性のテキスト色
見出しの背景色	見出しタイプ属性の背景色

## Agile PLM 変数

このセクションでは、システムを設定する際に使用できる Agile PLM 変数をご紹介します。

### デフォルト値変数

以下の変数は、属性プロパティのデフォルト値を設定するために使用します。

変数	説明
\$TODAY(大文字)	現在の日付  \$TODAY は、テキスト タイプ属性ではサポートされていません。テキスト タイプ属性のデフォルト値として \$TODAY を設定すると、時間は GMT で表示されます。
\$NOW (大文字)	現在の日付と時刻  \$NOW は、テキスト タイプ属性ではサポートされていません。テキスト タイプ属性のデフォルト値として \$NOW を設定すると、時間は GMT で表示されます。
\$LATESTREV (大文字)	アイテムの最新リビジョンがリリースされているかどうかを定義します。  次の値のみ有効です。 \$LATESTREV = Is Introductory \$LATESTREV = Is Released.  詳細は、105 ページの「 <a href="#">\$CURRENTREV および \$LATESTREV を使用する</a> 」を参照してください。
\$CURRENTREV (大文字)	オブジェクトの現在のリビジョン  \$CURRENTREV の詳細は、次のトピック、105 ページの「 <a href="#">\$CURRENTREV および \$LATESTREV を使用する</a> 」、および 201 ページの「 <a href="#">\$CURRENTREV 条件論理</a> 」を参照してください。

## \$CURRENTREV 条件論理

Agile には、アイテムに対する条件で使用可能な特別な変数 \$CURRENTREV があります。この変数を使用すると、管理者は、表示されているリビジョンに基づいて権限管理を構築できます。現在、\$CURRENTREV は、[プレリナリ] または [リリース済み] のいずれかと一致するように設定できます。\$CURRENTREV を使用して作成された条件によって、Agile は、Web クライアントまたは Java クライアントで現在選択されているリビジョンを評価し、一致するかどうかを評価します。つまり、ユーザーが [リビジョン] ドロップダウン リストでリビジョンを選択すると、その表示されたリビジョンに対して \$CURRENTREV 条件が評価されます。

この機能については、200 ページの「[\\$CURRENTREV を使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する](#)」で説明されています。

## 権限マスクの条件変数

権限マスク条件を作成する際には、以下の変数から選択できます。

変数	説明
\$AFFECTEDITEMTYPE	[対象アイテム] タブまたはフィールドにリストされているオブジェクトのタイプ (サブクラス) を挿入する。
\$ATTRIBUTENAME	[属性ウォーターマーク] フィールドで選択された属性の名前を挿入する (238 ページの「 <a href="#">バナーとウォーターマークのプロパティ</a> 」を参照)。

変数	説明
\$CHECKOUTUSER	オブジェクトをチェックアウトしたユーザー。
\$CREATEUSER	オブジェクトを作成したユーザー。
\$CURRENTREV	リビジョン リストから選択したオブジェクトの現在のリビジョン、または現在表示しているオブジェクトのリビジョン。(前述のトピックを参照。)
\$DEFAULTSITE	アイテムの製造拠点にユーザーのデフォルトの拠点を含めるかどうかを指定します。
\$LATEST	<p>オブジェクトの最新リビジョン。具体的には、リリース済みアイテムの最新のリリース済みリビジョンまたは未リリース アイテムの最新の保留中リビジョン (保留中の変更を含む)。<b>\$LATEST</b> は、[読取] および [変更] 権限でのみ有意義です。</p> <p><b>\$LATEST</b> は、等式の右側で使用されます。有効な使用方法:  <b>\$CURRENTREV</b> (equal, not equal) <b>\$LATEST</b>.</p> <p><b>\$LATEST</b> に関する詳細は、108 ページの「<a href="#">\$CURRENTREV および \$LATESTREV 条件を使用したアイテム関係の作成</a>」を参照してください。</p>
\$LATESTFILEVERSION	最新のファイル フォルダ バージョンです。
\$MAINORG	サプライヤ ユーザーは、自社だけでなく、パイヤー会社の全ユーザーの読み取りおよび検出ができます ( <b>\$USERORG</b> 変数が単独で扱います)。サプライヤ ユーザーは他のサプライヤ組織からユーザーを読み取ったり、検出したりすることはできません。
\$USERORG	組織を特定する属性 (会社またはサプライヤ) とログインしたユーザーの組織との関係に基づいて、条件を作成するために使用します。
\$USERSITE	属性 (拠点) とログインしたユーザーに割り当てられた拠点との関係に基づき、条件を作成するために使用します。

## ワークフローの割り当ておよびステータス タイプの変数

ワークフローの割り当てを作成する際には、以下の変数から選択できます。

変数	説明
\$APPROVER	ワークフローの承認者。
\$OBSERVER	ワークフローのオブザーバ。
\$ORIGINATOR	送信可能なオブジェクト (ルーティング可能なオブジェクト) の作成者。

ワークフローを設定する際には、[条件] 欄にある次の「ステータス タイプ」の変数を選択することができます。

変数	説明
\$UNASSIGNED	未割り当てのステータス タイプ。
\$CURRENTSTATUS	現在のステータス タイプ。
\$STATUSTYPE.PENDING	保留中ステータス タイプ。
\$STATUSTYPE.SUBMIT	提出済みのステータス タイプ。
\$STATUSTYPE.REVIEW	レビュー ステータス タイプ。
\$STATUSTYPE.RELEASED	リリース済みステータス タイプ。
\$STATUSTYPE.COMPLETE	終了したステータス タイプ。
\$STATUSTYPE.CANCEL	キャンセル済みのステータス タイプ。
\$STATUSTYPE.HOLD	中断ステータス タイプ。

## ルーティング管理者変数

ルーティング マネージャ変数はルーティング可能オブジェクトの管理を促進します。これらの変数は、[変更分析者リスト]、[適合性管理者リスト]、[コンポーネント エンジニア リスト]、[プログラム マネージャ リスト]、[品質管理者リスト]、[品質分析者リスト]、[価格管理者リスト] から選択されたユーザーを表します。

変数	説明	関連のルーティング可能オブジェクト
\$CHANGEANALYST	[変更分析者リスト] から選択されたユーザー	設計変更 (ECO)、設計変更依頼 (ECR)、製造元変更 (MCO)、期限付き設計変更、出荷停止
\$COMPLIANCEMANAGER	[適合性管理者リスト] から選択されたユーザー	すべてのデklarレーション
\$COMPONENTENGINEER	[コンポーネント エンジニア リスト] から選択されたユーザー	製造元変更 (MCO)
\$PROGRAMMANAGER	[プログラム マネージャ] リストから選択されたユーザー	パッケージ
\$QUALITYADMINISTRATOR	[品質管理者リスト] から選択されたユーザー	製品サービス依頼: PR (問題レポート) および NCR
\$QUALITYANALYST	[品質分析者リスト] から選択されたユーザー	品質変更依頼: 是正・予防処置および検証
\$PRICEADMINISTRATOR	[価格管理者リスト] から選択されたユーザー	価格変更 (PCO)

## 多言語サポート

Agile PLM は国際版としてリリースされているため、英語以外のラベル データを入力できます。ユーザーは、クライアント ユーザー インターフェースを自分の好みの言語で表示できます。英語はすべてのライセンスに含まれています。Agile PLM では、日本語、簡体中国語、フランス語、ドイツ語、および繁体字中国語が認証されています。

**注意** Product Governance & Compliance ソリューションの場合は、Excel でのロールアップ テンプレートの日本語バージョンが完全にサポートされています。Excel でのロールアップ テンプレートのローカライズ版は、簡体字中国語、フランス語、およびドイツ語でサポートされています。さらに、JGPSSI デクラレーションを作成するための JGPSSI テンプレートの日本語バージョンも完全にサポートされています。

どのユーザーも、会社のビジネス オブジェクト (Agile ユーザーも含みます) 設定中に言語プリファレンス (<ユーザー オブジェクト>>[プリファレンス]>[フォーマット プリファレンス] (見出しのみ)>[言語]) を設定できます。

ただし、ローカライズ言語のライセンスがある場合は、その言語が [言語] プロパティのドロップダウン リストに表示されます。

### ユーザーの言語プリファレンスを設定するには

1. ユーザー プロファイルを開きます。(これは、企業の Agile ユーザーを作成する際に設定されるのが通常です。このタスクは、すでに作成されているユーザー オブジェクトに関する指示です。)
2. [プリファレンス] タブをクリックします。
3. [フォーマット プリファレンス] で、[言語] フィールドの ▼ をクリックします。  
英語およびその他のライセンスされている言語がドロップダウン リストに表示されます。
4. 言語を選択して、[保存] をクリックします。その言語で Agile がサポートするエレメントが表示できるようになります。

ユーザーの言語プリファレンスを変更し、その変更内容をユーザー インターフェースで表示する場合、該当するユーザーは、ログアウトして再度ログインする必要があります (ログインしていた場合)。

ユーザーは、言語プリファレンスを任意に変更することができます (ここでも、ライセンスされている英語以外の言語)。Java クライアントでは、ユーザーはメイン ツールバーの [現在のユーザーの表示/編集] をクリックし、前の指示に従います。

Web クライアントでは、ユーザーの [言語] 設定へのパスは [設定]>[ユーザー プロファイル]>[プリファレンス]>[編集]>[言語] ([フォーマット プリファレンス] の下) です。

## 多言語機能でサポートされている管理者データ

多言語機能という用語は、ライセンスのある様々な言語の入力を別々に保持できる、管理者による編集が可能なオブジェクトと、エンドユーザーの言語プリファレンスの設定に従って様々な言語で表示できる、編集不可のオブジェクトの両方を表します。

オブジェクトが多言語機能でサポートされている管理者ノードを次に示します。ノードがサポート対象としてリストされている場合は、そのノードの作成者が管理者か、ユーザーかは関係ありません。(通常どおり、Agile でオブジェクトを作成できるかどうかは、そのユーザーの役割および権限によって定義されます。) 特別な記述がないかぎり、オブジェクトの名前と説明は多言語に対してサポートされています。

## 管理者ノード

管理者が編集できるアイテムには、どのライセンスの言語でも名前がついています。管理者は、[言語] ユーザープリファレンスを設定し、これらのアイテムをユーザー用に別の言語に設定できます。たとえば、会社 A は、日本語でライセンスされた Agile PLM のローカライズ版を所有しています (デフォルトは英語のライセンスです)。管理者はリストを作成し、そのリストに英語ユーザー用と日本語ユーザー用に別々に名前を付けることができます。言語プリファレンスが日本語に設定されているユーザーには、管理者が設定したとおりに、日本語の名前のリストが表示されます。

次の種類のオブジェクトで多言語がサポートされています。

### データ設定

- クラス
- 文字セット
- リスト
- プロセスの拡張
- 自動採番
- 条件

### ワークフロー設定

- ワークフロー

### ユーザー設定

- 役割
- 権限

### システム設定

- 通知 (名前、説明、件名、本文)
- [全文検索] は、日本語、繁体中国語、簡体中国語、ドイツ語、フランス語のローカライズ版の添付ファイルでサポートされています。
- Product Portfolio Management:
  - スケジュール ステータス
  - コスト ステータス
  - 品質ステータス
  - リソース ステータス
  - ダッシュボード管理
  - デフォルトの役割
- Agile Content Service:
  - 確認通知受信者
  - 送信先
  - イベント
  - フィルタ

- パッケージ サービス
  - 回答サービス
- Product Governance & Compliance:
- サインオフ メッセージ

## 事前定義されたシステム オブジェクト

Agile で事前に定義されているオブジェクト (役割の例など、[管理者] で編集できないもの) は、多言語機能で完全にサポートされています。たとえば、[言語] プリファレンスが英語であるユーザーがログインすれば、「例 - 管理者」役割が英語で表示され、同じユーザーが [言語] プリファレンスを日本語に設定してログインすれば、日本語ユーザー管理者が設定した「例 - 管理者」の和訳が表示されます。

## 多言語機能でサポートされていない管理者データ

ほとんどの種類の管理者データが多言語機能でサポートされていますが、次の種類の管理データはローカライズ ユーザー インターフェースのみで、多言語ではサポートされていません。

### ユーザー設定

- ユーザー
- ユーザー グループ
- サプライヤ グループ

### システム設定

- Viewer とファイル
- 組織のプロファイル
- PCM 出荷先の場所

### ユーザーが入力する値/文字列

#### "01"、"02"、"03" などが付加された属性名

たとえば、会社 B は、簡体中国語でライセンスされた Agile PLM のローカライズ版を所有しています (英語のライセンスも所有)。言語プリファレンスが英語の管理者が、ユーザー グループを作成し、UserGroup\_1 という名前を付けたとします。その後、言語プリファレンスが簡体中国語である、会社 B の別の Agile 管理者が、UserGroup\_1 の名前を中国語の文字を使用した中国語の名前に変更したとします。この場合、ユーザー グループの名前は、すべてのユーザーに対して、中国語の文字を使用した中国語の名前で表示されます。これは、言語プリファレンスが英語のユーザーの場合も同じです。

---

**注意** [全文検索] は、日本語、繁体中国語、簡体中国語、ドイツ語、フランス語のローカライズ版の添付ファイルでサポートされています。

---

## 多言語用にシステムを設定する

どの言語でも、フィールドを設定する際には、設定する言語の言語プリファレンスでログインする必要があります。言語プリファレンスを日本語に設定して日本語で変更し、次に英語で変更をする場合には、言語プリファレンスを英語に変更し、ログアウト後、再度ログインしてから進めなければなりません。あるいは、ログアウトしてから、言語プリファレンスが英語の、別の管理者として再度ログインすることもできます。

Agile で多言語機能がどのように言語の設定を扱うかを理解するために、ジムとジャンの例を挙げます。

- ケース 1: 会社 C は、英語バージョンの Agile のみを所有しています。会社 C の全ユーザーのユーザーインターフェースとビジネス オブジェクトは英語で表示されます。ユーザーは、言語ユーザー プリファレンスを別の言語に変更できません。
- ケース 2: 会社 D は、日本語でライセンスされた Agile のローカライズ版を所有しています (デフォルトは英語のライセンスです)。すべてのユーザーの言語プリファレンスが日本語になるように会社を設定しました。ジムは自分の言語ユーザー プリファレンスを英語に設定します。再度ログインすると、今度はジムのユーザー インターフェースと自分で作成したオブジェクトが英語で表示されます。ジャンは、言語プリファレンスを日本語のままにしているユーザーの典型です。ジムが作成したオブジェクトは、ジャンには日本語で表示されます。
- ケース 3: 会社 E は、簡体中国語でライセンスされた Agile のローカライズ版を所有しています。管理者は、香港支店のユーザーを、その [言語] ユーザー プリファレンスが中国語になるように設定することができます。香港以外で勤務している会社 E の他のユーザーは、自分の言語プリファレンスを英語のままにしています。ここで、管理者は、部品クラスのサブクラスを作成し、**Modules** という名前を付けます。このサブクラスのオブジェクトは、会社 E の全ユーザーに対して **Modules** という名前が表示されます。これは、ユーザー プリファレンスでどの言語が設定されているかには関係ありません。

後で、管理者は、**Modules** サブクラスを香港のユーザーのために中国語の名前に変更するとします。管理者は、自分の言語プリファレンスを簡体中国語に設定し、**Modules** サブクラスを中国語の文字の翻訳名に変更します。この結果、**Modules** サブクラスの名前は、言語ユーザー プリファレンスが中国語に設定された全香港ユーザーに対して中国語の文字で表示されます。しかし、英語ユーザーには、引き続き英語でサブクラス名 **Modules** が表示されます。

- ケース 4: 会社 F は、簡体中国語でライセンスされた Agile のローカライズ版を所有しています。管理者は、香港支店のユーザーを、その [言語] ユーザー プリファレンスが中国語になるように設定することができます。香港にいるユーザーは全員、情報 (たとえば、オブジェクトの作成など) を中国語で入力します。香港のユーザーがビジネス オブジェクトを作成すると、会社 F の全ユーザーに中国語で表示されます。これは、ユーザー プリファレンスでどの言語が設定されているかには関係ありません。

新しいサブクラスを作成した場合は、その名前をローカライズ (翻訳された) 形式でシステムに入力できます。ただし、新たに作成されたサブクラス、または他のサブクラスの名前を変更した場合は、ログインした同じ言語 (言語ユーザー プリファレンス) で名前が変更されます。

**Java** クライアントに英語以外の文字 (UI およびユーザー入力テキスト) を表示させるには、特定の言語をサポートしているオペレーティング システム上で実行されていなくてはなりません。そうでない場合は、英語以外の正しい文字が「四角い空白」になるなど、文字化けするおそれがあります。日本語や中国語などの 2 バイトの文字設定では、このようなことがよく起こります。

たとえば、ジャンは日本語 OS のコンピュータを使用しているとします。本人が ECO の [説明] フィールドに日本語のテキストを入力します。次に、ジムが英語の OS のコンピュータで Java クライアントを起動し、この ECO を表示させると、[説明] フィールドに入力された日本語テキストが崩れて (四角い空白が入って) 表示される場合があります。英語の OS では、日本語文字がサポートされていない場合があります (Windows の英語バージョンでは、日本語文字をサポートするには、Asian Language Pack をインストールする必要があります)。



## クラス

扱うトピックは次のとおりです。

■ ビジネス オブジェクトに Agile PLM クラスを設定する .....	39
■ Agile PLM クラス構成 .....	40
■ Agile PLM クラスを表示する .....	45
■ ライフサイクル フェーズをカスタマイズする .....	46
■ サブクラスを設定する .....	48
■ タブを設定する .....	52
■ タブの形式を変更する .....	54
■ 属性、ユーザー設定フィールド、および読み取りフィールド .....	61
■ 属性を定義する .....	65
■ 属性を設定する .....	70
■ サブクラスまたは会社ロゴに対しカスタム アイコンを使用する .....	73
■ オブジェクトおよびファイルへの簡易アクセス .....	75

この章では Agile PLM システムに組み込まれている定義済みビジネス クラスについて説明します。また、サブクラスの作成、自動採番ソースの割り当て、製品データのタブ付きウィンドウやフォーマット済みフィールドの配置の調整などを実行する方法についても説明します。

## ビジネス オブジェクトに Agile PLM クラスを設定する

[クラス] ノードは、Agile PLM のオブジェクトを分類するためのフレームワークを提供します。Agile PLM ユーザーが作成するすべてはオブジェクトです。管理者は、ビジネス オブジェクトの新規タイプを定義するか、またはデフォルト クラスやサブクラスを変更することができます。

**注意** Agile PLM で利用可能なデフォルト クラスは、あなたの会社が購入したライセンスにより異なります。利用できないクラスは、[クラス] ページでは赤いタイプで表示されます。

各クラスは、アクション (ビジネス プロセス) の種類やエンティティ (ビジネス オブジェクト) の種類を表します。各クラスには少なくとも 1 つのデフォルト サブクラスがあります。Agile PLM で作成されるすべてのオブジェクトは、サブクラスのインスタンスです。

Agile PLM の設定を開始する前に、企業で必要とされるオブジェクトのタイプを考慮する必要があります。その上で、必要条件に応じて Agile PLM を調整することができます。たとえば、会社が製造または購入する部品の種類を整理するために、[部品] クラスに新しいサブクラスを作成することが考えられます。

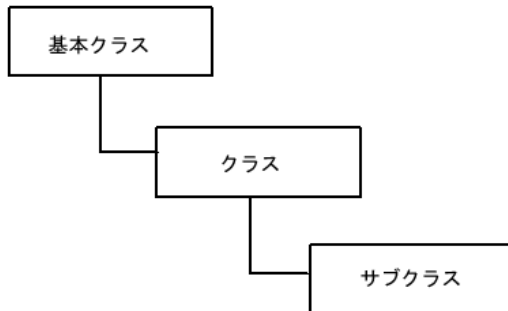
Agile PLM オブジェクト フレームワークはそのまま使用できますが、以下の方法でカスタマイズすることもできます。

- 追加サブクラスの作成
- 必要に応じてサブクラスやクラスを変更
- 必要に応じて、クラス (ページ 2) とサブクラス (ページ 3) の新規属性を作成

- 属性のプロパティを変更
- 属性やタブを表示または非表示
- テーブル列またはフィールドの並べ替え

## Agile PLM クラス構成

Agile PLM クラスには次の 3 つのレベルがあります。



- 基本クラス - 最も高いレベルのオブジェクトです。基本クラスは、クラスの親オブジェクトです。基本クラスの作成や削除はできませんが、名前を変更することはできます。提供された基本クラスには、ユーザー、アイテム、変更などの例があります。
- クラス - Agile PLM における組織のプライマリ レベルです。メインクラスとも呼ばれています。基本クラスの全般プロパティとプロセス拡張を継承しています。クラスは、サブクラス作成のためのフレームワークの整理です。クラスの作成や削除はできませんが、名前を変更したり、無効化することはできます。提供されたクラスには、部品、設計変更、設計変更依頼クラスなどの例があります。
- サブクラス - 親クラスのすべてのプロパティと属性を継承しています。サブクラスは Agile PLM で特定のビジネス オブジェクトを説明する情報やデータを整理します。サブクラスは名前を変更することができます。[ユーザー]、[自動転送依頼]、[見積依頼]、[RFQ 回答]、[標準レポート] を除くすべてのクラスに、サブクラスを作成することができます。[アイテム]、[変更]、[ファイル フォルダ] の基本クラスから降下されたサブクラスを除き、すべてのサブクラスを削除または無効化することができます。提供されたサブクラスの例には、[ユーザー]、[部品]、[ドキュメント]、[設計変更]、[設計変更依頼] などがあります。

**注意** クラス (特に基本クラス) の名前を変更する前に、Agile PLM で提供されているデフォルト クラスを熟知してください。クラス名は固有でなければなりません。

## ルーティング可能/不可能なオブジェクト

各クラスは、特定のプロセスまたはエンティティの種類を表します。

- ルーティング可能なオブジェクトは、変更管理プロセスにおける変更、転送、製品サービス依頼などのプロセスを表すクラスから作成されます。これらのオブジェクトは、承認またはその他の入力を行う目的で、ワークフローを介して Agile PLM ユーザーに送信できます (109 ページの「[ワークフロー](#)」を参照してください)。

- 送信不可能なオブジェクト (ルーティング不可能なオブジェクト) は、部品、拠点、RFQ、ユーザー、価格、レポート、または [項目] を表すクラスから作成されます。これらのオブジェクトには、進行状況を示すためにライフサイクル フェーズを介してフラグを付けることができます (46 ページの「[ライフサイクル フェーズをカスタマイズする](#)」を参照してください)。ただし、ルーティング不可能なオブジェクト (特に部品とドキュメント) は、ワークフローを介した情報収集プロセスによって変更できることに注意してください。それらは、変更命令または設計変更依頼などのルーティング可能なオブジェクトを介して作成されます。

**注意** ファイル フォルダ クラスにはデフォルトの編集不能なワークフローがありますが、ステータスは「レビュー」のみで他のステータスはありません。このワークフローによって、ファイル フォルダ オブジェクトに [送信スリップ] タブが表示されます。このタブでは、承認者によるサインオフおよびファイル フォルダへのコメントが可能です。しかし、ファイル フォルダ オブジェクトにはライフサイクル フェーズもあり、ルーティング不可能とみなされます。

## インストールされる Agile PLM クラス、基本クラス、およびサブクラス

会社によっては、クラスノードのオブジェクト タイプ リストの一部に対するサーバ ライセンスを購入している可能性があります。会社がサーバ ライセンスを購入していないクラスは赤いタイプで表示されます ([管理] > [日付とワークフロー設定] > [クラス])。

次の 2 つの表は Agile PLM にインストールされた可能性があり、ルーティング可能/不可能の違いによって分類された、すべてのオブジェクト タイプの一覧を示します。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
ルーティング可能なオブジェクト：ルーティング不可能なオブジェクトに変更を送信または推奨する手段。これらのクラスには、変更に対する他のユーザーからの承認を得るためのデフォルトのワークフローがあります。これらのクラスからのオブジェクトは、承認なしに変更できます。			
変更	設計変更	設計変更 (ECO)	アイテムを変更するディレクティブ。アイテムのリビジョンを進めます。
	設計変更依頼	設計変更依頼 (ECR)	アイテムへの変更の依頼。
	期限付き設計変更クラス	期限付き設計変更	あるアイテムを一時的に別のアイテムに置き換えるディレクティブ。
	製造元変更	製造元変更 (MCO)	製造元、製造元部品番号などの AML (承認製造元リスト) データの変更。
	価格変更	価格変更 (PCO)	公表価格を変更するディレクティブ。公表価格のリビジョンを進めることができます。
	拠点毎変更	拠点毎変更 (SCO)	特定の拠点の BOM および AML 情報への変更。
	出荷停止クラス	出荷停止	アイテムを出荷停止/使用停止にするディレクティブ。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
デクラレーション	サブスタンスのデクラレーション	サブスタンスのデクラレーション	含有基準内のそれぞれのサブスタンスの適合性情報を検索します。
	部品のデクラレーション	部品のデクラレーション	部品レベルの適合性情報とその他の組成見出しレベル情報 (製造元パラメータ) を検索します。
	JGPSSI デクラレーション	JGPSSI デクラレーション	JGP 標準に従って適合性情報 (重量) を検索します。
	均質材のデクラレーション	均質材のデクラレーション	均質材レベルで BOS (含有物質明細) と適合性情報の部品に関する部品の完全な内訳を検索します。
	適合のサプライヤ デクラレーション	適合のサプライヤ デクラレーション	顧客と政府機関の規格への適合性を検索します。
	IPC 1752-1 デクラレーション	IPC 1752-1 デクラレーション	電子製品のジョイント インダストリ ガイドライン (JIG) マテリアル組成デクラレーション。
	IPC 1752-2 デクラレーション	IPC 1752-2 デクラレーション	電子製品の均質材組成デクラレーション。
パッケージ	パッケージ	パッケージ	パートナーと共有するデータのパッケージ。
製品サービス依頼	PR (問題レポート)	問題レポート	アイテムまたは製品の品質問題。
	不具合レポート	不具合レポート	アイテムまたは製品の品質適合問題。
プログラム	アクティビティ	プログラム、フェーズ、タスク	Product Portfolio Management におけるプロジェクト計画のコンポーネント。アクティビティは、リソースの割り当て先となる時系列ベースのオブジェクトです。
	ゲート	ゲート	Product Portfolio Management におけるプロジェクト管理のマイルストーン。ゲートは、製品開発プロセスの PLM 間の成果物を識別し、プログラムのエグゼクティブ レビューを実施できるようにします。
品質変更依頼	是正予防処置	是正・予防処置	是正処置と予防処置の依頼。
	検証	検証	ビジネス プロセスの事前レビュー。
転送依頼	自動転送	自動転送	ワークフローによって自動的に開始されるプロダクト レコードの転送または公表。
	コンテンツ転送	コンテンツ転送 (CTO)	手動で開始されるプロダクト レコードの転送または公開。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
ルーティング不可能なオブジェクト：これらのクラスのオブジェクトは、ワークフローを介して Agile PLM ユーザーに送信されません。ただし、一部のクラスのオブジェクトは、他のユーザーの承認を得るためにワークフローをユーザーが提出する (ルーティング可能なクラスから) ことにより変更できます。			
顧客	顧客	顧客	その企業のクライアント。
ディスカッション	ディスカッション	ディスカッション	スレッドで表示される非公式なダイアログ。
ファイルフォルダ	ファイル フォルダ	ファイル フォルダ マークアップ	ファイルまたは URL を含むオブジェクト。このクラスには、履歴レポート ファイル フォルダを除くすべてのファイル フォルダ オブジェクトが含まれます。
アイテム	ドキュメント クラス	ドキュメント	規格、設計図、製造データなど。
	部品	部品	社内で製造された部品。または、製造元あるいはサプライヤから供給され社内部品番号が割り当てられた部品。
製造元	製造元	製造元	適格な製造元。
製造元部品	製造元部品	製造元部品	製造元によって提供される部品。
部品グループ	部品グループ	部品分類 部品ファミリ	質量または組成情報などのプロパティを共有するその他の部品 (アイテムまたは製造元部品) のコンテナ。  Agile PLM の以前のリリースで [部品分類] という名前の付いたオブジェクト。
価格	見積履歴	見積履歴	見積依頼回答の入札価格を分類します。PCO による改訂はできません (前述の表の「変更」グループを参照)。
	公表価格	公表価格、契約	組織の製品の価格を整理します。PCO によって改訂できます (前述の表の「変更」グループを参照)。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
レポート	標準レポート	管理者レポート、標準レポート	簡単に使用可能な管理者向けのレポート (管理者レポート) とユーザー向けのレポート (標準レポート) には、製品、ソーシング、品質、プロセス、パーソナル、およびグローバルの各レポートが含まれます。
	カスタム レポート	カスタム レポート	社内で作成し使用するレポート。
	外部レポート	外部レポート	外部で作成された Agile PLM をレポートします。
見積依頼	見積依頼	見積依頼	見積依頼。ソーシング プロジェクトから収集され、正式な入札のためにサプライヤに送付されます。
見積依頼 回答	見積依頼回答	見積依頼回答	入札 (自社の見積依頼に対するサプライヤからの回答)。
拠点	拠点	拠点	社内の製造拠点、または会社と緊密な提携関係にある製造拠点。
ソーシング プロジェクト	ソーシング プロジェクト	ソーシング プロジェクト	RFQ 作成の準備作業および複数の RFQ 間での分析機能。
含有基準	含有基準	含有基準	禁止されているサブスタンス (または関連のサブスタンス) およびそのしきい値のリスト。
サブスタンス	サブスタンス	サブスタンス	アイテム、製造元部品、部品ファミリの組成において使用される単一の化学元素。
	マテリアル	マテリアル	複数のサブスタンスからなる化学複合物、サブスタンス。
	サブパート	サブパート	コンポーネントのサブユニット。適合性情報を収集する均質材レベルを取得する際に使用されます。
	サブスタンス グループ	サブスタンス グループ	法案が関心を持つ基本サブスタンス、たとえば、[鉛および鉛複合物] を含む複数サブスタンスのグループ。

基本クラス	クラス	サブクラス	説明
サプライヤ	サプライヤ	ブローカー、ディストリビュータ、部品メーカー、受託製造業者、メーカー代表者	(デフォルトのサブクラスを使用する) PCM および PG&C ソリューションで使用される製造元部品の適格サプライヤ。
ユーザー	ユーザー	ユーザー	Agile PLM システムを使用する個人。
ユーザーグループ	ユーザー グループ	ユーザー グループ	Agile PLM システムを使用するユーザーのグループ (部門、チーム、拠点固有のグループなど)。

## オブジェクト タイプを無効にする

基本クラスを無効にすると、その子クラスおよびサブクラスは自動的に無効になります。クラスを無効にすると、その子サブクラスは無効になります。基本クラス、クラス、またはサブクラスが無効の場合、Java クライアントまたは Web クライアントのユーザー インターフェースにおいて表示されません。無効になったクラスが利用不可能となる例としては、[作成] メニューや検索メニューがあります。クラスが無効の場合、既存の検索および条件は削除および修正できません。無効にされたオブジェクト タイプの既存のオブジェクトは、Agile PLM データベース内に残ります。

以下の基本クラスを無効にすることはできません (これらの子クラスやデフォルトのサブクラスも同様です)。

- アイテム
- 変更
- ユーザー
- ファイル フォルダ

## Agile PLM クラスを表示する

**Agile PLM クラスまたはサブクラスを表示するには:**

1. [管理] タブで、[データ設定] の [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. 表示するクラスまたはサブクラスをダブルクリックします。

3. ここで、[ユーザー インターフェース タブ] タブをクリックします。行をダブルクリックすると、そのタブの情報が表示されます。

[一般情報] タブは UI タブの名前と説明、および表示状態を示します。

1 つのタブを開くと、ドロップダウン リストからこのオブジェクトの他のタブに切り替えることができます。

## ライフサイクル フェーズをカスタマイズする

ライフサイクル フェーズは、オブジェクトがルーティング不可能な、すなわちワークフローに従っていないクラスの有効なフェーズを示します。アイテム、拠点、製造元、製造元部品、価格、ソーシング プロジェクト、見積依頼、見積依頼回答、サプライヤ、顧客、価格、部品分類、含有基準、サブスタンス、ファイル フォルダには、すべてライフサイクル フェーズがあります。

基本クラス レベルのライフサイクル フェーズは、クラスとサブクラスにより継承されています。ライフサイクル スタンプは、自動的に作成されます。その際には、ユーザーがライフサイクル フェーズごとに指定した名前と色が使用されます。

## ライフサイクル フェーズを変更する

次の基本クラスでライフサイクル フェーズを変更することができます。

- 部品分類
- 顧客
- ファイル フォルダ
- アイテム
- 製造元部品
- 製造元
- 価格
- 含有基準
- サブスタンス
- サプライヤ

---

**注意** アイテムの「プレリミナリ」ライフサイクル フェーズは削除したり、名前を変更することはできません。拠点、ソーシング プロジェクト、見積依頼、および見積依頼回答の各クラスのオブジェクトには読み取り専用のライフサイクル フェーズがあり、名前を変更したり削除したりすることはできません。

---

### [ライフサイクル フェーズ] の設定を変更するには:

1. 作業を行う基本クラスを選択してから、[ライフサイクル フェーズ] タブを選択します。[ライフサイクル フェーズ] ウィンドウが表示されます。
2. 変更するライフサイクル フェーズをダブルクリックします。
3. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン リストから選択します。
4. 入力完了したら、[保存] をクリックします。



## ライフサイクル フェーズを追加する

基本クラス、クラス、サブクラスにライフサイクル フェーズを追加することができます。

**ライフサイクル フェーズを追加するには:**

1. 作業を行うクラスを選択してから、[ライフサイクル フェーズ] タブを選択します。[ライフサイクル フェーズ] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[ライフサイクル フェーズの定義] ダイアログ ボックスが開きます。
3. ライフサイクル フェーズの名前と説明を入力します。名前は 29 文字以内で入力してください。
4. [有効] フィールドで、ドロップダウン リストから [はい] または [いいえ] を選択します。
5. たとえば、[BOM ルールにライフサイクル フェーズを追加] という追加フィールドがあります。「可」、「不可」、「警告」(デフォルト) を選択します。  
  
[不可] を選択した場合、ユーザーはこのライフサイクル フェーズに現在あるアイテムをアイテムの BOM テーブルに追加できなくなります。
6. 操作が完了したら [OK] をクリックします。

---

**注意** ライフサイクル フェーズに別の色を選択する場合は、該当するライフサイクル フェーズ タブで色を変更します。

---

## ライフサイクル フェーズを削除する

ライフサイクル フェーズは、作成されたレベルからのみ削除することができます。クラスからライフサイクル フェーズを削除すると、このクラスから継承したサブクラスすべてからも削除されます。たとえば、アイテムの基本クラスでライフサイクル フェーズを作成すると、このアイテムを後から基本クラスで開き、削除することができます。このライフサイクル フェーズは、[部品] および [ドキュメント] クラス、そして [部品] および [ドキュメント] サブクラスからも削除されます。

**ライフサイクル フェーズを削除するには:**

1. 作業を行うクラスを選択してから、[ライフサイクル フェーズ] タブを選択します。[ライフサイクル フェーズ] ウィンドウが表示されます。
2. 削除するライフサイクル フェーズを選択します。
3. [削除] ボタンをクリックします。
4. ライフサイクル フェーズの削除の確認を求めるメッセージで [OK] をクリックします。  
  
ライフサイクル フェーズは削除され、Agile PLM で選択できなくなります。

Agile PLM でアイテムのリリースにすでに使用されたライフサイクル フェーズを削除した場合、そのフェーズは表示されますが使用することはできません。

---

**注意** アイテムの「プレリミナリ」ライフサイクル フェーズは削除することはできません。

---

## サブクラスを設定する

Agile PLM でオブジェクトを作成する際には、まず ECO、部品、コンデンサなどのサブクラスを指定します。サブクラスは、[クラス] ノードで作成、定義されます。定義された各 Agile PLM クラスには、サブクラスが 1 つあります。すべてのクラスにサブクラスを追加で作成できます。たとえば、部品クラスには、コンデンサ、レジスタ、ダイオードなどのサブクラスを作成することができます。

デフォルトのサブクラスを使用することもできますが、新規のサブクラスを定義したり名前を変更したりすることもできます。

以下のオブジェクトのいずれかを作成する目的でサブクラスが管理ノードから使用されていないかぎり、そのサブクラスを削除できます。

- 検索条件
- Java クライアントまたは Web クライアントのオブジェクト
- 権限マスク

---

<b>注意</b>	以下のクラスの新規サブクラスを作成することはできません。
-----------	------------------------------

---

- ユーザー クラス
- 自動転送クラス
- 見積依頼クラス
- 見積依頼回答クラス
- 標準レポート クラス

**重要** Agile PLM で新規サブクラスを設定するには、慎重な計画が必要です。新規サブクラスを一時的な目的で使用しても、システムから削除するのは容易ではありません。全体的な計画を立てずに新規サブクラスを設定すると、すぐに「やり直し」になる可能性があります。組織のニーズにあわせた全体的な計画を策定する際は、デフォルトのクラスおよびサブクラスを使用して Agile PLM オブジェクトをよく理解することをお勧めします。

## 作業を開始する前に

作業を開始する前に

新規のサブクラスを作成する前に次の内容について考慮してください。

- サブクラスを作成する対象の Agile PLM クラスは何か。
- 新規サブクラスにどのような名前を付けるか。サブクラス名は固有であり同じ Agile PLM システムでは一度しか使用できません。
- そのサブクラスに固有の製品データを追跡する必要があるか。必要がある場合、そのサブクラスの [ユーザー定義 2] タブを設定する必要があります。
- 新規サブクラスの [ユーザー定義 2] タブを作成する場合は、[ユーザー定義 2] タブを変更できるようにユーザーの役割と権限を調整する必要があります。

サブクラスで自動採番を使用する場合、次の内容について考慮してください。

- ユーザーに新規のサブクラスへの手動による番号の割り当てを許可するか。
- サブクラスに新規の自動採番ソースを作成するか。それとも、既存の自動採番ソースを使用するか。
- 既存の自動採番ソースを使用する場合、どれを使用するか。

## サブクラスのプロパティを表示する

サブクラスの設定は、プロパティを表示して確認することができます。たとえば、設計変更のサブクラスに割り当てられている番号ソースを確認するには、管理者でサブクラスのプロパティを表示します。

**サブクラスのプロパティを表示するには**

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. 表示するサブクラスの名前をダブルクリックします。

サブクラスのプロパティが [一般情報] タブに表示されます。


## 自動採番ソース プロパティを変更する

自動採番を使用できるサブクラスには、自動採番ソース プロパティがあります。製造元、製造元部品、および拠点サブクラスでは自動採番を使用しないため、自動採番ソース プロパティはありません。

Agile PLM 管理者はサブクラスの自動採番ソース プロパティを変更して、以下の操作を実行できます。

- サブクラスの自動番号割り当てを必要にし、手動番号割り当てを禁止する
- サブクラスに 1 つまたは複数の自動採番ソースを割り当てる
- サブクラスから自動採番ソースの割り当てを削除する。

### サブクラスで使用する自動採番ソースを変更するには:

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. [自動採番] フィールドの横にある  をクリックします。[リスト選択者] ダイアログ ボックスが表示されます。
4. 番号ソースを [選択肢] リストから [選択済み] リストに移すには、番号ソースを選択してから右矢印をクリックします。番号ソースをダブルクリックしても移動できます。  
複数の番号ソースを選択することができます。
5. [OK] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。
6. 新規の自動採番 (自動採番の自動配列で提供されるものよりもカスタマイズされたもの) を作成する場合は、[新規自動採番] ボタンをクリックしてダイアログ ボックスの指示に従ってください。詳細は、96 ページの「[新しい自動採番ソースを作成する](#)」を参照してください。
7. ユーザーが手動でオブジェクト番号を入力することを禁止するには、[自動採番が必要] のドロップダウン リストで [いいえ] を選択します。詳細は、次のセクションを参照してください。
8. [自動生成] ドロップダウン リストで [はい] または [いいえ] を選択します。
9. [保存] をクリックします。

## 手動番号割り当てを禁止する

特定のサブクラスに自動採番を要求すると、ユーザーによる手動の番号入力を禁止できます。自動採番が可能であれば、そのサブクラスに自動採番を要求できます。

---

**注意** 製造元やユーザーなど、複数の Agile PLM サブクラスは自動採番を許可していません。

---

### 特定のサブクラスの手動番号割り当てを禁止するには

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. [自動採番が必要] ドロップ ダウン リストから [はい] を選択します。
4. [保存] をクリックします。

## サブクラス名または説明を変更する

サブクラスの名前は変更することができます。Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成にすでに使用されているサブクラスの名前を変更すると、既存のオブジェクトのサブクラスの名前は新しい名前を反映して変更されます。サブクラスに別の説明を入力することもできます。説明はオプションです。

**注意** すべての文字は Agile PLM でサポートされており、Agile クライアントにおいて問題はありませんが、サブクラスの名前を変更したり、作成する場合は、SDK に書かれた統合やカスタム アプリケーションで問題が生じる可能性があるため、次の文字の使用は避けてください。

, (カンマ)、. (ピリオド/ドット)、: (コロン)、; (セミコロン)、= (イコール記号)

サブクラスの名前を変更するには:

**[データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。**

1. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
2. [名前] および [説明] フィールドに新しい名前や説明を入力します。
3. [保存] をクリックします。

サブクラスの名前がサブクラスのすべてのオブジェクトで変更されます。Java クライアントでは、新規の名前が [新規オブジェクト] ダイアログ ボックスの [タイプ] ドロップダウン リストの選択項目として表示されます。Web クライアントでは、新規の名前が作成ウィザードの [サブクラス] ドロップダウン リストの選択項目として表示されます。

## 拠点別 BOM のプロパティを変更する

サブクラスのプロパティのウィンドウには、[拠点別の BOM] というプロパティがあります。このプロパティの値は、[可] または [不可] です。

- [可] - BOM の拠点固有の部分にサブクラスを追加できます。
- [不可] - BOM の拠点固有の部分にサブクラスを追加できます。

このプロパティにより、部品サブクラスまたはドキュメント サブクラスを拠点別 BOM の一部にできるかどうかが決まります。

たとえば、「製造アイテム」サブクラスの拠点別 BOM のプロパティを [可] に設定し、「部品」サブクラスを [不可] に設定するとします。シンガポール拠点のユーザーは、BOM のシンガポール拠点固有のセクションにどの製造アイテムでも追加できますが、BOM のシンガポール拠点固有のセクションに部品を追加することはできません。グローバル ユーザーは、BOM のグローバル セクションに製造アイテムでも部品でも追加することができます。

新規に作成された部品サブクラスおよびドキュメント サブクラスのすべてについて、デフォルト値は、[可] です。

**サブクラスの拠点別 BOM のプロパティを変更するには:**


1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. プロパティを変更するサブクラスの名前をダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. [拠点別の BOM] フィールドで [可] または [不可] を選択します。[保存] をクリックします。

## 新規サブクラスを作成する

以下に示すのは、新規サブクラスを作成する手順です。49 ページの「[作業を開始する前に](#)」を参照してください。サブクラスをユーザーにリリースする前にテストを実行している間は、サブクラスを無効にしておいてください。

**新規サブクラスを作成するには:**

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. [新規サブクラス] ボタンをクリックします。[新規サブクラス] ダイアログ ボックスが開きます。
3. ドロップ ダウン リストからクラスを選択します。
4. [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力し、[有効] フィールドで [はい] または [いいえ] を選択します。サブクラス名には固有の名前を付ける必要があります。

5. [自動採番] フィールドの横にある  をクリックします。選択のダイアログ ボックスが表示されます。
6. 番号ソースを [選択肢] リストから [選択済み] リストに移すには、番号ソースを選択してから右矢印をクリックします。番号ソースをダブルクリックしても移動できます。  
複数の番号ソースを選択することができます。
7. [OK] をクリックして、ダイアログ ボックスを閉じます。
8. 新規の自動採番 (自動採番の自動配列で提供されるものよりもカスタマイズされたもの) を作成する場合は、[新規自動採番] ボタンをクリックしてダイアログ ボックスの指示に従ってください。(このタスクの詳細は、96 ページの「[新しい自動採番ソースを作成する](#)」を参照してください。)
9. ユーザーが手動でオブジェクト番号を入力することを禁止するには、[自動採番が必要] のドロップダウン リストで [いいえ] を選択します。(詳細は、50 ページの「[手動番号割り当てを禁止する](#)」を参照してください。)
10. [自動生成] ドロップダウン リストで [はい] または [いいえ] を選択します。
11. 手順 3 で部品クラスまたはドキュメント クラスを選択した場合は、[拠点別の BOM] を [可] または [不可] に設定します。(詳細は、51 ページの「[拠点別 BOM のプロパティを変更する](#)」を参照してください。)
12. すべての設定を指定したら、[OK] をクリックします。  
[クラス] ウィンドウのクラス名の下に新規サブクラスが表示されます。

**注意** 番号ソースは [自動採番] ノードで作成し設定します。手順については、92 ページの「[自動採番ソースについて](#)」を参照してください。

## サブクラスを削除する

保存された検索、オブジェクト、または再利用の条件の作成に使用されていないサブクラスは、削除することができます。

**役割を削除するには:**

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. 削除するサブクラスをダブルクリックします。サブクラスのプロパティのウィンドウが表示されます。
3. [削除] ボタンをクリックします。
4. 確認のダイアログ ボックスで、[OK] をクリックします。

[クラス] ウィンドウのクラス名の下にサブクラスが表示されなくなります。

**注意** 検索、オブジェクト、または再利用条件の作成に使用されたサブクラスを削除しようとする、そのオブジェクトがすでに使用されていることを示すメッセージが表示されます。

サブクラスを表示してから [アクション] メニューの [削除] を選択する方法でも、サブクラスを削除できます。

## タブを設定する

Agile PLM クライアントでユーザーがオブジェクトを開くと、タブ付きのページ、すなわちタブのウィンドウが表示されます。[クラス] ノードから、大部分のオブジェクトのタブを有効 (表示) または無効 (非表示) にすることができます。オブジェクトのタブの名前を変更することもできます。オプションの [ユーザー定義 1] タブと [ユーザー定義 2] タブを設定するには、タブが表示されるように有効にします。

大部分のオブジェクトのタブは非表示にできますが、以下のタブを無効にしたり非表示にしたりすることはできません。

- すべてのオブジェクト、特に
  - 変更、パッケージ、PSR、QCR、転送依頼、プログラムの [カバー ページ]。
  - すべての製造元、製造元部品、ユーザー、ユーザー グループ、拠点、顧客、ディスカッション、価格、レポートの [一般情報] タブ。
  - すべてのアイテムまたはファイル フォルダの [タイトル ブロック]。
- すべての変更の [対象アイテム] および PCO の [対象価格] タブ。
- すべての転送依頼の [選択されたコンテンツ] タブおよび [送信先] タブ – 実際に、ATO のタブは無効化または非表示にできません。
- ファイル フォルダの [ファイル] タブ (履歴レポート ファイル フォルダではない)。
- RFQ および RFQ 回答の [回答リスト] タブ。
- ディスカッションの [返信] タブ。
- プログラムの [チーム] タブと [ワークフロー] タブ。

タブに表示される属性を設定する場合、そのタブの設定ウィンドウにアクセスする必要があります。65 ページの「[属性を定義する](#)」を参照してください。

## [ユーザー定義 1] タブについて

たとえば、設計変更の追加情報を記録する必要がある場合、デフォルトで [ユーザー定義 1] タブと呼ばれる追加タブを有効化することができます。このタブは変更クラスのすべてのサブクラスの [カバー ページ] タブの次に表示されます。このタブにはデフォルト名の「ユーザー定義 1」を使用することも、固有の名前を付けることもできます。

**注意** Web クライアントでは、[ユーザー定義 1] の属性は [カバー ページ] タブの [ユーザー定義 1] という見出しの下に表示されます (カスタム タブ名は表示されません)。下方にスクロールすると、隠れている [ユーザー定義 1] の情報を表示できます。

## [ユーザー定義 2] タブについて

サブクラスに固有の追加情報を記録する必要がある場合、フォルトでは [ユーザー定義 2] タブと呼ばれる追加タブを有効化することができます。たとえば、コンデンサというサブクラスの [ユーザー定義 2] タブを設定し、「絶縁体」という名前のフィールド (必要に応じて複数のフィールド) を作成して、作成されているコンデンサ オブジェクトごとにユーザーが絶縁体についての情報を記録できるようにすることができます。このタブにはデフォルト名の「ユーザー定義 2」を使用することも、固有の名前を付けることもできます。

**注意** Web クライアントでは、[ユーザー定義 2] の属性は [カバー ページ] タブの [ユーザー定義 1] の属性の下で、[ユーザー定義 2] という見出しの下に表示されます (カスタム タブ名は表示されません)。下方にスクロールすると、隠れている [ユーザー定義 2] の情報を表示できます。

## タブを表示、非表示にする、または名前を変更する

クラスを表示、非表示、名前変更するなどして、Agile PLM クライアントの UI をカスタマイズすることができます。

**注意** [BOM] タブまたは [製造元] タブを非表示にすると、[BOM をレッドライン] タブと [製造元のレッドライン] タブのボタンも無効化されます。

タブの名前や表示/非表示は、サブクラス レベルでの設定によって決まります。たとえば、設計変更クラスで [ユーザー定義 1] タブの [名前] を「P2」、[表示] を「いいえ」に設定し、ECO サブクラスで [ユーザー定義 1] タブの [名前] を「ECO の P2」、[表示] を「はい」に設定した場合、Java クライアントまたは Web クライアントで [ユーザー定義 1] タブが表示され、[ECO の P2] という名前になります。

#### タブを表示、非表示、名前変更するには:

1. [クラス] ウィンドウで対象のタブを見つけてダブルクリックし、そのタブの設定ウィンドウを表示します。  
たとえば、[変更クラス] をクリックしてから [ユーザー インターフェース タブ] タブを表示し、[ワークフロー] をダブルクリックして、変更 [ワークフロー] タブの設定ウィンドウを表示します。
2. 必要に応じて、[一般情報] 設定タブに新しいタブ名を入力します。

新しい名前の付いたタブが Java クライアントに表示されます。Web クライアントでは、タブのデータは [カバー ページ] タブなどの、最初のオブジェクト タブに表示されます。

**注意** コンテンツ転送 (CTO) サブクラスの [ユーザー定義 2] タブの名前を変更しても、変更された [ユーザー定義 2] タブの名前はコンテンツ サービスのフィルタには表示されません。フィルタには常に [ユーザー定義 2] という名前が表示されます。

3. [表示] ドロップダウン リストから [はい] を選択し、Agile PLM クライアントでタブを表示します。
4. 変更が完了したら [保存] をクリックします。

**注意** [ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブを非表示にすると、そのタブで設定した属性はそれぞれ非表示にしないかぎり、Java クライアントまたは Web クライアントの検索の選択項目にはそのまま表示されます。60 ページの「[\[ユーザー定義 1\] タブまたは \[ユーザー定義 2\] タブを削除する](#)」を参照してください。

## タブの形式を変更する

各オブジェクト タブでは、2 つの異なる形式のうちの 1 つを使用して Agile PLM クライアントでデータを表示します。

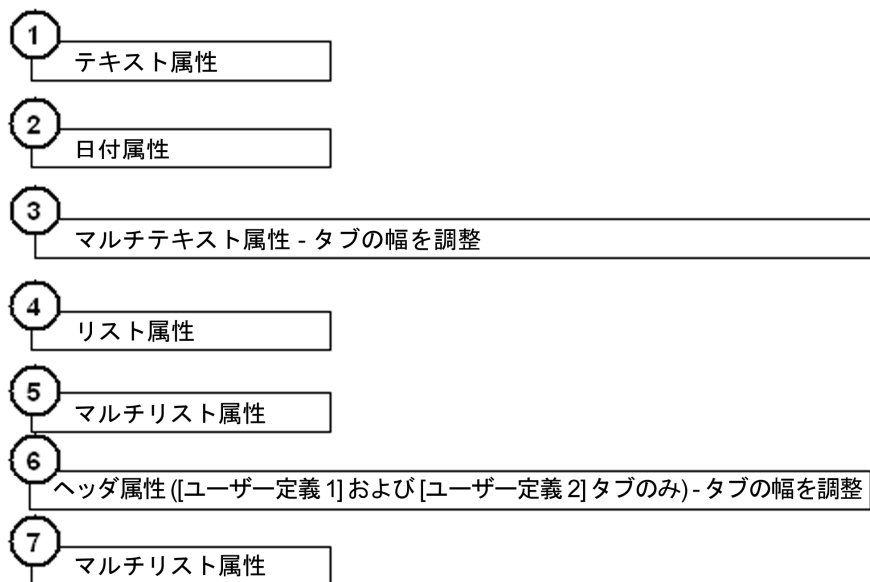
- フォーム形式 - 属性は行と列の形でタブに表示され、属性の順序に従って最小の番号から始まり、左から右、上から下の順になります。各属性フィールドにはラベルが付けられます。Web クライアントには 2 つの列があります。Java クライアントでは、列の数はオブジェクト ウィンドウのサイズに応じて変わります。
- テーブル形式 - 属性はテーブル形式でタブに表示されます。属性名はテーブルの列の見出しとして表示されます。

フォームとテーブルの両方において、オブジェクト タブに表示されるオブジェクトの属性の順序を変更できます。

### フォーム タブの属性の順序を変更する

Web クライアントでは、フォーム タイプのタブの属性は 1 つの列に表示されます。表示される順序を決定することができます。最小の番号の属性から始まり上から下に表示されます。マルチテキスト属性はタブの幅を調整します。ヘッダ属性は [ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] タブのみに表示されますが、これらもタブの幅を調整します。次の図に、Web クライアントのフォーム タブでの属性の表示方法の例を示します。





Java クライアントでは属性は行と列の形でタブに表示され、属性の順序に従って最小の番号から始まり、左から右、上から下の順になります。ユーザーがオブジェクト ウィンドウのサイズを変更すると、列の数も変わります。1 つのオブジェクト ウィンドウ内の列の数に関係なく、属性は常に属性順で表示されます。ヘッダ属性 ([ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2]) は、オブジェクト ウィンドウの幅を調整します。

#### フォーム タブの属性の順序を変更するには:

1. クラスの設定ウィンドウの [ユーザー インターフェース タブ] タブで希望のタブを見つけてダブルクリックし、そのタブの設定ウィンドウを表示します。  
たとえば、[変更クラス] をクリックしてから [カバー ページ] をダブルクリックして、設計変更の [カバー ページ] タブの設定ウィンドウを表示します。
2. [属性] タブをクリックします。
3. [表示属性の並べ替え] ボタンをクリックします。[属性の順序の定義] ダイアログ ボックスが表示されます。[表示] プロパティが「はい」に設定されているオブジェクトのタブの属性がすべて属性リストに表示されます。
4. 属性名をハイライト表示するには、その属性名をクリックします。
5. ハイライト表示された属性をリストで 1 つ上に移動するには、上矢印をクリックします。ハイライト表示された属性をリストで 1 つ下に移動するには、下矢印をクリックします。
6. 希望の順序になるまで、リスト内での属性のハイライト表示と上下移動を続けます。
7. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

指定された表示順に並び替えられた属性が [属性] 設定タブに表示されます。

順序の変更を確認するには、Java クライアントまたは Web クライアントでそのタブが表示されるオブジェクトを開きます。タブをクリックしてフォームまたはテーブルを表示し変更を確認します。

## テーブル タブの属性の順序を変更する

Web または Java クライアントのテーブル タイプのタブでは、属性はテーブルに表示されます。属性名が各列のテーブル見出しになります。フォーム タブと同じように、テーブル タブの属性の順序を変更します。

### [ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブを設定する

Java クライアントの追加タブを作成することができます。追加のタブが有効になっている場合、それらは常に最初のタブまたは 2 番目のタブの後ろに表示され、デフォルトでは [ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] という名前になっています。タブ名は必要に応じて特定の名称に変更できます。

**注意** Web クライアントでは、[ユーザー定義 1] と [ユーザー定義 2] の情報は、[カバー ページ] タブでカバー ページの情報の下に表示されます。この情報を表示するには、下方にスクロールします。

[ユーザー定義 1] タブが設計変更クラスなどのオブジェクトのクラス全体に関する補足情報を記録するのに対し、[ユーザー定義 2] タブは ECO やコンデンサなどの個々のサブクラスに関する情報を記録します。

次のセクションでは、[ユーザー定義 1] タブのユーザー作成機能について説明します。

### [ユーザー定義 1] タブのユーザー作成属性について

[ユーザー定義 1] タブには、作成権限 (読み取り権限ではない) を持つユーザーがオブジェクトを作成するユーザー作成属性があります。[ユーザー作成] リストに名前のあるユーザーは、作成した保留中またはプレリミナリのオブジェクトを開いて表示することもできます。

設計変更などの、オブジェクトのクラスのユーザー作成機能を有効にするには、そのクラスの [ユーザー定義 1] タブでユーザー作成属性を表示状態にする必要があります。この属性は、タブの [ユーザー作成] での名前の表示、および [条件] ノードでの条件の作成に使用できます。

たとえば、読み取り権限のサブクラスの条件を「ユーザー作成、等しい、\$USER」に設定すると、現在のユーザーがオブジェクトの作成者である場合は権限マスクが有効になります。ユーザー作成の条件の詳細は、219 ページの「[ユーザー作成条件を適用する](#)」を参照してください。

## [ユーザー定義 1] タブと [ユーザー定義 2] タブを設定するためのガイドライン

[ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブの設定には、2 つの段階があります。このセクションでは、この 2 つの段階のプロセスの概略を示してプロセスの各手順について詳しく説明します。96 ページの「[作業を開始する前に](#)」も参照してください。

[ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブを設定するための 2 つの段階の要約を以下に示します。

### 第 1 段階 : [ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブの属性を設定する

1. タブを表示状態にし名前を付ける。
2. 属性を表示状態にし名前を付ける。
3. テキスト属性に長さプロパティを割り当てる。
4. ドロップダウン リストやデフォルトなど、他の属性のプロパティを割り当てる。

## 第 2 段階: タブを設定する

属性の順序を設定する。

次のセクションでは、[ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブを作成するための手順を詳しく説明します。

### 第 1 段階 : [ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブの属性を設定する

[ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブを設定する第 1 段階は、以下のとおりです。

- タブを表示状態にし名前を付けます。この作業は、[ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] の [一般情報] 設定タブから行います。手順については、53 ページの「[タブを表示、非表示にする、または名前を変更する](#)」を参照してください。
- タブに表示させる属性を選択して属性を表示状態にし、フィールドや用途を示す名前を付けます。この作業は、[ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] の [属性] 設定タブから行います。

---

**注意** 属性の名前は、Java クライアントまたは Web クライアントでの検索条件です。属性に明確で固有な名前を付けると、Agile PLM クライアントでの検索を効率よく行うことができます。システムが稼動状態に入ってから属性の名前を変更すると、既存の検索に影響します。

---

## 作業を開始する前に

作業を開始する前に

新しいタブを設定する前に次の内容について考慮してください。

- Agile PLM クラス全体に対する追加のタブ ([ユーザー定義 1]) を作成するか、特定のサブクラスに対するタブ ([ユーザー定義 2]) を作成するか。  
[ユーザー定義 2] タブを作成する場合、ユーザーに特定のサブクラスでの属性の変更を許可する作成権限マスクが必要です。
- Agile ChangeCAST で情報を ERP システムに転送するか。その場合、転送する情報は [ユーザー定義 1] タブに記録する必要があります。[ユーザー定義 2] タブの情報は ChangeCAST では転送できません。
- タブにどのような名前を付けるか。
- タブに表示する属性はどれか。
- 名前、ドロップダウン リストの値、デフォルト値、テキスト フィールドの形式など、各属性のプロパティはどのように設定するか。66 ページの「[属性のプロパティを定義する](#)」を参照してください。
- Web クライアントでタブに各フィールドをどのように配置 (見出しの下で) するか。
- 各テキスト フィールドの長さの条件 (文字数) はどのようにするか。
- タブ順序、つまりユーザーが Tab キーを押したときにフィールドが有効になる順序はどのようにするか。(これは属性の順序によって決まります。)

属性の詳細は、66 ページの「[属性のタイプについて](#)」を参照してください。

### タブを表示状態にし、使用する属性を設定するには

1. タブを表示状態にし名前を付けます。手順については、53 ページの「[タブを表示、非表示にする、または名前を変更する](#)」を参照してください。
2. 希望の属性を見つけ、ダブルクリックして設定ウィンドウを開きます。  
手順の詳細は、71 ページの「[属性を定義する](#)」を参照してください。[ユーザー定義 1] タブの属性に対しては、[設計変更] などのクラスをダブルクリックします。[ユーザー定義 2] タブの属性に対しては、[ECO] などのサブクラスをダブルクリックします。
3. 各属性の新しい名前を入力します。
4. 属性を表示状態にします。[表示] のドロップダウン リストから [はい] を選択します。
5. 各属性タイプに適切なプロパティを設定します (66 ページの「[属性のプロパティを定義する](#)」を参照してください)。
  - [リスト] と [マルチリスト] 属性には、リスト選択項目を定義します (83 ページの「[リストを設定する](#)」を参照してください)。
  - [テキスト] と [マルチテキスト] 属性には、[最大文字数] と [含む文字] プロパティを設定します。
  - [数値] 属性には、[最小値]、[最大値]、および [スケール] プロパティを設定します。

- 見出し属性に対しては見出し名を入力します (**注意:** 見出しは Web クライアントでのみ使用されます)。
  - [日付] 属性については、カレンダー ユーティリティを使用して [デフォルト値] 日付を設定します。
  - [通貨] 属性については、[デフォルト値] を設定します。
6. 該当する場合は、各属性に対してデフォルト値を設定します。(72 ページの「[デフォルト値を設定する](#)」を参照してください。)
  7. 属性の設定が完了したら、[保存] をクリックします。

[属性] タブで [ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] タブの属性の定義が完了したら、属性の順序を定義してタブの実際の表示方法を設定します。

## 第 2 段階: タブを設定する

[ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] タブに表示する属性を選択し、そのプロパティを設定したら、タブのフィールドを配置する必要があります。そのためには、[属性] 設定タブの [表示属性の並べ替え] ボタンを使用します。

**注意** 属性の順序設定の詳細は、54 ページの「[フォーム タブの属性の順序を変更する](#)」を参照してください。

### タブに表示される属性の順序を設定するには

1. [表示属性の並べ替え] ボタンをクリックします。[属性の順序の定義] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. 属性名をハイライト表示するには、その属性名をクリックします。
3. ハイライト表示された属性をリストで 1 つ上に移動するには、上矢印をクリックします。ハイライト表示された属性をリストで 1 つ下に移動するには、下矢印をクリックします。
4. 希望の順序になるまで、リスト内での属性のハイライト表示と上下移動を続けます。
5. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

### フィールドのタブの順序

タブ順番とは、ユーザーが Tab キーを押したときに Agile PLM クライアントの [ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブのフィールドが有効になる順序をいいます。

フィールドのタブ順序は、前述の属性の順序によって決まります。

### 見出し属性を使用する

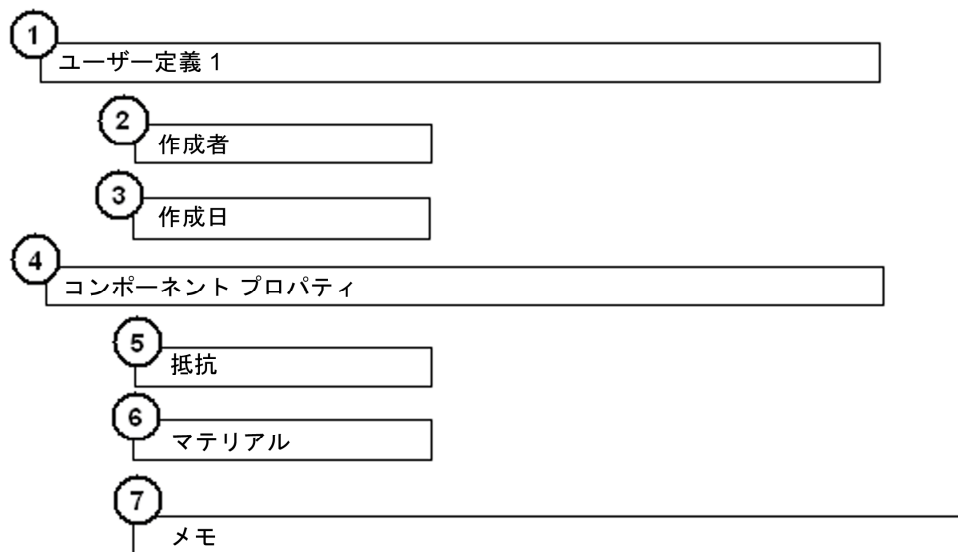
Java クライアントでは、[ユーザー定義 1] タブおよび [ユーザー定義 2] タブとして実際のタブが表示されます。しかし、Web クライアントでは、[ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] の情報が、最初のオブジェクト タブ ([カバー ページ]、[タイトル ブロック]、[一般情報] タブなど) に表示されます。[ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] の情報があるオブジェクトを表示するときは、下方にスクロールして情報を表示します。たとえば、[ユーザー定義 1] の情報は [カバー ページ] の情報の下に表示されます。[ユーザー定義 2] の情報は [ユーザー定義 1] の情報の下に表示されます。

Web クライアントでは、最初のタブの追加情報をわかりやすくするために、[ユーザー定義 1] タブと [ユーザー定義 2] タブには、それぞれ 10 個の見出し属性があります。見出し属性を表示状態にし、意味のある名前を付けます。次に、その名前を属性順リストに配置し、後続の属性のグループが記述されるようにします。

たとえば、[ユーザー定義 1] の属性順リストは以下のように設定できます。

属性順リスト	属性のタイプ
ユーザー定義 1	見出し 01
作成者	作成者
作成日	日付 01
コンポーネント プロパティ	見出し 02
抵抗	テキスト 01
マテリアル	リスト 01
メモ	マルチテキスト 10

カバー ページの情報に続き、Web クライアントでは以下のような形式で属性が表示されます。Java クライアントでは、[ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] の各属性（見出し属性も含む）が、[ユーザー定義 1] タブおよび [ユーザー定義 2] タブに表示されます。



## [ユーザー定義 1] タブまたは [ユーザー定義 2] タブを削除する

[表示] プロパティを [いいえ] に変更することにより、Java クライアントと Web クライアントから [ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] タブを効果的に削除することができます。この変更は、[タブ] ノードおよびタブに対して定義された各 [ユーザー定義] の属性で行う必要があります。属性の [表示] プロパティを [いいえ] に変更しないかぎり、タブは Java クライアントまたは Web クライアントの検索フォルダに表示されます。

## 属性、ユーザー設定フィールド、および読み取りフィールド

この章を最初から順に通読している人にとって、「属性」という用語はすでに珍しい用語ではありません。このセクションでは、65 ページの「[属性を定義する](#)」で詳細を説明する前に、次の 2 種類の属性について紹介します。ユーザー定義フィールドと読み取り属性。

Agile PLM クライアントでユーザーがオブジェクトを開くと、タブ付きのウィンドウが表示されます。これらのフィールドを属性といいます。これらの属性が各 Agile PLM クラスでどのように表示されるかは、[クラス] ノードで定義します。

Agile PLM クラスに定義する個々のフィールドは、そのクラスのすべてのサブクラスのタブに表示されます。たとえば、部品クラスに定義した部品カテゴリは、コンデンサ、レジスタ、ダイオードなどのサブクラスの部品カテゴリの一部となります。さらに、Agile PLM クラスに [ユーザー定義 1] タブという追加のタブを作成すると、タブとその属性はクラス内の各サブクラスにも表示されます。

各サブクラスには、それぞれ固有のフィールドを定義する [ユーザー定義 2] タブ用の設定ウィンドウがあります。これらのフィールドは、そのサブクラスの [ユーザー定義 2] タブにのみ表示されます。

### ユーザー定義のユーザー設定フィールド

Agile PLM クラスの属性は、名前変更やカスタマイズの面で柔軟性が高いため、「ユーザー設定フィールド」と呼ばれます。すべてのクラスおよびサブクラスに無限数の属性を作成できます。これらは「ユーザー定義フィールド」と呼ばれています。これらは、Agile PLM にインストールされ、あらかじめ定義されたフィールドとは異なります。

ユーザー定義のユーザー設定フィールドは [ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] タブにのみ作成できます。従って、すべてのユーザー定義のユーザー設定フィールドはクラス (ユーザー定義 1) またはサブクラス (ユーザー定義 2) に固有なものとなります。

**注意** ユーザー設定フィールドはクラス固有のものであるため、クラス固有の権限を必要とします。基本クラス権限 (アイテム読み取りやプレリミナリ アイテム変更など) はクラス属性に適用しません。Agile PLM における役割や権限の対象は様々ですが (165 ページの「[役割](#)」および 185 ページの「[権限と権限マスク](#)」を参照)、多少のチュートリアルを参照 (179 ページの「[属性の構築とテスト、読み取り/変更権限、役割](#)」を参照) することをお勧めします。

**クラスにユーザー定義のユーザー設定フィールドを作成するには:**

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. 一例として、[設計変更] クラスをダブルクリックし、[ユーザー インターフェース タブ] タブをクリックします。
3. [ユーザー定義 1] をダブルクリックし、[属性 |ユーザー定義 1] タブをクリックします。
4. [新規作成] アイコンをクリックします。[新規属性] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 新しい属性の名前を入力します。また、ドロップダウン リストから属性タイプを選択します。[OK] をクリックします。

**注意** 属性名には、コロン (:)、セミコロン (;)、または等号 (=) を使用できません。

6. 新規の属性オブジェクトが表示されます。このユーザー定義のユーザー設定フィールドは、この例では、[設計変更] クラスに作成されたすべてのオブジェクトに存在することになります。

ここで、説明、表示、デフォルト値、必要、確認通知に使用可能などの様々なフィールドを記入することができます。

#### サブクラスにユーザー定義ユーザー設定フィールドを作成するには:

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. 一例として、ECO サブクラスをダブルクリックし、ユーザー インターフェース タブをクリックします。
3. [ユーザー定義 2] をダブルクリックし、[属性 |ユーザー定義 2] タブをクリックします。
4. [新規作成] アイコンをクリックします。[新規属性] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 新しい属性の名前を入力します。また、ドロップダウン リストから属性タイプを選択します。[OK] をクリックします。

---

**注意** 属性名には、コロン (:)、セミコロン (;)、または等号 (=) を使用できません。

---

6. 新規の属性オブジェクトが表示されます。このユーザー定義ユーザー設定フィールドは、この例では、ECO サブクラスに作成されたすべてのオブジェクトに存在します。

ここで、説明、表示、デフォルト値、必要、確認通知に使用可能などの様々なフィールドを記入することができます。

#### ユーザー定義のユーザー設定フィールドを使用できる場所

ユーザー定義フィールドは、あらかじめ定義されたフィールドよりも多くの制限を持ちます。これらのフィールドは、以下の Agile PLM の場所でサポートされます。

- ユーザー定義フィールドが完全にサポートされている場所:
  - 詳細検索
    - ユーザー定義フィールドを条件により使用できる。
    - ... 検索結果で表示/出力できる。
    - ... 検索結果で分類の属性として使用できる。
  - 役割と権限
    - ユーザー定義フィールドを読取権限の [適用先] 属性として使用できる。
    - ... 変更権限の [適用先] 属性として使用できる。
  - ワークフロー
    - ユーザー定義フィールドをエントリの必要なフィールドで使用できる。
    - ... 終了の必要なフィールドで使用できる。
  - 確認通知
    - ユーザー定義フィールドは、このフィールドが変更または更新されたときに、確認通知に対して使用できる。
  - デフォルトの標準レポート
    - ユーザーがオプションで [ユーザー定義 1] の属性を選択してレポート結果で表示することができる場所で、ユーザー定義フィールドを選択することができます。
  - カスタム レポート
    - ユーザー定義フィールドを条件によりカスタムレポート作成で使用できる。
    - ... レポート結果で表示/出力できる。
    - ... レポート結果の分類およびグループ化の属性として使用できる。
  - Agile Integration Service
    - ユーザー定義フィールドを AIS として使用できる。



- Agile Content Service
  - ユーザー定義フィールドを CTO として使用できる。
- エクスポート
  - ユーザー定義フィールドは、サポートされる出力形式でエクスポートできる。

### ユーザー定義フィールドが一部サポートされている場所:

- ChangeCAST
  - ユーザー定義フィールドは [ユーザー定義 1] でサポートされていますが、[ユーザー定義 2] でサポートされていません。
- SDK
  - ユーザー定義フィールドはプロパティ設定 (更新) とプロパティ取得 (検索) をサポートしていますが、[作成] をサポートしていません。

### ユーザー定義のユーザー設定フィールドを使用できない場所

ユーザー定義フィールドは、Agile システム内の以下の場所ではサポートされていません:

- 条件
  - ユーザー定義フィールドを条件に記載されていない値で使用できません。
- DataLoad
  - ユーザー定義フィールドは DataLoad からロードできません。
- 通知
  - ユーザー定義フィールドは、通知の件名または本文で送信可能なデータ タグとして使用できません。
- ACS
  - ユーザー定義フィールドは ATO で使用できません。これらのフィールドは自動生成ではなく、クラス設定で変更が許可されていないためです。

## 読み取りフィールド

一部のタブの一部のフィールドは、関連オブジェクトに関する情報を表示できます。これらのフィールドは、読み取りフィールドと呼ばれています。読み取りフィールドに表示されるデータは、現在表示されているオブジェクトに関連する異なるオブジェクトからの属性データの読み取り専用コピーです。タブに読み取りフィールドがある場合、必要に応じてこれらのフィールドの有効/無効を切り替えることができます。

読み取りフィールドのあるタブの中には編集できないものもあります (たとえば、アイテム オブジェクト変更タブ)。しかし、一部の編集可能なタブには次のように両方のタイプの属性が含まれます。編集可能および読み取り (たとえば、アイテム オブジェクト製造元タブ)。読み取りフィールドは、読み取り専用コピーであるため、タブで編集することはできません。しかし、元の属性が修正された場合、読み取りフィールドの読み取り専用コピーはこれらの修正を反映します。

管理者の場合、編集可能フィールドと読み取りフィールドの両方を含むオブジェクト タブのセットアップ ウィンドウの <タブ名>:属性タブでは、読み取りフィールドにそれらの名前の関連オブジェクトの名前が含まれています。たとえば、アイテム オブジェクトの [製造元] タブでは、「製造元」または「製造元部品」で始まる属性名は、製造元および製造元部品オブジェクト (例: 製造元名および製造元部品メモによる読み取りフィールド) です。

## BOM および製造元タブの読み取りフィールド

アイテム BOM タブとアイテム製造元タブには、編集可能フィールドと読み取りフィールドの両方が含まれます。

アイテムの [BOM] タブの編集可能フィールドには、アイテムとその BOM のアイテム (品質、見出し番号、参照指示範囲など) との関係を記述します。BOM タブの読み取りフィールドにより、BOM タブに一覧表示されたアイテム、たとえば BOM アイテムのユーザー定義 1 データに関する追加情報を表示できます。

アイテムの [製造元] タブの編集可能フィールドには、アイテムとその製造元部品 (たとえば、推奨ステータス、参照メモなど) との関係を定義します。[製造元] タブの読み取りフィールドにより、製造元 (製造元の住所など) または製造元部品 (製造元部品のユーザー定義 1 データなど) に関する追加情報を表示できます。

**重要** すべての読み取りフィールドと同様、BOM タブと製造元タブの読み取りフィールドはこれらの表で編集することはできません。これらの読み取りは BOM タブと製造元タブでは編集できないため、BOM のレッドライン タブまたは製造元のレッドラインタブからもレッドラインすることはできません。

参考までに、編集およびレッドラインできるアイテム オブジェクトの [BOM] タブと [製造元] タブの属性を以下の表に示します。

**注意** 編集またはレッドラインできる特定のフィールドは、ユーザーに割り当てられた役割と権限によっても決定されます。

編集またはレッドラインできるアイテム オブジェクト BOM テーブルのフィールド	編集またはレッドラインできるアイテム オブジェクト製造元テーブルのフィールド
BOM 日付 01 - BOM 日付 05	AML 分割 (%)
BOM の説明	製造元名
BOM リスト 01 - BOM リスト 05	製造元部品番号
BOM マルチテキスト 30、BOM マルチテキスト 31	製造元タブ 日付 01 - 製造元タブ 日付 05
BOM メモ	製造元タブ リスト 01 - 製造元タブ リスト 05
BOM 数値 01 - BOM 数値 05	製造元タブ マルチリスト 01 - 製造元タブ マルチリスト 03
BOM テキスト 01 - BOM テキスト 05	製造元タブ マルチテキスト 30、製造元タブ マルチテキスト 31
見出し番号	製造元タブ 数値 01 - 製造元タブ 数値 05
アイテム番号	製造元タブ テキスト 01 - 製造元タブ テキスト 05
数量	推奨ステータス
参照指示	参照メモ

## 属性を定義する

属性は、Agile PLM クライアントのタブに表示されるフィールドを指します。属性はプロパティを設定して定義します。

各オブジェクト タブには、独自の設定ウィンドウがあります。必要なタブの設定ウィンドウを表示するには、次の表のガイドラインに従います。

属性またはプロパティのタイプ	設定アクティビティ	実行すること
サブクラスのプロパティ	たとえば、[名前]、[説明]、[番号ソース]、[自動採番が必要]、[拠点別の BOM] などに対するプロパティを定義します。	[クラス] ウィンドウで: <ul style="list-style-type: none"> <li>サブクラス名をダブルクリックします。</li> <li>[一般情報] タブのプロパティを設定します。</li> </ul>
サブクラス固有の属性 ([ユーザー定義 2] タブのみ)	以下の属性を定義します。 ユーザー定義 2	[クラス] ウィンドウで: <ul style="list-style-type: none"> <li>サブクラス名をダブルクリックします。</li> <li>[ユーザー インターフェース タブ]&gt;[ユーザー定義 2] タブを選択します。</li> </ul>
クラス固有の属性 ([ユーザー定義 2] 以外のすべてのタブ)	以下の属性を定義します。 カバー ページ、 タイトル ブロック、 一般情報 ユーザー定義 1、 対象アイテム、 ワークフロー 関係、 添付ファイル、 履歴、 変更、 BOM、 製造元、 使用箇所、 拠点、 エスカレーション、 選択したオブジェクト、 送信先	[クラス] ウィンドウで: <ul style="list-style-type: none"> <li>クラス名をダブルクリックします。</li> <li>[ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。</li> <li>設定するタブをダブルクリックします。</li> </ul>

たとえば、設計変更クラスの [対象アイテム] タブの属性を定義するには、以下のように操作します。

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. [設計変更クラス] をダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] タブをクリックします。
4. [対象アイテム] をダブルクリックします。対象アイテムのタブ付き設定ウィンドウが表示されます。

## 属性のタイプについて

属性のタイプは、その属性が Agile PLM でどのように使用されるかを示すものです。たとえば「テキスト」属性は、Java クライアントまたは Web クライアントのタブのフィールドにテキストを入力するために使用されます。Agile PLM で使用される属性タイプは下表に記載されています。

タイプ	フィールドに入力する
日付	日時を入力したり、ポップアップ カレンダーで日時を選択したりします。
リスト	リストからアイテムを 1 つ選択します。 カスケード リストからアイテムを 1 つ選択します。
マルチリスト	複数の選択項目があるリストからアイテムを 1 つ以上選択します。リストは、カスケード リストにすることができます。  <b>注意:</b> マルチリスト フィールドには、リストエントリ数の制限がなくなりました。以前のサービスパックでは、マルチリストに保存できるのは 31 リスト エントリまででした。
テキスト	1 行のテキストを入力します。入力できるテキストの長さは様々ですが一般には 50 文字以内です。
マルチテキスト	複数の行にまたがるテキスト (最大 4,000 文字) のブロックを入力します。
数値	数字を入力します。
通貨	金額を入力します。
見出し	属性グループの上に見出しを表示します。これらのタブでは、一連の関連する属性を識別できます。見出しの属性は [ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] で利用可能です。また、これらは [ユーザー] クラスの [一般情報] および [プリファレンス] タブでも利用可能です。
アイコン	読取専用属性タイプ。オブジェクト タイプ、オブジェクトに添付ファイルがあること、オブジェクトに製造元があること、オブジェクトに保留中の変更があること、などを示すアイコンをテーブル (BOM テーブルや検索結果テーブルなど) で表示する際に使用します。
Agile PLM 管理者は、現在の日付や現在のユーザーなどにデフォルトの値を設定できます。オブジェクトを新規に作成すると、フィールドにはこのデフォルトの値が自動的に表示されます。72 ページの「 <a href="#">デフォルト値を設定する</a> 」を参照してください。	

## 属性のプロパティを定義する

次の表に属性のプロパティと使用可能な設定、およびその設定の Agile PLM での入力方法を示します。また、各プロパティで使用する属性のタイプも示します。

**注意** [必須] プロパティ (次の表の下方にあります) はよく理解しておく必要があります。このプロパティは、クラスやサブクラスでビジネス オブジェクトを作成する際に注意する必要がある属性に関して、ユーザーに視覚的なヒントを提供します。70 ページの「[オブジェクトの変更での必須フィールドに關係する例外](#)」に詳述されているように、必須のフィールドを使用することで生じるコーナー ケースもあります。

オブジェクトを作成するために必要なフィールドに注意してください。このフィールドは、Agile ワークフローにある必須フィールドとは異なります。

プロパティ	属性のタイプ	設定	Agile PLM のアプリケーション
名前	すべて	管理者により提供	<p>ユーザーに表示されるフィールドの名前を最大 40 文字で指定します。</p> <p>すべての文字は Agile PLM でサポートされており、Agile クライアントにおいて問題はありませんが、属性の名前を変更したり、作成する場合は、SDK に書かれた統合やカスタム アプリケーションで問題が生じる可能性があるため、次の文字の使用は避けてください。</p> <p>, (カンマ)、. (ピリオド/ドット)、: (コロン)、; (セミコロン)、= (イコール記号)</p>
* タイプ	すべて	該当なし	<p>Agile PLM 管理者は設定できません。</p> <p>属性のタイプを示します。日付、リスト、マルチリスト、テキスト、マルチテキスト、数値、イメージ、見出し。</p>
表示	すべて	はい	<p>Agile PLM クライアントで属性を表示します。ユーザーは、このクラスまたはサブクラスでオブジェクトを作成する際に、この属性を見ることができます。</p>
		いいえ	<p>Agile PLM クライアントで属性を非表示のままにします。ユーザーは、このクラスまたはサブクラスでオブジェクトを作成する際に、この属性を見ることができません。</p>
リスト	リスト マルチリスト	管理者により提供	<p>ユーザーが使用するドロップダウン リストに表示される選択項目。ここで入力する選択項目の中には、デフォルト値で設定した値が表示されます。</p> <p>選択項目が別の箇所で定義されているリスト属性については、このプロパティは [リスト] を読み取るので属性設定ウィンドウでこのプロパティを編集することはできません。例として、[ライフサイクル フェーズ] 属性の選択項目が [ライフサイクル フェーズ] ノードで定義されている場合などがあります。</p> <p>リストの各エントリは最大 255 文字です。</p>
デフォルト値	すべて	管理者により提供	<p>オブジェクトの新規作成時に表示されるデフォルト値。リストやマルチリストの場合、デフォルト値は選択リストのいずれかの値であることが必要です (85 ページの「<a href="#">リストのデフォルト値を設定する</a>」を参照)。デフォルトの変数を使用できるフィールドもあります。</p> <p>マルチテキスト属性の場合、[システムの最大長] の値は 4,000 ですが、管理者が設定できるデフォルト テキストは 510 文字に制限されます。Web および Java クライアント ユーザーは、ビジネス オブジェクトのこのフィールドで制限を受けません。</p>
検索条件の有効化	すべて	通常は [いいえ] (管理者により [はい] に設定される場合あり)	<p>属性をパラメータ検索の条件として追加することを許可 (はい) または禁止 (いいえ) します。(パラメータ検索については、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』に記載されています)。</p>

プロパティ	属性のタイプ	設定	Agile PLM のアプリケーション
最大文字数	テキスト マルチテキスト	管理者により 提供	<p>フィールドに入力できる最大バイト数を設定します。(空白は 1 バイト、改行は 2 バイトとみなされます)。有効な設定範囲は 0 からこの属性で許可されている最大値までの値です (属性の [システムの最大長] プロパティを参照)。</p> <p>通常、1 文字は 1 バイトですが、一部の Agile インストールは中国語や日本語にローカライズされており、1 文字につき 2~3 バイトを使用することがあります。[システムの最大長] 値との関連でこのプロパティの値を設定する際に、この問題を考慮してください。</p> <p>Agile PLM の多くの分野で様々な属性が見られ、[最大文字数] を属性に基づき別々に設定することができると、類似する属性の [最大文字数] に幅がありすぎると問題が生じることがあります。たとえば、部品番号は、部品の [タイトル ブロック]、(同じまたはその他の) 部品の BOM、変更の [対象アイテム] などで使用される場合があります。こうした類似属性の [最大文字数] を標準値に設定しておくことが理想的です。</p> <p>[最大文字数] を設定する際には、Agile PLM のデータをエクスポートする社内の他のアプリケーションのフィールド長の制限を考慮してください。</p>
* システムの最大長	テキスト マルチテキスト	該当なし	<p>Agile PLM 管理者は設定できません。</p> <p>データ フィールドの最大文字数をバイトで指定します。これは Agile PLM クライアントのフィールドで許可された最大バイト数を表します。属性の [システムの最大長] には、[最大文字数] の値より大きい値を指定する必要があります。</p>
含む文字	テキスト マルチテキスト	リストから選択	<p>この設定によって、フィールドで空白が使用できるかどうか、およびどのタイプの英数字を使用できるかが決まります。Agile PLM システムで定義されている文字セットのリストから選択します。詳細は、77 ページの「<a href="#">文字セット</a>」を参照してください。</p>
最小値	数値	管理者により 提供	数値フィールドの最小値。
最大値	数値	管理者により 提供	数値フィールドの最大値。ゼロ (0) 以上でなければなりません。
* 順序	すべて	該当なし	<p>この数字は、テーブルまたはフォーム上に属性フィールドが表示される順序を示します。これは、Agile システムにより生成された 0 以上の数字です。[表示属性の並べ替え] ボタンを使用して属性を整理したときに、Agile システムによってこの数字が生成されます。</p>

プロパティ	属性のタイプ	設定	Agile PLM のアプリケーション
拠点別のフィールド		リストから選択	<p>[共通] = この属性はグローバルな値から値を継承します。</p> <p>[拠点別] = この属性の値はグローバルな値とは別の値です。</p> <p>このプロパティはすべての属性に適用されるわけではありません。適用されない場合は「該当なし」に設定され、編集することはできません。</p> <p>このプロパティは、適用される属性であってもそのすべてが編集できるわけではありません。そのような場合、プロパティのデフォルト値は [共通] または [拠点別] のどちらかになり編集できません。</p> <p>たとえば、設計変更クラスの [対象アイテム] タブの属性設定を表示してください。</p>
高さ	マルチテキスト	管理者により提供	編集モードのときに表示されるテキスト領域の行数を指定します。(Web クライアントでは、テキスト領域には 4 行が表示されます。)
スケール	数値通貨	管理者により提供	数字フィールドの小数点以下の桁数。この値はゼロ (0) 以上に設定する必要があります。
* 属性	すべて	該当なし	<p>Agile PLM 管理者は設定できません。</p> <p>選択したノードのデータベースの属性名を表示します。[名前] プロパティには Agile PLM ユーザーに表示される属性名を指定します。[属性] プロパティと [名前] プロパティは、しばしば異なります。</p>
*Base ID (ベース ID)	すべて	該当なし	Agile 管理者は設定できません。属性の変更前のオリジナル システム ID です。
必須	すべて	はい	<p>このフィールドは、太字で表示されます。これは、このフィールドを入力する必要があるという視覚的なヒントです。[必須] が [はい] に設定されている属性が、[作成ウィザード] (Web クライアント) 中に入力されない場合、または編集集中に空欄となり、ユーザーがこれを保存しようとした場合 (両方のクライアント)、フィールドを記入するよう指示するメッセージが表示され、手順を完了することはできません。</p> <p>見出し属性を必須に設定できます。([必須] フィールドが欠落している [クラス] &gt; [ユーザー インターフェース タブ] &gt; [ユーザー定義 1] &gt; [属性   ユーザー定義 1] &gt; [見出し 01] 属性には問題点がありました。)</p> <p>70 ページの「<a href="#">オブジェクトの変更での必須フィールドに関する例外</a>」を参照してください。</p>
		いいえ	このフィールドは太字で表示されません。入力しなくても、ウィザードや編集/保存プロセスが中断されることはありません。

プロパティ	属性のタイプ	設定	Agile PLM のアプリケーション
確認通知に使用可能	すべて	[はい] または [いいえ]	この属性は、ユーザーにより確認通知の必要があるかどうかを決定します (適格な権限のあるユーザー)。確認通知については、『 <a href="#">Agile PLM ユーザー・ガイド</a> および <a href="#">スタート・ガイド</a> 』第 5 章「オブジェクトを使用する」で説明しています。
表示幅	すべて	通常は 100 (必要に応じて調整可能) で、単位はピクセル (説明を参照)	すべてのオブジェクトのすべてのタブのすべてのフィールドに設定可能な表示幅。[表示幅] 属性の単位はピクセルです。このフィールドの値を入力するには、1 文字当たり約 7.5 ピクセルを使用します。たとえば、フィールドに 10 文字分のスペースが必要な場合、[表示幅] を 75 に設定します。  システム全体のプリファレンスである [属性表示最大幅] は全体の最大値を設定します (ピクセル単位)。一方この [表示幅] は、フィールド別のデフォルトを設定します。ただし、Web クライアント ユーザーは常にユーザー インターフェースの列をサイズ変更することができます。
* Agile PLM 管理者はこれらのプロパティを変更できません。			
添付ファイルのファイル タイプは、ファイル名の最後のピリオドに続く文字によって決まります。そのため、ピリオド (.) で終わるファイル名は使用しないでください。			

## オブジェクトの変更での必須フィールドに関する例外

ビジネス オブジェクトを変更し、変更の一環として別のサブクラスを選択すると、[オブジェクトのサブクラスを変更します。同じオブジェクト名または番号で操作を続行しますか ?] という警告が表示されます。この警告では、別の危険性に関する注意が喚起されません。別の危険性とは、オブジェクトの元のサブクラスとオブジェクトをこれから割り当てるサブクラスでは、必須フィールドが異なっている可能性があることです。新しいサブクラスに必須として設定されたフィールドは、元のサブクラスでは必須でない可能性があります。しかし、新しいサブクラスの必須フィールドに関するチェックは実施されず、この不一致の可能性についても警告は表示されません。

## 画像属性

テーブルに画像属性を含めるには、属性の [表示] プロパティを [はい] に設定します。画像属性の [名前] プロパティは、その画像属性が表示するアイコンのタイプを識別します。その名前はエンド ユーザーには表示されず、変更する必要はありません。

テーブルのどの列に画像を表示するかを指定するには、54 ページの「[フォーム タブの属性の順序を変更する](#)」を参照してください。

## 属性を設定する

プロパティは、1 つの属性に対して設定できても、別の属性に対しては設定できないことがあります。たとえば、[タイトル ブロック] タブのライフサイクル フェーズ属性の [名前] プロパティは編集できませんが、[BOM] タブのアイテム ライフサイクル フェーズの [名前] プロパティは編集できます。



Agile PLM 管理者は、設定可能なプロパティを簡単に変更することができます。たとえば、変更番号の最大長を 30 文字でなく、15 文字に変更する場合には、変更の [カバー ページ] タブの [最大文字数] プロパティの設定を変更します。

**注意** Agile PLM の多くの分野で様々な属性が見られ、[最大文字数] を属性に基づき別々に設定することができるため、類似する属性の [最大文字数] に幅がありすぎると問題が生じることがあります。たとえば、部品番号は、部品の [タイトル ブロック]、(同じまたはその他の) 部品の BOM、変更の [対象アイテム] などで使用される場合があります。こうした類似属性の [最大文字数] を標準値に設定しておくことが理想的です。



## 表示幅の属性

[表示幅] はすべてのオブジェクトのすべてのタブのすべてのフィールドにおいて設定可能な新しい属性です。[表示幅] 属性の単位はピクセルです。このフィールドの値を入力するには、1 文字当たり約 7.5 ピクセルを使用します。たとえば、フィールドに 10 文字分のスペースが必要な場合、[表示幅] を 75 に設定します。

システム全体のプリファレンスである [属性表示最大幅] は全体の最大値を設定します (ピクセル単位)。一方この [表示幅] は、フィールド別のデフォルトを設定します。ただし、Web クライアント ユーザーは常にユーザー インターフェースの列をサイズ変更することができます。

## 属性を変更する

**属性のプロパティを変更するには:**

- [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
- クラスのタブの属性を変更するには、クラス名をダブルクリックします。
  - たとえば、設計変更の [対象アイテム] タブの属性を変更するには、[設計変更クラス] をダブルクリックしてから [ユーザー インターフェース タブ] タブを選択します。[設計変更] クラスのタブがすべて表示されます。
  - [対象アイテム] をクリックします。[クラス タブ] 設定ウィンドウが表示されます。
  - [属性 | 対象アイテム] タブを選択します。このタブのすべてのフィールドが表示されます。
- 特定のサブクラスの [ユーザー定義 2] タブの属性を変更するには、クラス名の下に表示されているサブクラスの名前をダブルクリックします。
  - たとえば、[設計変更] クラスの [ECO] をダブルクリックし、[ユーザー インターフェース タブ] タブを選択します。ECO サブクラスのタブがすべて表示されます。
  - 次に [ユーザー定義 2] タブをダブルクリックします。[クラス タブ] 設定ウィンドウが表示されます。
  - [属性 | ユーザー定義 2] タブを選択します。このタブのすべてのフィールドが表示されます。
- 変更する属性をダブルクリックします。
- 属性のプロパティを変更します。プロパティのタイプに応じて、次のいずれかの方法を使用します。
  - テキストを入力します。
  - リストから値を選択します。
  -  をクリックしてダイアログ ボックスを開きます。
  - 日付属性のデフォルト値の場合は、 をクリックして特定の日付を選択するか、変数を使用します。31 ページの「[デフォルト値変数](#)」を参照してください。
- 変更が完了したら [保存] をクリックします。

## 複数のタブに共通する属性のプロパティを一致させる

いくつかのタブに共通する属性がある場合、プロパティにはすべて同じ設定を行う必要があります。

たとえば、アイテムの [番号] 属性は、アイテムの [タイトル ブロック] (つまり [ページ 1] タブ)、アイテムの [BOM] タブ (アイテム番号の属性)、および関連設計変更の [対象アイテム] タブ (アイテム番号の属性) に表示されます。この 3 箇所の [アイテム番号] 属性には、同じプロパティの設定を行います。

たとえば、アイテムの [タイトル ブロック.番号] フィールドでは、[含む文字] のプロパティを [すべて] に設定した場合、アイテムの [BOM.アイテム番号.含む文字] のプロパティも [すべて] に設定し、[関連設計変更.対象アイテム.アイテム番号.含む文字] のプロパティも [すべて] に設定する必要があります。同じ設定にしないと、たとえば対象アイテムを追加しようとしても、Agile PLM クライアントで対象アイテムが追加されず、エラー メッセージが表示されます。

正しい属性を設定することで、[名前を付けて保存] を使用して新規オブジェクトを作成した場合に、[ユーザー定義 1] と [ユーザー定義 2] のデータが正しくコピーされ (たとえば、ECO と MCO の両方の [ユーザー定義 1] の [プロジェクト番号] フィールド)、[BOM] テーブルにあるアイテムの [ユーザー定義 1] または関連設計変更の [対象アイテム] タブ (たとえば、[単位] フィールド) から情報を表示できるようになります。

[名前を付けて保存] によるオブジェクトの作成について: サブクラスに必須フィールドが (管理者によって) 設定された後、ユーザーが [名前を付けて保存] を実行したときに、いずれかの必須フィールドでソース オブジェクトにタイプ違反があると、[名前を付けて保存] の操作は、ソースに値がコピーされた状態で終了します。以前は、名前を付けて保存する際に、特定の属性で違反が発生して操作を完了できないことを示すエラーが表示されました。

## デフォルト値を設定する

属性に表示されるデフォルト値を設定できます。

### デフォルト値の設定を変更するには

1. 希望の属性を見つけ、ダブルクリックして設定ウィンドウを開きます。  
(手順の詳細は、71 ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。)
2. [デフォルト値] フィールドに、設定するデフォルト値を入力します。属性のタイプに応じて、変数の入力 (31 ページの「[デフォルト値変数](#)」を参照)、テキストの入力、ドロップダウン リストからの選択、または日付の選択を実行します。
3. 変更が完了したら [保存] をクリックします。

オブジェクトの新規作成時に、Agile PLM クライアントのフィールドに新しいデフォルト値が表示されます。

## タブの属性を表示または非表示にする

多くの属性はタブで表示または非表示にすることができます。たとえば、[保留中の変更] タブのフィールドは表示または非表示にできます。また、[ユーザー定義 1] タブの属性は使用されるまで非表示になっています。

### タブの属性を表示または非表示にするには

1. 希望の属性を見つけ、ダブルクリックしてください。  
(手順の詳細は、71 ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。)

2. 属性の [表示] フィールドで [はい] を選択して、属性を表示状態にします。属性を非表示にするには [いいえ] を選択します。
3. 変更が完了したら [保存] をクリックします。  
タブの属性が表示または非表示になります。変更内容を表示するには、属性が表示される Java クライアントまたは Web クライアントでオブジェクトを開きます。

## フィールド ラベルまたはテーブルの列名を編集する

フィールド ラベルまたはテーブルの列の見出しは、属性の [名前] プロパティを編集して変更します。

たとえば、部品クラス オブジェクトの [タイトル ブロック] タブの属性はラベル付きのフィールドに表示されます。表示されるラベルは、属性の [名前] プロパティを編集して変更します。設計変更クラス オブジェクトの [対象アイテム] タブのフィールドはテーブルに表示されます。テーブルの列の見出し、またはフィールドが属性名になります。テーブルの列の見出しは、属性の [名前] プロパティを編集して変更します。

---

**注意**      部品およびドキュメント クラスの [タイトル ブロック] タブの [ライフサイクル フェーズ] 属性名は変更できません。

---

### フィールド ラベルまたはテーブルの列名を編集するには

1. 希望の属性を見つけ、ダブルクリックしてください。  
(手順の詳細は、71 ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。)
2. [名前] フィールドで、削除するテキストをハイライト表示し、新しい名前を入力します。
3. 変更が完了したら [保存] をクリックします。  
名前の変更を確認するには、Java クライアントまたは Web クライアントでそのテーブルが表示されるオブジェクトを開きます。タブをクリックしてフィールドまたはテーブルを表示し、変更を確認します。

## サブクラスまたは会社ロゴに対しカスタム アイコンを使用する

Agile PLM で提供された、あらかじめ定義されたサブクラスには、デフォルトのアイコンがあります。サブクラス アイコンは (Java クライアントおよび Web クライアントで) 様々なオブジェクト タイプの違いを示すために表示されます。アイコンは随時置換することができます。

### デフォルトのサブクラスアイコンをカスタムアイコンに置換するには:

1. サブクラスを開き、[一般情報] タブで [アイコン] プロパティにファイル名を入力します。  
[ドキュメント] および [部品] サブクラスについては、[アセンブリのアイコン] と呼ばれる追加プロパティがあります。これはオブジェクトがアセンブリを表すときに使用されるアイコン イメージです。  
[アイコン] および [アセンブリのアイコン] プロパティで、グラフィック ファイル名 (拡張子を含む) を入力します。例: electrical.gif。
2. カスタム グラフィックはプロキシ サーバの 2 箇所、Web クライアントに 1 つと Java クライアントに 1 つ配置する必要があります。システムは使用しているクライアントに基づき、グラフィックを検出します。
  - Web クライアント - <webserver\_root>%PLMContent%images
  - Java クライアント - <webserver\_root>%JavaClient%lib%images%custom.jar

**注意** Java クライアントについては、カスタム アイコンは `custom.jar` ファイルに追加する必要があります。JAR ファイルの更新方法については、JAR ユーティリティに関する Sun 社の説明書を参照してください。JAR ユーティリティに関するオンライン チュートリアルは、<http://java.sun.com/docs/books/tutorial/jar/> から利用できます。また、様々な Zip 互換ユーティリティ (WinZip など) を使用して JAR ファイルを更新することができます。

## Agile ロゴを置換する

企業ロゴ (またはその他のブランド イメージなど) を Agile ロゴのかわりに配置する場合や、ロゴの高さまたは幅を変更する場合は、`web.xml` ファイルを変更する方法が最も簡単です。

### デフォルトの企業ロゴをカスタムロゴに置換するには:

1. サーバ側にログインします。
2. Oracle ホーム ディレクトリで `web.xml` を検索します。
3. 特定のパラメータを変更するいくつかのサンプルを次の箇条書きに示します。
  - `web.xml` のこれらのコード行で、カスタム ロゴ ファイルのファイル名を入力できます。

```
<context-param>
  <param-name>cobranding.image</param-name>
  <param-value>logo.gif</param-value>
</context-param>
```

「logo.gif」の部分のファイル名 (拡張子を含む) を変更します。
  - `web.xml` のこれらのコード行で、ロゴの高さを変更できます。

```
<context-param>
  <param-name>cobranding.image.height</param-name>
  <param-value>25</param-value>
</context-param>
```

パラメータ値「25」を別の値に変更します。
  - `web.xml` のこれらのコード行で、ロゴの幅を変更できます。

```
<context-param>
  <param-name>cobranding.image.width</param-name>
  <param-value>114</param-value>
</context-param>
```

パラメータ値「114」を別の値に変更します。
  - これらのコード行で、Oracle|Agile のウィンドウまたはページのタイトルを変更できます。

```
<context-param>
  <param-name>application.window.title</param-name>
  <param-value>Product Lifecycle Solution</param-value>
</context-param>
```

パラメータ値「Product Lifecycle Solution」を別の値に変更します。
  - これに続く `web.xml` の数行のコードでは、テキストを変更することによりツールチップを更新することができます。

```
<context-param>
  <param-name>cobranding.image.alttext</param-name>
  <param-value>Oracle|Agile</param-value>
</context-param>
```

この例の「Oracle|Agile」部分に新しいテキストを挿入します。

4. アプリケーション サーバを再起動します。
5. Web クライアントにログインし、変更内容を確認または評価します。

## オブジェクトおよびファイルへの簡易アクセス

簡易アクセス URL を生成して、Agile オブジェクトまたは Agile 添付ファイルへの直接ポインタを準備できます。

これらの簡易アクセス URL は、他のアプリケーションやファイル (スプレッドシート ファイル、ワード プロセッサ ファイル、組織のイントラネット Web ページ、WIKI ページ、または電子メール) に貼り付けることができます。

簡易アクセス URL を使用した Agile オブジェクトへの簡易アクセスの詳細は、次の説明を参照してください。

- 75 ページの「[Agile で生成される簡易アクセス オブジェクト URL](#)」
- 75 ページの「[ユーザーが生成するスマート オブジェクト URL の形式](#)」
- 76 ページの「[簡易アクセス オブジェクト URL を使用する](#)」

添付ファイルへの簡易アクセス URL を使用した添付ファイルへの簡易アクセスの詳細は、次の説明を参照してください。

- 308 ページの「[添付ファイルへの簡易アクセス URL を生成する](#)」

## Agile で生成される簡易アクセス オブジェクト URL

Web クライアントでは、Web クライアントの [アクション] メニューから Agile PLM オブジェクトの簡易アクセス URL を生成できます。

**Agile PLM オブジェクトの簡易アクセス URL を生成するには:**

1. PLM Web クライアントにログインし、目的のオブジェクトを開きます。
2. [アクション] メニューで [URL をクリップボードにコピー] を選択します。
3. URL がクリップボードにコピーされます。コピーされた URL を別のアプリケーションまたはファイル (ワード プロセッサ ファイル、スプレッドシート ファイル、電子メールなど) に貼り付けます。

## ユーザーが生成するスマート オブジェクト URL の形式

Agile スマート オブジェクト URL 機能は、電子メール、スプレッドシート、文書、WIKIなどを介して効果的にコラボレーションできるように設計されています。ユーザーまたは自動化ツールによって、Agile の特定のオブジェクトを指し示す可読性に優れた高性能な URL を生成できます。次の形式を使用することで、オブジェクト URL を生成する際、ユーザーは Agile にログインする必要がなくなります。自動化ツールの場合も、この形式を使用してオブジェクト URL を生成できます。

スマート オブジェクト URL は、Web クライアントから使用可能なオブジェクトに対して使用できます。

### スマート オブジェクト URL の形式

Agile オブジェクトを指し示す URL には、次の形式を使用します。

<http://server:port/VirtualPath/object/ObjectType/ObjectName>

次の表に、スマート オブジェクト URL のパラメータを示します。

パラメータ	説明
<a href="http://server:port/&lt;VirtualPath&gt;/object/&lt;ObjectType&gt;/&lt;ObjectName&gt;">http://server:port/&lt;VirtualPath&gt;/object/&lt;ObjectType&gt;/&lt;ObjectName&gt;</a>	
server port VirtualPath	Server、port、および VirtualPath で Agile PLM インスタンスを識別します。
object	テキスト「object」によって、URL がオブジェクト URL であることを Agile に示します。
ObjectType	ObjectType は、ECO、部品、製造元、ファイル フォルダ、プログラム、アクティビティ、ディスカッションなど、オブジェクトのサブクラス (タイプ) を参照します。
ObjectName	<p>ObjectName は、オブジェクトの一意識別子を参照します。オブジェクト クラスに従って、一意識別子にはオブジェクト番号または名前が使用されます。</p> <p><b>注意</b> 製造元部品は、製造元名と製造元部品番号の 2 つのパラメータによって一意に識別されるオブジェクトの特別なクラスです。したがって、特定の製造元部品を参照する URL には、次の形式を使用します。</p> <p><a href="http://server:port/VirtualPath/object/ObjectType/MfrName/MfrPart Number">http://server:port/VirtualPath/object/ObjectType/MfrName/MfrPart Number</a></p>

Agile PLM では、オブジェクトの一意識別子に含まれる特殊文字 (空白、アスタリスク (\*) のような他の特殊文字など) に対応するために、URL に追加される特別なタグ (%20 など) が識別され、処理されます。たとえば、次の URL では、

<http://server:port/VirtualPath/object/Manufacturer/Philips%20Semiconductor>

「Philips Semiconductor」という製造元になります。

## 簡易アクセス オブジェクト URL を使用する

ユーザーが簡易アクセス オブジェクト URL をクリックした場合、ユーザー アクションは、その URL が Agile で生成された簡易アクセス URL か、ユーザーが生成したスマート オブジェクト URL かに関係なく同じになります。

1. URL をクリックします。Agile PLM ログイン画面がブラウザ ウィンドウに表示されます。
2. 必要なログイン情報を入力します。
3. 正常にログインすると、リンクに指定されているオブジェクトが検索されます。

(オブジェクトが見つからなかった場合は、エラーが表示され、ユーザーのホームページに戻ります。)

オブジェクトが見つかった場合は、オブジェクトを読み取る適切な権限がユーザーにあるかどうかを検証され、オブジェクトの最初のタブ ([タイトル ページ] など) が表示されます。

# 文字セット、リスト、およびプロセス拡張

扱うトピックは次のとおりです。

■ 文字セット .....	77
■ リスト .....	79
■ プロセスの拡張 .....	86

この章では、文字セット、リスト、プロセス拡張のカスタマイズと設定方法について説明しています。

## 文字セット

[文字セット] ノードを使用すると、Agile PLM で有効な文字セットを表示および作成することができます。

文字セットとは、テキスト属性およびマルチテキスト属性の [含む文字] プロパティを管理するために使用される有効な文字のリストです。文字セットは作成および削除が可能です。Agile PLM でサポートされている言語はいずれも文字セットでサポートできます。

下表は、Agile PLM で提供されている文字セット一覧です。これらはデフォルトで有効となっており、変更することはできません。

名前	説明
すべて	すべての有効な文字
アルファベット (すべて)	アルファベット (大文字と小文字) のみ
アルファベット (大文字、小文字、スペース)	アルファベット (大文字、小文字) とスペース
アルファベット (小文字)	アルファベット (小文字) のみ
アルファベット (小文字とスペース)	アルファベット (小文字) とスペース
アルファベット (大文字)	アルファベット (大文字) のみ
アルファベット (大文字とスペース)	アルファベット (大文字) とスペース
英数字 (すべて)	英数字 (大文字、小文字、数字)
英数字 (大文字、小文字、スペース)	英数字 (大文字、小文字、数字) とスペース
英数字 (小文字)	英数字 (小文字と数字)
英数字 (小文字とスペース)	英数字 (小文字、数字) とスペース
英数字 (大文字)	英数字 (大文字と数字)

名前	説明
英数字 (大文字とスペース)	英数字 (大文字と数字) とスペース
数値	数字のみ
数字とスペース	数字とスペースのみ

## 文字セットの作成

自社の要件に適した文字セットを作成できます。各文字セットは 100 文字まで入力できます。

**注意** すべての文字は Agile PLM でサポートされており、Agile クライアントにおいて問題はありませんが、オブジェクトを命名したり、名前を変更する場合 (たとえば、インスタンス、サブクラス、属性など) は、SDK に書かれた統合やカスタム アプリケーションで問題が生じる可能性があるため、次の文字の使用は避けてください。

, (カンマ)、. (ピリオド/ドット)

以前の Agile では、特定のユニコード文字、特にカタカナ (これらは有効な XML 名文字ではないため) について問題が生じた経緯があります。Agile PLM は aXML でこの問題に対処しています。

「スラッシュ」文字 (/) については、SDK はクエリ言語で特定文字を使用していますが、名前ではなく ID でクラスやフィールドを参照することをお勧めします。フォルダ (検索フォルダなど) に簡単にアクセスするために、SDK は以下のようにフォルダを表示しています。"folder/folder/folder/object" - このように、フォルダ名の中のスラッシュがあると、問題を起こす可能性があります。エスケープ シーケンス ("¥") を使用することができます。

### 新しい文字セットを作成するには:

1. [データ設定] で [文字セット] をダブルクリックします。[文字セット] ウィンドウが開きます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[文字セットの定義] ダイアログ ボックスが開きます。
3. [名前] および [説明] フィールドに、それぞれ名前と説明を入力します。
4. [有効化] リストで [はい] を選択します。
5. [有効な文字セット] フィールドに、セットに含む文字を最大 100 文字入力します。重複する文字は使用できません。
6. 特殊文字を追加するには、[特殊文字] ボタンをクリックし、ニューを使用すると、スペース (^s)、改行 (^p)、またはキャレット (^) を選択します。(^s)
7. 作業が完了したら、[OK] をクリックします。

**注意** 大規模な文字セットを定義して多くの属性でそれらを使用する場合、カスタムの文字セットによってシステムのパフォーマンスが低下することがあります。

## 文字セットの変更

[文字セット] ウィンドウで作成した文字セットの内容、名前、および説明は変更することができます。Agile PLM で提供されたデフォルト文字セットは読取専用です。



**文字セットを変更するには:**

1. [データ設定] で [文字セット] ノードをダブルクリックします。[文字セット] ウィンドウが開きます。
2. [文字セット] ダブルクリックして開きます。
3. [名前] および [説明] フィールドに、それぞれ名前と説明を入力します。
4. [有効な文字セット] フィールドで、文字を追加または削除します。
5. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

**文字セットを削除するには:**

1. [データ設定] で [文字セット] ノードをダブルクリックします。[文字セット] ウィンドウが開きます。
2. 文字セットを選択します。
3. [更新] ボタンをクリックし、[変更] をクリックして確定します。

**注意** 文字セットが現在 Agile PLM システムの [テキスト] または [マルチテキスト] の属性に割り当てられている場合、削除できません。

**注意** 必要な場所に適切な文字セットを選択してください。ビジネス オブジェクトからファイル フォルダ オブジェクトへファイルや URL を追加する際に問題が生じる可能性があります。フォルダの [ファイルの説明] 属性では文字セットが数字で、ビジネス オブジェクトの [ファイルの説明] 属性では文字セットが英文字または英数字の場合は、後者が優先されます。つまり、ファイル フォルダの [ファイルの説明] (数値) で強制しようとしていた管理は失われ、元の文字セットが保存されます。

## リスト

[リスト] ノードからアクセスする [リスト] テーブルはリストのコレクション、つまりライブラリになっています。これを使用して、複数のクラスで使用されるリストを管理します。カスタム リストを定義して、[ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] リスト属性に使用することができます。Agile PLM システムでは、多くの属性がリスト構成になっています。属性、プロパティ、テーブルのユーザー設定フィールドおよびセルは、すべてリストにできます。

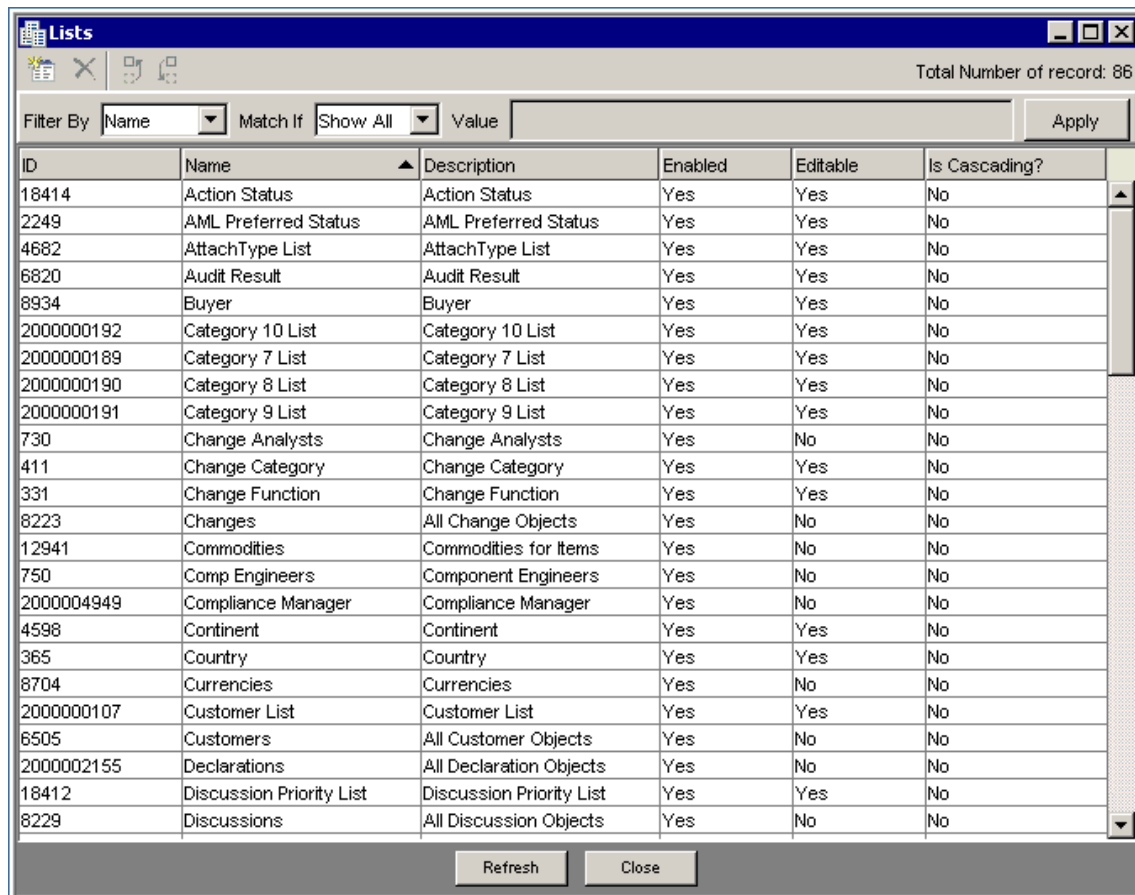
## ルーティング管理者リスト

ワークフローのルーティング管理者に関連するリストは 6 つあります。[変更分析者リスト]、[コンポーネントエンジニア リスト]、[価格管理者リスト]、[適合性管理者リスト]、[品質分析者リスト]、[品質管理者リスト]。これらは、[リスト] ノードから編集することはできません。ユーザーの名前は、指定のユーザーのリスト プロパティ ([ユーザー] > [ユーザー] > [一般情報] タブ ([プロフィール] エリア) > [リスト]) に設定した内容に基づいて、これらのリストに対して追加または削除されます。

[リスト] ノードでは、これら 6 つのリストの編集可能なプロパティは [表示タイプ] と呼ばれています。このプロパティは、ルーティング可能オブジェクトの [ルーティング マネージャ] リスト フィールドが、ルーティング ユーザーに対して [ドロップダウン リスト] または [アドレス帳] のどちらの形式で表示されるかを選択するものです。各リストに数人しか含まれない会社規模であれば、ドロップダウンリストで十分です。大規模な会社で、数十人に及ぶ変更分析者がいる場合、[アドレス帳] 形式での使用が便利です。設計変更について適切な変更分析者を選択すると、その他の分析者は設計変更に関する通知を受信しません。

**注意** [表示タイプ] のデフォルトは [アドレス帳] 形式です。ユーザーによる変更が始まる前に、これらのリストの形式を変更しておくことをお勧めします。アドレス帳からルーティング マネージャを選択するには、1～2 ステップ余計にかかり、名前が少ない場合は不便です。

## カスタムリストを作成し、リストに追加する



ID	Name	Description	Enabled	Editable	Is Cascading?
18414	Action Status	Action Status	Yes	Yes	No
2249	AML Preferred Status	AML Preferred Status	Yes	Yes	No
4682	AttachType List	AttachType List	Yes	Yes	No
6820	Audit Result	Audit Result	Yes	Yes	No
8934	Buyer	Buyer	Yes	Yes	No
2000000192	Category 10 List	Category 10 List	Yes	Yes	No
2000000189	Category 7 List	Category 7 List	Yes	Yes	No
2000000190	Category 8 List	Category 8 List	Yes	Yes	No
2000000191	Category 9 List	Category 9 List	Yes	Yes	No
730	Change Analysts	Change Analysts	Yes	No	No
411	Change Category	Change Category	Yes	Yes	No
331	Change Function	Change Function	Yes	Yes	No
8223	Changes	All Change Objects	Yes	No	No
12941	Commodities	Commodities for Items	Yes	No	No
750	Comp Engineers	Component Engineers	Yes	No	No
2000004949	Compliance Manager	Compliance Manager	Yes	No	No
4598	Continent	Continent	Yes	Yes	No
365	Country	Country	Yes	Yes	No
8704	Currencies	Currencies	Yes	No	No
2000000107	Customer List	Customer List	Yes	Yes	No
6505	Customers	All Customer Objects	Yes	No	No
2000002155	Declarations	All Declaration Objects	Yes	No	No
18412	Discussion Priority List	Discussion Priority List	Yes	Yes	No
8229	Discussions	All Discussion Objects	Yes	No	No

**リスト ライブラリのカスタム リストを作成するには:**

1. [データ設定] で [リスト] をダブルクリックします。[リスト] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[リスト作成] ダイアログ ボックスが開きます。
3. [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力します。いずれも 255 文字まで入力できます。
4. [有効] フィールドで [有効] または [無効] を選択します。
5. [重ねて表示] リストで [はい] または [いいえ] を選択します。
6. [OK] をクリックします。新しい [リスト:<名前>] ウィンドウが開きます。この新しいリストはリスト ライブラリにも表示されます。

**注意** リストは、そのリストをリスト アイテムに移入しないで作成できます。作成直後の開いているリストにリスト アイテムを追加するには、次のタスクの手順 4 から開始してください。

**リストに値を追加するには:**

1. [データ設定] で [リスト] をダブルクリックします。[リスト] ウィンドウが表示されます。
2. 必要に応じて、フィルタ バーを使用して、移入するリストを表示します。リストをダブルクリックして開きます。
3. [リスト] タブをクリックします。[リスト:<名前> リスト] ウィンドウが開きます。
4. [新規作成] ボタンをクリックします。ダイアログ ボックスが表示されます。
5. アイテム名を入力し、2 つのコロン (::) を入力してから、アイテムの説明を入力します。名前と説明は、それぞれ最大 255 文字ずつ入力することができます。

---

**注意** リストに値を追加するときは、カンマを使用しないでください。

---

別々の行では、必要に応じて追加リスト アイテムを入力します。リスト アイテムの名前と説明は、改行で分けて好きなだけ入力することができます。また、リスト アイテムをメモ帳などのテキスト エディタからダイアログ ボックスへ貼り付けることもできます。

---

**注意** このダイアログ ボックスには、4000 バイトまで入力できます。各アイテムの改行に 1 バイトが使用されます。平均的なリスト アイテムに 20 バイト (空白と改行を含む) が使用される場合、リストには約 200 アイテムを格納できます。[新規作成] を再度選択することで、リスト アイテムをさらに追加できます。

---

6. 完了したら、[OK] をクリックします。そのリスト アイテムがリストに追加されます。  
デフォルトでは、リスト アイテムの [アクティブ] プロパティが [はい] に設定されています。これを非アクティブにしたい場合、行をダブルクリックし、[アクティブ] プロパティで [いいえ] を選択します。

複数のリスト アイテムを追加していくこのプロセスは、「バッチ追加」と呼ばれます。

## いろいろなリストの種類

ここでは、ユーザーがカスタム リストおよびオブジェクト リストを表示する場合に、どのような種類のリストが表示されるかについて詳しく説明します。「リスト」 (シングルリスト) および「マルチリスト」の属性については、「クラス」の章で説明しています。

- シングルリストのリスト
- マルチリストのリスト
- カスケード リスト
- 動的リスト

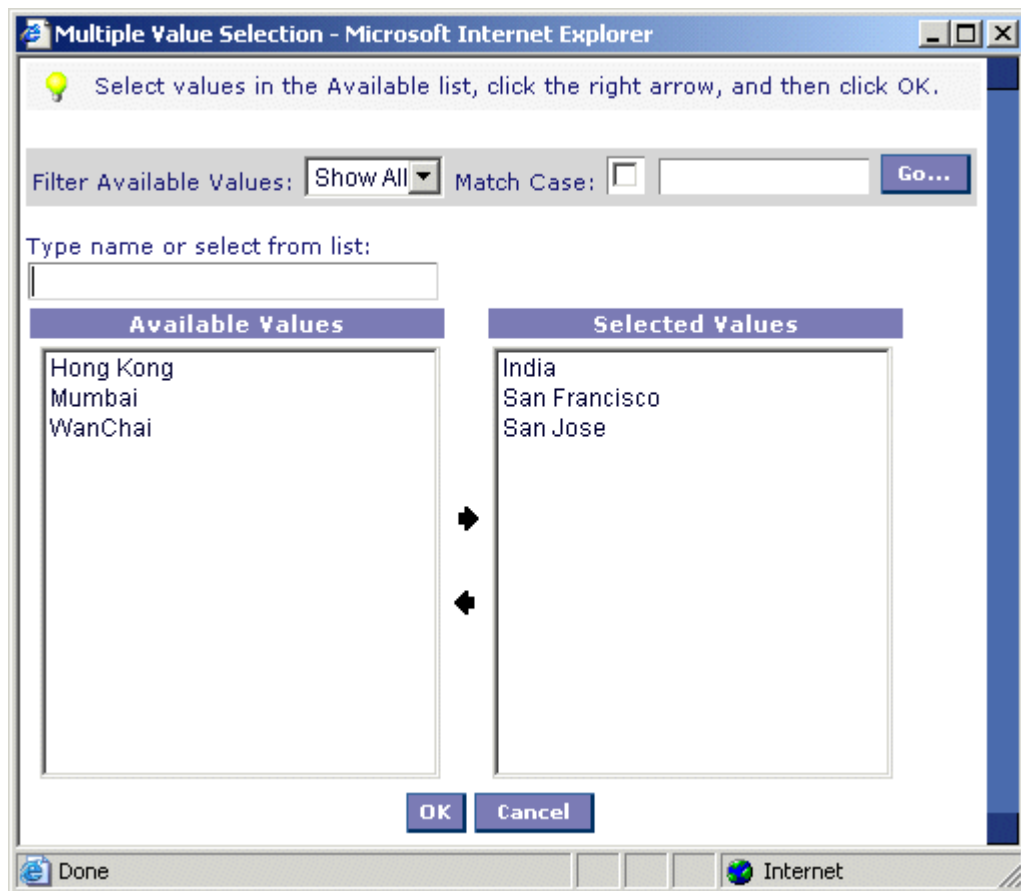
### シングルリストのリスト

シングルリストの属性がセルに表示され、そのリストから 1 つの値だけを選択することができます。次の図は Web クライアントの [時刻形式] フィールドです。これはシングルリストのセルになっています。



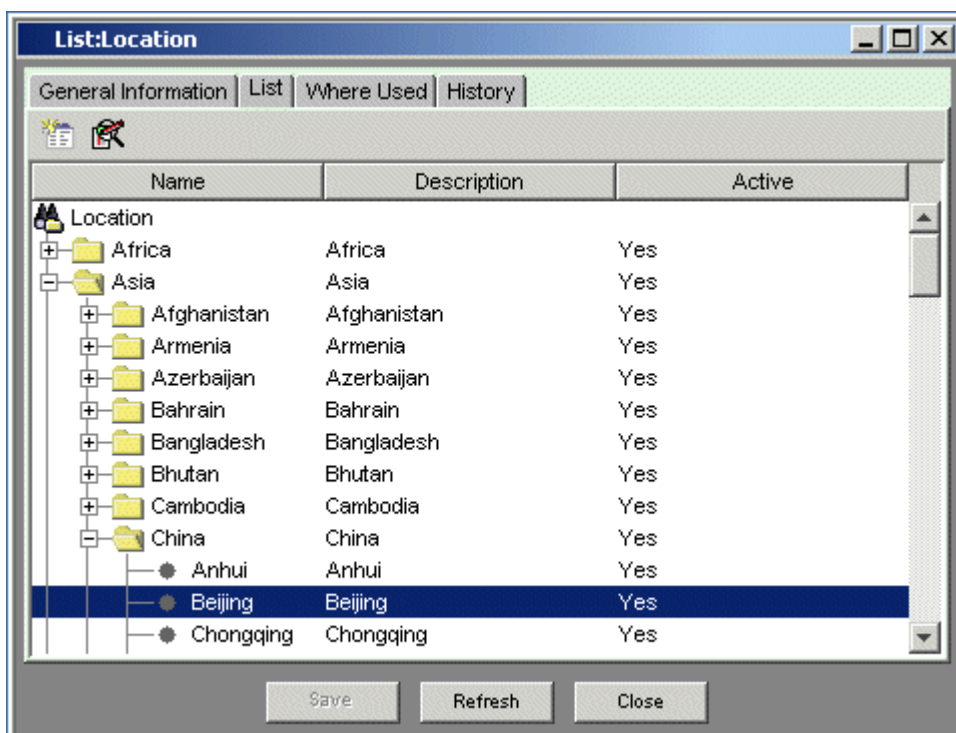
## マルチリストのリスト

マルチリストの属性がセルに表示され、そのリストから複数の値を選択することができます。Web クライアントでは、次の図に示すように [複数の値の選択] ウィンドウを使用し、複数の値を選択してマルチリストのセルに追加することができます。



## カスケード リスト

Java クライアントでは、複数の階層レベルを構成するようにシングルリストまたはマルチリストの属性を設定することができます。複数の階層レベルを持つリストは、カスケード リストと呼ばれます。次の図は、[場所] リストのセットアップ ウィンドウ (Java クライアント) – カスケード リスト – を示しています。このリストは、大陸、国および市町村のレベルに分かれた構造になっています。



**注意** [場所] リストは、Agile PLM で出荷する唯一のカスケード リストです。ただし、独自のカスケード リストを定義することもできます。

カスケード リストの詳細は、86 ページの「[カスケード リストを作成する](#)」を参照してください。

## 動的リスト

Agile PLM サーバには、静的リストおよび動的リストの両方があります。静的リストは、値の選択項目が変わらないリストです。動的リストは、ランタイム時に値が更新されるリストです。静的リストは変更可能で、新しい値を追加したり、現在の値を破棄したりできます。動的リストは変更できません。したがって、動的リストの [編集可能] プロパティは、[いいえ] に設定されています。

## リストを設定する

このセクションでは Java クライアントでドロップダウン リストを設定するための手順について説明します。これらの手順は、通常のリストおよびカスケード リストに適用されます。

### リストを変更するには:

1. [データ設定] で [リスト] をダブルクリックします。[リスト] ウィンドウが表示されます。
2. 必要に応じて、フィルタ バーを使用して、変更するリストを表示します。
3. リストをダブルクリックして開きます。
4. [一般情報] タブの [名前] または [説明] フィールドを編集します。
5. リストを無効化するには、[有効] フィールドを [いいえ] に変更します。

**注意** リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合は、無効化できません。

- リスト値 (つまり、リスト エントリ) を変更するには、[リスト] タブをクリックします。必要に応じて値を追加、削除、および変更できます。

---

**注意** リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合は、値を削除できません。ただし、リスト値を非アクティブ化し、Agile PLM クライアントに表示されないようにすることができます。

---

- [保存] をクリックして、変更を保存します。

#### リストを削除するには:

- [データ設定] で [リスト] をダブルクリックします。[リスト] ウィンドウが表示されます。
- 必要に応じて、フィルタ バーを使用して、削除するリストを表示します。
- リストを選択します。
- [更新] ボタンをクリックし、[変更] をクリックして確定します。

---

**注意** リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合は、無効化または削除できません。

---

#### リスト値 (リスト エントリ) を変更するには:

- [データ設定] で [リスト] をダブルクリックします。[リスト] ウィンドウが表示されます。
- 必要に応じて、フィルタ バーを使用して、変更するリストを表示します。
- リストをダブルクリックして開きます。
- [リスト] タブをクリックします。
- リスト値をダブルクリックして開きます。
- [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力します。いずれも 255 文字まで入力できます。
- リストを非アクティブ化するには、[アクティブ] フィールドを [いいえ] に変更します。

---

**注意** リスト値を非アクティブにすることで、Agile PLM クライアントから効果的に隠すことができます。ただし、ユーザーは非アクティブ値を検索することもできます。

---

- [OK] をクリックして、変更を保存します。

#### リスト値 (リスト エントリ) を削除するには:

- [データ設定] で [リスト] をダブルクリックします。[リスト] ウィンドウが表示されます。
- 必要に応じて、フィルタ バーを使用して、変更するリストを表示します。
- リストをダブルクリックして開きます。
- [リスト] タブをクリックします。
- リスト値を選択します。
- [削除] ボタンをクリックします。[ダイアログの確認] に警告 (および [削除処理を続行しますか ?] のプロンプト) が表示された場合は、[はい] をクリックして削除を続行します。

[リスト アイテムの削除] ダイアログが表示される場合があります。このダイアログには、リスト アイテ

ム (リスト エントリ) は現在使用されており、このアイテムを削除するには、最初にリスト エントリへの参照をすべて削除する必要があるというシステム評価が示されます。

---

**注意** リストが現在 Agile PLM システムで使用されている場合は、値を削除できません。ただし、リスト値を非アクティブ化し、Agile PLM クライアントに表示されないようにすることができます。

---

#### [リスト] または [マルチリスト] 属性で使用されているリストを変更するには:

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. 属性を変更するクラスまたはサブクラスをクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] タブをクリックします。
4. タブをダブルクリックして開きます。
5. [属性:<テーブル>] タブをクリックします。
6. 変更する [リスト] または [マルチリスト] 属性をダブルクリックします。
7. [リスト] プロパティからリストを選択します。また、[新規リスト] をクリックして、新規リストを作成することができます。
8. [保存] をクリックして、変更を保存します。

---

**注意** Agile PLM オブジェクトが現在選択されているリストを使用するよう設定された属性を持つ場合、別のリストを選択することはできません。

---

### リストのデフォルト値を設定する

[リスト] 属性を作成すると、必要に応じてそのデフォルト値を設定できます。詳細は、72 ページの「[デフォルト値を設定する](#)」を参照してください。デフォルト値とは、新規 Agile PLM オブジェクトの作成時に、フィールドに対して自動的に選択される値を指します。[リスト] 属性のデフォルト値は、関連するリストの値の 1 つでなければなりません。

### 不良モード リスト

不良モードは製品サービス依頼 (PSR) で使用され、品質問題のレポートの中でアイテムの不良の内容を示します。不良モードは、各アイテムのサブクラス特有の値のリストです。たとえば、顧客がアイテムのサブクラスとして「光学」を作成したとすると、「光学」に対する不良モード リストが作成され、そのリストには光学式のコンポーネントに特有な問題が含まれます。不良モードは、以下の特性を一覧表示します。

- [ドキュメント] または [部品] クラスの新規サブクラスを作成する場合、リスト ライブラリが自動的にこのサブクラスの新規不良モード リストを作成します。
- サブクラス作成後にその名前を変更しても、関連する不良モード リストの名前は更新されません。このリストはリフレッシュ後に更新されます。
- 不良モード リストの [使用箇所] タブは、Agile PLM システムの不良モード特殊処理のために無効化されます。
- 不良モードリストは、対応するサブクラスが削除されなければ、削除することはできません。

その特性のために、不良モードは他のタイプリスト属性では使用しないことをお勧めします。

## カスケード リストを作成する

カスケード リストには複数の階層レベルがあり、リストの中に複数のリストを作成します。

カスケード リストの設定は、単一レベル リストの設定とよく似ています。リストの変更の詳細は、83 ページの「[リストを設定する](#)」を参照してください。カスケード リストには次の追加規制があります。

- カスケード リストを作成した後は、これを通常のリストに変更することはできません。リストが保存されると、[重ねて表示] プロパティが読取専用となります。
- カスケード リスト内の各フォルダには一意の値が必要です。ただし、カスケード リスト内の別のフォルダは同じ値を共有することができます。
- カスケード リスト値は 1 回に 1 つずつ追加します。カスケード リスト値を追加する一括方法はありません。
- カスケード リストは任意のレベル数を持つことができます。ただし、実際にはカスケード リストを 4 レベル以内に制限するようにしてください。

### カスケード リストを作成するには:

1. [データ設定] で [リスト] をダブルクリックします。[リスト] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[リスト作成] ダイアログ ボックスが開きます。
3. [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力します。
4. リストを有効化するには、[有効] リストを [はい] と設定します。
5. [重ねて表示] リストで [はい] を選択します。
6. [OK] をクリックします。新しい [リスト: <名前>] ウィンドウが開きます。
7. リストに値を追加するには、[リスト] タブをクリックします。
8. [新規作成] ボタンをクリックします。ダイアログ ボックスが表示されます。
9. リスト アイテム名を入力し、リスト アイテムの説明を入力します。
10. [追加] をクリックして値を追加し、ダイアログ ボックスを閉じます。値を保存し、同じレベルのその他の値に追加したい場合は、[他の追加] をクリックします。

---

<b>注意</b>	リスト値は常に、カスケード リストで現在選択されている値よりも下のレベルに追加されます。
-----------	--

---

11. 値をさらに追加するには、手順 8 から 10 を繰り返します。

## プロセスの拡張

[プロセス拡張] ノードでは、Agile PLM システムの機能を拡張するカスタム アクションを定義することができます。定義したカスタム アクションを使用して、Agile PLM クライアントからアクセスできるカスタム レポート、ユーザー主導型 / ワークフロー起動型カスタム アクション、およびカスタム ツールを作成することができます。



プロセスの拡張は、Agile アプリケーション サーバにインストールされている Java クラス、または URL へのリンクのいずれかです。URL は、単なる Web サイトでも、Web ベースのアプリケーションの場所でも構いません。

Agile PLM クライアントで利用可能なプロセスの拡張には 5 つの統合ポイントがあります。プロセスの拡張は、以下の領域から起動することができます。

- [アクション] メニュー
- [ツール] メニュー
- ワークフロー ステータス
- 外部レポート
- ダッシュボード - [ダッシュボード] で統合ポイントとして作成された URL プロセスの拡張は、[ダッシュボード拡張機能] フィールドにリストされ、同時に、[タイプ リストの表示] を備えた [ダッシュボード] テーブルが作成されます。この [ダッシュボード] テーブルには、URL プロセスの拡張の出力が表示されます。

**注意** 技術的には、カスタム自動採番ソースもプロセスの拡張の一種で、サーバ側のフレームワークもカスタム アクションと同じものを使用しています。カスタム自動採番ソースの詳細は、91 ページの「[自動採番](#)」を参照してください。

プロセスの拡張を構築するためにはどのようなツールが必要なのでしょうか。URL プロセスの拡張には、さらに必要なツールはありません。プロセスの拡張ライブラリに希望の数の URL プロセスの拡張を定義して、クライアントのどこからその URL にアクセスするかを指定できます。Agile アプリケーション サーバにインストールされている Java クラスのプロセスの拡張を作成するには、Agile SDK を購入するか、オラクル社コンサルティングの Agile 担当または Agile パートナーの協力のもとに自社に適したプロセスの拡張を構築する必要があります。

カスタム自動採番ソースおよびカスタム アクションを構築および導入するためのプロセスの拡張の使用方法的詳細は、『Agile SDK 開発者ガイド』を参照してください。

## プロセスの拡張ライブラリを使用する

Agile PLM クライアントで使用するカスタム アクションを定義する場所はプロセスの拡張ライブラリです。カスタム アクションをプロセスの拡張ライブラリに追加するときには、そのアクションをクライアントから起動する方法を指定します。

次の表に示すように、Agile PLM では 2 つのプロセスの拡張がデフォルトになっています。


名前	説明
パッケージ回答の承認	パッケージを提出した Agile PLM システムに承認の回答を送ります。
パッケージ回答の却下	パッケージを提出した Agile PLM システムに却下の回答を送ります。

これらのプロセスの拡張を使用して、Agile Content Service (ACS) が Agile 間の通信中に承認または却下の回答を自動的に送ります。詳細は、365 ページの「[Agile Content Service の設定](#)」を参照してください。

Product Governance & Compliance で使用されるデフォルトのプロセスの拡張があります。詳細は、399 ページの「[Product Governance & Compliance の設定](#)」を参照してください。

プロセスの拡張ライブラリには、プロセスの拡張をいくつでも追加することができます。


## カスタム アクションをプロセスの拡張ライブラリに追加するには

1. [データ設定] で [プロセス拡張] をダブルクリックします。プロセスの [拡張ライブラリ] ウィンドウが表示されます。
2. [プロセス拡張ライブラリ] ウィンドウで  をクリックします。[プロセス拡張の追加] ダイアログボックスが表示されます。
3. 次の情報を入力します。
  - 名前: カスタム アクションの名前を入力します。
  - 説明: カスタム アクションの簡単な説明を入力します。
  - タイプ: URL または内部カスタム アクションを選択します。
  - アドレス: Web アドレスを指定します (タイプを URL に設定した場合)。
  - 内部カスタム アクション: リストからカスタム アクションを選択します ([タイプを内部カスタム アクションに設定した場合)。このリストには、プロセスの拡張フレームワークを使用して Agile アプリケーション サーバにインストールしたカスタム アクションが反映されます。カスタム アクションがインストールされていない場合、このリストは空白です。
  - 起動先: カスタム アクションを開始する場所を 1 つ以上選択します。演算子は以下から選択します。
  - アクション メニュー: 正しく設定されたクラスの [アクション] メニューからカスタム アクションを選択することができます。
  - 外部レポート: 外部リソースまたは URL にアクセスしてレポートを作成することができます。プロセスの拡張が内部カスタム アクションの場合、外部レポートのオプションは利用できません。
  - ツール メニュー: [ツール] メニューからカスタム アクションを選択することができます。
  - ワークフローのステータス: 正しく設定されたワークフローが特定のステータスに入ったときに、常にカスタム アクションが起動します。プロセスの拡張が URL の場合、「ワークフロー」ステータスのオプションは利用できません。  
  
 カスタム アクションが [アクション] メニューまたはワークフローのステータスから起動するように指定した場合、そのカスタム アクションを使用するサブクラスまたはワークフローを設定することができます。URL を外部レポートの作成に使用するよう指定した場合、Agile Web クライアントを使用してレポートを作成することができます。[ツール] メニューからアクションを起動するように指定すると、Agile クライアントでは、常にこのアクションを使用できます。
  - 役割: カスタム アクションに使用する役割を 1 つ以上選択します。現在のユーザーの役割および権限を使用する場合、このフィールドは空白にしておきます。現在のユーザーの役割および権限を一時的に無視する場合には、1 つ以上の役割を選択します。そのカスタム アクションが完了した時点で、クライアントは現在のユーザーの役割および権限に戻ります。
  - タイムアウト: カスタム アクションが回答を返さない場合にクライアントがブロックされる秒数を入力します。タイムアウトを -1 にすると、カスタム アクションが結果を返すまでクライアントがブロックされます。タイムアウトのデフォルトは 60 秒です。URL ベースのプロセスの拡張にはタイムアウトがありません。
  - 有効: [はい] を選択します。
4. [OK] をクリックしてプロセスの拡張を保存します。

**プロセスの拡張を変更するには:**

1. [データ設定] で [プロセス拡張] をダブルクリックします。プロセスの [拡張ライブラリ] ウィンドウが表示されます。
2. 変更するプロジェクト拡張を開きます。
3. 設定を変更し、[OK] をクリックします。

**プロセスの拡張を削除するには:**

1. [データ設定] で [プロセス拡張] をダブルクリックします。プロセスの [拡張ライブラリ] ウィンドウが表示されます。
2. 削除するサーバの場所を選択し、 をクリックします。

---

**注意** クラス、ワークフロー、または外部レポートで現在使用中のカスタム アクションは削除できません。カスタム アクションを無効にした場合は停止状態となります。カスタム アクションをプロセスの拡張ライブラリから削除しても、Agile アプリケーション サーバにインストールされているカスタム コードに影響はありません。

---

**プロセスの拡張のタイムアウトを設定する**

プロセスの拡張ライブラリに追加されるカスタム アクションは、すべて非同期処理です。カスタム アクションを Agile PLM クライアントから起動すると、Agile PLM クライアントの動作に関係なく、完了するまで実行し続けます。カスタム アクションを [ツール] メニューまたは [アクション] メニューから選択して起動する場合、一般的にはカスタム アクションが結果を返すまでクライアントをブロックする必要性が生じます。カスタム アクションをプロセスの拡張ライブラリに追加するときに、タイムアウト値を指定することができます。タイムアウトを設定することで、結果を待つ間クライアントがブロックされる時間を決定することができます。

タイムアウトのデフォルトは 60 秒です。クライアントは、タイムアウトすると、カスタム アクションから何の結果も受け取らなかった場合と同じように動作を続行します。その間、カスタム アクションは完了するまで続行されます。

URL を参照するプロセスの拡張にはタイムアウトがありません。URL を参照するプロセスの拡張を Agile PLM クライアントが起動する場合には、クライアントはまったくブロックされません。

ワークフローのステータス変化によりカスタム アクションが起動する場合は、少しの時間でもクライアントがブロックされると困ることがあります。この場合、タイムアウト値を 0 に設定することができます。ただし、カスタム アクションがフィールドの値を更新したり、ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに移行させたりする場合には、ユーザー インターフェースが正確にカスタム アクションの結果を反映するように、クライアントを十分な時間ブロックした方がよいこともあります。この場合には、適切なタイムアウト値を設定して、カスタム アクションを完了できるようにします。



**プロセスの拡張をクラスに割り当てる**

カスタム アクションを Agile PLM オブジェクト (部品や ECO など) の [アクション] メニューに追加するには、そのオブジェクトのクラスを設定します。各基本クラス、クラスおよびサブクラスには [プロセスの拡張] タブがあります。クラスに割り当てるカスタム アクションは、プロセスの拡張ライブラリであらかじめ定義されていないことはありません。

プロセスの拡張は、クラスおよび基本クラスから継承されます。つまり、プロセスの拡張が基本クラスに割り当てられた場合、その基本クラスの下位にあるクラスおよびサブクラスにも割り当てられることになります。

- 注意** プロセスの拡張は、クラス階層のひとつのレベルにしか割り当てることができません。たとえば、部品サブクラスに割り当てられているプロセスの拡張を、アイテム基本クラスに割り当ててすることはできません。
- 注意** ただし、Agile Portlets の場合、プロセスの拡張コンフィグレータを使用してプロセスの拡張を割り当てることができるのは、基本クラス（つまり、アイテムの基本クラス）のみで、部品またはドキュメントのクラスやサブクラスに割り当ててすることはできません。

### プロセスの拡張をクラスに割り当てるには


1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが開きます。
2. 基本クラス、クラスまたは取り扱いたいサブクラスをダブルクリックします。
3. [プロセスの拡張] タブをクリックします。
4. ツールバーの  をクリックします。[プロセスの拡張の割り当て] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. [選択肢リスト] でカスタム アクションを選択し、 をクリックして [選択済み] リストに移動します。完了したら、[OK] をクリックします。
6. [OK] をクリックして設定を保存します。

## プロセスの拡張をワークフローのステータスに割り当てる

[保留中] ステータス以外の各ワークフローのステータスには、ワークフローがそのステータスに入ったときに起動するカスタム アクションを 1 つ以上割り当てることができます。ワークフローのステータスに割り当てるカスタム アクションは、プロセスの拡張ライブラリであらかじめ定義しておきます。

- 注意** 自動転送依頼 (ATO) クラスとそのサブクラスは、ワークフロー稼動のプロセス拡張に対応していません。

### プロセスの拡張をワークフローのステータスに割り当てるには

1. [ワークフロー設定] で [ワークフロー] をダブルクリックします。[ワークフロー] ウィンドウが開きます。
2. 扱うワークフローをダブルクリックします。
3. ステータス タブをクリックします。
4. [保留中] 以外のステータスを選択します。選択したステータスに対する [条件] プロパティテーブルが、ステータス テーブルの下に表示されます。
5. [条件] プロパティ テーブルで、選択したステータスをダブルクリックします。
6. [プロセスの拡張] リストで  をクリックします。ポップアップ ウィンドウが表示されます。
7. [選択肢リスト] でカスタム アクションを選択し、[>] ボタンをクリックして [選択済み] リストに移動します。完了したら、[OK] をクリックします。
8. [保存] をクリックして設定を保存します。

## 自動採番

扱うトピックは次のとおりです。

■ 自動採番の使用方法 .....	91
■ 自動採番ソースについて .....	92
■ 自動採番ソースを設定する .....	94
■ 新しい自動採番ソースを作成する .....	96
■ 自動採番ソースを削除する .....	97

この章では、Agile PLM オブジェクトの自動採番を管理する方法について説明します。

## 自動採番の使用方法

[自動採番] ノードでは、Agile PLM で自動採番のソースを表示したり、設定したりできます。たとえば、自動採番ソースの名前やサブクラス割り当てを変更したり、必要に応じてシーケンスを拡張したりすることができます。

自動採番ソースに独自の接頭辞または接尾辞を指定することや、新規自動採番ソースを作成することも可能です。必要でなくなった自動採番ソースは、Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されていないかぎり、削除できます。

新しい自動採番ソースを作成する場合は、標準の方法またはカスタム方法を使用できます。標準の方法は、接頭辞、接尾辞、文字セット、使用できる文字数を指定して順序を定義する方法です。カスタム方法はより柔軟な方法で、採番のシーケンスを定義するプロセス拡張フレームワークを使用します。

プロセスの拡張を使用してカスタムの自動採番ソースを作成するには、Agile SDK を購入するか、オラクル社コンサルティングの Agile 担当または Agile パートナーと協力して、自社の要件に適したプロセスの拡張を開発する必要があります。プロセス拡張の詳細は、『Agile SDK 開発者ガイド』を参照してください。

## 自動採番ソースを変更する

自動採番ノードから番号ソースを変更できます。

**自動採番ソースを変更するには:**

1. [データ設定] で [自動採番] をダブルクリックします。[自動採番] ウィンドウが表示されます。
2. 行をダブルクリックすると、そのソースのウィンドウが開きます。(たとえば、[自動採番]-[期限付き設計変更番号] ウィンドウ)。
3. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン リストから選択します。
4. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

5. 元の設定に戻るかやり直す場合は、[キャンセル] をクリックします。ウィンドウの新規設定をキャンセルするかどうかを確認するメッセージが表示されます。キャンセルする場合は [OK] を、しない場合は [キャンセル] をクリックします。

自動採番のプロパティについては、94 ページの「[自動採番ソースを設定する](#)」を参照してください。

## 自動採番ソースについて

自動採番ソースは、Agile PLM クライアントで作成されたオブジェクトの自動採番に使用される、あらかじめ定義された連続した数字による番号です。Agile PLM の各オブジェクトには作成時に番号が割り当てられます。手動で番号を割り当てるか Agile PLM による自動採番を使用するかユーザーに選択させたり、手動による番号の割り当てを禁止することができます。

Agile PLM 管理者は、以下の 2 つの管理ノードから Agile PLM システムの番号割り当て規則を設定できます。

- [クラス] ノードでは、特定のサブクラスに特定の自動採番ソースを割り当てます。49 ページの「[自動採番ソース プロパティを変更する](#)」を参照してください。
- [自動採番] ノードでは、番号ソースの名前、接頭辞または接尾辞を付けるか、各シーケンスの番号の数など、番号ソース自体を設定します。どのサブクラスが特定の番号ソースに割り当てられているかを確認し、割り当てを設定できます。新規番号ソースの作成や、不要な番号ソースの削除も可能です。

自動採番ソースは、Agile PLM でオブジェクトに自動的に番号を割り当てるときに使用する番号ソースが認識できるように、サブクラスに割り当てられます。Agile PLM のインストール時に、ほとんどのサブクラスに個別の自動採番ソースが割り当てられます。

---

**注意** 製造元やユーザーなど、複数の Agile PLM サブクラスは自動採番を許可していません。

---

既存の自動採番ソースを表示するには、[自動採番] ノードをダブルクリックします。付属の自動採番ソースを使用するか、設定に対して次のいずれかの変更を行います。

- [新規作成] ボタンを使用して、新規自動採番ソースを作成する。
- [有効] ボタンまたは [無効] ボタンを使用して、自動採番ソースを有効化、または無効化する。
- サブクラスに複数の自動採番ソースを割り当てる。
- 自動採番ソースに複数のサブクラスを割り当てる。
- セットアップ ウィンドウの [接頭辞] または [接尾辞] フィールドを使用して、自動採番ソースに接頭辞または接尾辞を追加する。
- セットアップ ウィンドウの [名前] フィールドを使用して自動採番ソースの名前を変更する。
- 既存の自動採番ソースのすべての番号が使用された場合に、セットアップ ウィンドウの [次の番号] ボタンを使用して番号シーケンスを拡張する。
- [削除] ボタンを使用して、不要な自動採番ソースを削除する。

---

**注意** 自動採番に必要な詳細は、50 ページの「[手動番号割り当てを禁止する](#)」を参照してください。

---

新規サブクラスを作成する場合は、自動採番用の既存の番号ソースに割り当てるか、そのサブクラス専用の新規番号ソースを作成します。

自動採番ソースは、インストール時に次の表に示したように設定されます。

名前	使用箇所	接頭辞
自動転送番号	自動転送	ATO
検証番号	検証	Audit
ブローカー番号	ブローカー	BROKER
是正・予防処置番号	是正・予防処置	CAPA
部品メーカー番号	部品メーカー	COMMR
受託製造業者番号	受託製造業者	CTMR
契約番号	契約	CONTRACT
コンテンツ転送番号	コンテンツ転送 (CTO)	CTO
顧客番号	顧客	CUST
デklarレーション番号	デklarレーション	MD
期限付き設計変更番号	期限付き設計変更	D
ディスカッションの自動採番	ディスカッション	D
ディストリビュータ番号	ディストリビュータ	DISTRIBUTOR
ドキュメント番号	ドキュメント	D
ECO 番号	設計変更 (ECO)	C
ECR 番号	設計変更依頼 (ECR)	R
ファイル フォルダ番号	ファイル フォルダ	FOLDER
ゲートの自動採番	ゲート	G
履歴レポート ファイル フォルダ番号	履歴レポート ファイル フォルダ	HFILE
メーカー代表者番号	メーカー代表者	MR
製造元依頼番号	製造元変更 (MCO)	M
不具合レポート番号	不具合レポート	NCR
パッケージ番号	パッケージ	PKG
部品番号	部品	P
PCO 番号	価格変更 (PCO)	PCO
フェーズの自動採番	フェーズ	PH
PR 番号	問題レポート	PR
プログラムの自動採番	プログラム	PGM
プロジェクト番号	ソーシング プロジェクト	PRJ

名前	使用箇所	接頭辞
公表価格番号	公表価格	PRICE
見積履歴番号	見積履歴	QUOTE
見積依頼番号	見積依頼	RFQ
拠点毎変更番号	拠点毎変更 (SCO)	SCO
出荷停止番号	出荷停止	S
タスクの自動採番	タスク	T

**注意** 期限付き設計変更、ディスカッション、ドキュメントにはすべて接頭辞「D」が使用されていますが、これらはすべて異なるクラスのサブクラスであるため、システム内で矛盾は発生しません。

ただし、期限付き設計変更とドキュメントが「同じ」番号にならないよう、異なる接頭辞を割り当てることをお勧めします。

## 自動採番ソースを設定する

自動採番ソースには、次の表に示す変更可能なプロパティがあります。

プロパティ	説明
名前	自動採番ソースの名前です。単にサブクラスと同じであるか、またはその他の特徴 (たとえばファスナーやファスナーレッド) を代表している場合があります。この名前は変更できます。
説明	自動採番ソースの簡単な説明です。これはオプションのフィールドです。
有効	この自動採番ソースが、有効 (はい) か無効 (いいえ) かを示します。デフォルトは「はい」です。
タイプ	[標準] または [カスタム]。デフォルトは [標準] です。カスタム自動採番は、SDK 機能のある顧客に対して有効です。この機能により、既存の採番スキームと統合されるプロセス拡張を追加することができます。86 ページの「 <a href="#">プロセスの拡張</a> 」および『Agile SDK開発者ガイド』を参照してください。
接頭辞	標準自動採番のプロパティ。この自動採番ソースで Agile PLM が自動的に割り当てる各番号の前に来る文字 (たとえば、Acme000759 (Acme = prefix) など) です。この接頭辞は変更できます。
接尾辞	標準自動採番のプロパティ。この自動採番ソースで Agile PLM が自動的に割り当てる各番号の後に来る文字 (たとえば、Acme000759SW5 (SW5 = suffix) など) です。この接尾辞は変更できます。
文字セット	標準自動採番のプロパティ。このプロパティに入力される文字は、自動採番の作成に使用されます。社内の自動採番にのみ使用できます。文字セットには、a～z、A～Z、0～9 のみが含まれます。特殊文字はサポートされていません。
文字数	標準自動採番のプロパティ。使用する文字数または長さを設定します。「4」が入力された場合、採番は 0001～9999 となります。社内の自動採番にのみ使用できます。上限は 10 のため、このプロパティには、1、2、3、4、5、6、7、8、9、または 10 しか設定できません。



プロパティ	説明
開始番号	標準自動採番のプロパティ。Agile PLM が自動的に割り当てる最初の番号。このプロパティは、任意の「次の番号」と考えることができます。
次の番号	標準自動採番のプロパティ。[開始番号] の値は操作できますが、[次の番号] が示すのは、単に自動採番で次に使用される番号です。
カスタム自動採番	カスタム自動採番のプロパティ。このプロパティは [タイプ] が「カスタム」の場合のみ有効になり (表示されます)。カスタマイズした自社の自動採番システムで値を移入するドロップダウン リスト フィールドです。カスタム自動採番リストは、Agile アプリケーション サーバに導入されたカスタム自動採番のセットを反映します。

**注意** デフォルトのサブクラスについては [自動採番が必要] が [いいえ] で、[自動生成] が [はい] の場合、そのサブクラスにオブジェクトを作成すると数字が自動的に生成されることとなりますが、新しいオブジェクト番号を入力することもできます。

## 自動採番の接頭辞または接尾辞を変更する


接頭辞プロパティと接尾辞プロパティにより、自動採番の前または後に来る固定の文字列が指定されます。たとえば、部品の接頭辞は「P」です。したがって、Agile PLM クライアントで作成される部品にはすべて、「P00678」のように接頭辞「P」が前に付いた数字が割り当てられます。自動採番ソースに接尾辞「00」もある場合、割り当てられる番号の後に「00」が付けられます。

Agile PLM 管理者は、自動採番ソースの接頭辞プロパティと接尾辞プロパティを変更できます。この自動採番ソースを使用するサブクラスで作成される新規オブジェクトには、自動採番に新しい接頭辞または接尾辞が付けられます。

## 自動採番ソースの使用箇所を変更する

[使用箇所] プロパティでは、Agile PLM で特定の自動採番ソースを使用するサブクラスが示されます。このプロパティを変更して、番号ソースを使用するサブクラスを追加することや、サブクラスで番号ソースを使用しないようにすることができます。

**特定の自動採番ソースを使用するサブクラスを表示または変更するには:**

1. [データ設定] で [自動採番] をダブルクリックします。[自動採番] ウィンドウが表示されます。
2. 行をダブルクリックすると、そのソースのウィンドウが表示されます ([期限付き設計変更番号] ウィンドウなど)。
3. [使用箇所] タブで、[追加] ボタン  をクリックします。  
[クラスを [使用箇所] タブに追加] ダイアログ ボックスが開き、Agile PLM システムに存在するすべてのサブクラスが表示されます。[選択されたリスト] に表示されているサブクラスは、Agile PLM クライアントで作成されるオブジェクトにこの番号ソースを使用します。[選択リスト] に表示されているサブクラスは、この番号ソースを使用しません。
4. 設定を変更するには、サブクラス名をダブルクリックして、これを他のリストへ移動します。
5. [OK] をクリックし、変更を保存してダイアログ ボックスを閉じます。
6. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

- 元の設定に戻るかやり直す場合は、[キャンセル] をクリックします。ウィンドウの新規設定をキャンセルするかどうかを確認するメッセージが表示されます。キャンセルする場合は [OK] を、しない場合は [キャンセル] をクリックします。

## カスタム自動採番

リストからカスタム自動採番ソースを選択します。プロセスの拡張フレームワークを使用して Agile アプリケーション サーバに導入された場合のみ、カスタム自動採番ソースを作成することができます。カスタム自動採番ソースを作成する場合は、カスタム自動採番ドロップダウン リストから選択します。カスタム自動採番ソースが導入されていない場合、リストは空白になります。

## タイムアウト

自動採番ソースが応答しない場合にタイムアウト エラーが発生するまでの秒数を入力します。デフォルトは 30 秒です。

## 新しい自動採番ソースを作成する

必要に応じて、ユーザー定義サブクラス用に新規自動採番ソースを作成できます。

### 作業を開始する前に

作業を開始する前に

新規自動採番ソースを作成する前に次の内容について考慮してください。

- どのサブクラスで新規自動採番ソースを使用するか。
- 新規自動採番ソースにどのような名前を付けるか。
- 新規自動採番ソースに接頭辞が必要か。接頭辞が必要な場合、何にするか。
- 新規自動採番ソースに接尾辞が必要か。接尾辞が必要な場合、何にするか。
- どのくらいのサイズの番号シーケンスが必要か。

### 新規自動採番ソースを作成するには:

- [データ設定] で [自動採番] をダブルクリックします。[自動採番] ウィンドウが表示されます。
- [新規作成] をクリックします。[自動採番の定義] ダイアログ ボックスが表示されます。
- [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力し、[有効] フィールドで [はい] または [いいえ] を選択します。

新しい番号ソースを Agile PLM システムに導入する準備ができれば、[有効] リストの値を [はい] に設定します。このダイアログ ボックスのデフォルトは [はい] ですが、サブクラスが完全に設定されるまでは、[いいえ] に設定しておくことをお勧めします。

4. 新しい自動採番のタイプを選択します。

[標準] を選択した場合は、自社のニーズにあわせて [接頭辞]、[接尾辞]、[文字セット]、[文字数]、[開始番号] フィールドに値を入力します

番号ソースの重複を避けるには、Agile PLM のインストール時に提供される自動採番ソースの接頭辞リストについて、92 ページの「[自動採番ソースについて](#)」を参照してください。

[文字数] の設定によって、で割り当てられる番号の桁数が決まります。たとえば、[文字数] フィールドに「4」と入力すると、このシーケンスで使用できる番号の範囲は 0001～9999 (合計 9,999 個の番号) となります。短期間でシーケンスが最大値に達しないような値を選択してください。

5. カスタムを選択した場合には、[カスタム自動採番] と [タイムアウト] (秒数) フィールドを入力します。
6. [使用箇所] リストの下矢印をクリックします。ダイアログ ボックスが開き、Agile PLM システムに存在するすべてのサブクラスが表示されます。新しい番号ソースを作成しているため、[選択] フィールドは空白になります。
7. この番号ソースで使用するサブクラスをすでに作成している場合は、[選択肢] リストのサブクラス名をダブルクリックして、[選択済み] リストに移動します。この番号ソースを使用するサブクラスを作成しないと、このステップは完了できません。この場合は、[有効] フィールドを [いいえ] のままにしておきます。
8. [OK] をクリックし、変更を保存してダイアログ ボックスを閉じます。

[自動採番] ウィンドウに新しい名前が新しいオブジェクトとして表示されます。

Agile PLM ユーザーによる、このサブクラスへの手動での番号の割り当てを禁止するには、50 ページの「[手動番号割り当てを禁止する](#)」を参照してください。

## 自動採番ソースを削除する

Agile PLM 管理者は、不要な自動採番ソースのうち Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されていないものを削除できます。

**注意** 自動採番ソースがオブジェクト作成に使用されている場合、無効化するとそのソースは使用できなくなります。(91 ページの「[自動採番ソース プロパティを変更する](#)」) を参照してください。

### 自動採番ソースを削除するには:

1. [データ設定] で [自動採番] をダブルクリックします。[自動採番] ウィンドウが表示されます。
2. 削除する自動採番ソースを選択します。
3. [削除] ボタンをクリックします。

自動採番ソースが Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されている場合は、オブジェクトが使用中であるというエラー メッセージが表示されて番号ソースは削除されません。

自動採番ソースが Agile PLM クライアントでオブジェクトの作成に使用されていない場合、削除を確認するダイアログ ボックスが表示されます。

4. [OK] をクリックして削除を確認します。

自動採番ソースが削除され、ユーザー定義サブクラスへの割り当てに使用できなくなります。



## 条件

扱うトピックは次のとおりです。

■ 再利用の条件について .....	99
■ 再利用の条件を検索する .....	100
■ 新規条件を作成する .....	101
■ 既存の再利用の条件を変更する .....	103
■ 再利用の条件で [対象アイテム] タブのフィールドを使用する .....	103
■ \$CURRENTREV と \$LATESTREV をアイテムの条件で使用する .....	105

この章では、Agile PLM ワークフローで使用されている条件を検証し、再利用の条件を作成する方法について説明します。

## 再利用の条件について

再利用の条件は、詳細検索のようなデータベース クエリです。再利用の条件の作成に使用する属性は、詳細検索の作成に使用する属性に類似しています。また、これらはワークフロー プロセスを通して移動するオブジェクトを識別するためのフィルタや、権限マスクを適用する条件のようでもあります。

[条件] ノードは、再利用の条件が保存され、保持されている場所です。このノードからは、Agile PLM ワークフローの土台となる再利用の条件を作成、削除、修正できます。再利用の条件は、エスカレーション担当者やサインオフ権限委譲を定義するためにも使用されます。

再利用の条件は、複数のワークフローに割り当てることができ、また 1 つのワークフロー内の複数のステータスに割り当てることができます。以下の条件を定義することができます。

- 承認者またはオブザーバの組み合わせの指定または区別。彼らが選択されたユーザーであるかどうか、既存もしくは作成されたグローバル グループか、またはパーソナル グループかどうか。
- 企業の各製品ラインの指定。
- Agile PLM クラスに対応。
- 他のあらゆる Agile PLM オブジェクト (アイテム、変更、パッケージ、製造元、製造元部品) の属性の組み合わせに対応。

これらのワークフローに適用される再利用の条件での変更はグローバルな (再利用の条件を修正すると、対象となるすべてのワークフローに反映される) ため、システム全体のワークフローの変更を 1 回の作業で完了できます。

各ワークフローについて再利用の条件のリストを指定することにより、どの変更がどのワークフローを使用するかを指定することができます。検索条件として適用する再利用の条件の詳細は、103 ページの「[再利用の条件で \[対象アイテム\] タブのフィールドを使用する](#)」を参照してください。

## 再利用の条件を検索する

### 使用可能な再利用の条件を表示するには

1. [データ設定] で [条件] をダブルクリックします。[条件] ウィンドウが表示されます。
2. 検索を絞り込むには、検索条件記録をフィルタします。たとえば、アイテム オブジェクトに対するすべての再利用の条件を検索するには、「説明」、「含む」、「アイテム」で記録をフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照)

再利用の条件のフィルタされたリストがテーブルに表示されます。再利用の条件のそれぞれについて、[条件] テーブルに名前、説明、オブジェクト タイプが表示されます。列見出しをクリックし、テーブルを列に基づいて分類します。

ウィンドウ上部のボタンを使用して様々な再利用条件の管理タスクを実行します。

ボタン	説明
削除	選択された再利用の条件を削除します。すでに使用されている再利用の条件は削除できません。
インポート	アーカイブ ファイル (.AGI) をインポートして、新規の検索条件を作成します。21 ページの「 <a href="#">管理者設定のインポートとエクスポート</a> 」を参照してください。
エクスポート	選択された再利用の条件に対して、再利用の条件データをエクスポートします。21 ページの「 <a href="#">管理者設定のインポートとエクスポート</a> 」を参照してください。
すべてエクスポート	再利用の条件をすべてエクスポートします。21 ページの「 <a href="#">管理者設定のインポートとエクスポート</a> 」を参照してください。
新規条件	新規の再利用の条件を作成します。101 ページの「 <a href="#">新規条件を作成する</a> 」を参照してください。

## 再利用の条件を表示する

再利用の条件は、すべての Agile PLM クラスまたはサブクラスをオブジェクト タイプとして持つことができます。デフォルトの再利用の条件の多くは、権限マスクを定義するために使用されています。

### 特定の再利用の条件を表示するには:

1. [データ設定] で [条件] をダブルクリックします。[条件] ウィンドウが表示されます。
2. 検索を絞り込むには、検索条件記録をフィルタします。たとえば、アイテム オブジェクトに対するすべての再利用の条件を検索するには、「説明」、「含む」、「アイテム」で記録をフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照)

3. [条件] ウィンドウで、使用する再利用の条件の名前をクリックします。

再利用の条件に対するタブ付きウィンドウが表示されます。

[条件] 設定ウィンドウの [一般情報] タブには、下表で説明されているアクションを実行するために使用するボタンが含まれています。

アクション	説明
削除	使用されていない再利用の条件を削除します。
エクスポート	再利用の条件に関する情報をエクスポートします。21 ページの「 <a href="#">管理者設定のインポートとエクスポート</a> 」を参照してください。
名前を付けて保存	再利用の条件をコピーして、新規の名前を付けます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ [名前を付けて保存] をクリックします。</li> <li>□ 表示されたダイアログ ボックスに新規の名前を入力します。</li> <li>□ [OK] をクリックします。</li> </ul>

## 条件ウィンドウとタブ

既存の再利用の条件をダブルクリックすると、そのプロパティが右ウィンドウのタブ付きウィンドウに表示されます。[一般情報] タブには条件の名前と説明が表示され、条件が適用されているオブジェクト タイプが表示されます。[編集] ボタンを使用して名前と説明を編集します。

[条件] タブには、条件と関係があるタイプ (クラスまたはサブクラス) と条件のパラメータが表示されます。これらは、再利用の条件の作用を定義する条件です。

---

**注意**     すでに使用されている再利用の条件は編集できますが、その条件の [名前]、[説明]、[オブジェクト タイプ] の各フィールドは読み取り専用です。

---

[使用箇所] タブには、再利用の条件が検索条件プロパティ、検索条件、権限マスク、エスカレーション、権限委譲のどこで使用されているかが表示されます。[履歴] タブには、再利用の条件に関連して実行されたアクションが表示されます。

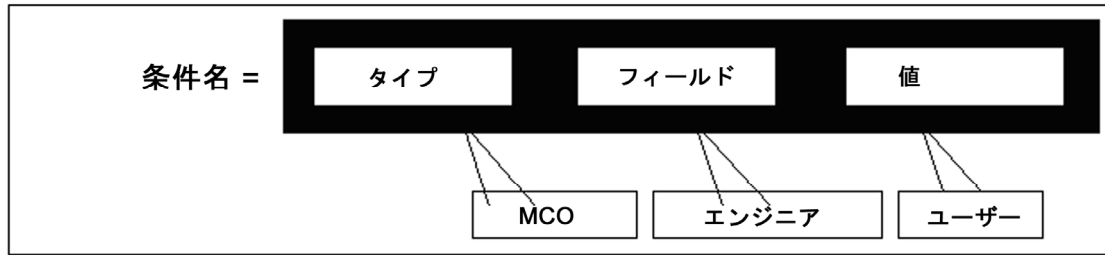
## 新規条件を作成する

ワークフローや権限マスクのニーズに応じて再利用の条件を作成します。再利用の条件は Agile PLM で広く使用することができるため、その目的や機能を開始時から明確にしておく必要があります。

また、再利用の条件の名前を付けるためのシステムまたは規則を作成することをお勧めします。

**注意**     再利用の条件の名前はいつでも変更できますが、ユーザーにはいったんログアウトして再度 Agile PLM クライアントにログインするまで変更後の名前が表示されないため、あまり頻繁に変更すると混乱を招く可能性があります。

命名スキームには、次のようなものが考えられます。



たとえば、「MCO6」よりも「MCO\_Acme\_July2000」という条件名のほうが、ユーザーにとってもわかりやすくなります。

**注意** Agile PLM 管理者により作成された再利用の条件は、[権限委譲] のダイアログ ボックスで「グローバル権限名」として表示されます。他のユーザーが作成したパーソナルな再利用の条件は、[権限委譲] ダイアログ ボックスで「ユーザー.条件名」として表示されます。

#### 新しい再利用の条件を作成するには:

1. [データ設定] で [条件] をダブルクリックします。[条件] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[条件の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力し、再利用の条件を適用するオブジェクト タイプを選択します。このリストには、すべての Agile PLM クラスとサブクラスが含まれています。

**注意** 再利用の条件の名前は固有でなければなりません。すでに使用されている再利用の条件名を入力すると、名前の重複を通知するエラー メッセージが表示されます。

4. 条件の大文字と小文字を区別するには、[大文字と小文字を区別] チェックボックスを選択します。大文字と小文字を区別した検索は、システム パフォーマンスを向上し、再利用の条件の定義方法を簡易化することができます。
  - [値] フィールドにテキストを入力すると、完全に一致するテキストが検索されます。
  - [大文字と小文字を区別] チェックボックスを選択して値を定義すると、内部データベースの設定を使用して Agile PLM システムが迅速にオブジェクトを検索できるようになります。
5. [追加] をクリックして、[属性] ドロップダウン リストから Agile PLM の属性を選択します。変更可能な値が、先に選択しておいた Agile PLM クラスやサブクラスに基づいて変更されます。[OK] をクリックして、小さなダイアログ ボックスを閉じます。
6. [条件] フィールドをクリックし、検索演算子を指定します。
7. [値] フィールドをクリックし、[属性] リストで選択したフィールドの値を選択します。小さなダイアログ ボックスで [OK] をクリックします。
8. その他の条件を追加する場合、再度 [追加] ボタンをクリックし、[And/Or] フィールドで [And] または [Or] を選択します。
9. [挿入] ボタンをクリックして、現在ハイライトされている行よりも上の条件を追加することもできます。
10. 手順 5 から 8 を繰り返して、再利用の条件を完成します。
11. 条件の作成が完了したら [OK] をクリックします。



---

**注意** [オブジェクト タイプ] フィールドの条件を変更すると、再利用の条件全体がリセットされます。再利用の条件を 1 つの Agile PLM クラスまたはサブクラス全体で使用できます。異なるクラスやサブクラスに対して使用する場合は、グローバルな条件を別に作成する必要があります。

---

指定した条件 (複数可) を括弧で囲み、検索条件の評価順序を変更するには、[( )] ボタンをクリックします。この [( )] ボタンは、代数方程式における括弧内の公式のような役割を果たし、標準の数式の処理順序に従います。括弧内でグループ化された条件は、他の条件よりも先に処理されます。

## 既存の再利用の条件を変更する

すでに使用されている既存の再利用の条件は変更できません。ただし、再利用の条件を割り当てられたオブジェクトから削除し、変更して、再び割り当てることは可能です。新規の再利用の条件を作成してオブジェクトに割り当て、古い条件をそのオブジェクトから削除することも可能です。[使用箇所] タブには、その再利用の条件を使用するすべてのオブジェクトが一覧表示されます。

### 既存の再利用の条件を変更するには

1. [データ設定] で [条件] をダブルクリックします。[条件] ウィンドウが表示されます。
2. 検索を絞り込むには、検索条件記録をフィルタします。たとえば、アイテム オブジェクトに対するすべての再利用の条件を検索するには、「説明」、「含む」、「アイテム」で記録をフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照)
3. [条件] ウィンドウで、使用する再利用の条件オブジェクトの名前をダブルクリックします。
4. 条件設定ウィンドウが表示され、条件に関する既存の情報が表示されます。条件を作成するときの手順で変更します。
5. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

---

**注意** いったん [権限委譲] 特権の作成に使用された再利用の条件は、その権限委譲を削除した場合も削除できません。たとえば再利用の条件リストの最後に表示されるように、削除する条件の名前を変更することをお勧めします。

---

## 再利用の条件で [対象アイテム] タブのフィールドを使用する

Agile PLM システムで使用する再利用の条件とその他の検索条件は、多くの点で類似していますが、大きな相違点がいくつかあります。

### 再利用の条件で [対象アイテム] タブのフィールドを指定した場合の変更の検索条件

Agile PLM クライアントで特定のルーティング可能オブジェクトを選択するには、対象アイテム フィールド条件が、そのルーティング可能オブジェクトの [対象アイテム] タブにあるすべてのオブジェクトについて真でなければなりません。たとえば、「対象アイテムの旧ライフサイクル フェーズがプレリミナリに等しい」という条件を作成した場合、[対象アイテム] タブのすべてのオブジェクトの [旧ライフサイクル] フィールドが「プレリミナリ」でなければなりません。[含む] を検索演算子として選択した場合、[対象アイテム] タブのすべてのオブジェクトの特定のフィールドに、特定の値が含まれている必要があります。

Java クライアントで再利用の条件を作成すると、ルーティング可能オブジェクトの [対象アイテム] タブに表示されているアイテム フィールド ([部品カテゴリ] など) に対する検索条件を追加することができます。

**注意** 対象アイテムの属性を指定する条件は、権限マスクの作成には使用できません。権限マスクのドロップダウン リストに表示されない条件は、権限マスクの定義に使用できません。290 ページの「[アイテムの説明を改訂する](#)」を参照してください。

[条件を作成] ダイアログ ボックスでは、[属性] リストにアイテムそのもののフィールドも含めた [対象アイテム] タブのフィールドが一覧表示されます。これにより、[対象アイテム] タブに表示されているアイテムのフィールドに基づいて、変更を検索する再利用の条件を作成することができます。このような検索条件を使用するには、[対象アイテム] タブが表示されていなければなりません。

**たとえば、[部品カテゴリ] フィールドがエンジニアである [対象アイテム] タブにあるアイテムの変更を検索するには、以下の手順に従います。**

1. [データ設定] で [クラス] をダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
2. クラス (例: 設計変更) をクリックします。
3. [クラス] 設定ウィンドウで、[ユーザー インターフェース タブ] タブをクリックします。
4. [対象アイテム] をダブルクリックします。[クラス タブ] 設定ウィンドウが表示されます。
5. [属性] タブをクリックします。
6. [名前] 列で [アイテム カテゴリ] を検索します。行をダブルクリックして、[属性] 設定ウィンドウを表示します。
7. [表示] ドロップダウン リストで [はい] を選択します。[表示] プロパティを「はい」に設定します。

## 対象アイテムの名前における「アイテム」と「部品」の相違

再利用の条件を作成する際には、システムが対象アイテムの名前をどのように解釈するかを理解することが重要です。次の表を参照してください。

名前 (一般)	適用先	名前 (例)	適用先
対象アイテム.アイテム フィールド名	部品とドキュメント	対象アイテム.アイテム.P2 Text20	部品とドキュメントの [Text20] フィールド
対象アイテム.部品 フィールド名	部品のみ	対象アイテム.部品.P2 List03	部品の List03 フィールド

ドキュメント クラス オブジェクトのリストとマルチリスト フィールドは、再利用の条件の作成には使用できません。たとえば、[ユーザー定義 1] タブと [ユーザー定義 2] タブは使用できません。使用できるドキュメント リスト フィールドは、[ドキュメント.製品ライン] と [ドキュメント.サイズ] の 2 つです。

## 対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する

デフォルトの変更分析者 (またはデフォルトのコンポーネント エンジニア) は割り当てられた変更をモニタして承認者とオブザーバが指定されているかどうかを確認します。ワークフローによって、ルーティング可能なオブジェクトの対象アイテムの属性に従って承認者とオブザーバが割り当てられますが、ワークフローが自動的に割り当てなかった承認者を追加することもできます。

たとえば、Acme 社の各製品ラインに開発中のプロジェクトが同時にいくつか存在するとします。Acme では、[ユーザー定義 1] タブ (Agile Java クライアント) のフィールドによって、各アイテム (部品またはドキュメント) が属するプロジェクトが識別されます。Libra 製品ラインのワークフローでは、ECO の対象アイテムに割り当てられたプロジェクトに基づいて、割り当てるデフォルトの承認者とオブザーバが決定されます。

メアリー グリーンは Agile Java クライアントで ECO 333 を作成しました。彼女は 6 つの Orion プロジェクト オブジェクトを [対象アイテム] タブに追加しました。3 つの部品と 3 つのドキュメントメアリー グリーンは ECO 333 の作成を完了し、次のステータスに切り替えます。次のステータスでは変更はデフォルトの変更分析者であるボブ スミスに提出されます。

Orion プロジェクトの承認者を選択するために、Libra 製品ラインのワークフローで [対象アイテム] テーブルの各アイテムの [ユーザー定義 1] フィールドに「Orion」が含まれているかどうかを確認されます。対象アイテム テーブルのすべてのアイテムが Orion プロジェクトに属する場合、ワークフローに定義された Orion プロジェクトの承認者のリストは、ECO 333 がボブ スミスに提出されたときに自動的に [ワークフロー] タブに追加されます。

ただし、[対象アイテム] テーブルのオブジェクトにドキュメントがある場合、Acme では出版部門の Orion チームのメンバーも変更をサインオフする必要があります。すべての ECO にサインオフするドキュメントがあるわけではないため、ワークフロー Libra 製品ラインでは、出版部署のすべての ECO 承認者が自動的に追加されることはありません。

変更分析者であるボブ スミスは、ECO 333 を確認し、対象アイテムにドキュメントがあることに気付きます。ボブ スミスは ECO 333 の [ワークフロー] タブで [承認者の追加] ボタンをクリックし、Orion の出版グループのメンバーすべてを承認者として追加します。ボブ スミスは今後のどの「レビュー」または「リリース済み」タイプのステータスにも承認者を追加することができます。承認者またはオブザーバを追加する際には、ECO が「レビュー」または「リリース済み」タイプのステータスである必要はありません。

## \$CURRENTREV と \$LATESTREV をアイテムの条件で使用する

\$CURRENTREV と \$LATESTREV は、2 つの強力なシステム変数です。管理者は、この変数を使用して、アイテム (部品およびドキュメント) の特定のリビジョンおよび特定のワークフロー ステータス (リビジョンをベースにした変更、つまり、設計変更、拠点毎変更、製造元依頼に適用されるワークフローのステータス) を対象にして条件を作成できます。

ただし、この機能 (Oracle|Agile PLM リリース 9.2.2.2 で機能拡張された) はきわめて繊細であるため、完全に理解するには、(Product Collaboration ソリューションの) アイテム リビジョンおよびワークフロー (109 ページの「[ワークフロー](#)」を参照) の知識が必要なことに注意してください。オラクル社コンサルティングの Agile 担当による支援が役立つ場合があります。

これらの変数は、強固な機能と繊細さを併せ持つもう 1 つの分野である権限マスクの条件を作成する際にも使用されます。これらの変数は、第 2 章で紹介されています。31 ページの「[デフォルト値変数](#)」を参照してください。[変更] 権限を伴う \$CURRENTREV の詳細は、200 ページの「[\\$CURRENTREV を使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する](#)」を参照してください。

## \$CURRENTREV 変数の使用ルール

\$CURRENTREV 変数は、選択したアイテム リビジョンに対応する変更 (設計変更や製造元変更) のワークフロー ステータスに基づいて条件を作成する際に使用されます。

\$CURRENTREV 変数を使用する際は、次のルールが適用されます。

- \$CURRENTREV を使用できるのは、アイテム基本クラス (部品とドキュメントのクラスおよびそれらのサブクラスを含む) に属しているオブジェクトに対して条件を定義する場合のみです。
- \$CURRENTREV は、属性リストの値として使用できます。\$CURRENTREV 自体は、値に対して評価されません。条件全体が式として評価されます。
- [条件] 演算子は、[等しい] および [等しくない] に設定できます。
- [値] は、次の値に設定できます。

値リストは、変更のオブジェクト タイプに対して作成されたすべての設定済みワークフローで使用可能なすべての Workflow.StatusName 値に加え、事前定義済みの変更ステータス タイプすべてに対する \$STATUSTYPE 変数で構成されます。

**注意** この機能に関係する変更タイプは、アイテムの [リビジョン] ドロップダウン リストに表示されるタイプのみです、つまり、設計変更 (ECO)、製造元変更 (MCO)、および拠点毎変更 (SCO) に属している変更タイプです。ただし、このリストには、他の変更クラス (設計変更依頼、期限付き設計変更、出荷停止、および価格変更) も表示されます。\$CURRENTREV に関連する式には、ECO、MCO、および SCO 用に開発されたワークフローに関連するステータスのみを使用する必要があります。

- 条件 \$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.PENDING は、選択したアイテム リビジョンと、現在のステータス タイプが [保留中] の変更が一致する場合に True と評価されます。他のステータス タイプについても同様に、類似した文を作成できます。サポート対象のステータス タイプ変数は、次のとおりです。

\$UNASSIGNED

\$STATUSTYPE.PENDING

\$STATUSTYPE.SUBMIT

\$STATUSTYPE.REVIEW

\$STATUSTYPE.RELEASED

\$STATUSTYPE.COMPLETED

\$STATUSTYPE.HOLD

\$STATUSTYPE.CANCEL は使用できません。これは、キャンセルされた変更に関連するリビジョンは、アイテムの [リビジョン] ドロップダウン リストに表示されず、選択できないためです。いずれの場合も、式 \$CURRENTREV Equal To \$STATUSTYPE.CANCEL は、常に False に評価されます。

- 条件 \$CURRENTREV Equal To [デフォルトの設計変更.保留] は、選択したアイテム リビジョンと、デフォルトの設計変更ワークフローが割り当てられ、かつ現在のステータス タイプが [保留中] である変更が一致する場合に True と評価されます。他のワークフローとステータス タイプについても同様に、類似した文を作成できます。一般的な形式は、次のとおりです。

<ワークフロー名>.<ステータス名>

<ワークフロー名>.CANCEL は使用できません。

- 前述のワークフロー ステータス値は、保留中またはリリース済みのリビジョンに使用できるすべてのステータスをカバーしています。一方、初版リビジョンには関連する変更がないため、このリビジョンには特別な条件値が用意されています。

アイテムの初版リビジョンが選択されている場合は、考えられる使用事例に基づいて、次の条件の 1 つが True になります (次の説明にある保留中の変更という用語は、提出済み、レビューなど、リリース前の状態における変更を意味します)。

- `$INTRODUCTORY_NOCHANGE` - アイテムに対する保留中またはリリース済みの変更はありません ([変更] タブは空です)。この条件には、アイテムに対する過去の保留中の変更が、Agile システムによってソフト削除またはハード削除されたケースも含まれます。
- `$INTRODUCTORY_PENDINGCHANGE` - アイテムはリリースされていませんが、そのアイテムに対する保留中の変更があります。この条件には、アイテムは過去にリリースされているが、リリース済みの変更がすべてリリースされていないケースも含まれます。
- `$INTRODUCTORY_RELEASEDCHANGE` - アイテムに 1 つ以上のリリース済みの変更があります。アイテムに 1 つ以上の保留中の変更がある可能性もあります。

これらの 3 つの値のいずれかを含む式では、選択されたリビジョンが初版リビジョンでない場合、常に `False` に評価されることに注意してください。

- ユーザーがアイテムの最新リリースのリビジョンからのみ添付ファイルを取得し、その内容を読んで変更できるような使用事例をサポートするために (このような事例は、ユーザーによる最新の設計または仕様ファイルの参照が重要な意味を持つ規制産業 (医療機器など) にとって重要です)、`$LATESTREV` という別の変数が、`$CURRENTREV` 式に対して有効な一連の値に導入されました。式 `$CURRENTREV Equal To $LATESTREV` は、選択したリビジョンが、アイテムの最新リリースのリビジョンである場合に `True` と評価されます。この式は、選択したリビジョンが初版で、そのアイテムに対して `ECO`、`MCO`、または `SCO` がリリースされていない場合も `True` に評価されます。

式 `$CURRENTREV Equal To $LATESTREV` は、廃止された式 [タイトル ブロック.リビジョン] `Equal To $LATEST` とまったく同様に機能します。

最新リリースのリビジョンにおけるアイテムの説明に関する変更については、ここで特に説明しておく必要があります。Agile PLM リリース 9.2.2.2 より前は、保留中のリビジョンではなく、最新リリースのリビジョンのみ ([タイトル ブロック.リビジョン] = `$LATEST`) を変更する権限を持つユーザーがアイテムの説明を変更した場合に、保留中のリビジョンすべての説明をこの新しい説明に更新するかどうかを尋ねるメッセージが表示されました。更新を選択すると、そのユーザーに保留中のリビジョンの説明を更新する権限があるかどうかに関係なく、保留中のリビジョンすべての説明が更新されます。この動作は引き続きサポートされます。

## \$LATESTREV 変数の使用ルール

`$LATESTREV` 変数は他の管理者属性で、アイテムの最新リリースのリビジョンに対応する変更 (`ECO/MCO/SCO`) のワークフロー ステータスに基づいて条件を作成する際に使用されます。

`$LATESTREV` 変数を使用する際は、次のルールが適用されます。

- `$LATESTREV` を使用できるのは、アイテム基本クラス (部品とドキュメントのクラスおよびそれらのサブクラスを含む) に属しているオブジェクトに対して条件を定義する場合のみです。
- `$LATESTREV` は、属性リストの値として使用できます。`$LATESTREV` 自体は、値に対して評価されません。条件全体がブール式として評価されます。
- `$CURRENTREV` と異なり、`$LATESTREV` を使用して有効な式を作成するには、[条件] フィールドのみを指定する必要があります。[条件] に対して使用できる演算子は、[リリース済み] と [初版] のみです。
- 条件 `$LATESTREV Is Released` は、選択したアイテムが、`ECO` または `MCO` タイプの変更の少なくとも 1 つについてリリースされた場合に `True` と評価されます。アイテムは、`SCO` でリリースする前に、`ECO` または `MCO` でリリースする必要があるため、`SCO` は含まれません。
- 条件 `$LATESTREV Is Introductory` は、選択したアイテムに、リリース済みの `ECO` または `MCO` がない場合に `True` と評価されます。

## [タイトル ブロック.リビジョン] について

現在、[タイトル ブロック.リビジョン] は条件に使用できません。かわりに、\$CURRENTREV 条件を使用して、ユーザーが選択したリビジョンを識別してください。

## \$CURRENTREV および \$LATESTREV 条件を使用したアイテム関係の作成

2 つの Agile オブジェクト間に、関係と関係ルールを作成するには、[<オブジェクト>.関係.名前] 属性 (関係を作成するため) と [<オブジェクト>.関係.ルール] 属性 (関係ルールを作成するため) に適用される両方のオブジェクトに対する変更権限が必要です。199 ページの「[変更の基本およびルール](#)」を参照してください。

\$CURRENTREV 条件を使用してアイテムの変更を制限するアイテムの変更権限マスクは、アイテム間の関係について選択できるアイテムも制限します。たとえば、条件 \$CURRENTREV Equal To \$STATUS.PENDING によって、アイテムの変更権限を制限する変更権限マスクがユーザーにある場合、このユーザーが変更できるのは、[保留中] ステータスの変更があるアイテムのみです。アイテム間の関係について選択できるアイテムも、[保留中] ステータスの変更があるアイテムに制限されます。

アイテムの変更権限マスクで \$CURRENTREV 条件を使用している場合に、アイテム間の関係に対するこの制限を回避するには、次の条件を使用します。

```
$CURRENTREV Equal to $LATEST
```

この条件を使用して、Item.Relationship.Name という 1 つの [適用先] 属性を持つ変更権限マスクを作成するには、次のようにします。

```
Modify Items $CURRENTREV Equal to $LATEST Applied To  
Item.Relationships.Name
```

この変更権限マスクは、ユーザーが 2 つのアイテム間にアイテムごとの関係を確実に作成できるように、アイテムの変更権限マスクが含まれているすべての役割に指定してください。

---

**注意**      関係は、リビジョン固有のものではありません。

---

# ワークフロー

扱うトピックは次のとおりです。

■ ワークフローにより変更管理プロセスが自動化される方法 .....	109
■ ワークフローの基本 .....	110
■ デフォルトのステータス ベースのワークフロー .....	113
■ ステータス タイプの定義 .....	113
■ [名前を付けて保存] で新規ワークフローを作成する .....	115
■ 一般のワークフロー プロパティ .....	116
■ カスタム ワークフローを作成し、使用する .....	119
■ ステータス プロパティの定義 .....	125
■ 検索条件プロパティの定義 .....	131
■ ワークフローの機能をテストする .....	136
■ ワークフローを実働環境に適用する .....	137
■ アクティブなワークフローを変更する .....	138

[ワークフロー] ノードは、Agile PLM クライアントが承認のためにルーティング可能オブジェクトを作成し、送信する際に選択するデフォルトのワークフローを保存します。このノードから、カスタム ワークフローを定義および作成することもできます。

## ワークフローにより変更管理プロセスが自動化される方法

[ワークフロー] ノードは、Agile PLM クライアントが承認のためにルーティング可能オブジェクトを作成し、送信する際に選択するデフォルトのワークフローを保存します。このノードから、カスタム ワークフローを定義および作成することもできます。

ワークフローとは、ルーティング可能なオブジェクトの作成、変更、レビュー、承認または却下についてユーザーの決定を伴う一連の段階です。Agile PLM ワークフローは、ルーティング可能なオブジェクトが組織の変更管理プロセスを移動する際にたどる自動化された一連のステータスです。(一般的な変更管理プロセスの詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』のワークフローに関する章を参照してください。)

ワークフローにより、変更管理プロセスが様々な面で自動化されます。

- 特定のルーティング可能なオブジェクトで利用できる変更は、すべて設定可能です。ユーザーがルーティング可能なオブジェクトを作成する場合、そのルーティング可能なオブジェクトに対して使用できるワークフローをリストから選択できます。
- リリース済みのルーティング可能なオブジェクトのすべての必須フィールドが入力され、[レビュー] または [リリース済み] のステータス タイプのすべての承認者がサイン オフすると、ルーティング可能なオブジェクトは次のステータスに「自動昇格」します。
- ルーティング可能なオブジェクトの承認や却下は、定義された許可およびその他のチェックの範囲内で行われます。デフォルトの承認者とオブザーバは事前に割り当てることができます。
- ルーティング可能なオブジェクトの作成と進行状況は自動的に電子メールでユーザーに通知されます。たとえば、承認者が指定期間内に回答しない場合、催促の電子メール通知が送信されます。



- 承認者が指定期間内に回答しないと、ルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できるユーザーのエスカレーション担当者に、ルーティング可能なオブジェクトが送付されます。
- ワークフローに複数の [レビュー] と [リリース済み] タイプのステータスを定義すると、ルーティング可能なオブジェクトを複数の承認者とオブザーバのリストに連続して送付することができます。
- ルーティング可能なオブジェクトを承認する権限は、一定期間別のユーザーに委譲することができます。適切な権限があれば、ユーザーは他のユーザーのサインオフ権限を委譲することもできます。

## ワークフローを変更する

次の手順は、[ワークフロー] ノードのワークフローの変更に使用します。

**ワークフローの設定を変更するには:**

1. [ワークフロー設定] で [ワークフロー] をダブルクリックします。[ワークフロー] ウィンドウが表示されます。
2. 変更するワークフロー (たとえば [デフォルトの設計変更]) をダブルクリックします。ワークフロー:[デフォルトの設計変更] ウィンドウが表示されます。設定タブには次のオプションがあります。
  - 一般情報
  - ステータス:[ステータス] テーブルにはステータスのプロパティが定義され、[条件] テーブルには検索条件プロパティが定義されます。
  - 履歴
3. [一般情報] 設定タブを選択し、編集するフィールドで新しい値を入力するか、ドロップダウン リストから選択します。[一般情報] タブの 2 つの [条件基準タイプ] フィールドは、この時点ではそのままにしておきます。
4. 入力完了したら、[保存] をクリックします。
5. 元の設定に戻るかやり直す場合は、[キャンセル] をクリックします。ウィンドウの新規設定をキャンセルするかどうかを確認するメッセージが表示されます。キャンセルする場合は、[OK] を、キャンセルしない場合は、[キャンセル] をクリックします。

このワークフローのステータス プロパティ、または検索条件プロパティを変更するには、[ステータス] タブをクリックします。

アクティブなワークフロー (つまり、有効なワークフローまたはルーティング可能なオブジェクトが移動しているワークフロー) の変更については、138 ページの「[アクティブなワークフローを変更する](#)」を参照してください。

---

**注意**      ワークフロー ステータスへの変更は、プロセスの拡張 (86 ページの「[プロセスの拡張](#)」を参照) と転送 (365 ページの「[Agile Content Service の設定](#)」を参照) にも関連しています。

---

## ワークフローの基本

### ルーティング管理者

送付して承認を得ることができるオブジェクトは、すべてルーティング可能なオブジェクトです。ルーティングと承認の処理を監視するユーザーは、ルーティング管理者と呼ばれます。各種ルーティング管理者 (下表を参照) は、管理者によってユーザーに割り当てられた役割にすぎません。たとえば、あるユーザーに変更分析



者の役割が割り当てられているとすると、そのユーザーの名前は [変更分析者リスト] に表示され、Java クライアントや Web クライアントのユーザーが手動で選択できます。ルーティング管理者は、ルーティング可能なオブジェクトを評価して割り当て、割り当てられたオブジェクトに関して電子メールによる通知を受信します。

次の表に、ルーティング可能なオブジェクトと、対応するデフォルトのルーティング管理者を示します。

ルーティング可能なオブジェクト (基本クラスを併記)	デフォルトのルーティング管理者
変更: MCO (製造元変更) および PCO を除くすべての変更: 設計変更 (ECO)、設計変更依頼 (ECR)、拠点毎変更 (SCO)、出荷停止、期限付き設計変更	変更分析者
変更: 製造元依頼 (MCO)	コンポーネント エンジニア
変更: 価格変更 (PCO)	価格管理者
デklarレーション (すべて)	適合性管理者
パッケージ	プログラム管理者
製品サービス依頼 (PSR): 問題レポートおよび不具合レポート (NCR)	品質分析者
プログラム: アクティビティおよびゲート	PE プログラム管理者
品質変更依頼 (QCR): 是正・予防処置 (CAPA) および検証	品質管理者
転送: コンテンツ転送 (CTO) および自動転送 (ATO)	コンテンツ マネージャ

## その他のワークフローの基本

以下は Agile PLM ワークフローに関するその他の基本情報です。

- ワークフローは固有名、1 つまたは複数の条件基準、およびステータス リストまたはステータスの順序から構成されています。有効なワークフローは表示され、Agile PLM クライアントのユーザーが使用できます。
- 各ワークフローは、少なくとも 1 つの検索条件によって修飾する必要があります。検索条件は、ルーティング可能なオブジェクトが従うことのできるワークフローを判断する広義の修飾語句です。Agile PLM では、ルーティング可能なオブジェクトを、すべてのワークフローの検索条件すべてと照合してテストし、ルーティング可能なオブジェクトと一致するワークフローを判断します。
- ワークフローには、任意の数のステータスを含めることができます。ステータス名は編集可能ですが、基礎をなすステータス タイプは編集できません。必須のステータス タイプは [保留中] の 1 つだけです。ワークフローの最初のステータスは [保留中] でなければなりません。[提出]、[レビュー]、[リリース済み] の 3 つのステータス タイプは、各インスタンスに固有名を付けると、ワークフロー内で複数使用することができます。[レビュー] と [リリース済み] は最も用途が広いステータス タイプです。
- ワークフローのステータス リストにある各ステータスは、ステータス プロパティと検索条件プロパティで構成されています。
- ステータス プロパティでは、自動的に実行されるアクションまたは手動で実行されるアクション (あるいはその両方) がいくつか定義されます。ステータス プロパティでは、割り当てられたユーザーがルーティング可能なオブジェクトを承認、却下するとき、またはレビューすることを忘れた場合にルーティング可能なオブジェクトがどのような状態になるかを決定します。

- 検索条件プロパティは、個別に作成され [条件] ノードに保存される再利用の条件と呼ばれるフィルタです。各ステータスには多数の検索条件プロパティがあります。検索条件プロパティは、ルーティング可能なオブジェクトが、ステータスへの移行時または終了時において、再使用の条件に定義された条件を満たしている場合に、自動的にまたは手動で実行される特定のアクションを説明しています。検索条件プロパティは、ワークフロー全体ではなく、個々のステータスに適用されます。
- たとえば、検索条件プロパティを使用して、ワークフローの特定の [レビュー] ステータスに対するアクションを次のように定義することができます。あるステータスにルーティング可能なオブジェクトが移行した際に、そのルーティング可能なオブジェクトの [製品ライン] フィールドに、「Libra」が含まれている場合は、特定の承認者セットが割り当てられます。また、[製品ライン] フィールドに「Scorpio」が含まれている場合は別の承認者セットが割り当てられます。[製品ライン] フィールドに「Libra」と「Scorpio」の両方が含まれている場合は、両方の承認者セットが割り当てられます。

## できるだけ簡潔に

Agile PLM ワークフローは、自社の変更管理プロセスに豊富なオプションと高い柔軟性を提供する強力な機能です。最良の結果を得るには十分に計画を立て、必要なデータや情報をすべて収集してください。

適切に準備を行うには、Agile PLM ワークフローをカスタマイズする前に、以下の 3 つのステップに従ってください。

1. 調整されたワークフローの情報をコンパイルします。組織に必要な変更管理プロセスは、完全に理解して定義しておく必要があります。ワークフローを自動化して正常に導入するには、この段階での作業が非常に重要となります。

<b>重要</b>	このプロセスは、このマニュアルでは説明されていません。コンサルティング サービスは、オラクル社コンサルティングの Agile 担当のコンサルタントが担当しています。このサービスは、ビジネス プロセスの検証プランやガイダンスの作成を支援します。ビジネス プロセスの検証中に、ワークフローを提案して実際の状況や一般的な使用例をシミュレートすることができます。
-----------	---

2. この章と他の章で Agile PLM ワークフローについて学習します。
  - ステータス タイプの目的や制限を理解していることを確認します。113 ページの「[ステータス タイプの定義](#)」を参照してください。
  - 変更せずにすぐ使用できるデフォルトのワークフローをまず使用します。113 ページの「[デフォルトのステータス ベースのワークフロー](#)」を参照してください。
  - 企業のニーズを満たす独自のワークフローをテスト環境で作成します (次のステップを参照してください)。119 ページの「[カスタム ワークフローを作成し、使用する](#)」を参照してください。
3. テスト環境を確立し、テスト手順を最後まで実行します。新しいワークフローはすべてテストしてください。たとえば、ルーティング可能なオブジェクトを作成し、有効なワークフローを通じてそのルーティング可能なオブジェクトを送付します。どのような場合でも、新しいワークフローが正しく機能することを確認し、必要に応じて変更してください。詳細は、以下を参照してください。
  - 136 ページの「[ワークフローの機能をテストする](#)」
  - 137 ページの「[ワークフローを実働環境に適用する](#)」
  - 138 ページの「[アクティブなワークフローを変更する](#)」

企業に必要なワークフローはいくつでも作成することができますが、まず出荷時に設定されているデフォルトのワークフローで使用できる機能を試してみることをお勧めします。あまり多くワークフローを作成しすぎると、後でメンテナンスに関する問題が発生する可能性があります。

## デフォルトのステータス ベースのワークフロー

Agile PLM は以下のステータス ベース ワークフローを提供しています。

- デフォルトのアクティビティ
- デフォルトの自動転送
- デフォルトの検証
- デフォルトの是正・予防処置
- デフォルトの設計変更
- デフォルトの設計変更依頼
- デフォルトのコンテンツ転送
- デフォルト デクラレーション
- デフォルトの期限付き設計変更
- デフォルトのファイル フォルダ
- デフォルトのゲート
- デフォルトの製造元依頼
- デフォルトの不具合レポート
- デフォルトのパッケージ
- デフォルトの価格変更
- デフォルトの問題レポート
- デフォルトの拠点変更クラス
- デフォルトの出荷停止

---

**注意** デフォルトの ATO およびデフォルトのファイル フォルダは読取専用のワークフローです。変更はできません。

---

デフォルトのワークフローは、変更なしで 사용할 ことができます。これらは、すべてのルーティング可能オブジェクトがワークフローの条件に一致するよう保証しています。また、デフォルトのワークフローをニーズに合わせて変更することもできます。デフォルトのワークフローを変更しても必要条件が満たされない場合は、カスタム ワークフローを作成することができます。

**注意** 「最良の実施例」に従って、デフォルトのワークフロー セットは無修正、無効な状態で保存しておくことをお薦めします。[名前を付けて保存] を使用して簡単に保存できます (115 ページの「[\[名前を付けて保存\] で新規ワークフローを作成する](#)」を参照してください)。

## ステータス タイプの定義

Agile PLM ワークフローは、ステータスのリストによって設定され、各ステータスは特定のステータス タイプとなっています。ワークフローは 5 つの基本的なステータス タイプ、[保留中]、[提出]、[レビュー]、[リリース済み] と [完了] から作成されます。先に進むことに失敗し、保存する必要のあるルーティング可能なオブジェクトは、[キャンセル] と [中断] という 2 つの特別なステータス タイプで処理されます。

ステータス タイプには順序についての依存関係があり、ワークフロー内のどの箇所でどのくらい頻繁に使用することができるかを決定します。これらの依存関係を明確に理解することが、使用可能なワークフローを構築する上で不可欠です。次の表では、ステータス タイプを定義し、これらの依存関係について詳しく説明します。

ワークフローでは必要な数だけステータスを使用することができます。複数回使用できるステータス タイプは、[提出]、[レビュー]、[リリース済み] です。これらのステータス タイプは異なる名前を付けて異なるステータスを定義すれば複数回使用できます。ワークフローに複数の [レビュー] と [リリース済み] タイプのステータスを定義すると、ルーティング可能なオブジェクトはいろいろな承認者やオブザーバのリストに連続して送付することができます。

ステータス タイプ	定義
ルーティング可能なオブジェクトに対してワークフローが選択される前の状態	
未割当	[未割当] は、ルーティング可能なオブジェクトに対してワークフローが設定される前のデフォルトの初期ステータス名です。
基本ステータス タイプ (アクティブ)	
保留中	<ul style="list-style-type: none"> <li>作成者はルーティング可能なオブジェクトを作成中です。</li> <li>ワークフローは [保留中] ステータス タイプで開始する必要があります。このタイプは各ワークフローの最初のステータスです。</li> </ul>
提出	[提出] ステータス タイプでは、ルーティング可能なオブジェクトが特定のルーティング管理者に送られ、ルーティング管理者はルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに昇格するかどうかを決定します。
レビュー	[レビュー] ステータス タイプでは、ルーティング可能なオブジェクトが CCB メンバー (承認者とオブザーバ) に送付されます。すべての承認者がサインオフし、必須フィールドの入力が完了すると、自動昇格がオンになっている場合、ルーティング可能なオブジェクトは自動的にステータス リストの次のステータスに昇格し、自動昇格がオフになっている場合、ルーティング管理者により手動で移動されます。
リリース済み	<ul style="list-style-type: none"> <li>ルーティング可能なオブジェクトが最初の [リリース済み] ステータス タイプになると、ソフトウェアにより一連のチェックが実行され、新規 BOM を使用して対象アイテムの新規リビジョン (ECO) が作成されるか、新規リビジョンにレッドラインが組み込まれるか、製造元部品情報 (MCO) が更新されます。</li> <li>[レビュー] ステータス タイプと同様に、[リリース済み] ステータス タイプでは、承認者とオブザーバを指定してサインオフのために送付し、自動昇格させることができます。</li> <li>最初の [リリース済み] ステータスのみが実際にルーティング可能なオブジェクトをリリースします。異なるステータス名が付けられた、あとに続く [リリース済み] ステータス タイプは、リリースされたルーティング可能なオブジェクトの追加のレビュー/承認サイクルとなります。</li> <li>リリース済みのルーティング可能なオブジェクトを最初の 3 つのステータス タイプに戻すと、ルーティング可能なオブジェクトが未リリースとなり収集された承認が削除されます。対象アイテムがない期限付き設計変更は、未リリースにできます。</li> </ul> <p><b>注意:</b> Agile PLM では、新しいライフサイクル フェーズに値を指定しない状態でアイテムのリリースを許可する設計変更ワークフローを設定できますが、設定管理の最良の実施例では、ECO または MCO でアイテムをリリースするには、その前に、常に新しいライフサイクル フェーズを指定しておく必要があります。新しいライフサイクル フェーズを確実に存在させるには、そのフェーズをワークフロー条件の必須フィールドにします。</p>

ステータス タイプ	定義
完了	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ [完了] ステータス タイプはワークフローの最後のアクティブなステータスであり、一度だけ使用されます。</li> </ul>
特別なステータス タイプ (停止)	
中断	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ [中断] ステータス タイプは、ルーティング可能なオブジェクトをワークフローから一時的に削除し、後で再挿入するための方法を提供します。これらのステータスは、アクティブな一連のステータスの一部になることはないため、ステータス リストの最後に追加されます。</li> <li>◦ [中断] ではルーティング可能なオブジェクトが未リリースになりません。</li> <li>◦ ルーティング可能なオブジェクトを、ステータスが [完了] 以外のワークフロー内で、他のステータスから [中断] に手動で移動します ([手動による次の有効なステータス] プロパティで有効な次のステータスとしてリストされていると想定)。変更は、ワークフローに手動で戻すまでこれらのステータスのままになります。変更を移動するには、適切なステータスの変更権限が必要です。</li> </ul>
キャンセル	<ul style="list-style-type: none"> <li>◦ [キャンセル] ステータスは、ワークフローからルーティング可能なオブジェクトを削除する手段を提供します。いったん [キャンセル] ステータスへ移動したワークフローは、再度アクティブにすることはできません。</li> <li>◦ [キャンセル] は、ルーティング可能なオブジェクトを未リリースにします。</li> <li>◦ ルーティング可能なオブジェクトを、ステータスが [完了] 以外のワークフロー内で、他のステータスから [キャンセル] に手動で移動します ([手動による次の有効なステータス] プロパティで有効な次のステータスとしてリストされていると想定)。</li> </ul>

デフォルトのワークフローは変更を加えずに使用できます。ワークフローの使用方法や機能に慣れるまで、変更してないデフォルトのワークフローを使用することをお勧めします。

**注意** Agile では [名前を付けて保存] を使用して、すべてのデフォルトのワークフローの「アーカイブ」コピーを作成することをお勧めします。この作業を行うことにより、デフォルトのワークフローをカスタマイズした場合に、必要であれば変更されていないバージョンに戻ることができるからです。

## [名前を付けて保存] で新規ワークフローを作成する

既存のワークフローから新しいワークフローを作成して、新しい名前を付けることができます。これにより、デフォルトのワークフローのアーカイブや、実績に基づくデフォルトのワークフローに基づいたカスタム ワークフローを簡単に作成することができます。

**既存のワークフローから新規または「アーカイブ」ワークフローを作成するには:**

1. [ワークフロー設定] で [ワークフロー] をダブルクリックします。[ワークフロー] ウィンドウが表示されます。
2. 新しいワークフローの基礎とするワークフローをダブルクリックします。そのワークフローのウィンドウが表示されます。
3. [名前を付けて保存] ボタンをクリックし、説明となる固有の名前を入力します。  
アーカイブ コピーを作成している場合は、使用できないワークフローとわかるような名前、たとえば「EXAMPLE Default Chg Orders」などの名前を付けてください。
4. [OK] をクリックします。設定ウィンドウが新しい名前をタイトル バーに表示します。

5. 必要に応じて情報を変更し、[保存] をクリックします。

新しいワークフローは無効になり ([有効] プロパティは [いいえ])、アーカイブ ワークフローとしてそのままの状態で保つことができます。また、カスタマイズしたワークフローの作成が終了した場合に有効にすることもできます。

**注意** [名前を付けて保存] を使用して作成されたワークフローは無効になります。カスタムワークフローを作成した後は忘れずに有効にしてください。

[ステータスの変更] 権限マスクは、それぞれ 1 つのワークフローの 1 つの指定されたステータスに適用されます。[名前を付けて保存] で作成したワークフローを含め、新たに作成し、有効化した新規ワークフローすべての各ステータスに対し、[ステータス変更] 権限マスクを作成する必要があります。203 ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。

## 一般のワークフロー プロパティ

[ワークフロー] ノードをダブルクリックすると、[ワークフロー] ウィンドウが開き、ここに利用可能なデフォルトのワークフローと、ユーザーが作成したカスタム ワークフローが表示されます。

ウィンドウには以下のボタンがあります。[新規作成]、[削除]、[ワークフロー初期設定の編集]、[インポート]、[エクスポート]、[すべてエクスポート]、[有効]、[無効]。

[ワークフロー初期設定の編集] ボタンは、以下のフィールドを含むダイアログ ボックスを表示します。

フィールド	タイプ	デフォルト
デフォルトの初期ステータス名	テキスト	未割当
ステータス スタンプの色	(色の) リスト	青

## [一般情報] タブ

[ワークフロー] ウィンドウでデフォルトのワークフローをダブルクリックすると、設定ウィンドウの [一般情報] タブが開きます。このタブには [削除]、[名前を付けて保存]、[エクスポート] のボタンがあります。次のフィールドから構成されています。

フィールド	説明
名前	ワークフローの名前。各ワークフロー名は固有でなければなりません。
有効	ワークフローを有効または無効にします。有効なワークフローは表示され、Agile PLM クライアントのユーザーが使用できます。
オブジェクト タイプ	ワークフローが適用される、ルーティング不可能オブジェクトのタイプです。以下で利用可能です。変更、CTO、QCR、PSR、プログラム、パッケージ。オブジェクト タイプのリストは、40 ページの「 <a href="#">Agile PLM クラス構成</a> 」を参照してください。  ワークフローが作成された後、[オブジェクト タイプ] は読取専用となります。
一致条件	どのルーティング可能なオブジェクトがワークフローに従うかを決定します。すべての設計変更など、再利用の条件を使用することができます。

フィールド	説明
ワークフロー条件 基準タイプ	ワークフローを使用できる変更を決定する一致条件を設定します。このプロパティで、ルーティング可能なオブジェクトが対象アイテムに関する情報を含む 1 つまたは複数の再利用の条件を満たしている場合の処理を設定できます。  [同一]、[すべて]、[一部] から選択します。117 ページの「 <a href="#">ワークフロー条件基準タイプ</a> 」を参照してください。
ステータス条件 基準タイプ	対象アイテムに関する情報を含む検索条件プロパティがルーティング可能なオブジェクトに適用される場合の動作を決定します。  [同一]、[すべて]、[一部] から選択します。118 ページの「 <a href="#">ステータス条件基準タイプ</a> 」を参照してください。

ワークフローの名前と、そのワークフローの有効/無効はこのレベルで設定されます。デフォルトのワークフローはすでに有効になっています。ワークフローが有効な場合の動作の詳細は、125 ページの「[ステータスプロパティの定義](#)」を参照してください。アクティブなワークフローの変更や問題の修正の詳細は、138 ページの「[アクティブなワークフローを変更する](#)」を参照してください。

## ワークフロー条件基準タイプ

[条件基準] プロパティで各ワークフローについて再利用の条件のリストを指定することにより、どの変更がどのワークフローを使用するかを限定することができます。以下は、検索条件として適用される再利用の条件の例です。

- すべての MECO - MECO (機械系 ECO) であるすべての変更を検索します。
- Scorpio ECO - ルーティング可能なオブジェクトの [製品ライン] フィールドに「Scorpio」を含むすべての ECO を検索します。
- Libra プロジェクト - [製品ライン] フィールドに「Libra」を含むアイテムが [対象アイテム] タブに存在するすべての変更を検索します。

たとえば、「一般用」というワークフローを作成し、その条件基準として前述の 3 つの再利用の条件 (すべての MECO、Scorpio ECO、Libra プロジェクト) を選択したとします。

例 1: Agile PLM クライアント ユーザーが、機械系 ECO (MECO) である変更を作成した場合、一般用ワークフローの検索条件の 1 つ (すべての MECO) に一致します。「一般用」のワークフローは変更の [カバー ページ] タブの [ワークフロー] ドロップダウン リスト (Java クライアント)、または [MECO 作成] ウィザードの [カバー ページの情報を入力] ページ (Web クライアント) に表示されます。

例 2: ECO の [製品ライン] フィールドに「Scorpio」を含む ECO である変更を作成した場合、一般用ワークフローの検索条件の 1 つ (Scorpio ECO) に一致します。「一般用」のワークフローは変更の [カバー ページ] タブの [ワークフロー] ドロップダウン リスト (Java クライアント)、または [MECO 作成] ウィザードの [カバー ページの情報を入力] ページ (Web クライアント) に表示されます。

例 3: 設計変更を作成し、[製品ライン] フィールドに「Libra」を含むアイテムを [対象アイテム] タブに追加した場合、Agile PLM では各対象アイテムの [対象アイテム] タブの [製品ライン] フィールドを確認します。「一般用」のワークフローは変更の [カバー ページ] タブの [ワークフロー] ドロップダウン リスト (Java クライアント)、または [MECO 作成] ウィザードの [カバー ページの情報を入力] ページ (Web クライアント) に表示されます。ワークフローの [一致条件タイプ] プロパティの設定により異なります。

- 同一 - (デフォルト) すべての対象アイテムが同一の対象アイテムに基づいた再利用の条件 (この場合 Libra プロジェクト) に一致する必要があります。



- すべて - 検索条件として複数の対象アイテムに基づいた再利用の条件を使用する場合、各対象アイテムは少なくとも 1 つの対象アイテムに基づいた再利用の条件に一致する必要があります。ただし、各対象アイテムが同一の再利用の条件に一致する必要はありません。
- 一部 - 1 つまたは複数 (すべてではない) の対象アイテムが対象アイテムに基づいた再利用の条件 (この場合 Libra プロジェクト) に一致する必要があります。

[対象アイテム] タブにアイテムを追加し、ルーティング可能なオブジェクトのタブのフィールドにデータを入力する場合、[カバー ページ] タブの [ワークフロー] ドロップダウン リストは、そのときに適用される検索条件によって変わります。

## ステータス条件基準タイプ

ワークフローの [ステータス] タブには、個別のステータスについて再利用の条件が表示されるため、ステータス条件基準タイプは、各ステータスの再利用の条件のグループに適用されます。プロパティが Agile PLM クライアントに適用されるのは、ステータスの検索条件プロパティに、ルーティング可能なオブジェクトに関連する対象アイテムの情報 (たとえば、どの承認者またはオブザーバを割り当てるか) が記述されている場合です。

以下に、プロパティの値、特徴、例を示します。

- 同一 - (デフォルト) すべての対象アイテムが同一の対象アイテムに基づいた再利用の条件に一致する必要があります。対象アイテムすべてが同一の再利用の条件に一致しない場合、ECO はいずれの終了条件も満たさず、[終了時に検索条件が適用されない場合は通知する] プロパティが適用されます。
- すべて - ステータスの検索条件プロパティとして複数の対象アイテムに基づいた再利用の条件を使用する場合、各対象アイテムは少なくとも 1 つの対象アイテムに基づいた再利用の条件に一致する必要があります。ただし、各対象アイテムが同一の再利用の条件に一致する必要はありません。[すべて] では、各対象アイテムに適切な承認者がいることが確認されます。

たとえば、あるステータスの再利用の条件に対象アイテムの 1 つが一致すると、特定された承認者が ECO の [ワークフロー] タブに追加されます。各対象アイテムが再利用の条件のいずれにも一致しない場合、ECO はいずれの終了条件も満たさず、[終了時に検索条件が適用されない場合は通知する] プロパティが適用されます。

- 一部 - 1 つ以上の対象アイテム (すべてではない) が、各ステータスの検索条件プロパティにある再利用の条件に基づいて、少なくとも 1 つの対象アイテムと一致する必要があります。あるステータスの再利用の条件に対象アイテムの 1 つが一致すると、承認者が ECO に追加されます。

[ステータス条件基準タイプ] の一般設定 (つまり、ワークフローの [一般情報] タブ) は、現在のステータスに関して、再利用の条件 ([ステータス] タブで、そのステータスの [条件] テーブルにある条件のグループ) と、ワークフロー内の次のステータスに対する再利用の条件の両方と照合して検証されます。

たとえば、あるユーザーが、次のような対象アイテムを含む「ECO2」という変更を作成したとします (Java クライアントの場合、[対象アイテム] タブに作成されます)。

- 対象アイテム 1 (AI-1): 製品ライン = Aries、カテゴリ = 電気系
- 対象アイテム 2 (AI-2): 製品ライン = Aries、カテゴリ = 機械系

ECO2 の [提出済み] ステータス ([提出] ステータス タイプ) の [ステータス] タブの [条件] テーブルには、以下のような再利用の条件があります。

- 再利用の条件 W (RC-W): 製品ライン = Aries, 対象アイテム.カテゴリ = 電気系、必須フィールド = 変更の説明



次に、ECO2 の [CCB] ステータス ([レビュー] ステータス タイプ) の [ステータス] タブの [条件] テーブルには、以下のような再利用の条件があります。

- 再利用の条件 X (RC-X): 製品ライン = Aries、対象アイテム.カテゴリ = 機械系、承認者 = ポール

作成者が変更を [提出] ステータスから [CCB] ステータスに移動するときに、ECO2 の [ステータス条件基準タイプ](SCMT) プロパティが [すべて] に設定されている場合、AI-1 (電気系部品) は RC-W に一致しますが、AI-2 (機械系部品) は RC-W に一致しません。RC-X も [提出] ステータスに切り替えると、AI-2 は [提出] ステータスの条件に一致しますが、これは、[検索条件一致タイプ] が [すべて] に設定されているためです。変更は、AI-1 が CCB の RC-X に一致しないため CCB に移動できません。

[ステータス条件基準タイプ](SCMT) が [一部] に設定されている場合、対象アイテムのどちらか 1 つが各ステータスの条件に一致するため、作成者はどちらの場合でも変更を昇格させることができます (このケースでは、各ステータスの AI は異なり、1 つは「電気系」で、もう 1 つは「機械系」です)。

[ステータス条件基準タイプ](SCMT) が [同一] に設定されている場合、RC-X を [提出] に追加した後でも、各対象アイテムはそれぞれの条件に一致しないため、ECO2 を昇格させることはできません。AI-1 は RC-W に一致し、AI-2 は RC-X に一致します。

## カスタム ワークフローを作成し、使用する

新しいワークフローは、デフォルトのワークフローの 1 つを新しい名前で作成し (115 ページの「[名前を付けて保存](#)」で[新規ワークフローを作成する](#)」を参照)、目的にあわせてステータス プロパティや検索条件プロパティを変更することで簡単に作成できます。

カスタム ワークフローを最初から作成することの意義は、ユーザーがワークフローのすべての要素を経験するため、ワークフローが希望どおりの動作をしない場合のトラブルシューティングのポイントがどこにあるかも含めて、全体的なプロセスをよりよく知ることができるという点にあります。

カスタム ワークフローを作成する場合は、以下の内容を指定します。

- ワークフローの名前
- 条件基準 - 少なくともワークフローに対して 1 つ
- ステータス リスト - ステータスの数、ステータス名、ステータス タイプなど
- ステータス プロパティ - ワークフローのステータスごとに定義
- 検索条件プロパティ - ワークフローのステータスごとに定義

後続の各セクションでは、図に示すワークフローの作成方法を説明します。このカスタマイズされたワークフローには、「ステータス タイプごとにステータスが 1 つ」という構造のデフォルトのワークフローとは異なる点がいくつかあります。

- [提出] ステータスは [保留中] の直後に続くステータスではありません。
- [レビュー] ステータスは 3 つあります。例として挙げた名前自体よりも、必要な任意の数の [レビュー] ステータスを使用できる点が重要です。
- [リリース済み] ステータス タイプを使用するステータスは 2 つありますが、2 番目のステータスには「製造計画」という名前が付けられており、もう 1 つの [レビュー] ステータスのような役割を果たします。[レビュー] ステータスと [リリース済み] ステータスのタイプは、承認者属性や自動昇格属性など多くの属性を共有しています。このため、ルーティング可能なオブジェクトを未リリースにすることなくレビュー サイクルを追加することが許可されています。ルーティング可能なオブジェクトが [リリース済み] ステータス タイプから [レビュー] ステータスになると、この変更は未リリース状態になります。こ

これは次のことを意味します。

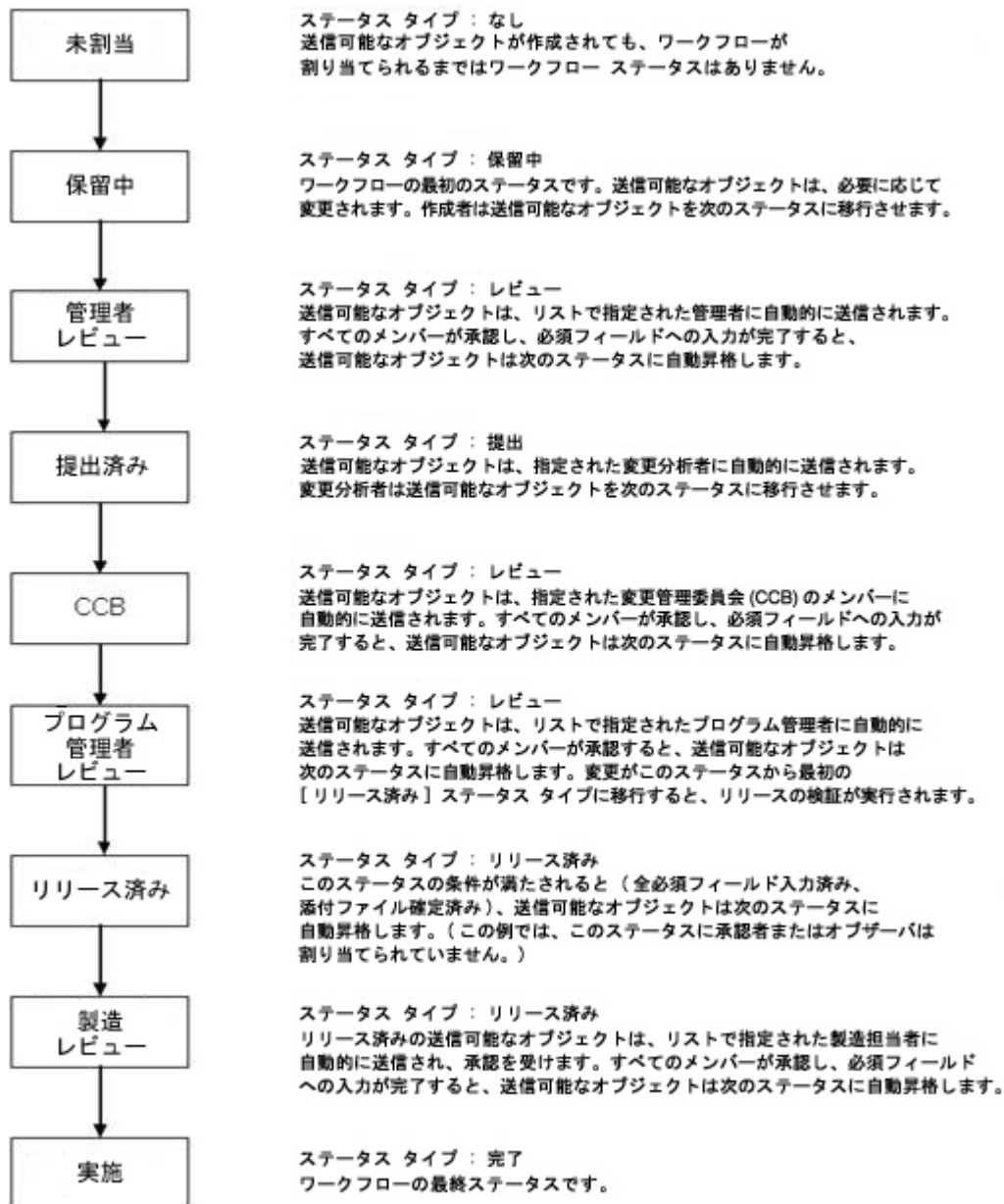
- リリース検証を通じてルーティング可能なオブジェクトを再度リリースできる状態にする必要があります。134 ページの「[リリース検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証](#)」を参照してください。
- 対象アイテムに割り当てられたリビジョンは無効になります。

## 作業を開始する前に

作業を開始する前に

独自のワークフローを作成する前に、できるだけ慎重に計画を立てることが重要です。このプロセスを最大限に活用するには、次の作業をすべて実行する必要があります。

- このマニュアルを読み、ワークフローのドキュメントについてよく理解してください。
- 1 つ以上のデフォルトの Agile PLM ワークフローを有効にして実際に使用する (113 ページの「[デフォルトのステータス ベースのワークフロー](#)」を参照)。
- 作成する独自のワークフローで何を行う必要があるかを定義する特定の情報やデータを収集する。この内容にはデフォルトのワークフローとは異なる一連のステータスについての情報も含まれます。



## ワークフローを作成する場合のガイドライン

以下に記載されているガイドラインには、カスタム ワークフローを構築するために必要な手順が説明されています。これらの手順については、以下のセクションで詳しく説明します。

### カスタム ワークフロー構築するには:

- ワークフローによる処理が必要なルーティング可能なオブジェクトの種類を含めて、変更管理プロセスを定義します。  
ワークフロー プロセスの定義については、Agile 担当者または Agile コンサルティング担当者にお問い合わせください。
- 最初に [条件] ノードに必要な再利用の条件をすべて作成します。これらの条件は、システムに対してそのワークフロー独自の特徴を記述するために必要です。  
99 ページの「[条件](#)」を参照してください。
- 新しいワークフローを作成して固有の名前を付けますが、有効にはしないでください。有効にするのは、最終段階で行います。  
122 ページの「[新規ワークフローを作成する](#)」を参照してください。
- 条件基準については、最低 1 つの再利用の条件 ([条件] ノードで定義) を選択してください。
- 新しいワークフローの [ステータス] リストを作成します。
- 使用できるステータス プロパティが各ステータス タイプによって異なることを考慮しながら、[ステータス] タブで各ステータスのプロパティを変更します。
- [ステータス] タブの [検索条件] テーブルに検索条件を追加し、ステータスの検索条件プロパティ、特に必須フィールド、承認者とオブザーバを定義します。
- ユーザーに新しいワークフローのステータスの改良を許可するための適切な権限を割り当てます。ワークフローに関連した権限には、承認者/オブザーバの追加、承認者/オブザーバの削除、ステータスの変更、オーバーライド、権限委譲 (自分)、および権限委譲 (他のユーザー) があります。  
185 ページの「[権限と権限マスク](#)」を参照してください。新規ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移動するには、そのワークフローのステータス変更権限が必要です。203 ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。
- システム全体のワークフロー機能について、スマートルールを設定します。223 ページの「[一般システム設定](#)」を参照してください。
- 変更したワークフローを有効にしてテストします。準備が整ったら、Agile PLM のユーザーに使用できる旨を通知します。ユーザーは次のログイン時より Agile PLM を使用できます。

## 新規ワークフローを作成する

次の手順に従う場合は、図のワークフローをモデルとして使用できます。どのような場合でも、このように、名前とステータス タイプの両方で定義した新しいワークフローのステータスの表を作成すると役立ちます。

	ステータス名	ステータス タイプ
	作成	保留中
	レビュー - PM	レビュー
	提出 - CA	提出
	レビュー - CCB	レビュー
	レビュー - Sr. PM	レビュー
	リリース済み	リリース済み

	ステータス名	ステータス タイプ
	レビュー - 製造計画	リリース済み
	実施	完了

#### 新規ワークフローを作成するには:

1. [ワークフロー設定] で [ワークフロー] をダブルクリックします。[ワークフロー] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] をクリックします。[ワークフローの作成] ダイアログ ボックスが開きます。
3. 「Taurus ECO」のような、固有の名前を入力します。

作成するワークフローには、系統的な名前を付けることをお勧めします。命名規則については、101 ページの「[新規条件を作成する](#)」および 209 ページの「[権限マスクに名前を付ける](#)」を参照してください。

[一般情報] タブの [有効] フィールドは、この時点では利用できません。新しいワークフローは作成が完了するまで有効にできません。新しいワークフローの作成が完了した場合、使用する前にまずそのワークフローを有効にする必要があります。Agile PLM クライアント ユーザーには、次回 Agile PLM にログインするとき新しく有効にされたワークフローが表示されます。

4. [ワークフロー条件基準タイプ] と [ステータス条件基準タイプ] のドロップダウン リストでは、[同一] を許可 (または選択) します。

条件基準は、ルーティング可能な各オブジェクトに使用できるワークフローを検索する際に使用します。Agile PLM は、すべてのワークフローの条件基準すべてをチェックし、ルーティング可能なオブジェクトと一致するワークフローを判断します。たとえば、「すべての Taurus ECO」という名前の再利用の条件がワークフローの条件基準である場合、ユーザーは ECO のそのワークフローを Taurus プロジェクトから選択します。

これら 3 つの検索条件プロパティを最大限に活用するためには、様々な要素について十分考慮する必要があります。詳細は、103 ページの「[再利用の条件で \[対象アイテム\] タブのフィールドを使用する](#)」を参照してください。

5. [オブジェクト タイプ] のドロップダウン リストから、適切な基本クラスを選択します。
6. [条件基準] ドロップダウン リストで、スクロールダウンし、[すべての変更] を選択します。
7. [OK] をクリックします。新しいワークフローが、[ワークフロー] ウィンドウのリストに追加されます。

新しいワークフローの設定を完了するには、[ワークフロー] ウィンドウでダブルクリックし、定義済みのステータス プロパティと検索条件プロパティを使用して [ステータス] を作成する必要があります。

#### 新規ワークフローのステータスを作成するには:

1. ワークフローを開き、[ステータス] タブをクリックし、[ステータス] テーブルのすぐ上の [新規作成] ボタンをクリックします。[ワークフロー ステータスの追加] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. 適切な名前を入力します。例では Originate になっています。
3. [ステータス タイプ] ドロップダウン リストで、適切なステータス タイプを選択します。この例では [保留中](すべてのワークフローの最初の必須ステータス) を選択します。
4. [ステータス スタンプの色] ドロップダウン リストから、該当するステータスのときに Agile PLM クライアントに表示されるステータス スタンプのタイプの色を選択します。

5. [OK] をクリックします。このプロセスをワークフローのすべてのステータスに対して繰り返します。

[ステータス テーブル] テーブルにスクロールすると、値を入力する必要がある 2 つのステータス プロパティ [終了時に検索条件が適用されない場合は通知する] と [手動による次の有効なステータス] が確認できます。

検索条件プロパティを検討する前に、すべてのステータスを作成し、ステータス プロパティを指定することをお勧めします。しかし、多数の要素を検討する必要があるため、エラーのないワークフローを作成するには、独自の方法や一貫性のある方法を構築することが最も重要です。

#### 新しいワークフローに対する再利用の条件を指定するには:

1. ワークフローを開いて [ステータス] タブをクリックし、[ステータス] テーブルでステータス (行) を選択し、次に、[条件] テーブルのすぐ上の [新規作成] ボタンをクリックします。[ワークフロー条件の追加] ダイアログ ボックスが表示されます。
2. [ステータス名] フィールドはグレー表示されており、選択したステータス名が表示されています。[条件の選択] フィールドの下矢印をクリックし、このステータスに対して 1 つ、または複数の再利用の条件を選択します。
3. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

このプロセスを新しいワークフローのすべてのステータスに対して繰り返します。

4. カスタム ワークフローの作成を完了し、ルーティング可能なオブジェクトに適用できる状態にあることを検証 (136 ページの「[ワークフローの機能をテストする](#)」を参照) した後は、そのワークフローを有効にします。ワークフローの設定ウィンドウで、[有効] のドロップダウン リストから [はい] を選択します。

**注意** ワークフローの新規作成時は無効になっています。カスタム ワークフローを作成した後は忘れずに有効にしてください。

**注意** 新規ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移動するには、そのワークフローのステータス変更権限が必要です。203 ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。

ワークフローを有効化した後、Agile PLM クライアント ユーザーはクライアント アプリケーションを再起動する際に新規ワークフローを見ることができます。

## 新規ワークフローが有効にされた場合

ワークフローが有効になると、システムでは以下の項目がチェックされます。

- 最初のステータスは [保留中] ステータス タイプである。
- [完了] ステータス タイプがある場合、ワークフローの最後のステータスである (特別ステータスの [キャンセル] と [中断] を除く)。
- ワークフローの検索条件には、少なくとも 1 つの再利用の条件が含まれている。
- ワークフローの各ステータスには、そのワークフローの [条件] テーブルで最低 1 つの再利用の条件が割り当てられている。
- [キャンセル] または [中断] ステータスがある場合は、ステータス リストの最後に表示される。[中断] ステータスがある場合は、リストの最後のステータスである。

以上の条件がすべて満たされていない場合、エラー メッセージが表示され、ワークフローは有効になりません。

## ユーザー グループに送信する

ユーザーは、有効な承認者とオブザーバを使用して、ユーザー グループ (パーソナル グループではなくグローバル グループ) を承認者またはオブザーバとして割り当てることができます。管理者または Agile Web クライアントがユーザー グループを割り当てるときに、ルーティング可能なオブジェクトをサインオフする必要があるのは 1 人のメンバーか、または全メンバーかを選択できます。[グループ名 - Any] または [グループ名 - All] を選択します。161 ページの「[変更の承認者としてユーザー グループを追加する](#)」を参照してください。

[グループ名 - Any] (たとえば、[製造 - Any]) がルーティング可能なオブジェクトの承認者またはオブザーバとして割り当てられている場合は、以下の条件が満たされています。

- ユーザー グループに含まれるすべてのユーザーの受信トレイにルーティング可能なオブジェクトが表示されます。
- ユーザー グループに含まれるすべてのユーザーが電子メール通知を受信します。
- ルーティング可能なオブジェクトを承認する必要があるのは、ユーザー グループのメンバーのうち 1 人のみです。1 人のユーザーがルーティング可能なオブジェクトを承認すると、ユーザー グループのすべてのユーザーの受信トレイは更新され、該当する場合、ルーティング可能なオブジェクトは削除されます。

ルーティング可能なオブジェクトをサインオフしたユーザーは、[ワークフロー] タブにサインオフ ユーザーとして記録されます。

[グループ名 - All] (たとえば、[製造 - All]) がルーティング可能なオブジェクトの承認者またはオブザーバとして割り当てられている場合は、以下の条件が満たされています。

- ユーザー グループに含まれるすべてのユーザーの受信トレイにルーティング可能なオブジェクトが表示されます。
- ユーザー グループに含まれるすべてのユーザーが電子メール通知を受信します。
- ユーザー グループのメンバーであるユーザー全員が、ルーティング可能なオブジェクトを承認する必要があります。

## ステータス プロパティの定義

このセクションでは、Agile PLM ワークフローにあるすべてのステータス プロパティについて説明します。[ワークフロー] ウィンドウでデフォルトのワークフローをダブルクリックし、次に [ステータス] タブをクリックすると、ステータス プロパティが [ステータス] テーブルに表示されます。テーブル内のステータスをダブルクリックすると、[ワークフロー ステータス:[ステータス名]] ダイアログ ボックスが表示されます。

## 終了時に検索条件が適用されない場合は通知する

回答する質問: ルーティング可能なオブジェクトが現在の条件と一致しない (進行が滞っている) 場合に通知を受けるユーザーは誰ですか。

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): \$CHANGEANALYST (34 ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照)

このプロパティは、現在のステータスの検索条件プロパティに定義されている条件と一致しないために、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに進めない場合に、自動的に電子メール通知を受け取るユーザーを指定します。昇格を許可するための条件がないためにルーティング可能なオブジェクトをワークフローの次のステータスに昇格できない場合、指定されたユーザーは自動的に電子メール通知を受け取ります。



[アドレス帳] ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー グループ、作成者、承認者 (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて)、およびオブザーバ (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて) を追加します。

**注意** 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

## 手動による次の有効なステータス

回答する質問: ルーティング可能なオブジェクトが次に移行できるステータスには、ステータス リストの次のステータス以外にどんなものがありますか。

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): (一般的なデフォルトなし)

[選択肢] および [選択済み] ダイアログを使用して、各ステータスに、ルーティング可能なオブジェクトが現在のステータスから移行できる有効な「次のステータス」をさらに定義します。ワークフロー ステータス リストの次のステータスは常に有効であると判断されるため、ステータスは [選択肢] リストに表示されません。(当然、現在のステータスが有効な「次のステータス」になることはありません。)[完了] はルーティング可能なオブジェクトの最後のステータスであり、[キャンセル] または [中断] はワークフローの一部ではないため、有効とはみなされません。したがって、これらのステータスについては指定する必要があります。

## 変更を進める際に送信スリップの内容を保存する

ユーザーがワークフローを次のステータスに手動で進めると、送信スリップが表示されます。この送信スリップには、承認者、オブザーバ、通知対象ユーザー、およびコメントを記載します。このスリップの完成には数分かかります。ユーザーが [送信] をクリックすると、Agile では、ワークフロー ステータス自動検証が実行され、問題が見つかった場合はダイアログ ボックスが表示されます。続行するかどうかを尋ねるメッセージが提示されます。以前は、[いいえ] を選択するとルーティング可能なオブジェクトに戻り、作業の内容がすべて消去されました。このリリースでは、送信スリップの内容が保存されるように修正されました。

## 以前および現在の CCB メンバーすべてに、ワークフロー ステータスのコメントと通知を送信する

変更の [レビュー] または [リリース済み] ステータスからコメントを送信するときに、ユーザーは、そのコメントを現在のレビュー ステータスまたはリリース済みステータス (つまり、ワークフローの現在のステータス) のレビューアのみを送信するか、現在と以前の [レビュー] および [リリース済み] ステータスのレビューアすべてに送信するかを指定できます。新しいドロップダウン ボックス ([レビューアへの通知:] チェックボックスの後) には、[現在のステータス] と [現在のステータスと前のステータス] の選択肢があります。

## 自動昇格

回答する質問: システムはルーティング可能なオブジェクトを自動的に次のステータスに昇格させますか。  
一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): いいえ

[自動昇格] プロパティを使用すると、ルーティング可能なオブジェクトは自動的に次のステータスに進むことができます。[レビュー] と [リリース済み] の各タイプについて、ワークフローをステータスを次に自動昇格させるかどうかを指定できます。

ルーティング可能なオブジェクトが自動昇格の可能なステータスになった場合、システムはすぐにこのオブジェクトを自動昇格しようとします。承認者がおらず、必須フィールドがすべて記入されている場合、ルーティング可能なオブジェクトは次のステータスに進みます。ステータスの詳細は通常、この場合よりも関連性が高くなります。たとえば、[レビュー] ステータスには通常 1 人、またはそれ以上の承認者があり (現在のステータスのすべての承認者は、次へ進めるためにルーティング可能オブジェクトを承認する必要があります)、必須フィールドは次のステータスへの自動昇格を簡単にブロックすることができます。



また、[承認者が却下した変更のステータスを変更する] スマートルールを [可] に設定し、承認者の却下がワークフローの自動昇格を停滞させないようにする必要があります。

- |           |   |
|-----------|---|
| <b>注意</b> | ワークフローが特定のステータスに入ったとき、自動昇格は一度だけ必須フィールドをチェックします。ただし、最後の必須フィールドが移入されると、この事実が登録され、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに自動昇格します。                                 |
| <b>注意</b> | ただし、自動昇格は、承認者が承認または却下するたびにワークフローをチェックします。まだ承認や却下をしていない承認者がある場合、ステータスは次へ進められません。最後の承認者が承認または却下したとき、自動昇格機能は前述のスマートルールに基づき評価を行い、それに応じてステータスを昇格します。 |

ルーティング可能なオブジェクトを承認していない承認者がいる場合でも、オーバーライド権限のあるユーザーは手動で変更を昇格できます。ルーティング可能なオブジェクトが、承認者や適切な権限のある他の参加者によって却下された場合、そのオブジェクトは [却下された場合はステータスを変更する] (128 ページの「[却下された場合はステータスを変更する](#)」を参照) に定義されているステータスに移ります。これは、自動昇格機能が使用されているかどうかに関係なく自動的に行われます。

自動昇格機能はオーバーライド権限と以下の 2 種類のスマートルールに関連して設定する必要があります。

- 承認者が却下した変更のステータスを変更する
- オブザーバが却下した変更のステータスを変更する

**注意** この 2 種類のスマートルールが [警告] に設定されている場合に承認者またはオブザーバがルーティング可能なオブジェクトを却下したとします。この場合、ルーティング可能なオブジェクトは自動昇格されますが、ルーティング可能なオブジェクトの [履歴] タブに警告が記録されます。

ルーティング可能なオブジェクトの入力時には、そのオブジェクトを次のステータスに自動昇格させるかどうかを必須フィールドで指定できます。(136 ページの「[必須エントリ フィールド](#)」と「[必須フィールドの終了](#)」を参照)ステータスの必須フィールドは、次のステータスに自動昇格する前にすべて入力する必要があります。たとえば、最後のユーザーがルーティング可能なオブジェクトを承認し、すべての必須フィールドが入力されている場合は、ルーティング可能なオブジェクトはただちに次のステータスに進みます。

**注意** CTO (コンテンツ転送) のワークフローでは、リリース済みステータスの前のプロパティを変更しないでください。たとえば、自動昇格を [はい] に設定していると CTO 出力ファイルは生成されません。

## 自動昇格が失敗した場合は通知する

回答する質問: 自動昇格が失敗した場合に通知を受けるユーザーは誰ですか。

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): \$CHANGEANALYST (34 ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照)

Agile PLM 管理者は [レビュー] と [リリース済み] の各ステータス タイプについて、自動昇格が失敗した場合に自動的に電子メールで通知を受けるユーザーを指定します。

ルーティング可能なオブジェクトがすべての承認者によって承認されると、システムはルーティング可能なオブジェクトの自動昇格を試行します。自動昇格は以下の場合に失敗します。

- 入力されていない必須フィールドがある
- スマートルールの指定が異なる

ワークフローが特定のステータスに入ったとき、自動昇格は一度だけ必須フィールドをチェックします。ただし、最後の必須フィールドが移入されると、この事実が登録され、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに自動昇格します。

自動昇格に失敗すると、現在のステータスの [自動昇格が失敗した場合は通知する] に指定されているユーザーやグループには、失敗を通知する電子メールが自動的に送信されます。

## 同じステータスの変更内での複数回にわたる自動昇格の失敗に対処する機能

これは、自動昇格の前の失敗以降に新しい承認者が追加された場合に、設計変更が自動昇格に失敗する都度、ステータスの [自動昇格が失敗した場合は通知する] 設定に指定されている担当者に通知する機能です。履歴も更新されます。新しい承認者を追加したが、ワークフローの必須フィールドがすべて完成していない場合は、自動昇格に失敗します。

[アドレス帳] ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー グループ、作成者、承認者 (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて)、およびオブザーバ (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて) を追加します。

自動昇格の失敗に関する電子メールは、そのステータスで指定されている最後の承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認した後に自動昇格が失敗した場合にのみ送信されます。システムは、自動昇格失敗の電子メール通知を 1 通送信します。

**注意** 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

## アドホック承認者/オブザーバ

回答する質問: 「アドホック」承認者とオブザーバは、ルーティング可能なオブジェクトがステータスに入ってから追加することはできますか。

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): はい

Agile PLM 管理者は各 [レビュー] と [リリース済み] のステータスで、ルーティング可能なオブジェクトがアクティブに進行したときに承認者とオブザーバを追加できるかどうかを定義します。このプロパティが [はい] に設定されていると、承認者の追加と削除権限を持つユーザーは、[レビュー] または [リリース済み] ステータス タイプにあるルーティング可能なオブジェクトの [ワークフロー] タブで承認者とオブザーバを追加または削除できます。ユーザーは、リリース サイクル中にアドホック承認者/オブザーバのウィンドウでも承認者とオブザーバの追加を促されます。

**注意** [承認者/オブザーバの削除] 権限を持つユーザーが、あるステータスではオブザーバを削除できても、次のステータスでは承認者とオブザーバの削除を許可されない場合、次のステータスの [アドホック承認者/オブザーバ] プロパティが [いいえ] に設定されています。

## 却下された場合はステータスを変更する

回答する質問: ユーザーがルーティング可能オブジェクトを却下した場合、ステータスは自動的に変更されますか。 (そうである場合、適切なステータスを入力します。)

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): (なし)

Agile PLM 管理者は [レビュー] と [リリース済み] の各ステータス タイプについて、[却下された場合はステータスを変更する] を指定します。ルーティング可能なオブジェクトが承認者または適切な権限のある他の参加者によって却下された場合、そのオブジェクトは、このプロパティで設定されているステータスに進みます (このステータス プロパティはオブザーバには適用されません)。これは自動昇格機能を使用しているかどうかにかかわらず、自動的に行われます。

---

**注意** 却下された場合でもルーティング可能なオブジェクトを昇格させるよう、このプロパティを設定することは可能です。Agile ではルーティング可能なオブジェクトが却下された理由を調査するまでルーティング可能なオブジェクトを昇格させないことをお勧めします。このステータス プロパティの設定がヌル (未設定) の場合は、ユーザーが変更を却下すると、ワークフローはデフォルトのステータス (つまり、ワークフローの次のステータス) に進みます。

---

## 却下された場合は通知する

回答する質問: ルーティング可能なオブジェクトが却下された場合に通知を受けるユーザーは誰ですか。  
 一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): \$CHANGEANALYST (34 ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照)

Agile PLM 管理者は [レビュー] と [リリース済み] の各ステータス タイプについて、[却下された場合は通知する] を指定します。このプロパティでは、ルーティング可能なオブジェクトが承認者またはオブザーバによって却下された場合に自動的に電子メール通知を受け取るユーザーを指定します。

[アドレス帳] ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー グループ、作成者、承認者 (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて)、およびオブザーバ (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて) を追加します。

---

**注意** 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

---

## 催促期間

回答する質問: ルーティング可能なオブジェクトが承認のために送付されてから、承認者がルーティング可能なオブジェクトの承認者または却下の電子メールによる催促を受けるまでにどれくらいの時間の余裕がありますか。

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): 48 時間

催促期間はすべてのワークフローの [レビュー] と [リリース済み] の各ステータス タイプに指定される期間です。催促期間が過ぎても承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下していない場合、承認者には催促の電子メール通知が送信されます。ルーティング管理者にも同様の電子メール通知が送信されます。この電子メールには、催促の電子メールが受信されている承認者のリストが付いています。

既存の値を削除したり、フィールドを空 (ヌル) にしておくと、[保存] をクリックしたときに 0 が挿入されます。0 の値はプロパティを無効にするのと同じです。催促の通知は送信されません。

---

**注意** 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

---

[レビュー] と [リリース済み] の各ステータス タイプには、それぞれに催促期間があります。催促期間は時間単位で設定し、ルーティング可能なオブジェクトが [レビュー] または [リリース済み] タイプのステータスに入ったときに開始します。ワークフローに複数の [レビュー] と [リリース済み] のステータス タイプがある場合、それぞれに異なる長さの催促期間を指定できます。デフォルト ワークフローの催促期間は常に 48 時間です。

## レビュー エスカレーション期間

回答する質問: システムがルーティング可能なオブジェクトのエスカレーションを待つ時間はどれくらいですか。  
 一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): 96 時間

レビュー エスカレーション期間はすべてのワークフローの [レビュー] と [リリース済み] の各ステータス タイプに指定される期間です。エスカレーション期間が終了し、承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下していない場合は、その承認者のエスカレーション担当者に電子メールが送信されます。ルーティング管理者にも同様の電子メールが送信されます。この電子メールでは、ルーティング可能なオブジェクトが指定されているエスカレーション担当者にエスカレーションされている旨が通知されます。通知を受けたエスカレーション担当者は、元の承認者のかわりにルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できます。

既存の値を削除したり、フィールドを空 (ヌル) にしておくと、[保存] をクリックしたときに 0 が挿入されます。0 の値はプロパティを無効にするのと同じです。催促の通知は送信されません。

---

**注意** 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

---

[レビュー] と [リリース済み] の各ステータス タイプには、それぞれにレビュー エスカレーション期間があります。レビュー エスカレーション期間は時間単位で設定し、ルーティング可能なオブジェクトが [レビュー] または [リリース済み] タイプのステータスに入ったときに開始します。ワークフローに複数の [レビュー] と [リリース済み] のステータス タイプがある場合、それぞれに異なる長さのレビュー エスカレーション期間を指定できます。デフォルト ワークフローのレビュー エスカレーション期間は常に 96 時間です。

エスカレーションはユーザー (または、ユーザー グループ) の順序にかかわらず、指定されているエスカレーション担当者に対して各ステータスで 1 度行われます。

## 指定されているエスカレーション担当者

エスカレーション担当者は、[ユーザー] 基本ノードの各ユーザーに対して指定できます (141 ページの「[ユーザーとユーザー グループ](#)」を参照)。これは、特定のユーザーがルーティング可能なオブジェクトをレビュー、サインオフしていない場合に、その催促をするのに便利です。エスカレーション担当者は、[ユーザー グループ] ノードの各グローバル ユーザーに対して指定します。

エスカレーションの割り当ては、すべて管理者ノードで行います。ユーザーやユーザー グループに対して、複数のエスカレーション担当者を指定することができます。パーソナル グループにはエスカレーション担当者は存在しません。

レビュー エスカレーション期間が終了した場合は、承認者のエスカレーション担当者に、承認者がルーティング可能なオブジェクトに回答していないことを通知する電子メールが送信されます。指定されているエスカレーション担当者は、元の承認者のかわりにルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できます。エスカレーション担当者の名前は、Agile Java クライアントで [ワークフロー] タブと [履歴] タブにサインオフユーザーとして記録されます。

---

**注意** 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

---

ユーザーが指定したエスカレーション担当者によるルーティング可能なオブジェクトのサインオフは、いつでも可能 (= 常時) か、エスカレーション期間後にのみ (= エスカレーション後) 可能かを指定します。(147 ページの「[定義済みユーザー プロパティ](#)」を参照)エスカレーション担当者がルーティング可能オブジェクトを承認または却下するための適切な権限を持たない場合でも、通知は送信されます。たとえば、あるユーザーの管理者は、指定されているエスカレーション担当者であるが、ルーティング可能なオブジェクト承認プロセスには関与していない場合、その管理者は少なくともルーティング可能なオブジェクトの中断を認識して、適切な措置を講じることが可能になります。

---

**注意** 指定されているエスカレーション担当者がグループである場合、ルーティング可能なオブジェクトをサインオフする必要があるのは、そのうちの 1 人だけです。サインオフされると、そのルーティング可能なオブジェクトはグループの他のメンバーの受信トレイには表示されません。

---

## アクションに必要なコメント

回答する質問: このワークフローの [レビュー] または [リリース済み] ステータスにはコメントが必要ですか。  
一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): なし

Agile PLM 管理者は、[レビュー] と [リリース済み] の各ステータスについて、コメントの必要性を指定できます。デフォルトの [なし] は、そのステータスのワークフローにはコメントが不要であることを意味します。[承認のみ] は、承認者がそのステータスのワークフローを承認する際、ワークフローを進めるためのコメントを入力する必要があることを意味します。[却下のみ] は、承認者がそのステータスのワークフローを却下する際、ワークフローを進めるためのコメントを入力する必要があることを意味します。[承認と却下の両方] は、承認者がそのステータスのワークフローを承認または却下する際、ワークフローを進めるためのコメントを入力する必要があることを意味します。

## 検索条件プロパティの定義

このセクションでは、Agile PLM ワークフローにあるすべての検索条件プロパティについて説明します。[ワークフロー] ウィンドウでデフォルトのワークフローをダブルクリックし、次に [ステータス] タブをクリックすると、検索条件プロパティが [条件] テーブルに表示されます。最初に [ステータス] テーブルでステータス (行) を選択すると、そのステータスが [条件] テーブルに表示されます。[条件] テーブルで行をダブルクリックすると、[ワークフロー条件:[条件名]] ダイアログ ボックスが表示されます。

## 承認者とオブザーバ

回答する質問: ステータスのルーティング可能なオブジェクトを承認するまたは検証するユーザーは誰ですか。  
一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): (なし)

Agile PLM 管理者はルーティング可能なオブジェクトが [レビュー] または [リリース済み] のステータス タイプに入ったときに自動的に選択され、電子メール通知を受け取るデフォルトの承認者またはオブザーバを指定します。デフォルトの承認者とオブザーバは、ルーティング可能なオブジェクトが [レビュー] または [リリース済み] のステータス タイプに入ったときに、ワークフローの属性値と条件基準に基づいて割り当てられます。

---

**注意** 電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

---

## 条件使用状況

回答する質問: ステータスの検索条件プロパティとは何ですか。  
一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): デフォルトの変更ワークフローを使用するすべての変更

条件とは、特定のステータスにおける再利用の条件の動作を指定する条件のことです。各ステータスは、検索条件プロパティで最低 1 つの再利用の条件が指定されている必要があります。

ルーティング可能なオブジェクトが特定のステータスを終了する前に条件が確認されます。条件は、どの検索条件プロパティが適用されるかも定義します。複数の検索条件プロパティを 1 つのルーティング可能なオブジェクトに適用することも可能です。



条件は包括的な概念です。詳細は、以下を参照してください。

- 99 ページの「[条件](#)」
- 212 ページの「[権限マスクの構成要素 3: 条件](#)」
- [詳細検索] ウィザードの使用方法的詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』の「[Agile データを検索する](#)」を参照してください。この [詳細検索] ウィザードは [条件の作成] ウィザードに類似しています。

## デフォルトの変更分析者/コンポーネント エンジニア

回答する質問: このルーティング可能オブジェクトのデフォルトのルーティング管理者はどのようなユーザーが行う必要がありますか。(34 ページの「[ルーティング管理者変数](#)」を参照)

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): デフォルトのルーティング管理者は選択できます ([保留中] ステータスのみ)。

各ワークフローには異なるデフォルトのルーティング管理者 (MCO の場合はコンポーネント エンジニア、PCO の場合は価格管理者、その他の変更については変更分析者など) を指定できます。[保留中] ステータスの検索条件プロパティでは、各条件に対して、異なるデフォルトの変更分析者を選択できます。デフォルトの変更分析者がいない場合には、それを入力することができます。Agile Java クライアントで [変更分析者] フィールドが空白になっている場合は、管理者が「\$CHANGEANALYST (または \$COMPONENTENGINEER)」を指定すると、すべての変更分析者に通知が送信されます。

ユーザーに適切な権限がある場合、[変更分析者] フィールドを編集できますが、ルーティング可能なオブジェクトが [保留中] から次のステータスに移行するまでは新しい変更分析者は適用されません。ユーザーが変更分析者を選択しても、ワークフローが異なるデフォルトの変更分析者で設定されている場合、ユーザーは警告を受けます。

複数の変更分析者を指定した場合 (ルーティング可能なオブジェクトは変更分析者についての複数の条件と一致する)、ユーザーはルーティング可能なオブジェクトが [保留中] から次のステータスに移行したときに警告を受けます。ユーザーには、変更分析者のリストを示したダイアログ ボックスが表示され、そのワークフローの変更分析者を選択するよう促されます。

承認者とオブザーバの追加の詳細は、104 ページの「[対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する](#)」を参照してください。

## 当該ステータスになり次第通知する

回答する質問: ルーティング可能なオブジェクトが新しいステータスに入ったことを確認する必要があるのはどのユーザーですか。

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): (なし)

[当該ステータスになり次第通知する] プロパティには、ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに入ったときに電子メール通知を受け取るユーザーを指定します。

[アドレス帳] ダイアログを使用して、ユーザー、ユーザー グループ、変更分析者、作成者、承認者 (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスの承認者すべて)、およびオブザーバ (ルーティング可能なオブジェクトがすでに遷移したステータスのオブザーバすべて) を追加します。

---

**注意**      電子メール通知が無効にされていると、電子メールは送信されません。240 ページの「[通知](#)」を参照してください。

---

ルーティング可能なオブジェクトがリリースされたことを示す電子メール通知を変更分析者が受け取るかどうかを設定できます。また、[当該ステータスになり次第通知する] プロパティは、手動によるステータス移行に

使用するダイアログ ボックスの [通知] のデフォルトの設定にも使用されます。通知を受けるユーザー (たとえば、作成者、承認者、オブザーバ、変更分析者) を指定できます。

---

**注意** ユーザーにルーティング可能オブジェクトの [変更分析者] フィールドに対するフィールドレベルでの読み取り権限がなく、[当該ステータスになり次第通知する] リストにデフォルトの変更分析者が指定されている場合は、[ステータスの変更] ダイアログ ボックスの [通知] フィールドに「権限なし」と表示されます。「権限なし」の場合、有効なユーザーとは認識されないため、エラー メッセージが表示されます。

---

## リリース検証を実行する

回答する質問: 次のステータスに移行する前にすべてのリリース検証 (スマートルール、必須フィールド) が実行される必要がありますか。

一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): いいえ

[リリース検証を実行する] の影響を受ける、ユーザーが使用できる検証: ステータス検証とリリース検証

ステータス検証の場合: ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに移行させることはできますか。

リリース検証の場合: ステータスの条件はルーティング可能なオブジェクトのリリースをサポートしていますか。

Agile PLM では、ルーティング可能なオブジェクトが最初の [リリース済み] ステータス タイプに昇格すると、自動的に完全なリリース検証が行われます。

Agile PLM クライアント ユーザーは、[ステータスの検証] ボタンまたは [リリースの検証] ボタン (またはメニュー項目) を使用して、いつでもステータスまたはリリースの検証を行うことができます。詳細は、134 ページの「[検証の 2 つのレベル](#)」を参照してください。

管理者は [保留中]、[提出]、または [レビュー] の各ステータスで、ルーティング可能なオブジェクトの検証を行うかどうかにかかわらず、現在のステータスから先に進めるかどうかを以下のように指定します。

- はい - リリース検証が行われますが、必須フィールドが入力されておらず、リリース チェックとスマートルールの条件が一致しない場合、ルーティング可能なオブジェクトは先に進みません (134 ページの「[リリース検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証](#)」を参照)。
- いいえ - ルーティング可能なオブジェクトは検証されずに先に進みます。
- 警告 - ステータスの検証中に、この検証の後にリリース検証を続けるか ([OK] をクリックしてリリース検証を実行するか)、続けないか ([キャンセル] でリリース検証を省略するか) を選択するプロンプトが表示されます。

このプロンプトでは、エラーまたは警告が発生する可能性があります。エラーが当然と思われる状況で警告が表示されるという状態があります。つまり、ユーザーにオーバーライド権限がなく、[リリース検証を実行する] が [警告] または [いいえ] の場合、ステータス検証では、警告ではなくエラー (ユーザーが条件を修正する必要があることを意味する) が発生します。

---

**注意** [リリース検証を合格にする] を [はい] に設定すると、現在のステータスの条件でルーティング可能なオブジェクトをリリースできるかどうかを検証されますが、検証は累積プロセスではないため、以前または今後のステータスの必須フィールドは考慮されません。

---

[リリース済み] ステータスで自動リリース検証を使用する場合も、前の段階で検証を設定しておけば (特定のステータスの [リリース検証を合格にする] を [はい] に設定する)、[リリース済み] ステータスで検証に失敗したとしても、ルーティング可能なオブジェクトを先に進めることができます。この状況は、[保留中] ステータスでルーティング可能なオブジェクトをレビューした作成者、または [提出] ステータスでルーティング可能なオブジェクトをレビューしたルーティング管理者など、関係する情報を持つユーザーが情報を入力するステータスを通過してしまった場合に起こります。リリース検証によって、ステータスに足りない情報があることが検出され、その情報を持つユーザーが情報を入力できます。

たとえば、ECO でリリース検証を実行してリビジョン番号がすでに存在するかどうかをチェックするとします。  
[保留中] ステータスで、[リリース検証を合格にする] を [はい] に設定すると、作成者は正しいリビジョン番号を入力することを求められます。

205 ページの「[オーバーライド](#)」に記載されているこのプロパティに関する注意を参照してください。

## 検証の 2 つのレベル

ユーザーが使用できる検証には、ステータス検証とリリース検証の 2 つのレベルがあります。次にこの 2 つのレベルについて説明します。リリース検証には必ずステータス検証が含まれます。

ルーティング可能なオブジェクトの検証には権限は必要ありません。検証の結果は、クリップボードにコピーしたり、新しいドキュメントに貼り付けたり、印刷したりできます。

## ステータス検証、または進行の条件に対する現在のステータスの検証

ステータス検証は、「進行するための適切な条件について、現在のステータスを検証すること」と考えることができます。

ステータス検証は、ユーザーがステータスの変更機能を使用する場合、またはワークフローによる次のステータスへの自動昇格が試みられた場合に自動的に実行されます。ステータス検証は、[ステータスの検証] ボタンまたはメニューの選択肢を使用して、いつでも実行できます。確認項目は次のとおりです。

- 現在のステータスに [必須フィールドの終了] が記入されていることが確認されます。
- 現在のステータスが [レビュー] または [リリース済み] のステータス タイプである場合は、すべての承認者によって承認されていることが確認されます。
- 現在のステータスに対する [リリース検証を実行する] プロパティのワークフロー設定が確認されます。  
[リリース検証を実行する] が [はい] または [警告] に設定されている場合、Agile PLM では、リリース検証も実行されます。

## リリース検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証

リリース検証は、「ルーティング可能なオブジェクトをリリースするための適切な条件について、現在のステータスを検証すること」と考えることができます。

Agile PLM では、ワークフロー内でルーティング可能なオブジェクトが最初の [リリース済み] タイプのステータスに昇格すると、リリース検証が自動的に実行されます。リリース検証は、[リリースの検証] ボタンまたはメニューの選択肢を使用して、いつでも実行できます。

リリース検証では、現在のステータスおよびリリース ステータスの両方に対してステータス検証が実行されます。

追加の確認項目は次のとおりです。

- ECO (設計変更) の場合、[対象アイテム] タブの提案された新規リビジョン番号がすでに存在するかどうか
- ECO (設計変更)、SCO (拠点毎変更)、PCO (価格変更)、および MCO (製造元変更) の場合、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後に失われた製造元のレッドラインがあるかどうか
- ECO (設計変更) と SCO (拠点毎変更) の場合、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後に失われた BOM のレッドラインがあるかどうか
- ECO (設計変更)、SCO (拠点毎変更)、PCO (価格変更)、および MCO (製造元変更) の場合、別の ECO、SCO または MCO が先にリリースされたことにより競合が発生しているかどうか



- ECO (設計変更)、SCO (拠点毎変更)、および MCO (製造元変更) では、[BOM 多段階重複] スマートルールが [不可] に設定されている場合は、重複した BOM 構造 (つまり、あるサブアセンブリに、そのサブアセンブリ自体の BOM ツリー構造の上位レベルから、そのサブアセンブリの親アイテムのいずれかが含まれているかどうか) がチェックされます。(論理的に帰結する場合、重複した BOM 構造は無限に繰り返されることになります。)

BOM ツリーは上から下に評価されます。リリースの検証のエラー メッセージには、BOM が重複している対象アイテムごとに、BOM ツリーで最初に検出されたアイテムが表示されます。このアイテムの第 1 レベルの BOM テーブルには、ツリー内でより高いレベルに表示されるアイテムが含まれているため、重複した BOM 構造の原因となっています。対象アイテムの BOM ツリーには、重複した BOM 構造のインスタンスが複数存在している可能性があります、検証結果に表示されるのは、最初に検出されたインスタンスのみです。

- ECO (設計変更)、SCO (拠点毎変更)、および PCO (価格変更) の場合は、スマートルールの設定に従って、変更のリベースによって発生したアイテムの重複、見出し番号の重複、および参照指示の重複がチェックされます。(同じアイテムについて保留中の変更が複数ある場合は、1 つの変更がリリースされるときに、残りの保留中の変更がリリースされた最新の変更でリベースされます。)

- ECO (設計変更)、SCO (拠点毎変更)、および MCO (製造元変更) の場合は、アイテムに対する同じ製造元部品の重複がチェックされます。(MultipleItemsPerManufPart は [警告] または [不可] に設定されます。)

(アイテムに対する同じ製造元部品の重複は、そのアイテムに同じ製造元部品を関連付ける複数の保留中の変更があり、その変更の 1 つがリリースされたときに発生します。残りの保留中の変更は、リリースされた最新の変更でリベースされます。これで、残りの保留中の変更には、リリースされたアイテムの製造元テーブルにすでに存在している製造元部品を追加するために、製造元部品のレッドライン変更が残ります。)

- ECO (設計変更)、SCO (拠点毎変更)、および MCO (製造元変更) の場合は、複数のアイテムに対する同じ製造元部品の使用についてチェックされます。(MultipleItemsPerManufPart は [警告] または [不可] に設定されます。)

(複数のアイテムに対する同じ製造元部品の重複は、複数の変更によって (レッドライン追加またはレッドライン置換で) 同じ製造元部品が 2 つ以上のアイテムの製造元テーブルに追加される場合に発生します。いずれかの変更がリリースされると、製造元部品の [使用箇所] テーブルが、新たにリリースされたアイテムを参照するようにリベースされます。これで、残りの保留中の変更には、複数のアイテムで単一の製造元部品を使用できるように、製造元部品のレッドライン変更が残ります。)

- ECO (設計変更)、SCO (拠点毎変更)、および PCO (価格変更) の場合は、[初回リリース アイテム] スマートルールが [不可] または [警告] に設定されている場合に、子コンポーネントがリリースされているかどうかを確認するために、ルーティング可能なオブジェクトがチェックされます。
- チェックアウトされたままのルーティング可能なオブジェクトの添付ファイルがあるかどうかチェックされます。
- 対象アイテムの場合、チェックアウトされたままの添付ファイルがあるかどうか
- 有効日の順序スマートルールと有効期間の間隔スマートルールの設定
- [対象アイテム] タブのアイテムに、別の保留中のルーティング可能なオブジェクトがあるかどうか
- ECO (設計変更) については、対象アイテムの [拠点] タブの [内製/購入] 設定と、拠点の [拠点 AML の許可] および [購入に AML が必須] 設定が検証されます。詳細は、『Product Collaboration ユーザー・ガイド』を参照してください。

## 必須フィールドの終了

回答する質問: ルーティング可能なオブジェクトや対象アイテムの必須フィールドとは何ですか。  
一般的なデフォルト (デフォルト ワークフローの場合): (なし)

「必須エントリ フィールド」とは、ルーティング可能なオブジェクトがそのステータスに進む前に [保留中]、[提出]、[レビュー]、[リリース済み]、[完了] ステータス タイプについて入力する必要のある属性やフィールドです。

必須フィールドには、編集できないフィールドやデフォルトのフィールドがあります。

**注意** 必須フィールドは、ステータス検証やリリース検証の主要な対象です (133 ページの「[リリース検証を合格にする](#)」を参照してください)。デフォルトのワークフローでは、必須フィールドは [レビュー] ステータス タイプに多くみられます。しかし、カスタム ワークフローでは他のステータスに必須フィールドを使用することもできます。これによりユーザーは、特定の必須フィールドが検証に合格していることを確認できます。こうすると、最初の [リリース済み] ステータスで多くの必須フィールドを含む 1 つの検証を合格にすることを回避できます。

205 ページの「[オーバーライド](#)」に記載されているこのプロパティに関する注意を参照してください。

ルーティング可能なオブジェクトが次のステータスに移行されるまでに必須終了フィールドに入力がなかった場合、必須フィールドを示したダイアログ ボックスが表示されます。

ユーザーに必須フィールドを変更する権限がない場合、適切な権限を持つユーザーが変更を行うまで、ルーティング可能なオブジェクトは次のステータスに進みません。

[対象アイテム] フィールドに対して記述される条件の場合、必須フィールドは、一致した条件に基づいて、対象アイテムごとに独立して計算されます。

## ワークフローの機能をテストする

ワークフローを使用する前に十分にテストすることを強くお勧めします。システムの規模によっては、ユーザーの実働環境でもテストを安全に実行できる場合があります。

### ワークフローの検証分野

このセクションでは実働環境の内外で確認する必要のあるワークフローのいくつかの側面について簡単に説明します。機能をテストし、ワークフローが変更のプロセスをどのようにサポートするかを理解すると、ワークフローを修正する必要性が生じてくる場合があります。

ワークフローの機能をテストする場合、以下の項目を確認する必要があります。

- ワークフローと各ステータスに適用される再利用の条件
- [手動による次の有効なステータス] の設定
- 各ステータスのステータス プロパティ
- 各ステータスの検索条件プロパティ
- ワークフローの検索条件と各ステータスの検索条件プロパティでの条件基準タイプ
- すべての必須エントリ フィールドと必須終了フィールド

- 自動昇格
- すべての通知と承認
- 催促とエスカレーション期間
- スマートルール
- 各役割の権限

## テスト時のヒント

- ワークフローを Agile PLM クライアントで使用するには、その前に、ワークフローを有効にする必要があります (125 ページの「[ステータス プロパティの定義](#)」を参照してください)。
- デフォルトのワークフローの修正ではなく、新規のワークフローをテストする場合は、基本的なステータス変更権限を作成する必要があります。これによって、ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移行させることができます (203 ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください)。新規ワークフローでルーティング可能なオブジェクトを移動するには、そのワークフローのステータス変更権限が必要です。
- ワークフローを有効にした後は、設定の変更が制限されます (138 ページの「[有効なワークフローのプロパティを変更する](#)」を参照してください)。
- より広範な変更を行うには、ワークフローを無効にする必要があります (140 ページの「[ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする](#)」を参照してください)。
- また、ワークフローを無効にしても、ルーティング可能なオブジェクトがワークフローにある場合は、ステータス リストのステータスの削除や追加など、実行できない変更もあります (140 ページの「[ワークフローにルーティング可能なオブジェクトが適用されている場合に実行できない変更](#)」を参照してください)。テスト対象のワークフローの [名前を付けて保存] を使用して、無効なワークフローを新規に作成すると、より広範な変更を行うことができます。

Agile PLM ワークフローが正しく設定されているかどうかを確認するための機能テストに加え、ビジネス プロセスと、データ移行システムを確認することをお勧めします。コンサルティング サービスは、オラクル社コンサルティングの Agile 担当のコンサルタントが担当しています。このサービスは、ビジネス プロセスとデータ移行の検証プランの作成についてガイダンスと支援を提供します。ビジネス プロセスの検証では、作成したワークフローを使用して実際の状況を想定したり、一般的な使用例をシミュレートしたりすることなどが可能です。こうした作業は、ワークフローの設定を改良および確認し、変更プロセスを Agile PLM の一環として保管することによって今後の資料やトレーニングの材料として活用できるようにします。

## ワークフローを実働環境に適用する

現在 Agile PLM の実装の初期段階にある場合、実働環境は 1 つであり、Agile PLM の最初の設定を適用することは、実働カットオーバー プロセスに通常組み込まれているものであるため、このセクションは重要ではありません。

## ワークフローの適用に関するヒント

### ワークフローの適用に関するヒント

- [ワークフロー] ウィンドウでは、[エクスポート] と [すべてエクスポート] を使用してワークフローをエクスポートし、[インポート] を使用してワークフローをテスト環境から実働環境に移行します。これによって、手動による手順の数を大幅に減らすことができます (21 ページの「[管理者設定のインポートとエクスポート](#)」を参照してください)。

## ワークフローの適用プロセス

ワークフローの設定を確認した後、ワークフローを実働環境の Agile PLM システムで実装します。次にワークフローの適用に関する一般的なプロセスについて段階を追って説明します。

1. テスト環境におけるワークフローの設定の確認を完了する。
2. 以下の管理者レポートを作成し、結果をローカル ドライブに保存します。必要に応じて、他のレポートを実行します。
  - Agile クラス レポート
  - ワークフロー設定レポート
  - 検索条件ライブラリ設定レポート
  - ユーザー設定レポート
  - ユーザー グループ設定レポート
  - スマートルール設定レポート
3. ワークフローの設定が正しく記録されていることを確認してください。

## アクティブなワークフローを変更する

有効になっているワークフローを変更する必要がある場合があります。このセクションでは、その状況と選択できるオプションを説明します。

<b>注意</b>	ルーティング可能なオブジェクトに割り当てられているワークフローは、割り当てが取り下げられ、そのワークフローが他のルーティング可能なオブジェクトに割り当てられていない場合でも、削除できません。不要なワークフローは無効にするか、再利用できるように変更することをお勧めします。
-----------	---

## 有効なワークフローのプロパティを変更する

有効になっており、Agile PLM ユーザーが表示できるワークフローは、進行中のルーティング可能なオブジェクトの有無にかかわらず、変更できます。ワークフローがすでに使用されている場合 (ルーティング可能なオブジェクトがワークフローに割り当てられている) ステータスの追加はできませんが、以下に説明されているように、その他の変更は可能です。

**注意** 有効なワークフローにステータスを追加する場合、Agile PLM システムで適切な権限や各役割のステータスの変更権限を変更する必要があります。

**注意** 有効なワークフローにステータスを追加しようとする、そのワークフローの [有効] プロパティは自動的に [いいえ] に設定されます。

## ワークフローを無効にする、変更する、再度有効にする場合

ワークフローに適用されているルーティング可能なオブジェクトがない場合、ワークフローを無効にする、変更する、再度有効にすることは問題なく実行できます。(その場合、作業の重複を防ぐため、新しいルーティング可能なオブジェクトを構築している、またはこれから作成しようとしている可能性のあるユーザーに電子メールで通知することをお勧めします。)

## ワークフローにルーティング可能オブジェクトが適用されている場合に変更可能なもの

ワークフローが有効になっており、ルーティング可能なオブジェクトがアクティブに進行している場合でも、様々のプロパティを変更できます。以下の表で、これらのプロパティについて説明します。プロパティの設定を変更するには、ワークフローを無効化する必要があります。また、変更分析者または承認者は、無効化されている際にルーティング可能オブジェクトの処理に対して反応することが望ましい場合があります。

ワークフローを無効化する場合、次のアクションを推奨します。

- ワークフローが無効化されることを必要なユーザーに通知する。
- ワークフローが有効化された後、すぐに影響を受けたユーザーに再通知する。

ワークフローのプロパティ	各ステータスのステータス プロパティ	各ステータスの検索条件プロパティ
ワークフロー名	アドホック承認者/オブザーバ  自動昇格  自動昇格が失敗した場合は通知する  終了時に検索条件が適用されない場合は通知する  却下された場合は通知する  却下された場合はステータスを変更する  手動による次の有効なステータス  督促期間  レビュー エスカレーション期間	承認者  デフォルトの変更分析者/ コンポーネント エンジニア  当該ステータスになり次第通知する  オブザーバ  リリース検証を実行する  必須フィールド
ステータスの プロパティ		
ステータス名		
検索条件プロパティ	ステータスに新しい検索条件プロパティを追加することができます。	
<b>注意:</b> 変更された設定によっては、すでにそのステータスにある場合、進行中のルーティング可能なオブジェクトで新しい設定を使用できないことがあります。たとえば、[当該ステータスになり次第通知する] の設定を変更しても、変更されたステータスにすでに存在しているルーティング可能なオブジェクトについて通知は送信されません。		

## ワークフローにルーティング可能なオブジェクトが適用されている場合に実行できない変更

デフォルトまたは新規のワークフローでルーティング可能なオブジェクトが作成され、ステータス間の移行が1度でも行われている場合、以下の項目を実行できません。

- ワークフローにステータスを追加または削除できません。
- ワークフローのステータスの順序は変更できません。

アクティブなワークフローに、変更が必要なエレメントがある場合は、140 ページの「[ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする](#)」を参照してください。

## ワークフローを無効にする、変更する、再度アクティブにする

ワークフローのプロセスや多くのエレメントを完全に設定している場合でも、アクティブなワークフロー（複数のルーティング可能オブジェクトが適用されて進行中）は必ず修正が必要になるものです。

**注意** 有効なワークフローに対する変更は、管理者の様々なノードで、検出、調査、修正の必要のある状況を生み出す可能性があります。特に、ワークフロー ステータスに対する変更は、転送 (365 ページの「[Agile Content Service の設定](#)」を参照) とプロセスの拡張 (86 ページの「[プロセスの拡張](#)」を参照) にも関連しています。

### アクティブなワークフローを修正するには:

1. このワークフローを使用しているアクティブなルーティング可能なオブジェクトを [保留中] ステータスタイプにします。

**注意** この手順は必須ではありません。小規模な変更の場合は不要な場合もあります (138 ページの「[有効なワークフローのプロパティを変更する](#)」を参照してください)。この注意事項は、変更にかかる時間がかかる場合や、多くのオブジェクトやユーザーが影響を受ける場合に有効です。

2. ワークフローを無効にします。
3. [名前を付けて保存] を使用して、ワークフローの名前を変更します (115 ページの「[\[名前を付けて保存\]で新規ワークフローを作成する](#)」を参照してください)。
4. 古いワークフローが異なる目的で使用可能な場合には、古いワークフローの名前を変更します。
5. 新しいワークフローを修正します。
6. 問題が解決されたと判断した場合、ワークフローを有効にします。
7. ルーティング可能なオブジェクトを古いワークフローから新しいワークフローに適用します。

# ユーザーとユーザー グループ

扱うトピックは次のとおりです。

■ ユーザー .....	141
■ アカウント規約 .....	152
■ ユーザー グループ .....	154
■ サプライヤ グループ .....	162
■ ユーザー モニタ .....	164

この章では、Agile PLM のユーザー、ユーザー グループ、サプライヤ グループ、ユーザー アカウント規約の定義方法、およびログインしたユーザーの監視方法を説明しています。

## ユーザー

[ユーザー] ノードでは、新規ユーザーに Agile PLM へのアクセス権を与えたり、既存のユーザーのプロパティを変更したりできます (ユーザー グループ、役割、およびエスカレーション承認設定の変更)。

[ユーザー] ノードでは、Agile PLM の次の側面を表示したり設定したりすることができます。

- 新規ユーザーの追加
- ライセンス、役割、拠点、パスワードなどの、ユーザーのプロパティの変更
- ユーザーの無効化または削除

ユーザーの追加プロセスでは、Agile PLM アプリケーションへのアクセスを管理するプロパティを確立する必要があります。たとえば、パスワードによりログインが許可され、役割の割り当てによりディスカバリ ポイント以降の Agile PLM オブジェクトへのアクセスが確立されます。したがって、ユーザーがどのようなアクセスや許可を必要としているかを考慮することが重要です。

**注意** サプライヤ ユーザーは、サプライヤに関連付けられている特殊なユーザーです。サプライヤ ユーザー (つまり、コンタクト ユーザー) を作成できるのは、管理者ではなくマネージャです。管理者は、Agile PLM ユーザーに対して [組織管理者] または [適合性管理者] の役割を割り当て、このユーザーがサプライヤを作成し、制限された役割を介して RFQ または RFI に回答できるコンタクト ユーザーをそのサプライヤに移入します。詳細は、315 ページの「[Product Cost Management の設定](#)」および 399 ページの「[Product Governance & Compliance の設定](#)」を参照してください。

この章では、[ユーザー設定] フォルダの大半のノードについて説明します。一部のノードは、他の章で説明されています。

役割 - 165 ページの「[役割](#)」を参照してください。

権限 - 185 ページの「[権限と権限マスク](#)」を参照してください。

削除されたユーザー - 152 ページの「[ユーザーを削除する/削除を取り消す](#)」を参照してください。

削除されたユーザー グループ - 159 ページの「[ユーザー グループをハード削除する](#)」を参照してください。

## 新規ユーザーを追加する

新規ユーザーに関する情報を集め、そのアクセス要求を処理した後、彼らを Agile PLM システムに追加することができます。

LDAP システムで作成されたユーザーは、Agile PLM にインポートされ、[更新] ボタンを使って Agile PLM データベースで同期化される必要があります。145 ページの「[管理者のノードとしての LDAP](#)」を参照してください。

### 作業を開始する前に

作業を開始する前に

新規 Agile PLM ユーザーを作成する前に、以下の質問に答えてください。

- このユーザーが Agile PLM でどのようなことを実行する必要があるか。そのユーザーに必要なデフォルトの役割は何か。
- このユーザーが Agile PLM で禁止されていることは何か。
- そのユーザーはログイン パスワードと承認用パスワードを別にする必要があるか。
- ユーザー名は、どの Agile PLM リストに表示されるか。
- ユーザーはどの Agile PLM 検索を使用できるか。
- ユーザーは [パワー ユーザー] かどうか。[パワー ユーザー] は随時ログインすることができ、現在のユーザー プールのメンバーとしてカウントされません。

### Java クライアントで新規ユーザーを作成するには:

1. [ユーザー設定] で [ユーザー] をダブルクリックします。[ユーザー] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[ユーザー作成] ダイアログ ボックスが開きます。
3. [ユーザー名] と [パスワード] を入力します。[ログイン パスワードの再入力] のフィールドでパスワードを再入力します。

<b>注意</b>	パスワードでは大文字と小文字が区別されます。たとえば、ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインする場合には常にパスワードを大文字で入力する必要があります。
-----------	--

4. 別の承認用パスワードが必要な場合は、[承認にログイン パスワードを使用] の選択を解除し、[承認用パスワード] および [承認用パスワードの確認] フィールドに承認用パスワード (新規ユーザーの承認用パスワード) を入力します。
5. [OK] をクリックします。新規ユーザーのセットアップ ウィンドウが表示されます。
6. [名前]、[姓]、および [電子メール] を入力します。
7. [役割] リストをクリックし、ユーザーに役割を割り当てます。ユーザーは役割を割り当てられるまでは、Agile PLM で何も操作を行うことはできません。
8. [プロフィール] セクションで、必要に応じてその他の値を入力します。これらのフィールドは必要とされていない場合もあり、後から入力することもできます。



9. [プリファレンス] タブで、プロパティの値を入力します。通常は、デフォルトの値を使用します。
10. [保存] をクリックします。


#### Web クライアントで新規ユーザーを作成するには:

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー] の順にクリックします。[ユーザー] ページが表示されます。
2. [作成] をクリックします。[ユーザー作成] ウィザードが開きます。
3. [ユーザー名] と [ログイン パスワード] を入力します。[ログイン パスワードの再入力] のフィールドでパスワードを再入力します。

---

**注意** パスワードでは大文字と小文字が区別されます。たとえば、ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインする場合には常にパスワードを大文字で入力する必要があります。

---

4. 別の承認用パスワードが必要な場合は、[承認にログイン パスワードを使用] の選択を解除し、[承認用パスワード] (新規ユーザーの承認用パスワード) および [承認用パスワードの確認] を入力します。
5. [続行] をクリックします。[一般情報の入力] ページが表示されます。
6. [名前]、[姓]、および [電子メール] を入力します。
7. [役割] リストを開くには、フィールド右側の  ボタンをクリックします。ユーザーに役割を割り当てます。ユーザーは役割を割り当てられるまでは、Agile PLM で何も操作を行うことはできません。
8. [プロファイル] セクションで、必要に応じてその他の値を入力します。これらのフィールドは必要とされていない場合もあり、後から入力することもできます。[次へ] をクリックします。
9. [プリファレンスの定義] ページで、プロパティの値を入力します。通常は、デフォルトの値を使用します。
10. [完了] をクリックします。[ユーザー] ページが表示されます。

後でユーザー プロパティを割り当てる手順については、145 ページの「[ユーザー プロパティを変更する](#)」を参照してください。

11. 新規ユーザー プロパティの追加を確認してレビューするには、[ツール]>[管理者]>[ユーザー] の順にクリックします。ユーザーのテーブルで新規ユーザー ID をダブルクリックします。新規ユーザーのページが表示されます。

## ユーザー名について

安全上の理由から、Agile PLM のユーザー名は固有のものでなければなりません。ユーザー名が固有であるかぎり、同じ名前 (氏名) の複数のユーザーを作成することができます。

削除されたユーザーと同じユーザー名のユーザー (アクティブまたはアクティブでない) が存在し、削除済みのユーザーの削除が取り消された場合には、削除済みのユーザーのユーザー名を変更して固有の名前にする必要があります。その削除取消ユーザーに対する他のオブジェクトからの履歴参照は、すべてそのまま残ります。

---

**注意** 「ユーザー名」プロパティは、現在は「ユーザー ID」と呼ばれています。どちらの用語も Agile PLM クライアントおよびマニュアルにあるので、同じものと考えてください。

---

**注意** ユーザーの不都合が頻繁に起こらないように、Agile Account Executive を使ってライセンスの必要条件を定期的に評価し、必要に応じてアップグレードします。

## パスワードについて

新規ユーザーを追加する場合、ユーザーが初回 Agile PLM にログインできるようにパスワードを割り当てます。初回ログイン後、ユーザーは [パスワード] プロパティの設定とシステム全体のアカウント規約に基づいてパスワードを自分で変更できます。必要であれば、Agile PLM 管理者も後からユーザー パスワードを変更できます。

[アカウント規約] ノードから確立されたアカウント規約はパスワードの有効期限、長さ、固有性などを管理しますが、[ユーザー] ノードからこれらの設定を上書きする設定を指定することもできます。ただし、個別のユーザーについて [ユーザー] ノードで指定した設定は、[アカウント規約] ノードで表示されたように、Agile PLM に対して確立されたセキュリティ ポリシーと定期的に競合しないことをお勧めします。

たとえば、ユーザーに定期的なパスワードの変更を要求する場合、アカウント規約を設定する際に有効期間を指定します。アカウント規約でパスワードの有効期間を 30 日に設定し、ユーザーのパスワード プロパティを無期限に設定した場合は、そのユーザーのパスワード プロパティの設定がシステム全体のアカウント規約の設定より優先されます。

より高い安全性を得るために、ユーザーはログイン用と承認用に別々のパスワードを使用できます。詳細は、146 ページの「[ユーザーのパスワードを変更する](#)」を参照してください。

また、152 ページの「[アカウント規約](#)」を参照してください。

## 内部ユーザー パスワードを変更する

Agile PLM には、内部で使用する目的で 4 種類の特別なユーザーがあります。

特別なユーザー:	目的
superadmin (内部ユーザー)	全データへのアクセスを取得するために内部で使用されます。
agileuser (内部ユーザー)	全データへのアクセスを取得するために内部で使用されます。
ifsuser (外部ユーザー)	ファイル マネージャによるアクセスに必要です。
etluser (外部ユーザー)	ETL ツールによるアクセスに必要です。

これらの内部ユーザーには、2 つの問題があります。

- これらのユーザーのパスワードは、ハードコード化されています。以前は、これら内部ユーザーのパスワードを顧客が変更することはできませんでした。(Agile のすべての顧客には、これらの内部ユーザーに対して同じデフォルトのパスワードが設定されています。)
- これらの内部ユーザーは UI を介して表示されることがありません。つまり、これらのユーザーは PLM データベース テーブルには存在しますが、Java クライアントでは確認できません。ただし、パスワードを知っているユーザーは、SDK を介して Agile データにアクセスできます。

管理者は、IFS ユーザー (ファイル サーバ)、ETL ユーザー (Datamart)、および Agile ユーザーのデフォルト パスワードを変更できます。スーパー管理者 (superadmin) ユーザーのパスワードは変更できません。

### パスワードをリセットするには (例: ifsuser):

- [ユーザー設定] で [ユーザー] をダブルクリックします。[ユーザー] ウィンドウが表示されます。
- メニュー バーで [内部ユーザーパスワード変更] ドロップダウン リストをクリックします。

3. [ifsuser のパスワード変更] をクリックします。[ifsuser のパスワード変更] ダイアログ ボックスが開きます。
4. [古いパスワード]、[新規パスワード]、および [新規パスワードの再入力] の各フィールドに適切な値を入力します。完了したら、[OK] をクリックします。
5. ifsuser のパスワードをリセットする場合は、次の手順を実行する必要があります。
  - <AgileHome>%agileDomain%\bin¥encryptpwd.cmd を実行して、新規パスワードを暗号化します。
  - 新規パスワードを <AgileHome>%agileDomain%\config の下にある agile.properties と、<AgileHome>%Tomcat%\webapps¥Filemgr¥WEB-INF¥classes¥com¥agilewebfs¥configuration の下にある server.conf に貼り付けます。

インストール時に ifsuser のパスワードを変更する場合は、手順 2 のみを実行します。

設定の変更を有効にするには、ファイル マネージャを再起動する必要があります。

## 管理者のノードとしての LDAP

管理者には、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を設定する [サーバ設定] ノード フォルダの下に [LDAP] ノードがあります。266 ページの「[LDAP](#)」を参照してください。

## ユーザー プロパティを変更する

既存ユーザーのフィールドは、[ユーザー] ノードから変更できます。以下に、プロパティ設定を変更する一般的な手順を示します。

---

**注意** [ユーザー] ウィンドウ上部のフィルタ バーの詳細は、13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。

---

### Java クライアントでユーザーのフィールドを変更するには:

1. [ユーザー設定] で [ユーザー] をダブルクリックします。[ユーザー] ウィンドウが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をダブルクリックします。そのユーザーのウィンドウが表示されます。
3. フィールドを直接変更するか、リストから項目を選択するか、またはダイアログ ボックスで変更を行います。
4. [保存] ボタンをクリックします。

### Web クライアントでユーザーのフィールドを変更するには:

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー] の順にクリックします。[ユーザー] ページが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をクリックします。そのユーザーのページが表示されます。
3. [編集] をクリックします。フィールドが編集可能になります。フィールドを直接変更するか、リストから項目を選択するか、またはダイアログ ボックスで変更することができます。フィールドを変更します。
4. [保存] ボタンをクリックします。

ユーザーが次回ログインしたときには、そのユーザーのプロパティに対して行った変更結果が表示されます。しかし、いくつかのプロパティ ([タイム ゾーン] や [電子メール通知を受信] など) に関しては、いったんログアウトしてから再度 Web クライアントにログインするまでは、プロパティへの変更内容を確認できません。

## ユーザーのパスワードを変更する

新規ユーザーを追加する場合はユーザーにパスワードを割り当て、初回にユーザーが Agile PLM にログインできるようにします。初回ログイン後、ユーザーは必要に応じて、Agile PLM でパスワードを変更できます。Agile PLM 管理者もユーザーのパスワードを変更できます。

各ユーザーはログイン パスワードと承認用パスワードを持ちます。1 つのパスワードを両方の目的に使用することもできます。ログイン パスワードと承認用パスワードを別にするか、1 つのパスワードを両方に使用するかを指定できます。ログイン パスワードは、Agile PLM へのアクセスを確立する場合に必要です。また、ユーザーが変更などのオブジェクトを承認する場合には、システムにより承認用パスワードが求められます。

承認用パスワードを別にするにより、セキュリティが向上します。社内でこの種のセキュリティが必要な場合や、適切なユーザーだけがオブジェクトを承認できる (多くの場合、検証の目的) ように保証する必要がある場合は、[承認にログイン パスワードを使用] を [いいえ] に設定します。

### Java クライアントでユーザーのログイン パスワードまたは承認用パスワードを変更するには

1. [ユーザー設定] で [ユーザー] をダブルクリックします。[ユーザー] ウィンドウが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をダブルクリックします。そのユーザーのウィンドウが表示されます。
3. ログイン パスワードを変更するための [パスワードの変更] ボタンをクリックします。
4. [パスワードのリセット] (または [承認用パスワードのリセット]) ダイアログ ボックスが表示されます。新規のログイン パスワードまたは承認用パスワードを入力します。大文字と小文字が区別されることに注意してください。ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインするときには常にパスワードを大文字で入力する必要があります。
5. 確認のためにパスワードを再入力します。[OK] をクリックします。
6. 表示されたメッセージで [OK] ボタンをクリックします。

### Web クライアントでユーザーのログイン パスワードまたは承認用パスワードを変更するには:

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー] の順にクリックします。[ユーザー] ページが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をクリックします。そのユーザーのページが表示されます。
3. ログイン パスワードを変更するには、[パスワードのリセット] ボタンをクリックします。承認用パスワードを変更するには、[承認用パスワードのリセット] をクリックします。
4. [パスワードの変更] (または [承認用パスワードの変更]) ウィンドウが表示されます。新規のログイン パスワードまたは承認用パスワードを入力します。大文字と小文字が区別されることに注意してください。ここでパスワードをすべて大文字で入力すると、ユーザーは Agile PLM にログインするときには常にパスワードを大文字で入力する必要があります。
5. 確認のためにパスワードを再入力します。[OK] をクリックします。

## ユーザーの役割の割り当てを変更する

ユーザーの役割の割り当ては、[ユーザー] ノードまたは [役割] ノードから変更できます。これらのノードで行われたユーザーの役割の変更は、他のノードにも自動的に反映されます。

- [ユーザー] ノードからは、個々のユーザーの役割の割り当てを表示して変更できます。
- [役割] ノードからは、特定の役割に割り当てられたユーザーの他、役割のプロパティおよびマスクを表示し、変更することができます。

## 定義済みユーザー プロパティ

次の表に、Agile PLM システムですべてのユーザーに共通のプロパティの一覧と説明を示します。[一般情報]、[プリファレンス]、[エスカレーション]、および [ユーザー グループ] タブが記載されています。[共有]、[確認通知]、[添付ファイル]、および [履歴] タブは自動的に作成され、それ自体のフィールドやプロパティはありません。

**注意** ユーザーのプリファレンスは、すべてのユーザー オブジェクトの [プリファレンス] タブに表示されています。ユーザー プリファレンスには 3 つのカテゴリがあります。システム関係、形式関係、ディスプレイ関係です。これらの「ユーザー プリファレンス」は、「システム全体のプリファレンス」である [管理者]>[サーバ設定]>[プリファレンス] ノードと混乱させないでください。

プロパティ	説明 (デフォルトには下線が引かれています)
[一般情報] タブ、必須フィールド	
ユーザー ID (ユーザー名)	ユーザーの Agile PLM ログイン ユーザー ID、またはユーザー名です。これは、Agile PLM アドレス帳で固有である必要があります。最大文字数は 128 文字です。143 ページの「 <a href="#">ユーザー名について</a> 」を参照してください。
[名] および [姓]	ユーザーの公開名です。ユーザーの名前を示すフィールドは、システム内で固有である必要はありません。固有である必要があるのは、ユーザー ID のみです (143 の「 <a href="#">ユーザー名について</a> 」を参照)。
ステータス	タスクが有効 (アクティブ) か、無効 (停止) かを示します。無効なユーザーはログインできません。
電子メール	変更の通知/送信のためのユーザーの有効な電子メール アドレス。 例: <a href="mailto:danny.design@agile.com">danny.design@agile.com</a> <b>注意:</b> [電子メール] フィールドに有効な電子メール アドレスが記入されていないと、ユーザーは電子メールによる通知を受信しません。
[一般情報] タブ、オプションのユーザー情報	
ステータス	[アクティブ] または [停止]。(これは、それぞれ「有効」または「無効」と同じです。)
タイトル	ユーザーの役職 (例: シニア エンジニア)。
住所フィールド	情報目的のみで、4 つの住所フィールドを使用することができます。[住所 (番地)]、[市区町村]、[郵便番号]、および [地域情報]。[地域情報] フィールドは一連のドロップダウン リストです。
電話番号フィールド	ユーザーの勤務先電話、自宅電話番号、携帯電話番号 (表示のみ)。
ファックス	ユーザーのファックス番号 (表示のみ)。
ポケットベル	ユーザーのポケットベル番号 (表示のみ)。
電子メール (代表以外)	[電子メール (代表以外)] はオプションですが、このフィールドが記入されていると、ユーザーは両方の電子メール アドレスで通知を受信します。
[一般情報] タブ ([プロフィール] フィールド)	
役割	ユーザーの役割割り当て。このプロパティによって、ディスカバリ ポイント以降の Agile PLM 内のオブジェクトへのユーザー アクセスが決定されます。165 ページの「 <a href="#">役割</a> 」を参照してください。

プロパティ	説明 (デフォルトには下線が引かれています)
リスト	<p><b>注意:</b> これらのリストは、以下で示すように、ルーティング可能オブジェクトとそのワークフローに特有なものです。[リスト] ノードでこれらを編集することはできません。リストへの名前の追加または削除は、ユーザー プロファイルのこの設定に基づいて行われます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ [変更分析者リスト] は、設計変更の [カバー ページ] にある [変更分析者リスト] にユーザー名を表示するかどうかを管理します。</li> <li>□ [コンポーネント エンジニア リスト] は、製造元変更の [カバー ページ] にある [コンポーネント エンジニア リスト] にユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。</li> <li>□ [適合性管理者リスト] は、デklarレーションの [カバー ページ] の [適合性管理者] リストにユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。</li> <li>□ [価格管理者リスト] は、価格オブジェクト (価格変更、見積履歴、および公表価格) の [カバー ページ] にある [価格管理者リスト] にユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。</li> <li>□ [品質管理者リスト] は、品質変更依頼オブジェクト (是正・予防処置および検証) の [カバー ページ] にある [品質管理者リスト] にユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。</li> <li>□ [品質分析者リスト] は、製品サービス依頼オブジェクト (問題レポートおよび NCR) の [カバー ページ] にある [品質分析者] リストにユーザーの名前を表示するかどうかを管理します。</li> </ul>
検索	<p>[変更分析者検索] は、Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーが以下を持つかどうかを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ [変更分析者検索] フォルダ</li> <li>□ [私の受信トレイ] 内の変更分析者検索条件</li> </ul> <p>[コンポーネント エンジニア検索] は、Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーが [コンポーネント エンジニア検索] フォルダを持つかどうかを管理します。</p> <p>[品質検索] は、Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーが以下の設定を持つかどうかを管理します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ [品質検索] フォルダ</li> <li>□ [私の受信トレイ] 内の品質検索条件</li> </ul> <p>[コンテンツ マネージャ検索]、[価格検索]、[プログラム検索]、[サプライヤ見積依頼検索] および [ソーシング検索]</p>
ユーザー カテゴリ	<p>[パワー]、[同時接続]、または [制限付き]。281 ページの「<a href="#">ユーザー ライセンス</a>」を参照してください。</p>
承認用パスワードにログイン パスワードを使用	<p>各ユーザーは、ログイン パスワードと承認用パスワード (変更の承認に使用) を持ちます。1 つのパスワードを両方の目的で使用する場合は、[承認用パスワードにログイン パスワードを使用] を「はい」に設定します。承認用のパスワードが必要な場合は、「いいえ」に設定します。ユーザーに新規の (大文字と小文字を区別する) パスワードを定義するには、設定ウィンドウ上部の [パスワードの変更] ボタンを使用します。</p>

プロパティ	説明 (デフォルトには下線が引かれています)
エスカレーションの指定承認を許可	<p>ユーザーが 1 人以上のエスカレーション担当者 (DEP) を指定するとき、ここでその DEP がいつルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できるかが設定されます。</p> <p>設定:          [エスカレーション後] - ユーザーの DEP が変更を承認できるのは、ルーティング可能なオブジェクトがエスカレーションされた後のみです。          [常時] - ユーザーの DEP は、ルーティング可能なオブジェクトを常に承認または却下できます。</p> <p>(エスカレーション担当者のステータスの詳細は、160 ページの「<a href="#">エスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てる</a>」を参照してください。)</p>
ホーム組織	[ユーザー] ノードから作成されたすべてのユーザーの企業のプロファイル名 (組織名) と、[サプライヤ グループ] ノードから作成されたすべてのユーザーのサプライヤ名およびサプライヤ番号。
拠点 および デフォルトの拠点	[拠点] は、分散型製造に対して使用され、ユーザーが関わる企業のすべての場所を示します。このプロパティのドロップダウン リストからの選択内容は、[デフォルトの拠点] のドロップダウン リストに移入されます。[デフォルトの拠点] は、ユーザーの本拠地です。
[出荷先] 住所フィールド	<p>[認定出荷先] (PCM の以前のバージョンでは [拠点] と呼ばれていました) は PCM のみで使用されており、ユーザーがソーシング アクティビティを開始できる企業のすべての場所を示します。このプロパティのドロップダウン リストからの選択内容は、[出荷先本社] のドロップダウン リストに入力されます。</p> <p>[ホーム出荷先] は、ユーザーがソーシング活動の責任者となる主な場所です。</p>
パートナー用プログラム管理者	このユーザーがプログラム管理者であるパートナー ([パッケージ] オブジェクトの変更分析者)。162 ページの「 <a href="#">ユーザー グループをパートナーとして設定する</a> 」を参照してください。
[レート] フィールド	3 つの [レート] フィールドがあります。[賃率]、[間接費率]、および [請求率] です。これらのフィールドのドロップダウン リストには、[通貨換算レート] ノードに入力されたすべての通貨が表示されます。ユーザーの [推奨通貨] から別の通貨を選択できます ([プリファレンス] タブを参照)。PPM で使用します。
コメント	Agile PLM 管理者はユーザーについてのコメントを入力できます。このコメントは、ユーザーが [設定] > [ユーザー プロファイル] をクリックしても表示されません。
プログラム タイプ	ユーザーが参加できるプログラムのタイプです。利用可能な値は [プログラム タイプ リスト] により異なります。
地域	ユーザーが属する地域です。利用可能な値は [地域リスト] により異なります。
部門	ユーザーが属する部門です。利用可能な値は [部門リスト] により異なります。
製品ライン	ユーザーがアクセスする製品ラインです。利用可能な値は [製品ライン リスト] により異なります。
顧客	ユーザーに関わりのある顧客です。利用可能な値は [顧客リスト] により異なります。
開始年	ユーザーと関連性のある製品開始年です。利用可能な値は [開始年リスト] により異なります。
カテゴリ 7、カテゴリ 8、 カテゴリ 9、カテゴリ 10	オプションの Product Portfolio Management ダッシュボード フィールド。



プロパティ	説明 (デフォルトには下線が引かれています)
[プリファレンス] タブ: システム プリファレンス	
優先クライアント	<p>このフィールドは、ユーザーへのシステム通知に示されるリンクのタイプを管理します。Web クライアント、Java クライアント、またはポータル クライアントを選択します。</p> <p><b>重要:</b> Agile の PCM、PG&amp;C、PPM の各ソリューションは、Web クライアントでのみ有効です。主にこれらのエリアで作業するユーザーは、[優先クライアント] を Web クライアントに設定してください。</p>
優先ファイル サーバ	<p>ファイル サーバのリストから選択します。パフォーマンスを重視する場合は、ユーザーにとってローカル サーバとなるファイル サーバを選択します。たとえば、米国内のユーザーに対しては、米国内にあるサーバを選択します。(ファイル管理サーバの詳細は、257 ページの「<a href="#">Agile PLM におけるファイル管理</a>」を参照)</p>
推奨ポータル URL	<p>Agile PLM ポータルにアクセスするために使用する URL を指定します。ユーザーの Agile PLM 電子メール通知に、ポータル URL へのリンクが挿入されます。</p>
電子メール通知を受信	<p>ユーザーがシステムで作成された電子メール通知を自動的に受信するかどうかを管理します。</p> <p>設定 = 「はい」 または 「いいえ」</p>
ファイル プロダクティビティ プリファレンス	<p>ユーザーが詳細プロダクティビティ コンポーネントまたは標準コンポーネントにアクセスできるかどうか、もしくは毎回プロンプトを表示するかどうかを管理します。「標準」モードに設定されている場合、未対応ファイルは自動的に開かれませんが、代わりに、ユーザーは [保存] または [開く] のどちらかを選択するよう指示されます。</p> <p>設定 = 「プロンプト」、「詳細」、「標準」</p> <p><b>注意:</b> このユーザー プリファレンスは、システム全体のプリファレンスの [プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする] が「いいえ」に設定されている場合は、ユーザーの [プロファイル] に表示されません (「プリファレンス」を参照)。</p>
[プリファレンス] タブ: フォーマット プリファレンス	
言語	<p>英語はすべての Agile PLM ライセンスで使用できます。Agile PLM では、ライセンスによって日本語、繁体字中国語、簡体字中国語、フランス語、またはドイツ語を使用できます。</p>
週労働時間の設定	<p>これは今後使用するための設定で、現在の Agile PLM モジュールでは参照されません。</p> <p><b>注意:</b> このプロパティは Product Portfolio Management および Microsoft Project スケジュールも含めて Agile PLM モジュールには適用できません。</p>
推奨日付フォーマット	<p>ユーザーに対して表示される日付の形式。デフォルトは MM/dd/yyyy です。</p>
タイム ゾーン	<p>ユーザーが位置する場所のタイム ゾーン。</p>
推奨時間フォーマット	<p>ユーザーに対して表示される時刻形式。デフォルトは hh:mm:ss aaa (aaa = am または pm) です。</p>
推奨通貨	<p>ユーザーに対して表示される価格/コストの通貨。デフォルトは米ドルです。このプロパティのドロップダウン リストには、[通貨換算レート] ノードから入力したすべての通貨が表示されます。</p>



プロパティ	説明 (デフォルトには下線が引かれています)
数字フォーマット	ユーザーに対して表示される数字の形式です。管理者またはユーザーが形式タイプを選択します (たとえば、千単位の区切りにカンマ、小数点にピリオドを使用するように選択したり、千単位の区切りは使用せず小数点にカンマを使用するように選択したりすることができます)。各形式の例がドロップダウン リストに表示されます。
[プリファレンス] タブ: 表示プリファレンス	
推奨開始ページ	[ホーム]、[ダッシュボード]、[ダッシュボード ファイナンシャル]、[ダッシュボード私のアクティビティ]、[ダッシュボード プログラム]、[ダッシュボード リソース] から選択します。
推奨受信トレイビュー	[アクティビティ]、[通知]、または [ワークフロー] を選択します。
回答編集モード	[基本]、[詳細テーブル編集]、または [詳細ウィザード編集] を選択します。[基本] 設定では、ユーザー (一般的には、「バイヤー」企業で働いていない「サプライヤ」) が簡素化された Web クライアント ユーザー インターフェースを使用できます。2 つの [詳細] 設定では、ユーザーには見慣れた Web クライアント UI が表示されます。これらの設定の詳細は、『PCM Supplier Handbook』および『PG&C Supplier Guide』を参照してください。
テーブルごとの表示行数	ユーザーの Agile Web クライアント ユーザー インターフェースに表示される行数。デフォルトは 50 です。
静的テーブル ヘッダ	[はい] に設定すると、テーブル ヘッダが追加ページに繰り越されます。
最大表示行数	検索結果を含め、Agile PLM テーブルで表示される最大行数です。デフォルトは 1000 です。このプロパティを高い値に設定すると、検索で結果が表示されるまでに時間がかかります。 <b>注意:</b> このユーザー プリファレンスがシステム全体の [検索結果の最大表示数] プリファレンスよりも少なく設定されている場合、前者は後者に上書きされます。
メイン ツールバー (Web クライアント)	Web クライアントのメイン ツールバーの [見出し] メニューは、[アイコンのみ]、[テキストのみ]、または [アイコンとテキスト] で表示できます。
エンコード形式	以下より選択します: 西ヨーロッパ言語 (ISO)、日本語 (Shift JIS)、繁体字中国語 (Big 5)、日本語 (EUC)、簡体字中国語 (GB2312)、および Unicode (UTF-8)。
[エスカレーション] タブ	
条件 および ユーザーに通知	ユーザーがサインオフすることなくワークフロー ステータスがエスカレーションの指定期間を超えた場合に通知する個々のユーザーまたはユーザー グループ (パーソナルまたはグローバル グループ) を、[条件] および [ユーザーに通知] に設定します。1 人のユーザーは、多様なワークフロー関連の条件に複数の指定されているエスカレーション担当者を割り当てることができます。詳細は、160 ページの「 <a href="#">エスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てる</a> 」を参照してください。
[ユーザー グループ] タブ	
名前およびステータス および役割	アドレス帳に対するユーザーのユーザー グループの割り当て。これらのフィールドは、このタブまたはユーザー グループ設定ウィンドウの [ユーザー] タブで設定することができます。1 人のユーザーが複数のグループに属することができます。詳細は、154 ページの「 <a href="#">ユーザー グループ</a> 」を参照してください。

## ユーザーを削除する/削除を取り消す

他のオブジェクトに関連付けられているユーザーは、ハード削除またはソフト削除できません。新たに作成した関連付けられていないユーザーは、[ユーザー] ノードから削除できます。そのユーザー オブジェクトは、[削除されたユーザー] ノードに表示されます。

この処理は元に戻すことができます。[削除されたユーザー] ノードで、削除したユーザーを選択して [削除取消] ボタンをクリックします。ユーザー オブジェクトはユーザー ノードに復元されますが、このユーザーを表示するにはユーザー ノードを閉じてから再度開く必要があります。この操作は、更新ボタンでは実行できません。

誰かが会社を辞める場合、または Agile PLM をもう使わない場合、またはユーザーが Agile PLM システムにログインできないようにする必要がある場合、[ステータス] プロパティを [停止] に設定することでユーザー オブジェクトを無効にします。ユーザーは [ユーザー] ノードに残り、名前は既存のワークフロー、エスカレーションなどに依然として表示されますが、そのユーザーは他のユーザーが選択できるアドレス帳には表示されません。このユーザーは、いつでもアクティブなステータスにリセットできます。

停止したユーザーは、[グローバル置換] を使用して、その名前が使用されているシステムのすべての場所で検索して置換できます (17 ページの「[グローバル置換](#)」を参照してください)。

## アカウント規約

Agile PLM へのアクセスに高度なレベルのセキュリティを確保するため、システム全体のユーザー アカウント規約を設定できます。この規約の機能には、パスワードの有効期限、長さ、固有性、ロックアウトなどがあります。

### 作業を開始する前に

作業を開始する前に

Agile PLM でシステム全体のユーザー アカウント規約を設定する前に、以下の質問にお答えください。


- LDAP システムを使用して Agile PLM ユーザーを使用するか。LDAP サーバで [アカウント規約] 機能を設定することができます。145 ページの「[管理者のノードとしての LDAP](#)」を参照してください。
- ユーザー パスワードの有効期限を設定するかどうか。設定する場合、期間 (日数) はどの程度にするか。
- ユーザーがパスワードをいつでも変更できるようにするかどうか。そうしない場合、変更の間隔をどの程度 (日数) にするか。
- 許可される最低文字数を何文字にするか。
- 同じパスワードを再使用できないようにするかどうか。再使用できないようにする場合、古いパスワードをいくつまでシステムで管理するか。
- システムへの無許可のログインをシステム全体のロックアウト規約で防止するかどうか。
- ユーザーがロックアウトされた場合に、自分または他のユーザーが通知を受けるかどうか。

## アカウント規約を設定する

システム全体のアカウント規約を設定するには:

1. [ユーザー設定] で [アカウント規約] をダブルクリックします。[アカウント規約] ウィンドウが表示されます。
2. 下表で説明されているプロパティを設定し、システム全体のアカウント規約を設定します。

プロパティ	説明
アカウント ロックアウト	システムが失敗したログオンを記憶するかどうかを管理します。このプロパティを「無効」に設定すると、システムは失敗したログオンを記憶せず、[ログオン試行]、[リセット時間]、[ログアウト時間]、[アカウント ロックアウト時にユーザー通知] などのプロパティは使用されません。[アカウント ロックアウト] が「有効」に設定されていると、これらのプロパティは有効となります。
ログオン試行	[アカウント ロックアウト] が「有効」に設定されている場合に有効になります。1 ～ 999,999,999 の値を入力します。デフォルトでは 3 回に指定されています。3 回目に失敗すると、コンピュータはロックアウトされます。
リセット回数時間 (分)	[アカウント ロックアウト] が「有効」に設定されている場合に有効になります。1 ～ 999,999,999 の値を入力します。デフォルトは 30 分です。30 分を経過すると、コンピュータは [ログオン試行] に設定されている許容試行回数に戻ります。ロックアウトされているユーザーで、ログアウト時間の値がリセット回数時間より長く設定されているユーザーは、リセット回数時間が過ぎても引き続きロックアウトされます。他のユーザーは、リセット回数時間が過ぎると、このマシンにログオンできます。
ロックアウト期間 (分)	[アカウント ロックアウト] が「有効」に設定されている場合に有効になります。1 ～ 999,999,999 の値を入力します。デフォルトは 0 です。これは、管理者がユーザー アカウントをリセットするまで、ユーザーがロックアウトされることを意味します。ロックアウト期間とリセット回数時間は、常に両方が使用されるわけではありません。これは、ユーザーがロックアウトされると、これら 2 つのプロパティのいずれか高いほうの値の期限が切れるまで待機する必要があります。
パスワード最大有効期間 (日数)	パスワードの有効期間を制限する日数を入力します。デフォルトは 0 です。
パスワード最短長	この値は、ユーザー パスワードの最短文字数を設定します。デフォルトは 1 です。

プロパティ	説明
パスワードの固有性	<p>値 0 (デフォルト) は、パスワードを変更する際に、以前使われたことのあるパスワードの再利用を許可します。同じパスワードの再利用を禁止するには、数値を入力します。この数値は、システムが各ユーザーに対して記憶できるパスワードの数で、再利用を禁止します。</p> <p>たとえば、この値が 3 に設定されると、ユーザーは 4 回目のパスワードを設定するときまで、最初のパスワードを再利用できません。ただし、5 回目にパスワードを設定するとき、ユーザーは最初のパスワードを使用することができるようになります。これは、システムが 2 つ目、3 つ目、4 つ目のパスワードを記憶したために、1 つ目の記録が消されたためです。</p>
アカウント ロックアウト通知 ユーザー	<p>[アカウント ロックアウト] が「有効」に設定されている場合に有効になります。ロックアウトされているユーザーが電子メール通知を受信できるようにするには、右側の  ボタンをクリックしてアドレス帳を表示し、通知対象となるユーザーを選択します (複数選択可)。</p> <p>アドレス帳の [ユーザー グループ] タブでユーザー グループを選択すると、グループのすべてのメンバーを追加するボタンだけが有効となります。ただし、グループのすべてのメンバーを追加した後に、受信者リストから個別ユーザーを削除できます。</p>

**注意** アカウントのロックアウト ルールは、Agile PLM クライアント (Java クライアント、Web クライアント、ChangeCAST、AIS と SDK) に適用されます。

## ロックアウトされたアカウントの管理者リセット

[ログオン試行] の許容回数を超えて間違ったパスワードを入力したために、ユーザーがアカウントからロックアウトされ、[リセット時間] に高い値が設定されている場合は、そのユーザーのログイン パスワードをリセットしてください。この操作によって、ユーザーのロックアウト ステータスがリセットされ、再びシステムにアクセスできるようになります。

**注意** パスワードに関する追加設定 (Web クライアント ユーザー) は、[プリファレンス] ノードにあります。277 ページの「[パスワードのリセット許可](#)」を参照してください。

## ユーザー グループ

[ユーザー グループ] ノードからは、ユーザーやエスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てたり、ユーザー グループの名前を変更したり、新規のユーザー グループを作成することができます。

また、プロジェクト チーム、パートナー、部署、部門、課、拠点関連のグループおよびグローバル グループと割り当てられたユーザーを定義することもできます。ここでの設定は、Agile PLM のアドレス帳の [ユーザー グループ] ノードに反映され、電子メール通知の送信に使用されます。

Agile PLM 管理者は、次の 2 つのノードから Agile PLM システムのユーザー グループを設定できます。

- [ユーザー グループ] ノードでは、ユーザーを作成し、名前を付け、割り当てることによってユーザー グループを設定します。ユーザー グループは、Agile PLM のアドレス帳に表示されます。ユーザーが Agile PLM クライアントの [オブジェクトの送信] ダイアログ ボックスの [宛先] ボタンをクリックすると、アドレス帳が表示されます。アドレス帳でユーザー グループを選択することができます。[ユーザー グループ] ノードで指定したユーザー グループの割り当ては、ユーザーのウィンドウまたはページの [ユーザー グループ] タブにも反映されます。

- [ユーザー] ノードからは、ユーザー グループの割り当てを含むユーザー プロパティを設定します。[ユーザー] ノードで指定したユーザー グループの割り当ては、[ユーザー グループ] ノード内にあるそのユーザー グループのユーザー プロパティにも反映されます。[ユーザー] ノードに新規ユーザーを追加するとき、ユーザーを 1 つ以上のユーザー グループに割り当てることができます。この割り当ては、[ユーザー] ノードまたは [ユーザー グループ] ノードが必要に応じて変更できます。ユーザー プロパティの変更方法は、145 ページの「[ユーザー プロパティを変更する](#)」を参照してください。



**注意** 新規に作成したユーザー グループに、既存のユーザーを割り当てる場合は、各ユーザーの [ユーザー グループ] プロパティを設定するより、新規ユーザー グループの [ユーザー] プロパティを設定するほうが簡単です。

旧バージョンの Agile Product Collaboration から Agile PLM にアップグレードし、システム内の既存の組織構造を維持したい場合は、たとえば [部門]、[グローバル グループ]、[パートナー] などと呼ばれるユーザー グループのサブクラスを作成することができます。

## 新規ユーザー グループを作成する

新規ユーザー グループを作成する前に、現在のユーザー グループを確認する必要があります。ユーザー グループ設定レポートを実行します ([分析とレポート] タブ > [標準レポート] > [管理者レポート] ノードから)。レポートには、現在のユーザー グループと割り当てられているユーザーが表示されます。(レポートの詳細は、14 ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください。)

### Java クライアントで新規ユーザー グループを作成するには:

1. [ユーザー設定] で [ユーザー グループ] をダブルクリックします。[ユーザー グループ] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタン  をクリックします。[ユーザー グループ作成] ダイアログ ボックスが開きます。
3. [サブクラス] のドロップダウン リストから、ユーザー グループ タイプを選択します。  
[ユーザー グループ] は、ユーザー グループ クラスで別のサブクラスを作成していない場合に使用できる唯一のサブクラスとなります。作成されていないタイプの新規グループを指定する場合は、まず [クラス] ノードでそのグループを作成して、ドロップダウン リストにグループが表示されるようにしてください。
4. [名前] フィールドに値を入力します。
5. [ユーザー] フィールドの横にある  をクリックします。これにより、アドレス帳が表示されます。[名前] リストからユーザーを、または [グループ] リストから他のユーザー グループを、[受取人] リストに移動します。
6. [OK] をクリックします。新規のユーザー グループ オブジェクトが表示されます。  
この時点から、ユーザーは新規ユーザー グループ オブジェクトを使用できるようになります。グループの名前が [ユーザー グループ] ノードの下に表示され、ユーザー グループの割り当てが [ユーザー] ノード内で更新されます。新規ユーザー グループ名は、Agile PLM のアドレス帳にも表示されます。

### Web クライアントで新規ユーザー グループを作成するには:

1. [ツール] > [管理] > [ユーザー グループ] の順にクリックします。[ユーザー グループ] ページが表示されます。
2. [作成] をクリックします。ユーザー グループの作成ウィザードが開き、[サブクラスの選択]、[名前の識別] ページが表示されます。この見出しには、各ユーザー グループ オブジェクトが Agile PLM オブジェクトのユーザー グループ クラス内のサブクラスであることが示されます。

3. [サブクラス] のドロップダウン リストから、ユーザー グループ タイプを選択します。  
作成されていないタイプの新規ユーザー グループを指定する場合は、Java クライアントの [クラス] ノードでそのグループを作成してから、ドロップダウン リストにグループが表示されるようにする必要があります。
4. [名前] フィールドに値を入力します。
5. [続行] をクリックします。[ユーザー グループの定義] ページが表示されます。
6. 必要に応じて、ユーザー グループ プロパティを入力します。詳細は、156 ページの「[ユーザー グループ プロパティ](#)」を参照してください。
7. 入力を完了後、[次へ] をクリックします。[ユーザーの追加] ページが表示されます。  
ユーザーを割り当てずに新規ユーザー グループを作成するには、[完了] をクリックします。[ユーザー] タブの [ユーザー グループ] ページと Agile PLM のアドレス帳に新規ユーザー グループ名が表示されます。
8. ユーザーをユーザー グループに割り当てるには、[追加] をクリックします。選択ウィンドウが表示されます。名前を入力してユーザーを検索するか、または既存のユーザーのリストから選択することができます。または、既存のユーザーのリストから名前と名字順に並べ替えることもできます。選択されたユーザーの詳細を表示したりユーザーを検索したりするためのボタンがあります。
9. [利用可能な値] リストから 1 つまたは複数の名前を選択し、右矢印をクリックします。選択した名前が [選択された値] リストに移動します。  
[追加] をクリックします。ユーザーが [ユーザーの追加] ページに追加されます。  
[完了] をクリックします。  
新規ユーザー グループの名前が [ユーザー グループ] ページに表示され、ユーザー グループの割り当てが [ユーザー] ページ内で更新されます。新規ユーザー グループ名は、Agile PLM のアドレス帳にも表示されます。

## ユーザー グループ プロパティ

下表はユーザー グループ プロパティを表示しています。

プロパティ	説明
名前	ユーザー グループの名前を指定します (29 文字以内)。
タイプ	サブクラスを選択します。デフォルトのサブクラスは「ユーザー グループ」です。管理者は、ユーザー グループ クラス内に他のサブクラスを作成できます。それらは、このドロップダウン リストに表示されます。
説明	ユーザー グループの説明。
ステータス	ユーザー グループがアクティブであるかどうかを示します。アクティブなグループはアドレス帳に表示され、アクティブでないグループは表示されません。
グローバル/パーソナル	グローバル ユーザー グループは、すべてのユーザーに対して使用できます。パーソナル グループは、グループの作成者のみが表示して使用できます。
役割	グループに適用される役割は、グループ内のすべてのユーザーに適用されます。
リソース プール	そのユーザー グループを Product Portfolio Management オブジェクトの割り当て用のリソース プールとして使用できるようにします。

プロパティ	説明
パートナー グループとして定義	ユーザー グループをパートナー (メンバーはパッケージ オブジェクトを作成して提出できる) にする場合は、[はい] を選択します。ユーザーの [パートナー用プログラム管理者] プロパティを設定すると、有効なパートナーのリストにユーザー グループが表示されます。162 ページの「 <a href="#">ユーザー グループをパートナーとして設定する</a> 」を参照してください。
エスカレーションの指定承認を許可	ユーザー グループが 1 人以上のエスカレーション担当者 (DEP) を特定した場合、この設定によりその DEP がいつルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できるかが設定されます。 設定: [エスカレーション後]- ユーザー グループの DEP がルーティング可能なオブジェクトを承認できるのは、そのオブジェクトがエスカレーションされた後のみです。 [常時]- ユーザー グループの DEP は、ルーティング可能なオブジェクトを常に承認または却下できます。 (エスカレーション担当者のステータスの詳細は、160 ページの「 <a href="#">エスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てる</a> 」を参照してください。)
所有者	ユーザー グループの作成者を指定します (表示のみ)。
最大ユーザー数	ユーザー グループに割り当てることのできるユーザーの最大数。  設定: 空白 (デフォルト)- ユーザー数は無制限です。 正の整数 - ユーザー グループに含むことのできるユーザーの最大数を定義します。この数値はユーザー ライセンス数を超過することができますが、すでにユーザー グループに割り当てられたユーザー数を下回することはできません。
[リスト]、[プログラム タイプ]、[地域]、[部門]、[製品ライン]、[顧客]、[開始年]、[貸率]、[間接費率]、および [請求率]	「定義済みユーザー プロパティ」を参照してください。

## ユーザー グループを変更する

以下の手順は、ユーザー グループのあらゆるプロパティの変更に適用されます。

### Java クライアントで [ユーザー グループ] の設定を変更するには:

1. [ユーザー設定] で [ユーザー グループ] をダブルクリックします。[ユーザー グループ] ウィンドウが表示されます。
2. 特定のユーザー グループ ([カスタマ サポート] など) をダブルクリックします。[カスタマ サポート] ウィンドウが表示されます。ユーザー グループのタブとして、[一般情報]、[ユーザー]、[エスカレーション]、[添付ファイル]、[履歴]、[共有] が表示されます。
3. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン リストから選択します。
4. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。
5. 元の設定に戻す場合や最初からやり直す場合には、[閉じる] をクリックします。新規の設定を保存するかどうかを確認するメッセージがウィンドウに表示されます。保存する場合は [はい] を、保存しない場合は [いいえ] をクリックします。



**Web クライアントで [ユーザー グループ] の設定を変更するには:**

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー グループ] の順にクリックします。[ユーザー グループ] ページが表示されます。
2. 特定のユーザー グループ (カスタマ サポートなど) をクリックします。ユーザー グループ:[カスタマ サポート] ページが表示されます。ユーザー グループのタブとして、[一般情報]、[ユーザー]、[エスカレーション]、[添付ファイル]、[共有]、[履歴] が表示されます。
3. [一般情報] タブの [編集] をクリックします。
4. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン リストから選択します。
5. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。
6. 元の設定に戻るかやり直す場合は、[キャンセル] をクリックします。新規の設定をキャンセルするかどうかを確認するメッセージがページに表示されます。キャンセルする場合は [OK]、しない場合は [キャンセル] をクリックします。

## ユーザー グループを削除する

不要なユーザー グループがある場合は削除できます。ユーザーが割り当てられているユーザー グループを削除する場合、ユーザーをユーザー グループから削除する必要はありません。ユーザー グループを削除する場合、このユーザー グループへのユーザー割り当ても同時に削除されます。

削除したユーザー グループは、Agile PLM のアドレス帳からも削除されます。ユーザー グループが以下のような状態で使用中の場合は、削除できません。

- Agile PLM クライアントのルーティング可能なオブジェクトのサインオフ リストに表示されています。
- ワークフローの「通知」プロパティ ([ワークフロー] ノード) に含まれています。
- ユーザー、ユーザー グループ、またはパートナーの指定されているエスカレーション担当者として使用されています。

---

**注意** ユーザーをユーザー グループから削除する場合は、[グローバル置換] ツールを使用して、システム内でそのユーザーが使用されている場所をすべて特定します (17 ページの「[グローバル置換](#)」を参照してください)。

---

**Java クライアントでユーザー グループを一時的に削除するには:**

1. [ユーザー設定] で [ユーザー グループ] をダブルクリックします。[ユーザー グループ] ウィンドウが表示されます。
2. リストからユーザー グループ名を選択します。
3. [削除] ボタンをクリックします。削除を確認するプロンプトが表示されます。
4. [はい] をクリックします。そのユーザー グループは [ユーザー グループ] ウィンドウに表示されなくなります。

**Web クライアントでユーザー グループを一時的に削除するには:**

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー グループ] の順にクリックします。[ユーザー グループ] ページが表示されます。
2. リスト内のユーザー グループ名をクリックします。そのユーザー グループのページが表示されます。
3. [アクション] メニューから [削除] を選択します。削除を確認するプロンプトが表示されます。
4. [はい] をクリックします。そのユーザー グループは [ユーザー グループ] ページに表示されなくなります。



## ユーザー グループをハード削除する

削除したユーザー グループは、[削除されたユーザー グループ] ノードに移動します。アドレス帳には表示されませんが、データベースにはまだ存在します。これが、「ソフト削除された」ユーザー グループと呼ばれます。ユーザー グループを永久的に削除するには、[削除されたユーザー グループ] ノードからこれを削除することができます。これが、「ハード削除された」ユーザー グループと呼ばれます。

---

**注意**      ハード削除されたユーザー グループは、データベースから完全に消去されるため、元に戻したり、削除を取り消したりすることはできません。

---

### Java クライアントで削除されたユーザー グループをハード削除するには:

1. [ユーザー設定] で [削除されたユーザー グループ] をダブルクリックします。[削除されたユーザー グループ] ウィンドウが表示されます。
2. ハード削除したいユーザー グループを選択し、[削除] ボタンをクリックします。  
そのユーザー グループは [削除されたユーザー グループ] ウィンドウに表示されなくなります。

### Web クライアントで削除されたユーザー グループをハード削除するには:

1. [ツール]>[管理]>[削除されたユーザー グループ] の順にクリックします。[削除されたユーザー グループ] ページが表示されます。
2. ハード削除したいユーザー グループの名前をクリックします。そのユーザー グループのページが表示されます。
3. [アクション]>[削除] を選択します。[削除されたユーザー グループ] ページが表示されます。そのユーザー グループは、このページには表示されなくなります。

## ユーザー グループの削除を取り消す

[削除されたユーザー グループ] ノードには、Agile PLM システムから削除されたユーザー グループが表示されます。削除されたユーザー グループがルーティング可能なオブジェクトに対する承認者として割り当てられている可能性があるため、どのユーザー グループが削除されたかを把握するために便利です。製品の検証記録の履歴全体を維持できます。

ユーザー グループの「削除を取り消し」することができます。削除を取り消したユーザー グループは、アクティブな使用状態に戻り、再度アドレス帳に表示されます。

### Java クライアントでユーザー グループの削除を取り消すには:

1. [ユーザー設定] で [削除されたユーザー グループ] をダブルクリックします。[削除されたユーザー グループ] ウィンドウが表示されます。
2. クリックして、削除を取り消すユーザー グループを選択します。
3. [削除取消] ボタンをクリックします。
4. ユーザー グループの名前が [ユーザー グループ] ウィンドウに追加されます。ウィンドウに表示されたグループを表示するには、[更新] ボタンをクリックする必要がある場合があります。

### Web クライアントでユーザー グループの削除を取り消すには:

1. [ツール]>[管理]>[削除されたユーザー グループ] の順にクリックします。[削除されたユーザー グループ] ページが表示されます。
2. 削除を取り消すユーザー グループの名前をクリックします。その [ユーザー グループ] のページが表示されます。

3. [アクション]>[削除取消] の順に選択します。
4. この時点で、必要に応じて情報を編集することができます。ユーザー グループの名前が [ユーザー グループ] ページに追加されます。

## エスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てる

ワークフローのステータスが、サインオフがない状態でエスカレーション期間を過ぎた場合、ユーザー グループ、または個々のユーザーにその旨を通知することができます。これらの通知を受けるエンティティをエスカレーション担当者と呼びます。[エスカレーションの指定承認を許可] プロパティにより、指定されたエスカレーション担当者がいつルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できるかが決定されます。

### Java クライアントで指定されているエスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てるには:


1. [ユーザー設定] で [ユーザー グループ] をダブルクリックします。[ユーザー グループ] ウィンドウが表示されます。
2. ユーザー グループの名前をダブルクリックします。ユーザー グループのタブ付きのウィンドウが表示されます。
3. [エスカレーション] タブをクリックして前面に表示します。
4. [追加] ボタンをクリックします。ドロップダウン リストから、[すべての変更] など、エスカレーションの再利用の条件を選択します。
5. [ユーザーに通知] フィールドのとなりをクリックします。[ユーザーの選択] ウィンドウで、該当するユーザーを [ユーザー] リストから選択するか、他のユーザー グループを [ユーザー グループ] リストから選択し、[受信者] リストに移動して [OK] をクリックします。

[保存] をクリックします。エスカレーションが [エスカレーション] タブに追加されます。

変更をキャンセルする場合は、[閉じる] をクリックします。

指定した条件のエスカレーション期間がサインオフされることなく経過すると、選択されたユーザーにエスカレーション通知電子メールが送信されます。

### Web クライアントで指定されているエスカレーション担当者をユーザー グループに割り当てるには:

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー グループ] の順にクリックします。[ユーザー グループ] ページが表示されます。
2. ユーザー グループの名前をクリックします。ユーザー グループのタブ付きのオブジェクト ページが表示されます。
3. [エスカレーション] タブをクリックして前面に表示します。
4. [作成] をクリックします。ドロップダウン リストから、[すべての変更] など、エスカレーションの再利用の条件を選択します。
5. [ユーザーに通知] フィールドの横にある  をクリックします。選択ウィンドウを使用して、該当するユーザーまたはグループを [利用可能値] リストから選択し、[選択された値] リストに移動して [OK] をクリックします。
6. [保存してさらに追加] または [保存して閉じる] をクリックします。([キャンセル] ボタンもあります。) エスカレーションが [エスカレーション] タブに表示されます。

指定した条件のエスカレーション期間がサインオフされることなく経過すると、選択されたユーザーにエスカレーション通知電子メールが送信されます。

## 変更の承認者としてユーザー グループを追加する

Agile PLM ワークフローでは、[レビュー] と [リリース済み] ステータスの検索条件プロパティについて、[承認者] と [オブザーバ] の 2 つのプロパティを入力する必要があります。

選択ダイアログ ボックスの [利用可能な値] リストから選択できる項目は、[グループの選択] ドロップダウン リストでの選択内容によって変わります。

[グループの選択] ドロップダウン リストの選択肢	[利用可能な値] リストから選択できる項目
すべて	<p>[すべて] を選択すると、[利用可能な値] リストには以下のものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>変数 (例: \$CHANGEANALYST)。</li> <li>すべての Agile PLM ユーザー。</li> <li>すべてのグローバル グループ。[Any] および [All] という接尾辞付きで 2 回リストされます。たとえば、[Sales - Any] を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトがグループ内のすべてのユーザーに対して送信されますが、承認または却下する必要があるのは 1 人のユーザーのみです。[Sales - All] を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトはグループ内のすべてのユーザーに対して送信され、グループ内のすべてのユーザーが承認または却下する必要があります。</li> </ul>
すべてのグループ	<p>[すべてのグループ] を選択すると、[利用可能な値] リストには以下のものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>すべてのグローバル グループ。[Any] および [All] という接尾辞付きで 2 回リストされます。たとえば、[Sales - Any] を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトがグループ内のすべてのユーザーに対して送信されますが、承認または却下する必要があるのは 1 人のユーザーのみです。[Sales - All] を選択すると、ルーティング可能なオブジェクトはグループ内のすべてのユーザーに対して送信され、グループ内のすべてのユーザーが承認または却下する必要があります。</li> </ul>
グループ名	<p>グループ名を選択すると、[利用可能な値] リストには以下のものが含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>そのグループのメンバー。たとえば、[Sales] を選択すると、[利用可能な値] リストにはそのグループのメンバーの名前が含まれます。この選択により、グループ メンバーのサブセットを選択できるようになります。</li> </ul>

複数のダイアログ ボックスを使用するのと同じ方法でこれらを選択します。1 つの名前をダブルクリックするか、または複数の名前を選択し、右矢印をクリックしてユーザーまたはユーザー グループを右側の [選択された値] リストへ移動します。[OK] をクリックして [ステータス] タブの [条件] テーブルに戻り、[保存] をクリックして、そのステータスの承認者の割り当てを完了します。

**注意** [ユーザー グループ - Any] をワークフローの承認者として割り当てると、ユーザー グループのどのメンバーもルーティング可能なオブジェクトをサインオフ (グループが指定されたステータスまで移行) でき、個々のサインオフは、ユーザー グループ全体として適用されます。他のメンバーがルーティング可能なオブジェクトを承認または却下する必要はなく、実行することもできません。グループのメンバーの 1 人が承認または却下した場合には、そのルーティング可能なオブジェクトは、グループの他のユーザーの受信トレイには表示されません。

ただし、他のメンバーは最初のユーザーの応答後には、ルーティング可能なオブジェクトを承認または却下できます。ルーティング可能なオブジェクトをメンバーが却下すると、「現在のものとは異なる CCB (またはリリース済み) の前回のサインオフを無効にしようとしています」という警告が表示されます。そのユーザーが [OK] をクリックすると、前のユーザーによる承認が無効になります。

## ユーザー グループをパートナーとして設定する

このセクションでは、様々な要素について説明します。これらの要素は、Agile パートナーがパッケージを送信し、プログラム管理者がそのパッケージの提出を管理できるように設定する必要があります。「パートナー」とは、あなたの会社と提携している会社で、パッケージを送信する必要のある Agile ユーザーを持つものとして定義されている場合があります。または、パートナーとは、あなたの会社に対して会社を代表する Agile ユーザーである場合もあります。

**注意** 「プログラム管理者」という単語は、パッケージ オブジェクト (パッケージ クラスのインスタンス) を管理する変更分析者を指します。ここでは、Agile の役割である「プログラム管理者」を意味していません。  
また、「プログラム」という単語もプログラムのベース クラスには関係ありません。

### Agile で使用するパートナーとプログラム管理者を作成するには:

1. Agile パートナーを定義するには、どの Agile ユーザー (通常は外部のユーザーで、ユーザー グループに属しています) をパートナーとして定義するかを決定します。各ユーザー グループ オブジェクトには、[パートナー グループとして定義] プロパティがあります。[はい] に設定されている場合は、ユーザーの [パートナー用プログラム管理者] プロパティの利用可能なパートナー リストにユーザー グループが表示されます。
2. パートナーには [パートナー] 役割を割り当てることができます。この役割は、彼らにパッケージの作成と提出の権限を付与します。
3. 1 人、または複数の Agile ユーザー (通常は社内のユーザー) を各パートナーのプログラム管理者として定義します。[パートナー用プログラム管理者] ユーザー プロパティには、手順 1 で設定したすべての「パートナー」ユーザー グループが表示されます。各プログラム管理者に対してパートナー グループを選択してください。つまり、1 人、または複数のパートナー グループに対し、1 人のプログラム管理者を割り当てることができ、他のユーザーは同じ、または異なるパートナー グループのプログラム管理者となることができます。
4. パートナー用プログラム管理者には [コンテンツ管理者] 役割が割り当てられている必要があります。これにより、Agile パッケージ オブジェクトを扱うことができるようになります。前述の注意で述べたように、Agile 役割の中の [プログラム管理者] と混同しないでください。Agile の役割は、PE/PPM ソリューションの機能に関連しています。

## サプライヤ グループ

[サプライヤ グループ] ノードは、承認済みサプライヤを「まとめる」ことにより、PCM ソリューションに関連しているユーザーが RFQ プロセス中に容易に複数のサプライヤを選択できるようにします。

Java クライアントまたは Web クライアントを使用して、管理者は、適切な役割を持つユーザーが利用するグローバル サプライヤ グループを設定できます。Agile PLM ユーザーも、それぞれの特殊なニーズに見合った固有のサプライヤ グループを定義 (作成、編集、削除) することができます。管理者 (ユーザー プロファイルを作成、変更する権限を持つユーザー) は、各ユーザーのユーザー レベルのサプライヤ グループを作成、編集、削除することができます。

Java クライアントでは、[ユーザー設定] で [サプライヤ グループ] をダブルクリックして、メインのサプライヤ グループ ウィンドウを表示します。サプライヤ グループが以下のプロパティとともに一覧表示されます。


プロパティ	説明	編集可能	デフォルト
名前	サプライヤ グループの名前	はい	空
説明	サプライヤ グループの説明	はい	空
サプライヤ	サプライヤ グループ内のサプライヤ リスト	はい	空

プロパティ	説明	編集可能	デフォルト
タイプ	サプライヤ グループのタイプ: グローバルまたはパーソナル グループ。 <b>注意:</b> Java クライアントでサプライヤ グループを作成する場合、デフォルトは代替のない「グローバル」です。Web クライアントでサプライヤ グループを作成する場合、「パーソナル」を利用することができます。	サプライヤ グループを作成した後ではない	グローバル
有効	サプライヤ グループがアクティブであるかどうか	はい	はい


実行できるアクションは以下のとおりです。

- 作成 - ユーザー管理者は新規サプライヤ グループを作成できます。
- 編集 - ユーザー管理者はサプライヤ グループを編集できます。グループにサプライヤを追加または削除するために ([サプライヤ管理者]、[サプライヤ マネージャ]、[サプライヤ プロジェクト ユーザー] の役割を割り当てられていたユーザー)、ユーザー管理者がグループからサプライヤを追加または削除することができます。
- 有効と無効 - [編集] モード (Web クライアント) または [サプライヤ グループ] ウィンドウの上のボタンを使用して (Java クライアント)、サプライヤ グループを有効または無効にすることができます。

#### Java クライアントでサプライヤ グループを作成するには:

- [ユーザー設定] で [サプライヤ グループ] をダブルクリックします。[サプライヤ グループ] ウィンドウが表示されます。
- [新規作成] ボタンをクリックします。[新規サプライヤ グループの作成] ダイアログ ボックスが開きます。
- [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力し、[有効] フィールドで [はい] または [いいえ] を選択します。
- [タイプ] フィールドは、[グローバル] の値が入力された状態でグレー表示されます。(表に記載されているように、「パーソナル」は Web クライアントでサプライヤ グループを作成する場合のみ選択できます。)
- [サプライヤ] フィールドの横にある  をクリックし、サプライヤを [選択肢] リストから [選択済み] リストに移動します。
- [OK] をクリックし、再度 [OK] をクリックします。[サプライヤ グループ] ウィンドウに新規グループ オブジェクトが表示されます。ユーザーはこの時点から利用可能となります。

#### Web クライアントでサプライヤ グループを作成するには:

- [ツール]>[管理]>[サプライヤ グループ] の順にクリックします。[サプライヤ グループ] ページが表示されます。
- [作成] ボタンをクリックします。サプライヤ グループの作成ウィザードが開きます。
- [サプライヤ グループ名] フィールドと [サプライヤ グループ説明] フィールドに入力します。
- [サプライヤ グループ タイプ] で「グローバル」か「パーソナル」のどちらかを選択します。
- [サプライヤ] フィールドの横にある  をクリックします。選択ウィンドウを使用して、[利用可能値] リストから該当するサプライヤを [選択された値] リストに移動し、[OK] をクリックします。


**注意** サプライヤ グループでは選択されたサプライヤが少なくとも 1 つ必要です。

- [OK] をクリックします。
- [完了] をクリックします。

**Java クライアントでサプライヤ グループを作成するには:**

1. [ユーザー設定] で [サプライヤ グループ] をダブルクリックします。[サプライヤ グループ] ウィンドウが表示されます。
2. 変更するグループをダブルクリックします。[サプライヤ グループ] 設定ウィンドウが表示されます。
3. [一般情報] タブで、ドロップダウン リストの値を選択するか、または値を受け入れます。[選択済み] リストへ、またはリストからサプライヤ ユーザーを移動し、サプライヤを追加または削除します。
4. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

**Web クライアントでサプライヤ グループを作成するには:**

1. [ツール]>[管理]>[サプライヤ グループ] の順にクリックします。[サプライヤ グループ] ページが表示されます。
2. サプライヤ グループを選択し、[編集] をクリックします。
3. 必要に応じて値を変更します。サプライヤを追加または削除するには、[サプライヤ] フィールドの横にある  をクリックします。
4. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

## ユーザー モニタ

[ユーザー モニタ] ウィンドウには、Agile PLM システムに現在ログインしているユーザーが一覧表示されます。各ログイン ユーザーについて、以下の情報を表示します。

テーブル列	説明
ユーザー名	ログイン ユーザーの氏名。
ユーザー ID	ユーザーのログイン ユーザー名。
ホスト	ユーザーのホスト。
ログイン日時	ユーザーのログイン日時。

### [ユーザー モニタ] ウィンドウを更新する

[ユーザー モニタ] ウィンドウは動的ではなく、ウィンドウが表示された時点でのユーザー セッション情報を表示します。最新の情報を表示するには、[更新] ボタンをクリックするとウィンドウに表示されるデータが更新されます。

### ユーザーセッションを終了する

[ユーザー モニタ] ウィンドウを使用して、ユーザー セッションを終了させることができます。

**Java クライアントでユーザー セッションを終了するには:**

1. [ユーザー設定] で [ユーザー モニタ] をダブルクリックします。
2. セッションを終了するユーザーを 1 つまたは複数選択します。
3. [セッションの終了] ボタンをクリックします。

ユーザー セッションは、即座には終了しません。アクティブなユーザー セッションを終了させるには、最長で 1 分かかる場合があります。[セッションの終了] ボタンをクリックすると、ユーザーは作業を 1 分間続行することができます。セッションが終了すると、ログイン ウィンドウがユーザーのブラウザに表示されます。

## 役割

扱うトピックは次のとおりです。

- 役割について ..... 165
- 役割を表示する ..... 169
- 役割使用のガイドライン ..... 170
- デフォルトの Agile PLM 役割 ..... 171
- 役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス ..... 175
- 役割を使用する ..... 177

この章では、Agile PLM の事前設定済みの役割を使用する方法と、新しい役割を作成する方法について説明します。

## 役割について

役割と権限は、Agile PLM 機能に対するユーザーのアクセスを管理します。ユーザーが Agile PLM でなんらかの操作を実行するには、少なくとも 1 つの役割が割り当てられている必要があります。各ユーザー（またはユーザー グループ）には、実行するアクションに応じて、複数の役割を割り当てることができます。Agile PLM には総括的な役割と権限マスクがあらかじめ設定されています。役割や権限マスクは、必要に応じて変更可能です。ただし、独自の役割や権限を設定する前に、まず Agile PLM のデフォルトの役割、権限、条件をよく理解することをお勧めします。

Agile PLM でユーザーが実行できるアクション（作成、送信、キャンセルなど）は権限により異なります。権限と再利用の条件との組み合わせにより、ユーザーのアクションを管理するフィルタの機能を果たす権限マスクが構成されます。権限マスクのグループ化により役割が構成され、これにより、変更管理プロセスで共通した機能を果たすユーザー グループに対して共通した権限を割り当てることができます。

**注意** ユーザーに役割や権限マスクを割り当てると、ユーザーが Agile PLM クライアントからログアウトし、再度ログインした後に有効となります。

次のテーブルに、権限、権限マスク、および役割の定義を示します。

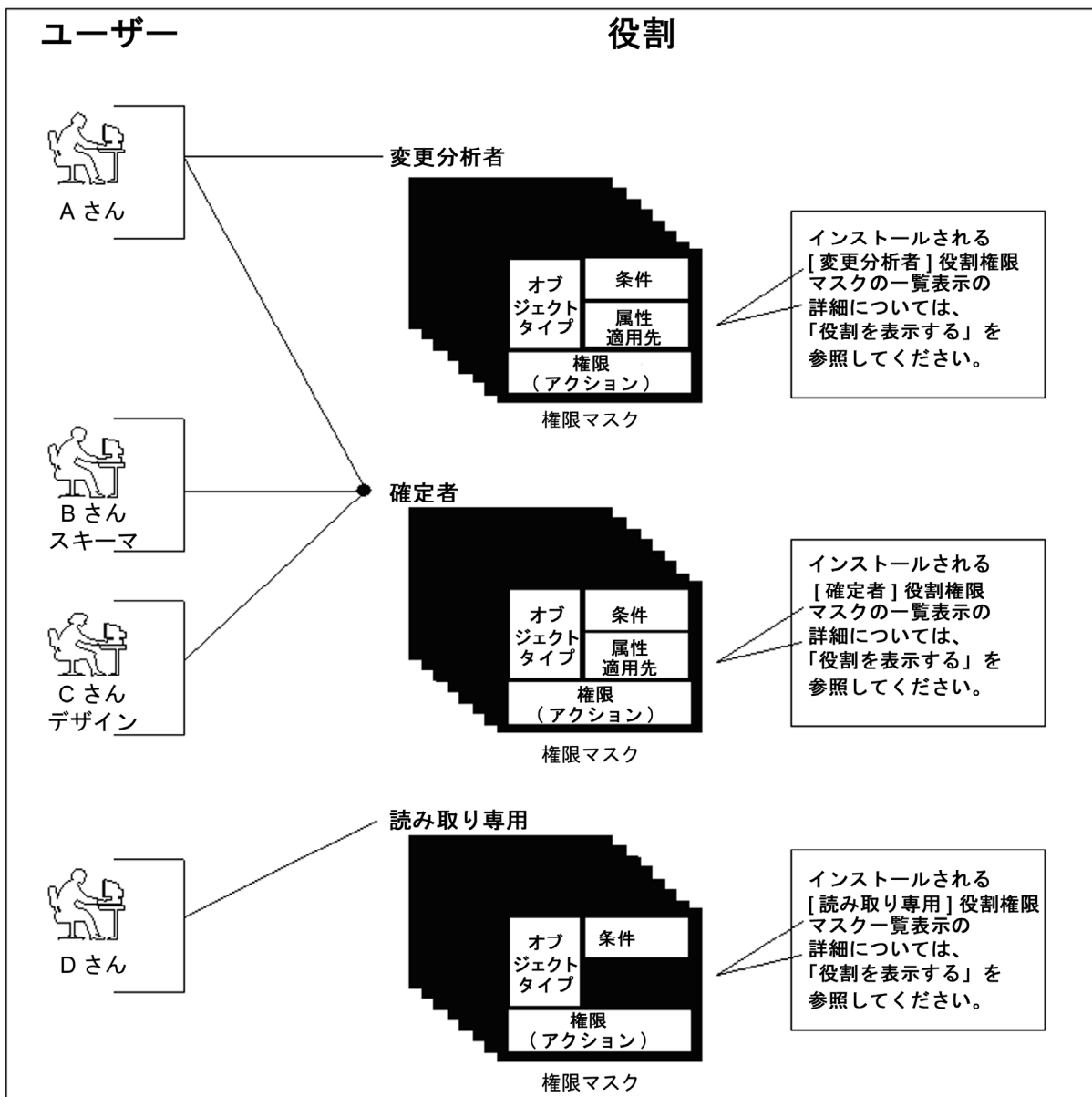
用語	定義	例
権限	ユーザーが実行できるアクション。	作成、送信、リリース
権限マスク	どの条件のもとでオブジェクトに対するアクションを実行できるかを定義する条件ステートメント。役割には少なくとも 1 つの権限マスクが必要です。	設計変更の作成、アイテムの作成、製造元変更の作成、設計変更の送信、アイテムの送信

用語	定義	例
役割	変更管理プロセスで同一の機能を果たす 1 人または複数のユーザーに割り当てることのできる共通の権限。1 人のユーザーに複数の役割を割り当てることができます。	変更分析者の役割： 約 60 の権限マスクで構成される



## 権限マスクのグループとしての役割

権限マスクは役割としてグループ化され、これにより、変更管理プロセスで同じ機能を果たす複数のユーザーに対して、共通した権限を割り当てることができます。次の Acme 社の例は、役割へのユーザーの割り当て方法と、権限マスクを役割にまとめてグループ化する方法を示しています。



前の図は、次のことを示しています。

- ユーザーおよびユーザー グループには、複数の役割を割り当てることができます。
- 1 つの役割を複数のユーザーに割り当てることができます。
- 役割とは、同様の機能を果たす複数のユーザーが必要なアクセスおよび許可の組み合わせです。

## 役割を表示する

既存の役割を表示するには、[役割] ノードをクリックします。以下の処理を行うことができます。

- 役割を有効または無効にする。
- 役割のエクスポートまたはインポートについては、(19 ページの「[オブジェクト履歴](#)」を参照してください)。
- 新規役割を作成します。
- 役割を削除する。

[役割] の名前をダブルクリックすると、タブ付きのウィンドウが表示されます。ほとんどの役割に対し、以下を実行することができます。

- 既存の役割の名前を変更する。限定の役割は例外です。また、[管理者]、[私のユーザー プロファイル]、[履歴レポートの表示] 役割の名前は変更できません。
- [一般情報] タブで役割を有効または無効にする。限定の役割は例外です。また、[管理者]、[私のユーザー プロファイル]、[履歴レポートの表示] 役割は無効化できません。
- [ユーザー] で、ユーザーに役割を割り当て、または役割からユーザーの割り当てを削除する。限定された役割は例外です。また、[管理者]、[私のユーザー プロファイル]、[履歴レポートの表示] 役割では、ユーザーの割り当てを変更できません。
- [権限] タブで役割に権限マスクを追加または削除する。限定された役割は例外です。また、[管理者]、[私のユーザー プロファイル]、[履歴レポートの表示] 役割では、権限マスクの追加または削除はできません。
- [権限] タブで権限マスクの名前をダブルクリックして、その権限マスクのタブ付きオブジェクト ウィンドウを表示する。権限マスクのタブ付きウィンドウが表示されているときは、その権限マスクを変更できます。

[役割] ウィンドウでは、以下の処理は実行できません。

- 権限マスクのオブジェクト タイプを変更する。
- 役割またはその権限マスクの参照コピー (例) を変更する。

## [役割] ウィンドウを表示する

**[役割] ウィンドウを表示するには**

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. 役割レコードをフィルタして、検索を絞り込むことができます。たとえば、変更オブジェクトに関連したすべての役割を検索するために、説明に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

役割のリストがテーブルに表示されます。役割テーブルには、各役割の名前、説明、および有効なステータスが表示されます。ウィンドウ内のボタンを使用すると、様々な役割管理タスクを実行することができます。

ボタン	アクション
新規	新規役割を作成します。(180 ページの「 <a href="#">新規役割を作成する</a> 」) を参照してください。
削除	選択された役割を削除します。使用中の役割は削除できません。
有効化	選択された役割を有効にします。
無効	選択された役割を無効にします。
インポート	テキスト ファイルをインポートして新規役割を作成します。19 ページの「 <a href="#">オブジェクト履歴</a> 」を参照してください。
エクスポート	選択された役割の役割データをエクスポートします。19 ページの「 <a href="#">オブジェクト履歴</a> 」を参照してください。
更新	テーブルを更新して、役割のリストに関する最新の情報を反映させます。

## 役割を表示する

### 特定の役割を表示するには

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. 役割レコードをフィルタして、検索を絞り込むことができます。たとえば、変更オブジェクトに関連したすべての役割を検索するために、説明に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)
3. 希望の [役割] のウィンドウで、役割をダブルクリックします。  
その役割のタブ付きウィンドウが表示されます。役割の基本的なプロパティが [一般情報] タブに表示されます。

ウィンドウ上部に表示されるボタンは、[名前をつけて保存]、[削除]、[エクスポート] です。

## 役割使用のガイドライン

役割を扱う際は、以下の手順に従います。

1. 役割と権限の要約レポートと権限マスクの詳細レポートを印刷し、使用中の Agile PLM システムで現在アクティブになっている定義を確認します。14 ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください。

**注意** 権限マスクの詳細レポートは非常に長くなる可能性があるため、印刷する前にレポートを作成して表示することもできます。

2. 175 ページの「[役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス](#)」に記載されているセキュリティに関する推奨事項を参照し、それに従ってください。
3. 必要であれば、この章で説明する手順に従って、役割を変更および作成します。
4. ユーザーを適切な役割に割り当てます。178 ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

## デフォルトの Agile PLM 役割

[役割] ノードをダブルクリックすると、現在設定されている役割の一覧が表示されます。次の表に、デフォルト設定の役割の一覧と、各役割によってユーザーが実行できる内容の簡単な説明を示します。

ユーザーの任務に応じた数の役割を割り当てることができます。設定された役割をそのまま使用することもできますが、設定された役割をコピー ([名前を付けて保存] を使用) してからそのコピーを変更して新規の役割を作成したり、新規の役割を最初から作成したりすることもできます。

**注意** 可能なかぎり、新しいものを作成するのではなく、Agile PLM のインストールで設定される役割や権限マスクをコピー ([名前を付けて保存] を使用) して適用してください。権限マスクの組み合わせの性質はすぐに明らかにならないため、役割については特に既存のものをコピーするようにしてください。

役割	これら基本クラスへの適用	説明
Agile PLM の役割: すべての Agile PLM ソリューションで作業するユーザーに適用されます		
管理者	すべてのクラス	すべての管理タスクを実行します。他の特殊な管理者役割 (ディスカッション管理者、フォルダ管理者、価格管理者、プログラム管理者、品質管理者、リソース プール管理者、ソーシング管理者、ユーザー管理者など) の機能はすべて、この役割よりも少なくなります。
承認/却下	変更、パッケージ、QCR、PSR、転送依頼、プログラム	ワークフローを使用してルーティング可能なオブジェクトを承認または却下し、アイテムと変更を読み取ります。
ディスカッション管理者	ディスカッション	ディスカッション オブジェクトを作成し、管理します。ディスカッションは、主に Agile PE と PCM ソリューションで使用されますが、このクラスを他のソリューションで使用することもできます。
ディスカッション参加者および (限定) ディスカッション参加者	ディスカッション	ディスカッションの一部を管理します。(限定) ディスカッション パートナーは通常、企業外部で働く人となります。
フィールド レベルでの読み取り	該当なし	この「役割」は、他の役割と組み合わせて使用されます。ユーザーに割り当てられているすべての役割で、[適用先] フィールドに読み取り権限を強制します。これによって、ユーザーの機能が少なくなります。
フォルダ管理者	ファイル フォルダ	ファイル フォルダを作成し、管理します。詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。
フォルダ マネージャ	ファイル フォルダ	ファイル フォルダを作成し、管理します。詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。

役割	これら基本クラスへの適用	説明
自分をマークアップ	ファイル フォルダ (対象アイテムの添付ファイル)	ファイル フォルダまたは設計変更の対象アイテムの添付ファイルに対して、ユーザー自身のレッドライン マークアップを作成および変更します。ユーザーには、ファイル フォルダ オブジェクトまたは設計変更オブジェクトに対する読み取り権限が必要です。詳細は、307 ページの「 <a href="#">レッドライン マークアップに関するデフォルトの役割と権限</a> 」を参照してください。
他のユーザーをマークアップ	ファイル フォルダ (対象アイテムの添付ファイル)	ファイル フォルダまたは設計変更の対象アイテムの添付ファイルに対して、他のユーザーのレッドライン マークアップを変更します。ユーザーには、ファイル フォルダ オブジェクトまたは設計変更オブジェクトに対する読み取り権限が必要です。詳細は、307 ページの「 <a href="#">レッドライン マークアップに関するデフォルトの役割と権限</a> 」を参照してください。
私のユーザー プロファイルおよび (限定) 私のユーザー プロファイル	ユーザー	[個人設定] でユーザー自身のプロファイル プロパティを表示および変更し、パーソナル ユーザー グループを作成および変更します。すべてのユーザーに割り当てられる、Agile PLM システムを使用するために必須の役割です。
ユーザー管理者	ユーザー、ユーザー グループ	ユーザーおよびユーザー グループを対象とした管理タスク (作成、変更、削除) を実行します。
Product Collaboration の役割: Agile PC ソリューションで作業するユーザーに適用されます		
変更分析者	変更、アイテム、製造元、製造元部品、ファイル フォルダ	アイテムと変更を作成し、送信を管理し、ワークフローを使用して変更のプロセスをリリースします。さらに、BOM、MPN、AML を作成し、ファイル フォルダの参照を管理します。
コンポーネントエンジニア	アイテム、製造元、製造元部品、製造元依頼	製造元変更オブジェクトを作成し、送信を管理し、MCO のプロセスをリリースします。
確定者	変更、アイテム、製造元、製造元部品	リリースされたアイテムの添付ファイルを確認およびチェックイン/チェックアウトし、オブジェクトをインポートします。
アイテム コンテンツ マネージャ	変更、アイテム	アイテムを作成し、変更を作成および提出します。
製造元コンテンツ作成者	アイテム、製造元、製造元部品、製造元依頼	アイテム、製造元、製造元部品を作成し、MCO を作成および提出します。
パートナー	パッケージ	パッケージ オブジェクトを作成し、提出します。
製品内容読み取り専用	変更、アイテム、製造元、製造元部品	ディスカバリ、読み取り、コメント、取り出し、印刷、送信、およびアイテム表示、変更、製造元、製造元部品

役割	これら基本クラスへの適用	説明
Product Quality Management の役割: 特に Agile PQM ソリューションで作業するユーザーに適用されます		
組織マネージャ	サプライヤ、顧客	サプライヤと顧客の管理 (また、PCM ソリューションにも適用)
品質管理者	品質変更依頼	是正・予防処置を管理し、プロセスを検証します。
品質分析者	製品サービス依頼	品質問題を提示し、解決策を管理します。
Product Cost Management の役割: 特に Agile PCM ソリューションで作業するユーザーに適用されます		
組織マネージャ	サプライヤ、顧客	サプライヤと顧客の作成および管理 (また、PQM ソリューションにも適用)
価格管理者	価格、価格変更	PCO を含む価格管理アクティビティを管理します。
価格マネージャ	価格、価格変更	価格オブジェクトおよび PCO の作成を通じて価格情報を管理します。
(限定) 価格調整者	価格、価格変更	価格オブジェクトおよび PCO の作成を通じて価格情報を管理しますが、価格管理者の役割よりも制限されています。通常はサプライヤに与えられる役割です。
ソーシング管理者	ソーシング プロジェクト、見積依頼	すべてのソーシング プロジェクトおよび見積依頼の表示および変更能力を含む、ソーシング活動を管理します。
ソーシング プロジェクト マネージャ	ソーシング プロジェクト	ソーシング プロジェクトを作成し、管理します。
見積依頼マネージャ	見積依頼、見積依頼回答	見積依頼を作成し、見積依頼プロセスを管理します。
(限定) 見積依頼回答者	見積依頼回答	RFQ に回答します。通常はサプライヤ ユーザーに与えられる役割です。
(限定) サプライヤ マネージャ	サプライヤ	サプライヤ情報を管理します。サプライヤ自身の組織に限定されます。サプライヤ組織内部でユーザーを作成する機能も含まれます。
Product Portfolio Management の役割: 特に Agile PE (Product Portfolio Management) ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
エグゼクティブ	プログラム	一致カテゴリを持つすべてのプログラムへのグローバル読み取りアクセスです。たとえば、プログラムは北アメリカ地域と関連付けられており、ユーザーがすべての北アメリカに対して [エグゼクティブ] 権限を持つ場合、これらを読み取ることができます。
プログラム管理者	プログラム	完全なプログラムを作成し、管理します。

役割	これら基本クラスへの適用	説明
プログラム マネージャ	プログラム	プログラムの送信およびリリースプロセスを作成、管理します。
プログラム チーム メンバー	プログラム	プログラムの一部を管理します。
リソース プール管理者	プログラム	リソース プールを作成し、管理します。
リソース プール所有者	プログラム	リソース プールを管理します。
レポートの役割: 特にレポートを使用するユーザーに適用されます		
レポート マネージャ	レポート	自分が作成していないレポートを含む、すべてのレポートにアクセスし、管理します。
レポート ユーザー	レポート	新規カスタム レポートを作成し、ユーザー自信が作成したレポートを管理します。
履歴レポートの表示	レポート、履歴レポート ファイル フォルダ	以前に実行したレポートの特定のインスタンスを表示します。これは編集不可な役割であり、レポートのインスタンスがユーザーと共有されている場合には、必ず自動的に割り当てられます。
Agile Content Services の役割: 特に Agile ACS ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
コンテンツ マネージャ	転送依頼、パッケージ	CTO および ATO オブジェクト、およびパッケージ オブジェクトの作成、変更、送信、リリース、導入
Product Governance & Compliance の役割: 特に Agile PG&C ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
適合性管理者	デklarレーション、部品分類、含有基準、サブスタンス	PG&C オブジェクトの作成と管理、PG&C レポートの実行、サプライヤーへのマテリアル デklarレーションの送信
(限定) マテリアル プロバイダ	デklarレーション	マテリアル デklarレーションの作成、変更、完成。通常はサプライヤー ユーザーに提供されます。
分析役割: 特に分析ソリューションで作業するユーザーに適用されます。		
ポートフォリオ分析 ユーザー	ポートフォリオ分析 キューブとレポート	Product Portfolio Management データの多次元分析の実行
品質分析ユーザー	品質分析キューブとレポート	Product Quality Management のデータの多次元分析の実行

## 役割の例

Agile PLM のインストールには、読み取り/書き込み可能なバージョンと読み取り専用のバージョンの両方で、役割の例または役割の参照コピー含まれています。[例] ノード フォルダの下に [役割の例] ノードをダブルク



リックすると、参照コピーが表示されます。これによって、インストール時の役割のデフォルト コピーをいつでも利用できます。デフォルトの役割を復活させるには、[例] の役割のコピーを作成します ([名前を付けて保存] を使用)。

たとえば、インストール時には次の 2 つの変更分析者の役割が提供されます。

- [変更分析者]- これは、ユーザーに割り当て可能な、変更できる (読み取り/書き込み) 役割です。
- [例 - 変更分析者]- これは、[変更分析者] の変更不可能な (読取専用) 役割の参照コピーです。

---

**注意** Agile PLM ユーザーがルーティング可能なオブジェクトのステータスを別のステータス ([中断] から [CCB] など) に移行できないときは、多くの場合、そのユーザーに、これらのステータスを変更するための権限がありません。このような場合には、割り当てられている役割とその役割に含まれる権限マスクを確認してください。

---

役割の例の詳細は、182 ページの「[役割の例を使用する](#)」を参照してください。

## 限定された役割

役割の中には、指定されたオブジェクトに対して操作できる範囲が限定されているものがあります。そのような役割の名前の前には、(限定) の表記があります。これらは通常、サプライヤ組織のメンバーに割り当てられます。つまり、企業外部で働く Agile PLM ユーザーです。

## 役割と権限マスクに関するセキュリティとメンテナンス

このセクションで説明する推奨プランに従うことにより、セキュリティの侵害や変更管理プロセスの中断、システムを以前のセキュリティ設定に戻す場合の混乱を避けることができます。

**注意** このセクションの推奨事項に従わない場合、次のような重大な結果を招くことがあります。

- 管理者の知らないうちに、ユーザーが禁止されているアクションを実行できるようになる。
- ユーザーが必要なアクションを突然実行できなくなる。

Agile PLM システムで不正や予期しない改変が発生した場合、基本的な許可を復旧するためだけに通常のシステム管理を中断することになり、それ自体が新たな侵害につながる可能性があります。

## セキュリティとメンテナンス推奨プラン

Agile PLM の役割の機能はシステム全体に大きな影響を与えるため、変更する際には十分に注意する必要があります。設定とメンテナンスに関する以下の推奨事項に従ってください。

- 役割と権限を設定する作業は、1 名の担当者に割り当てることをお勧めします。担当者を変更する場合は、元の管理者が新しい担当者に次の事項を説明するようにしてください。
  - 役割と権限の設定
  - 変更されたこと
  - 役割と権限に対する変更を追跡するシステム
- 役割または権限マスクの変更や作成を行う前に、役割のエクスポートを実行 ([役割] ウィンドウですべての役割を選択して [エクスポート] をクリック) し、役割と権限の要約レポートと権限マスクの詳細レポートを実行します。後でどのような変更が特定の結果につながったかを見きわめる必要がある場合に比較できるように、結果を保存します。権限の設定に対する変更のログを記録します。エクスポートの詳細は、19

ページの「[オブジェクト履歴](#)」を参照してください。レポートの詳細は、14 ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください。

- 提供された役割と権限を使用して、必要な変更のみ行います。
- 混乱とセキュリティの侵害を避けるには、[アクション - 条件 - オブジェクト タイプ] 権限マスクの命名規則 (185 ページ「[権限と権限マスクについて](#)」を参照) に従ってください。少なくともこれら 3 つの基本特定要素を含め、一貫した語順を保ってください。インストール時に提供される権限マスクの名前を参考にしてください。
- いったん役割と権限を割り当てた後では、変更のないようにします。たとえば、設計変更が送信された後に、変更作成者または CCB メンバーのディスカバリ権限を削除すると、作成者または CCB メンバーは通知を受け取りますが、変更を表示することはできません。
- ユーザーがシステムを使用している間は、役割と権限の割り当てを変更しないでください。割り当てを変更した場合、ユーザーが Agile PLM クライアントをログアウトし、リスタートするまで、一部の変更が完全に有効になりません。

## データベースのバックアップ手順

変更を実行する前に、Agile PLM データベース全体をバックアップし、管理者レポートを実行することをお勧めします。データベースのバックアップを使用して、以前のデータベースを再構築することができます。「変更前」と「変更後」のレポートを比較し、Agile PLM のセキュリティの変更原因を突き止めることができます。

### Agile PLM 管理者の設定をエクスポートする

19 ページの「[オブジェクト履歴](#)」の手順に従ってください。役割と権限の現在の設定のバックアップが終了後、レポートを実行します。

**注意** 設定をインポートする場合、同じデータベースへインポートすることを確認してください。データベースが異なると、Agile PLM 管理データが一致しません。

### レポートを実行する

管理者レポートを実行する場合は、「Roles\_072601\_3pm.csv」のようにファイル名にレポートの日時を含めてください。レポート ファイルを保存しておくと、後でレポート同士を比較して変更を追跡することができます。

**注意** システムのユーザー数によっては、権限マスクの詳細レポートは非常に長くなることがあります (数百ページ)。

#### 役割と権限の要約レポートを実行するには

1. ナビゲーション ウィンドウの [分析とレポート] タブを選択します。[分析とレポート] フォルダが表示されます。
2. [標準レポート] > [管理者レポート] フォルダを展開します。
3. [役割と権限の要約レポート] をダブルクリック (Java クライアント) またはクリック (Web クライアント) します。[役割と権限の要約レポート] ページが表示されます。

4. [実行] をクリックします。[添付ファイルの取り出し] ウィンドウが表示されます。
5. [続行] をクリックします。この操作によって、表示されているデフォルトのエンコード タイプ (西ヨーロッパ言語 (ISO)) が承認されます。別のエンコード タイプを使用する必要がある場合は、ドロップダウン リストから選択し、[続行] をクリックします。
6. [ファイルのダウンロード] と [名前を付けて保存] ダイアログ ボックスの指示に従ってファイルをディスクに保存し、そのファイルを保存する場所を指定します。
7. ファイル名を変更して、レポートの日時が含まれるようにします。例: Roles072602\_3pm.csv
8. ダウンロードを完了した後は、[添付ファイルの取り出し] ダイアログ ボックスで [OK] をクリックします。

#### 権限マスクの詳細レポートを実行するには

1. ナビゲーション ウィンドウの [分析とレポート] タブを選択します。[分析とレポート] フォルダが表示されます。
2. [標準レポート]>[管理者レポート] フォルダを展開します。
3. [権限マスクの詳細レポート] をダブルクリック (Java クライアント) またはクリック (Web クライアント) します。[権限マスクの詳細レポート] ページが表示されます。
4. [実行] をクリックします。[添付ファイルの取り出し] ウィンドウが表示されます。
5. [続行] をクリックします。この操作によって、表示されているデフォルトのエンコード タイプ (西ヨーロッパ言語 (ISO)) が承認されます。別のエンコード タイプを使用する必要がある場合は、ドロップダウン リストから選択し、[続行] をクリックします。
6. [ファイルのダウンロード] と [名前を付けて保存] ダイアログ ボックスの指示に従ってファイルをディスクに保存し、そのファイルを保存する場所を指定します。
7. ファイル名を変更して、レポートの日時が含まれるようにします。例: Privmask072602\_3pm.csv
8. ダウンロードを完了した後は、[添付ファイルの取り出し] ダイアログ ボックスで [OK] をクリックします。

---

**注意** システムのユーザー数によっては、権限マスクの詳細レポートは非常に長くなることがあります (数百ページ)。

---

役割と権限の要約レポートおよび権限マスクの詳細レポートを実行することにより、現在の役割と権限の設定の記録を作成できます。これらのレポートは、Microsoft Excel などの分析アプリケーションで開くことのできる .csv 形式 (カンマ区切り) の ASCII テキスト ファイルです。

ワード プロセッサを使用して、同じレポートの 2 つのバージョンを比較することもできます。セキュリティ設定に対して行った変更が予期しない結果を招いた場合、これらのレポートを再度実行し、ワード プロセッサでレポート同士を比較して、変更を確認することができます。

## 役割を使用する

既存の役割を変更することや、新しい役割を作成することができます。役割を作成したら、ユーザーに割り当てることができます。このセクションでは、以下のような役割管理タスクについて説明します。

- 役割を変更する
- 新規役割を作成する
- 役割を削除する

## 役割を変更する

役割を開いた後は、その名前、説明、有効化または無効化の設定、権限マスクのリスト、割り当てるユーザーなどを変更できます。[例 - 読み取り専用] の役割のプロパティは変更できません。

### 役割の名前または説明を変更するには:

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. [名前] フィールドで、一意の名前を入力します (最大 255 文字)。

---

<b>注意</b>	[管理者]、[私のユーザー プロファイル]、[履歴レポートの表示] および限定された役割は、名前を変更できません。
-----------	---

---

5. [説明] のフィールドで、短い説明を入力します (最大 510 文字)。
6. [保存] をクリックします。

### 役割を無効化するには:

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ バーを使用して変更する役割を表示します。
3. [無効] ボタンをクリックします。

---

<b>注意</b>	役割を開き、[有効化] のプロパティを変更すると、役割を無効化することができます。[管理者]、[私のユーザー プロファイル]、[履歴レポートの表示] および限定された役割は、無効化できません。
-----------	--

---

### 権限を役割から削除するには:

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. [権限] タブをクリックします。
5. 削除する権限を選択します。
6. [削除] をクリックして、選択した権限を役割から削除します。
7. [削除] ダイアログで [はい] ボタンをクリックします。

### 権限を役割に追加するには:

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. [権限] タブをクリックします。

5. [役割を追加] をクリックし、[権限の選択] ダイアログ ボックスを開きます。
6. [選択肢] リストから権限マスクを選択し、右矢印を使用して権限マスクを [選択済み] リストに移動します。
7. 完了したら、[OK] をクリックします。

#### ユーザーを役割から削除するには

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. [ユーザー] タブをクリックします。
5. 削除するユーザーを選択します。
6. [削除] をクリックして、選択したユーザーを、割り当てられているユーザーのリストから削除します。
7. [削除] ダイアログで [はい] ボタンをクリックします。

#### ユーザーを役割に追加するには:

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 役割をダブルクリックして開きます。
4. [ユーザー] タブをクリックします。
5. [ユーザーを追加] をクリックし、[ユーザーの選択] ダイアログ ボックスを開きます。
6. 矢印を選択および使用し、[名前] リストから [受信者] リストにユーザーを移動します。
7. 完了したら、[OK] をクリックします。

## 属性の構築とテスト、読み取り/変更権限、役割

Agile の権限モデルは高性能で柔軟性がありますが、複雑でもあります。次のタスクは、属性 (事前定義の属性とユーザー定義の属性)、権限マスク、役割をカスタマイズした際に、すべてが互いに作動していることを確認するための簡単な手順です。

#### 属性が [読み取り] または [変更] 権限マスクおよび役割と作動するかどうかをテストするには:

1. クラス、たとえば [部品] クラスで、新しい [ユーザー定義 1] 属性を作成します。この例では、[部品.ユーザー定義 1.Test01] を作成します。(61 ページの「[属性、ユーザー設定フィールド、および読み取りフィールド](#)」を参照してください。)
2. [部品の読み取り] と [部品の変更] と呼ばれるテスト権限マスクを作成します。これらを Test01 属性に適用します。(192 ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。)195 ページの「[ディスカバリ権限と読み取り権限](#)」を点検する必要があります。
3. [部品の読み取り] と [部品の変更] 権限マスクを [コンテンツ管理者] 役割に割り当てます。(187 ページの「[役割に権限マスクを追加する](#)」を参照してください。)
4. [コンテンツ管理者] の役割をユーザーに割り当てます。このユーザーは、この目的のために作成したテスト ユーザーです。(このタスクは、このセクションに先行します。)
5. クライアントをログアウトし、このユーザーとしてログインし、Test01 フィールドの読み取りや変更ができるかどうかを確認します。

**注意** この手順は、属性、権限、役割を確立し、テストするための概要です。組織を対象として Agile PLM を設定するタスクは非常に大規模になるため、この重要なタスクには、オラクル社コンサルティングの Agile 担当のコンサルタント サービスを要請することをお勧めします。

---

## 新規役割を作成する

新規役割を作成する前に、現在の役割を確認する必要があります。役割と権限の要約レポートを実行して、現在の役割とその権限マスクの一覧を確認してください (176 ページの「[レポートの実行](#)」を参照してください)。

新規役割を作成するには、既存の役割をコピーし、それに必要な変更を加えます (180 ページの「[\[名前を付けて保存\] を使用して新規役割を作成する](#)」を参照してください)。最初から新規役割を作成することもできます (181 ページの「[新規役割を最初から作成する](#)」を参照してください)。

---

**注意** ある役割を削除した場合、新規役割を作成したときや既存の役割の名前を変更したときには、削除した役割の名前を再び使用できます。

---

## 作業を開始する前に

作業を開始する前に

新規役割を作成する前に、次の質問に答えてください。

- 新規役割にどのような名前を付けるか。
- 新規役割にどのユーザーを割り当てるか。
- この役割に割り当てられたユーザーが Agile PLM で何を実行できるようにするか。
- この役割に割り当てられたユーザーが Agile PLM で何を実行できないようにするか。
- 1 つまたは複数の既存の役割を変更することにより、意図する結果を実現できますか。
- 最初から役割を作成しなくてもすむように、コピーして変更することのできる既存の役割があるか。

## [名前を付けて保存] を使用して新規役割を作成する

既存の役割に新しい名前を付けて複製すると便利な場合があります。

---

**注意** 役割の例の 1 つを複製して新規役割を作成することは別のプロセスであり、結果が異なります。両方のプロセスを検討して、どちらのプロセスが適切なのかを確認してください。182 ページの「[例の役割を使用する](#)」を参照してください。

---

**既存の役割から新規役割を作成するには:**

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. フィルタ バーを使用して変更する役割を表示します。
3. 希望の役割をダブルクリックします。その役割のタブ付きウィンドウが表示されます。
4. [名前を付けて保存] ボタンをクリックします。[名前を付けて保存] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 役割の新しい名前を入力します。
6. [OK] をクリックします。

新規役割が新しい名前で作成され、タブ付きのウィンドウが表示されます。新規役割の説明は、コピー元のものと同じになります。この時点で、説明は必要に応じて変更できます。178 ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

元の役割に割り当てられた権限マスクのリストは、新規役割にも割り当てられます。しかし、新規役割にはユーザーは割り当てられていません。

たとえば、元の役割にアイテムの変更権限マスクが含まれている場合は、新規役割にもアイテムの変更権限マスクが含まれます。

---

**注意**      読み取り専用の役割の例には、読み取り専用の権限の例が含まれています。[名前を付けて保存] を使用して役割の例のコピーを作成した場合、役割の例から権限マスクがコピーされる方法は、前述の方法とは異なります。詳細は、182 ページの「[例の役割を使用する](#)」を参照してください。

---


7. 次のいずれかまたは両方の操作を行います。
  - [権限] タブで、役割に不要な権限マスクを削除します。
  - [権限] タブで、役割に含める権限マスクを追加します。

権限マスクを追加または削除する方法は、178 ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。
8. 新規役割を特定のユーザーに割り当てる場合は、178 ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

**新規役割を最初から作成する**

役割を最初から作成することが必要な場合もあります。


**新規役割を最初から作成するには**

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[役割の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. 新規役割の名前と説明を入力します。
4. 役割を有効または無効にするには、[有効] ドロップダウン リストで [はい] または [いいえ] を選択します。役割の作成中は役割を無効にしておくことをお勧めします。[いいえ] を選択してください。
5. 次のいずれかの操作を行います。
  - 権限マスクやユーザーを割り当てずに役割の作成を終了するには (権限マスクやユーザーは後で割り当てることができます)、[完了] をクリックします。
  - 権限マスクを役割に割り当てるには、[権限] フィールドの横にある  をクリックします。[権限の選択] ダイアログ ボックスが表示されます。手順 6 に進みます。
6. [選択肢] リストから権限マスクを選択し、右矢印を使用して権限マスクを [選択済み] リストに移動します。



7. 完了したら、[OK] をクリックします。

**注意** ダイアログ ボックスで [新規作成] をクリックして新規権限マスクを作成することもできます。[権限の作成] ダイアログ ボックスが開きます。221 ページの「[新規権限マスクを最初から作成する](#)」を参照してください。(手順 3 から開始します。)新規権限マスクが役割に追加され、権限マスクは、[権限] ノードの利用可能な権限マスクのリストに表示されます。

8. 次のいずれかの操作を行います。
  - a. ユーザーを割り当てずに新規の役割の作成を終了するには、[完了] をクリックします。役割とその権限マスクの作成中は、この操作を行います。
  - b. 特定のユーザーを新規役割に割り当てるには、[ユーザー] フィールドの横にある  をクリックします。アドレス帳が開きます。手順 9 に進みます。
9. [名前] タブからユーザーを選択します。[グループ] タブからグループを選択します。次に、右矢印を使用してユーザーとグループを [受信者] リストに移動します。
10. 完了したら、[OK] をクリックします。
11. 新規の役割の定義が完了したら、[完了] をクリックします。

新しい役割名が [役割] テーブルに表示されます。(テーブル内に役割が表示されていない場合は、[更新] をクリックします。)必要に応じて権限やユーザーを追加します。手順 4 で役割を無効にした場合は、[有効] フィールドが [いいえ] になっています。ユーザーへの役割の割り当てを有効にするには、その役割を有効にする必要があります。

## 役割の例を使用する

Agile PLM には、いくつかの役割の例が用意されており、独自の役割を作成する際に参考または基本にすることができます。これらは、[役割の例] ノードの [例] ノード フォルダの下に保存されています。役割の例は読み取り専用であるため、変更することはできません。ただし、[名前を付けて保存] を使用して役割の例のコピーを作成し、コピーを変更することができます。

役割の各例は、Agile PLM の初回インストール時に提供される事前設定済みの役割の 1 つに対応しています。事前設定済みの役割や権限を変更した場合は、役割の例を表示して、事前設定済みの役割や権限の元の構造と変更内容とを比較することができます。

### 役割の例内の権限マスクの例

役割の例には、権限マスクの例が含まれています。権限マスクの例も読み取り専用であるため、変更することはできません。[名前を付けて保存] を使用して役割の例のコピーを作成した場合、読み取り専用の権限の例のコピーが新規役割に含まれます。

たとえば、[例 - 作成者] 役割には [例 - ステータスの変更 - 変更の提出] という権限マスクの例が含まれています。[名前を付けて保存] を使用して [例 - 作成者] 役割のコピーを作成した場合、新規役割には [例のコピー - ステータスの変更 - 変更の提出] という権限マスクが含まれます。この権限マスクのコピーは、役割の例をコピーする前にはデータベース内になかった新規の権限マスクです。新規役割内のすべての権限マスクは同様の方法でコピーされます。

## [名前を付けて保存] を使用して役割の例から新規役割を作成する

役割の例から新規役割を作成するには:

1. [例] で [役割の例] をダブルクリックします。[役割の例] ページが表示されます。



2. 役割レコードをフィルタして、検索を絞り込むことができます。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)
3. [役割の例] ウィンドウで、該当する役割の例をダブルクリックします。その役割の例のタブ付きウィンドウが表示されます。
4. [名前を付けて保存] ボタンをクリックします。[名前を付けて保存] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 役割の新しい名前を入力します。
6. [OK] をクリックします。

新規役割が新しい名前で作成され、タブ付きのウィンドウが表示されます。新規役割の説明は、コピー元の役割の例のものと同一になります。この時点で、説明は必要に応じて変更できます。178 ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

新規役割内の権限マスクは、役割の例内の権限マスクの例のコピーです。詳細は、前述の「役割の例内の権限マスクの例」を参照してください。

7. 次のいずれかまたは両方の操作を行います。
  - [権限] タブで、役割に不要な権限マスクを削除します。
  - [権限] タブで、役割に含める権限マスクを追加します。

権限マスクを追加または削除する方法は、178 ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

権限マスクの名前を変更したり、権限マスクの条件や適用先プロパティを変更したりすることもできます。

[権限] タブで権限マスクをダブルクリックして、タブ付きのオブジェクト ページを表示します。権限マスクのウィンドウを表示すると、以下のことができるようになります。

- 名前または説明を変更する。
  - 権限マスク条件を変更する (349 ページの「[権限マスク条件を変更する](#)」を参照してください)。
  - プロパティに適用する権限マスクを変更する (193 ページの「[\[適用先\] プロパティを表示して変更する](#)」を参照してください)。
8. 新規役割を特定のユーザーに割り当てる方法は、178 ページの「[役割を変更する](#)」を参照してください。

## 役割を削除する

役割が不要となり、ユーザーも割り当てられていない場合は、この役割を削除することができます。

### 役割を削除するには:

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。[役割] ウィンドウが表示されます。
2. 削除する役割をクリックします。その役割のタブ付きウィンドウが表示されます。
3. [ユーザー] タブをクリックして前面に表示します。

**注意** ユーザーまたはユーザー グループに割り当てられている役割は削除できません。役割を削除するには、その前に、ユーザーとユーザー グループをすべて削除する必要があります。削除する準備が整うまで、割り当てられているユーザーとユーザー グループへの影響を遮断する必要がある場合は、いつでも役割を無効にできます。

4. [ユーザー] タブのリストにユーザーが表示されている場合は、テーブルのすべてのユーザーを選択します。
5. [削除] をクリックして、[ユーザー] タブを消去します。

6. [ユーザー グループ] タブについて、手順 3、4、および 5 を繰り返します。
7. [削除] ボタンをクリックします。

# 権限と権限マスク

扱うトピックは次のとおりです。

■ 権限と権限マスクについて .....	185
■ [権限] ウィンドウを表示する .....	185
■ Agile PLM 権限 .....	187
■ 適用先機能 .....	192
■ ディスカバリ権限と読み取り権限 .....	195
■ 変更権限 .....	199
■ その他の権限の詳細 .....	203
■ 権限マスクの構成要素 .....	208
■ 権限マスクを表示する .....	213
■ 権限マスクを変更する .....	217
■ 権限マスクを有効にする .....	220
■ 新規権限マスクを作成する .....	220

この章では、Agile PLM の事前設定済みの権限および権限マスクを使用する方法と、権限および権限マスクを新規に作成する方法について説明します。

## 権限と権限マスクについて

この章では、権限と権限マスクの構造について重点的に説明します。Agile PLM でユーザーが実行できるアクション (作成、送信、キャンセルなど) は権限によって異なります。権限と再利用の条件との組み合わせにより、ユーザーのアクションを管理するフィルタの機能を果たす権限マスクが構成されます。権限マスクのグループ化により役割が構成され、これにより、変更管理プロセスで共通した機能を果たすユーザー グループに対して共通した権限を割り当てることができます。

Agile PLM には様々な事前設定済みの役割、権限マスク、再利用の条件が含まれています。これらは、それぞれ [役割]、[権限]、[条件] の各ノードからアクセスできます。事前設定済みの役割と権限マスクは、必要に応じて変更することができます。また、特定の要件に合わせて役割と権限マスクを新規作成することもできます。

**注意** ユーザーに役割や権限マスクを割り当てると、ユーザーが Agile PLM クライアントからログアウトし、再度ログインした後に有効となります。

## [権限] ウィンドウを表示する

**[権限] ウィンドウを表示するには**

1. [ユーザー設定] で、[権限] ノードを展開します。[権限] ノードを展開すると、すべての基本権限 (権限マスクのアクション コンポーネント) がサブノードとして表示されます。
2. [権限] サブノードをダブルクリックします。[次に対する権限 <選択された権限>] というページが開きますが、権限マスクは一覧表示されません。たとえば、[管理者] をダブルクリックすると [管理者権限] ペー

ジが開きます。いくつかのフィルタ条件を設定する必要があります。[条件] フィールドを [すべて表示] に設定し、右側の [適用] ボタンをクリックすると便利です。[管理者] 権限を使用する権限マスクがすべて表示されます。

<b>重要</b>	ページ名は、この例の [管理者権限] のように表示されますが、これは次の意味です。
<b>重要</b>	「管理者権限を使用する権限マスク」
<b>重要</b>	表示されるリストは <権限 - オブジェクト - 条件> で構成されます (208 ページの「 <a href="#">権限マスクの構成要素</a> 」を参照してください)。

3. 返された権限レコードをフィルタすると、権限マスクの検索をさらに絞り込むことができます。この例では、[条件] を [含む] に設定し、[値] に [ユーザー] を指定した新しいフィルタを設定して [適用] をクリックすることで、返された結果がユーザー管理者用の管理アクセスのみに絞り込まれます。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

権限マスク テーブルの列見出しをクリックすると、列ごとにテーブルを分類することができます。

## [権限] ウィンドウで実行されるタスク

[権限] ウィンドウで 1 つ、または複数の権限マスクを選択し、適切なボタンをクリックすると、[権限] ウィンドウから様々な権限マスクの管理タスクを実行することができます。

ページ メニューのボタン	アクション
有効化	選択された権限マスクを有効にします。権限マスクが有効な場合、[有効化] の列に「はい」と表示されます。
無効	選択された権限マスクを無効にします。権限マスクが無効な場合、[有効化] の列に「いいえ」と表示されます。
削除	選択された権限マスクを削除します。
新規	[権限の作成] ダイアログ ボックスを開きます。221 ページの「 <a href="#">新規権限マスクを最初から作成する</a> 」を参照してください。
役割の割り当て	1 つまたは複数の役割に権限マスクを追加します。 <b>注意:</b> 役割や権限マスクをユーザーに割り当てる場合、または役割の権限マスクを変更する場合、ユーザーが Agile PLM クライアントからログアウトし、再度ログインした後にのみ、変更が有効となります。
エクスポート	選択された権限マスクをテキスト ファイルにエクスポートします。19 ページの「 <a href="#">オブジェクト履歴</a> 」を参照してください。
すべてエクスポート	すべての権限マスクをテキスト ファイルにエクスポートします。19 ページの「 <a href="#">オブジェクト履歴</a> 」を参照してください。
インポート	テキスト ファイルをインポートして、1 つまたは複数の新規権限マスクを作成します。19 ページの「 <a href="#">オブジェクト履歴</a> 」を参照してください。
更新	表示されているテーブルを更新して、最新の情報を反映させます。

権限マスクの名前をダブルクリックすると、権限マスクのタブ付きウィンドウが表示されます。

## 役割から権限マスクを削除

### 権限マスクの [使用箇所] タブで役割から権限マスクを削除するには

1. [ユーザー設定] で、ナビゲーション ウィンドウの [権限] ノードを展開します。基本権限の一覧が表示されます。
2. 関心のある権限マスクの基本権限をダブルクリックします。この権限のフォームが表示されます。
3. フォーム下の [更新] ボタンをクリックします。この権限のすべての権限マスクが表示されます。
4. 特定の権限マスクをダブルクリックします。タブ付きのウィンドウが表示されます。
5. [使用箇所] タブをクリックして前面に表示します。権限マスクを含む役割のリストがテーブルに表示されます。
6. 権限マスクを削除したい役割を選択し、[削除] ボタンをクリックします。
7. 確認のダイアログ ボックスが表示されたら、[OK] をクリックします。役割自身は削除しませんが、権限マスクを役割から削除します (これは実際に開いたオブジェクトです)。

## 役割に権限マスクを追加する

### 権限マスクの [使用箇所] タブで役割に権限マスクを追加するには

1. [ユーザー設定] で、ナビゲーション ウィンドウの [権限] ノードを展開します。基本権限の一覧が表示されます。
2. 関心のある権限マスクの基本権限をダブルクリックします。この権限のフォームが表示されます。
3. フォーム下の [更新] ボタンをクリックします。この権限のすべての権限マスクが表示されます。
4. 特定の権限マスクをダブルクリックします。タブ付きのウィンドウが表示されます。
5. [使用箇所] タブをクリックして前面に表示します。権限マスクを含む役割のリストがテーブルに表示されます。
6. [役割を追加] ボタンをクリックします。[役割の選択] ダイアログ ボックスが開きます。
7. 役割を [選択肢] リストから [選択された] リストに移動します。
8. 完了したら、[OK] をクリックします。役割を追加するわけではなく、権限マスクを役割に追加します (これは実際に開いたオブジェクトです)。

**注意** 179 ページの「[属性の構築とテスト、読み取り/変更権限、役割](#)」に記載されている簡単なチュートリアルを確認してください。

## Agile PLM 権限

次の表に、Agile PLM で提供される権限とその定義を示します。一部の権限の有効性は、基本的な読み取り権限に依存します。これは、多くの機能を実行するためには、まずオブジェクトを開き、読み取る必要があるからです。この表には、権限が有効となるためにユーザーの読み取り権限が必要かどうかとも示されています。

読み取り権限と権限マスクの詳細は、197 ページの「[ディスカバリ権限と読み取り権限の関係](#)」を参照してください。

権限	実行可能なアクション...	基本的な読み取り権限の要否
承認者/オブザーバの追加	ルーティング可能なオブジェクトの [ワークフロー] タブに承認者/オブザーバを追加します。 詳細は、203 ページの「 <a href="#">承認者/オブザーバの追加と削除</a> 」を参照してください。	はい
管理者	Java クライアントにログイン後、PLM 管理者機能にアクセスできます。 管理者の役割には管理者権限マスクが含まれます。この権限マスクは、適用先の条件に基づいたノードごとに設定可能です。 詳細は、193 ページの「 <a href="#">管理者権限と適用先機能</a> 」を参照してください。	いいえ
承認/却下	ユーザーが承認者として指定されているルーティング可能なオブジェクトを承認または却下します。	はい
自分の添付ファイルのレッドライン	リリース 9.2.2.2 以降、この権限は無効となっています。添付ファイル レッドライン マークアップへのアクセスの有効化と制御を行う機能は、(ファイル フォルダ クラスの) マークアップ サブクラスと、それに関連する権限マスク (作成、読み取り、変更、チェックイン、およびチェックアウト) によって提供されます。 詳細は、307 ページの「 <a href="#">レッドライン マークアップに関するデフォルトの役割と権限</a> 」を参照してください。	-
他者の添付ファイルのレッドライン	リリース 9.2.2.2 以降、この権限は無効となっています。添付ファイル レッドライン マークアップへのアクセスの有効化と制御を行う機能は、(ファイル フォルダ クラスの) マークアップ サブクラスと、それに関連する権限マスク (読み取り、変更、チェックイン、およびチェックアウト) によって提供されます。 詳細は、307 ページの「 <a href="#">レッドライン マークアップに関するデフォルトの役割と権限</a> 」を参照してください。	-
チェックアウトのキャンセル	添付ファイル (ファイルまたは URL) のチェックアウトをキャンセルします。 詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。	はい
ステータスの変更	ルーティング可能なオブジェクトのステータスを移行させます。ステータスの変更権限が適用されるワークフローのリストは、選択した条件のクラスによって異なります。 詳細は、203 ページの「 <a href="#">ステータスの変更</a> 」を参照してください。	はい
チェックイン	添付ファイル (ファイルまたは URL) をチェックインします。 (詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。)	はい
チェックアウト	添付ファイル (ファイルまたは URL) をチェックアウトします。 詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。	はい
コメント	ルーティング可能なオブジェクトにコメントします。コメントは特定のユーザーにメール送信され、履歴に記録されます。(ルーティング可能オブジェクトの承認や却下の際に提出されるコメントとは異なります。)	はい

権限	実行可能なアクション...	基本的な読み取り権限の要否
作成	<p>権限マスクに指定されたビジネス クラス内に新規オブジェクトを作成します。</p> <p><b>注意 1:</b> 作成権限は、Agile PLM インポート ユーティリティのユーザーに必要です。</p> <p><b>注意 2:</b> [ユーザー定義 1] タブで Agile PLM クラスに対する [ユーザー作成] 属性を表示し、有効にすると、ユーザーは読み取り権限でオブジェクトを開き、作成することができます。219 ページの「<a href="#">作成者条件を適用する</a>」を参照してください。</p> <p><b>注意 3:</b> ユーザーは、必須フィールドに対して変更権限がない場合でも、オブジェクトを作成する際は、作成権限で必須フィールドに値を入力できます。必須フィールドは、属性プロパティ [必須] が [はい] に設定されているフィールドです。66 ページの「<a href="#">属性のプロパティを定義する</a>」を参照してください。</p>	はい
テンプレートから作成	[テンプレートからのプログラム作成] 権限マスクで使用され、[プログラム マネージャ] および [プログラム管理者] の役割に対してデフォルトで有効化されています。	はい
[ダッシュボード] タブ表示	<p>[[ダッシュボード] タブの読み取り] 権限マスクで使用され、[エグゼクティブ]、[プログラム マネージャ] および [プログラム管理者] の役割に対してデフォルトで有効化されています。</p> <p>[システム設定]&gt;[ダッシュボード管理] の下に新たに作成されたすべてのダッシュボード タブでは、Web クライアントのタブを表示するために、この権限が必要です。</p> <p>詳細は、194 ページの「<a href="#">ダッシュボード管理</a>」を参照してください。</p>	はい
削除	<p>オブジェクトを削除します。</p> <p><b>注意:</b> ルーティング可能なオブジェクトは、[保留中] または [未割当] であることが必要です。</p>	はい
ディスカバリ	<p>オブジェクトの存在を把握します。</p> <p><b>注意 1:</b> [データベース] ノードで [ディスカバリ権限] の [有効化] プロパティを変更した場合は、WebLogic Server を再起動する必要があります。</p> <p><b>注意 2:</b> [データベース] ノードでディスカバリ権限が無効になっている場合、基本的な読み取り権限があるユーザーは、すべてのオブジェクトを検出できます。</p> <p>詳細は、195 ページの「<a href="#">ディスカバリ権限</a>」を参照してください。</p>	いいえ
フィールド レベルでの読み取り	<p>ユーザーが [フィールドレベルでの読み取り] 検索を実行した場合の特定の動作を制限します。</p> <p>出力列を指定する権限が削除されたことへの対応策に関する重要事項など、詳細は、198 ページの「<a href="#">フィールドレベルでの読み取り権限</a>」を参照してください。</p>	はい
エクスポート	選択されたオブジェクトからデータを抽出し、これをカンマ区切りのテキストファイルまたは PDX パッケージにエクスポートします。この権限の詳細は、204 ページの「 <a href="#">エクスポート</a> 」を参照してください。	はい

権限	実行可能なアクション...	基本的な読み取り権限の要否
FileLoad	FileLoad ユーティリティを実行します。FileLoad ユーティリティの詳細は、『インポートおよびエクスポート・ガイド』を参照してください。	はい
全検索表示	オブジェクトに関するレポート検索結果をすべて表示します。詳細は、204 ページの「 <a href="#">全検索表示</a> 」を参照してください。	はい
ファイルの取り出し	オブジェクトの [添付ファイル] タブからファイルを取得または開きます。ファイルの取り出し権限はチェックアウト権限と連携して動作し、添付ファイルをユーザーのコンピュータに送信します。管理者はファイル取り出し権限 (チェックアウトなし) により、ユーザーがプロダクト レコードでそれを変更することなしにファイルを取得できるようにします。  詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。	はい
グローバル検索	全ユーザーの検索リストに表示される検索を作成、変更、または削除します。この権限は、ユーザーによる検索および検索フォルダの並べ替えを可能にします。Java クライアントでは、検索フォルダまたは検索をクリックするとき、下矢印ボタンが追加されます。Web クライアントの [検索の整理] ポップアップでは、順序ボタンが追加されます。	いいえ
認可	アクセス コントロール リスト (ACL) 機能を使用して、計画的かつ有限的な方法で、ユーザーに役割とそれに伴う権限を与えます。	はい
インポート	[インポート] ウィザード ツールを使用します。[インポート] ウィザード ツールの詳細は、『インポートおよびエクスポート・ガイド』を参照してください。	はい
確定	[添付ファイル] タブで確定ステータスを切り替えます。  <b>注意:</b> アイテムは、初版リビジョンで確定または未確定にすることができます。	はい
レポートの管理	レポートのスケジュールとレイアウトを変更および削除し、グローバル レポート フォルダの作成および削除を行います。	はい
Microsoft Project	[Microsoft Project] 役割と [プログラム マネージャ] および [プログラム管理者] の役割の一部にアクセス、使用、または変更します。339 ページの「 <a href="#">Microsoft Project 権限</a> 」を参照してください。	はい
変更	オブジェクトのタブのフィールドを変更します。変更権限は、[適用先] 属性の設定を使用して割り当てます。  変更権限の様々な側面については、199 ページの「 <a href="#">変更権限</a> 」、192 ページの「 <a href="#">適用先機能</a> 」、および 305 ページの「 <a href="#">修正権限と添付ファイル</a> 」を参照してください。	はい
オーバーライド	不完全な必須フィールドおよび (サインオフしていない) 必須承認者をオーバーライドし、ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスへ移行させます。  詳細は、205 ページの「 <a href="#">オーバーライド</a> 」を参照してください。	はい



権限	実行可能なアクション...	基本的な読み取り権限の要否
ファイル印刷	Agile Viewer ウィンドウから印刷します。ファイル表示権限も必要です。 詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。	はい
タブ印刷	オブジェクトのタブから印刷します。	はい
フォルダ バージョンのバージョン	使用しないファイル フォルダ バージョンを Agile ファイル管理格納庫からバージョンします。206 ページの「 <a href="#">フォルダ バージョンのバージョン権限</a> 」を参照してください。	
読み取り	オブジェクトを開いてすべてのタブを読み取ります。 詳細は、195 ページの「 <a href="#">ディスカバリ権限と読み取り権限</a> 」を参照してください。 読み取り権限は、特定の属性の [適用先] プロパティに基づいています。「フィールドレベルでの読み取り権限」および 192 ページの「 <a href="#">適用先機能</a> 」を参照してください。 ユーザーにフィールドレベルでの読み取り権限が割り当てられている場合、読み取り権限は、フィールド ベースでも適用されます。 詳細は、198 ページの「 <a href="#">フィールドレベルでの読み取り権限</a> 」を参照してください。 <b>注意:</b> [データベース] ノードでディスカバリ権限が有効になっている場合は、対応するディスカバリ権限マスクが必要です。	はい
承認者/オブザーバの削除	ルーティング可能なオブジェクトから承認者/オブザーバを削除します。 詳細は、203 ページの「 <a href="#">承認者/オブザーバの追加と削除</a> 」を参照してください。	はい
リセット	Agile PLM データベースのチェックサムをリセットし、参照ファイルと一致させます。デフォルトの Agile 役割には含まれていない、[ファイル チェックサムのリセット] 権限にある権限をリセットします。259 ページの「 <a href="#">ファイル チェックサムの処理</a> 」を参照してください。	はい
レポートの実行	レポートを実行してスケジュールを設定し、レイアウトを作成します。ユーザー自身のスケジュールとレイアウトを変更および削除します。	はい
名前を付けて保存	別の名前を付けて保存することにより、オブジェクトをコピーします。	はい
送信	開いているオブジェクトに対して、[ファイル   送信] を実行します。対応する作成権限マスクが必要です。	はい
確認通知	オブジェクトの選択された属性が変更されたときに、電子メールによる確認通知を送信します。データベース ノードのプロパティ [通知の有効化] も [はい] に設定する必要があります。	はい

権限	実行可能なアクション...	基本的な読み取り権限の要否
権限委譲 (自分)	ルーティング可能なオブジェクトに対して自分が承認者 (オブザーバではない) である場合、特定の期間について承認する権限を他のユーザーに委譲します。  詳細は、「 <a href="#">権限委譲 (自分)</a> 」を参照してください。	いいえ
権限委譲 (他のユーザー)	ルーティング可能なオブジェクトに対して自分以外のユーザーが承認者 (オブザーバではない) である場合、特定の期間について変更を承認する権限をその他のユーザーに委譲します。通知の電子メールは、すべて元の承認者にもコピーとして送信されます。  詳細は、207 ページの「 <a href="#">権限委譲 (他のユーザー)</a> 」を参照してください。	いいえ
削除取消	オブジェクトの削除を取り消します。	はい
未確定	アイテムを未確定にします。	はい
ファイル表示	Agile Viewer ウィンドウでファイルを表示します。  詳細は、303 ページの「 <a href="#">添付ファイル権限</a> 」を参照してください。	はい

## 特定の権限に関する詳細

次の各セクションでは、権限のごく一部に相当する [適用先] プロパティ、ディスカバリ権限と読み取り権限、変更権限、およびその他の権限を詳細に説明します。

- 192 ページの「[適用先機能](#)」
- 195 ページの「[ディスカバリ権限と読み取り権限](#)」
- 199 ページの「[変更権限](#)」
- 203 ページの「[その他の権限の詳細](#)」

この章の後半では (208 ページの「[権限マスクの構成要素](#)」から)、権限マスクの構成方法について検討します。

## 適用先機能

適用先機能は、次の権限に基づいてすべての権限マスクで使用されます。

- 管理者
- 読み取り
- 変更
- Microsoft Project
- [ダッシュボード] タブ表示

次のセクションでは、管理者権限マスクとの関連を中心にして適用先機能を説明していますが、[適用先] フィールドおよび [表示属性のみ表示] チェックボックスに関する情報も、読み取り、変更、Microsoft Project、および [ダッシュボード] タブ表示の各権限に基づいた権限マスクに関連があります。


## 管理者権限と適用先機能

管理者の役割には、それぞれ [管理者](Java クライアントの場合) と [ユーザー管理者用の管理アクセス](Web クライアントの場合) という名前の 2 つの重要な権限マスクが含まれており、ユーザー管理者の役割には、後者が含まれています。これらの権限マスクは、両方のクライアントの管理者ノードにアクセスできるだけでなく、管理オブジェクトと設定を変更することもできます。

両方の管理者権限マスクの重要なプロパティは [適用先] プロパティです。このプロパティは、管理者権限を割り当てられたユーザーが使用できる管理者ノードを指定するために使用されます(管理者のノードとユーティリティの適用先リストは、[関係の追加] 権限にも表示されます)。

Agile 管理者または補佐する「ユーザー管理者」が、それぞれの [管理者] 権限マスクの [適用先] プロパティに、特定のノードを正しく設定していない場合、そのノードは、[管理者] ノードの該当するユーザーの表示にリンクされないため、ユーザーはこの機能にアクセスできません。


### [表示属性のみ表示] チェックボックス

次のタスクでは、権限マスクの [一般情報] タブを表示します。このタブには、[適用先] プロパティが表示されます (この場合の [適用先] プロパティは、管理者、読み取り、変更、Microsoft Project、または [ダッシュボード] タブ表示のいずれかの権限に基づいています)。[適用先] プロパティの下矢印  をクリックすると、[表示属性のみ表示] チェックボックスが表示されます。このボックスは、デフォルトで選択状態です。[表示] プロパティが [いいえ] に設定されている属性を表示する場合は、このボックスの選択を解除します。非表示の属性がすべて [選択肢] リストに表示されます。

### [適用先] プロパティを表示して変更する

このタスクは、[適用先] プロパティが含まれているすべての権限マスクに適用できます。

**[管理者] 権限の [適用先] プロパティを表示するには:**

1. [ユーザー設定] ノード フォルダで、[権限] ノードを展開します。
2. [管理者] 権限をダブルクリックします。[管理者の権限] フィルタのダイアログ ボックスが表示されます。
3. [条件] フィールドのドロップダウン リストで、[すべて表示] を選択します。[適用] ボタンをクリックします。
4. 管理者に関連する利用可能な権限マスクが表示されます。[管理者] 権限マスクをダブルクリックします。
5. [管理者] 権限マスクの [一般情報] タブで、[適用先] プロパティの下矢印  をクリックします。
6. [選択肢] リストには、自分の役割と権限にこの権限マスクが含まれているユーザーが現在利用 (表示) できない [管理者] ノードまたは他のユーティリティ (グローバル置換など) がすべて表示されます。[選択された] リストには、表示されているすべてのノードが表示されます。([表示属性のみ表示] チェックボックスが選択された状態になります。管理者権限への影響はありません。)

### 特殊な管理者権限マスク

ただし、特殊な [管理者] 権限マスクを作成することも可能です。特にこの権限マスクについては、通常、1 人または数人のユーザーに割り当てるため、デフォルトの権限を変更するよりも、個々の状況に応じて変更するほうが安全です。

**注意**     すでに使用している管理者権限マスクの [適用先] プロパティの変更に関しては、特に慎重に行ってください。たとえば、管理者権限マスクの [適用先] プロパティを変更して権限を除外すると、管理者は [権限] ノードにアクセスできなくなるため、管理者権限マスクを変更して、権限に再適用することが非常に困難になります(このようなシナリオでは [役割の例] が必要となります)。

複数の管理者権限と役割が必要な場合は、既存の管理者の役割および権限を変更したり無効にしたりする前に、新規の役割および権限を十分にテストしてください。

メイン Agile PLM 管理者は、数人の選択ユーザーによる補助を受けることをお勧めします。単に [管理者] 役割を割り当て、Java クライアントの管理機能へのアクセスを許可します。管理作業 (ユーザーの作成など) を補佐する目的で、数人のユーザーに Web クライアントの少数のノードへのアクセスを許可する場合は、その目的で、[ユーザー管理者] 役割を設定します。[ユーザー管理者] は、Web クライアント > [ツール] > [管理] を介して管理者タスクを実行します。

上述したように、[ユーザー管理者] 役割では、[ユーザー管理者用の管理アクセス] という権限マスクと、少ないノード数の [適用先] リストが使用されます。[管理者] 役割をユーザーに割り当て、そのユーザーの [管理者] 権限マスクの [適用先] プロパティから多数のノードを削除するかわりに、[ユーザー管理者] の役割をユーザーに割り当て、そのユーザーの [ユーザー管理者用の管理アクセス] 権限マスクの [適用先] プロパティに、複数のノードを追加することで開始できます。

---

**注意**     複数の管理ユーザーを任命する際には、会社に与える影響を慎重に考慮し、各ユーザーには特定のタスクを割り当てるようにしてください。それによって、管理タスクを多数のユーザーで分担することができ、各ユーザーを特定のタイプの管理タスクに限定できます。

---

次に、ユーザーの [管理者] 権限マスクの [適用先] プロパティからノードを削除する際の注意点を示します。

- [条件] を削除すると、権限オブジェクトの [一般情報] タブ、[ワークフロー] ノード、ワークフロー オブジェクトの [一般情報] タブ、または確認通知受信者オブジェクトの [一般情報] タブから、条件へのリンクがなくなります。また、[ワークフローの作成] と [権限の作成] のダイアログボックスの [新規条件] ボタンが無効になります。
- [役割] を削除すると、[ユーザー] ノードまたは [削除されたユーザー] ノードから役割へのリンクがなくなります。
- [ワークフロー] を削除すると、条件の [使用箇所] テーブルからワークフローへのリンクがなくなります。
- [権限] を削除すると、条件の [使用箇所] テーブルから権限へのリンクがなくなります。

## ダッシュボード管理

[ダッシュボード] タブ表示権限は、[ダッシュボード] タブを設定する際に使用されます。詳細は、194 ページの「[ダッシュボード管理](#)」を参照してください。

## プロジェクトの要約ページの設定

[プロジェクトの要約ページの設定] が [適用先] プロパティとして指定されている管理者権限マスクは、プログラムの [要約] ページのウィジェットを設定する際に使用されます。[プロジェクトの要約] ページのウィジェットおよびページの構成は、Agile Web クライアントの [ツール] > [管理] メニューを使用して実行できます。

## ディスカバリ権限と読み取り権限

このセクションでは、ディスカバリ権限と読み取り権限について詳細に説明します。

[読み取り] および [変更] 権限マスクは、[適用先] プロパティによって個別属性を指定することができるため、他のプロパティの中でも固有の権限になります。(一方、管理者権限マスクは、アクセス可能な個々のノードを指定する [適用先] プロパティによって固有の権限マスクになります。)

### ディスカバリ権限

アウトソーシングや「仮想企業」がますます一般的になる中で、Agile PLM をご使用いただいている各企業では、サプライチェーン内の外部企業の従業員に対して自社の Agile PLM データベースへのアクセスを許可する傾向にあります。セキュリティを確保するため、外部ユーザーには直接関連のある情報のみアクセス可能とすることが重要です。たとえば、あるサプライヤに、別のサプライヤが同じ部品を供給していることや、自社がサプライヤの直接の競合会社に同じ部品を供給していることを知られるのは不都合です。

Agile PLM のディスカバリ機能 (ディスカバリ権限データベース プロパティ、ディスカバリ権限、ディスカバリ権限マスク) は、このようなセキュリティ上の問題に対応するように設計されています。これらの機能によって、ユーザーが Agile PLM で特定のオブジェクトの存在を把握できるかどうかが管理されます。

オブジェクト ディスカバリは次の 2 つの方法で管理することができます。

- グローバル レベルで、[ディスカバリ] 権限データベース プロパティ ([サーバ設定] > [データベース]) を [有効] または [無効] に設定する。
- 役割のレベルで、[ディスカバリ] 権限マスクを使用する。

たとえば、あるサプライチェーン パートナーの従業員には、そのパートナーが供給する部品のみを対象にしたディスカバリ権限がある場合、この従業員は、検索結果テーブルや BOM で、他のパートナーが供給する部品を確認できません (196 ページの「[関連するスマートルール](#)」を参照してください)。

---

**注意** ユーザーに読み取りまたは作成権限を付与する場合は、そのオブジェクトに対するディスカバリ権限も付与する必要があります。それにより、オブジェクトの読み取りがそのユーザーに許可されます。ユーザーは常に作成したオブジェクトをディスカバリまたは読み取ることができます。

---

たとえば、「すべての変更」という条件で [読み取り] 権限マスクを作成する場合は、「すべての変更」という条件付きの [ディスカバリ] 権限マスクもその役割に含む必要があります。

グローバルなディスカバリ管理に対する Discovery Privilege データベース プロパティの使用の詳細は、264 ページの「[データベース](#)」を参照してください。

Agile PLM 付属の各役割に割り当てられている [ディスカバリ] 権限マスクの詳細は、170 ページの「[役割を表示する](#)」を参照してください。

---

**注意** 設計変更が送信された後に、変更作成者または CCB メンバーのディスカバリ権限が削除された場合、作成者または CCB メンバーは通知を受け取りますが、変更を表示することはできません。不都合を避けるため、ディスカバリ権限を割り当てた後では削除しないようにしてください。

---

### ディスカバリ権限と拠点

拠点オブジェクトは [ディスカバリ] 権限条件から明確に除外されます。したがって、ユーザーの拠点アクセスを管理するための新しいディスカバリ権限マスクは定義できません。

ユーザーの拠点へのアクセスを管理するには、ユーザー プロパティを適切に設定してください。Java クライアントまたは Web クライアントでユーザーを開き、[拠点] および [デフォルトの拠点] プロパティを指定します。

---

**注意** 管理者権限があるユーザーは、データベース内の拠点オブジェクトをすべて検出できます。管理者権限のないユーザーが検出できるのは、ユーザー プロファイルの [拠点] および [デフォルトの拠点] プロパティに定義されている拠点オブジェクトのみです。

---

## ディスカバリ権限とライフサイクル フェーズ

見積依頼回答ライフサイクル フェーズに基づいて、ディスカバリ権限の条件を作成した場合は、Agile アプリケーション サーバを再起動してこの条件を使用する検索を実行する必要があります。実行しないと、検索の結果が得られません。

### 関連するスマートルール

次のスマートルールには、ユーザーがディスカバリ権限を持たないオブジェクトに遭遇した場合の Agile PLM の応答方法が定義されています。

- BOM テーブルの表示
- オブジェクト テーブルのディスカバリ
- 結果テーブルのディスカバリ

これらのスマートルールとそのデフォルト設定の詳細は、「スマートルールの定義」を参照してください。

### ディスカバリ権限およびレポート

管理者レポートは Agile ユーザーには表示されず、実行することもできません。以下の情報は、ユーザーが実行することのできる標準レポートにおける、特定オブジェクトの可用性に関する情報です。

オブジェクトに対して [ディスカバリ] 権限を持たないユーザーは、レポートにオブジェクトを含めることができません。ユーザーにディスカバリ権限がない部品は、BOM での表示と同様に表示されます。

管理者が設定してある場合、レポートに警告メッセージが表示されます。また、アイテム番号のみを表示するか、アイテムの説明のみを表示するという選択もできます。ユーザーはレポートにすべてのアイテムを表示できますが、ディスカバリ権限のないアイテムへのアクセスは認められません。

特定のタイプのオブジェクトについてレポートを実行するには、次の権限が必要です。

- [読み取り] 権限
- [ディスカバリ] 権限
- レポートの実行権限

---

**注意** レポート管理権限だけではレポートを実行することができません。

---

## ディスカバリ権限と読み取り権限の関係

Agile PLM 管理者は、次の表に示すように、ディスカバリ権限と読み取り権限を使用してユーザーの Agile PLM データへのアクセス レベルを設定することができます。

アクセス レベル	【ディスカバリ】 権限	【読み取り】 権限
フル アクセス	許可	すべてのタブについて許可
限定アクセス	許可	[履歴] タブまたは [ワークフロー] タブについては不許可
ディスカバリのみ	許可	不許可
ディスカバリなし	不許可	不許可

ディスカバリ権限と読み取り権限で構成される権限マスクは、次の表に示すように、相互に依存しています。

権限マスクのタイプ	効果とコメント
ディスカバリ	<ul style="list-style-type: none"> <li>ディスカバリ可能なオブジェクトの存在を把握できる</li> </ul>
読み取り	<ul style="list-style-type: none"> <li>オブジェクトのディスカバリ権限が必要である</li> <li>オブジェクトを開くことができる</li> <li>権限マスクの [適用先] ダイアログ ボックスで定義されているすべてのタブを読み取ることができる (下記を参照)</li> </ul>

**注意** 【読み取り】 権限マスクを削除または変更しても、【ディスカバリ】 権限マスクは自動的に削除または変更されません。


## フィールドレベルでの読み取り権限

フィールド レベルでの読み取りでは、Agile PLM クライアントのユーザーが、読み取り権限マスクによってタブ内の各種フィールドを読み取ることができるかどうか定義されます。各タブの各フィールドはどれも、ユーザーが読み取りできないよう設定できます。フィールド レベルでの読み取りの有効な使用例として、買い手が [ユーザー定義 1] タブの [コスト] フィールドをサプライヤに見られないようにする場合があります。

オブジェクトのフィールドを表示するには、以下の条件を満たす必要があります。

- ユーザーがオブジェクトに対する読み取り権限を持っている。
- そのユーザーの読み取り権限マスクの [適用先] プロパティにフィールドが表示されている。

たとえば、[権限] ウィンドウでいずれかの [読み取り] 権限マスクをダブルクリックして表示します。[一般情報] タブの [適用先] フィールドには、[読み取り] 権限が適用されるすべてのフィールドが一覧表示されます。

[読み取り] 権限マスクを新しく作成した場合には、[適用先] プロパティに表示される値はありません。作成時に、[適用先] フィールドの  をクリックして選択ダイアログ ボックスを表示します。オブジェクトのすべてのフィールドが [選択肢] リストに表示されます。左側の [選択肢] リストから右側の [選択された] リストにフィールドを移動して、権限マスクを調整します。




条件で指定されたオブジェクトの [ワークフロー] タブをユーザーが表示できないようにする場合は、[ワークフロー] タブのすべてのフィールドを [選択肢] リストに残す必要があります。[選択された] リストのフィールドだけがユーザーに対して表示されます。これはフィールド レベルでの読み取りの一例です。

フィールド レベルでの読み取り機能は、フィールドレベルでの読み取り権限がユーザーにあるかどうかによって影響されます。この権限については、次の「フィールドレベルでの読み取り権限」で説明します。

## 読み取り権限マスクの [適用先] フィールドを変更する

これは、読み取り権限マスクに固有のタスクです。[適用先] 機能は、他の少数の権限によって使用されます。詳細は、192 ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。

### 読み取り権限マスクが適用されるフィールドのリストを変更するには

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。[権限] ウィンドウが表示されます。  
**注意** 検索を絞り込むには、権限マスク レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての読み取り権限マスクを検索するには、権限に「読み取り」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)
2. 変更する権限マスクをダブルクリックします。権限マスク ウィンドウが表示されます。  
権限マスクのプロパティが [一般情報] タブに表示されます。
3. [一般情報] タブで、[適用先] フィールドの横にある  をクリックします。選択を行うダイアログ ボックスが開きます。
4. 左右の矢印をクリックして、選択した値を一方のリストから他方のリストに移動します。
5. 完了したら、[OK] をクリックします。
6. 権限マスクの編集を完了するには、[保存] をクリックします。

## フィールドレベルでの読み取り権限

この権限によって、Agile PLM 管理者は、ユーザーがフィールド レベルでの読み取り制限の対象となっている場合に、特定の動作を制限できます (197 ページの「[フィールドレベルでの読み取り権限](#)」を参照してください)。フィールドレベルでの読み取りの役割は、フィールドレベルでの読み取り権限マスクのみで構成されます。

ユーザーの役割に、フィールドレベルでの読み取り権限が含まれている場合は、フィールド レベルで (つまり、Agile PLM クライアントの各タブのフィールド) すべてがチェックされます。この権限のユーザーは、自分のコンピュータのパフォーマンスが一部の操作で低くなることに気付く場合があります。これは、ソフトウェアがすべてのフィールドをチェックしているためです。この影響は、検索対象のテーブル (BOM、対象アイテム、結果など) に含まれるアイテムの数によって左右されます。

ユーザーがこの権限を含む役割を持たない場合、システムによるフィールド レベルの確認が行われなため、コンピュータの動作速度に影響はありません。その場合、ユーザーの読み取り権限がフィールド レベルで定義されていても、システムではすべてのフィールド レベルの確認は行われません。この確認は、フィールドレベルでの読み取り権限が有効になっている場合のみ実行されます。

**重要** 以前のバージョンの Agile PLM では、出力列の指定権限を使用して、詳細検索の設定時に出力属性を選択できるユーザーを制限していました。この権限は削除されたため、詳細検索ではすべてのユーザーが出力属性を指定することが可能です。しかし、以前に [出力列の指定] 権限を持っていなかったユーザーに対してフィールドレベルでの読み取り権限を割り当てることができます。この操作によって、検索結果が適切にフィルタされます。たとえば、コストなどの機密性の高いフィールドが検索されないようにできます。



ユーザーがフィールドレベルでの読み取り権限を含む役割と含まない役割を持つ場合、デフォルトはフィールドレベルでの読み取りを「有効にする」です。同様に、ユーザーが有効と無効に設定された 2 つのフィールドレベルでの読み取り権限を含む役割を持つ場合、デフォルトではフィールドレベルでの読み取りは「有効」になります。いずれの場合も、ユーザーは読み取り権限を持つフィールドしか表示できません。このため、特定のフィールドの表示を禁止するユーザーに対してのみ、この権限を有効にすることをお勧めします。

フィールドレベルでの読み取りが [はい] に設定されている場合、特定の権限やスマートルールに対してシステムは次のように動作します。

- ディスカバリ権限 - オブジェクトが結果テーブル等に表示されるかどうかを決定します。
- ユーザーにオブジェクトに対する読み取り権限がない - 結果テーブルなどのオブジェクトのフィールドに [権限なし] が表示されます。これらのオブジェクトの BOM テーブル上の表示は、スマートルールの「BOM テーブルの表示」によって決定されます。ユーザーは、これらのオブジェクトを開くことはできません。
- ユーザーが [オブジェクト番号] フィールドと [説明] フィールドに対する読み取り権限を持つ - 結果テーブル等にオブジェクト番号と説明が表示されます。ユーザーは、これらのオブジェクトを開くことができます。
- ユーザーがすべてのフィールドに対する読み取り権限を持つ - すべてのテーブルにすべてのフィールドが表示されます。ユーザーは、これらのオブジェクトを開くことができます。

## フィールドレベルでの読み取りによるテーブルの表示

Agile の Product Collaboration リリース 7 までは、ユーザーの役割に、フィールドレベルでの読み取り権限が含まれている場合は、読み取ることはできないが、([結果]、[使用箇所]、[対象アイテム]、[製造元] の各テーブルでは) 検出できるオブジェクトの表示で、対応するすべてのフィールドに [権限なし] が表示されたため、ユーザーは、これらのオブジェクトを開いてその内容を表示できました。BOM テーブルのフィールドの表示は、スマートルールの「BOM テーブルの表示」によって決定されていました。

ユーザーに、テーブルに関して 6.x の動作を模倣させる場合は、特定のフィールドに対するそのユーザーの役割に、読み取り権限を追加する必要があります。読み取り権限には、適用先属性としてオブジェクトの番号と説明を含めることができ、これらのフィールドのみテーブルに表示されます。

たとえば、特定のオブジェクトタイプに対して「社内のみ」や「外部」といった添付ファイルタイプの値を定義し、社外のユーザーに「外部」に設定されたファイルに対する権限のみを与えることができます。Agile PLM クライアント ユーザーがそのオブジェクトタイプに添付ファイルを追加し、それを [内部のみ] に設定すると、外部のサプライヤーや下請業者は、そのファイルにアクセスできません。

権限マスク条件で [添付ファイルタイプ] 属性を使用する場合、指定したオブジェクトタイプを基本クラス(アイテム、変更、レポートなど)にすることはできません。

---

**注意** 添付ファイルタイプの属性を有効にして添付ファイルへのアクセスを制限する場合は、必ずユーザーにフィールドの使用方法を説明してください。このフィールドは Agile PLM クライアントで編集できます。

---

## 変更権限

重要な変更権限については、次の「変更の基本とルール」および 200 ページの「[\\$CURRENTREV を使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する](#)」の具体的な重要事項でほぼ説明されています。また、読み取りおよび変更の権限マスクは、アクセス可能な個々の属性を指定する [適用先] プロパティによって、他のプロパティの中でも固有の権限マスクになります。

## 変更の基本とルール

変更権限によって、ユーザーはオブジェクトのタブのフィールドを変更または編集できます。変更権限は、[適用先] 属性の設定を使用して割り当てます。

**注意** オブジェクトを作成する際、ユーザーは、必須フィールドに対する変更権限がない場合でも、作成権限で必須フィールドに値を入力できます。必須フィールドは、属性プロパティ [必須] が [はい] に設定されているフィールドです。66 ページの「[属性のプロパティを定義する](#)」を参照してください。

- [変更] 権限は、Agile PLM インポート ユーティリティのユーザーに必要です。
- 権限と関係の変更: ルール (『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』を参照) を設定せずに 2 つのオブジェクト間の関係を作成するには、その関係に応じて適切な変更権限を両方のオブジェクトに指定する必要があります。関連する 2 つのオブジェクト間にルールを作成するには、そのルールに応じて適切な変更権限を両方のオブジェクトにさらに指定する必要があります。たとえば、アイテムの場合、ユーザーにはアイテムの変更権限マスクが必要で、[関係] タブの [名前] 属性と [関係] タブの [ルール] 属性がその権限マスクの [適用先] プロパティに指定されている必要があります。
- [変更 (製造元部品)] 権限マスクを持つユーザーは、製造元変更または設計変更を発行せずに、[製造元] タブに表示されている製造元部品の属性を変更できます。

**注意** 製造元 (AML) 情報を適切に変更するには、[製造元.製造元名] と [製造元.製造元部品番号] フィールドの両方に対する変更権限の割り当てが必要です。

- 「リリース済み」または「実施済み」ステータスの場合、変更の [対象アイテム] タブの [アイテム]、[新規リビジョン]、[タイプ (ライフサイクル)] の各フィールドは変更できません。
  - また、その他の変更で、[対象アイテム] タブのアイテム番号フィールドは、「リリース済み」、「終了」、「期限切れ」、または「再開」ステータスでは変更できません。
- [ユーザー定義 2] タブを変更するには、特定のサブクラスと属性に対する変更権限マスクが必要です。

**重要** リリース済み ECO を変更することで、以前のリリース済みリビジョンのライフサイクル フェーズを変更できるように Agile PLM を設定できますが、そのような慣習は次の理由でお勧めできません。

- a) 規制の適合性に違反する可能性
- b) システムのデータ整合性問題の可能性

リリース済み ECO を直接変更することによって、リリース済みリビジョンのライフサイクルを変更できないようにユーザー権限を設定するように強くお勧めします。

Agile PLM では、リリース済み ECO の [対象アイテム] 表の [アイテム リビジョン] とアイテムの [説明] を変更する許可をユーザーに与えていません。

修正権限は、添付ファイルに関連して利用することもできます。この機能は、305 ページの「[修正権限と添付ファイル](#)」で説明されています。

## \$CURRENTREV を使用して初版リビジョンでアイテムを変更する機能を制御する

条件に \$CURRENTREV を使用したアイテム オブジェクトの変更権限マスクは、リリース済みまたはプレリミナリのアイテムを、ユーザーが変更できるかどうかを制御するために使用できます。ユーザーの変更機能をさらに詳細に定義するには、変更権限マスク条件に [タイトル ブロック.リビジョン] Equal to \$LATEST を含めることができます。この条件の組み合わせによって、たとえば、保留中の変更がない初版リビジョン、未リリース

スの変更がある初版リビジョン、または未リリースの変更によって定義された保留中リビジョンなど、変更できる (または変更できない) アイテムのリビジョンを制御できます。

## 適用可能なアイテム属性

ユーザーは、[リビジョン] ドロップダウン リストを使用して、アイテム オブジェクトについて特定リビジョンの情報を表示できます。ユーザーに割り当てた変更権限マスクによって、それらの属性を変更できるかどうかが決まります。

- [リビジョン] ドロップダウン リストは、Web クライアントと Java クライアントの両方で、アイテムの [拠点] タブに対して使用できます。
- [リビジョン] ドロップダウン リストは、Java クライアントのアイテムの [ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] タブに対して使用できます。
- Web クライアントのアイテムの [ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] のデータは、[タイトル ブロック] タブに表示されるため、Web クライアントの [タイトル ブロック] タブの [リビジョン] ドロップダウン リストは、[ユーザー定義 1] および [ユーザー定義 2] のデータの表示も制御します。

## \$CURRENTREV 条件の論理

アイテム条件に \$CURRENTREV を使用すると、表示されるリビジョンに基づいて、管理者が権限の制御を組み込めるようになります。\$CURRENTREV は、[プレリミナリ] または [リリース済み] のいずれかに一致するように設定できます (このステートメントは、機能拡張によって一致する値が拡大された PLM リリース 9.2.2.2 まで True に評価されます)。\$CURRENTREV を使用して記述された条件では、一致する値を評価するために Web クライアントまたは Java クライアントで現在選択されているリビジョンが評価されます。つまり、ユーザーが [リビジョン] ドロップダウン リストでリビジョンを選択すると、それで表示されたリビジョンと照合して \$CURRENTREV 条件が評価されます。

次の表に、\$CURRENTREV 条件の設定を評価する方法を示します。リリース済みバージョンがあると、初版リビジョンの論理が変化することに注意してください。

現在表示されているリビジョン	\$CURRENTREV = Is Preliminary	\$CURRENTREV = Is Released
リリース済みリビジョン A	False	True
保留中リビジョン (b)	True	False
初版リビジョン - リリース済みリビジョンあり	False	True
初版リビジョン - リリース済みリビジョンなし	True	False

## リリース済みリビジョンの定義

リリース済みリビジョンは、リビジョンを作成した変更オブジェクト (設計変更または製造元依頼) が、それぞれのワークフロー内で [リリース済み] または [実施] ステータス タイプとして存在している場合に発生します。リビジョンに括弧が付いていない場合、これは両方のクライアントで発生します。

## 保留中リビジョンの定義

保留中リビジョンは、リビジョンを作成した変更オブジェクトが、それぞれのワークフロー内で [未割当]、[保留中]、[提出]、[レビュー]、または [中断] ステータス タイプとして存在している場合に発生します。リビジョンに括弧が付いている場合、これは両方のクライアントで発生します。

---

**注意** [キャンセル] ステータスの変更オブジェクトは、[リビジョン] ドロップダウン リストに表示されないため、適用できません。

---

## 特定の使用事例に対する条件の作成

通常、Agile 管理者による変更権限の制御を必要とする使用事例は 3 種類あります。これらの使用事例は、必要に応じて条件をさらに拡張できます。

1. 初版のみに変更の拡大を許可する
2. 保留中のリビジョンを対象として変更を許可する
3. リリース済みのリビジョンを対象として変更を許可する

### 1. 初版のみに変更の拡大を許可する

[アイテム] \$CURRENTREV Is Preliminary And

[タイトル ブロック.リビジョン] Equal to \$LATEST

ステートメント \$CURRENTREV Is Preliminary は、リリース済みのリビジョンがあると False に評価されます。一方、保留中のリビジョンに対しては True に評価されます。したがって、ステートメント [タイトル ブロック.リビジョン] Equal to \$LATEST を追加することが重要です。この式は、リリースされた最新のリビジョンをユーザーが参照している場合のみ True になります。一方、リリース済みのリビジョンがない場合は、初版リビジョンに対して True になります。

多数の [適用先] フィールドがある アイテムの変更権限マスクで、このステートメントの組み合わせが指定されている条件を使用すると、初版での変更権限の拡大が許可されます。一方、リリース済みのリビジョンがなく、保留中のリビジョンがある場合は、初回リリース リビジョン以降の変更権限の拡大が防止されます。

### 2. 保留中のリビジョンを対象として変更を許可する

[アイテム] \$CURRENTREV Is Preliminary

ステートメント \$CURRENTREV Is Preliminary を使用して条件を記述すると、通常はこの要件が満たされます。この条件は、少数の [適用先] フィールドがある アイテムの変更権限マスクで使用します。初回リリース リビジョン以前の保留中のリビジョンまたは初版リビジョンを参照しているユーザーは、特定のフィールドを変更できます。

### 3. リリース済みのリビジョンを対象として変更を許可する

[アイテム] \$CURRENTREV Is Released

ステートメント \$CURRENTREV Is Released を使用して条件を記述すると、通常はこの要件が満たされます。この条件は、少数の [適用先] フィールドがある アイテムの変更権限マスクで使用します。初回リリース リビジョンより以降のリリース済みリビジョンまたは初版リビジョンを参照しているユーザーは、特定のフィールドを変更できます。

## その他の権限の詳細

このセクションでは、重要な Agile PLM 権限の情報について詳細に説明します。Agile PLM システムで使用されるあらゆる権限の詳細を包括的に説明するものではありません。権限は単独では機能しないことに留意してください。たとえば、[アイテムの作成] のように権限マスクで引用され、その権限マスクで構成される役割に含まれる場合にアクティブとなります。

---

**注意** 添付ファイルの操作に関連する権限については、303 ページの「[添付ファイル権限](#)」で説明されています。

---

## 承認者/オブザーバの追加と承認者/オブザーバの削除

[承認者/オブザーバの追加] 権限によって、ユーザーは特定のルーティング可能なオブジェクトを承認または却下するユーザー、グローバル ユーザー グループ、パートナーを指定することができます。この権限では、これらのカテゴリをオブザーバとして指定することもできます。オブザーバはルーティング可能なオブジェクトを表示することはできますが、承認や却下はできません。

[承認者/オブザーバの削除] 権限によって、ユーザーは前述のカテゴリを特定のルーティング可能なオブジェクトに関する承認者またはオブザーバのリストから削除することができます。承認者またはオブザーバの追加の詳細は、104 ページの「[対象アイテムの詳細情報: 承認者とオブザーバを追加する](#)」を参照してください。

---

**注意** ワークフローの「レビュー」または「リリース済み」ステータスで、承認者またはオブザーバを追加または削除するには、そのステータスの [アドホック承認者/オブザーバ] プロパティが [はい] に設定されている必要があります。

---

## 自分の添付ファイルのレッドライン: リリース 9.2.2.2 では無効

リリース 9.2.2.2 以降、この権限は無効となっています。添付ファイル レッドライン マークアップへのアクセスの有効化と制御を行う機能は、(ファイル フォルダ クラスの) マークアップ サブクラスと、それに関連する権限マスク (作成、読み取り、変更、チェックイン、およびチェックアウト) によって提供されます。

## 他者の添付ファイルのレッドライン: リリース 9.2.2.2 では無効

リリース 9.2.2.2 以降、この権限は無効となっています。添付ファイル レッドライン マークアップへのアクセスの有効化と制御を行う機能は、(ファイル フォルダ クラスの) マークアップ サブクラスと、それに関連する権限マスク (作成、読み取り、変更、チェックイン、およびチェックアウト) によって提供されます。

## ステータスの変更

[ステータスの変更] は、ワークフロー内で変更を移行させる上で、重要な承認プロセスです。[ステータスの変更] 権限は、権限条件を使用してユーザーが操作することのできる (ワークフローにおける変更、前や後ろへ移動など) ステータスを管理します。この権限の目的は、ユーザーが所定の役割で変更できるステータスを指定することにあります。

---

**注意** [ステータスの変更] 権限マスクは、それぞれ 1 つのワークフローの 1 つの指定されたステータスに適用されます。作成した新規ワークフローの各ステータスに対して [ステータスの変更] 権限を作成し、これらを有効化する必要があります。これには、[名前をつけて保存] によって作成されたワークフローのステータスも含まれます (つまり、[名前をつけて保存] を通して他の名前を付けられたワークフローで、変更されたかどうかにかかわらず、独自の [ステータスの変更] 権限を必要とするもの)。

---

権限で利用できるステータス タイプは、権限を作成する際のワークフローの選択により決定されます。また、権限に適用される再利用の条件にも影響されます。

ステータスの変更では、複数の「変更前」または「変更後」の設定が定義できます。管理者は、ある役割に対して変更を複数のステータスから 1 つのステータスへ移行させる (たとえば「保留中」、「提出」、「レビュー」から「キャンセル」ステータスへ) 権限を指定することができます。また、変更を 1 つのステータスから複数のステータスへ移行させる (たとえば「キャンセル」から「保留中」、「提出」、「レビュー」ステータスへ) 権限を指定することもできます。

### ステータスの変更権限マスクを定義するには

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。
2. [権限] ウィンドウで [新規作成] ボタンをクリックします。[権限の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. ステータスの変更権限マスクの [名前] フィールドと [説明] フィールドに入力します。
4. デフォルトでは、権限マスクは有効になっています。必要に応じて、[有効] フィールドで [いいえ] を選択して権限マスクを無効にすることもできます。
5. [権限] フィールドで、ドロップダウン リストから [ステータスの変更] を選択します。
6. [条件] フィールドで、リストから条件を選択し、[OK] ボタンをクリックします。  
または、[新規条件] ボタンをクリックして新規に再利用の条件を定義します。(101 ページの「[新規条件を作成する](#)」を参照してください。)
7. [ワークフロー] フィールドで、ドロップダウン リストからワークフローを選択します。  
追加フィールド [ステータスから] と [ステータスへ] は、ダイアログ ボックスで表示されます。

**注意** [ワークフロー] フィールドで [すべて] を選択した場合、[ステータスから] と [ステータスへ] のフィールドは利用できません。ワークフロー名に [ALL] を選択すると、任意のワークフローの任意のステータスから任意のステータスへの変更をユーザーに許可する「ステータスの変更」権限マスクが作成されます。これは、ワークフローをテストする場合に便利です。

8. [ステータスから] のダイアログボックスで、[選択肢] リストから [選択済み] リストにステータスを移動します。完了したら、[OK] をクリックします。
9. [ステータスへ] のダイアログボックスで、[選択肢] リストから [選択済み] リストにステータスを移動します。完了したら、[OK] をクリックします。すべてのフィールドが完了したら、[OK] をクリックします。

## エクスポート

この権限は、Agile Web クライアント ユーザーが選択されたオブジェクトからデータを抽出し、それをカンマ区切りのテキスト ファイルまたは PDX パッケージへエクスポートすることができるようになります。PDX は サプライ チェーン全体を通じてエンジニアリング情報や製造情報を電子的に交換する際に使用する規格です。PDX パッケージは、Agile eXpress 無料クライアントで表示可能な XML ファイルです。

Agile eXpress Viewer は、次の Web サイトからダウンロードできます。  
<http://www.myagile.com/eservices/express/>

## 全検索表示

[全検索表示] 権限は検索に適用できません。レポート検索結果に適用されます。[全レポート表示] 権限マスクは、すべてのレポート結果を示します。権限マスクを持たないユーザーは、[検索結果の最大表示数] プリファ

レンスで指定された最大結果数を見ることができます。また、この権限を持つユーザーがレポート結果を表示する際には、ユーザーに対するすべての権限チェックが無視されます。

## 認可

特定のオブジェクトに関して別のユーザーに役割を付与できるかどうかは、認可権限によって処理されます。

Agile PLM の共有機能は、ユーザーから他の Agile PLM ユーザーまたは特定オブジェクトのユーザー グループへ、1 つ、または複数の役割を「認可」させることができます。共有できる役割は次のとおりです。

- ユーザーに対して永続的に割り当てられている役割。ただし、この役割は、特定のオブジェクトに関してのみ他のユーザーと共有します。
- 特定のオブジェクトに関してユーザーが (他のユーザーと) 共有している役割
- 役割が共有されているユーザー グループに属していることで、ユーザーが共有している役割

指定されたユーザー (または指定されたユーザー グループのメンバー) は、その役割で許可されたアクションを、そのオブジェクトに対してのみ実行できます。ユーザーが永続的な役割や非限定的な役割を取得することはありません。

ユーザーやユーザー グループの [共有] タブには、別のユーザーから割り当てられた共有役割の対象となるオブジェクトが一覧表示されます。ユーザーは、[私のユーザー プロファイル]>[共有] の順にクリックすると、他のユーザーと共有しているオブジェクトと、各オブジェクトに対して実行可能な操作を規定する役割が表示されます。また、[ユーザー プロファイル]>[ユーザー グループ]>(特定のグループ)>[共有] の順にクリックすると、ユーザー グループを介して自分が役割を共有しているオブジェクトが表示されます。

## オーバーライド

[オーバーライド] 権限では、ステータスの必須フィールドや承認者を見捨てる、必須フィールドが未入力の場合や承認者がサインオフしていない場合でも変更を次のステータスに変更することのできるユーザーを管理します。[オーバーライド] 権限を持つユーザーは、必須フィールドが未入力の場合でも変更をリリースできます。

[オーバーライド] 権限は各ステータスに固有の権限です。ユーザーが変更を次のステータスへ移行させる権限を持つかぎり、全員の承認が得られていなくても、変更を次のステータスへ移行させることができます。たとえば、ユーザーが変更の「管理者によるレビュー」ステータスから「CCB によるレビュー」ステータスへの昇格をオーバーライドすることはできても、変更の「最終レビュー」から「リリース済み」への昇格をオーバーライドすることはできない場合があります。

次のステータス レベルへの通常の移行で、フィールド、承認者、または必須事項に入力漏れがある場合、ユーザーに警告が送られます。

**注意** [オーバーライド] 権限を持つユーザーは、以下のいずれの状況でも、ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスに昇格させることができます。

- 必須フィールドがある場合
- [リリース検証を実行する] が [はい] に設定されている場合
- スマートルールの「承認者が却下した変更のステータスを変更する」が [警告] または [不可] に設定されている場合
- スマートルールの「オブザーバが却下した変更のステータスを変更する」が [警告] または [不可] に設定されている場合
- スマートルールの「回答のない変更のステータスを変更する」が [警告] または [不可] に設定されている場合



スマートルールの「承認者が却下した変更のステータスを変更する」と「オブザーバが却下した変更のステータスを変更する」では、[警告] が設定されていてもルーティング可能なオブジェクトの自動昇格は可能です。つまり、自動昇格を禁止するには、これらのスマートルールを [不可] に設定する必要があります。

却下されたルーティング可能なオブジェクトを昇格させるかどうかを変更分析者が決定できるようにするには、以下の条件を満たす必要があります。

- そのステータスの [自動昇格] が [はい] に設定されている。
- 前述の 2 つのスマートルールが [不可] に設定されている。
- 変更分析者がこのステータスに対するオーバーライド権限を持つ。

オーバーライド権限では、ステータスの変更権限と同様に、「変更前」と「変更後」の設定が必要です。[オーバーライド] 権限では、[リリース検証を実行する] プロパティが [はい] に設定されている場合でも、ルーティング可能なオブジェクトのステータスを変更できます。唯一の例外はルーティング可能なオブジェクトの初回リリース中です。[リリース検証を実行する] プロパティが [警告] に設定されていると、オーバーライド中にも警告が表示されます。

ユーザーにオーバーライド権限がなく、[リリース検証を実行する] が [警告] または [いいえ] の場合、ステータス検証では、警告ではなくエラー（ユーザーが条件を修正する必要があることを意味する）が発生することに注意してください。

## フォルダ バージョンのパージ権限

ユーザーは、[フォルダ バージョンのパージ](PFV) 権限を使用して、未使用のファイル フォルダ バージョンを Agile ファイル管理格納庫からパージできます。ファイル フォルダの [バージョン] ドロップダウン リストから、ファイルのフォルダ バージョン番号が削除されます。[フォルダ バージョンのパージ] 権限マスクの作成と定義を行うときに、適切なフォルダ オブジェクト条件を選択すると、フォルダの特定のサブクラスに対して PFV 権限マスクを作成できます。ファイル フォルダ オブジェクトを検出して読み取り、パージするファイル フォルダ バージョンを選択するユーザーには、適切な権限マスクが必要です。ファイル フォルダ バージョンは、チェックアウトされている場合、レッドラインがある場合、またはビジネス オブジェクトの [添付ファイル] タブまたは [コンテンツ] タブでそのバージョンが使用中の場合は、削除できません。

[フォルダ バージョンのパージ] コマンドは、ファイル フォルダ オブジェクトの [詳細...] メニュー (Java クライアント) および [アクション] メニュー (Web クライアント) に表示されます。

## 権限委譲 (自分)

権限委譲 (自分) 権限によって、ユーザーは特定の期間中自分に代わって変更を承認または却下できるユーザーを指定することができます。権限委譲は、ユーザーがルーティング可能なオブジェクトの承認者である場合に適用され、オブザーバである場合は適用されません。権限委譲 (自分) は、元の承認者が休暇をとる場合などに非常に便利です。

委譲先のユーザーは、権限の条件によって異なります。たとえば、プロジェクト A に関するすべての変更がメアリーに、プロジェクト B に関するすべての変更がジョーに委譲されるとします。異なる委譲の条件が重複する場合、委譲先として定義された両方のユーザーが通知を受け取り、元の承認者に代わってサインオフすることができます。

権限委譲は、開始日と終了日で特定される期間中有効です。この期間が経過すると、サインオフ権限は自動的に元の承認者に戻ります。

長期休暇中に複数の委譲先を指定する場合など、ユーザーの権限を複数のユーザーに委譲する必要がある場合、委譲先のユーザーは、次の表に記載されている順番に指定してください。



委譲元ユーザー	委譲先ユーザー	開始日	終了日
ブライアン ヘンソン	デビッド ゴルツ	2007 年 7 月 14 日	2007 年 7 月 30 日
ブライアン ヘンソン	ケビン クラッシュ	2001 年 7 月 31 日	2007 年 8 月 12 日

**注意** サインオフ権限の委譲で委譲先ユーザーに指定されているユーザーをシステムから削除する場合は、152 ページの「[ユーザーを削除する/削除を取り消す](#)」を参照してください。

## 権限委譲 (他のユーザー)

権限委譲 (他のユーザー) 権限を使用すると、元のユーザーの代理として変更を承認または却下する権限を、特定の期間、別のユーザーに委譲できます。権限委譲は、元のユーザーがルーティング可能なオブジェクトの承認者である場合に適用され、オブザーバである場合は適用されません。

この権限は、権限委譲 (自分) 権限を持つユーザーによって指定された委譲よりも優先されます。元の承認者へは、通知の電子メールがコピーとして送信されます。

**注意** 委譲条件を作成するときは、[対象アイテム] タブのフィールドに条件を含めることができます。特定のルーティング可能なオブジェクトを選択するには、[対象アイテム] のフィールドに指定した条件が、そのオブジェクトの [対象アイテム] タブにあるすべてのオブジェクトについて真でなければなりません。

たとえば、「対象アイテムの旧ライフサイクル フェーズがプレリミナリに等しい」という条件を作成した場合、[対象アイテム] タブのすべてのオブジェクトの [旧ライフサイクル] フィールドが「プレリミナリ」でなければなりません。[含む] を検索演算子として選択した場合、[対象アイテム] タブのすべてのオブジェクトの特定のフィールドに、特定の値が含まれている必要があります。

## 拠点変更依頼の [名前を付けて保存] に関する制限

拠点変更依頼 (SCO) オブジェクトを作成するために、SCO 以外の変更オブジェクトから [名前を付けて保存] を開始することはできません。また、SCO 以外の変更オブジェクトを作成するために、SCO オブジェクトから [名前を付けて保存] を開始することもできません。拠点変更依頼 (SCO) には拠点固有の情報のみが反映され、他の変更タイプ (ECO、MCO など) は拠点固有の情報には制限されないため、[名前を付けて保存] を使用して SCO を作成できるのは、別の SCO から [名前を付けて保存] を開始する場合のみです。[名前を付けて保存] 機能を使用する場合、拠点変更依頼の拠点固有の情報のみを使用すると、他の変更タイプとは互換性がなくなります。

## 確認通知

[確認通知] 権限は、そのオブジェクトにイベントが発生した場合にユーザーが通知を受けるように設定できます。指定したフィールドが変更されたときに通知を受けるようにしたり、さらに通知の対象となるイベントを選択することもできます。

特定のクラスのオブジェクトに確認通知を指定するには、そのオブジェクト クラスに対する確認通知権限が必要です。

ユーザーの [確認通知] タブでは、そのユーザーに対して確認通知が有効になっているオブジェクトが表示されます。

購読イベントは、2 つのタイプの通知を切り替えます。電子メールと受信トレイ電子メールによる通知は、ユーザーの [電子メール通知を受信] プリファレンスが [はい] に設定されている場合にのみ送信されます。このプロパティは、ユーザー オブジェクトの [プリファレンス] タブにあります。

## 権限マスクの構成要素

権限マスクは強い影響力を持つ複雑な機能です。各権限マスクは、いくつかの要素で構成されています。権限マスクの構成要素は次のものを定義します。

- ユーザーが実行できるアクション
- アクションの実行対象となるオブジェクト タイプ
- アクションの実行対象となるオブジェクトのサブセットを定義するフィルタリング条件
- 特定のオブジェクトの属性を表示する [適用先] 属性 (変更、読み取り、Microsoft Project、およびダッシュボード管理の各権限に基づく権限マスクのみ)
- [ステータスの変更] 権限の場合は、ワークフロー、変更前のステータス、変更後のステータス (216 ページの「[条件と適用先属性のオプションを組み合わせる](#)」の 2 番目の図を参照)

## すべての権限マスクの要素となる権限、オブジェクト タイプ、および条件

権限マスクは、ユーザーのアクションを許可または禁止するためのフィルタとして機能します。権限マスクでは、アクションのタイプとそれを許可する条件の組み合わせにより、Agile PLM でのユーザーの動作を管理します。権限マスクは以下の構成要素によって構築され、これらは権限マスクのプロパティに含まれています。

1. 権限またはアクション (210 ページの「[権限マスクの構成要素 1: 権限](#)」を参照)
2. アクションの対象であるオブジェクト タイプ (211 ページの「[権限マスクの構成要素 2: オブジェクト タイプ](#)」を参照)
3. アクションに適用する条件 (212 ページの「[権限マスクの構成要素 3: 条件](#)」を参照)

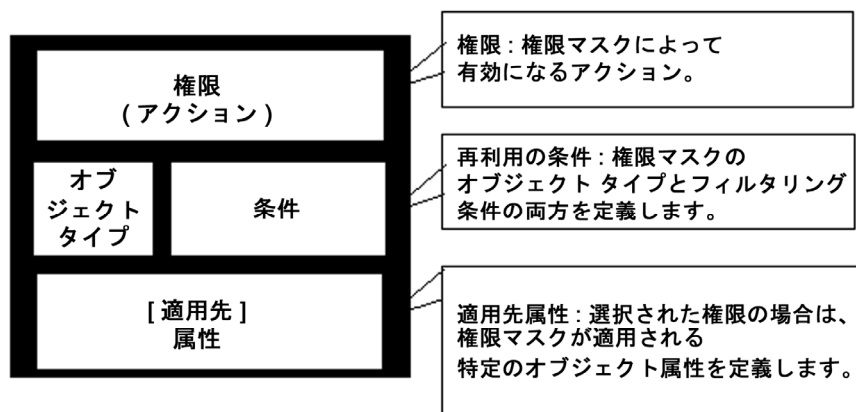
### 少数の権限が基本となる [適用先] を含む権限マスク

さらに、数少ない一部の権限 (管理者、読み取り、変更、Microsoft Project、およびダッシュボード管理) に基づく権限マスクは、[適用先] プロパティに含まれている属性という第 4 の構成要素を使用します。192 ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。

4. アクションを適用する属性 (212 ページの「[権限マスクの構成要素 4: 属性](#)」を参照)

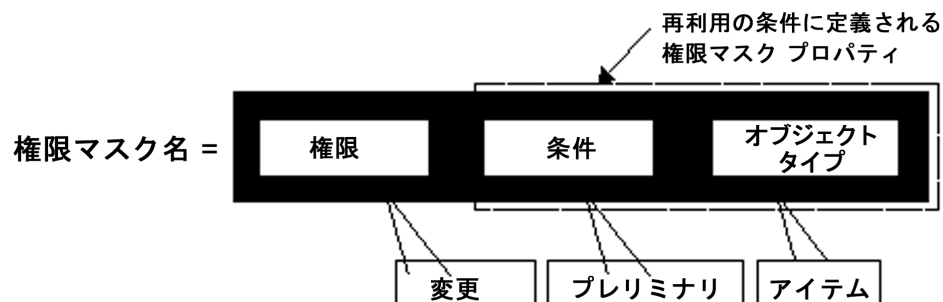
## 権限マスクの図解

権限マスクは、再利用の条件を使用してオブジェクト タイプとフィルタリング条件を定義します。権限マスクを作成するときは、概略図に示されているように、条件オブジェクトのリストから再利用の条件を選択します。



## 権限マスクに名前を付ける

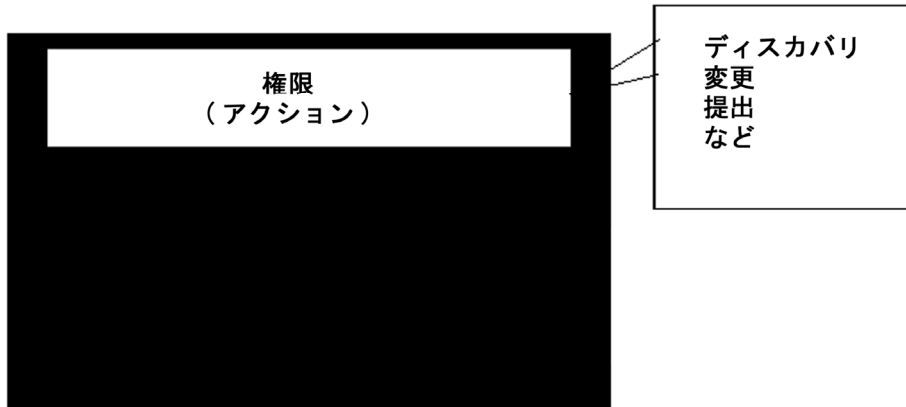
権限マスクに名前を付ける際には、権限マスクの目的と機能ができるだけ明確にわかるよう、以下の規則が使用されています。



権限マスクの中には、「変更の送信」のように、権限とオブジェクト タイプのみで構成されているものがあります。

## 権限マスクの構成要素 1: 権限

権限マスクの基本となる構築要素は権限です。それによってアクション (ディスカバリ、変更、提出など) が許可されます。Agile PLM システムにおける基本的な権限は、すでに「Agile PLM 権限」で説明しました。



権限の基本的な構成要素は、権限マスクの作成時に定義され、権限マスクの [一般情報] タブに表示されます。例:

### [変更 (設計変更)] 権限マスクのプロパティを表示するには:

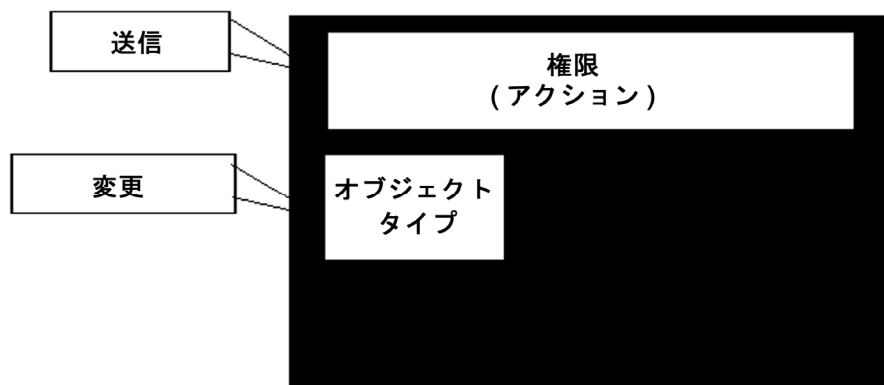
1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。
2. [権限] ウィンドウ (指定した権限に基づいて権限マスクが実際に一覧表示される) で、[変更 (設計変更)] の権限マスクをダブルクリックします。権限マスク オブジェクトが表示されます。

**注意** リスト上のすべての [変更] 権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件で権限レコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

3. これで、[一般情報] タブで編集可能なフィールドを変更することができます。  
権限マスクが作成された後は値を変更できないことを示す [権限] フィールドは編集できません。また、[権限条件] フィールドは変更することができます。
4. 権限マスクの編集可能プロパティの表示内容を確認したら、[キャンセル] をクリックします。

## 権限マスクの構成要素 2: オブジェクト タイプ

大部分の権限マスクには、変更、変更クラス、設計変更といったアクションの対象であるオブジェクト タイプも含まれています。再利用の条件を選択した場合、オブジェクト タイプも権限マスクの作成時に定義される権限マスクのプロパティとなります。オブジェクト タイプは [クラス] ノードで定義されます。オブジェクト タイプの詳細は、40 ページの「[Agile PLM クラス構成](#)」を参照してください。



権限マスクの中には、「変更の送信」(上記)のように、権限とオブジェクト タイプのみで構成されているものがあります。この種の権限マスクに対しては、フィルタリング条件なしでオブジェクト タイプを指定する再利用の条件(「変更のみ」など)を選択します。

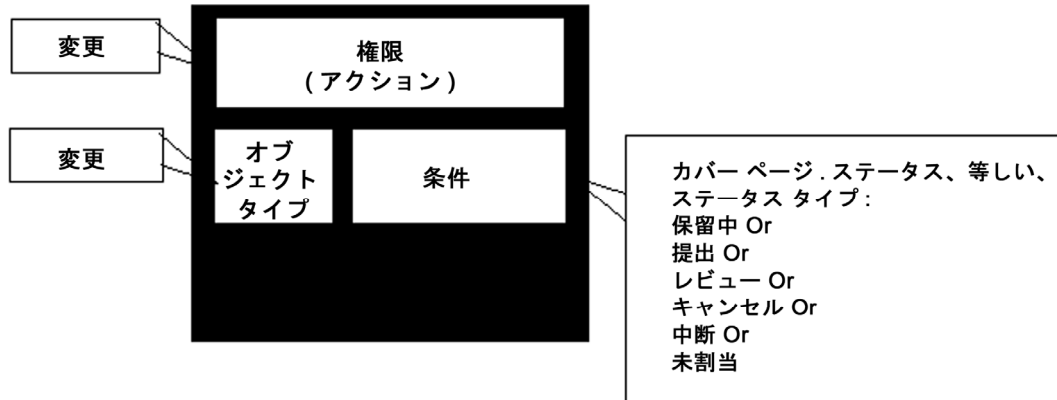
オブジェクト タイプを使用して、権限を拡大したり、縮小したりすることができます。以下に、[変更] 権限マスクを拡大してすべての変更を含める場合と、縮小して設計変更のみを含める場合を示します。Agile PLM オブジェクト タイプの完全なリストについては、「インストールされる Agile PLM クラス、基本クラス、およびサブクラス」を参照してください。

選択する オブジェクト タイプ	ユーザーが変更できる対象...	
	クラス :	サブクラス :
変更	変更クラス 設計変更依頼クラス 期限付き設計変更クラス 製造元依頼クラス 価格変更クラス 拠点毎変更クラス 出荷停止クラス	設計変更 (ECO) 設計変更依頼 (ECR) 期限付き設計変更 MCO 価格変更 (PCO) 拠点毎変更 (SCO) 出荷停止
変更クラス	変更クラス	設計変更 (ECO) (定義済みの他の変更サブクラスを含む)
設計変更 (ECO)	該当なし	設計変更 (ECO) (このサブクラスのみを含む)

**注意** [アクション - 条件 - オブジェクト タイプ] という命名規則を使用すると、オブジェクト タイプは権限マスク名の一部になります。209 ページの「[権限マスクに名前を付ける](#)」を参照してください。

## 権限マスクの構成要素 3: 条件

権限マスクのその他のプロパティは、適用する条件のセット、または権限マスクが作動する条件です。条件は、作成時に再利用の条件内で定義します。権限マスクの条件は、権限マスクを作成し、再利用の条件をリストから選択する際に定義します。後で別の再利用の条件を選択することもできます。



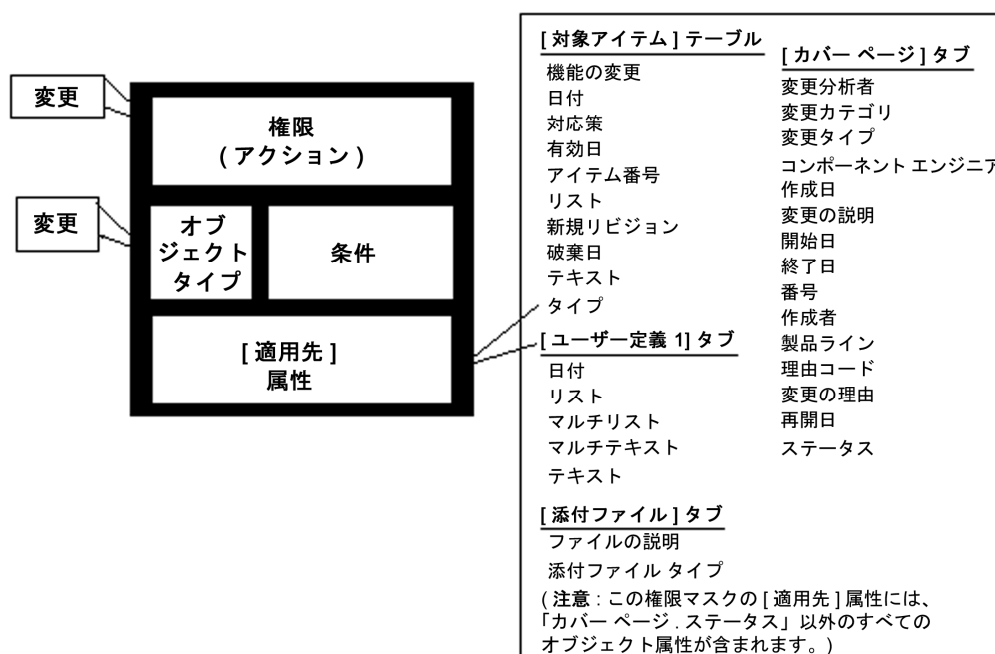
このように特定の再利用の条件を使用することで、ユーザーは、その再利用の条件に定義されているいずれかのステータス タイプ (保留中、提出、レビュー、キャンセル、中断、未割当) にある設計変更のみを変更することができます。

## 権限マスクの構成要素 4: 属性

権限マスクのもうひとつの土台には、権限マスクを適用する属性 (または属性) があります。これらは [適用先] 属性と呼ばれ、[変更] 権限および [読み取り] 権限マスクでのみ使用されます。[適用先] 属性は権限マスクを作成する際に定義しますが、後で変更することもできます。

[変更] 権限マスクは、[カバー ページ]、[タイトル ブロック]、[一般情報] といった特定のタブにある属性の変更をユーザーに許可するように設計されています。

たとえば、Agile PLM のインストールで提供される [変更 (設計変更)] 権限マスクは、次の図に示す属性に適用する (ユーザーによる変更を可能にする) ために設計されています。




### これらの適用先属性を表示するには

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。
2. [権限] ウィンドウで、[変更 (設計変更)] の権限マスクをダブルクリックします。権限マスクが表示されます。前述の概略図を参照してください。

**注意** リスト上のすべての [変更] 権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件で権限レコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

適用先属性が [一般情報] タブに一覧表示されます。

3. 利用可能な属性値と選択した属性値のリストを表示するには、[適用先] フィールドの横にある下矢印  をクリックします。[選択肢] と [選択済み] リストがダイアログ ボックス内に表示されます。
4. リストの表示内容を確認したら、[キャンセル] をクリックします。[一般情報] タブのフィールドの表示を終了するには、[閉じる] をクリックします。

## 権限マスクを表示する

役割を構成する権限マスクによって、ユーザーが実行できるアクションが定義されます。Agile PLM では、インストールされる役割に対して一連の事前設定済みの権限マスクが供給されます。役割には少なくとも 1 つの権限マスクがあります。

### 特定の役割の権限マスクを表示するには

1. [ユーザー設定] で [役割] をダブルクリックします。

2. [役割] のウィンドウで、役割をダブルクリックします。役割のタブ付きウィンドウが表示されます。
3. [権限] タブをクリックします。権限マスクがテーブルに表示されます。

## 権限マスクのプロパティを表示する

役割を構成する権限マスクはそれぞれ、管理対象である権限を定義する独自のプロパティを持ちます。次の表に、使用可能な権限マスクのプロパティを示します。各権限マスクに対してすべてのプロパティが設定可能であるとはかぎりません。

プロパティ	説明
名前	名前 (例: 「再開日の変更」)。 255 文字以内の権限マスクの名前です。
説明	510 文字以内の権限マスクの説明 (例: 「リリース後の再開日の変更」)。
有効	[はい] または [いいえ]。[いいえ] に設定すると、権限を有効にせずに作業できます。これは権限を設定する際に便利です。
権限 (管理アクション)	権限 (例: 作成)。 [作成]、[削除]、[変更]、[印刷]、または [読み取り] といった、権限またはアクションを特定します。権限マスクでは、権限は 1 つだけ定義します。 このプロパティは、権限マスクの作成後に編集することはできません。
権限条件	その権限マスクに対して選択された再利用の条件。権限マスクには、再利用の条件は 1 つのみ選択します。選択した再利用の条件によって、権限マスクの 2 つの重要なプロパティが定義されます。 <ul style="list-style-type: none"> <li>□ オブジェクト タイプ - 権限マスクの Agile PLM オブジェクト タイプを特定します。</li> <li>□ 条件 - 権限を適用する条件を指定します (例: [カバー ページステータス、等しい、ステータス タイプ、リリース済み])。再利用の条件では、オブジェクト タイプに関するすべてのフィールドと条件の値を指定します。</li> </ul>
適用先	管理者、読み取り、変更、Microsoft Project、または [ダッシュボード] タブ表示の権限のみ。  [変更] 権限マスクまたは [読み取り] 権限マスクが適用される属性を指定します (例: 「カバー ページ作成日」)。195 ページの「 <a href="#">ディスカバリ権限と読み取り権限</a> 」および 199 ページの「 <a href="#">変更権限</a> 」を参照してください。  管理者権限マスクが適用される管理者ノードを指定します (例: [ユーザー])。192 ページの「 <a href="#">適用先機能</a> 」を参照してください。  [適用先] を使用する他の権限については、194 ページの「 <a href="#">ダッシュボード管理</a> 」および 339 ページの「 <a href="#">PPM 固有の権限</a> 」を参照してください。
ワークフロー	(ステータスの変更およびオーバーライド権限のみ)  ステータスの変更権限の場合、ユーザーがステータスを変更したりステータス変更アクションをオーバーライドしたりできるワークフローを指定します。  オーバーライド権限の場合、[変更前のステータス] プロパティと [変更後のステータス] プロパティではユーザーがオーバーライドできるステータスの変更アクションを定義します。



プロパティ	説明
変更前のステータス	<p>(ステータスの変更およびオーバーライド権限のみ)</p> <p>ステータスの変更権限の場合、ユーザーが変更できるステータス (変更前) を指定します。</p> <p>オーバーライド権限の場合、[変更前のステータス] プロパティと [変更後のステータス] プロパティではユーザーがオーバーライドできるステータスの変更アクションを定義します。</p>
変更後のステータス	<p>(ステータスの変更およびオーバーライド権限のみ)</p> <p>ステータスの変更権限の場合、ユーザーが変更できるステータス (変更後) を指定します。</p> <p>オーバーライド権限の場合、[変更前のステータス] プロパティと [変更後のステータス] プロパティではユーザーがオーバーライドできるステータスの変更アクションを定義します。</p>

### 権限マスクのプロパティを表示するには

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。
2. [権限] ウィンドウで、表示したい権限マスクをダブルクリックします。権限マスク ウィンドウが表示されます。

**注意** 検索を絞り込むには、権限マスク レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての [変更] 権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

3. プロパティを変更するには、テキスト フィールドにテキストを入力するか、ドロップダウン リストを使用します。

**注意** [権限 (管理アクション)] フィールドは編集できません。

4. 完了後、[保存] をクリックします。変更を保存せずに終了する場合は、[閉じる] をクリックします。

## 権限マスクの条件変数を使用する

再利用の条件を作成し、権限マスク条件として使用する際には、以下の表に示す変数を使用できます。[条件の作成] ダイアログ ボックスでは、いくつかの変数が [属性] リストに表示され、その他の変数は [値] フィールドに入力することができます。Agile PLM 変数の完全なリストについては、31 ページの「[Agile PLM 変数](#)」を参照してください。

変数	説明
\$CHECKOUTUSER	オブジェクトの添付ファイルをチェックアウトしたユーザー。
\$LATEST	オブジェクトの最新リビジョン。具体的には、リリース済みアイテムの最新のリリース済みリビジョンまたは未リリースアイテムの最新の保留中リビジョン (保留中の変更を含む)。\$LATEST は、読み取り権限または変更権限にのみ適用されます。

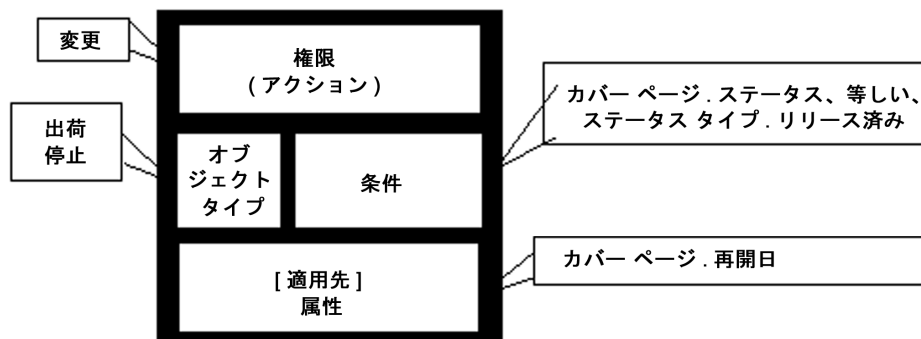
変数	説明
\$CREATEUSER	オブジェクトを作成したユーザー。 [ユーザーの作成] を属性 (例: 「ユーザーの作成、等しい、\$USER」) として指定するには、再利用の条件を定義するときに [属性] フィールドで [ユーザー定義 1.ユーザーの作成] を選択します。219 ページの「 <a href="#">作成者条件を適用する</a> 」も参照してください。
\$PARTNER	現在のサプライ チェーン パートナー会社。
\$CURRENTREV	リビジョン リストから選択したオブジェクトの現在のリビジョン、または現在表示しているオブジェクトのリビジョン。

## 条件と適用先属性のオプションを組み合わせる

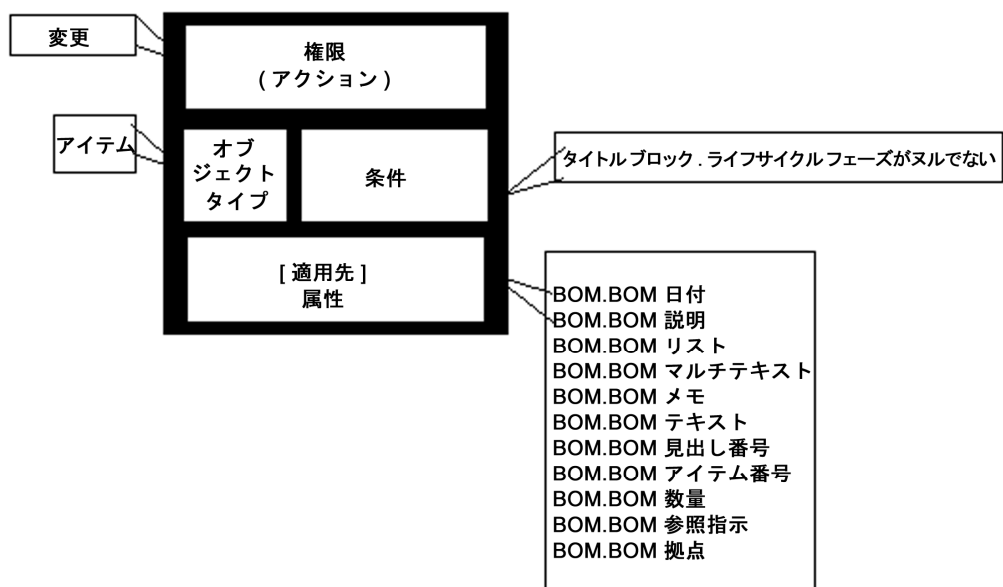
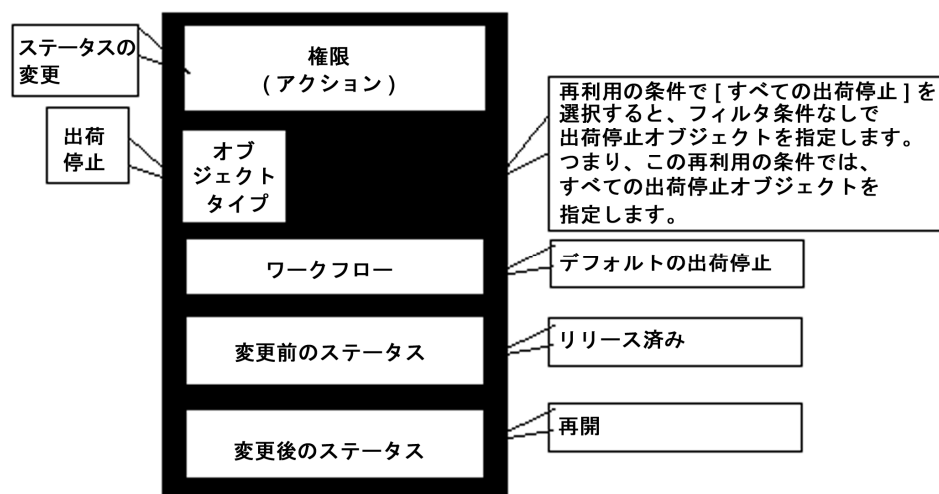
権限マスクを作成または変更する際には、[適用先] および [条件] ダイアログ ボックスにより、属性のあらゆる組み合わせを選択できますが、すべての権限マスクですべての条件または属性が有効になるとはかぎりません。適切に機能するように、オプションの組み合わせを確認してください。

たとえば、[リリース済み設計変更の変更] 権限マスクを変更する場合、[適用先] ダイアログ ボックスのリストから、[対象アイテム.アイテム番号] フィールドと [対象アイテム.新規リビジョン] フィールドを選択することができます。ただし、これらの 2 つのフィールドは、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後には変更できません。これらの属性は、[適用先] ダイアログ ボックスで指定できるため、必ずしも、リリース済みのルーティング可能なオブジェクトで、それぞれのフィールドを変更できることにこだわる必要はありません。

以下に、Agile PLM のインストールで供給される権限マスクとそのプロパティの例を示します。



[ステータスの変更] 権限には、前述の図にある [適用先] プロパティは含まれません。ただし、ステータスの変更権限には、次の図にある [ワークフロー]、[変更前のステータス]、[変更後のステータス] プロパティが含まれます。



## 権限マスクを変更する

権限マスクは様々な方法で変更できます。このセクションでは、各種変更方法について説明します。

## 権限マスク条件を変更する

### 既存の権限マスク条件を変更するには

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。
2. [権限] ウィンドウで、変更する権限マスクの名前をクリックします。権限マスク ウィンドウが表示されます。

**注意** 検索を絞り込むには、権限マスク レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての [変更] 権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

権限マスクのプロパティが [一般情報] タブに表示されます。

3. プロパティを変更するには、テキスト フィールドにテキストを入力するか、ドロップダウン リストを使用します。
4. [権限条件] フィールドで、ドロップダウン リストから別の再利用の条件を選択します。  
または、[作成] をクリックして新規に再利用の条件を定義します。(101 ページの「[新規条件を作成する](#)」を参照してください。)
5. 入力完了したら、[保存] をクリックします。変更をキャンセルするには、[閉じる] をクリックします。

### [適用先] プロパティを変更する

AppliedTo (適用先) プロパティにより、権限マスクで変更できる属性またはフィールドを指定できます。このプロパティを使用できる対象は、変更、読み取り、管理者、ダッシュボード管理、および Microsoft Project の各権限のみです。(この情報は、章の最初のほうに記載されていますが、便宜上ここにも記載します。)

[選択肢] リストには、権限マスクのオブジェクト タイプで使用するすべての属性が表示されます。[選択済み] リストには、権限マスクで使用するすべての属性が表示されます。たとえば、前の図の選択ダイアログボックスには、設計変更依頼、設計変更、製造元変更などの変更に含まれるすべてのフィールドと属性が表示されます。


**注意** 管理者権限の [適用先] 属性に関する詳細は、193 ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」を参照してください。

### 適格な権限マスクに対して [適用先] 属性を選択するには:

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。[権限] ウィンドウが表示されます。
2. 変更する適格な権限マスクをダブルクリックします。権限マスク ウィンドウが表示されます。

**注意** 検索を絞り込むには、権限マスク レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての [変更] 権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

権限マスクのプロパティが [一般情報] タブに表示されます。

3. [一般情報] タブで、[適用先] フィールドの横にある下矢印  をクリックします。選択を行うダイアログ ボックスが開きます。
4. 右の矢印をクリックして、選択した値を [選択肢] リストから [選択済み] リストに移動します。
5. 完了したら、[OK] をクリックします。

6. 権限マスクの編集を完了するには、[保存] をクリックします。

**注意** [適用先] 選択ダイアログ ボックスでは、タブに含まれるすべての使用可能なフィールドから選択できます。ただし、選択したフィールドが常に変更できるとはかぎりません。

たとえば、[リリース済み変更の変更] 権限マスクを作成する際には、[アイテム番号]、[新規リビジョン]、[タイプ] など、[対象アイテム] タブのすべてのフィールドから選択できます。ただし、これらのフィールドは、ルーティング可能なオブジェクトのリリース後には変更できません。これらの属性は、[適用先] 選択ダイアログ ボックスの [選択肢] リストから選択できるため、必ずしも、それらのフィールドはすべての条件下で変更できることにこだわる必要はありません。

## ユーザー作成条件を適用する

[ユーザーの作成] 条件ステートメントでは、ユーザーの読み取り権限がオブジェクトの作成者のみに限定されます。[ユーザーの作成] 機能によって、読み取り権限のないユーザーでもオブジェクトを開き、作成することができます。[ユーザーの作成] 条件を実行するには、まず次の両方を表示させる必要があります。

- そのクラスの [ユーザー定義 1] タブ (53 ページの「[タブを表示、非表示にする、または名前を変更する](#)」を参照)
- Agile PLM クラスの [ユーザー定義 1] タブの [ユーザーの作成] 属性フィールド (72 ページの「[タブの属性を表示または非表示にする](#)」を参照)

これを実行すると、Agile PLM クライアントでは、当該クラスの [ユーザー定義 1] タブの [ユーザーの作成] フィールドに作成者の名前が自動的に表示されます。作成権限を持つすべてのユーザーが当該クラスの空白のフォームを開き、オブジェクトを作成することができます。これによって、基本的な読み取り権限がないユーザーもオブジェクトを作成できます。ただし、この権限によって、ユーザーの読み取り権限の対象が、ユーザー自身が作成した保留中またはプレリミナリのオブジェクトに限定されます。

作成権限があるユーザーは、読み取り権限を拡大して、自分が作成したすべてのオブジェクトを、その状態に関係なく読み取る対象にすることができます。このためには、[ユーザー定義 1.ユーザーの作成] を指定する再利用の条件を使用し、サブクラスに対して読み取り権限マスクを作成します。[ユーザー定義 1] タブと、このタブの [ユーザーの作成] フィールドを表示状態にしてから、さらに以下のことを実行します。

- [ユーザー定義 1.ユーザーの作成] 属性を指定する再利用の条件 (通常は [ユーザー定義 1.ユーザーの作成、等しい、\$USER]) を作成する。
- 作成した再利用の条件を指定する権限マスクを作成する。

たとえば、設計変更を作成するユーザーに対して、次のような新規権限マスクを作成します。

- 名前 - 設計変更の読み取り
- 説明 - このユーザーが作成した設計変更の読み取りのみ
- 権限 - 読み取り
- 以下の項目を指定する再利用の条件を選択または作成します。
  - タイプ: 設計変更 (ECO)
  - 属性: ユーザー定義 1.ユーザーの作成
  - 条件: 等しい、\$USER

[製造元] と [製造元部品] の [製造元] タブで [ユーザーの作成] 属性を表示させることによって、これらのタブに [ユーザーの作成] 属性を読み込むことができます。[ユーザー定義 1] タブと当該クラスの [ユーザーの作成] 属性は必ず表示させてください。

## 権限マスクを有効にする

現在無効になっている権限マスクを有効にするには

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。[権限] ウィンドウが表示されます。
2. 有効にする権限マスクをクリックします。

---

<b>注意</b>	検索を絞り込むには、権限マスク レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての [変更] 権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「 <a href="#">データのフィルタリング</a> 」を参照してください。)または、[有効化] の列見出しをクリックし、「はい」(有効) または「いいえ」(無効) で分類します。
-----------	--

---

3. ウィンドウ ツールバーの [有効] ボタンをクリックします。  
これで、無効に設定されていた権限マスクが有効になります。

---

<b>注意</b>	権限マスクの [一般情報] タブを編集する際にも権限マスクを有効または無効にすることができます。
-----------	--

---

## 新規権限マスクを作成する

権限マスクは役割と同様に、簡単に作成することができますが、ユーザーのアクセスや許可を変更する際には十分に注意してください。新規権限マスクを作成する前に、現在の権限マスクを確認する必要があります。[管理者レポート] ノードから権限マスクの詳細レポートを生成し、現在の権限マスクとその条件をリストします(14 ページの「[管理者レポート](#)」を参照してください)。

必要な権限マスクに似た権限マスクがある場合は、新しい権限マスクを作成するのではなく、既存の権限マスクを変更 (またはコピーしてから変更) することをお勧めします。既存の権限マスクは詳細に検証され、Agile PLM における動作や相互作用が証明されています。

## 作業を開始する前に

新規権限マスクを作成する前に次の内容について考慮してください。

- 必要な権限マスクはすでに存在していないか。存在している場合、新しい権限マスクを作成せずに既存の権限マスクを役割に割り当てることができます。また、適切な再利用の条件が存在する場合は、権限マスクの [使用箇所] タブを確認します。
- その権限マスクによって Agile PLM でどのようなアクションを有効にするか。
- その権限マスクによって Agile PLM でどのようなアクションを禁止するか。
- その権限マスクは、どのオブジェクト タイプに対して動作するか。
- 新規権限マスクにどのような名前を付けるか。[アクション - 条件 - オブジェクト タイプ] という命名規則に従ってください。
- 新規権限マスクはどの役割で必要か。
- 基本的な読み取りまたは [変更] 権限マスクを作成する場合、対応するディスカバリ権限マスクも作成する必要があるか。対応するディスカバリ権限マスクはすでに存在していないか。([ディスカバリ] 権限マスクは、新規 [読み取り] または [変更] 権限マスクの作成時に自動的に作成されません。)

- [読み取り] 権限マスク以外の場合、その効力は [読み取り] 権限に依存するか。
- どのような条件のもとで、その権限マスクを有効にするか。権限マスクの作成時に選択できる既存の再利用の条件はあるか。ある場合は、その再利用の条件の [使用箇所] タブをチェックして、必要な権限マスクがすでに存在しているかどうかを確認します。
- その権限マスクは、役割に含まれる既存のマスクと矛盾しないか。
- 役割に含まれる既存の権限マスクを変更することによって、意図する結果を実現できるか。
- 権限マスクを最初から作成しなくてもすむように、その役割または他の役割にコピー ([名前を付けて保存] を使用) して変更できる既存の権限マスクはないか。

以下の手順によって新規権限マスクを最初から作成することができます。(また、[名前をつけて保存] プロセスで新規権限マスクを作成することもできます。222 ページの「[\[名前を付けて保存\] を使用して権限マスクをコピーする](#)」を参照してください。)

## 新規権限マスクを最初から作成する

### 新規権限マスクを作成するには

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。[権限] ウィンドウが表示されます。
2. ツールバーの [新規作成] をクリックします。[権限の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. 名前を入力します。[アクション - 条件 - オブジェクト タイプ] という命名規則に従ってください。209 ページの「[権限マスクに名前を付ける](#)」を参照してください。
4. 説明を入力します。
5. デフォルトでは、権限マスクは有効になっています。必要に応じて、[有効] フィールドで [いいえ] を選択して権限マスクを無効にすることもできます。この操作は、権限マスクの作成中に行うことをお勧めします。
6. [権限] ドロップダウン リストから権限を選択します。

選択した権限によっては、ウィザードで完成させるフィールドがさらに表示されることがあります。


**注意** [ステータスの変更] 権限を選択した場合は、[ステータスの変更] 権限マスクの完成の詳細について、203 ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。

7. 次のいずれかの操作を行います。
  - 権限条件 (再利用の条件) を必要としない権限マスクの作成を終了するには、[完了] をクリックします。
8. 上記以外のすべての権限に対しては、[権限条件] フィールドで、ドロップダウン リストから再利用の条件を選択します。再利用の条件によって、権限マスクのオブジェクト タイプとフィルタリング条件の両方が定義されます。

または、ダイアログ ボックスで [新規条件] をクリックして新規の再利用の条件を定義します。(101 ページの「[新規条件を作成する](#)」を参照してください。)

(権限マスクに対するオブジェクト タイプの選択の詳細は、211 ページの「[権限マスクの構成要素 2: オブジェクトタイプ](#)」を参照してください。再利用の条件の詳細は、99 ページの「[条件](#)」を参照してください。)

9. [読み取り]、[変更]、または [管理者] 権限マスクを作成する場合は、[読み取り] または [変更] 権限マスクが適用されるオブジェクトのフィールドを選択することができます。(212 ページの「[権限マスクの構成要素 4: 属性](#)」を参照してください。)

  - [適用先] フィールドの  をクリックします。選択を行うダイアログ ボックスが開きます。
  - 左右の矢印をクリックして、選択した値を一方のリストから他方のリストに移動します。
  - 完了したら、[OK] をクリックします。

10. ステータスの変更権限を作成する場合は、203 ページの「[ステータスの変更](#)」を参照してください。
11. [権限の作成] ウィザードの各フィールドが完成したら、[OK] をクリックします。

---

**注意** 作成中に権限マスクを無効にした場合は、使用する前に必ず有効にしてください。

---

## [名前を付けて保存] を使用して権限マスクをコピーする

権限マスク ウィンドウの [名前を付けて保存] を使用すると、既存の権限マスクのコピーを作成することができます。作成したコピーは必要に応じて変更できます。

### 権限マスクをコピーするには:

1. [ユーザー設定] で [権限] をダブルクリックします。[権限] ウィンドウが表示されます。
2. コピーする権限マスクをダブルクリックします。権限マスク ウィンドウが表示されます。

---

**注意** 検索を絞り込むには、権限マスク レコードをフィルタします。たとえば、リスト上のすべての [変更] 権限マスクを検索するには、権限に「変更」が含まれるという条件でレコードをフィルタします。(13 ページの「[データのフィルタリング](#)」を参照してください。)

---

3. [名前を付けて保存] ボタンをクリックします。
4. 新しい権限マスクの名前を入力します。
5. 完了したら、[保存] をクリックします。新規権限マスクが表示されます。



# 一般システム設定

扱うトピックは次のとおりです。

■ スマートルール .....	223
■ Viewer とファイル .....	232
■ 通知 .....	240
■ 全文検索 .....	242
■ 私の割り当て .....	244
■ 単位 (UOM) .....	246
■ 組織のプロファイル .....	247
■ 通貨換算レート .....	247
■ ダッシュボード管理 .....	248

この章では、複数の Agile PLM ソリューションに影響を及ぼす一般設定の設定方法について説明しています。

## スマートルール

スマートルールにより、Agile PLM で変更管理プロセスをさらに強化させる具体的な動作の管理方法を選択することができます。スマートルールはシステム全体に及ぶため、プロセスを簡単に変更できます。

[スマートルール] ノードでは、以下を行うことができます。

- 重複したアイテム番号を使用不可にする。
- オブザーバまたは承認者に却下された場合でも、ルーティング可能なオブジェクトのリリースを許可する。
- ユーザーが [ディスカバリ] 権限を持たないオブジェクトについて、様々なテーブルでの表示方法を決定する。
- 必要に応じて、様々なシステム機能の詳細を設定する。

また、ユーザーが属性の値を現在のルーティング可能なオブジェクトのワークフローに関する条件と一致しない値に変更した場合、スマートルールによって、その後のオプションの選択が決定されます。

**注意** すべてのスマートルールについて、ルーティング可能なオブジェクトがオンになっているワークフローは変更できません。

## スマートルールの設定を変更する

スマートルールの設定を変更するには:

1. [システム設定] で [スマートルール] をダブルクリックします。[スマートルール] ウィンドウが表示されます。
2. 変更するルールをクリックして、ドロップダウン リストから設定を選択します。可能な設定の一覧には、以下の値が含まれます。

- 可 - システムはプロセスの実行を許可します。
  - 不可 - システムはプロセスの実行を禁止します。
  - 警告 - システムはユーザーに対し、プロセスが実行されることを警告します。
  - 削除 - ルーティング可能なオブジェクトが最初に却下されたステータスに戻った場合に、[ワークフロー] タブのすべての承認または却下を削除します。
  - 保持 - ルーティング可能なオブジェクトが最初に却下されたステータスに戻った場合に、[ワークフロー] タブのすべての承認または却下を維持します。
  - 表示 - テーブルにオブジェクトを表示します。
  - 説明だけを付けて表示 - オブジェクトとそのサブクラスおよび詳細が表示されます。部品番号やその他の値は表示されません。
  - 部品番号とリビジョンだけを付けて表示 - オブジェクトのサブクラス、部品番号、リビジョンが表示されます。説明やその他の値は表示されません。
  - 表示しない - オブジェクトはテーブルに表示されません。この場合、警告は表示されません。
  - 警告を表示しない - オブジェクトはテーブルに表示されません。タブで以下が表示されます。「ユーザー権限が十分ではないため、x 個のオブジェクトが表示されていません。」
3. 入力完了したら、[保存] をクリックします。
  4. 元の設定に戻す場合や最初からやり直す場合には、[閉じる] をクリックします。保存せずに閉じるかどうかを尋ねるメッセージが表示されます。変更せずに閉じる場合は、[はい] をクリックし、そうでない場合は [いいえ] をクリックします。

## スマートルールの定義

次の表に、Agile PLM スマートルールをリストで示し、説明します。

スマートルール名	説明	可能な設定
添付ファイルの削除を許可	<p>[はい] に設定すると、ビジネス オブジェクト [添付ファイル] タブから添付ファイルを削除するとき、ファイル フォルダが他のビジネス オブジェクトで使用されていない場合 (つまり、ビジネス オブジェクトで参照されているファイル フォルダのバージョンがない)、ファイル フォルダは自動的にソフト削除されます。</p> <p>ユーザーは、適切な検索機能を使用してファイル フォルダの削除済みオブジェクト検索を実行し、ソフト削除されたファイル フォルダをハード削除 (または削除取消) することができます。</p>	はい いいえ (デフォルト)
PPM から自動インストール	Microsoft Project (2002 および 2003) DLL のユーザー システム レジストリへの自動インストールを許可または却下します。これら DLL のインストールは、Microsoft Project で Agile メニューを使用したシームレスな公表を可能にします。会社でアプリケーションを自動的にインストールしない場合や、Agile-MS プロジェクトの接続をシステム全体で設定する場合は、この設定を [不可] にします。	可 (デフォルト) 不可 警告
見積履歴の自動公表	RFQ または回答ライン データが [見積履歴] サブクラスのオブジェクトに公表されることを許可または不許可します。	可 (デフォルト) 不可 警告

スマートルール名	説明	可能な設定
承認者が却下した変更のステータスを変更する	<p>ルーティング可能オブジェクトの次のステータスへの移動を許可するか、またはユーザーに承認者が変更を却下したことを警告するかどうかを決定します。この設定は、すべての [レビュー] または [リリース済み] ステータスタイプに影響します。</p> <p>ルーティング可能なオブジェクトがスマートルールを満たさない場合に次のステータスへ移行させるかどうかを決定できるようにする場合は、[不可] に設定します。[オーバーライド] 権限を持つユーザーは、ワークフローのルーティング可能なオブジェクトを昇格させることができます。このプロパティに関する注意については、205 ページの「オーバーライド」を参照してください。</p> <p><b>注意:</b> ユーザーが却下した後に、ルーティング可能なオブジェクトがワークフロー中で自動昇格しないようにするには、このスマートルールを [不可] に設定してください。[警告] に設定すると、場合によっては、ルーティング可能なオブジェクトが意図に反して自動昇格することがあります。</p>	<p>可</p> <p>不可</p> <p>警告 (デフォルト)</p>
回答のない変更のステータスを変更する	承認者が承認も却下もしていない場合に、ルーティング可能なオブジェクトを次のステータスへ移行させるかどうかを決定します。この設定は、すべての [レビュー] または [リリース済み] ステータス タイプに影響し、次のレベルへ手動で移動された変更のみに適用されます。自動昇格には、各承認者がルーティング可能なオブジェクトを承認または却下することが必要です。	<p>可</p> <p>不可</p> <p>警告 (デフォルト)</p>
オブザーバが却下した変更のステータスを変更する	<p>ルーティング可能オブジェクトの次のステータスへの移動を許可するか、またはユーザーにオブザーバがこれを却下したことを警告するかどうかを決定します。この設定は、すべての [レビュー] または [リリース済み] ステータスタイプに影響します。</p> <p>ルーティング可能なオブジェクトがスマートルールを満たさない場合に次のステータスへ移行させるかどうかを決定できるようにする場合は、[不可] に設定します。[オーバーライド] 権限を持つユーザーはルーティング可能なオブジェクトを昇格させることができます。このプロパティに関する注意については、205 ページの「オーバーライド」を参照してください。</p>	<p>可</p> <p>不可</p> <p>警告 (デフォルト)</p>
拡張子の異なる添付ファイルをチェックイン	<p>チェックインされた添付ファイルが、チェックアウトされたファイルとは異なる拡張子のファイルを持つことができるかどうかを決定します。</p> <p><b>注意:</b> アイテムの添付ファイルが [最新-x] であり、添付ファイル フォルダのファイル拡張子を変更されたためにアイテムのチェックアウトされたファイルと異なる場合、このルールは上書きされます。</p>	<p>可</p> <p>不可 (デフォルト)</p> <p>警告</p>

スマートルール名	説明	可能な設定
ファイルをリビジョンにコピーする	<p>ファイルを新しいリビジョンへ自動的にコピーするかどうかを管理します。システムは、添付ファイルが追加されたときではなく、保留中の変更が作成されたときにのみ、このスマートルールをチェックします。次の設定があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ コピー - アイテムの新しい保留中リビジョンに対して新規ファイル フォルダが作成され、添付ファイルの新しいコピーが作成されて新規ファイル フォルダに保存されます。</li> <li>□ 参照 - 既存のファイル フォルダが使用され、アイテムの新しい保留中リビジョンの [添付ファイル] タブにこのファイル フォルダに対する新規参照が作成されます。</li> <li>□ 不可 - 新しいアイテムの保留中リビジョンは添付ファイルなしで作成されます。</li> <li>□ 警告付きでコピー - [コピー] 設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。</li> </ul> <p>アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ ボックスが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• アイテムを追加して添付ファイルをコピーする場合は、[追加] チェックボックスと [添付ファイル] チェックボックスの両方を選択します。</li> <li>• アイテムを追加して添付ファイルをコピーしない場合は、[追加] チェックボックスのみを選択します。</li> </ul> <li>□ 警告付きで参照 - [参照] 設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。</li> <p>アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ ボックスが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• アイテムを追加して既存の添付ファイルを参照する場合は、[追加] チェックボックスと [添付ファイル] チェックボックスの両方を選択します。</li> <li>• アイテムを追加して添付ファイルを参照しない場合は、[追加] チェックボックスのみを選択します。</li> </ul> <p><b>注意:</b> このルールを「不可」と設定した場合、オブジェクトが変更に関連付けられた後に初版リビジョンに追加されたファイル (リリース済みリビジョン A) は後続のリビジョンにコピーされません。また、新しい変更が作成されても、初版リビジョンに追加されたすべてのファイルは、新規作成されたリビジョンに追加されません。</p>	<p>コピー</p> <p>警告付きでコピー</p> <p>不可</p> <p>参照 (デフォルト)</p> <p>警告付きで参照</p>

スマートルール名	説明	可能な設定
降格時に承認者を削除する	<p>ルーティング可能オブジェクトが拒否され、前のステータスに戻された場合 (つまり降格された場合) に、アドホック (デフォルトではありません) 承認者とオブザーバがリストから削除されるかどうかを定義します。この設定は、すべてのワークフローにおけるすべての [レビュー] と [リリース済み] ステータス タイプに影響します。</p> <p>保持: ワークフローが前のステータス (「保留中」を含む) に戻された場合、アドホック承認者は保持され、再度ワークフローに進んだ場合に変更を見ることができます。</p> <p>削除: ワークフローが前のステータス (「保留中」を含む) に戻された場合、アドホック承認者は削除され、作成者または変更分析者が彼らを再度追加しないかぎり、変更を見ることができません。</p>	保持 (デフォルト) 削除
降格時にサインオフから削除する	<p>すでに記録された承認/却下が拒否または前のステータスに戻された場合 (つまり降格された場合)、ルーティング可能オブジェクトの [ワークフロー] タブから削除されるかどうかを定義します。この設定は、すべてのワークフローにおけるすべての [レビュー] と [リリース済み] ステータス タイプに影響します。</p> <p>保持: ワークフローが前の状態に戻された場合 (「保留中」を含む)、すでに記録済みのサインオフは保持されます。</p> <p>削除: ワークフローが前のステータス (「保留中」を含む) に戻された場合、サインオフは削除されます。変更がワークフローに進んだ場合、承認者は再度サインオフする必要があります。</p>	保持 (デフォルト) 削除
オブジェクト テーブルのディスカバリ	<p>ユーザーがオブジェクトに対するディスカバリ権限を持っていない場合に、[変更履歴]、[使用箇所]、[対象アイテム]、[製造元]、[BOM]、[保留中の変更] の各テーブルに関するオブジェクトの情報の表示を制限します。可能な設定は「警告」 (デフォルト)、「表示しない」です。</p> <p>[データベース] ノードの [ディスカバリ] 権限プロパティが無効な場合、スマートルールも無効です。</p> <p><b>注意:</b> この設定の変更を反映させるには、ユーザーは Agile Java クライアントから一度ログアウトし、再度ログインする必要があります。</p>	警告 (デフォルト) 表示しない
結果テーブルのディスカバリ	<p>ユーザーがテーブル内のオブジェクトに対するディスカバリ権限を持っていない場合に、結果テーブルに関する情報の表示を制限します。</p> <p>[データベース] ノードの [ディスカバリ] 権限プロパティが無効な場合、スマートルールも無効です。</p> <p><b>注意:</b> この設定の変更を反映させるには、ユーザーは Java クライアントから一度ログアウトし、再度ログインする必要があります。</p>	警告 (デフォルト) 表示しない
BOM テーブルの表示	<p>ユーザーがアイテムに対するディスカバリ権限を持っていない場合に、BOM テーブルのアイテムに関する情報の表示を制限します。</p> <p><b>注意:</b> この設定の変更を反映させるには、ユーザーは Java クライアントから一度ログアウトし、再度ログインする必要があります。</p>	警告付きで表示しない (デフォルト) 表示 説明だけを付けて表示 部品番号とリビジョンだけを付けて表示 表示しない

スマートルール名	説明	可能な設定
見出し番号の重複	<p>BOM にアイテムを追加する際の重複した見出し番号の使用を管理します。</p> <p>このスマートルールは、同じ見出し番号を BOM のグローバルな部分と同じように、BOM の拠点別の部分に使用できるかどうかを指示するように拡張されています。同じ見出し番号を BOM の拠点別の部分に使用できるかどうか指示します。</p> <p>例: [重複見出し番号] スマートルールが [不可] に設定されている場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>見出し番号 1 がグローバル BOM の部品 234 に使用されている場合、見出し番号 1 を Milpitas BOM の部品 123 に使用することはできません。</li> <li>見出し番号 1 が Milpitas BOM の部品 234 に使用されている場合、見出し番号 1 を Milpitas BOM の部品 123 にも使用することはできません。</li> </ul> <p>同じ見出し番号は、[見出し番号の重複] スマートルールの設定にかかわらず、BOM の拠点別の部分では複数で使用するができます。</p> <p>例: 見出し番号 1 を、BOM のシンガポール セクションの部品 123 に使用して、BOM の Milpitas セクションの部品 234 にも使用することができました。[見出し番号の重複] スマートルールの設定は、この動作には影響しません。</p> <p>[見出し番号の重複] スマートルールが「可」に設定されている場合は、BOM の拠点セクションにかかわらず、同じ見出し番号を他のアイテムに使用することができます。</p>	<p>可</p> <p>不可</p> <p>警告 (デフォルト)</p>
アイテム番号の重複	<p>BOM にアイテムを追加する際の重複したアイテム番号の使用を管理します。</p> <p>このスマートルールは、同じアイテム番号を BOM のグローバルな部分と同じように、BOM の拠点別の部分に使用できるかどうかを指示するように拡張されています。同じアイテム番号を BOM の拠点別の部分に使用できるかどうか指示します。</p> <p>例: [アイテム番号の重複] スマートルールが「不可」に設定されている場合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>部品 123 がすでにグローバル BOM で使用されている場合、Milpitas BOM に部品 123 を追加することはできません。</li> <li>部品 123 がすでに Milpitas BOM で使用されている場合、Milpitas BOM に部品 123 を追加することはできません。</li> </ul> <p>同じアイテム番号は、[アイテム番号の重複] スマートルールの設定にかかわらず、BOM の拠点別の部分では複数で使用するができます。</p> <p>例: 部品 123 は BOM のシンガポール セクションと BOM の Milpitas セクションに追加することができます。[アイテム番号の重複] スマートルールの設定は、この動作には影響しません。</p> <p>[アイテム番号の重複] スマートルールが「可」に設定されている場合は、BOM の拠点セクションにかかわらず、BOM のコンポーネントとして、どのアイテムも複数追加することができます。</p>	<p>可</p> <p>不可</p> <p>警告 (デフォルト)</p>

スマートルール名	説明	可能な設定
参照指示の重複	<p>BOM における重複した参照指示の使用を管理します。このスマートルールは、参照指示を BOM のグローバルな部分と同じように、BOM の拠点別の部分に使用できるかどうかを指示するように拡張されています。同じ参照指示を BOM の拠点別の部分に使用できるかどうかを指示します。</p> <p>例: [参照指示の重複] スマートルールが「不可」に設定されている場合</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>参照指示 1 がグローバル BOM の部品 234 に使用されている場合、参照指示 1 を Milpitas BOM の部品 123 に使用することはできません。</li> <li>参照指示 1 が Milpitas BOM の部品 234 に使用されている場合、参照指示 1 を Milpitas BOM の部品 123 にも使用することはできません。</li> </ul> <p>同じ参照指示は、[参照指示の重複] スマートルールの設定にかかわらず、BOM の拠点別の部分では複数で使用することができます。</p> <p>例: 参照指示 1 を、BOM のシンガポール セクションの部品 123 に使用して、BOM の Milpitas セクションの部品 234 にも使用することができます。[参照指示の重複] スマートルールの設定は、この動作には影響しません。</p> <p>[参照指示の重複] スマートルールが「可」に設定されている場合は、BOM の拠点セクションにかかわらず、同じ参照指示を他のアイテムに使用することができます。</p>	可 不可 警告
有効日の順序	有効日が 1 つまたは複数の古いリビジョンよりも前の新規リビジョンをリリースできるかどうかを管理します。このスマートルールは、[対象アイテム] テーブルの拠点別アイテムに対する有効日にも適用されます。	可 不可 警告 (デフォルト)
有効期間の間隔	対象アイテム中の既存の部品の破棄日とそれに代わる部品の有効日の間隔を管理します。このスマートルールは、[対象アイテム] テーブルの拠点別アイテムに対する有効日にも適用されます。	可 不可 警告 (デフォルト)
有効期間の重複	対象アイテム中の既存の部品の有効日とそれに代わる部品の破棄日の重複を管理します。このスマートルールは、[対象アイテム] テーブルの拠点別アイテムに対する有効日にも適用されます。	可 不可 警告 (デフォルト)
完了したアクティビティに対するアクティビティとゲートの追加を有効化	PPM アクティビティまたはゲートから完了した (リリース済み) アクティビティに新規データを追加する機能を管理します。	可 不可 (デフォルト)

スマートルール名	説明	可能な設定
部品分類と部品ファミリを 同一にする	<p>このルールは、PCM と PG&amp;C ソリューションの両方を持つユーザーにのみ適用されます。そうでない場合は、このセクションは無視してください。</p> <p>このルールは、従来の [部品ファミリ] オブジェクト (PG&amp;C ソリューション) と新しい [部品分類] オブジェクト (PCM ソリューション) について、システムがこれを同じソリューションにより共有される [部品分類] オブジェクトとして扱うかどうかを管理します。デフォルトは「はい」です。</p> <p>[部品ファミリ] と [部品分類] を別々に扱う場合は、このルールを「いいえ」に設定します。ただし、このルールを有効にするには、[部品分類] クラスを設定する必要があります。詳細は、420 ページの「<a href="#">部品グループ: 部品ファミリを設定する</a>」を参照してください。</p>	はい (デフォルト) いいえ
初回リリース アイテム	アイテムの BOM に未リリース アイテムが含まれる場合に、アイテムをリリースできるかどうかを管理します。このスマートルールは、複数の拠点に関係があります。「親」アイテムがリリースされた場合、このルールは拠点の関連付けに対する BOM コンポーネントを確認し、BOM コンポーネントがその特定の拠点に対してもリリースされたかどうかを確認します。	可 不可 警告 (デフォルト)
PSR に対する多数の アイテム	PSR (問題レポートまたは不具合レポート) とアイテム (部品またはドキュメント オブジェクト) との関連付けを許可または制限します。	可 不可 (デフォルト) 警告
PSR に対する多数の QCR	PSR (問題レポートまたは不具合レポート) と QCR (是正・予防措置または検証) との関連付けを許可または制限します。	可 不可 (デフォルト) 警告
製造元部品に複数アイテム	<p>1 つの製造元部品が複数の親アイテムを持つことができるかどうかを管理します。</p> <p>[不可] または [警告] (デフォルト) に設定すると、設計変更のワークフローがリリース検証を実行したときにアイテムがチェックされます。この機能は拡張されています。詳細は、134 ページの「<a href="#">リリースの検証、またはリリースの条件に対する現在のステータスの検証</a>」を参照してください。</p>	可 不可 警告 (デフォルト)
材料価格計算フィールドの 負の値	[材料価格計算] 属性への「負の値」の入力を制御します。	可 不可 (デフォルト) 警告
材料価格フィールドの 負の値	[材料価格] フィールドへの「負の値」の入力を制御します。	可 不可 (デフォルト) 警告
その他価格フィールドの 負の値	[その他費用] フィールドへの「負の値」の入力を制御します。	可 不可 (デフォルト) 警告



スマートルール名	説明	可能な設定
提案されたプログラムに関してリソース プール所有者に通知	リソース プール所有者への [提案済み] ステータスのプログラムに関する通知の送信を制御します。	可 (デフォルト) 不可
価格ライン有効期間の重複	価格オブジェクトと PCO に関する価格ラインの有効期間の重複を制御します。	可 不可 (デフォルト) 警告
アイテムと関連 PSR を含む PSR	<p>PSR を対象アイテムと関連 PSR の両方に関連付けることができるか (可)、または対象アイテムか関連 PSR のどちらかとのみ関連付けることができるか (不可) を管理します。</p> <p><b>注意:</b></p> <p>1. [対象アイテム] タブのアイテムと [関連 PSR] タブのアイテムの間にはビジネス ロジックはありません (つまり、[関連 PSR] に表示されたアイテムは、親 PSR の [対象アイテム] にコピーされません)。</p> <p>2. PSR と QCR の間にはビジネス ロジックがあります。このため、PSR が QCR に関連付けられている場合、PSR の [対象アイテム] タブとその [関連 PSR] タブの両方からのアイテムは、自動的に QCR の [対象アイテム] タブに作成されます。</p>	可 不可 (デフォルト) 警告
設計変更の製造元をレッドラインする	ユーザーが ECO から [製造元] タブをレッドラインできるかどうかを管理します。設定が「不可」の場合、[レッドライン製造元] テーブルのすべてのボタンが無効になります。可能な設定は「可」 (デフォルト) または「不可」です。	可 (デフォルト) 不可
未解決アイテムとともに QCR をリリースする	<p>[対象アイテム] タブのすべてのアイテムが [変更] と関連付けられていない場合でも、QCR を手動でリリースできるかどうか、または自動昇格を使用するかどうかを制御します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ [表示しない] に設定した場合、スマートルールはすべての対象アイテムが関連付けられた [変更] を持たない場合でも、QCR のリリースを許可します。このような QCR は、警告なしでもリリース検証を実行します。</li> <li>□ [警告] に設定した場合、スマートルールはすべての対象アイテムが関連付けられた [変更] を持たない場合でも、QCR がリリースされたことをユーザーに警告します。</li> </ul>	表示しない (デフォルト) 警告
リリース済みリビジョンが必要	ルーティング可能なオブジェクトがリリース済みアセンブリの BOM に含まれる対象アイテムを持った場合に、そのオブジェクトを未リリースにできるかどうかを管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)
ECO を未リリースにする	設計変更を未リリースにできるかどうかを管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)
ECR を未リリースにする	設計変更依頼を未リリースにできるかどうかを管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)

スマートルール名	説明	可能な設定
期限付き設計変更を未リリースにする	期限付き設計変更を未リリースにできるかどうかを管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)
製造元変更を未リリースにする	製造元変更を未リリースにできるかどうかを管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)
出荷停止を未リリースにする	出荷停止を未リリースにできるかどうかを管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)
ワークフロー条件基準属性の変更	<p>ユーザーは、属性の値をワークフローの検索条件と一致しない値に変更する場合があります。このスマートルールでは、システムにより属性の変更が受け入れられるかどうかが決まります。</p> <p><b>注意:</b> このスマートルールが [警告] または [不可] に設定されている場合、ワークフローの検索条件に指定されているルーティング可能なオブジェクトの属性を変更しようとするたびに、警告メッセージが表示されるか、変更ができなくなります。ただし、ワークフローの検索条件にアイテムの属性を指定する再利用の条件が含まれる場合、ユーザーはそのアイテムの属性の値を再利用の条件と一致しない値に変更することができます。この場合、警告は表示されません。そのアイテムの属性が変更された後に、ユーザーがルーティング可能なオブジェクトを変更した場合は、ルーティング可能なオブジェクトがワークフローの検索条件に一致しないという警告メッセージが表示されます。</p>	<p>可 不可 (デフォルト) 警告</p> <p><b>注意:</b> いずれを選択した場合も、ワークフローは変更されません。</p>
材料価格フィールドのゼロの値	[材料価格] フィールドへの「ゼロ」値の入力を管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)
材料価格計算フィールドのゼロの値	[材料価格計算] フィールドへの「ゼロ」値の入力を管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)
その他価格フィールドのゼロの値	[その他費用] フィールドへの「ゼロ」値の入力を管理します。	可 不可 警告 (デフォルト)

## Viewer とファイル

[システム設定] の [Viewer とファイル] をダブルクリックし、[Viewer とファイル] ウィンドウを開くことができます。Agile PLM オブジェクトに添付されるファイルの表示プリファレンスを設定できます。次の表では、[Viewer とファイル] ウィンドウの [一般情報] タブのプロパティを示し、いくつかのプロパティについて詳細を説明しています。

プロパティ	説明	デフォルト
自動ページ有効	添付ファイルの古いバージョンが Agile ファイル マネージャから削除されるかどうかを決定します。	いいえ
ファイル バージョンの保持	このプロパティでは、記録する目的で保持するバージョンの数を指定します。このプロパティを使用するには、[自動ページ有効] プロパティを [はい] に設定します。これらのバージョンにレッドライン付きのバージョンが含まれるかどうかは [自動ページ有効] と [レッドライン ファイルのバージョン] の設定によって異なります。以下の説明を参照してください。	3
アクセスされていない履歴レポートをバージョンする (日数)	自動ページされる前に、履歴レポートに対するアクセスがなかった日数。	30
レッドライン ファイルのバージョン	[自動ページ有効] プロパティの設定に応じて、レッドライン付きのファイルを削除するかどうかを指定します。これは [ファイル バージョンの保持] プリファレンスより優先されます。	いいえ
サポートされるファイル タイプ	ユーザーが [表示] ボタンをクリックするか、ファイル名の下のリンクをクリックしたときに、Agile Viewer がファイルを開くための添付ファイル名の拡張子です。	下表を参照してください。
構造化ファイル タイプ	会社で使用しているモデリング (CAD) ファイル タイプを入力します。ファイルの拡張子は、[サポートされるファイル タイプ] と同様に入力することができます。 <a href="#">236 ページの「構造化ファイル タイプと CAD リビジョン BOM 属性」</a> を参照してください。	—
CAD リビジョン BOM 属性	管理者はこのフィールドを使用して、[ドキュメント] クラスのテキスト フィールドを有効にできます。これによって、リビジョン文字 (A、B など) を CAD モデリング BOM (構造化 BOM) に割り当てることができます。このフィールドを設定するプロセスについては、 <a href="#">236 ページの「構造化ファイル タイプと CAD リビジョン BOM 属性」</a> を参照してください。	—

## ファイルのバージョンと保持のオプション

次の設定によって、Agile PLM システムおよびユーザーのローカル コンピュータにおいて、ファイルがバージョンまたは保持される状況が決まります。バージョンと保持は、チェックアウトとチェックインのルーチンにおいてのみ実行されます。

### 自動ページ有効

添付ファイルの古いバージョンは、新しいバージョンがチェックインされたときに Agile File Manager から自動的に削除されます。これはチェックアウトまたはチェックインのルーチン後に行われます。[自動ページ有効] が「はい」に設定されている場合、古いバージョンは削除されます。保持するファイルのバージョン数を指定するには、[ファイル バージョンの保持] フィールドを使用します。後述の [234 ページの「ファイル バージョンの保持」](#)、および [234 ページの「レッドライン ファイルのバージョン」](#)を参照してください。

[自動ページ有効] が「いいえ」に設定されている場合、添付ファイルの古いバージョンは Agile PLM システムに保持されます。

**注意** 自動ページを取り消す操作はありません。自動ページはアーカイブ機能ではありません。

**自動ページを有効または無効にするには:**

1. [システム設定] で [Viewer とファイル] をダブルクリックします。[Viewer とファイル] ウィンドウが表示されます。
2. [自動ページ有効] ドロップダウン リストから [いいえ](無効) または [はい](有効) を選択します。
3. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

**ファイル バージョンの保持**

このプロパティでを使用し、保持するファイルの古いバージョンの数を指定します。たとえば、値を「3」に設定すると、ファイルの最も新しいバージョンが 3 つアーカイブされます。(最新バージョンも保持されます)。このプロパティは [自動ページ有効] を [はい] に設定して使用します。[自動ページ有効] が [いいえ] に設定されている場合は、すべてのバージョンが保持されます。233 ページの「[自動ページ有効](#)」、および 234 ページの「[レッドライン ファイルのページ](#)」を参照してください。

**保持する添付ファイルのバージョン数を指定するには**

1. [システム設定] で [Viewer とファイル] をダブルクリックします。[Viewer とファイル] ウィンドウが表示されます。
2. [ファイル バージョンの保持] フィールドに数字を入力します。数字は、現在のバージョンに加え、いくつかの添付ファイルバージョンを保持するかを示します。
3. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

**レッドライン ファイルのページ**

[レッドライン ファイルのページ] フィールドは、[自動ページ有効] の設定に従って、レッドライン ファイルをレッドラインのないファイルとともに自動的に削除するかどうかを指定します。

[自動ページ有効] が [はい] に、[レッドライン ファイルのページ] が [はい] に設定されていると、[ファイル バージョンの保持] に指定された値分のバージョン数は保持されます。それ以前のレッドライン ファイルはすべてページされます。[自動ページ有効] が [はい] に、[レッドライン ファイルのページ] が [はい] に設定されていると、[ファイル バージョンの保持] に指定された値分のバージョン数 (レッドラインされたものと、そうでないもの) は保持されます。それ以前のレッドライン ファイルもすべて保持されます。

前述の 233 ページの「[自動ページ有効](#)」、および 234 ページの「[レッドライン ファイルのページ](#)」を参照してください。

**[レッドライン ファイルのページ] プロパティを設定するには:**

1. [システム設定] で [Viewer とファイル] をダブルクリックします。[Viewer とファイル] ウィンドウが表示されます。
2. [レッドラインファイルのページ] ドロップダウン リストから [いいえ](無効) または [はい](有効) を選択します。
3. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

**Agile Viewer の [サポートされるファイル タイプ] を指定する**

[サポートされるファイル タイプ] リスト ([一般情報] タブ内) で、ユーザーが Agile Viewer で表示できるファイル タイプをリストすることができます。[サポートされるファイル タイプ] では、ファイルを Agile Viewer で表示するかどうかを指定できます。

**注意** 添付ファイルを表示するには、ユーザーに [ファイル表示] 権限が割り当てられている必要があります。

下表の「2D」 ファイル形式は、Agile PLM での使用に関してテストおよび検証済みです。これらの形式は、管理者の [サポートされるファイル タイプ] に自動的に表示されます。現在ご使用のお客様には、アップグレード後に追加のファイル タイプが表示されます。

ファイル拡張子	ファイル タイプ
BMP	Microsoft ビットマップ
CAL	CALS Group IV
CGM	コンピュータ グラフィックス メタファイル
DGN	Intergraph
DOC	Microsoft Word
DWG	AutoCAD Drawing File v 14, 2000
DXF	AutoCAD Drawing Exchange Format
GIF	Graphic Interchange Format
GP4	2D で表示可能な中立形式
JPG、JPEG	Joint Photographic Experts Group
PCX	Microsoft Paintbrush
PDF	Adobe Portable Document Format
PLT	HPGL & HPGL 2
PPT	Microsoft PowerPoint
PS	Adobe Postscript
SLDDRW	SolidWorks 2D
TIF、TIFF	Tagged Image File Format
TXT	テキスト
XLS	Microsoft Excel
ZIP	Zip

Agile Viewer は、Cimmetry Systems 社で開発された AutoVue Viewer に基づいています。Agile Viewer でサポートされているファイル形式の最新一覧については、Cimmetry Systems の Web サイトを参照してください:

<http://www.cimmetry.com/formats.html>

ファイルタイプは拡張子別に記載されています。ユーザーがリスト中のファイル拡張子を持つ添付ファイルを選択すると、[表示] ボタンが有効になります。複数のファイルを持つ添付ファイルに、サポートされているファイルがある場合も同様です。

**注意** 中国語、ヘブライ語、スウェーデン語のオペレーティング システム上で動作する Agile PLM の管理者は、すべてのファイル タイプ拡張子を [サポートされるファイル タイプ] プロパティから削除することをお勧めします。これらのオペレーティング システムでは Agile Viewer はサポートされません。英語以外のオペレーティング システムで Agile PLM を使用する場合は、Agile サポート Web サイトを参照してください。

### [サポートされるファイル タイプ] リストにファイルを追加または削除するには:

1. [システム設定] で [Viewer とファイル] をダブルクリックします。[Viewer とファイル] ウィンドウが表示されます。
2. [サポートされるファイル タイプ] リストからファイル タイプを削除するには、ラインを選択し、[削除] キーを押して削除してください。
3. [サポートされるファイル タイプ] リストにファイル タイプを追加するには、新しいラインに名前を入力してください。また、[Ctrl]+[C] と [Ctrl]+[V] を使用して、他のファイル タイプ フィールド、または別のアプリケーションから、リストをコピーして貼り付けることもできます。
4. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

## 構造化ファイル タイプと CAD リビジョン BOM 属性

リリース 9.2.2.2 では、モデリング (CAD) ファイル タイプを容易に使用するために、[サポートされるファイル タイプ] プロパティに加えて 2 つのプロパティが追加されています。

構造化ファイル タイプを使用すると、構造化された方法で表示されるようにファイル タイプ拡張子を入力できます。このプロパティに表示された添付ファイルをクリックすると、システムでは、ドキュメント BOM (または "DocuBOM") に移動して、完全なモデル (CAD アセンブリなど) の表示に必要な他のファイルが検索されます。

指定したファイル拡張子は、[サポートされるファイル タイプ] リストまたは [構造化ファイル タイプ] リストのいずれかに表示され、両方には表示されません。

**注意** Viewer に抽出されるファイルは、ドキュメントの [添付ファイル] タブの [添付ファイル タイプ] 属性によって決まります。最初に選択された添付ファイルに対してこの属性の値 (SOURCE など) が設定されている場合は、[添付ファイル タイプ] 属性がこの値と一致するファイルのみが抽出されます。[添付ファイル タイプ] 属性に値が設定されていない場合は、構造階層内のすべてのファイルが抽出されます。

[構造化ファイル タイプ] プロパティを容易に使用するために、[CAD リビジョン BOM 属性] の値を指定することもできます。値を入力した場合、この値は、「保存」リビジョンを保持するために Agile の EC CAD コネクターの一部として設定される属性を識別します。

### [CAD リビジョン BOM 属性] を設定するには:

1. [Viewer とファイル] をダブルクリックします。
2. [CAD リビジョン BOM 属性] ドロップダウン リストから、CAD リビジョンを保持するために EC インストールの一部としてすでに設定した BOM 属性を選択します。[OK] をクリックして [保存] します。

Agile EC CAD コネクターを使用しない場合でも、[CAD リビジョン BOM 属性] を使用して Viewer の固定の BOM 解決を指定する場合は、「CAD リビジョン」に対して指定した BOM 属性内のオブジェクトごとに [リビジョン] フィールドの現在の値を手動で保存する必要があります。

**注意** [CAD リビジョン BOM 属性] フィールドを空白のままにすると、標準の Agile BOM 解決が使用され、構造内を移動してファイルを検索する方法が決定します。標準の解決は「浮動」とみなされ、親オブジェクトがリリースされた後でも、子オブジェクトのリビジョンをさらに作成することができます。

## バナーとウォーターマークを印刷する

[Viewer とファイル] ウィンドウには、[ウォーターマーク] タブと [バナー] タブが含まれています。これらのタブの設定により、Agile PLM ビジネス オブジェクトに添付されたファイルのプリントアウトにバナーと

ウォーターマークを表示するかどうか、またこれらのバナーとウォーターマークの内容を指定できます。バナーとウォーターマークは **Agile Viewer** を使用して印刷したファイルに表示されます。

印刷に何も表示しない場合、[バナー] と [バナー テキスト] の組み合わせ (および [属性ウォーターマーク] と [属性ウォーターマーク テキスト]) を両方とも空白にします。適切なテキスト フィールドでテキストを削除します。たとえば、[左上のバナー] を空白にした場合、不要な「印刷者」が表示されます。これは、[左上バナー テキスト] から削除されなかったためです。

以下の表に、ウォーターマークのプロパティを示します。これらは [ウォーターマーク] タブで設定できます。

プロパティ	説明	デフォルトのテキストまたは設定
属性ウォーターマーク	属性ウォーターマーク テキストの後ろに、この属性の値がテキストとしてウォーターマークに表示されます。	[ドロップ ダウン リストから選択します。この値は、\$ATTRIBUTENAME: となります。]
属性ウォーターマーク テキスト	このプロパティのテキストは、属性ウォーターマークの値のテキストの前に表示されます。	[なし:適切であれば、コロンも含めてテキストを入力します。]
バック リビジョン ウォーターマーク テキスト	アイテム オブジェクトが最新リビジョンでない場合に表示されるウォーターマーク テキストです。このプロパティは、部品とドキュメントのバナーとウォーターマークの属性でのみ使用できます。	バック リビジョン
名前	選択できる Agile PLM ビジネス クラスをすべて表示します。	[各ビジネス クラスについて 1 つ]
保留中のリビジョンのウォーターマーク テキスト	アイテム オブジェクトが保留中のリビジョンの場合に表示されるウォーターマーク テキストです。このプロパティは、部品とドキュメントのバナーとウォーターマークの属性でのみ使用できます。	保留中のリビジョン
ウォーターマーク印刷	ウォーターマークの印刷をオン ([はい]) またはオフ ([いいえ]) にします。	いいえ

以下の表に、バナー プロパティを示します。これらは [バナー] タブで設定できます。

プロパティ	説明	デフォルトのテキストまたは設定
名前	選択できる Agile PLM ビジネス クラスをすべて表示します。	[各ビジネス クラスについて 1 つ]
左下バナー	プリントアウトの下部、左側、左下バナーテキストの後ろにバナーが表示されます。	[オブジェクト番号]
左下バナー テキスト	左下バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	\$ATTRIBUTENAME:

プロパティ	説明	デフォルトのテキスト または設定
下部中央バナー	プリントアウトの下部、中央、下部中央バナー テキストの後ろにバナーが表示されます。	アイテム: 最新のリリース 済みリビジョンのリビジョン [文字]  他のクラスについては空白
下部中央バナー テキスト	下部中央バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	アイテム: 「リビジョン」  他のクラスについては空白
右下バナー	プリントアウトの下部、右側、右下バナー テキストの後ろにバナーが表示されます。	[ワークフロー クラスのステータス、ワークフローでないクラスのライフサイクル フェーズ]
右下バナー テキスト	右下バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	「ステータス:」 [または] 「ライフサイクル フェーズ:」
左上バナー	プリントアウトの上部、左側、左上バナー テキストの後ろにバナーが表示されます。	[印刷ユーザー]
左上バナー テキスト	左上バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	「印刷者:」
上部中央バナー	プリントアウトの上部、中央、上部中央バナー テキストの後ろにバナーが表示されます。	—
上部中央バナー テキスト	上部中央バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	—
右上バナー	プリントアウトの上部、右側、右上バナー テキストの後ろにバナーが表示されます。	[印刷日]
右上バナー テキスト	右上バナーの値であるテキストの前に表示されるテキストです。	「印刷時間:」

ウォーターマークとバナーの設定について、以下の点に注意してください。

- [ウォーターマーク印刷] 以外のすべてのプロパティは、独自のテキストで入力できます。
- 添付ファイルには、バナーまたはウォーターマークのプロパティに使用できる設定は 1 つのみです。
- 複数のバナーを作成することはできません。
- 利用可能な「\$ATTRIBUTENAME:」 [属性ウォーターマーク] プロパティまたは [バナー] プロパティで選択した属性の名前を挿入します。
- [バナー テキスト] プロパティと [属性ウォーターマーク テキスト] プロパティの中では、変数「\$ATTRIBUTENAME:」の後ろではなく前に独自のテキストを入力できます。

## バナーとウォーターマークのプロパティ

印刷するバナーやウォーターマークに表示するテキストを指定する値を設定する場合、変数と属性 (Agile PLM クライアントで表示されるフィールド) のドロップダウン リストから選択します。次の表に、選択肢をリストで示し、説明します。



プロパティのドロップダウン リストの変数	デフォルトの印刷値と制限
有効日 - 破棄日	開始日:[有効日] から:[破棄日] アイテムにのみ使用できます。[有効日] と [破棄日] は、アイテム のリビジョンを作成した変更の [対象アイテム] タブの値です。
ページ番号	ページ [ページ番号] 画像の特定の範囲を印刷する場合、その範囲も指定します。
ページ番号とページ数	ページ [ページ番号]/[合計ページ数] 画像の特定の範囲を印刷する場合、その範囲も指定します。
印刷日	[印刷日]
印刷ユーザー	[ユーザー]
最新のリリース済みリビジョン	[最新のリリース済みリビジョンのリビジョン文字] アイテムにのみ使用できます。
ウォーターマーク テキスト	[ウォーターマーク属性] プロパティ (有効/無効にかかわらず) で 指定した値です。 バナーの変数としてのみ使用できます。
属性	[属性名].[属性値] 選択肢: 添付ファイル.[値]、変更履歴.[値]、ユーザー定義 1.[値]、 タイトル ブロック.[値]、カバー ページ.[値]、一般情報.[値]

#### ウォーターマークを印刷し、ウォーターマーク テキストを指定するには

1. [システム設定] で [Viewer とファイル] をダブルクリックします。[Viewer とファイル] ウィンドウが表示されます。
2. [ウォーターマーク] タブをクリックして前面に表示します。
3. 希望のウォーターマークをダブルクリックし、クラスのプロパティ設定を更新します。
4. [ウォーターマーク印刷] のドロップダウン リストで [はい] を選択して、ウォーターマーク印刷を有効にします。
5. ウォーターマーク テキストを選択するには、[ウォーターマーク属性] ドロップダウン リストで、属性を選択します。この属性の値は、[ウォーターマーク印刷] が [はい] に設定されている場合、ウォーターマーク テキストとして表示されます。
6. バック リビジョンおよび保留中のリビジョンにカスタマイズしたテキストを指定するには、[バック リビジョン ウォーターマーク テキスト]、または [保留中のリビジョンのウォーターマーク テキスト] フィールドで、ウォーターマークに表示するテキストを入力するか、デフォルトのテキストを使用します。
7. [ウォーターマーク] タブの変更が完了したら、[保存] をクリックします。

#### バナー テキストと位置を指定する

##### Agile PLM オブジェクトの印刷に表示するバナーを指定するには:

1. [システム設定] で [Viewer とファイル] をダブルクリックします。[Viewer とファイル] ウィンドウが表示されます。
2. [バナー] タブをクリックして前面に表示します。

- 表示するバナーの位置 (下部の左、中央、右、または上部の左、中央、右) については、ドロップダウン リストから属性、または変数を選択します。この属性または変数の値がバナーに表示されます。
- デフォルトテキストを削除し、新しいテキストを入力する場合、[左下バナー テキスト] のようなバナーの該当するテキスト フィールドにカーソルを合わせ、削除するか、またはテキストを変更します。このテキストは [左下バナー テキスト] プロパティの値の前に表示されるため、テキストの最後にコロン (:) を付けます。
- テキスト プロパティを変更する場合、[左下バナー テキスト] のようなバナーの該当するテキスト フィールドでテキストを削除、または変更し、新しいテキスト、または変数を入力します。
- [バナー] タブの変更が完了したら、[保存] をクリックします。

## 通知

Agile PLM では、ユーザーがアクションを依頼された場合、または様々なアクションが実行されたことをユーザーに知らせる場合に、ユーザーに自動的に通知が送信されます。

通知が送信されるきっかけとなる特定のイベントを除き、通知の属性はすべて同じです。デフォルトでは、それぞれの通知に件名とメッセージの本文が含まれています。デフォルトのテキストを使用するか、必要なメッセージを入力してください。

通知は、有効に設定されている場合のみ送信されます ([有効] プロパティ = 「はい」)。通知の [タイプ] プロパティ設定に応じて、通知はユーザーの受信トレイに表示されるか、電子メールで送信されるか、またはその両方となります。[有効] と [タイプ] プロパティは、必要に応じて各通知で設定することができます。

ユーザーは Java クライアントまたは Web クライアントで通知を受信することができます。ユーザー プリファレンスの [優先クライアント] ([ユーザー設定] > [ユーザー] > <[すべてのユーザー]> > [プリファレンス] タブ) は、ユーザーが通知を受信するクライアントを決定します。Agile の PPM、PCM、および PG&C ソリューションは Web クライアントでのみ操作するため、これらのソリューションで作業を行うユーザーに応じて、[優先クライアント] を設定することをお勧めします。

あるアクションにより、同じユーザーに複数の通知が送信される場合、ユーザーは 1 つの通知のみを受信します。たとえば、きっかけとなるアクションがルーティング可能オブジェクトのステータス昇格であり、ボブがその承認者である場合、そしてオブジェクトが昇格されたときにボブが [通知] リストに追加された場合、ボブは <ルーティング可能オブジェクトの> ステータス昇格、承認者の受信対象であり、そして <ルーティング可能オブジェクトの> ステータス昇格、オブザーバ、通知の受信者でもあります。ただし、ボブはこのアクションに関して 1 つの通知のみを受信します。

**重要** Agile PLM クライアントの電子メール通知を完全に設定するには、255 ページの「[Web クライアント通知を設定する](#)」、および 256 ページの「[Java クライアントの通知を設定する](#)」を参照してください。

## 通知を編集する

通知を編集するには:

- [システム設定] で [通知] をダブルクリックします。[通知] ウィンドウが表示されます。
- 通知クラスのいずれかをダブルクリックします。通知テンプレートの適切なリストが表示されます。
- 編集する通知の名前をダブルクリックします。タブ付きのウィンドウが表示されます。
- 属性を適切な方法で編集してください。ドロップダウン リストから選択し、テキストを入力します。下表を参照してください。

通知の属性	説明
名前	通知の名前、編集不可
有効	[はい] = 通知の送信が有効になります。送信のきっかけとなるイベントが発生すると、通知が送信されます。 [いいえ] = 通知は送信されません。
重要度	デフォルトは [通常] で、[高い] と [低い] が含まれています。
送信者	電子メールの [送信者] 欄に表示されるユーザーをリストから選択します。デフォルトは変数です。\$AGILE は常にドロップダウン リストにあります。\$ORIGINATOR と \$SENDER は通常、存在します。ルーティング可能オブジェクトでは、適切なルーティング管理者の変数が存在します (たとえば \$CHANGE ANALYST)。[開始] 属性で選択できるユーザーは 1 人だけです。
タイプ	ドロップ ダウン リストから、電子メール、電子メールと受信トレイ、または受信トレイを選択します。
件名 (およびデータ)	通知の件名を示す行を作成できます。 件名を作成する際にデータ タグを含めると、変更番号、作成者など通知のきっかけとなる特定のイベントに対する参照を含めることができます。 241 ページの「 <a href="#">件名と本文テキストを入力する</a> 」を参照してください。
本文 (およびデータ)	通知の本文テキストを作成できます。 本文テキストを作成する際にデータ タグを含めると、変更番号、作成者など通知のきっかけとなる特定のイベントに対する参照を含めることができます。 241 ページの「 <a href="#">件名と本文テキストを入力する</a> 」を参照してください。

- データ タグ (またはデータ変数) を [件名] または [本文] フィールドに挿入するには、[データ タグ追加] ボタンをクリックしてください。詳細は、241 ページの「[件名と本文テキストを入力する](#)」を参照してください。
- [保存] をクリックします。

## 件名と本文テキストを入力する

通知の編集時、件名および本文に表示するテキストを入力する際、通知の情報を参照するデータ タグを追加できます。

たとえば、[ECO ステータス昇格、承認者と変更分析者] 通知では、件名を次のように作成できます。

[カバー ページ.変更タイプ][カバー ページ.番号] は、[変更前のステータス] から  
[カバー ページ.ワークフロー] の [変更後のステータス] に移動します。

**[変更前のステータス] を件名に含めるには:**

- 件名のメッセージの適切な場所に、カーソルを置いてクリックします。
- [件名] フィールドの横にある [データ] フィールドで、[変更前のステータス] を選択します。

3. [データ タグ追加] をクリックします。データ タグ [変更前のステータス] が [件名] フィールドに表示されます。
4. 件名の行にテキストを入力しながら、複数のデータ タグを追加できます。

同様に、[本文] フィールドの横にある [データ] フィールドを使用すると、本文テキストにデータ タグを追加できます。

## 全文検索

[全文検索] ノードから、検索方法および添付ファイルのインデックス管理方法を指定します。この章のインデックス作成に関する情報は、インデックス ファイルにのみ適用されます。Web 検索用のデータベース情報のインデックス作成は、常に同期で行われます。

添付ファイルのコンテンツを検索すると、検索条件に一致するファイルを含むオブジェクトのリストが、検索結果に表示されます。リストに表示されるのは、添付ファイルの最新バージョンのみです。Agile PLM の検索設定と日付検索の詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』をご覧ください。

---

**注意** Agile の多言語機能では、[全文検索] は添付ファイルが日本語、繁体中国語、簡体中国語、ドイツ語、およびフランス語のローカライズ版の場合に対応可能です。

---

## 全文検索の制限

全文検索には次のような既知の制限があります。

- 全文検索は既存の役割と権限に従います。ユーザーが、検索結果で権限を持たないオブジェクトを見ることはありません。
- また、検索結果でフィールドレベルでの読み取り権限を持たないフィールドを見ることもありません。
- 全文検索は、以下の検索についてはサポートしていません。
  - 類義語
  - URL 添付ファイル
  - Viewer (Cimmetry) レッドライン データ
- 英語以外のテキストの場合、全文検索がサポートされているのは添付ファイルのみであり、派生語検索やコンセプト検索ではサポートされていません。
- 全文検索で検索する添付ファイルは、Microsoft Word (.DOC) または Excel (.XLS) で作成し保存している必要があります。.RTF または .TXT 形式で作成された英語以外のテキストの添付ファイルは検索されません (ただし、エンコード方式が Unicode の .TXT ファイルは検索できる場合もあります)。
- Agile ファイル マネージャのファイル格納庫のファイルは全文検索が利用可能です。ファイルは管理者の設定に基づいてインデックス作成されます。
- オブジェクトに複数のファイルがある場合 (つまり、オブジェクトに複数のドキュメントが添付されている場合)、検索テキストを含むファイルが 1 つのみでも、そのオブジェクト全体が表示されます。どのファイルに検索テキストが含まれているかは示されないため、目的の添付ファイルを探すためにすべての添付ファイルを確認が必要になる場合もあります。

## 全文検索プロパティ

[全文検索] ノードをダブルクリックすると、[一般情報] タブと [履歴] タブのある [全文検索] ウィンドウが表示されます。次のセクションで、添付ファイルのインデックス作成の設定に関するその他の情報を掲載しています。

プロパティ	編集可	デフォルト	メモ
派生語検索	はい	無効	単語の変化形を検索します。"run" という単語から、ran、runs、running などを検索できます。
コンセプト検索	はい	無効	同じ一般コンセプトに適合する単語を検索します。"sports" から running、track、basketball などを検索することができます。  <b>重要:</b> コンセプト検索は Microsoft SQL Server ではサポートされていません。
インデックス	はい	同期	ファイルの単語が、いつ全文検索で利用可能になるかを示します。  手動 - ユーザーが [添付ファイル インデックス] ボタンをクリックしたときのみ、ファイルをインデックスします。  スケジュール済み - 指定されたスケジュールに従い、ファイルをインデックスします (下表参照)。  同期 - ファイルが追加されたと同時にファイルをインデックスします。  244 ページの「 <a href="#">添付ファイルのインデックス</a> 」を参照してください。
インデックス ファイル タイプ	はい	doc, ppt, pdf, txt, html, rtf, xml, xls	指定されたファイルの選択性インデックスを可能にします。カンマでファイル タイプを区切ります。大文字と小文字は区別されません。デフォルト値は一般的なファイル タイプを幅広くカバーします。特定の検索のために、フィールドを 1 つか 2 つのファイル タイプのみ含むよう絞り込んだ場合は、検索が終了した後、任意のファイル タイプでフィールドを再作成してください。
前回インデックス作成日	いいえ	該当なし	システムの最終インデックス作成日。
次回インデックス作成予定日	いいえ	次に予定されたインデックスが起動している場合は、システム生成	次に予定されたインデックスの生成時間。インデックスが「スケジュール済み」の場合のみ。
周期	はい	該当なし	インデックスを実行する頻度を示します。インデックスが「スケジュール済み」の場合、有効となります。

次の追加属性は、[周期] フィールドをクリックした際に表示されます。

プロパティ	編集可	デフォルト	メモ
[1 日に 1 度] または [時間単位 X 時間 Y 分]	はい	いいえ	インデックスを実行する頻度を指定します。
開始	はい	0:00:00 am	スケジュールの開始時刻を示します。
終了	はい	0:00:00 am	スケジュールの終了時刻を示します。このオプションは、周期が 1 日に 1 度の場合は無効になります。
日数	はい	月 - 金	スケジュールが有効になる曜日。


## 添付ファイルのインデックス

添付ファイルのインデックスについてシステムを設定する際の「ベスト プラクティス」推奨があります。

### FileLoad の使用と新規ファイルのインデックス

[インデックス] のプロパティが [同期] に設定されており、Agile FileLoad を使用して多数のファイルがファイル管理のファイル格納庫に追加された場合、インデックス プロセスにはしばらく時間がかかります。このフィールドを「手動」に設定すると、多数のファイルの読み込み速度が増加することが判明しています。または、追加するファイルが大きなドキュメントなどの場合、[インデックス] プロパティを「スケジュール済み」に設定し、インデックス スケジュールを 3~4 時間に 1 度になるよう設定します。ほとんどの新しいファイルが比較的小さい場合、[インデックス] プロパティを [同期] に設定することができます。

### [添付ファイル インデックス] ボタン

ツールバーの [添付ファイル インデックス] ボタン  ([管理]>[システム設定]>[全文検索]) を使用して、まだインデックスされていない新しい添付ファイルを手動でインデックスします。[添付ファイル インデックス] ボタンは、インデックスが「手動」に設定されている場合のみ有効です。

### 「停止」単語

添付ファイルを検索する際に、システムにより無視される、「停止」単語と呼ばれる短い共通の単語があります。"the mouse" を検索すると、"mouse" との一致だけが検索されます。多くの検索を実行するとき以外は、この単語を知る必要はありません。単語の一覧は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』の「検索」の章の「簡易検索を使用して添付ファイルのコンテンツを検索する」に記載されています。

## 私の割り当て

このノードでは、ユーザーが Web クライアントのホームページで [私の割り当て] タブをクリックしたときに表示される内容を設定します(ユーザーの [推奨受信トレイ ビュー] ユーザー プリファレンスが [私の割り当て] に設定されている場合は、そのユーザーが Web クライアントを開くと表示されます)。カラムの順序の設定、およびカラム名の変更を行うことができます。デフォルトのカラムは、[名前]、[ステータス]、[締切日]、[完了率 (%)]、[関連]、[実際の時間]、および [フラグ] です。

**カラムの順序を変更するには:**

1. [システム設定] で [私の割り当て] をダブルクリックします。[[私の割り当て] テーブルの設定] が開きます。
2. [カラムの並び替え] アイコンをクリックします。[順序] ダイアログ ボックスが開きます。
3. カラム名を選択し、[上方] または [下方] ボタンを使用してそのカラム名をリスト内で移動します(リストの「上から下」は、ユーザー インターフェースの「左から右」と同等です)。
4. 完了したら、[OK] をクリックします。ダイアログ ボックスが閉じ、新しい順序を反映した番号が [順序] カラムに表示されます。変更した順序でカラムを表示するには、Web クライアントを開くか、再起動する必要があります。

**カラムの名前を変更するには:**

1. [システム設定] で [私の割り当て] をダブルクリックします。[[私の割り当て] テーブルの設定] が開きます。
2. 変更するカラム名のフィールドをクリックします。フィールドが編集可能になります。
3. 新しい名前を入力します。この手順で、他のカラム名も変更することができます。
4. 入力完了したら、[保存] をクリックします。新しいカラム名を表示するには、Web クライアントを開くか、再起動する必要があります。

**新しいカラムを作成するには:**

1. [システム設定] で [私の割り当て] をダブルクリックします。[[私の割り当て] テーブルの設定] が開きます。
2. [新規作成] アイコンをクリックします。新しい行 (Web クライアントのユーザー インターフェースではカラムを表す) が作成されます。
3. [カラム名] フィールドに名前を入力します。
4. [カラム データ ソース] フィールドのドロップダウン ダイアログ ボックスを使用して、カラムのデータソースを選択します。クラス ([アクティビティ] または [ゲート]) を選択し、[下方] ボタン (次を検索) または [上方] ボタン (前を検索) を使用して検索値を入力します。データ ソースを選択して、[OK] をクリックします。
5. [カラムの並び替え] アイコンを使用して、新しいカラムと他のカラムの順序を調整します ([保存] ボタンがアクティブになります)。完了したら、[保存] をクリックして手順を完了します。新しいカラムを表示するには、Web クライアントを開くか、再起動する必要があります。

**カラムを削除するには:**

1. [システム設定] で [私の割り当て] をダブルクリックします。[[私の割り当て] テーブルの設定] が開きます。
2. 削除する行を選択します(行の [データ タイプ] または [順序] カラムをクリックするのが最も簡単な方法です)。
3. [カラムの削除] アイコンをクリックします。行が削除されます。デフォルトのカラムは削除できず、非表示にすることのみ可能です。
4. カラムの削除が完了したら、[保存] をクリックします。

## 単位 (UOM)

**注意** [システム設定] の [UOM] ノードが表示されない場合は、[管理者] 権限を変更して、[適用先] リストに UOM が含まれるようにします。

[UOM] ノードは、Agile PLM で別の単位を使用するよう指定することができます。単位は Product Governance & Compliance (PG&C) で重要です。ここでは、製品に含まれる制限された物質の重量と数量を計測する必要があります。

新しい計測を定義し、この測定で使用する単位を指定します。また、Agile PLM システムで定義された既存の計測に対しても単位を指定することができます。たとえば、[ドラム] 単位は重量の計測に追加することができます。体重測定では、16 ドラムは 1 オンスです。

各計測には標準単位があります。すべての単位値は、換算係数を使用して標準単位に標準化されます。新しい単位を定義した場合、標準単位に対して換算係数を指定しなければなりません。たとえば、重力測定の標準単位が [グラム] の場合、オンスへの換算係数は 31.1034 です。

## 計測カテゴリと単位を作成する

以下のタスクは、新しい計測カテゴリおよび新しい単位の作成方法を説明しています。

### 新しい計測カテゴリを作成するには:

1. [システム設定] で [UOM] をダブルクリックします。[計測] ウィンドウが開きます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。新しい計測カテゴリに対して、「重量」や「数量」などの計測カテゴリのように、[新規計測の作成] のダイアログ ボックスが表示されます。
3. 新しい計測カテゴリの [名前]、[説明]、[範囲一致要因] を入力します。  
検索している特定の単位に対して、[範囲一致要因] の検索結果の範囲を拡張します。その目的は、不正確な変換を標準単位へと調整することにあります。
4. [OK] をクリックします。

### 新しい単位を作成するには:

1. [システム設定] で [UOM] をダブルクリックします。[計測] ウィンドウが開きます。
2. 新しい UOM が属する計測カテゴリをダブルクリックします。[計測 |<名前>] ウィンドウが表示されます。
3. [UOM] タブをクリックします。
4. [新規作成] ボタンをクリックします。[新規単位の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
5. 下表に説明されているフィールドに値を入力してください。作業が完了したら、[OK] をクリックします。

[単位] 属性	説明
名前	単位の名称。
省略形	単位の標準略称。
換算係数	値を標準単位に変換する際に使用される係数。(「標準」の説明もご覧ください。)



[単位] 属性	説明
完全変換	指定された変換が完全である場合は [はい] を選択します。
標準	指定された単位が会社の標準である場合は [はい] を選択します。標準となることのできる単位は 1 つだけです。  新規計測カテゴリで作成した最初の UOM は標準でなければなりません。この換算係数は 1 となります。後続の単位値は、指定された換算係数に基づき、標準単位に標準化されます。
有効	単位が有効かどうかを示します。有効な単位のみが、Agile PLM クライアントのエンドユーザーに対して表示されます。

## 組織のプロファイル

[組織のプロファイル] ノードは、組織に関する情報の保存場所として、一箇所を提供します。

**組織のプロファイルを定義するには:**

1. [システム設定] で [組織のプロファイル] をダブルクリックします。[組織のプロファイル] ウィンドウが開きます。
2. 名前、住所、電話、FAX 番号、URL、会社通貨を入力します。
3. [保存] をクリックします。

## 通貨換算レート

[通貨換算レート] ノードは、システム内の通貨換算用の [通貨換算レート] テーブルを管理します。使用できる通貨のリストは、Agile PLM のインストール時に設定します。利用可能な通貨のリストの保持については、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。[通貨換算レート] ウィンドウのテーブルには、使用通貨および会社の基本通貨に対するその換算レートが表示されます。

**注意** 通貨換算レートは、2 箇所のコストに影響します。Product Portfolio Management アクティビティと、ソーシング プロジェクトの [分析] タブです。

通貨換算レートは、選択された企業通貨へ通貨を変換する際に使用されます。企業通貨の選択方法については、247 ページの「[組織のプロファイル](#)」を参照してください。

通貨換算は自動プロセスではありません。[分析] タブで、標準化された通貨レートと、サプライヤにより入力された本来の通貨値を切り替えることができます。Agile PLM のその他の場所では、通貨換算レートは適用されません。たとえば、アイテムの [ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] の通貨フィールドを持つよう、システムを設定することができます。通貨フィールドの通貨を変更した場合 (たとえば、USD から GBP など)、フィールド値は自動的に新しい通貨に再計算されません。

**通貨を追加するには:**

1. [システム設定] で [通貨換算レート] をダブルクリックします。[通貨換算レート] ウィンドウが開きます。
2. [新規作成] ボタンをクリックします。[通貨を追加] ダイアログ ボックスが表示されます。

3. [選択肢] リストから 1 つ以上の通貨を選択し、右矢印を使用して通貨を [選択済み] リストへ移動します。換算レートを入力するダイアログ ボックスが開きます。
4. すべての [換算レート] フィールドに適切な値を入力します。レートは小数点値 (たとえば 1.04 や 0.96) で入力します。
5. [OK] をクリックします。新しい通貨の換算レートがリストに表示されます。

#### 通貨の換算レートを変更するには:

1. [システム設定] で [通貨換算レート] をダブルクリックします。[通貨換算レート] ウィンドウが開きます。
2. 更新する通貨をダブルクリックします。[通貨] ウィンドウが表示されます。
3. [換算レート] フィールドで、少数値を入力します。
4. [OK] をクリックします。新しい通貨の換算レートがリストに表示されます。

---

**注意** 更新された通貨換算レートを Microsoft® Excel ファイルやその他のカンマ区切りファイルからインポートするには、[ツール]>[インポート] を選択します。詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』をご覧ください。

---

#### 通貨の履歴レートを表示するには:

1. [システム設定] で [通貨換算レート] をダブルクリックします。[通貨換算レート] ウィンドウが開きます。
2. 通貨をダブルクリックします。[通貨] ウィンドウが表示されます。
3. [履歴レート] タブをクリックします。[履歴レート] タブには、通貨の日付ごとの換算レートのリストが表示されます。履歴通貨レートは編集できません。
4. [閉じる] をクリックします。

## ダッシュボード管理

[ダッシュボード管理] ノードでは、Agile PLM ダッシュボードの情報表示および動作を設定できます。ダッシュボードは高度に設定可能で、プリファレンスに応じて主要なプロジェクト情報をユーザーに表示することができます。

管理者は、システム レベルのタブを必要な数だけダッシュボードに追加できます。各タブを表示するかどうかは、役割と権限を使用して管理できます。


ダッシュボード タブは、Agile オブジェクトのコンテンツを生成および表示するように設定できます。カスタム ダッシュボード拡張機能 (DX) を使用すると、外部システムのデータ (たとえば、ERP 在庫番号) を取り出してダッシュボードに表示することができます。ダッシュボード タブ内のテーブルは、詳細検索またはプロセス拡張によって取り出したデータを様々なグラフ形式で表示するように設定できます。また、ダッシュボード テーブルは、内部または外部の Web サイトを表示するように設定することもできます。

[ダッシュボード管理] 内で次の操作を実行できます。

- すべてのダッシュボード タブを表示および編集する
- オプションのダッシュボード タブを追加または削除する
- オプションのダッシュボード タブにテーブルを追加する


- テーブルに対して、次のようなデータの複数ソースを設定する
  - 詳細検索
  - ダッシュボード拡張機能 (チャートとテーブル)
  - URL プロセス拡張 (PX) からのカスタム コンテンツ
- ダッシュボード タブの表示を設定する

## ダッシュボード タブを表示する

ダッシュボード タブを表示するには、[システム設定]>[ダッシュボード管理] ノードをクリックします。デフォルトのダッシュボード タブのリストが表示されます。Web クライアントに表示されるタブの順序を変更するには、 アイコンを使用してこのリストの順序を変更します。タブにナビゲートするには、タブ名をクリックします。タブの名前と説明を変更したり、タブを表示するか非表示にするかを指定することができます。


オプションのタブは、名前を変更したり設定することができます。

## ダッシュボード タブを追加する

新しいタブを追加するには、[ダッシュボード管理] で  アイコンをクリックします。[ダッシュボード タブの作成] ダイアログ ボックスで、名前と説明を入力します。[表示] フィールドで [はい] を選択します。

**注意** 必要な数のタブを作成できますが、Web クライアントに表示されるタブはユーザーの役割と権限によって制限されます。ユーザーが特定のダッシュボード タブを表示できるようにするには、管理者がそのユーザーに [[ダッシュボード] タブ表示] 権限を割り当て、その権限の [適用先] プロパティで必要なタブを選択する必要があります。詳細は、192 ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。

## ダッシュボード タブを削除する

作成したダッシュボード タブのみ削除することができます。デフォルトのタブは削除できません。新規作成したダッシュボード タブを削除するには、[ダッシュボード管理] 内でタブを選択し、 をクリックします。

**注意** タブにアクセスした後は、そのタブを削除できません。削除しようとする、オブジェクトは使用中です。というエラーが表示されます。

## オプションのタブにテーブルを追加する


新しいオプションのタブを作成した場合は、そのタブにテーブルを挿入する必要があります。テーブルを追加するには、[ダッシュボード管理] で新しいタブ名をダブルクリックし、[テーブル] タブをクリックします。[ダッシュボード テーブルの作成] アイコンをクリックします。

次の表に、テーブル タイプに関する [ダッシュボード テーブルの作成] のプロパティを示します。

プロパティ	説明	可能な設定
名前	テーブルの名前を入力します。	
説明	テーブルの説明を入力します。	

プロパティ	説明	可能な設定
タイプ リストの表示	テーブルのタイプがリストされます。[テーブル] を選択します。	[チャート]、[テーブル]、[カスタム]、 [詳細検索]
ダッシュボード拡張機能 (DX)	テーブル タイプ リストに対して作成されたすべてのダッシュボード拡張機能がリストされます。	
表示	Web クライアントで有効にするかどうかを選択します。	[はい] または [いいえ]

## テーブルにデータを追加する

新しいテーブルをダブルクリックして [属性] タブをクリックし、[属性の追加]  アイコンをクリックして新しい属性を追加します。Agile で現在サポートされているのは、テーブル属性の [テキスト]、[数値]、[イメージ]、[日付]、[通貨]、および [リンク] タイプです。

**注意** 属性は、Agile でサポートされている特定のタイプであることが必要です。DX の作成時に、DX のデータは通貨、数値、テキストなどとしてすでに定義されています。

[一般情報] タブの [カラム] 属性で、[属性] フィールドは DX に定義された属性名にマップされている必要があります。たとえば、DX の属性名が「Mytext」で、属性タイプとして [テキスト] を選択した場合、[属性] フィールドは属性名「Mytext」にマップされている必要があります。

## オプションのタブにチャートを追加する

新規作成したオプションのタブにチャート タイプのテーブルを作成するには:

1. [ダッシュボード管理] で、新しいタブの名前をダブルクリックして開きます。
2. [テーブル] タブで、[新規ダッシュボード テーブル] アイコンをクリックします。
3. 次の表の説明に従って、テーブルのフィールドと属性を指定します。

プロパティ	説明	可能な設定
名前	テーブルの名前を入力します。	
説明	テーブルの説明を入力します。	(オプション)
タイプ リストの表示	テーブルのタイプがリストされます。[チャート] を選択します ([チャート] を選択すると、オプションがさらに表示されます)。	[チャート]、[テーブル]、[カスタム]、 [詳細検索]
ダッシュボード拡張機能	チャート タイプに対して作成されたすべてのダッシュボード拡張機能がリストされます。必要なダッシュボード拡張機能を選択します。	
表示	Web クライアントで表示を有効にするには [はい] を選択します。	[はい] または [いいえ]

プロパティ	説明	可能な設定
チャート タイプ	表示するチャートのタイプを選択します。	[面]、[棒]、[線]、[円]、[極]、[散布]、 [積み上げ面]、[積み上げ棒]、[テーブル]
X 軸	X 軸ラベルを入力します。	(オプション)
Y 軸	Y 軸ラベルを入力します。	(オプション)
表題の表示	チャートの表題を画面に表示するかどうかを指定します。	[はい] または [いいえ]
表題の位置	表題を表示する位置を指定します。	[一番下]、[デフォルト]、[左]、[右]、 [一番上]
3-D スタイル	表示を 3 次元にするかどうかを指定します。	[はい] または [いいえ]
ヘッダ	必要に応じてヘッダ メモを入力します。	(オプション)
フッタ	必要に応じてフッタ メモを入力します。	(オプション)

**注意** 積み上げタイプのチャートの場合、チャートの DX のコードは、必要な数の X 軸および Y 軸の値を使用して作成することができます。

**重要** [ダッシュボード拡張機能] フィールドにチャート タイプの DX がすべて表示されるのは、ユーザーが SDK ライセンスを持ち、DX がチャート タイプとして作成された場合のみです。チャート タイプのダッシュボード拡張機能を作成するために、ChartDataModel と ChartDataSet の 2 つのクラスがあります。これらのクラスは、チャートの DX の作成時に使用されている必要があります。チャートの DX は、`agile_home/integration/sdk/extensions` フォルダに保存され、[ダッシュボード拡張機能] フィールドにリンクされている必要があります。DX の作成方法の詳細は、『Agile SDK開発者ガイド』をご覧ください。

## オプションのタブに詳細検索を追加する

詳細検索をデータ ソースとして使用するダッシュボード テーブルを作成するには:

1. [ダッシュボード管理] で、新しいタブの名前をダブルクリックして開きます。
2. [テーブル] タブで、[新規ダッシュボード テーブル] アイコンをクリックします。
3. 次の表の説明に従って、テーブルのフィールドと属性を指定します。

プロパティ	説明	可能な設定
名前	テーブルの名前を入力します。	
説明	テーブルの説明を入力します。	(オプション)
タイプ リストの表示	[詳細検索] を選択します。	[チャート]、[テーブル]、[カスタム]、 [詳細検索]
ダッシュボード拡張機能		[無効] (詳細検索には適用されません)
表示	Web クライアントで表示を有効にするには [はい] を選択します。	[はい] または [いいえ]

**注意** [タイプ リストの表示] で [詳細検索] を選択すると、詳細検索タイプのテーブルのみに適用されるフィールドがダイアログ ボックスに自動的に表示されます。

## 詳細検索のテーブルを設定する

テーブルを作成した後に、新規作成したテーブルをダブルクリックし、[一般情報] タブで [ダッシュボード テーブルの設定] アイコンをクリックします。

新規の検索を作成するか、保存した検索を使用します。設定のダイアログ ボックスは、次の点を除いて、Agile の詳細検索機能と似ています。


- 出力フィールド
  - [出力フィールド] オプションを使用して、X 軸および Y 軸の値として利用可能なフィールドを選択できます。[出力フィールド] ボタンをクリックすると、[出力表示のカスタマイズ] ダイアログ ボックスが表示されます。[利用可能なフィールド] リストから必要なフィールドを選択し、左矢印と右矢印ボタンをクリックして、[利用可能なフィールド] リストと [選択したフィールド] リストとの間でフィールド名を移動します。
  - 表示のボタンを使用すると、[チャート] および [テーブル] タイプの表示オプションを選択できます。[チャート] オプションを選択すると、設定のダイアログ ボックスが表示されます。以下の処理を行うことができます。
- チャート タイプを選択する
- チャートの 3D スタイルを選択する
- 表題を表示または非表示にする
- チャートに表示する表題の位置を選択する
- ドロップダウン リスト ([出力表示のカスタマイズ] フィールドから表示される) から X 軸の値を選択する
- ヘッダ、フッタ、X 軸と Y 軸の値のラベルをチャートに付ける
- データ値に対して数学関数 (平均、カウント、最大、最小、合計など) を実行する

## オプション テーブルのカスタム (URL) プロセス拡張を追加する

ダッシュボードを統合ポイントとして使用して作成された URL プロセス拡張は [ダッシュボード拡張機能] フィールドに表示され、[タイプ リストの表示] のダッシュボード テーブルが作成されます。URL プロセス拡張の出力は、そのダッシュボード テーブルに表示されます。

詳細は、『Agile SDK 開発者ガイド』を参照してください。

## タブ内のテーブル行を再配置する

タブ内のテーブルを再配置するには、[ダッシュボード管理]>[オプションのタブ名]>[テーブル]>[ダッシュボードの設定] アイコン  を選択します。[設定タブ] ダイアログ ボックスが表示されます。このダイアログ ボックスで、[利用可能なコンテンツ] フィールドからすべてのテーブルを選択して、必要な行に配置できます。行は 3 行のみです。デフォルトでは、新しいタブは [行 3] に作成されます。表示する行の順序に従ってタブを再配置できます。

## オプションのタブを表示する

[システム設定]>[ダッシュボード管理] で新規作成されたオプションのタブをすべて正しく表示するには、[ユーザー設定]>[権限]>[[ダッシュボード] タブ表示] に移動し、Web クライアントのエンドユーザーに対して各タブを有効にします。

[新規] アイコンを選択し、新しい権限名と説明を入力します。[有効] を [はい] に設定します。作成したすべてのタブが [適用先]>[選択肢] フィールドに表示されます。ダッシュボードに表示するタブを選択し、右矢印アイコンを使用してタブを [選択済み] 領域に移動します。選択したすべてのタブは、ホームページとして設定することができます。





# 一般サーバ設定

扱うトピックは次のとおりです。

■ サーバの場所 .....	255
■ Agile PLM におけるファイル管理 .....	257
■ データベース .....	264
■ LDAP .....	266
■ プリファレンス .....	272
■ ライセンス .....	279
■ タスク モニタ .....	282
■ タスクの設定 .....	283

この章では、サーバ設定 (場所、データベース設定、プリファレンス、ライセンスなど) に関する情報を提供しています。

## サーバの場所

[場所] のウィンドウには、Agile PLM 設定のアプリケーションや様々なサーバの場所に関する情報が表示されます。

[場所] ウィンドウの [一般情報] タブでは、Web サーバ URL と Java クライアント URL を定義することができます。このタブで表示されるが、編集できないプロパティには、[アプリケーション サーバ URL]、[DB サーバ ホスト名]、[DB サーバ ユーザー名]、データベース サーバの非公式名称などがあります。これらのフィールドは、Agile PLM システムがインストールされたときに入力されます。

**注意** Web サーバ URL と Java クライアント URL のプロパティは、IT スタッフによる認証のもと、あなた、または管理者のみが変更することができます。

## Web クライアント通知を設定する

[優先クライアント] プロパティが Web クライアントとなっている Agile PLM ユーザーは、Web クライアントへのリンクを含む電子メール通知を自動的に受信します。Web クライアントの場所を [Web サーバ URL] の設定で指定することができます。

**重要** Agile の Product Cost Management と Product Portfolio Management ソリューションは、Web クライアントでのみ作動します。主にこれらのエリアで作業するユーザーは、[優先クライアント] を Web クライアントに設定してください。

**Web サーバ URL を変更し、Web クライアント通知を設定するには:**

1. [サーバ設定] で [場所] をダブルクリックします。[場所] ウィンドウが表示されます。
2. Web サーバ URL を次の形式で入力します。 <http://Web Server:<port>/Agile/PLMServlet>

---

**注意** Web サーバ URL の大文字と小文字は区別されます。ポートは通常、設定可能です。ここで表示されるポートは、業界標準か、またはデフォルトポートです。Web サーバが標準 HTTP ポート (80) を使用している場合、URL ではポートは不要です。

---

3. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

## Java クライアントの通知を設定する

[優先クライアント] プロパティが Java クライアントとなっている Agile PLM ユーザーは、Java クライアントへのリンクを含む電子メール通知を自動的に受信します。Java クライアントの場所を [Java クライアントの URL] の設定で指定することができます。

---

**注意** ユーザーはプロキシ サーバを通して Java クライアントにアクセスすることができませんが、Java クライアントの URL はメール通知のために Java クライアントが導入されているアプリケーションサーバ上にある必要があります。

---

### Java クライアント URL を変更し、Java クライアント通知を設定するには:

1. [サーバ設定] で [場所] をダブルクリックします。[場所] ウィンドウが表示されます。
2. アプリケーションサーバに適した Java クライアント URL を入力します。

Oracle Application Server。  
http://<appserver>:8888/JavaClient/start.jsp

WebLogic Application Server。  
http://<appserver>:7001/JavaClient/start.jsp

---

**注意** Java クライアント URL の大文字と小文字は区別されます。

---

3. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

## Agile ポータルの場所を指定する

Agile PLM システムに [ポートレット] サーバ ライセンスが含まれる場合 (Agile Portlet Services ソリューションに対応)、Web ベースのポータルを設定し、Agile PLM クライアントとして使用することができます。ポータルの場所を指定すると、異なるタイプのユーザー (たとえばエグゼクティブ、変更分析者、コンテンツ管理者、プログラム管理者など) に対して複数のポータルを設定することができます。

[優先クライアント] プロパティがポータル クライアントに設定されている Agile PLM ユーザーは、ユーザーの優先ポータル URL へのリンクを含む電子メール通知を受信します。ユーザーの優先クライアントと優先ポータル URL の設定方法については、141 ページの「[ユーザーとユーザー グループ](#)」を参照してください。

### Agile ポータル クライアント URL を追加するには:

1. [サーバ設定] で [場所] をダブルクリックします。[場所] ウィンドウが表示されます。
2. [ポータル] タブをクリックします。
3. [新規作成] ボタンをクリックします。[新規ポータル URL の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
4. ポータルの名前とその URL を指定します。[有効化] フィールドが「はい」に設定されていることを確認します。
5. [OK] をクリックします。

## Agile PLM におけるファイル管理

このセクションでは、Agile PLM でファイル管理を使用する方法を説明します。1 つのファイル管理サーバを持つ企業、および複数の分散ファイル管理サーバを持つ大企業の両方のケースを説明しています。次に説明されている要素には、通常、[サーバ設定]>[場所]>[ファイル マネージャ] タブに [管理者] 設定があり、このセクションの最後に設定されています。ファイル マネージャをインストールし、プロキシ サーバを設定した後、Java クライアントでファイル マネージャを設定する必要があります。

**注意** [ファイル マネージャ] は、Agile アプリケーション サーバには組み込まれていません。個別プロセスとして実行され、Tomcat バージョン 5.0.28(+) で実行されます。これは、Agile PLM 9.2 インストール時に設定されます。

**注意** ファイル マネージャを設定する前に、プロキシ サーバを設定してください。適切な『Agile PLM Installation Guide』をご覧ください。

## Agile ファイル管理サーバ

Agile ファイル マネージャ (AFM) には 2 つのメイン コンポーネントがあります。ファイル サーバとファイル格納庫の 2 つがあります。Agile にファイルが追加されると、ファイル サーバによって内部 Agile ID 番号が割り当てられ、ファイル格納庫に追加されます。オリジナルのファイル名ではファイル格納庫に保存されません。マッピング情報は Agile PLM データベースで保持され、ファイル名はシステム全体の [ファイル名接頭辞] プリファレンスにより変更されます。

ユーザーが Agile PLM クライアントを通してファイルを要求すると (これには [取り出し]、[表示]、[チェックアウト] などの権限が必要です)、この要求はファイル サーバに送信され、ファイルの ID が検索され、ファイル格納庫からファイルが読み取られて、ユーザーに送信されます。

### ファイル格納庫

ファイル格納庫には、AFM に保存されたすべての添付ファイルが格納されます。個別サーバやストレージ デバイスを Agile ファイル格納庫として指定し、添付ファイルやファイルを保存することをお勧めします。これは、クラスタ上の各サーバが同じファイル格納庫にアクセスする必要があるため、アプリケーション クラスタリングを利用する場合に特に便利です。

### FileLoad の使用と新規ファイルのインデックス

[インデックス] のプロパティが [同期] に設定されており、Agile FileLoad を使用して多数のファイルがファイル管理のファイル格納庫に追加された場合、インデックス プロセスにはしばらく時間がかかります。このフィールドを「手動」に設定すると、多数のファイルの読み込み速度が増加することが判明しています。または、追加するファイルが大きなドキュメントなどの場合、[インデックス] プロパティを「スケジュール済み」に設定し、インデックス スケジュールを 3~4 時間に 1 度になるよう設定します。ほとんどの新しいファイルが比較的小さい場合、[インデックス] プロパティを [同期] に設定することができます。

## 分散ファイル管理

グローバル企業は地理的に分散していることが多いため、製品内容を効率的に配布するために複数の AFM サーバを分散構成で導入できます。分散ファイル管理 (DFM) 設定は、リモートからのファイル管理を有効にします。DFM サーバの導入は、Agile PLM ファイルを必要な場所の近くに配置することでダウンロード時間を短縮し、ユーザーに使用するファイル マネージャを設定させることができます。Agile PLM 9.2 は多くの DFM サーバをサポートしています。

## [ファイルの複製を最適化] システム全体のプリファレンス

2 つ以上のファイル マネージャがある場合、このシステム全体のプリファレンス ([プリファレンス] ノード) によって、PLM システムは各ファイルを含むファイル マネージャを追跡できます。複製の間、要求中の FM はファイルを含むその他の FM にのみ通信し、指定されたファイルを最も近い FM からダウンロードします (これはすべての FM サーバへの最短 "ping" により決定されます)。[有効] または [無効] に設定します。[無効] は、最適化に関する問題を解決するために設定することができます。

## 分散型環境で Agile Viewer サーバを使用する

Agile Viewer を使用する場合、Agile Viewer サーバを各 DFM サーバにインストールする必要があります。ローカルの Viewer サーバは、DFM として同じコンピュータにインストールできます。ローカル ユーザーがファイアウォールの外から Agile PLM にアクセスする場合、DFM 設定でプロキシを使用することをお勧めします。

## 分散ファイル マネージャの機能

Agile のファイル管理サーバはピアツーピア関係です。ユーザーがファイルを要求すると、この要求はユーザーの設定したファイル マネージャに直接送信されます (260 ページの「[ファイル マネージャを設定する](#)」を参照)。ファイルが見つかると、ユーザーに提供されます。ファイルがこの場所に見つからない場合、FM はピアファイル サーバにファイルの要求を送信します。ファイルを持つピア ファイル サーバがこれを返信します。ローカル ファイル サーバは、これをファイル セキュリティディレクトリに保存し、ユーザーに提供します。

DFM シナリオは以下のようになります。カリフォルニアのサンノゼで AAS がインストールされており、日本の東京では DFM サーバがインストールされているとします。東京サイトのユーザーが表示する添付ファイルを選択します。東京の DFM は、ファイルがサンノゼにあることを検出し、ファイルをダウンロードし、これを東京のファイル格納庫にコピーした後、View サーバを通してユーザーにファイルを提供します。別のユーザーが、同じファイルの添付ファイルを選択します。ファイルはすでに東京の DFM 格納庫にあるため、他のユーザーにも直接提供されます。

ユーザーは複数のファイル格納庫や DFM サーバをインストールすることができます。複数のファイル格納庫は、[サーバ設定]>[場所]>[ファイル マネージャ] タブで定義することができます。各 Agile PLM ユーザーの [プリファレンス] タブで、このユーザーに対する優先ファイルサーバを指定することができます。

**注意** ご利用の Agile PLM システムが複数の DFM サーバを使用している場合、ユーザーはログイン時に完全なドメイン URL を使用する必要があります。ユーザーが完全なドメイン URL を使用していない場合、このユーザーがファイル操作を実行する際に、もう一度ログイン情報を提供するように指示されます。

## ファイル管理セキュリティ

ファイル セキュリティには 2 つのコンポーネントがあります。サーバ セキュリティとクライアント アクセス セキュリティです。また、Java クライアントには [ファイル チェックサム処理] と呼ばれるユーティリティがあり、ファイルへの不当なアクセスや、それを修正する方法などをユーザーに警告します。


## サーバ セキュリティ

Agile ファイル格納庫の内容は、認証されていないユーザーによる削除や変更から保護する必要があります。そのため、Agile PLM 管理者にだけアクセスを許可することをお勧めします。Agile ファイル サーバがユーザーに対してファイルを読み取るため、この操作は個別ユーザーにより実行される必要はありません。よって、クライアントを通してファイルにアクセスするシステム ユーザーは、Agile ファイル格納庫やファイル ディレクトリに対する [追加] や [読み取り] 権限を必要としません。

## クライアント アクセス セキュリティ

Java または Web クライアントからファイルにアクセスすれば、ファイルは安全です。ファイヤウォール内でクライアントが実行されている場合、ファイルはファイヤウォール内で転送されるため、外的侵害からファイルを保護します。クライアントがファイヤウォールの外側からファイルにアクセスする場合、SSL (セキュリティ ソケットレイヤ) 通信プロトコルがサポートされます。

## ファイル チェックサムの処理


ファイル チェックサムは、ユーザーが不当にアクセスされたと思われるファイル (添付ファイルやビジネス オブジェクト) に遭遇した際に、Agile がユーザーに警告を送る機能です。Java クライアントと Web クライアントのどちらの場合も、ビジネス オブジェクトの [添付ファイル] タブとファイル フォルダの [ファイル] タブには [チェックサム エラーあり]  と呼ばれるフィールドがあります。添付ファイル行のファイルにチェックサム エラーがあるとき、[チェックサム エラーあり] フィールドが同じ記号を表示します。

[チェックサム] 機能のサポートでは、管理者がシステム全体のプリファレンスと権限マスクを使用してファイルの検証を管理することができます。

- [チェックサム計算] システム全体のプリファレンスは、添付ファイルに対してチェックサム計算を有効にするか、無効にするかを設定します。デフォルトは [無効] で、このセキュリティ機能は無効となっています。(このプリファレンスが [無効] となっていると、サーバ速度が向上される場合がありますが、[チェックサム] 機能を有効化の方が重要な場合があります。)
- [ファイル チェックサムのリセット] 権限マスクは、[リセット] 権限に組み込まれています。この権限マスクを割り当てられたすべてのユーザーは、チェックサム問題のあるファイルについての通知を受けます。(この権限マスクはデフォルトの Agile 役割には含まれていません。)すべての既存の役割にこの権限マスクを追加できます。ただし、最初にこの権限を特定の役割に追加するか、または [管理者] や [ユーザー管理者] 役割に追加することをお勧めします。

通知は、違反ファイルのファイル名、関連性のあるファイル フォルダ、このファイルをホストしているファイル マネージャ、ファイルの場所などの情報を提供します。

[ファイル チェックサムのリセット] 権限の他に、ファイル フォルダに [読み取り] および [変更] 権限を割り当て、ユーザーがチェックサム エラーを解決できるよう図る必要があります。

チェックサム エラーはファイル フォルダ レベルで解決することができます。通知リンクを使用してファイル フォルダを開き、違反ファイルの行の  をクリックし、ダイアログ ボックスを使用してエラーを解決します。以下の 3 つのオプションのうち、1 つをクリックします。

1. ファイルを削除する - Agile システムを通して、添付ファイルそのものを削除します。ファイルが破損していたり、DFM を通しても復元不可能と判断される場合、このオプションを使用します。
2. 無効ファイルのみを削除 - このオプションは、チェックサム問題を解決するために使用します。
  - ファイル ステータスが「無効」となっているファイルをファイル マネージャから削除します。
  - チェックサム フラグをリセットします。

有効なコピーを維持しながら、無効ファイルを削除することは、優先 DFM においてファイルを複製できることを意味します。

このオプションは、以下の場合には無効となります。

- ファイル ステータス テーブルにエントリが 1 つしかない場合。
  - テーブルのすべてのエントリのファイル ステータスが「無効」な場合。
3. 新しいファイルをアップロードして、iFS 格納庫の問題のあるファイルと置き換える - 現在のファイルを新しいファイルと置き換え、チェックサムをデータベースの新しいファイルの値にリセットします。データベースのファイル ID と格納庫のファイル名は変更されないまま残ります。

## ファイル マネージャを設定する

[サーバ設定]>[場所]>[ファイル マネージャ] タブで、複数のファイル マネージャを定義できます。

File Manager

Name: IFS

File Manager URL: http://grange.agile.agilesoft.com/Filemgr/AttachmentServlet

Enabled: Yes

Primary file server: Yes

Standard <<

File Manager Internal Locator: http://grange.agile.agilesoft.com/Filemgr/services/FileServer

Viewer Server URL: http://grange.agile.agilesoft.com/Filemgr/VueServlet

Viewer Proxy URL: http://grange.agile.agilesoft.com/Filemgr/JVueProxy

Viewer Content URL: http://grange.agile.agilesoft.com/Filemgr/Vue

Vault Configuration

Vault Type	Description	Base Storage Dir...	Purge Directory	Category
Standard	Primary Vault	C:\Agile\Agile92\f...	C:\Agile\Agile92\f...	Read-Write

OK Cancel

[ファイル マネージャ] タブをクリックし、[新規作成] ボタンをクリックするか、またはプロパティ フィールドのいずれかをダブルクリックすると、次の表の 4 つのフィールドが表示されます。[詳細] ボタンを押すと、他のフィールドが表示されます。詳細ビューから [標準] ボタンをクリックすると、標準ビューへと戻ります。

**重要** [ファイル マネージャ] タブに変更を加えた場合、または新規作成した場合は、変更を有効にするため、ファイル サーバを再起動する必要があります。

ドキュメントまたはリリース ノートで URL が指定されている場合は、指定された完全なドメイン名を含めて、大文字と小文字を正確にコピーします。

フィールド	説明
[ファイル マネージャの作成] ダイアログボックスのフィールドとファイル マネージャの [標準] 表示	
名前	ファイル マネージャのこのインスタンスの非公式名称です。ユーザーやユーザー管理者にとって覚えやすい説明的な名前を使用してください (特に複数の DFM サーバ設定の場合)。この名前は、各ユーザーの [プリファレンス] タブの [優先ファイル マネージャ] ドロップダウン リストに表示されます。
ファイル マネージャ URL	Agile Web クライアントの接続先となるファイル サーバの URL。形式は次のとおりです。 http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<fileserver_virtual_path>/AttachmentServlet
有効	ファイル管理サーバを有効化または無効化します。今すぐファイル マネージャを作成し、後から有効化する場合、[いいえ] を選択します。
プライマリ ファイル サーバ	ドロップダウン リストから [はい] または [いいえ] を選択し、このサーバをプライマリ ファイル サーバにするかどうかを指定します。プライマリ ファイル サーバは、アプリケーション サーバと共存します。つまり、同じ LAN 内にあります。  異なるファイル マネージャを「プライマリ」として設定すると (つまり他のファイル マネージャがすでにプライマリとして設定されている状態で、このフィールドを「はい」に設定する)、このフィールドは自動的にリセットされ、前のプライマリ ファイル サーバは「いいえ」となります。
これらのフィールドを表示または編集するには、[詳細] ボタンをクリックします。	
ファイル マネージャ内部ロケーター	使用するファイル マネージャまたはその他のコンポーネント アプリケーション (Agile SDK など) のファイル アプリケーション サーバの URL。形式は次のとおりです。 http://<File Manager host>:<port>/<fileserver_virtual_path>/services/FileServer
Viewer サーバ URL	Agile Web クライアントの接続先となる Viewer サーバ (jQuery server) の URL。形式は次のとおりです。 http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<fileserver_virtual_path>/VueServlet
Viewer プロキシの URL	Viewer サーバがファイル マネージャと通信するために使用する Viewer プロキシ URL。ローカル ユーザーがファイアウォールの外から Agile PLM にアクセスする場合、DFM 設定でプロキシを使用することをお勧めします。形式は次のとおりです。 http://<File Manager host>:<port>/<fileserver_virtual_path>/VueLink
Viewer コンテンツの URL	Viewer アプレットがダウンロードされる場所。形式は次のとおりです。 http://<proxy/loadbalancer>:<port>/<appserver_virtual_path>/jVue

#### 新規ファイル マネージャを作成するには:

1. [サーバ設定] で [場所] をダブルクリックします。[場所] ウィンドウが表示されます。
2. [ファイル マネージャ] タブをクリックします。
3. [新規作成] をクリックします。[ファイル マネージャの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
4. 上の表で説明されている [名前]、[ファイル マネージャ URL]、[プライマリ ファイル サーバ] のフィールドに入力します。

**注意** Agile Viewer を使用している場合、Agile Viewer サーバを各 DFM サーバにインストールする必要があります。

5. サーバをアクティブにするには、[有効化] フィールドは「はい」に設定する必要があります。
6. [新格納庫の追加] ボタンをクリックし、新しいファイル格納庫を追加および設定します。

7. 新規ファイル マネージャを定義したら、[OK] をクリックします。

ファイル マネージャの新規インスタンスを作成したら、これを開き、次のタスクで説明されている他のサーバ定義などを追加することができます。

## カスタム ファイル格納庫を作成する

Java クライアントを使用して、リファレンスをカスタム ファイル格納庫にアップロードする場合、まず格納庫を設定する必要があります。カスタム格納庫は「読取専用」であり、ユーザーによる添付ファイルのチェックアウトや変更はできません。Agile FileLoad を使用してファイルをアップロードするために使用されます (『Agile PLM インポートおよびエクスポート ガイド』で説明しています)。

### カスタム ファイル格納庫を設定するには:

1. [サーバ設定] で [場所] をダブルクリックします。[場所] ウィンドウが表示されます。
2. [ファイル マネージャ] タブをクリックします。
3. エントリをダブルクリックし、[ファイル マネージャ] のダイアログ ボックスを表示します。
4. + ボタンをクリックし、新セキュリティディレクトリを追加します。
5. [格納庫タイプ] のフィールドで、[カスタム] を選択します。
6. [説明] フィールドで、格納庫の説明を入力します。
7. [基本保存先ディレクトリ] フィールドで、ファイルが保存される主な場所を入力します。次のサブセクションを参照してください。
8. [パージ ディレクトリ] フィールドで、パージされたファイルが移動する主な場所を入力します。次のサブセクションを参照してください。
9. [OK] をクリックします。
10. Agile File Manager を再起動します。

### [基本保存先ディレクトリ] と [パージ ディレクトリ] フィールド

[基本保存先ディレクトリ] のデフォルトの場所は `¥files` です。場所は、Storage Area Network (SAN) などの共有ストレージ ディレクトリである場合もあります。

**重要** マップ ファイルを指定しないでください。かわりに、次のように実際のコンピュータ名とディレクトリを指定します:

[`¥fileserver¥files`](#)

[パージ ディレクトリ] フィールドは、パージ (削除) されたファイルが自動的に移動する場所を示します。デフォルトの場所は `agile_home¥files¥purge` です。場所は、Storage Area Network (SAN) などの共有ストレージ ディレクトリである場合もあります。

**重要** マップ ファイルを指定しないでください。かわりに、次のように実際のコンピュータ名とディレクトリを指定します:

[`¥fileserver¥files¥purge`](#)

## ファイル マネージャの定義を変更する

### ファイル マネージャの定義を変更するには:

1. [サーバ設定] で [場所] をダブルクリックします。[場所] ウィンドウが表示されます。



2. [ファイル マネージャ] タブをクリックします。
3. 変更したいファイル マネージャを含む行をダブルクリックします。[ファイル マネージャ] ダイアログ ボックスが表示されます。  
正しいサーバ フィールドをナビゲートしてください。必要に応じて [詳細] ボタンを使用します。
4. 変更が完了したら、[OK] をクリックします。

## ファイル マネージャの定義またはファイル サーバを削除する

### ファイル マネージャの定義を削除するには:

1. [サーバ設定] で [場所] をダブルクリックします。[場所] ウィンドウが表示されます。
2. [ファイル マネージャ] タブをクリックします。
3. 変更したいファイル サーバを含む行をダブルクリックします。[ファイル マネージャ] ダイアログ ボックスが表示されます。  
正しいサーバ フィールドをナビゲートしてください。必要に応じて [詳細] ボタンを使用します。
4. ファイル サーバの定義のフィールドで、サーバのリファレンスを削除することもできます。  
設定済みのサーバを削除するには、行を選択し、[選択した格納庫の削除] ボタンをクリックします。このサーバに対して権利がある場合は、削除されます。
5. 完了したら、[OK] をクリックします。

## ユーザーの優先ファイル マネージャを設定する

ご利用の Agile PLM システムが分散ファイル管理を使用している場合、各ユーザーは使用する優先ファイル マネージャを指定する必要があります。パフォーマンスのためには、ユーザーと同じ場所にあるファイル サーバを指定してください。たとえば、ユーザーがアメリカにいる場合、中国ではなく、アメリカに位置するファイル マネージャを選択してください。

### Java クライアントでユーザーの優先ファイル マネージャを設定するには:

1. [ユーザー設定] で [ユーザー] をダブルクリックします。[ユーザー] ウィンドウが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をダブルクリックします。そのユーザーのウィンドウが表示されます。
3. [プリファレンス] タブをクリックします。
4. [優先ファイル マネージャ] で、リストからローカル ファイル マネージャを選択します。
5. [保存] をクリックします。

### Web クライアントでユーザーの優先ファイル マネージャを設定するには:

1. [ツール]>[管理]>[ユーザー] の順にクリックします。[ユーザー] ページが表示されます。
2. リスト内のユーザーの名前をクリックします。そのユーザーのページが表示されます。
3. [プリファレンス] タブをクリックします。
4. [編集] をクリックします。フィールドが編集可能になります。
5. [優先ファイル マネージャ] で、リストからローカル ファイル サーバを選択します。
6. [保存] をクリックします。

## 旧バージョンのファイルをパージする

Agile PLM システムで自動パージが有効化されている場合（「Viewer とファイル」を参照）、Agile ファイル マネージャは旧バージョンのファイルを自動的にパージします。バックグラウンド スレッドは毎日 6:00 am (現地時間) に始まり、どのファイルがパージされるかを決定します。対象のファイルがある場合は、パージされたファイルの場所に日付と時刻で命名されたフォルダが作成され、ファイルがこのフォルダに移動します。パージする必要のあるファイルがなければ、フォルダは作成されません。ハードコードされた時間とパージが実際に実行される時間のデフォルトの間隔は変更できます。この間隔は [添付ファイルのパージ タスク] で設定します。283 ページの「[タスクの設定](#)」を参照してください。

**注意** Agile ファイル マネージャは、パージされたファイルをシステムから完全に削除することはありません。このタスクは、会社の IT スタッフが実行する必要があります。

## 添付ファイルのパージ タスクの使用ケース

添付ファイルのパージを設定した時間中にサーバに障害が発生した場合、このタスクはその日に実行されません。たとえば、毎日 6:00 am にタスクが実行される場合、サーバが 5:00 am から 9:00 am までシャットダウンすると、タスクは実行されません。これは、[タスクのルックバック ウィンドウ] が 120 分に設定されており、6:00 am から 9:00 am まではこの時間を超えるためです。対応策として、[タスクのルックバック ウィンドウ] を 180 分より大きい値（この例では 200 分など）に一時的に設定します。これによって、サーバが再起動したときにタスクが実行されます。

通常、イベントがスキップされないように、[タスクのルックバック ウィンドウ] ([サーバ設定] > [タスクの設定] > <任意のタスク> > [一般情報] ページ) には、[タスクの間隔] の値より大きい値を常に設定する必要があります。

## データベース

[データベース] ノードでは、Agile PLM のシステム全体のデータベース設定を表示および設定できます。

### データベースの設定を変更するには:

1. [サーバ設定] で [データベース] をダブルクリックします。[データベース] ウィンドウが表示されます。
2. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン リストから選択します。
3. 入力完了したら、[保存] をクリックします。
4. Agile アプリケーション サーバを再起動して、変更を有効にします。

**注意** [通知の有効化] 設定を変更した場合、すぐに有効となります。その他の [データベース] 設定を変更した場合は、新しい設定を有効にするために、Agile アプリケーション サーバを再起動する必要があります。Agile アプリケーション サーバを再起動すると、アクティブなユーザーの接続はすべて切断されます。

下表は [データベース] プロパティを表示しています。

プロパティ	説明	デフォルト
ディスカバリ 権限	<p>[ディスカバリ 権限] を有効にすると、Agile PLM システムのすべての [ディスカバリ] 権限マスクが機能します。</p> <p>無効にすると、すべての [ディスカバリ] 権限マスクと [ディスカバリ] に関連するスマートルールが無効になります。[ディスカバリ] 機能を使用していない場合は、このプロパティを [無効] に設定すると、システムの処理速度が向上します。</p>	有効
GUID	会社の Agile PLM データベースに固有の ID。このプロパティは編集できません。	(GUID)
名前	メインの Agile PLM データベースの名前。ノードの名前は、29 文字以内で変更できます。	Agile データベース
通知の有効化	<p>電子メール通知をユーザーに送信するかどうかを設定します。</p> <p>このプロパティが無効 (=「いいえ」) になっている場合、その他の電子メール通知の設定はすべて無視されます。</p>	いいえ
スキーマ	データベースにログインするために使用するデータベースの「ユーザー名」、すなわちスキーマの名前。このプロパティは編集できません。	(スキーマ名)
サーバ	現在の Agile PLM データベース サーバの名前。このプロパティは編集できません。	(サーバ名)
DB バージョン	使用している Agile PLM データベースのバージョン。このプロパティは編集できません。	(DB バージョン)
メール送信元のドメイン	電子メール通知のドメイン名 (例: mydomain.com)。	(なし)
メール送信元のユーザー	Agile PLM 電子メール通知で使用する送信者の電子メール アドレス。この値は有効な電子メール アドレスである必要があります (例: <a href="mailto:AgileAdmin@mydomain.com">AgileAdmin@mydomain.com</a> )。	(なし)
メール サーバ外部	外部電子メール サーバを実行するコンピュータの名前。	(なし)
メール サーバ内部	内部電子メール サーバを実行するコンピュータの名前。	(なし)
顧客 ID	会社に固有の ID。このプロパティは編集できません。	(ID 番号)
年サイクル - 開始月	会社の会計年度における最初の月。	(インストール時に設定)
年サイクル - 開始日	会社の会計年度における最初の日。	(インストール時に設定)

## LDAP

多くの企業では、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) システムと専用の LDAP サーバを使用してユーザー アカウントを作成しています。[サーバ設定] ノード フォルダには、[LDAP] ノードが追加されました。[LDAP] ノードを開くと、[LDAP コンフィグレーション エディター] が表示されます。管理者は、サーバを再起動せずに、LDAP 設定 (特に検索フィルタ) の変更、その結果のプレビュー、および変更内容の保存を実行できます。

---

**注意** LDAP ノードは、デフォルトの管理者ツリーに表示されることはありません。あなたの会社で LDAP システムを使用しない場合、ノードは必要ありません。ノードは [適用先] 機能を通して表示されます。193 ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」を参照してください。

---

Agile PLM は、Agile Directory Server Integration Module を通して、LDAP 認証をサポートしています。Agile は、既存のディレクトリ サーバと統合して、ユーザーを一箇所で管理できます。このアプローチは、サポートされている以下のディレクトリ サーバに対して、Agile PLM に完全に統合することが可能です。

- Microsoft Active Directory Server
- Sun Java System Directory Server

インストール時に、ユーザー アカウント管理をデータベースでなくディレクトリ サーバで行うように選択した場合は、サプライヤ ユーザーを除く新規ユーザーの追加や特定のユーザー属性の設定は、ディレクトリ サーバのみで実行されます。サプライヤ ユーザーは、データベースによって認証され、サプライヤ管理者によって管理されます。

## Agile PLM で LDAP に対して BEA WebLogic Server を設定する

Oracle Application Server は Agile 認証の LDAP サーバをサポートしています。ただし、BEA WebLogic Server では、LDAP サーバをサポートするために、次に説明するタスクでさらに設定を行う必要があります。

### Sun Java System Directory Server で WebLogic を設定する

**Sun Java System Directory Server で WebLogic を設定するには:**

1. 次のように入力して、管理コンソールを開きます。  
[http://localhost:<port\\_number>/console](http://localhost:<port_number>/console)
2. 左ウィンドウで、[agileDomain] > [Security] > [Realms] > [AgileRealm] > [Providers] > [Authentication] の順に選択します。
3. 右ウィンドウで、[Configure a new iPlanet Authenticator] をクリックします。
4. [General] タブで、[Control Flag] の値を [SUFFICIENT] に変更します。
5. [Create] をクリックします。
6. [iPlanet LDAP] タブをクリックします。
7. LDAP サーバのホスト名とポート番号を各フィールドに入力します。
8. WebLogic で LDAP サーバに接続する際に使用するユーザーの名前を [Principal] フィールドに入力します。
9. ユーザーのパスワードを [Credential] フィールドに入力します。

10. [User] タブをクリックします。
11. [User Base DN] 属性の値を入力します。追加のフィルタリング要件がない場合、残りの属性は変更しないでください。
12. [Group] タブをクリックします。
13. [Group Base DN] 属性の値を入力します。追加のフィルタリング要件がない場合、残りの属性は変更しないでください。
14. [Apply] をクリックします。
15. WebLogic Server を再起動し、すべての管理対象サーバ (クラスタ内にインストールされている場合) を再起動します。

## Microsoft Active Directory Server で WebLogic を設定する

### Microsoft Active Directory Server で WebLogic を設定するには:

1. 次のように入力して、管理コンソールを開きます。  
[http://localhost:<port\\_number>/console](http://localhost:<port_number>/console)
2. 左ウィンドウで、[agileDomain] > [Security] > [Realms] > [AgileRealm] > [Providers] > [Authentication] の順に選択します。
3. 右ウィンドウで、[Configure a new Active Directory Authenticator] をクリックします。
4. [General] タブで、[Control Flag] の値を [SUFFICIENT] に変更します。
5. [Create] をクリックします。
6. [Active Directory] タブをクリックします。
7. LDAP サーバのホスト名とポート番号を各フィールドに入力します。
8. WebLogic で LDAP サーバに接続する際に使用するユーザーの名前を [Principal] フィールドに入力します。
9. ユーザーのパスワードを [Credential] フィールドに入力します。
10. [User] タブをクリックします。
11. [User Name] 属性のデフォルトは「cn」ですが、これを「sAMAccount」に変更する必要があります。[User From Name] 属性のデフォルトも「cn」ですが、これも「sAMAccount」に変更する必要があります。追加のフィルタリング要件がない場合、残りの属性は変更しないでください。
12. [Group] タブをクリックします。
13. [Group Base DN] 属性の値を入力します。追加のフィルタリング要件がない場合、残りの属性は変更しないでください。
14. [Apply] をクリックします。
15. WebLogic Server を再起動し、すべての管理対象サーバ (クラスタ内にインストールされている場合) を再起動します。

## LDAP ディレクトリでユーザーを作成する

Agile PLM システム ユーザーを作成する場合は、以下のオプションがあります。

- すべてのユーザーを Agile PLM で作成する - この方法は、Agile 以外のアプリケーション用に LDAP を使用している場合でも有効です。

- すべてのユーザー オブジェクトを LDAP システムを使用して作成する - 基本的なユーザー データ (ユーザー ID、氏名、パスワード、電子メール アドレスなど) を Agile PLM にインポートしてから、各ユーザーのプロファイルを完成させます。
- 2 つの方法を組み合わせる - Agile PLM を使用するよう割り当てられている社員用には LDAP を使用し、社員以外のユーザー (サプライヤ ユーザーなど) は Agile PLM システムで作成することができます。その場合、LDAP アカунトはインポート後に検証されるため、Agile PLM 内でのユーザー データの調整に伴うリスクはありません。

**注意** Agile PLM と LDAP の両方で通常の Agile PLM ユーザー (つまり [パワー] または [同時接続] ユーザー) を作成することはできません。2 つのアプローチを組み合わせる唯一の方法は、Agile PLM を使用して [制限付き] ユーザーを作成することです。

**注意** 具体的には、(特に WebSphere 環境で) 同じユーザー ID (ユーザー名) を使用して複数のユーザーを作成しないでください。WebSphere では組み込み LDAP アダプタを使用してユーザーを認証し、そのアダプタでは複数のユーザーが同じ ID を持つことが許可されません。

Agile PLM で「(制限付き)」サプライヤ ユーザーの役割で作成されたユーザーは、Agile PLM データベースを通して認証されます。

## 複数の LDAP ユーザー リポジトリを設定する

特定のディレクトリ サーバに対して設定手順を繰り返して、セキュリティ ドメインに複数の LDAP ユーザー リポジトリを設定できます。

AgileAuthenticator 認証プロバイダは削除しないでください。これは、Agile データベースに対してユーザーを認証するときに使用されます。AgileAuthenticator の [管理フラグ] は [オプション] のままにする必要があります。リストに認証プロバイダを追加した場合 (Sun Java System、Microsoft Active Directory など)、AgileAuthenticator はリスト内で最初の認証プロバイダである必要があります。

## 拡張された LDAP

**LDAP 情報を変更するには:**

1. [サーバ設定] で [LDAP] ノードをダブルクリックします。[LDAP コンフィグレーション エディター] ウィンドウが表示されます。
  2. [LDAP コンフィグレーション] タブをクリックします。  
[LDAP コンフィグレーション] フィールドは、XML フォーマットで変更するための LDAP サーバの内容を表します。
  3. 変更を入力したとき、[プレビュー] ボタンをクリックします。[プレビュー結果] タブにより、LDAP クエリの結果をプレビューできます。  
  
[プレビュー] をクリックするとき、サーバは LDAP コンフィグレーションを検証します。エラーが発生した場合、サーバは例外をクライアントに返し、ポップアップ ウィンドウにエラーを表示します (クラスタの LDAP 内における一貫しないデータ、または複数のサーバの重複したユーザー、または構文エラーなど)。
- LDAP コンフィグレーションにクラスタ化された LDAP サーバが含まれる場合、プレビューには 1 つの LDAP サーバのデータのみを表示するため、データはクラスタ内で等しくなります。
  - LDAP コンフィグレーションには複数の LDAP サーバが含まれます。プレビューは、すべての LDAP サーバからデータの集合を表示します。

4. [保存] をクリックして、LDAP コンフィグレーションの変更を保存します。ここでも、サーバは LDAP コンフィグレーションを検証します。エラーが検出された場合、エラー メッセージが表示されます。例外が発生するため、[保存] 操作を完了できなくなります。

## LDAP と Agile PLM を同期化する

Java クライアントで、[ユーザー] ノード ツールバーの [LDAP ディレクトリからのユーザーの更新] ボタンは、LDAP で作成されたユーザーを Agile PLM システムへと統合します。Web クライアントで、LDAP を使用する場合、同じ方法で [ユーザー] ノード ([ツール]>[管理者]) から [ディレクトリ サーバから更新] ボタンを有効化することができます。

ユーザー アカウントを Agile PLM にインポートする方法については、ご利用の LDAP ドキュメントをご覧ください。

[更新] (または [ディレクトリ サーバから更新]) をクリックした後、Agile PLM で使用するアカウントが自動的に更新され、必要に応じて Agile PLM ユーザーのプロパティを作成し、各ユーザー オブジェクトを完成させます。

Agile PLM ユーザーと LDAP で作成されたユーザー アカウントの同期化は、Agile PLM ユーザーのログイン ID が LDAP ユーザー アカウントのログイン ID と同等かどうかで決まります。Agile PLM システムのアップグレード時には、Agile PLM データベースを通したユーザー認証を前提にしています。

LDAP と Agile PLM ユーザーを同期化するには、別の方法もあります。Bin ディレクトリには、migrateUserToDB.bat/sh と呼ばれるスクリプトが含まれており、手動またはスケジュールにより実行することができます。このスクリプトは、Java クライアントや Web クライアントの [更新] (または [ディレクトリ サーバから更新]) ボタンと同じ役割を果たします。

## LDAP 管理のユーザー プロパティ

会社がユーザー アカウントに対して LDAP を使用している場合、次のプロパティは常に LDAP により管理されます。これらは Agile PLM では編集できません。

- ユーザー ID
- 名
- 姓
- パスワード
- 電子メール アドレス
- タイトル
- 勤務先電話
- 携帯電話番号
- ファックス番号

---

**注意** Agile PLM ユーザーの作成や管理に LDAP ディレクトリが使用されている場合、デフォルトでは、ユーザーは個別の承認用パスワードを必要としません。ただし、ユーザーについて [承認にログインパスワードを使用] プロパティのチェックを解除し、承認用パスワードを入力することもできます。

---

LDAP サーバで [アカウント規約] 機能を設定することができます。詳細は、LDAP システムのドキュメントをご覧ください。

## Agile LDAP の設定ファイル

Agile Directory Server Integration Module の設定パラメータと接続パラメータは、`ldapconfig.xml` ファイルに保存されます。LDAP コンフィグレーション エディター ([サーバ設定] > [LDAP] ノード) で複数のパラメータセットを定義して、複数のディレクトリ サーバと統合するように設定できます。

**重要** LDAP コンフィグレーション エディターのすべての設定は、LDAP 管理者に確認してください。

### ディレクトリ サービスの接続パラメータ

接続パラメータには、ホスト名、ポート、プロトコル、アカウント名およびフィルタなどがあります。アカウント名は、同期する際にディレクトリ サーバへの接続に使用するため、そのアカウント名には適切な権限が必要です。フィルタは、ディレクトリ サーバで Agile ユーザーとして定義されたユーザーのサブセットのみを選択するために使用されます。

### 複数のディレクトリ サーバのサポート

Agile にアクセスするユーザーが複数のドメインにいる場合や、バックアップ ディレクトリ サーバにフェイルオーバー機能を持たせる場合には、複数のディレクトリ サーバがあると都合がよいことがあります。バックアップまたはセカンダリのディレクトリ サーバが設定されている場合、プライマリ サーバへのアクセスが失敗すると、統合モジュールはバックアップ サーバへの接続を試行します。

```
<ldap id="Agile001" failover-links="Agile002" fail-attempts="1">
  <description/>
  <agent>ActiveDirectory</agent>
  <url>ldap://localhost:389</url>
  <domain>agile.agilesoft.com</domain>
  <ldapuser>
    <user>Administrator</user>
    <password>512255A5627E4D2764</password>
  </ldapuser>
  <user-
path>ou=People,dc=agile,dc=agilesoft,dc=com</user-path>
  <search-scope>SUB_TREE</search-scope>
  <search-filter>(objectclass=person)</search-filter>
  <mechanism>simple</mechanism>
  <group-
path>ou=groups,dc=agile,dc=agilesoft,dc=com</group-path>
  <group-scope>SUB_TREE</group-scope>
  <group-filter>(cn=HR Managers)</group-filter>
  <dynamic-group-filter>(cn=HR Managers)</dynamic-group-filter>
  <group-membership>(& (uniquemember=%M)
    (objectclass=groupofuniquenames))
  </group-membership>
</ldap>
```

### 定義済み設定パラメータ

サンプルの `ldapconfig.xml` ファイルの設定パラメータは、次のとおりです。

- `id` - LDAP サーバを識別する一意の文字列。この文字列は 30 文字未満にする必要があります。また、一旦使用すると変更できません。



- failover-links - 複製された LDAP サーバの ID。フェイルオーバー時に複数のサーバを使用する場合は、カンマ (,) で区切って指定します。
  - fail-attempts - Agile が LDAP サーバへの接続を試行する回数。
  - description - サーバ設定に関する情報。
  - agent - 認証に使用するディレクトリ サーバ。有効な値は、SunONEDirectory または ActiveDirectory です。
  - url - 認証エージェントの URL。
  - domain - Active Directory Server を <username>@<auth.domain.name> のフォーマットで使用する場合は認証文字列。
  - ldapuser
    - user - ユーザー名 (LDAP 管理者である必要はありません)。
    - password - ユーザーの暗号化パスワード。
  - user-path - すべての Agile ユーザーが含まれるツリー。このプロパティは、ディレクトリ ツリー構造のルートに最も近いノードに設定してください。そのノードから始まるサブツリーに含まれないユーザーは、Agile システムを使用できません。次のセクションの「encryptwd」を参照してください。
  - search-scope - user-path ノードで Agile ユーザーを検索する範囲。有効な値は、ONE\_LEVEL または SUB\_TREE です。このプロパティを ONE\_LEVEL に設定するのは、組織内のすべてのユーザーが <user-path> ノードの直下にいる場合のみです。
  - search-filter - <user-path> ノードで Agile ユーザーを検索するフィルタ。これは、<auth.ldap.user.path> と <auth.ldap.user.search.scope> で定義された範囲内で、すべての Agile ユーザーと一致する有効な LDAP 検索フィルタである必要があります。このフィルタに一致しないユーザーは、Agile システムでは無効なユーザーとしてみなされます。有効な LDAP 検索フィルタは、括弧で囲む必要があります。
  - mechanism - ディレクトリ サーバでサポートされている認証メカニズム。有効な値は「simple」または「strong」です。
  - group-path - このプロパティは、ディレクトリ ツリー構造のルートに最も近いノードに設定してください。これが、グループ検索を開始するパスになります。
  - group-scope - 有効な値は、ONE\_LEVEL と SUB\_TREE です。<search-scope> に類似しています。
  - group-filter - これは、Agile で使用予定のすべてのユーザーが含まれる LDAP グループと一致する、有効な LDAP 検索フィルタである必要があります。
- 
- 注意**      グループ フィルタを使用して LDAP サーバからすべてのユーザーとユーザー グループを同期化する場合は、<user-path> と <search-scope> をユーザー フィルタに対して設定する必要があります。
- 
- dynamic-group-filter - これは、Agile で使用予定のすべてのユーザーが含まれる LDAP ダイナミック グループと一致する、有効な LDAP 検索フィルタである必要があります。
  - group-membership - 現在のユーザーが指定のグループ (group-filter で定義) に属するかどうかを確認する認証に使用します。「%M」を使用して、現在のログイン ユーザー DN を指定します。

## 設定スクリプト

Agile のインストール中には、1 つのディレクトリ サーバを設定できます。また、インストール後に追加のディレクトリ サーバを手動で設定することができます。Agile では、インストール後に設定を有効にする以下のスクリプトを提供しています。これらのスクリプトは `agile_home¥agileDomain¥bin` ディレクトリにあります。

- `encryptpwd - ldapconfig.xml` では、ディレクトリ サーバ ユーザーのパスワードが暗号化されている必要があります。このスクリプトは、既存のユーザー パスワードに基づいて暗号化されたパスワードを生成します。
- `checkLDAPConfig - LDAP` コンフィグレーションのチェックに使用します。検出されたエラーはすべて修正する必要があります。
- `migrateUserstoDB -` ユーザーを LDAP から Agile データベースに移行するために使用します。このスクリプトによって、既存のユーザーを更新し、データベースに新規ユーザーを作成できます。

## ユーザーとユーザー グループを同期化する

PLM 9.2.2.2 で追加されたこの機能は、iPlanet サーバに適用されます。

- LDAP ユーザー グループとグループ メンバーを Agile システムに同期化できます。ユーザー グループ内の静的ユーザーを同期化する場合は `<group-filter>` を使用し、ダイナミック グループ ユーザーを同期化する場合は `<dynamic-group-filter>` を使用します。この機能を有効にするには、`agile.properties` ファイルで `auth.ldap.group` が有効 (True に設定) であることを確認してください。

この機能は iPlanet サーバにのみ適用されます。

# プリファレンス

[プリファレンス] ノードでは、Agile PLM のシステム全体のプリファレンスを表示し、設定することができます。

### プリファレンス設定を変更するには:

1. [サーバ設定] で [プリファレンス] をダブルクリックします。[プリファレンス] ウィンドウが表示されます。
2. 編集可能フィールドで、新規の値を入力するか、ドロップダウン リストから選択します。
3. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

下表は、Agile PLM プリファレンスを表示し、説明しています。ここではアルファベット順に表示しています。

**注意** ユーザー プリファレンスのサブリストはシステムに関連していますが、これら「システム全体のプリファレンス」は、「ユーザー プリファレンス」と混合しないでください ([管理者] > [ユーザー設定] > [ユーザー] ノード > [すべてのユーザー] > [プリファレンス] タブ)。

プリファレンス名	説明	デフォルト
ユーザーのデフォルト拠点を新規アイテムに追加	拠点情報を利用する企業は、ユーザーがアイテムを作成するとユーザーのデフォルト拠点が自動的に追加されるようにこのプリファレンスを設定できます。	いいえ

プリファレンス名	説明	デフォルト
プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする	会社が購入したライセンス キーで許可されている内容に基づき、ユーザーが詳細ファイルのアップロードやその他の機能を許可する Java アプレットにアクセスできるようにするかどうかを管理します。設定は「いいえ」または「はい」です。277 ページの「 <a href="#">プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする</a> 」を参照してください。	いいえ
パスワードのリセット許可	パスワードを忘れた Web クライアント ユーザーがログイン画面のリンクをクリックすると、自動的に新しいパスワードを取得できるかどうかを選択します。277 ページの「 <a href="#">パスワードのリセット許可</a> 」を参照してください。	いいえ
セキュリティ保護されていないファイルを許可する	Agile PLM により、セキュリティ保護されていない URL へのポインタの管理します。つまり、添付ファイルが URL となることを許可します (ファイルとは対照的に)。 <a href="#">[はい]</a> を選択すると、参照先 URL のチェックインとチェックアウトが無効であっても、URL へのポインタは Agile アプリケーション サーバのコンピュータに保存されます。	はい
チェックサム計算	添付ファイルのチェックサム計算を有効化するか、または無効化するかを設定します。設定は「有効」または「無効」です。259 ページの「 <a href="#">ファイル チェックサムの処理</a> 」を参照してください。	無効
コンテンツ サービスの最大再試行数	転送オブジェクトが最初に送信を試行した後に、失敗した送信先に対してそれ以上送信の再試行ができなくなるまでの、再試行の回数を決定します。278 ページの「 <a href="#">コンテンツ サービスの最大再試行数</a> 」を参照してください。	5
コンテンツ サービス待機時間 (秒単位)	処理する転送オブジェクトをチェックするためにコンテンツ サーバが「起動する」頻度を決定します。	300
デフォルト ユーザー名	ユーザー名を、名前を先に、または姓を先に表示します (適切なカンマを含む)。  [デフォルト ユーザー名] の設定を変更した場合は、変更を有効にするためにサーバを再起動する必要があります。	姓、名前
URL をハイパーリンクとして表示	テキスト フィールドやマルチテキスト フィールドに入力した URL をハイパーリンクに自動的に変換します。 <a href="#">[いいえ]</a> に設定すると、テキスト フィールドやマルチテキスト フィールドに入力された URL はプレーン テキストとして表示されます。Agile の特定の URL フィールドやメール フィールドは、このプリファレンスで制御されません。それらのフィールドに入力された URL は常にハイパーリンクに変換されます。	はい
ユーザー ID の表示	ユーザー ID (ユーザー名) を表示するかどうかを決定します。  [ユーザー ID の表示] の設定を変更した場合は、変更を有効にするためにサーバを再起動する必要があります。	はい

プリファレンス名	説明	デフォルト
ファイル名の接頭辞	<p>Agile ファイル マネージャはファイル格納庫に保存されている各ファイルに添付された接頭辞を使用します。各添付ファイルに自動的に追加される識別子を入力します。デフォルトは「agile」です。</p> <p><b>注意:</b> このシステム全体のプリファレンスの効果は広範囲に及ぶため、よほどの理由がないかぎり、値を変更しないでください。</p>	agile
ごみ収集開始時間 (秒)	<p>「ごみ収集」は、キャッシュの中のアイドル スレッドを消去するスレッドです。「消去」した後、ごみ収集はここで設定された秒数に基づき「スリープ」状態となります。300 秒 (5 分間) は合理的な値です。</p>	300
属性表示最大幅	<p>テキストまたはマルチテキストボックスの最大幅を定義する値です。Web クライアントで定義し、[作成] および [編集] モードに適用します。単位はピクセルです。1 文字 = 7.5 ピクセルです。有効な設定値は 10~100 です。71 ページの「<a href="#">表示幅の属性</a>」を参照してください。</p>	40
検索結果の最大表示数	<p>詳細検索または簡易検索で表示する検索結果の最大数を設定します。5000 未満の正の整数を指定できます。推奨値は 1000 です。</p> <p>ユーザーの [最大表示行数] プリファレンスがこのシステム全体のプリファレンスよりも少なく設定されている場合、前者の値は後者の値より優先されます。</p> <p><b>注意:</b> [全検索表示] 権限は、一般検索ではなく、レポート要求の結果に適用されます。[全検索表示] 権限を持つかどうかにかかわらず、すべてのユーザーは、このプロパティに指定された最大数の検索結果を見ることができます。</p>	1000
レポート結果表示最大数	<p>Agile PLM レポートに表示する最大オブジェクト数を決定します。このプリファレンスは、全検索表示 (FSD) 権限によって上書きされます。</p> <p>このフィールドの上限は 500,000 に増えました (フィールドではカンマは不要です)。</p> <p>[Excel へエクスポート] モジュールでこの設定が使用されます。このフィールドの数値によって、Excel や CSV ファイルにエクスポートされる結果の最大数が制限されます。</p> <p><b>注意:</b> FSD 権限を持つユーザーは、レポートの全結果を表示できます。また、この権限を持つユーザーがレポート結果を表示する際には、ユーザーに対するすべての権限チェックが無視されます。FSD 権限を持たないユーザーは、このプロパティに指定された最大数のレポートを表示できます。</p>	50,000
同時に実行された最大レポート数	<p>アプリケーション サーバが同時に実行するレポートの最大数を定義します。</p>	10

プリファレンス名	説明	デフォルト
通知待機時間 (秒単位)	送信する通知電子メールをチェックするためにシステムが「起動する」頻度を決定します。デフォルトは 600 です。有効な設定は 30～3600 秒です。	600
通知のタイムアウト (秒単位)	この設定は、通知スレッド内のユーザー トランザクションのタイムアウト時間です。有効な設定は 30～3600 秒です。	1800
オブジェクト キャッシュ テーブルのサイズ	オブジェクト キャッシュ テーブル (ハッシュ テーブル) の関連サイズを設定します。これにより、キャッシュでオブジェクトが配布される方法を決定します (小さい値は、1 行当たりのオブジェクト数が多く、大きい値は 1 行当たりのオブジェクト数が少なくなります)。[小型]、[中型]、[大型] テーブルを選択することができます (デフォルトは中型テーブル)。ただし、これはサーバ導入に使用される内部使用の属性なため、この設定に基づくパフォーマンスについては何ら推奨はありません。	中型の テーブル
ファイルの複製を最適化	2 つ以上のファイル マネージャがある場合、PLM システムは各ファイルを含むファイル マネージャを追跡することができます。複製の間、要求中の FM はファイルを含むその他の FM にのみ通信し、指定されたファイルを最も近い FM からダウンロードします (最短 'ping')。設定は「有効」または「無効」です。「無効」は、最適化に関する問題を解決するために設定することができます。	有効
最近訪れたフォルダのサイズ	各ユーザーが保存可能なオブジェクトの最大数を管理します。リストから選択可能な数値: 10, 25, 50, 100。	10
参照指示範囲の展開縮小を許可する	参照指示を順序ではなく、範囲で説明することを許可します。278 ページの「 <a href="#">参照指示範囲の展開縮小を許可する</a> 」を参照してください。	縮小
参照指示範囲のインジケータ	参照指示を指定された低および高範囲値の間に表示される記号です。利用可能な記号は、アスタリスク (*), @ マーク (@), カレット (^), プラス (+), ハイフン (-), コロン (:), セミコロン (;), チルダ (~), またはなしです。	ハイフン (-)
週末の督促/エスカレーションの設定	変更のエスカレーションおよび督促期間で、週末を扱う方法 (土曜日または日曜日をスキップ、土曜日と日曜日をスキップ、またはスキップしない [= 両日とも週末とみなす]) を指定します。このプリファレンスは、Product Portfolio Management スケジュールの一部ではありません。	スキップ しない

プリファレンス名	説明	デフォルト
ローカルファイルの保持	<p>添付ファイルをビジネス オブジェクトに追加したり、添付ファイルをチェックインするとき、ユーザーのコンピュータ上のローカル ファイルを削除するか保持するか、ユーザーに対してファイルを削除するか ([はい]) 削除しないか ([いいえ]) を選択するように指示するかを決定します。</p> <p>設定は [削除]、[保持]、および [警告] です。</p>	警告
添付ファイルとして保存する	<p>2 つの方法のいずれかでファイルの複製を許可するか、または各ユーザーが方法を選択するように指示されます。設定は [プロンプト]、[ファイルの新規コピーを作成]、[ファイルをコピーしない]、および [既存ファイルを参照] です。300 ページの「<a href="#">添付ファイルとして保存する</a>」を参照してください。</p>	既存ファイルを参照
異なるクラスに名前をつけて保存時の BOM 情報	<p>異なるアイテム間で [BOM] タブをコピーする際、その値もコピーするかどうかを指定します。</p> <p>[名前を付けて保存] プリファレンスの詳細は、277 ページの「<a href="#">タブとともに値をコピー</a>」を参照してください。</p>	値をコピーする
異なるクラスの製造元の値を保存する	<p>異なるアイテム間で [製造元] タブをコピーする際、その値もコピーするかどうかを指定します。</p>	値をコピーする
異なるクラスに名前をつけて保存時のユーザー定義 1 情報	<p>異なるクラス間で [ユーザー定義 1] タブをコピーする際、その値もコピーするかどうかを指定します。</p>	値をコピーする
異なるクラスに名前をつけて保存時のユーザー定義 2 情報	<p>異なるクラス間で [ユーザー定義 2] タブをコピーする際、その値もコピーするかどうかを指定します。</p>	値をコピーする
異なるサブクラスに名前をつけて保存時のユーザー定義 2 情報	<p>異なるサブクラス間で [ユーザー定義 2] タブをコピーする際、その値もコピーするかどうかを指定します。</p>	値をコピーする
サインオフ ユーザー二重識別タイプ	<p>承認/却下サインオフ (ユーザー自身のサインオフ、エスカレーションまたは権限委譲による別のユーザーのサインオフを含む) で二重識別、つまり「第 2 のサインオフ」が必要かどうかを制御します。</p> <p>設定は [該当なし](デフォルト)、[ユーザー ID]、および [ログイン パスワード] です。[該当なし] を選択した場合、二重識別は必要ありません。[ユーザー ID] または [ログイン パスワード] を選択した場合、サインオフするには常に二重識別が必要です。</p> <p>詳細は、278 ページの「<a href="#">サインオフ ユーザー二重識別</a>」を参照してください。</p>	該当なし
しきい値 (秒単位)	<p>設定された値以上の時間、ログイン ユーザーのセッションがアイドルだった場合、オブジェクトで実行する特定のシステム アクション (クリーンアップやリセット タスク) のタイミングを設定します。有効な設定値は 30~3600 秒です。</p>	300

---

**注意** Agile PLM システムのプロキシ サーバでは、1500 秒 (25 分) のデフォルト接続タイムアウトが設定されています。プロキシ タイムアウト設定の変更方法については、『Agile PLM Installation Guide for Windows』の「Installing and Configuring Agile Web Components」の章をご覧ください。

---

## プリファレンスの詳細

このセクションでは、いくつかのシステム全体のプリファレンスについて説明します。

### プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする

このプリファレンスは、詳細ファイル アップロード、複数ファイルのダウンロード、および Excel 統合 (PG&C) を可能にする Java アプレットにユーザーがアクセスできるかどうかを管理します。「いいえ」と設定された場合、ユーザーそれぞれのユーザー プロファイルには [ファイル プロダクティビティ プリファレンス] が表示されません。「はい」と設定された場合、ユーザー プロファイルには [ファイル プロダクティビティ プリファレンス] が表示され、自ら方法を選択することができます。

- プリファレンスは、添付ファイルの管理について、次の機能を許可します。システム全体のプリファレンスは、各ユーザーの [ファイル プロダクティビティ (ユーザー) プリファレンス] とともに機能します。
  - 詳細ファイル アップローダ
  - チェックアウトの場所に基いた自動チェックイン
  - Web クライアントの Zip ファイルではなく、個別ファイルのダウンロードを許可
- このプリファレンスでは、Microsoft Excel ベース クライアントを Agile PG&C に統合できます。これによって、サブライヤ ユーザーは、Microsoft Excel を使用して適合性情報をバイヤーに提供できます。

### パスワードのリセット許可

[パスワードのリセット許可] プリファレンスでは、パスワードを忘れた Web クライアント ユーザーが自動的に新しいパスワードを受信することができるかどうかを選択します。デフォルト設定は「いいえ」です。ユーザーは管理者に連絡し、パスワードをリセットする必要があります。パスワードを忘れた Java クライアント ユーザーは、必ず管理者に連絡し、新しいパスワードを受け取る必要があります。

[パスワードのリセット許可] が [はい] に設定されている場合は、[パスワードを忘れた場合] リンクが Web クライアントのログイン画面に表示されます。[プリファレンス] はシステム全体の設定ですので、すべての Web クライアント ユーザーがこのリンクを見ることができます。ユーザーが [パスワードを忘れた場合] リンクをクリックして、ユーザー名とメール アドレスを入力すると、新しいランダム パスワード (7 文字) を受信できます。ユーザーが再度 Web クライアントにログインすると、新しいパスワードを選択するよう指示されます。

### タブとともに値をコピー

複数の [名前を付けて保存] プリファレンスは、1 つのクラスから別のクラスへ [名前を付けて保存] を使ってオブジェクトをコピーする際に、[BOM]、[製造元]、[ユーザー定義 1]、[ユーザー定義 2] タブから値をコピーするかどうかを決定します。デフォルトでは、値はコピーされます。

**注意** [名前を付けて保存] を使用して値をコピーする場合、いくつかの例外があります。ソース オブジェクトの属性が存在しないか、またはターゲット オブジェクトで使用されない場合、名前を付けて保存するプリファレンスが [コピーされた値] に設定されていても、その属性はコピーされません。また、属性がリストの値であり、ソースの属性のリスト ID がターゲットの属性のリスト ID と異なる場合、名前を付けて保存するプリファレンスが [コピーされた値] に設定されていても、その値はコピーされません。

## コンテンツ サービス待機時間

[コンテンツ サービス待機時間] プリファレンスは、システムが転送オブジェクトを処理する頻度を管理します。たとえば、設定が 300 の場合、処理する転送オブジェクトの有無が 300 秒ごとにチェックされ、未処理のオブジェクトに対して処理が開始されます。

## コンテンツ サービスの最大再試行数

[コンテンツサービスの最大再試行数] プリファレンスは、転送オブジェクトが最初に送信を試行した後に、失敗した送信先に対して何回再試行を行うかを決定します。たとえば、設定が 5 の場合に、転送オブジェクトが送信を 1 回試行したとします。その試行が失敗した場合、転送オブジェクトは以後 5 回まで再試行されます。最後の再試行後は、それ以上送信の再試行はできなくなります。

## オンライン ヘルプ マニュアル URL

---

**注意** Agile PLM 9.x のオンライン ヘルプは利用不可、またはサポートされていません。[オンライン ヘルプ マニュアル URL] 設定は有効ではありません。

---

## 参照指示範囲の展開縮小を許可する

この設定は、このリリースでは編集可能となりました。デフォルトでは、[参照指示範囲の展開縮小を許可する] プリファレンスは [縮小] に設定され、参照指示の範囲は縮小されます (例: RefDes01-03)。[展開] に設定すると、カンマで区切られた各参照指示の表示順序が決まります (例: RefDes01,02,03)。

## サインオフ ユーザー二重識別

FDA の規制を受ける会社などは、設計変更を承認または却下するときにユーザー識別の二重認証を要求する企業ポリシーを設けている場合があります。[サインオフ ユーザー二重識別タイプ] プリファレンスは、承認/却下サインオフで二重識別、つまり「第 2 のサインオフ」が必要かどうかを制御します。

この設定は、デフォルトおよびカスタムの全ワークフローの [レビュー] および [リリース済み] ステータスに適用されます。つまり、ユーザーが [サインオフ] ダイアログ ボックスに入力すると、ワークフローが [レビュー] または [リリース済み] ステータスに移行する前に、システムで電子署名が検証されます。このプリファレンスは、すべての状況、つまり、ユーザー自身のサインオフ、ユーザー グループのメンバーとしてのサインオフ、エスカレーションまたは権限委譲による別のユーザーのサインオフ、または複数のサインオフ職責の組み合わせに対応しています(サインオフの UI オプションの詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』のワークフローに関する章をご覧ください)。

管理者は、「第 2 のサインオフ」機能が正しく認識されるように、設定の組み合わせに注意する必要があります。

このプリファレンスを [該当なし] (デフォルト) に設定した場合、すべての立場のユーザーは、1 回のサインオフのみ要求されます。サインオフで要求されたパスワードは承認用パスワードです。これは、サインオフ プロトコルにおける第 1 レベルのセキュリティを表します。

他の 2 つの設定 ([ユーザー ID] および [ログイン パスワード]) の場合は、サインオフを行うユーザーに対して二重識別を要求できます。この設定の場合、ユーザーは、ユーザー ID (ユーザー名とも呼びます) またはログイン パスワードの入力も要求されます。

このプリファレンスを [ログイン パスワード] に設定する場合は、すべてのユーザーの [承認用パスワードにログイン パスワードを使用] プロパティを [いいえ] に設定する必要があります。すべてのユーザーの [承認用パスワードにログイン パスワードを使用] プロパティを [いいえ] に設定した場合のみ、ログイン パスワ



ドを設定できます(一括設定を行う場合は、SecondSignature.Zip というスクリプトについて Agile 担当者にお問い合わせください)。

このプリファレンスを [ユーザー ID] に設定する場合は、[ユーザー ID の表示] プリファレンスを [いいえ] に設定する必要があります。

## ライセンス

Agile PLM では、サーバ ライセンスとユーザー ライセンスという 2 種類のライセンスを使用します。サーバ ライセンスは、社内の Agile PLM ユーザーが使用できる機能を定義します。一部のサーバ ライセンスはオプションです。これらのライセンスは、Agile からご購入いただいた場合のみインストールされます。ユーザー ライセンスは、Agile PLM 管理者によって各ユーザーに割り当てられます。割り当てられたユーザー ライセンスと割り当てられた役割および権限の組み合わせによって、ユーザーが実行できるタスクが決まります。

[ライセンス] ノードは、[サーバ設定] の下に表示されます。このノードには、社内の Agile PLM ライセンスの設定に関する情報が表示されます。

### ライセンス情報を表示するには

1. [サーバ設定] で [ライセンス] ノードをダブルクリックします。[ライセンス] ウィンドウが表示されます。
2. [一般情報]、[サーバ ライセンス]、または [ユーザー ライセンス] タブをクリックします。[一般情報] タブで、下表にあるフィールドだけが編集可能です。

プロパティ	指定する内容
ライセンス キー	<p>Agile から入手した Agile PLM ライセンス キー。ライセンス キーは、Agile アプリケーション サーバの設定、Agile PLM 製品ライセンス、指定ユーザー ライセンスなど、会社が購入している様々な機能を定義するものです。(ユーザーのライセンスの詳細は、281 ページの「<a href="#">ユーザー ライセンス</a>」を参照してください。)</p> <p>新規の Agile PLM ユーザーは、導入やテスト中に使用する一時ライセンス キーと、その後に使用するパーマネント キーを受け取ります。通常、一時ライセンス キーは発行日より 90 日間有効です。会社名の後に「TEMP KEY」というラベルが付きます。</p> <p>ユーザーや製品の追加、または新しい Agile PLM ソフトウェア リリースへのアップグレードなどによって、元の Agile PLM ライセンスを変更した場合、ここで入力する新しいライセンス キーが与えられます。</p>
有効期限	Agile PLM ライセンスの有効期限の日時。このフィールドは変更できません。
ライセンス キー警告期間 (日数)	ライセンス キーの有効期限が近づいた旨の通知を、有効期限の何日前に受け取るかを指定します。
追加電子メール通知	他のユーザーにライセンス キーの有効期限を知らせる電子メールを追加で送信することができます。カンマまたはセミコロンを使用することによって、複数の電子メール アドレスを区切って指定することができます。

## サーバ ライセンス

[ライセンス] ウィンドウの [サーバ ライセンス] タブには、Agile PLM サーバ ライセンス、各サーバ ライセンスの説明、およびサーバ ライセンスが有効であるかどうかの情報が表示されます。このタブは読取専用であるため、編集可能なフィールドはありません。

**注意** サーバ ライセンスが Agile PLM システムにインストールされていない場合、[サーバ ライセンス] ウィンドウに「ステータス - 無効」として表示されます。

Agile PLM サーバ ライセンスはライセンス キーによって指定されます。ライセンス キーは Agile からご購入いただいたライセンスに基づいています。下表はすべての Agile PLM サーバ ライセンスを表示しています。

ライセンス	説明
Agile Content Service (ACS)	Agile Content Service 用の転送オブジェクトを有効にします。これは、ビジネス アプリケーションおよびユーザーが利用可能なプロダクト レコードを作成する XML ベースの公表サービスです。
Agile Integration Services (AIS)	インポート機能およびエクスポート機能に対して、事前に構築された Web サービスを提供します。
アプリケーション サーバのクラスタリング	データと呼び出しを分散してフェイルオーバー容量を保証するためのサーバのクラスタリングを可能にします。
承認済み製造元リスト (AML)	製造元と製造元部品オブジェクトへのアクセスを可能にし、AML (承認済み製造元リスト) と MCO による高度な機能を提供します。
ChangeCAST	ChangeCAST (Agile PLM をその他の企業アプリケーションと統合するためのツール) へのアクセスを提供します。
中国語	Agile PLM の中国語バージョンへのアクセスを可能にします。
カスタム レポート	カスタムおよび外部レポートの作成とアクセスを可能にします。
ダッシュボード	Agile PLM 全体でダッシュボードを作成および管理するためのアクセスを提供します。
データローダ	DataLoad (旧式システムから Agile PLM へデータおよび物理ファイルをロードするためのツール) を有効化します。
分散ファイル サーバ	別の場所にあるミラー化されたファイル サーバへのアクセスを可能にします。
全文検索	全文検索機能へのアクセスを可能にします。この機能により、添付ファイル内のテキストとの一致を検索できます。
日本語	Agile PLM の日本語バージョンへのアクセスを可能にします。
ポートレット	企業のポータルやイントラネットでホスト可能な複数のポートレットで、Agile PLM 機能へのアクセスを提供します。関連製品名は Agile Portlet Services です。
価格管理	Agile Product Cost Management (PCM) ソリューションを有効にし、価格および PCO オブジェクト、ソーシング レポートへのアクセスを可能にします。

ライセンス	説明
Product Governance & Compliance	企業の製品に含まれるすべてのサブスタンスとマテリアルの管理および追跡を可能にします。  サーバ ライセンスが無効で使用不可の場合でも、[サーバ設定]>[タスク設定] ノード下のタスク リストには [適合性ロールアップ タスク] が表示されます。
製品	あらゆる企業向けの Agile PLM 基本ライセンスであり、アイテム オブジェクト (BOM を含む)、設計変更オブジェクト、製品およびプロセス レポートへのアクセスを可能にします。
プログラム	アクティビティおよびゲート オブジェクトを提供し、Agile Product Portfolio Management (PPM) ソリューションへのアクセスを可能にします。
品質	品質データを追跡および管理するツールを使用した Agile Product Quality Management (PQM) ソリューションを有効にします。顧客、製品サービス依頼、および品質変更依頼オブジェクトへのアクセスを可能にします。
SDK	Agile Software Development Kit (SDK) を有効にし、Application Programming Interface (API) による Agile PLM のカスタマイズを可能にします。
SDK パートナー	Agile Software Development Kit (SDK) を有効にし、Agile Application Programming Interface (Agile API) を作成および販売するライセンスを有効にします。
拠点	拠点オブジェクトへのアクセスを可能にし、Agile PLM システム内での複数の製造元拠点、および拠点毎変更の作成を許可します。
ソーシング	Agile Product Cost Management (PCM) ソリューションを有効にし、ソーシング プロジェクト、見積り依頼、および見積り依頼回答オブジェクト、ソーシング レポートへのアクセスを可能にします。
表示してマークアップ (3D)	Advanced Viewer へのアクセスを可能にします。
API を表示してマークアップ (3D)	Agile Viewer から切り替えるソフトウェアは、Agile ファイル マネージャに接続してファイルとマークアップを取り出す機能を持つソフトウェアです。

## ユーザーライセンス

Agile PLM には 3 タイプのユーザー ライセンスがあります。[パワー]、[同時接続]、および [制限付き] です。制限付ユーザーは、会社外部の人間 (代理店やサプライヤ) で、Agile PLM システムへのアクセスが制限されているユーザーです。パワー ユーザーと同時接続ユーザーは、それぞれの役割と権限、および会社のサーバ ライセンスに基づき、同じ Agile PLM 機能にアクセスできます。主な相違点は、パワー ライセンスを持つユーザーは同時接続のカウントに含まれないことです。したがって、「パワー」ユーザーはいつでもシステムにログインできます。「パワー」または「制限付き」以外のすべてのユーザーは、同時接続のカウントに含まれるため、同時接続数の限度に達した際にはシステムからロックアウトされることがあります。

**注意** このマニュアルに記載され、Java クライアントのユーザー インターフェースに表示される [パワー ユーザー ライセンス] ([管理]>[サーバ設定]>[ライセンス]>[ユーザー ライセンス] および [ユーザー] プロパティの [ユーザー カテゴリ]) は、会社が購入した「名前付きユーザー ライセンス」と同じです。

各ユーザー プロファイルの [ユーザー カテゴリ] フィールドには、ユーザーに割り当てられたユーザー ライセンスが表示されます。詳細は、147 ページの「[定義済みユーザー プロパティ](#)」を参照してください。

[ライセンス] ウィンドウの [ユーザー ライセンス] タブには、次の表に示す情報が表示されます。この情報は編集できません。

プロパティ	説明
パワー ユーザーの数	会社が購入した [パワー ユーザー] ライセンスの数を示します。パワー ユーザーは、会社が購入したすべての Agile PLM アプリケーション ([サーバ ライセンス] タブに表示) をいつでも使用することができます。
同時ユーザー ライセンス数	会社が購入した [同時接続ユーザー] ライセンスの数を示します。同時接続ユーザーも、会社が購入したすべての Agile PLM アプリケーションにアクセスできますが、同時接続のカウントに含まれるため、同時接続数の限度に達した際にはシステムからロックアウトされることがあります。
同時接続ユーザーの合計数	割り当てられている同時接続ユーザー ライセンスの数を把握し、会社が所有する同時接続ユーザー ライセンス数と比較します。
現在割り当て中のパワー ライセンス	割り当てられているパワー ユーザー ライセンスの数を把握し、会社が所有するパワー ユーザー ライセンス数と比較します。

## タスク モニタ

[タスク モニタ] ノードを使用すると、スケジュールされた特定のタスクの進行状況を追跡することができます。これには、次の機能が含まれています。

- レポート タスク - 実行がスケジュールされた標準レポートおよびカスタム レポート

**注意** 管理者レポートは、スケジュールできません。

- ユーザー タスク - ディレクトリ サーバ (例: LDAP サーバ) からユーザー リストを更新
- 全文検索タスク - 全文検索の添付ファイルのインデックス
- 添付ファイルのパージ タスク - DFM サーバにおける添付ファイルの定期的なパージ
- PPM 固有タスク - 複数のアクティビティおよび通知タスク
- PG&C 固有タスク - スケジュール済み適合性ロールアップを管理するために追加された適合性ロールアップ タスク

[スレッド ステータス] ドロップダウン リストを使用し、以下の条件に符合するタスクを表示することができます。

- 「すべて」 - すべてのタスクを表示
- 「スケジュール済み」 - スケジュール結果の生成時にスケジュールされたタスクを表示
- 「実行中」 - 現在実行中のタスクを表示 (デフォルトのフィルタ)
- 「完了」 - 正常に実行されたタスクを表示
- 「失敗」 - 実行時に失敗したタスクを表示
- 「タイムアウト」 - 完全に実行される前にタイムアウトになったタスクを表示適合性ロールアップ タスクはタイムアウトにできません。



**注意** スレッド ステータス条件（「すべて」を除く）はすべてのタイプのタスクには適用されません。たとえば、レポートタスクは、選択された [スレッド ステータス] が「すべて」または「完了」の場合のみ、[タスク モニタ] ウィンドウに表示されます。

下表は [タスク モニタ] ウィンドウのプロパティを表示します。プロパティは読取専用です。

プロパティ	メモ
名前	スケジュールされたレポートの名前（標準またはカスタム）。他のすべてのタスクに対してはヌルになります。
タスク タイプ	レポート タスク、FTS タスク、添付ファイルのページ タスク。
所有者	レポート スケジュールの作成者の名前。他のすべてのタスクに対してはヌルになります。
実行時間	タスクが開始した時間。
ステータス	タスクの現在のステータス: スケジュール済み、実行中、完了、失敗、タイムアウト。

[ページ] ボタンは、[タスク モニタ] ウィンドウで表示されるタスクを削除します。[ページ] アクションは、選択されたタスクのうち、指定された日付範囲に当てはまるタスクのみに適用されます。

#### [タスク モニタ] からタスクをページするには:

1. [スレッド ステータス] を選択し、特定のタスク（すべてのタスクや完了タスクなど）を表示します。
2. 1 つまたは複数のタスクを選択します。
3. [ページ] ボタン  をクリックします。
4. [開始日] と [終了日] の値を指定します。日付範囲に当てはまるタスクがページされます。  ボタンをクリックし、各フィールドの日付と時刻を選択します。
5. [OK] をクリックします。

## タスクの設定

[タスクの設定] ノードを使用すると、レポートや全文検索の索引作成などの、スケジュールされた様々なサーバ側のアクティビティを管理することができます。タスクは完了前にタイムアウトにはなりません。

名前	説明	デフォルトの間隔 (分)
ディレクトリ サーバからユーザー リストを更新	Agile PLM ユーザー リストをディレクトリ サーバからの情報で更新します。	1440 (1 日)
レポート タスク	実行するスケジュール済みのレポート タスクがあるかどうかをチェックします。ある場合は、バックグラウンドでレポートを作成してファイル サーバに保存し、レポートの所有者と共有ユーザーに電子メール通知を送信します。	30

名前	説明	デフォルトの間隔 (分)
アクティビティ概要 タスク	次週までに予定されているスケジュール済みのアクティビティやアクション アイテムのリストを認識し、所有者に概要形式で通知します。	2
全文検索スケジューラー	全文検索機能のファイルに含まれるコンテンツのインデックスを作成します。	600 (10 時間)
添付ファイルのページ タスク	古いファイルを特殊フォルダに移動し、データベースのメタデータをクリーンアップします。システムは 6:00 am (現地時間) にこのプロセスを開始するようにハードコードされます。1440 のデフォルトの間隔は 24 時間後にプロセスを再開します。このタスクに対して入力された別の値によって開始時刻が変更されると、新しい間隔で再開します。添付ファイルのページ タスクの使用ケースについては、264 ページの「 <a href="#">添付ファイルのページ タスクの使用ケース</a> 」を参照してください。	1440 (1 日)
アクティビティ リマインダ タスク	PPM ソリューションで、今日開始するアクティビティのリストを識別し、所有者にこれらのアクティビティを通知します。	2
アクティビティ ヘルス タスク	PPM ソリューションで、すべてのアクティビティのヘルスを更新します。これらのアクティビティに対する実際の長さ、変動、予測変動も更新します。	2
適合性ロールアップ タスク	PG&C ソリューションで、適合性ロールアップの計算を実行します。  <b>注意:</b> Product Governance & Compliance サーバ ライセンスが無効で使用不可の場合でも、このタスク リストには [適合性ロールアップ タスク] が表示されます。	30
明日が締切の通知タスク	PPM ソリューションで、「明日が締切」という通知を送信します。	2
管理キャッシュの 同期タスク	[Web クライアント]>[ツール]>[管理]>[キャッシュ ヘルス モニタ] を使用して、サーバを同期化します。	5
適合性移行タスク	PG&C ソリューションで、9.2.x から 9.2.2 にアップグレードする場合に、このタスクを有効にして 1 回実行します。実行後は、このタスクは不要になり無効にできます。このタスクは、従来のすべての組成を次の 3 つのカテゴリに分類します。[完全公表]、[一部公表]、または [未公表] です。426 ページの「 <a href="#">適合性移行タスク</a> 」を参照してください。	1 (このタスクはアップグレード担当者が 1 回のみ実行)

[タスクの設定] ページでタスク (行の任意の場所) をダブルクリックすると、タスクの設定の [一般情報] ウィンドウが表示されます。このウィンドウには次のプロパティが表示されます。プロパティを変更して新しい設定を保存できます。

プロパティ	説明
名前	設定するタスクの名前。
タスクの間隔	サーバがタスクのステータスを更新した後の定期的な間隔を分で表します。 通常、イベントがスキップされないように、[タスクのルックバック ウィンドウ] には、[タスクの間隔] の値より大きい値を常に設定する必要があります。
タスクの遅延時間	イベントを開始するまでの遅延時間を分で示します。
タスクのルックバック ウィンドウ	実行可能になったイベントを検索する際にタスク マネージャが何分前まで検索するかを指定します。  [タスクのルックバック ウィンドウ] を一時的に再設定する方法を含む使用ケースについては、264 ページの <a href="#">添付ファイルのページ タスクの使用ケース</a> を参照してください。  通常、イベントがスキップされないように、[タスクのルックバック ウィンドウ] には、[タスクの間隔] の値より大きい値を常に設定する必要があります。
タスクの最大イベント数	1 つのサーバで同時に実行できるイベントの数。
タスクの失敗時の再起動	イベントの失敗後にそのイベントを再起動するかどうかを指定します。「はい」または「いいえ」
タスクのアクセスサーバのロード	クラスタ内の異なるサーバにおいてイベントを同時に実行できるかどうかを指定します。「はい」または「いいえ」
無効なタスク	タスクが無効 (「はい」) か、有効 (「いいえ」) かを示します。  <b>注意:</b> 指定したタスクを実行するには、このプロパティを [いいえ] に設定する必要があります。また、別のタスクに対してこのプロパティを変更した場合、システムを再起動する必要はありません。

#### [タスクの設定] ウィンドウでタスクを無効化するには:

1. タスクをダブルクリックして開きます。
2. [タスクの無効化] リストで [はい] を選択します。
3. [保存] をクリックします。





# Product Collaboration の設定

扱うトピックは次のとおりです。

■ 参照指示プリファレンス .....	287
■ アイテムの説明を改訂する .....	290
■ Product Collaboration オブジェクト タブの設定に関する注意事項.....	295
■ Product Collaboration に影響を与える Agile PLM 設定を設定する際の注意 .....	295

この章では、Product Collaboration 管理設定に関する情報を提供します。

## 参照指示プリファレンス

Agile PLM 9.2 には、参照指示に関する 2 つのシステム プリファレンスが含まれています。1 つのプリファレンスは、参照指示が BOM テーブルで表示される方法を決定します。2 つ目のプリファレンスは、参照指示が Agile データベースに保存される形式も含め、個別参照指示の形式を決定します。

**注意** Agile PLM の初期導入後に [参照指示範囲インジケータ] のプリファレンスを変更すると、ユーザーデータに影響を及ぼす可能性があります。詳細は、後述する「参照指示範囲インジケータ」を参照してください。

これらのプリファレンス設定を更新したり変更を加える前に、「参照指示プリファレンス」に関するセクション全体をよくお読みください。

- 参照指示範囲の展開縮小を許可する
 

順序ではなく、範囲として、参照指示が BOM テーブルで表示されるようにします。たとえば、参照指示範囲 R1 から R5 は次のいずれかのように表示されます。
- 展開設定:
 

R1, R2, R3, R4, R5
- 縮小設定:
 

R1-R5
- 参照指示範囲のインジケータ
 

参照指示を指定された低および高範囲値の間に表示される記号です。デフォルトの文字は、ハイフン (-) です。使用する参照指示番号形式の一部にハイフンが含まれる場合、この設定を使用して、別の文字を参照指示として使用するよう選択することができます。更新や変更を行う前に、このプリファレンスに関する重要情報について、「参照指示範囲のインジケータ」を参照してください。

## 参照指示範囲の展開縮小を許可する

このプリファレンス (RDAREC) は、編集モードでないときに、参照指示が BOM テーブルで表示される方法を決定します。このプリファレンスは、Agile データベースに保存された参照指示データのユーザー エンドのディスプレイのみに影響します。

- 展開 - 参照指示範囲を展開形式で表示します。各参照指示は一覧表示され、範囲は縮小されません。たとえば、R1 で始まり、R5 で終わる参照指示範囲は次のように表示されます。

R1, R2, R3, R4, R5

- 縮小 - 参照指示範囲を縮小または連結形式で表示します。参照指示範囲 (連続した 3 つ、またはそれ以上の参照指示) は、最初の参照指示、参照指示範囲インジケータ、および最後の参照指示により示されています。たとえば、R1 で始まり、R5 で終わる参照指示範囲は次のように表示されます。

R1-R5

### 編集モード - 参照指示の編集が [展開/縮小] 設定により受ける影響

BOM の行が編集モードにある場合、RDAREC プリファレンス設定にかかわらず、参照指示は常に展開モードで表示されます。このため、ユーザーは個別の参照指示を選択して削除できます。

RDAREC プリファレンス設定にかかわらず、ユーザーは編集モードでは常に参照指示範囲を入力することができます。ユーザーが R1-R99 と入力し、この編集を保存すると、参照指示は RDAREC プリファレンス設定に基づき表示されます。[展開] 設定が選択されている場合、各個別参照指示は BOM テーブルに表示されます。

---

**注意** 本来、個別番号として入力されていたか、範囲として入力されていたかどうかにかかわらず、Agile PLM は参照指示を個別の参照指示番号として保存します。RDAREC プリファレンス設定は、BOM テーブルに表示される形式のみを決定します (展開または縮小)。

---

## 参照指示範囲のインジケータ

このプリファレンスは、どの文字が参照指示範囲を示すために使われるかを決定します。デフォルトの参照指示範囲インジケータはハイフン記号です:

-

[参照指示の範囲の展開縮小を許可する] (RDAREC) のプリファレンスが「縮小」と設定されている場合、この文字は順序の中で「不足している」参照指示を表します。たとえば、範囲 R1-R5 は、R1 で始まり、R5 で終わる参照指示からなる範囲を示しています。R2、R3、R4 は表示されていませんが、範囲インジケータ文字は、これらも範囲に含まれていることを示しています。

## なぜデフォルト以外の参照指示範囲インジケータを選択するのでしょうか？

ハイフン記号が参照指示番号の一部として含まれている参照指示形式を使用したい場合（たとえば、R3-AB46 といった形式の参照指示）、このシステム プリファレンスを使用して参照指示範囲インジケータとして別の文字を使用するよう選択することができます。コロン (:) 記号を参照指示範囲インジケータとして選択した場合、RDAREC は「縮小」に設定され、R3-AB44 で始まり R3-AB48 で終了する参照指示範囲が、次のように表されます。

R3-AB44:R3-AB48

RDAREC が「展開」に設定されている場合、R3-AB44 で始まり、R3-AB48 で終わる同じ参照指示範囲は次のように表示されます。

R3-AB44, R3-AB45, R3-AB46, R3-AB47, R3-AB48

**注意** 参照指示範囲インジケータ文字を変更することは、ユーザー データにも影響を及ぼします。初期 Agile 導入後の更新や変更には、細心の注意が必要です。参照指示を分けるために以前使用されたことのある参照指示範囲文字を選択すると、データの不一致が生じる可能性があります。

たとえば、範囲インジケータ文字としてコロン記号を選択し、参照指示を分割のためにハイフン記号を使用した後、ハイフン記号を範囲インジケータ文字として選択すると、範囲インジケータ値 R3-AB47 は同じ意味を持たなくなります。ハイフンはこの時点では参照指示値の一部分ではなく、参照指示範囲を表しています。

## 参照指示と先行ゼロの使用

以下のルールは、先行ゼロと併用された参照指示を BOM テーブルに入力する際に適用されます。

- ユーザーは、[展開/縮小] 設定にかかわらず、先行ゼロの参照指示を入力することができます。（「参照指示範囲の展開縮小を許可する」を参照してください。）
- 参照指示セグメント間の数字の数は一致する必要はありません。たとえば、R0001-R100 と入力することもできます。
- 数字の数が一致しない場合は、データベースに参照指示値を保存する際に、最初のセグメントの数字の数が使用されます。たとえば、R0001-R100 は R0001, R0002, ...R0100 というように保存されます。

## マルチセグメントの参照指示

以下のルールは、マルチセグメントを持つ参照指示、つまり参照指示に接尾辞がある場合に適用されます。

- 参照指示は最大 3 つの部分に分割されます。
  - 接頭辞 - 範囲インジケータや区切り文字として設計されていないすべての文字。
  - 数字 - 数字でなければなりません (0~9 の数字のみ)
  - 接尾辞 - 範囲インジケータや区切り文字として設計されていないすべての文字であり、かつ "0" (ゼロ) で始まらないもの。

- 最後の文字列のみが番号として認められます。

たとえば、参照指示値 A10B30D

- 接頭辞 = A10B
- 番号 = 30
- 接尾辞 = D

## アイテムの説明を改訂する

Agile PLM 9.2 はアイテム オブジェクトの [説明] フィールドの変更を管理する方法をいくつか提供しています。

**重要** リビジョン管理の [説明] フィールドの変更については、次の点に注意してください。アイテムの [説明] フィールドは MCO から変更できません。MCO は新規アイテム リビジョンを作成しません。MCO は ECO リビジョンまたは初版リビジョンから、そのベースとなっている [説明] フィールドを使用します。

3 つの基本動作:

- アイテム オブジェクトの変更

エンド ユーザーがアイテム オブジェクトの [説明] フィールドを編集します。この方法は、アイテムの [説明] フィールドに適用されたアイテム オブジェクトの [変更] 権限マスクにより管理されています。

**注意** アイテムの説明は、特定のアイテム バージョンに関連付けられています。実際の変更はアイテム オブジェクト自身に行われていますが (設計変更は不要)、結果の説明はリビジョン特有です。

- リビジョン管理 - すべてのアイテム オブジェクト

エンド ユーザーは、アイテムの [リビジョン] と [ライフサイクル] の属性がリビジョン管理され、このため、設計変更の [対象アイテム] テーブルで変更される方法と同じ方法で、設計変更の [対象アイテム] テーブルにあるアイテム [説明] フィールドを変更する必要があります。

この方法は、[対象アイテム] テーブルの [アイテムの説明] フィールドに適用された設計変更オブジェクトの [変更] 権限マスクにより管理されています。また、[アイテムの説明] フィールドは、[対象アイテム] テーブルで有効化されている必要があります。

- リビジョン管理 - 選択されたアイテムのサブクラス

この方法は、前の 2 つの方法の混合です。一部の選択されたアイテムのサブクラスは、[説明] フィールドのリビジョン管理の変更が必要であり、他のアイテムのサブクラスはこれを必要としません。

この方法は、前の方法の組み合わせで管理することができます。

- アイテムの [説明] フィールドに適用されたアイテム サブクラスの [変更] 権限マスク (リビジョン管理の説明変更を必要としないサブクラス用、ただし、ユーザーはアイテム オブジェクト自身の説明を変更することができます)。

[アイテムの説明] フィールドは、[対象アイテム] テーブルで有効化されている必要があります。

- [対象アイテム] テーブルの [アイテムの説明] フィールドに適用された設計変更オブジェクトの [変更] 権限マスク (リビジョン管理の変更を必要とするサブクラス用)。

さらに、設計変更オブジェクトの [変更] 権限マスクは、ワイルドカード \$AFFECTEDITEMTYPE を使用して、どのサブクラスが特定アイテムのサブクラス [説明] フィールドに対してリビジョン管理の変更を必要とするかを決定します。

## 設計変更オブジェクトの設定

設計変更オブジェクトの [対象アイテム] タブ (たとえば ECO) には、以下の 2 つの属性が含まれます。これらは、各 [アイテムの説明] 変更方法において適切に有効化または無効化されている必要があります。

□ 古いアイテムの説明

この [対象アイテム] の属性は、アイテムが設計変更追加されると、既存の [アイテムの説明] フィールドで作成されます。この属性は、[対象アイテム] タブで編集できません。デフォルトでは、この属性は無効となっています。

設計変更のリビジョン管理変更が必要なアイテム リビジョン方法については、この属性を有効化する必要があります。

□ アイテムの説明

これはデフォルトの [対象アイテム] テーブルのアイテム説明属性です。設計変更オブジェクトに対して適切な変更権限マスクがあれば、この属性を [対象アイテム] テーブルで編集することができます。

実際、これは [新規アイテムの説明] であり、必要に応じて名前を変更することができます。

これらの設計変更 [対象アイテム] テーブルの属性が両方とも有効な場合、[古いアイテムの説明] フィールドは自動的に最近リリースされたアイテムの説明を表示します (設計変更が基準となります)。[(新規) アイテムの説明] フィールドは、ユーザーがアイテムの保留中リビジョンに対し、希望のアイテムの説明を入力する際に使用できます。このシナリオでは、適切な設計変更 [変更] 権限マスクが必要であり、また [(新規) アイテムの説明] フィールドで適切な [適用先] プロパティが必要です。

## 各方法に対し、適切な変更権限マスクを設定する

下表は、各方法について、Agile 付属のデフォルト権限マスクを変更する方法を示しています。この表をガイドラインとして使用し、Agile PLM システムで希望の方法を設定してください。Agile 付属のデフォルトの役割と権限マスクを使用しない場合は、[例] の権限マスクを確認し、これらを表で説明されているアクションと比較してください。

### アイテム オブジェクトの説明フィールド変更

目的: アイテム オブジェクトのみのアイテムの説明を変更します。

デフォルトのアイテム権限マスク		デフォルトの変更権限マスク		設計変更 [対象アイテム] テーブル、「アイテムの 説明」の属性
名前	[適用先] プロパティ	名前	[適用先] プロパティ	
変更 (プレリミナリ アイテム)  (初版または保 留中リビジョ ンに適用)	追加: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	削除: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	非表示 (無効): 古いアイテムの説明 有効化および名前変更: 新規アイテムの説明: アイテムの説明
変更 (リリース済み アイテム)	追加: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	削除: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	非表示 (無効): 古いアイテムの説明 有効化および名前変更: 新規アイテムの説明: アイテムの説明

## リビジョン管理、すべてのアイテム

目的: 設計変更のみのアイテムの説明を変更します。

デフォルトのアイテム権限マスク		デフォルトの変更権限マスク		設計変更 [対象アイテム] テーブル、「アイテムの 説明」の属性
名前	[適用先] プロパティ	名前	[適用先] プロパティ	
変更 (プレリミナリ アイテム)  (初版または保 留中リビジョ ンに適用)	削除: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	追加: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	表示 (有効): 古いアイテムの説明 および 新規アイテムの説明
変更 (リリース済み アイテム)	削除: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	追加: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	表示 (有効): 古いアイテムの説明 および 新規アイテムの説明

目的: アイテム オブジェクトまたは設計変更でアイテムの説明を変更します。

デフォルトのアイテム権限マスク		デフォルトの変更権限マスク		設計変更 [対象アイテム] テーブル、「アイテムの 説明」の属性
名前	[適用先] プロパティ	名前	[適用先] プロパティ	
変更 (プレリミナリ アイテム)  (初版または保 留中リビジョ ンに適用)	追加: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	追加: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	表示 (有効):  古いアイテムの説明 および 新規アイテムの説明
変更 (リリース済み アイテム)	追加: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	追加: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	表示 (有効):  古いアイテムの説明 および 新規アイテムの説明

## リビジョン管理、すべてのアイテム

目的: 設計変更のみのアイテム タイプ (サブクラス) の説明を変更します。

**注意** 変更説明によってのみ変更される各アイテム タイプ (サブクラス) については、設計変更の変更権限マスク (\$AFFECTEDITEMTYPE の条件付) が必要です。

デフォルトのアイテム権限マスク		デフォルトの変更権限マスク		設計変更 [対象アイテム] テーブル、「アイテムの 説明」の属性
名前	[適用先] プロパティ	名前	[適用先] プロパティ	
変更 (プレリミナリ アイテム) (特定アイテム タイプ)  (初版または保 留中リビジョ ンに適用)	削除: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	追加: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明  ここで、 変更.対象アイテ ム. アイテム タイプ = (特定アイテム タイプ)  使用条件:  変更. \$AFFECTEDITE MTYPE = (特定 アイテム タイ プ)	表示 (有効):  古いアイテムの説明 および 新規アイテムの説明
変更 (リリース済み アイテム) (特定アイテム タイプ)	削除: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォル ト権限マスク	追加: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明  ここで、 変更.対象アイテ ム. アイテム タイプ = (特定アイテム タイプ)  使用条件:  変更. \$AFFECTEDITE MTYPE = (特定 アイテム タイ プ)	表示 (有効):  古いアイテムの説明 および 新規アイテムの説明

目的: アイテム オブジェクトまたは設計変更でアイテムの説明を変更します。

**注意** アイテム サブクラスで変更される各アイテム タイプ (サブクラス) については、変更権限マスク (タイトル ブロック.部品タイプの条件付) が必要です。



デフォルトのアイテム権限マスク		デフォルトの変更権限マスク		設計変更 [対象アイテム] テーブル、「アイテムの 説明」の属性
名前	[適用先] プロパティ	名前	[適用先] プロパティ	
変更 (プレリミナリ アイテム) (特定アイテム タイプ)  (初版または保 留中リビジョ ンに適用)	追加: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォ ルト権限マスク	削除: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	非表示 (無効): 古いアイテムの説明 有効化および名前変更: 新規アイテムの説明: アイテムの説明
変更 (リリース済み アイテム) (特定アイテム タイプ)	追加: アイテム.タイト ル ブロック.説 明	オブジェクト タイプ変更のす べてのデフォ ルト権限マスク	削除: 変更.対象アイテ ム.アイテムの説 明	非表示 (無効): 古いアイテムの説明 有効化および名前変更: 新規アイテムの説明: アイテムの説明

## Product Collaboration オブジェクト タブの設定に関する注意事項

- [BOM] タブと [製造元] タブの編集可能属性のみをレッドラインできます。詳細は、63 ページの「[読み取りフィールド](#)」を参照してください。
- アセンブリからアイテムを置換または削除する BOM 一括変更ウィザードで、ユーザーが一括置換または削除するアイテムを識別すると、そのアイテムを使用するアセンブリのテーブルがウィザードに表示されます。このテーブルは、アイテムの [使用箇所] タブから導出されます。つまり、アイテム オブジェクトの [使用箇所] タブに表示されるすべての属性は、BOM 一括変更ウィザードにも表示されます。

たとえば、アセンブリ リビジョンを BOM 一括変更ウィザードのテーブルに表示したい場合、アイテム オブジェクトの [使用箇所] タブの [リビジョン] 属性を有効に (見えるように) する必要があります。詳細は、52 ページの「[タブを設定する](#)」を参照してください。

## Product Collaboration に影響を与える Agile PLM 設定を設定する際の注意

- ユーザーが [名前を付けて保存] 機能を使用してアイテムを作成するときは、[製造元部品に複数アイテム] スマートルールが適用されます。つまり、元のアイテムに製造元部品があるときに、ユーザーがそのアイテムを表示して [名前を付けて保存] を選択すると、新規アイテムに対して、このスマートルールが適用

されます。スマートルールが [不可] に設定されている場合は、ユーザーに対してエラー メッセージが表示され、新規アイテムは作成できません。スマートルールが [警告] または [可] に設定されている場合、エラー メッセージは表示されず、新規アイテムが作成されます。

# 添付ファイルの管理

扱うトピックは次のとおりです。

■ 添付ファイルに関する企業のニーズを評価する .....	297
■ サブクラスのマークアップ .....	297
■ 添付ファイルに関する管理者設定 .....	298
■ 役割と権限を割り当てる .....	303
■ 添付ファイルへの簡易アクセス URL を生成する .....	308

この章では、管理者が把握する必要がある添付ファイルに関する情報を提供します。

## 添付ファイルに関する企業のニーズを評価する

Agile PLM 管理のその他の分野と同じように、最も重要なステップは管理者のプロパティ設定前にあります。企業による添付ファイルとファイル フォルダの使用をサポートする全体的なポリシーを決定する必要があります。企業の目標を定める際に、次のような要素を評価します。

- ファイル フォルダ サブクラスを使用するか、マークアップ サブクラスを使用するか。
- ファイル フォルダは非表示にするか、または表示可能にするか。
- 添付ファイルの名前の付け方。添付ファイルの命名は、指示されたシステムで行うか、または整理されたシステムで行うか。または、ユーザーによる添付ファイルの命名を許可し、ユーザーが特定の添付ファイルを検索するためにファイル フォルダを使用することを許可するかどうか。
- 企業では CAD デザインやグラフィック ファイルを作成するか。Agile の添付機能に関して考慮する必要があるその他の特別な目的や使用方法があるか。

## マークアップ サブクラス

**注意** 添付ファイルのレッドライン マークアップおよびファイル フォルダのアドホック レッドライン マークアップは、Agile Viewer で作成、変更および表示します。

添付ファイルのレッドライン マークアップを保存するには、ファイル フォルダ クラスのマークアップ サブクラスを使用します。様々なカテゴリのユーザーに適切な権限マスクを割り当てることによって、特定のユーザー（例：ベンダー）は各自のマークアップのみを表示および変更できますが、他のユーザーが作成したマークアップを表示することはできません。

マークアップ サブクラスの権限マスクの詳細は、307 ページの「[レッドライン マークアップに関するデフォルトの役割と権限](#)」を参照してください。

Agile PLM では、マークアップ サブクラス オブジェクトは、マークアップ オブジェクトの読み取り権限があるユーザーに表示されます。たとえば、ユーザーがファイル フォルダ クラスのオブジェクトを検索すると、検索結果には、マークアップ オブジェクトが含まれます。ただし、検索結果に含まれるレッドライン マーク

アップ ファイルを表示できるのは、そのレッドラインが関連付けられているアイテムの添付ファイルまたはファイル フォルダを表示しているときのみです。マークアップ サブクラス オブジェクトの [ファイル] タブからレッドライン マークアップを表示しようとすると、Agile Viewer を開くときにエラー メッセージが表示されます。

195 ページの「[ディスクバリ権限と読み取り権限](#)」も参照してください。

## 添付ファイルに関する管理者設定

このセクションでは、様々な管理者設定 – スマートルール、システム全体のプリファレンス、ユーザー プリファレンス – を集約しています。添付ファイルに付随する役割や権限は、次のセクションで説明されています。管理者の機能の詳細は、ノード別の章をご覧ください。

### Agile PLM におけるファイル管理

[サーバ設定]>[場所]>[ファイル マネージャ] タブの管理者設定は、添付ファイルおよびその元のファイルやコピーがある場所に関連する重要な設定です。この設定については、257 ページの「[Agile PLM におけるファイル管理](#)」に記載されています。

内部チェックサム ユーティリティは、不正なファイル処理に対するセキュリティ対策です。リセット権限とチェックサム計算プリファレンスについては、259 ページの「[ファイル チェックサムの処理](#)」で説明されています。

### スマートルール

Agile PLM スマートルールについては、第 11 章「一般システム設定」に記載されています。

### ファイルをリビジョンにコピーする

[ファイルをリビジョンにコピーする] のスマートルールは、新しいリビジョンへの添付ファイルの自動コピーを管理します。新しいリビジョンとは、アイテムを変更の [対象アイテム] テーブルに追加すると作成される保留中のアイテム リビジョンです。システムは、添付ファイルが追加されたときではなく、保留中の変更が作成されたときのみ、このスマートルールをチェックします。可能な設定は、[コピー]、[参照] (デフォルト)、[不可]、[警告付きでコピー]、[警告付きで参照] です。

下表は、次の例のような場合に、各設定がどのように機能するかを示しています。

- 部品 55、リビジョン B、[添付ファイル] タブテーブルには、添付ファイル Test.txt、バージョン 3 が表示されています。  
     ファイル名 = Test.txt、ファイル フォルダ = Folder004、フォルダ バージョン = 3
- 部品 55、リビジョン B は変更オブジェクトの [対象アイテム] タブに追加され、保留中リビジョン C が作成されました。

設定	しくみ
コピー	<p>アイテムの新しい保留中リビジョンに対して新規ファイル フォルダが作成され、添付ファイルの新しいコピーが作成されて新規ファイル フォルダに保存されます。</p> <p>したがって、保留中リビジョン C が作成されると、[添付ファイル] タブ テーブルにはリビジョン B と同じ添付ファイルが表示されます。つまり、リビジョン C はリビジョン B と同じ添付ファイルを継承します。</p> <p>ファイル名 = Test.txt、ファイル フォルダ = Folder004、フォルダ バージョン = 3</p>
参照	<p>既存のファイル フォルダが使用され、アイテムの保留中リビジョンの [添付ファイル] タブにこのファイル フォルダに対する新規参照が作成されます。</p>
不可	<p>保留中のリビジョン C が作成されると、[添付ファイル] タブ テーブルは空になります。添付ファイルの参照はコピーされません。</p>
警告付きでコピー	<p>[コピー] 設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。</p> <p>アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ ボックスが表示されます。アイテムを追加して添付ファイルをコピーする場合は、[追加] チェックボックスと [添付ファイル] チェックボックスの両方を選択します。アイテムを追加して添付ファイルをコピーしない場合は、[追加] チェックボックスのみを選択します。</p>
警告付きで参照	<p>[参照] 設定と同じですが、新しい保留中リビジョンに対して添付ファイルを選択しないオプションがあります。</p> <p>アイテムを保留中の ECO に追加すると、追加するアイテムごとに 1 行が含まれる警告ダイアログ ボックスが表示されます。アイテムを追加して既存の添付ファイルを参照する場合は、[追加] チェックボックスと [添付ファイル] チェックボックスの両方を選択します。アイテムを追加して添付ファイルを参照しない場合は、[追加] チェックボックスのみを選択します。</p>

**注意** ECO によって作成されたリビジョン (前述の例のリビジョン B など) に適用されるすべてのリビジョン別ルールも、アイテムの初版リビジョンに適用されます。

このスマートルールを「不可」と設定した場合、オブジェクトが変更に関連付けられた後に初版リビジョンに追加されたファイル (リリース済みリビジョン A) は後続のリビジョンにコピーされません。また、新しい変更が作成されても、初版リビジョンに追加されたすべてのファイルは、新規作成されたリビジョンに追加されません。

## 拡張子の異なる添付ファイルをチェックイン

このスマートルールは、チェックインされた添付ファイルが、チェックアウトされたファイルとは異なる拡張子のファイルを持つことができるかどうかを決定します。このスマートルールは、すべてのビジネス オブジェクトに適用されます。

ビジネス オブジェクトの添付ファイルが [最新-x] であり、添付ファイル フォルダのファイル拡張子を変更されたためにビジネス オブジェクトのチェックアウトされたファイルと異なる場合、このルールは上書きされます。

## プリファレンス

システム全体のプリファレンスについては、第 12 章「一般サーバ設定」に記載されています。

## ファイル名の接頭辞

Agile ファイル マネージャはファイル格納庫に保存されている各ファイルに添付された接頭辞を使用します。PLM 9.2 以前は、接頭辞は自動的に割り当てられ、データベース ユーザー名から作成されていました。しかし、この方法では、新しいデータベース ユーザー名が変更された場合、更新後にファイルを検索することが困難でした。そこで、各添付ファイルに自動的に追加される識別子を入力することができるようになりました。デフォルトは「agile」です。

## ファイルの複製を最適化

2 つ以上のファイル マネージャがある場合、このプリファレンスにより PLM システムは各ファイルを含むファイル マネージャを追跡することができます。複製の間、要求中の FM はファイルを含むその他の FM にのみ通信し、指定されたファイルを最も近い FM からダウンロードします (これはすべての FM サーバへの最短 "ping" により決定されます)。

設定は「有効」または「無効」です。「無効」は、最適化に関する問題を解決するために設定することができます。

## 添付ファイルとして保存する

[名前を付けて保存] のプリファレンスに関する利用可能な選択肢の詳細です。[名前を付けて保存] を使用して新しいビジネス オブジェクトを作成すると、同じ添付ファイルが含まれます。ここで、ファイルの新しいコピーを作成して (新しいファイル フォルダを含む)、元のビジネス オブジェクトに添付されていた同じファイル フォルダを再使用するか、ファイルをコピーしないか、またはユーザーが [名前を付けて保存] 操作を実行するたびに、これらの方法から 1 つを選択できるようにするか、いずれかの方法を選択します。

企業のビジネス慣習に最も適した設定を選択してください。

---

**注意** このプリファレンスは、下表で説明されているものを除き、[ファイル フォルダ] オブジェクト自身には適用されません。

---

**Product Portfolio Management** オブジェクトについては、このプリファレンスは現在のオブジェクトの添付ファイルに対してのみ適用されます。すべての子タスクには継承されません。このプリファレンスが適用されるのは、PPM テンプレートから新しいプログラムを作成する場合です。

下表は、次の例のような場合に、各設定がどのように機能するかを示しています。

- オブジェクト ABC は以下の添付ファイルを含みます。  
 ファイル名 = Test.txt、ファイル フォルダ = Folder004、フォルダ バージョン = 3
- ユーザーはオブジェクト ABC を開き、[名前を付けて保存] を使用してオブジェクト XYZ を作成します。

設定	しくみの一例
ファイルの新規コピーを作成	<p>オブジェクト XYZ の作成時に、Test.txt の新規コピーが新しいファイルフォルダに添付されます。オブジェクト XYZ の [添付ファイル] タブには、次の内容が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ ファイル名 = Test.txt</li> <li>□ ファイル フォルダ = Folder013</li> <li>□ フォルダ バージョン = 1</li> </ul> <p>Test.txt の新規コピーはファイル格納庫で作成され、新規フォルダ (Folder0013、バージョン 1) が作成されます。</p> <p>最終的な結果 (フォルダ バージョン 1 内のファイルの新規コピー、新規ファイル フォルダ) は、オブジェクト XYZ の [添付ファイル] タブで、[追加   ファイル] ボタンを使用して添付ファイル Test.txt を追加した場合と同様です。</p>
既存ファイルを参照	<p>オブジェクト XYZ の作成時に、元のオブジェクト ABC と同じ添付ファイルを再利用します。オブジェクト XYZ の [添付ファイル] タブは、オブジェクト ABC の [添付ファイル] タブと同じで、次の内容が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ ファイル名 = Test.txt</li> <li>□ ファイル フォルダ = Folder004</li> <li>□ フォルダ バージョン = 3</li> </ul> <p>この結果 (ファイル フォルダの添付ファイルが再利用される) は、ユーザーがオブジェクト XYZ の [添付ファイル] タブの [追加   検索] ボタンを使用し、オブジェクト ABC を検索し、その添付ファイル (Text.txt、Folder004、バージョン 3) を選択して添付ファイル Text.txt を追加した場合と同様です。</p>
ファイルをコピーしない	<p>オブジェクト XYZ の作成時に、添付ファイルは元のオブジェクト ABC からコピーされません。</p> <p>最終的な結果として、新規作成されたオブジェクト XYZ には添付ファイルが含まれず、このオブジェクトの [添付ファイル] タブは空になります。</p>
プロンプト	<p>ユーザーは、次のいずれかの [添付ファイルとして保存] 方法を選択するよう尋ねられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 既存ファイルを参照</li> <li>□ ファイルの新規コピーを作成</li> <li>□ ファイルをコピーしない</li> </ul> <p>[名前を付けて保存] 操作が実行されるとき、Agile PLM は常に各ユーザーにメッセージを表示します。ただし、元のオブジェクト ABC に添付ファイルがない場合 (添付ファイル テーブルが空の場合)、メッセージは表示されません。</p>

## プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする

このプリファレンスは、詳細機能を許可する Java アプレットにユーザー (特に Web クライアント ユーザー) がアクセスできるかどうかを管理します。PE と PG&C ソリューションに対する特定アプリケーションの他に、このプリファレンスは添付ファイルに関するシステムの動作を、以下の 3 つの方法で向上させます。

- Web クライアントでは、詳細ファイル アップローダが利用できます。
- 自動チェックインは、Web クライアントのチェックアウトの場所に基づきます。
- Web クライアントの 1 つの Zip ファイルではなく、個別ファイルのダウンロードを許可します。

**注意** Java クライアント ユーザーは、このプリファレンス設定にかかわらず、常にこれら詳細添付ファイル機能へアクセスできます。

このプリファレンスが「はい」に設定されている場合、エンドユーザーは [ファイル プロダクティビティ プリファレンス] の属性で適切なユーザー プロファイルを持たなければなりません。

このプリファレンスが「はい」に設定されており、Web クライアント ユーザーが詳細添付ファイル機能にアクセスできない場合、ユーザー プロファイルを確認してください。302 ページの「[\[ユーザー プロファイル\] の \[ファイル プロダクティビティ ユーザー プリファレンス\]](#)」も参照してください。

設定	結果
はい	[ファイル プロダクティビティ プリファレンス] の属性は、ユーザー プロファイル [プリファレンス] タブに表示されます。この設定は、「詳細」、「標準」、「プロンプト」とすることができます。「詳細」または「プロンプト」と設定すると、Web クライアント ユーザーは詳細添付ファイル機能にアクセスできます。
いいえ	[ファイル プロダクティビティ プリファレンス] の属性は、ユーザー プロファイル [プリファレンス] タブに表示されません。Web クライアント ユーザーは、詳細添付ファイル機能にアクセスできません。

## [ユーザー プロファイル] の [ファイル プロダクティビティ ユーザー プリファレンス]

**注意** [ファイル プロダクティビティ プリファレンス] はユーザー プリファレンスであり (厳密には、単に各ユーザー オブジェクトの属性)、システム全体のプリファレンスではありません。ここでは、[プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする] システム全体のプリファレンスと並んで説明しています。[ファイル プロダクティビティ プリファレンス] のユーザー プリファレンスは、[プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする] が [いいえ] に設定されている場合、ユーザーの [プロファイル] には表示されません。

ユーザー プロパティについては、第 8 章「ユーザーとユーザー グループ」に記載されています。

このユーザー設定は、ユーザーが詳細プロダクティビティ コンポーネントまたは標準コンポーネントにアクセスできるかどうか、もしくは毎回プロンプトを表示するかどうかを管理します。利用可能な設定は「プロンプト」、「詳細」、「標準」のいずれかです。デフォルトは「プロンプト」です。管理者はすべてのユーザーの値を設定することができます。各ユーザーはそれぞれのユーザー プロファイルの設定を変更することができます (この場合、システム全体のプリファレンス [プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする] が「はい」に設定されていることを前提とします)。

**注意** 『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』の「添付ファイル进行操作する」の章には、エンド ユーザーによるユーザー プロファイル [ファイル プロダクティビティ プリファレンス] の設定方法と各設定の動作説明が記載されています。

ユーザー プリファレンスが「標準」モードに設定されている場合、未対応ファイルは自動的に開かれませんが、代わりに、ユーザーは [保存] または [開く] のどちらかを選択するよう指示されます。



**注意** 必要とされる場所に適切な文字セットを選択するようにしてください。ビジネス オブジェクトからファイル フォルダ オブジェクトへファイルや URL を追加する際に問題が生じる可能性があります。ファイル フォルダの [ファイルの説明] の属性で文字セット = 数字となっているが、ビジネス オブジェクトの [ファイルの説明] の属性では文字セット = 英文字または英数字となっている場合は、後者が優先されます。つまり、ファイル フォルダの [ファイルの説明] (数値) で強制しようとしていた管理は失われ、システムは元の文字セットを保存します。

## 役割と権限を割り当てる

Agile PLM の役割の詳細は、第 9 章「役割」に記載されています。権限の詳細は、第 10 章「権限と権限マスク」に記載されています。新しい役割と権限を作成する前に、目的を慎重に評価してください。カスタマイズされた役割と権限を作成する必要がある場合でも、常にデフォルトの役割と権限マスクにより目的を達成することをお勧めします。

**注意** Agile PLM 9.0 では、ユーザーは、明示的なディスカバリおよび読み取り権限がない場合でも、自分が作成したファイル フォルダは開いて表示することができます。9.0 の動作を保持する場合、管理者は、次の説明に従って権限マスクの作成と割り当てを行う必要があります。

- Agile 8.5 から 9.2 に移行した場合 - ビジネス オブジェクトのユーザーはファイル フォルダにアクセスできないため、何も実行する必要はありません (PLM 9.0 以前は、ファイル フォルダ オブジェクトが存在しませんでした)。
- Agile PLM 9.0 から 9.2 に移行した場合 - 特定個人が作成したファイル フォルダを開いて表示するための明示的なアクセス権限を全ユーザーに付与します。権限の条件には、CreateUser = \$CREATEUSER を設定します。

以下のセクションでは、添付ファイルの機能を実現するための権限に関する情報を提供しています。

## 添付ファイル権限

一部の権限を使用すると、ユーザーは添付ファイルに対して操作を実行できます。ここでは、この権限を「添付ファイル権限」と呼びます。[フォルダ管理者] または [フォルダ マネージャ] としての役割を与えられたユーザーは、下記の情報をお読みください。

以下の権限により、添付ファイルにおけるユーザーの操作が可能となります。

- チェックイン
- チェックアウト
- チェックアウトのキャンセル
- ファイルの取り出し
- ファイル印刷
- ファイル表示
- 修正

**重要** ファイル取り出し権限はチェックアウト権限と連携して動作し、添付ファイルをユーザーのコンピュータに送信します。チェックアウト権限があってもファイル取り出し権限のないユーザーは、ファイルがチェックアウトされたことを履歴で確認できますが、そのファイルはユーザーにダウンロードされていません。管理者はファイル取り出し権限 (チェックアウトなし) を使用して、ユー

ザーによるファイルの取り出し (ファイルを開く、表示する) を許可できます。ただし、ユーザーは、プロダクト レコードでファイルを変更することはできません。

Agile PLM 9.2 では、ユーザーがビジネス オブジェクトの [添付ファイル] タブからすべての添付ファイル動作を実行できるようにするための権限マスクと役割を作成できます。この方法を使用すると、ファイル フォルダ オブジェクトに直接アクセスする必要がなくなります。このため、ユーザーがビジネス オブジェクトの [添付ファイル] からすべての添付ファイル動作を実行できる場合でも、ファイル フォルダ オブジェクトはユーザーに表示されません。

**注意** ビジネス オブジェクトの [添付ファイル] タブから行われる添付ファイル動作は、参照ファイル フォルダ オブジェクトで実行されます。たとえば、[添付ファイル] タブで添付ファイルをチェックアウトすることは、実際には参照ファイル フォルダでチェックアウトすることになります。しかし、ユーザーに適切な添付ファイル権限がある場合、ファイル フォルダ権限は必要ありません。

ただし、必要に応じて、添付ファイル権限をファイル フォルダ オブジェクトに直接適用することができ、これらのオブジェクトをアクティブに維持しているユーザーが優先的にファイル フォルダ オブジェクトに対する権限を使用できます。これらのユーザーはファイル フォルダ オブジェクトを検索し、開き、ファイルのチェックインやチェックアウトを [ファイル] タブで行い、ファイルの印刷や表示を行うことができます。ただし、ファイル フォルダに関してすべてのユーザーにこのような幅広い権限を与えないでください。いずれにしても、これらの役割はユーザーに正しい機能を与えることはできません。

一般ユーザーにとってより活用的なのは、ビジネス オブジェクトの特定クラスまたはサブクラス (または必要に応じて特定オブジェクト) に対して添付ファイル権限を持つことです。製造元部品に対して添付ファイル権限を持つユーザーは、添付ファイル テーブルで選択された [フォルダ バージョン] が最新バージョンであれば、製造元部品の [添付ファイル] タブで添付ファイル動作を実行できます。製造元部品のサブクラスに関するユーザーの添付ファイル権限が、たとえば「レジスタ」である場合、ユーザーはすべてのレジスタの [添付ファイル] タブで添付ファイル動作を実行できます。ただし、ここでも添付ファイル テーブルで指定された [フォルダ バージョン] が最新バージョンであることが前提となります。

最新バージョンが選択されているかぎり、ユーザーは (現在のオブジェクトの [添付ファイル] タブから) チェックインやチェックアウトを実行したり、その他の添付ファイル動作を実行することができます。

したがって、製造元部品に対してのみ添付ファイル権限を持つユーザーは、製造元部品の [添付ファイル] タブから添付ファイル動作を実行できますが、アイテムの [添付ファイル] タブからは実行できません。

要約すると、ユーザーには、添付ファイルを処理するために、ファイル フォルダ オブジェクトに対する権限は不要ですが、処理するビジネス オブジェクトに対する権限 (クラス、サブクラス、または特定のオブジェクトを指定する権限) は必要です。ユーザーはファイル フォルダ オブジェクトを作成、チェックイン、チェックアウトできますが、これは Agile PLM クラス、サブクラス、または彼らがビジネス オブジェクト添付ファイル機能権限を持つオブジェクトと関連付けられていることが前提となります。

## 役割における添付ファイル機能権限

デフォルトの役割の中には、通常その役割で処理するオブジェクト タイプ (その役割で作成や変更を行うように設計されたオブジェクト タイプ) に対して、前述のすべての添付ファイル権限を持つものがあります。これらは、他の関連オブジェクト タイプに対するファイル機能 (取得、表示、印刷など) を持つ場合もあります。

たとえば、[アイテム コンテンツ マネージャ] 役割には、アイテムおよび変更に対する 7 つの添付ファイル権限すべてが含まれています。また、製造元、製造元部品、価格オブジェクトに対する [ファイル取り出し]、[ファイル印刷]、[ファイル表示] 権限 (チェックアウトとチェックインはなし) も含まれます (つまり、アイテムの [製造元] と [価格] タブに表示されているオブジェクトです)。

[アイテム コンテンツ マネージャ] 役割の例に従って、ユーザーが Agile PLM システムのアクティビティに関連するすべてのオブジェクトの添付ファイルを取得、印刷、表示できる役割を作成できます。また、チェックイン/

チェックアウト権限を、作成や変更が可能なユーザーのみに制限することもできます。ファイル フォルダ オブジェクトに対する権限を含む役割では、ユーザーの添付ファイル機能を同レベルの精度まで制御できません。

## 修正権限と添付ファイル

修正権限によって、ユーザーはオブジェクトのタブにあるフィールドを変更または編集できます。修正権限は、[適用先] 属性の設定を使用して割り当てます。

Agile PLM は [修正] 権限マスクの [適用先] プロパティを使用して、特定のユーザー動作と添付ファイル機能を決定し、管理します。たとえば、あるユーザーが部品に対する [修正] 権限マスクを含む役割を持ち、そして [適用先] プロパティに [部品.添付ファイル.ファイルの説明] の属性が含まれている場合、このユーザーはオブジェクトの [添付ファイル] タブで [ファイルの説明] フィールドを修正することができます。この同じ修正動作は、参照ファイル オブジェクトの [ファイル] タブの [ファイルの説明] フィールドも修正しますが、ファイル フォルダ オブジェクトの修正権限マスクは必要ありません。

下表は、[修正] 権限マスク [適用先] プロパティと、それぞれが管理する添付ファイル動作を表示しています。

**注意** 下表は [ファイル フォルダ] または [ビジネス オブジェクト] を [適用先] 属性欄のクラスまたはサブクラスに対するプレースホルダーとして使用しています。権限マスクの実際のクラスまたはサブクラス名は、権限マスクで指定された再利用の条件により決定されます。(208 ページの「[権限マスクの構成要素](#)」を参照してください。)[注意] 欄に記載された権限マスク例を見る場合、[適用先] プロパティはその特定の権限マスクに対して適切です (たとえば、[製造元部品.添付ファイル.ファイル名])。

[注意] 欄には、ユーザーに動作を提供する権限マスクを示す権限マスク例が、少なくとも 1 つは記載されています。この表は、権限マスク例の完全な一覧ではありません。[修正] 権限マスクが必要な場合は、必要な権限マスクのみが表示されます ([例 - チェックイン (ファイル フォルダ)] など)。ユーザーの動作を有効化するためには、複数の権限マスク (修正権限マスクに加えて) が必要です。これらはすべて一覧表示されています。

ユーザー動作	権限	クラス	適用先	権限マスクまたは役割/注意の例
ファイル フォルダ添付ファイル動作				
ファイル フォルダにファイルを追加	修正	ファイル フォルダ	ファイル.ファイル名	例 - 変更 (ファイル フォルダ)
ファイル フォルダからファイルをチェックイン	チェックイン	ファイル フォルダ		例 - チェックイン (すべてのファイル フォルダ) (条件 = 例 - すべてのファイル フォルダ)  例 - チェックイン (ファイル フォルダ) (条件 = 例 - 私がチェックアウトしたすべてのファイル フォルダ)
ファイル フォルダからファイルを削除	修正	ファイル フォルダ	ファイル.ファイル名	例 - 変更 (ファイル フォルダ)

ユーザー動作	権限	クラス	適用先	権限マスクまたは役割/注意の例
<p>ファイル フォルダ役割の例:</p> <p>例 - ファイル フォルダ マネージャはユーザーに独自のファイル フォルダ オブジェクトで作業する権限を与えます。</p> <p>例 - ファイル フォルダ管理者はユーザーにすべてのファイル フォルダ オブジェクトで作業する権限を与えます。</p>				
ビジネス オブジェクト添付ファイル動作				
ビジネス オブジェクトに新規添付ファイルを追加	修正	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.ファイル名	例 - 変更 (製造元部品)
検索でビジネス オブジェクトに添付ファイルを追加	ディスカバリ	ビジネス オブジェクト (検索対象のビジネス オブジェクト)		たとえば、ユーザーが製造元部品に追加する添付ファイルからアイテム オブジェクトを検索している場合、彼は次のように要求します。  例 - ディスカバリ (アイテム)
	修正	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.ファイル名	例 - 変更 (製造元部品)
				[例 - コンポーネント エンジン] 役割には、これらの権限マスク例が含まれ、ユーザーが[追加   検索] を使用してアイテムを検索することによって、製造元部品に添付ファイルを追加できるようにします。
ビジネス オブジェクトに 1 つのファイル フォルダ内の複数の添付ファイルを追加し、[フォルダの説明] を指定	修正	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.ファイル名	例 - 変更 (製造元部品)
	修正	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.フォルダの説明	例 - 変更 (製造元部品)
ビジネス オブジェクトで添付ファイルをチェックイン	チェックイン	ビジネス オブジェクト		例 - チェックイン (製造元部品)
ビジネス オブジェクトから添付ファイルを削除	修正	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.ファイル名	例 - 変更 (製造元部品)

ユーザー動作	権限	クラス	適用先	権限マスクまたは役割/注意の例
ビジネス オブジェクトの [添付ファイル] タブで [ファイルの説明] を編集	修正	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.ファイルの説明	例 - 変更 (製造元部品)
ビジネス オブジェクトの [添付ファイル] タブで [フォルダの説明] を編集	修正	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.フォルダの説明	例 - 変更 (製造元部品)
ビジネス オブジェクトの [添付ファイル] タブのバージョンを表示	読み取り	ビジネス オブジェクト	添付ファイル.ファイル名	例 - 読み取り (製造元部品)

## レッドライン マークアップに関するデフォルトの役割と権限

Agile PLM では、ファイル フォルダのマークアップ サブクラスを使用して、Agile Viewer で作成された添付ファイルのレッドライン マークアップを保存します。マークアップ サブクラスの権限マスクのデフォルトセット、および [自分をマークアップ] と [すべてをマークアップ] の 2 つのデフォルト役割が用意されています。管理者はこれらの役割 (または同等の役割) を作成する必要があります。役割の例は、[例 - 自分をマークアップ] と [例 - 他のユーザーをマークアップ] を参照してください。297 ページの「[マークアップ サブクラス](#)」も参照してください。

**注意** [自分をマークアップ] と [すべてをマークアップ] のデフォルト役割は、[添付ファイルのレッドライン (自分)] (ARS) と [添付ファイルのレッドライン (他のユーザー)] (ARO) の各権限を置き換えるものです。リリース 9.2.2.2 では、ARS および ARO 権限は無効になりました。ARS と ARO の権限マスクも無効です。ただし、すでに割り当てられている ARS または ARO のカスタム権限マスクは削除されないため、マークアップ サブクラスの権限マスクまたは役割を使用してレッドライン機能を作成および割り当てるときに、ARS と ARO の権限マスクを参照できます。

ユーザーはマークアップ機能を使用して、次のタイプのレッドライン マークアップを作成および変更できます。

- 読み取り権限がある設計変更オブジェクトの対象アイテムについて、添付ファイルのレッドライン マークアップを作成および変更できます。
- 読み取り権限があるファイル フォルダ オブジェクトについて、アドホック ファイル フォルダのレッドライン マークアップを作成および変更できます。

[自分をマークアップ] 役割によって、ユーザーは設計変更の [対象アイテム] タブから添付ファイルをレッドラインできます。また、ファイル フォルダの [ファイル] タブにあるファイルをアドホック レッドラインできます。変更または削除できるのは、自分が作成したレッドラインのみです。[自分をマークアップ] 役割の権限マスクは [自分をマークアップ] の条件「ユーザー定義 1.ユーザーの作成、等しい、\$USER をマークアップ」に基づいています。

[他のユーザーをマークアップ] 役割によって、ユーザーは設計変更の [対象アイテム] タブから添付ファイルをレッドラインできます。また、ファイル フォルダの [ファイル] タブにあるファイルをアドホック レッドラインできます。変更または削除できるのは、他のユーザーが作成したレッドラインのみです。[他のユーザーをマークアップ] 役割の権限マスクは、[すべてのマークアップ] の条件に基づいています。下表は、マークアップ サブクラスの各デフォルト役割におけるデフォルト権限マスクを示しています。

[自分をマークアップ] 役割	[他のユーザーをマークアップ] 役割
私のマークアップの読み取り	すべてのマークアップの読み取り
私のマークアップを変更	すべてのマークアップを変更
私のマークアップをチェックアウト	すべてのマークアップをチェックアウト
私のマークアップをチェックイン	すべてのマークアップをチェックイン
マークアップの作成	マークアップの作成

## レッドライン マークアップ権限のガイドライン

次のルールとガイドラインは、レッドライン マークアップ機能に適用されます。

- ユーザーに特定マークアップ オブジェクトに対する読み取り権限がない場合、関連するレッドライン マークアップは Agile Viewer のマークアップ パネルに表示されません。
- ユーザーに Agile Viewer のマークアップ パネルに表示された特定マークアップ オブジェクトに対する修正権限がない場合、Agile Viewer のマークアップ パネルは無効になり、ユーザーは表示されたファイルのレッドライン マークアップを編集できません。
- ユーザーに [マークアップの作成] オブジェクト権限マスクがない場合は、Agile Viewer で新しいマークアップを作成できません。
- [管理]>[設定]>[データ設定]>[クラス] で、[ファイル フォルダ] クラスに対して、[ユーザー定義 1] の [ユーザーの作成] 属性を有効にする必要があります。デフォルト値は \$USER です。この属性は、各レッドライン マークアップの所有権を判断するために使用されます。
- マークアップ サブクラスと他のすべてのファイル フォルダ サブクラスとの間で権限マスクを区別するために、ファイル フォルダの [作成]、[読み取り]、[修正]、[チェックアウト]、および [チェックイン] 権限マスクでは、特定のファイル フォルダ サブクラス (例: マークアップ サブクラス、ファイル フォルダ サブクラス) を指定する条件を使用する必要があります。これによって、マークアップ サブクラスに固有の一連の権限マスクを使用できます。マークアップ固有の権限マスクが割り当てられるのは、レッドライン機能を付与する必要があるユーザーのみです。  
これとは対照的に、ファイル フォルダ基本クラスまたはファイル フォルダ クラスを指定する条件に基づく権限マスクは、すべてのファイル フォルダ サブクラスに適用されるため、(ユーザーにマークアップ サブクラスの権限マスクを割り当てないことによる) レッドライン機能の制限ができません。つまり、ファイル フォルダ基本クラスまたはファイル フォルダ クラスの条件に基づく権限マスクは、常にマークアップ サブクラス オブジェクトに適用されます。
- マークアップ サブクラスのデフォルトの権限マスクは、広範囲に定義された再利用の条件 ([すべてのマークアップ] と [自分をマークアップ]) に基づいています。ただし、マークアップ サブクラスの権限マスクを作成する際は、これらの条件に制限されません。たとえば、リスト属性またはマルチリスト属性を有効にし、その属性の設定に基づいてマークアップ機能を判断する条件を作成できます。

## 添付ファイルへの簡易アクセス URL を生成する

添付ファイル URL を使用して、次のことを実行できます。

- アイテム オブジェクトの添付ファイルに対する URL を生成する
- ファイル フォルダ オブジェクトのファイルに対する URL を生成する
- プログラム オブジェクトの [コンテンツ] タブにあるファイルに対する URL を生成する

- Agile から別のアプリケーションに URL を貼り付ける
- Agile アプリケーションの外部でファイルを開く

添付ファイル URL は、アイテム、アクティビティおよびファイル フォルダから、次の 2 つの方法で生成できます。

- Agile PLM コマンドを使用して URL をクリップボードにコピーする  
309 ページの「[Agile で生成される添付ファイルへの簡易アクセス URL](#)」を参照してください。
- スマートな添付ファイル URL を理解しやすい形式で手動入力する  
309 ページの「[ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL の形式](#)」を参照してください。

この URL 形式を使用すると、参照先のオブジェクトやファイルを識別できます。理解しやすい形式であるため、ファイルが配置されている場所を認識している場合は、Agile システムにログインしなくても、特定の添付ファイルを指し示す独自の URL を生成できます。

## Agile で生成される添付ファイルへの簡易アクセス URL

Web クライアントでは、オブジェクトの [添付ファイル] タブ、アクティビティの [コンテンツ] タブ、およびファイル フォルダの [ファイル] タブから、添付ファイルへの簡易アクセス URL を生成できます。そのためには、次のいずれかを実行した後で [ショートカットの取得] をクリックします。

- [添付ファイル]、[コンテンツ] または [ファイル] タブから 1 行のみ選択し、その行のファイルに対応するフォルダを指し示す URL を生成します。
- [添付ファイル]、[コンテンツ] または [ファイル] タブですべての行を選択し、そのタブにあるファイルのコレクションを指し示す URL を生成します。

---

**注意**      オブジェクトの URL を生成するには、そのオブジェクトに対する読み取り権限が必要です。

---

**注意**      [添付ファイル]、[コンテンツ] または [ファイル] タブで複数の行を選択すると、[ショートカットの取得] リンクは無効になります。

URL がクリップボードにコピーされます。コピーされた URL を別のアプリケーションまたはファイル (ワード プロセッサ ファイル、スプレッドシート ファイル、電子メールなど) に貼り付けます。

## ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL の形式

ファイルが配置されている場所を認識している場合は、Agile システムにログインしなくても、理解しやすいスマートな URL 形式を使用して、特定の添付ファイルを指し示す独自の URL を生成できます。

ユーザーが生成する添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL の形式は、オブジェクト タイプによって異なり、次の 3 つのメイン カテゴリに分類されます。

- [アイテムの添付ファイルへの簡易アクセス URL の形式](#) (310 ページの「アイテムの添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL の形式」を参照)
- [ファイル フォルダへの簡易アクセス URL の形式](#) (312 ページの「ファイル フォルダへのスマートな簡易アクセス URL の形式」を参照)
- [プログラム コンテンツへの簡易アクセス URL の形式](#) (312 ページの「プログラム コンテンツへのスマートな簡易アクセス URL の形式」を参照)



## アイテムの添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL の形式

アイテムの添付ファイルに対するスマートな URL は、次の形式で生成できます。

```
http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>
[/Revision/ChangeNumber]/files/Folder/<FolderNumber>[/<FileAction>]
```

または

```
http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>
[/Revision/ChangeNumber]/files/<FileName>[/<FileAction>]
```

ここで、

パラメータ	説明
server port Virtual Path	Agile インスタンスを識別します。
link	テキスト「link」は、URL を Agile サーバへの特別な添付ファイル URL として識別します。
ObjectType	アイテム、ファイル フォルダ、またはプログラム/アクティビティのサブクラスを参照します。
ObjectNumber	オブジェクト タイプの実際のオブジェクト番号を参照します。
Revision	リビジョンに対応する変更番号を指定してアイテム リビジョンを識別します。
ChangeNumber	アイテムのそれぞれのリビジョン (リリース済みや保留中) を識別します。番号を指定しない場合は、最新のリリース済みリビジョンが添付されます。番号を指定せず、アイテムにリリース済み変更がない場合は、初版リビジョンが添付されます。
Folder	オブジェクトが実際のファイルではなくファイル フォルダであることを示します。
FolderNumber	選択した行に関連するファイル フォルダを識別します。取り出されるファイルのバージョンは、アイテムの特定リビジョンに基づく最新バージョンです。
FileName	指定したアイテムのバージョンに添付された特定ファイルの名前を参照します。
FileAction	<p>取り出されたファイルに対して実行するアクションを決定します。値は GET または VIEW です。指定しない場合は、GET が実行されます。</p> <p>URL に指定されたパラメータが単一のファイルを指し示す場合は、そのファイルが元の形式で取り出されます。URL に指定されたパラメータがファイルのコレクションを指し示す場合は、それらのファイルが「Download.zip」という名前の ZIP されたファイルとして返されます。</p>

アイテムの特定のリビジョンに、[添付ファイル] タブの同じフォルダ内にある複数のファイルが含まれ、そのファイルが別のバージョンのフォルダから参照されている場合、フォルダベースの URL は、そのアイテム リビジョンの [添付ファイル] タブから実際の添付ファイル セットを反映できません。



アイテムの添付ファイルに対してユーザーが生成する URL の例は、次のとおりです。

- <http://myappserver/mycompany/Link/Document/DOC0001/files/Folder/Folder001>  
DOC0001 の最新のリリース済みリビジョンに添付された Folder001 内の全ファイルを含む ZIP ファイルが返されます。
- <http://myappserver/mycompany/Link/Document/DOC0001/files/Folder/Folder001/VIEW>  
DOC0001 の最新のリリース済みリビジョンに添付された Folder001 内の全ファイルが Viewer に表示されます。

## アイテム オブジェクトの添付ファイルへのスマートな簡易アクセス URL に関する制限

アイテム オブジェクトの添付ファイルを取り出す際に、次の制限事項が適用されます。

- アイテムの特定のリビジョンに、[添付ファイル] タブの同じフォルダに属する複数のファイルが含まれ、それらのファイルが別のバージョンのフォルダから参照されている場合、フォルダベースの URL は、そのアイテム リビジョンの [添付ファイル] タブから実際の添付ファイル セットを反映できません。たとえば、アイテム P0001 があり、そのアイテムのリビジョン A に 2 つの添付ファイル P0001\_3dmodel.dwg と P0001\_specs.pdf があり、両方とも Folder1 に存在するとします。DWG ファイルはファイル フォルダのバージョン 2 から参照され、PDF ファイルはファイル フォルダのバージョン 5 から参照されていると想定します。この場合に、次の URL を指定したとします。

<http://server:port/<VirtualPath>/link/Part/P0001/Revision/C0001/files/Folder/Folder1>

Folder1 のバージョン 5 またはバージョン 2 のいずれかに含まれるすべてのファイルが返されます (結果は予測不能です)。

一方、次の URL を指定したとします。

<http://server:port/<VirtualPath>/link/Part/P0001/Revision/C0001/files/ALL>

アイテムのリビジョン A に属するファイルの完全なセットが返され、このセットには、Folder1 のバージョン 2 からの P0001\_3dmodel.dwg および Folder1 のバージョン 5 からの P0001\_specs.pdf が含まれます。

- アイテムの [添付ファイル] タブで参照されているファイル フォルダの履歴バージョンからファイルを返す、アイテムベースの URL を生成することはできません。ただし、これを実現するために、ユーザーはフォルダベースの URL を生成できます。
- 次のような URL を指定したとします。

[http://server:port/<VirtualPath>/link/ObjectType/ObjectNumber\[/Rev/ChangeNumber\]/files/FileName\[/FileAction\]](http://server:port/<VirtualPath>/link/ObjectType/ObjectNumber[/Rev/ChangeNumber]/files/FileName[/FileAction])

同じ名前 (ファイル名とファイル拡張子が同じ) の 2 つのファイルが添付ファイル テーブルに存在し、ユーザーがファイル名を使用して URL を生成した場合は、最初に検出されたファイルのみが取り出されます。アイテムの [添付ファイル] タブにあるファイルへのアクセスに ALL オプションを使用し、添付ファイル テーブルに同じ名前のファイルが複数存在する場合、または、ファイル フォルダのすべてのファイルを返すように URL を生成し、同じ名前のファイルが複数存在する場合は、同じ名前のファイルが複数存在することを示すエラーが表示され、ファイルの有効な ZIP アーカイブは生成されません。

- プログラムの [コンテンツ] タブにあるファイルへのアクセスに ALL オプションを使用し、同じ名前のファイルが複数存在する場合は、同じ名前のファイルが複数存在することを示すエラーが表示され、ファイルの有効な ZIP アーカイブは生成されません。

## ファイル フォルダへのスマートな簡易アクセス URL の形式

ファイル フォルダに対するスマートな URL は、次の形式で生成できます。

```
http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>
/files/<FileName>[/<version>][/<FileAction>]
```

ここで、

パラメータ	説明
Server Port Virtual Path	Agile インスタンスを識別します。
link	テキスト「link」は、URL を Agile サーバへの特別な添付ファイル URL として識別します。
version	ファイル フォルダの特定バージョンを識別します。値には、数値または文字列を指定できます。デフォルトは LATEST です。
FileName	フォルダ内の特定ファイルの名前を参照するか、文字列 ALL によってフォルダの特定バージョン内の全ファイルを添付します。  フォルダの特定バージョン内に同じ名前のファイルが複数存在し、ファイル名に基づいて URL が生成されている場合は、ファイルの最初のバージョンのみが添付されます。同じ名前のファイルが複数存在するフォルダへのアクセスに ALL 値は使用できません。
FileAction	取り出されたファイルに対して実行するアクションを決定します。値は GET または VIEW です。指定しない場合は、GET が実行されます。  URL に指定されたパラメータが単一のファイルを指し示す場合は、そのファイルが元の形式で取り出されます。URL に指定されたパラメータがファイルのコレクションを指し示す場合は、それらのファイルが「Download.zip」という名前の ZIP されたファイルとして返されます。

ファイル フォルダの添付ファイルに対してユーザーが生成する URL の例は、次のとおりです。

- <http://myappserver/mycompany/Link/FileFolder/Folder0001/files/abc.txt/1>  
Folder0001 のバージョン 1 から abc.txt ファイルが取得されます。
- <http://myappserver/mycompany/Link/FileFolder/Folder0001/files/ALL/VIEW>  
Folder001 の最新バージョン内の全ファイルが Viewer に表示されます。

## プログラム コンテンツへのスマートな簡易アクセス URL の形式

プログラムおよびアクティビティの [コンテンツ] タブにあるファイルに対するスマートな URL を生成できます。[コンテンツ] タブでは、任意のオブジェクトを有効なコンテンツとして指定したり、[添付ファイル] タブと同様に、外部ファイルを追加することができます。ただし、[コンテンツ] タブでは、添付されたファイルに関連するフォルダ オブジェクトが有効なコンテンツとして保存されます。このため、取り出す際は、フォルダ全体を添付する必要があります。

[コンテンツ] タブにあるファイルに対するスマートな URL は、次の形式で生成されます。

```
http://<server:port>/<VirtualPath>/link/<ObjectType>/<ObjectNumber>
/content/Folder/<FolderNumber>[/<FileAction>]
```

ここで、

ObjectType	プログラム オブジェクトのサブクラスを表します。
ObjectNumber	プログラム オブジェクトの識別子を表します。
content	[コンテンツ] タブを示します。
Folder	特定のフォルダを取り出すことを示します。
FolderNumber	[コンテンツ] タブから取り出すフォルダの番号を参照します。フォルダの最新バージョンが常に取り出されます。
FileAction	<p>取り出されたファイルに対して実行するアクションを決定します。値は GET または VIEW です。指定しない場合は、GET が実行されます。</p> <p>URL に指定されたパラメータが単一のファイルを指し示す場合は、そのファイルが元の形式で取り出されます。URL に指定されたパラメータがファイルのコレクションを指し示す場合は、それらのファイルが「Download.zip」という名前の ZIP されたファイルとして返されます。</p>

## 簡易アクセス URL を使用して添付ファイルにアクセスする

添付ファイルへの簡易アクセス URL をクリックまたは開くと、ログイン ポップアップが表示されます。添付ファイルを表示するには、Agile システムにログインする必要があります。次に、Agile PLM によって、URL に指定されたファイルまたはファイル セットを取得または表示する適切な権限がユーザーにあるかどうかを検証されます。添付ファイルは、サポートされているすべてのブラウザ、Agile Viewer、またはファイルが作成されたアプリケーションで表示可能です。

例:

1. 電子メールで、添付ファイルへの簡易アクセス URL をクリックすると、Agile のログイン ポップアップが表示されます。
2. 必要なログイン情報を入力します。

ファイルを読み取って表示するための適切な権限がユーザーにあるかどうかを検証されます。

---

**注意** URL がファイルのコレクションを返し、ユーザーに 1 つ以上のファイルに対する適切な取り出しまたは表示権限がない場合、返されるコレクションからそれらのファイルが除外されます。ただし、適切な取り出しまたは表示権限のある残りのファイルを含むファイルのコレクションがユーザーに返されます。

---



# Product Cost Management の設定

扱うトピックは次のとおりです。

▪ Product Cost Management の設定チェックリスト .....	315
▪ 出荷先の場所 .....	316
▪ Product Cost Management の役割 .....	317
▪ 見積依頼取引条件 .....	317
▪ Product Cost Management のクラスを設定する .....	321
▪ BOM フィルタを設定する .....	335

この章では、システム設定の [Product Cost Management] フォルダのノードについて紹介します。

## Product Cost Management の設定チェックリスト

以下のチェックリストを使用し、Product Cost Management に対して Agile PLM サーバを設定します。

- 会社プロファイルの定義 - 会社の名称、住所、電話番号、URL、および会社の通貨を指定します。詳細は、247 ページの「[組織のプロファイル](#)」を参照してください。
- 通貨換算レートの定義 - サプライヤは別の通貨で価格を見積もることができます。プロジェクト通貨に変換された標準化価格を表示するためには、通貨換算レートのテーブルを保持する必要があります。詳細は、247 ページの「[通貨換算レート](#)」を参照してください。
- 会社の出荷先の場所の定義 - 出荷先の場所は、Product Cost Management の機能を利用する上で非常に重要です。詳細は、316 ページの「[出荷先の場所](#)」を参照してください。
- スマートルールの設定 - 価格フィールド、有効期間、見積履歴の自動発行、部品分類に関するスマートルールを適切に設定してください。詳細は、「[スマートルール](#)」を参照してください。
- Product Cost Management のクラスの設定 - Product Cost Management に対して Agile PLM クラスを設定します。詳細は、「[Product Cost Management のクラスを設定する](#)」を参照してください。
- ソーシング プロジェクトクラスの設定 - [ソーシング プロジェクト] クラスをカスタマイズするには、いくつかの方法があります。これらは、そのサブクラスすべてにも適用されます。たとえば、異なるタブのユーザー設定フィールドを有効にし、[AML] タブの属性を設定して他のアイテムや製造元部品の属性から値を取り出し、見積依頼回答の価格計算やその他費用フィールドを定義できます。詳細は、「[Product Cost Management のクラスを設定する](#)」を参照してください。
- サプライヤの定義 - ソーシング プロジェクト マネージャと見積依頼マネージャが協力して作業を行うサプライヤを定義します。これは、[組織管理者] の役割を持つ別のユーザーの責任である場合もあります。サプライヤの作成と管理の詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』を参照してください。

---

**注意**      また、サプライヤ管理者は、特定のサプライヤについて、連絡先ユーザーとライン カードを定義しておく必要があります。サプライヤ ユーザーは、Product Cost Management の機能に対し、制限付のアクセスを持っています。

---

- サプライヤ提示格付の定義 - Agile PLM リスト ライブラリには、[サプライヤ提示格付] というリストがあります。このリストは、サプライヤの提示を格付けするために使用されます。この格付リストはカスタマイズ可能です。デフォルトでは、格付けは「認証済み」、「推奨」、「未承認 (提示可)」、「未承認 (提示不可)」となっています。リストのカスタマイズ方法の詳細は、79 ページの「[リスト](#)」を参照してください。
- Product Cost Management のユーザーと役割の定義 - ソーシング プロジェクト、RFQ、価格を作成および管理するユーザーを定義します。これらのユーザーに、[ソーシング管理者]、[ソーシング プロジェクト マネージャ]、[見積依頼マネージャ]、[価格管理者] など適切な役割を割り当てます。詳細は、「[Product Cost Management の役割](#)」を参照してください。ソーシング プロジェクトを作成するユーザーには、少なくとも 1 つの認定出荷先の場所を指定する必要があります。認定出荷先の場所がなければ、ユーザーはプロジェクトを「ドラフト」から「オープン」ステータスに移行できません。新規ユーザーの設定方法については、141 ページの「[ユーザーとユーザー グループ](#)」を参照してください。
- 管理者権限の設定 - Java クライアントの [管理] タブに [見積依頼取引条件] ノードを表示するには、管理者権限を設定する必要があります。「[見積依頼取引条件ノードを設定する](#)」を参照してください。
- [ソーシング プロジェクト] クラスの新規サブクラスの定義 - Agile PLM は [ソーシング プロジェクト] と呼ばれる [ソーシング プロジェクト] クラスのサブクラスを 1 つ提供しますが、特定タイプのプロジェクトについては、[ソーシング プロジェクト] を拡張し、任意の数のサブクラスを定義することができます。詳細は、39 ページの「[クラス](#)」を参照してください。
- BOM フィルタの設定 - PCM で BOM フィルタ機能を使用するには、[データとワークフローの設定]> [クラス]> [部品] で特定の属性を作成して設定する必要があります。設定後にこの機能を使用する方法の詳細は、『Agile PLM Product Cost Management ユーザー・ガイド』の「ソーシング プロジェクトを使用する」の章をご覧ください。「[BOM フィルタを設定する](#)」も参照してください。
- オブジェクト間の関係の確立 - フィールド間の関係を確認する方法の詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』の「ビジネス オブジェクトを使用する」の章を参照してください。

## 出荷先の場所

出荷先の場所は、ソーシング プロジェクトの区別とサプライヤへの RFQ の配布のために重要です。

**出荷先の場所を追加するには:**

1. [システム設定]>[Product Cost Management] を順に選択し、[出荷先の場所] をダブルクリックします。[出荷先の場所] ウィンドウが開きます。
2. [新規作成] アイコンをクリックします。[出荷先場所の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. 新しい出荷先の場所の名前と場所コードを入力します。他のフィールドには必要に応じて値を入力します。
4. [OK] をクリックします。リストに新しい出荷先の場所が表示されます。

- 
- 注意** ソーシング プロジェクト マネージャのユーザー プロファイルには、少なくとも 1 つの出荷先の場所が定義されている必要があります。定義されていない場合は、作成したプロジェクトを開くことができません。同様に、各ソーシング プロジェクトには、指定した出荷先の場所が必要です。プロジェクトの出荷先の場所によって、ライン カードに基づいて RFQ をサプライヤに配布する方法が決定します。
- 注意** 出荷先の場所をソーシング プロジェクトで使用 (参照) するときは、そのプロジェクトの段階を [ドラフト] または [オープン] にしてください。Java クライアントで出荷先の場所は削除できません。削除しようとすると、警告メッセージ [別のオブジェクトで使用されているため、出荷先を削除できませんでした。] が表示されます。
- 

## Product Cost Management の役割

Agile PLM には、事前定義の役割が用意されており、Product Cost Management のユーザーに割り当てることができます。これらの役割によって、ソーシング プロジェクト、RFQ、価格、ディスカッション、サプライヤ、顧客、および PCO を使用するための権限がユーザーに付与されます。

名前が接頭辞「(限定)」で始まる役割は、サプライヤを対象としています。事前定義の Agile PLM 役割の完全なリストは、「デフォルトの Agile PLM 役割」を参照してください。

- 
- 注意** Agile PLM 管理者が、ソーシング プロジェクトの使用に必要な権限をユーザーに割り当てていない場合でも、プロジェクトへのアクセス権限がある他のユーザーは、その権限を共有できます。このため、そのユーザーには、プロジェクトおよびそれに含まれるすべてのオブジェクトに適用される同じ権限が付与されることになります。ただし、共有されていない他のプロジェクトにはアクセスできません。
- 

## 見積依頼取引条件

サプライヤの RFQ に対するアクセスは、Java クライアントで指定した見積依頼取引条件にサプライヤが電子的に合意するまで制限できます。[取引条件] ページの内容を設定して保存するには、その前に、[見積依頼取引条件] ノードを Java クライアントで有効にする必要があります。

[見積依頼取引条件] 機能を使用するには、いくつかのタスクを完了する必要があります。

### 見積依頼取引条件を有効化するためのタスク:

1. Java クライアントで見積依頼取引条件ノードを有効化します。このタスクの詳細は、「[見積依頼取引条件ノードを設定する](#)」を参照してください。
2. サプライヤが読んで承諾する必要のある見積依頼取引条件の内容を設定して入力します。このタスクの詳細は、「[見積依頼取引条件内容を設定および保存する](#)」を参照してください。
3. [ソーシング プロジェクト] クラスで、[見積依頼取引条件] 属性を表示します。このタスクの詳細は、「[ソーシング プロジェクト クラスで属性を表示する](#)」を参照してください。
4. [見積依頼] クラスで、[見積依頼取引条件] 属性を表示します。このタスクの詳細は、「[見積依頼クラスで属性を表示する](#)」を参照してください。
5. [一般情報の変更 (私のソーシング プロジェクト)] 権限を更新し、次の [適用先] フィールド値に含めます。ソーシング プロジェクト、ソーシング プロジェクト、見積依頼取引条件要求。このタスクの詳細は、「[私のソーシング プロジェクトを変更するための条件を追加する](#)」を参照してください。

6. [読み取り (見積依頼)] 権限を更新し、次の [適用先] フィールド値に含めます。見積依頼、RFQ ヘッダ、見積依頼取引条件要求。このタスクの詳細は、「[ソーシング プロジェクト マネージャ役割で、RFQ 権限を読み取るために条件を追加する](#)」を参照してください。
7. [読み取り (見積依頼)] 権限を更新し、次の [適用先] フィールド値に含めます。ステータス承認日、ステータス承認ユーザー、ステータス ステータス、ステータス サプライヤ。このタスクの詳細は、「[読み取り権限に条件を追加する](#)」を参照してください。

---

**注意** 条件は、必要に応じて、プロジェクト レベルで必須にすることができます。このタスクの詳細は、『Product Cost Management ユーザー ガイド』を参照してください。

---

## 見積依頼取引条件ノードを設定する

Java クライアントで [見積依頼取引条件] ノードを表示するには、ユーザーの管理者権限を設定する必要があります。デフォルトでは、無効となっています。

管理者権限の詳細、および管理者ノードをユーザーに対して使用可能にする方法の詳細は、193 ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」を参照してください。

### 管理者権限を設定する

1. [設定] > [ユーザー設定] > [権限] へ進みます。
2. [管理者] 権限キーをダブルクリックして、[管理者] ウィンドウを開きます。
3. [条件] ドロップダウン リストで [すべて表示] を選択し、[適用] をクリックします。
4. [管理者] 権限ラインをダブルクリックします。[権限:管理者] ウィンドウが開きます。
5. [適用先] フィールドの矢印ボタンをクリックします。
6. [選択肢] リストから [見積依頼取引条件] オプションを選択して、[選択済み] リストに移動します。[OK] をクリックします。
7. [有効化] フィールドが「はい」に設定されていることを確認します。
8. [保存] および [閉じる] をクリックします。
9. [管理者権限] のウィンドウを閉じます。
10. Java クライアントからログアウトし、再度ログインします。[設定] > [システム設定] > [Product Cost Management] の下に [見積依頼取引条件] ノードが表示されます。

## 見積依頼取引条件内容を設定および保存する

[見積依頼取引条件] ノードを有効化した後は、内容を設定し、保存します。

### 見積依頼取引条件内容の作成

1. [設定] で、[システム設定] ノードを拡張し、[Product Cost Management] を拡張します。
2. [見積依頼取引条件] をダブルクリックします。[見積依頼取引条件] ウィンドウが表示されます。
3. RFQ の取引条件の内容をテキスト フィールドに入力します。
4. [保存] および [閉じる] をクリックします。



## ソーシング プロジェクト クラスで属性を表示する

[ソーシング プロジェクト] クラスの [一般情報] タブで [見積依頼取引条件要求] 属性を表示します。

**属性を表示するには:**

1. [設定]>[データ設定] へ進み、[クラス] をダブルクリックします。
2. [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] タブで [一般情報] をダブルクリックします。
4. [属性: 一般情報] タブへ進み、[見積依頼取引条件要求] をダブルクリックします。
5. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
6. [保存] および [閉じる] をクリックします。

**または**

1. [設定]>[データ設定] へ進み、[クラス] をダブルクリックします。
2. [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] タブで [一般情報] をダブルクリックします。
4. [属性:一般情報] タブへ進み、[見積依頼取引条件要求] をダブルクリックします。
5. [検索条件の有効化] で [はい] を選択します。
6. [保存] および [閉じる] をクリックします。

## 見積依頼クラスで属性を表示する

[見積依頼] クラスで、[見積依頼取引条件要求] 属性を表示する必要があります。

**属性を表示するには:**

1. [設定]>[データ設定] へ進み、[クラス] をダブルクリックします。
2. [見積依頼] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] タブへ進み、[カバー ページ] をダブルクリックします。
4. [属性:カバー ページ] タブへ進み、[見積依頼取引条件要求] をダブルクリックします。
5. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
6. [保存] および [閉じる] をクリックします。

## 見積依頼回答の [入札参加意思] 属性

[入札参加意思] 属性のリスト エントリは、事前に定義されています (つまり、Agile で事前設定されています)。リスト項目の新規追加、変更または削除はできません。

**利用可能なリスト項目を表示するには:**

1. [見積依頼] クラスで、[ユーザー インターフェース タブ] タブへ進みます。
2. [回答] 行をダブルクリックし、[属性:回答] タブへ進みます。

3. [入札参加意思] 属性をダブルクリックします。
4. [属性:入札参加意思] ウィンドウで、[詳細表示] ボタンをクリックします。[リスト:回答 - 入札参加意思] ウィンドウが開きます。
5. [リスト] タブへ進み、事前定義のエントリを確認します。

## 私のソーシング プロジェクトを変更するための条件を追加する

[一般情報の変更 (私のソーシング プロジェクト)] 権限に条件を追加する必要があります。

**[一般情報の変更 (私のソーシング プロジェクト)] 権限に条件を追加するには:**

1. [設定]>[ユーザー設定]>[権限] へ進みます。
2. [すべての権限] をダブルクリックします。
3. [値] フィールドに「私のソーシング プロジェクトを変更」と入力し、[適用] をクリックします。
4. [私のソーシング プロジェクトを変更] の行をダブルクリックします。
5. [適用先] フィールドの隣にある矢印ボタンをクリックします。
6. [選択肢] セルから [ソーシング プロジェクト.一般情報.見積依頼取引条件要求] を選択して、[選択済み] セルに移動します。

**注意** [選択肢] リストに [ソーシング プロジェクト.一般情報.見積依頼取引条件要求] が表示されない場合は、[表示属性のみ表示] チェックボックスの選択を解除します。

## ソーシング プロジェクト マネージャ役割で、RFQ 権限を読み取るために条件を追加する

**ソーシング プロジェクト マネージャ役割で、RFQ 権限を読み取るために条件を追加するには:**

1. [設定]>[ユーザー設定] へ進み、[役割] をダブルクリックします。
2. [値] フィールドに「ソーシング プロジェクト マネージャ」と入力し、[適用] をクリックします。
3. [ソーシング プロジェクト マネージャ] をダブルクリックします。
4. [権限] タブへ進みます。
5. [名前] カラムで [読み取り (見積依頼)] をダブルクリックします。
6. [適用先] フィールドとなりの矢印ボタンをクリックします。
7. [選択肢] セルから [見積依頼.RFQ ヘッダ.見積依頼取引条件要求] を選択して、[選択済み] セルに移動します。
8. [OK] をクリックします。

## 読み取り権限に条件を追加する

**読み取り権限に条件を追加するには:**

1. [設定]>[ユーザー設定]>[権限] へ進み、[読み取り] 権限キーをダブルクリックします。
2. [値] フィールドに「読み取り (見積依頼)」と入力し、[適用] をクリックします。

3. [読み取り (見積依頼)] をダブルクリックします。
4. [適用先] フィールドとなりの矢印ボタンをクリックします。
5. [選択肢] セルから次の項目を選択して、[選択済み] セルに移動します。
  - 見積依頼.取引条件ステータス.承認日
  - 見積依頼.取引条件ステータス.承認ユーザー
  - 見積依頼.取引条件ステータス.ステータス
  - 見積依頼.取引条件ステータス.サプライヤ
6. [OK] をクリックします。

## Product Cost Management のクラスを設定する

このセクションでは、Product Cost Management 固有の Agile PLM クラスを設定する方法を説明します。Agile PLM クラスの設定方法の詳細は、39 ページの「[クラス](#)」を参照してください。

Product Collaboration と Product Cost Management は、[アイテム マスター] とソーシング プロジェクトの間で自動的にデータを交換します。Agile PLM システムでカスタム ユーザー設定フィールドが有効な場合は、そのフィールドを一貫して設定し、正しくマッピングして、[アイテム マスター] とソーシング プロジェクトの間で正確なデータ交換が行われるようにする必要があります。

Agile PLM システムのカスタマイズについて支援が必要な場合は、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。

会社が Product Cost Management と Product Governance & Compliance ソリューションの両方を購入している場合は、[部品グループ] クラスの設定方法を決定する必要があります。

**注意** [部品分類と部品ファミリを同一にする] スマートルールを「いいえ」に設定した場合は、[クラス: 部品グループ] > [ユーザー インターフェース タブ] タブ > [一般情報] > [属性:一般情報] タブで、[利用可能にする] 属性を有効にします ([表示] を [はい] に設定する)。[可能にする] 属性は、部品グループが PCM で部品分類として使用されるか、Product Governance & Compliance (PG&C) で部品ファミリとして使用されるか、またはその両方かどうかを指定します。

## ユーザー設定フィールドを無効化する

クラス	サポートされているユーザー設定フィールド	
	ユーザー定義 1	ユーザー定義 2
ソーシング プロジェクト	はい	はい
見積依頼	はい	いいえ
見積依頼回答	いいえ	いいえ

RFQ またはソーシング プロジェクトの [ユーザー定義 1] で [新しい属性の作成] ボタンが無効 (灰色表示) にならないようにするには、Java クライアントで [ユーザー定義 1] タブを非表示に設定する必要があります。

[見積依頼] および [ソーシング プロジェクト] の両方のクラスについては、[ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] でのユーザー設定フィールドの新規作成はサポートされていません。デフォルトでは、これらのクラスの属性タブにある [新規] アイコンは無効 (灰色表示) です。ただし、[ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] 属性は、Java クライアントで有効または無効にすることができます。

---

**注意** ユーザー定義のユーザー設定フィールドは、[価格] および [価格変更 (PCO)] クラスで作成できます。

---

**Web クライアントで [ユーザー定義 1] を非表示にするには:**

1. [設定]>[データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [ソーシング プロジェクト] または [見積依頼] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックし、[ユーザー定義 1] をダブルクリックします。
4. [表示] 属性で [いいえ] を選択します。
5. [保存] および [閉じる] をクリックします。

## ユーザー設定フィールド設定時のヒント

ユーザー設定フィールドを設定し、[アイテム マスター] とソーシング プロジェクトの間でデータを共有する際は、クラスを通してフィールドに一貫性を持たせるようにします。一貫性がない場合は、ソーシング プロジェクトの [データを以下へマップ:] および [公表] アクションが作動しない可能性があります。リスト フィールドを別のリスト フィールドにマップする場合、両方のフィールドが同じリストを使用するよう設定する必要があります。

クラスを通して、ユーザー設定フィールドに一貫した名前を付けるようにしてください。属性の [名前] を変更する前に、元の名前を [説明] フィールドにコピーしておくと、後から元の属性名を識別することができます。

[部品] や [製造元部品] などの Product Collaboration クラスを除いて、Product Cost Management では、ユーザー定義のユーザー設定フィールドがサポートされていません。このため、ソーシング プロジェクトの属性をユーザー定義のユーザー設定フィールドにマップすることはできません。

## アイテム マスター ユーザー設定フィールドからソーシング プロジェクトへデータを集める

ソーシング プロジェクトには、[アイテム マスター] から直接追加されたアイテムや製造元部品を含めることができます。これらは、部品のコピーとして (参照としてではなく) アイテム マスターに追加されます。アイテム マスターでサポートできるユーザー設定フィールドに制限はありませんが、プロジェクト内のアイテムまたは製造元部品でサポートされるのは、限定された数のユーザー設定フィールドのみです。

アイテムの [タイトル ページ] タブと製造元部品の [一般情報] タブの標準フィールドは、関連するプロジェクト AML フィールドに自動的にマップされます。ただし、データは、アイテムや製造元部品のユーザー設定フィールド ([ユーザー定義 1] や [ユーザー定義 2] のユーザー設定フィールドなど) から、ソーシング プロジェクトの [AML] と [分析] タブ、および RFQ の [回答] タブに取り出すこともできます。オブジェクトをインポートする際、ソーシング プロジェクトが自動的にカスタム フィールドからデータを取り出せるように、カスタム フィールドをマップすることができます。

ソーシング プロジェクトのリスト ユーザー設定フィールド (シングルリストまたはマルチリスト) には、[リスト] プロパティと [データを以下へマップ:] プロパティの両方があります。[データを以下へマップ:] プロパティの値を選択すると、[リスト] プロパティは自動的に無効化されます (データを 2 つの場所から 1 つのフィールドに取り出すことはできません)。アイテムはプロジェクトに追加された後でも、リスト フィールドを再設定し、別のアイテム マスター フィールドからデータを取り出すこともできます。ただし、[データを以下へマップ:] プロパティの値を変更すると、現在の設定に、アプリケーション データがすでに存在していることを警告するメッセージが表示されます。そのまま続ける場合は、元のユーザー設定フィールドのマッピングがバージされ、復元することはできなくなります。

---

**注意** ソーシング プロジェクトの [AML] タブに対しては提供されるユーザー設定フィールドの数に制限があるため、[AML] 属性を、アイテムと製造元部品属性に存在するすべてのユーザー設定フィールドにマップすることはできません。

---

フィールド タイプ	フィールドの数
日付	5
リスト	5
通貨	5
マルチリスト	2
マルチテキスト	2
番号	5
テキスト	10

これらのフィールドは、アイテム [ユーザー定義 1] およびアイテム [ユーザー定義 2] のユーザー設定フィールドにマップできます。

同様に、ソーシング プロジェクトの製造元部品には、同じ数のユーザー設定フィールドがあります。それらのフィールドは、[製造元部品]>[ユーザー定義 1] または [ユーザー定義 2] でユーザー設定フィールドにマップできます。

属性をプロジェクトからアイテムまたは製造元部品の [ユーザー定義 2] の属性にマップするときは、その属性がアイテムまたは製造元部品のサブクラス全体で [ユーザー定義 2] の属性名に準拠していること、(リスト属性の) 同一リストを参照していることを確認してください。

#### ソーシング プロジェクトのユーザー設定フィールドをアイテムおよび製造元ユーザー設定フィールドにマップするには:

- 以下のアイテム、製造元部品、および拠点のユーザー設定フィールドを有効化し、設定します。
- [ソーシング プロジェクト] クラスで類似ユーザー設定フィールド (つまり同じデータ タイプのもの) を有効化し、設定します。フィールドは、関連の [アイテム] および [製造元部品] ユーザー設定フィールドで一貫して設定してください。一貫性がない場合は、Product Collaboration と Product Cost Management の間のデータ転送が作動しません。詳細は、「[ユーザー設定フィールド設定時のヒント](#)」を参照してください。

アイテムおよび製造元部品のユーザー設定フィールドのマッピングは、[ソーシング プロジェクト]>[AML] タブでのみ実行できます。[ソーシング プロジェクト]>[AML]>[アイテム] および [ソーシング プロジェクト]>[AML]>[AML] で有効にした各ユーザー設定フィールドに対して、[データを以下へマップ:] プロパティを指定します。この操作で、Product Collaboration と Product Cost Management の間のマッピングが確立されます。

下表は、[アイテム] と [製造元部品] のユーザー設定フィールドにマッピングすることができる [ソーシング プロジェクト] ユーザー設定フィールドを表示しています。

クラス/タブ	属性	取り出し元
[ソーシング プロジェクト]>[AML] >[アイテム]	Date (5)	[アイテム,ユーザー定義 1] フィールド
	List (5)	[ユーザー定義 2] フィールド
	MultiText (2)	[アイテム,ユーザー定義 1] フィールド
	Text (10)	[ユーザー定義 2] フィールド
	Money (5)	
	Number (10)	
	MultiList (2)	

クラス/タブ	属性	取り出し元
[ソーシング プロジェクト]>[AML] >[AML]	Date (5) List (5) Money (5) MultiList (2) MultiText (2) Number (10) Text (10)	[製造元部品,ユーザー定義 1] フィールド  [ユーザー定義 2] フィールド

- [ソーシング プロジェクト]>[分析]>[分析] と [見積依頼]>[回答] タブのユーザー設定フィールドを有効化することもできます。接頭辞「ipn」と接頭辞「mpn」があるフィールドは、[ソーシング プロジェクト]>[AML] で選択した [データを以下へマップ:] フィールドに自動的にマップされます。

たとえば、[ソーシング プロジェクト]>[AML]>[アイテム]>[Date01] フィールドは、そのフィールドの [データを以下へマップ:] マッピングを [ソーシング プロジェクト]>[分析]>[分析]>[ipnDate01] および [見積依頼]>[回答]>[ipnDate01] と共有しています。

次の表は IPN と MPN のユーザー設定フィールドを表示しています。

クラス/タブ	[アイテム] ユーザー 設定フィールド	[製造元部品] ユーザー 設定フィールド
[ソーシング プロジェクト] >[分析]>[分析]	ipnDate (5) ipnList (5) ipnMoney (5) ipnMultiList (2) ipnMultiText (2) ipnNumber (10) ipnText (10)	mpnDate (5) mpnList (5) mpnMoney (5) mpnMultiList (2) mpnMultiText (2) mpnNumber (10) mpnText (10)
[見積依頼]>[回答]		

## 例: ソーシング プロジェクト ユーザー設定フィールドをアイテム マスター ユーザー設定フィールドにマップする

次の例は、ソーシング プロジェクトを設定して、データをユーザー設定フィールド (アイテムの [ユーザー定義 1] フィールドと製造元部品の [ユーザー定義 2] フィールド) にマップする方法を示しています。以下の手順で、Product Cost Management のその他のアイテムおよび製造元部品のユーザー設定フィールドを設定することができます。

**ステップ 1: [部品] クラスの [ユーザー定義 1] フィールドを有効化します。**

1. [データ設定] で [クラス] ノードをダブルクリックします。[クラス] ページが表示されます。
2. [アイテム]>[部品] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [ユーザー定義 1] タブをダブルクリックします。
5. [属性:ユーザー定義 1] タブをクリックします。
6. [Text01] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、値を「部品の寸法」に変更します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

---

<b>注意</b>	Java クライアントでは、たとえば、「部品.ユーザー定義 1.Text01」を「ソーシング プロジェクト.AML.アイテム.Text05」にマップすると、そのデータが [ソーシング プロジェクト.AML] タブの [Text05] に取り出されます。「ソーシング プロジェクト.アイテム.Text05」が有効な場合、その値は「ソーシング プロジェクト.アイテム.Text05」に取り出されます。
-----------	--

---

**ステップ 2: [製造元部品クラス] の [ユーザー定義 1] フィールドを有効化します。**

1. [データ設定] で [クラス] ノードをダブルクリックします。[クラス] ページが表示されます。
2. [製造元部品]>[製造元部品クラス] をダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [ユーザー定義 1] タブをダブルクリックします。
5. [属性:ユーザー定義 1] タブをクリックします。
6. [Text01] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、値を「製造元部品の寸法」に変更します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

**ステップ 3: ソーシング プロジェクトの AML 属性を、アイテムの [ユーザー定義 1] 属性にマップします。**

1. [データ設定] で [クラス] ノードをダブルクリックします。[クラス] ページが表示されます。
2. [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. AML をダブルクリックします。
5. [属性:アイテム] タブをクリックします。

6. [Text1] をダブルクリックします。

---

**注意** リストまたはマルチリスト フィールドをマップする場合は、そのリストまたはフィールドで参照するリストが、アイテムの [ユーザー定義 1] フィールドで参照しているリストと同じであることを確認してください。

---

7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、値を「部品の寸法」に変更します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [データを以下へマップ:] フィールドをクリックします。[部品.ユーザー定義 1.部品の寸法] を選択します。[AML] タブの属性は、データを [ユーザー定義 1] の属性から取り出します。
11. [保存] をクリックします。

#### ステップ 4: ソーシング プロジェクトの AML 属性を、製造元部品の [ユーザー定義 1] 属性にマップします。

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. AML をダブルクリックします。
5. [属性:AML] タブをクリックします。
6. [Text1] をダブルクリックします。

---

**注意** リストまたはマルチリスト フィールドをマップする場合は、そのリストまたはフィールドで参照するリストが、製造元部品の [ユーザー定義 1] フィールドで参照しているリストと同じであることを確認してください。

---

7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、値を「製造元部品の寸法」に変更します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [データを以下へマップ:] フィールドをクリックします。[製造元部品.ユーザー定義 1.Text01] を選択します。[AML] タブの属性は、データを [ユーザー定義 1] の属性から取り出します。
11. [保存] をクリックします。

#### ステップ 5: [ソーシング プロジェクト]>[分析] タブで、対応するテキスト属性を有効にします。

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
3. [分析] をダブルクリックします。
4. [属性:分析] タブをクリックします。
5. [ipnText1] をダブルクリックします。

---

**注意** リストまたはマルチリスト フィールドをマップする場合は、そのリストまたはフィールドで参照するリストが、アイテムの [ユーザー定義 1] フィールドで参照しているリストと同じであることを確認してください。

---



---

**注意** 「ipn」という接頭辞の付いたユーザー設定フィールドは、[ソーシング プロジェクト]>[AML]>[アイテム] ユーザー設定フィールドに関連するため、同じ [アイテム] ユーザー設定フィールドに自動的にマップされます。

---

6. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
7. [名前] フィールドで、値を「部品の寸法」に変更します。
8. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
9. [保存] をクリックします。
10. [mpnText1] をダブルクリックします。

---

**注意** リストまたはマルチリスト フィールドをマップする場合は、そのリストまたはフィールドで参照するリストが、製造元部品の [ユーザー定義 1] フィールドで参照しているリストと同じであることを確認してください。

**注意** 「mpn」という接頭辞の付いたユーザー設定フィールドは、[ソーシング プロジェクト]>[AML]>[AML] ユーザー設定フィールドに関連するため、同じ [製造元部品] ユーザー設定フィールドに自動的にマップされます。

---

11. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
12. [名前] フィールドで、値を「製造元部品の寸法」に変更します。
13. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
14. [保存] をクリックします。

#### ステップ 6: [見積依頼回答]>[回答] タブで、対応するテキスト属性を有効にします。

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [見積依頼]>[見積依頼] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [回答] をダブルクリックします。
5. [属性:[回答] タブをクリックします。
6. [ipnText 1] をダブルクリックします。

---

**注意** リストまたはマルチリスト フィールドをマップする場合は、そのリストまたはフィールドで参照するリストが、アイテムの [ユーザー定義 1] フィールドで参照しているリストと同じであることを確認してください。

---

7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、値を「部品の寸法」に変更します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。
11. [mpnText 1] をダブルクリックします。

---

**注意** リストまたはマルチリスト フィールドをマップする場合は、そのリストまたはフィールドで参照するリストが、製造元部品の [ユーザー定義 1] フィールドで参照しているリストと同じであることを確認してください。

---

12. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
13. [名前] フィールドで、値を「製造元部品の寸法」に変更します。
14. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
15. [保存] をクリックします。

## ソーシング プロジェクトからアイテム マスターへ価格ユーザー設定フィールドを進める

会社は、[アイテム マスター] ([部品] や [製造元部品]) や [ソーシング プロジェクト] クラスについて、追加のマテリアルやその他費用などのカスタム価格フィールドを有効化することができます。サプライヤから価格見積を受け取った後、プロジェクトから [アイテム マスター] へ価格を公表することができます。後のソーシング プロジェクトについては、[分析] タブで価格検索を行い、既存の価格算出ケースを検証することができます。

ソーシング プロジェクトの [価格詳細] タブでは、Product Cost Management に対して有効化することができる複数の価格のユーザー設定フィールドが提供されています。[材料価格計算] フィールドと [その他費用計算] フィールドの両方があります。

価格計算は基本的に間接比率です。価格計算は、知的財産価値、著作権使用料など、マテリアル コストとは異なる追加コスト アイテムです。価格計算フィールドは 7 つに限られており、この数はすべてのプロジェクトに共通しています。価格計算フィールドは、サプライヤ用または社内用 (バイヤー) として、サプライヤまたはバイヤーに対して有効にすることができます。

**重要** [材料価格計算] フィールドは 7 つあります。すべての [材料価格計算] フィールドは、社内に表示可能 (サプライヤには表示されません)、またはサプライヤに対して表示可能 (サプライヤはこれらのフィールドを表示および編集可能) に設定できます。これらのフィールドは、固定値またはパーセント値を保存するように設定することもできます。

その他費用には、賃率、消費税、その他の間接費が含まれます。

下表は、異なるクラスにおいて有効化することができる [マテリアル価格] と [その他費用] のユーザー設定フィールドを示しています。クラスを通して、フィールドに一貫性を持たせて設定してください。

これらのフィールドは ID に基づいて自動的にマップされます。たとえば、あるクラスの [その他費用 1] は、他の [その他費用 1] のフィールドに自動的にマップされます。ユーザー設定フィールドの設定の詳細は、「[ユーザー設定フィールド設定時のヒント](#)」を参照してください。

クラス/タブ	マテリアル価格の属性	その他費用の属性
[ソーシング プロジェクト] > [価格詳細]	7 つの材料価格計算	その他費用 (25)
[ソーシング プロジェクト] > [分析] > [その他費用の項目]	なし	nonMaterialModifier (20) その他費用 (5)
[価格] > [公表価格] > [価格ライン]	マテリアル価格 (7)	その他費用 (25)
[価格] > [見積履歴] > [価格ライン]	マテリアル価格 (7)	その他費用 (25)
[アイテム] > [ドキュメント] > [価格]	マテリアル価格 (7)	その他費用 (25)
[アイテム] > [部品] > [価格]	マテリアル価格 (7)	その他費用 (25)
[製造元部品] > [価格]	マテリアル価格 (7)	その他費用 (25)

## 価格計算

価格計算は [マテリアル] または [その他] となります。多くの顧客は、パートナーやサプライヤに対して、個別のライン アイテムではなく、トップ レベルのアセンブリに計算を適用するように要求します。通常、これらの計算は固定値ではなく、パーセンテージ (%) で表されます。

ほとんどのその他コストは固定値のみとなるため、パーセント値を使用するには、設定可能でパーセント固有のその他の計算を 1 つ設定します。

設定可能な価格計算は、次のとおりです。

- 材料計算 - No. 1 から 7 は社内またはサプライヤとして設定可能です。
- その他の計算 - No. 20 から 25 はパーセント (%) または固定値のいずれかの計算タイプとして設定可能です。

サプライヤがパーセント値を入力すると、システムはこの値を [マテリアル コスト] で掛け算し、この結果を [その他費用] に追加します。

**注意** [その他費用] のパーセント タイプは、[マテリアル価格] が存在する場合のみ役立ちます。

属性は [合計コスト] に追加され、次の表に示されているその他コストとは関連していません。

その他費用	材料価格
その他費用_1 (固定値) = 50	マテリアル価格 = 100
その他費用_20 (パーセント値) = 25	
その他費用合計 = 75 ((0.25 * 100) + 50)	マテリアル価格合計 = 100
拡張費用合計 = 175	

## 材料価格計算を設定する

[材料計算] の 1 から 7 を社内またはサプライヤとして固定またはパーセント値で設定することができます。[材料計算] は、初期における材料および賃金の [費用見積] の後、各 [費用見積] に追加される [費用要素] として機能します。計算には、通常 [一般] および [管理費用]、[間接費] および [利益] が含まれます。

**注意** [材料計算] は固定値またはパーセント値で表されます。

### 材料計算を設定する

1. [データ設定] > [クラス] へ進みます。
2. [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックし、[ユーザー インターフェース タブ] タブへ進みます。
3. [価格詳細] をダブルクリックし、[属性:価格詳細] タブへ進みます。
4. [材料価格計算 1] をダブルクリックします。
5. [計算タイプ] ドロップダウン リストから、[固定] または [%] を選択します。

6. [表示対象] ドロップダウン メニューから、[内部のみ] または [サプライヤ] を選択します。
7. [保存] および [閉じる] をクリックします。

## その他の計算

その他コストは、[マテリアル コスト] のパーセント値をサポートしています。[費用見積] に追加された一部の費用 (著作権使用料、保証と保障など)。

[その他の計算] 20 から 25 は、[マテリアル コスト] のパーセント値をサポートするように設定できます。

**注意** [その他の計算] は、業界で「非標準計算」と呼ばれることもあります。

### [その他の計算] をパーセント値で設定する

1. [データ設定] > [クラス] へ進みます。
2. [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックし、[ユーザー インターフェース タブ] タブへ進みます。
3. [価格詳細] をダブルクリックし、[属性:価格詳細] タブへ進みます。
4. [その他費用 20] をダブルクリックします。

**注意** [その他費用計算] 20 から 25 のみを「パーセント」として設定できます。その他は「固定」として設定され、変更できません。

5. [計算タイプ] ドロップダウン リストから、[固定] または [%] を選択します。
6. [保存] および [閉じる] をクリックします。

## 例: ユニットごとの人件費フィールドを有効にする

次の例は、[ユニットごとの人件費] というその他費用のユーザー設定フィールドを、複数の Agile PLM クラスに対して有効化する方法を示しています。以下の手順で、Product Cost Management のその他費用のユーザー設定フィールドを設定することができます。

### ユニットごとの人件費フィールドを有効にする

1. [データ設定] > [クラス] へ進みます。
2. 次のいずれかの手順を実行してから、手順 3 から 9 を実行します。
  - a. 部品の場合: [アイテム] > [部品] クラスをダブルクリックします。
  - b. ドキュメントの場合: [アイテム] > [ドキュメント] クラスをダブルクリックします。
  - c. 製造元部品の場合: [製造元部品] > [製造元部品クラス] をダブルクリックします。
  - d. 公表価格の場合: [価格] > [公表価格] クラスをダブルクリックします。
  - e. 見積履歴の場合: [価格] > [見積履歴] クラスをダブルクリックします。
  - f. ソーシング プロジェクトの場合: [ソーシング プロジェクト] > [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] タブへ進みます。
4. [価格] をダブルクリックし、[属性:価格] タブへ進みます。
5. [その他費用 1] をダブルクリックします。
6. [名前] フィールドのテキストを切り取り、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。

7. [名前] フィールドで、[ユニットごとの人件費] を入力します。
8. [表示] リストで [はい] を選択します。
9. [保存] をクリックします。

**注意** 前述のすべての場合において、特定の価格フィールド (たとえば、[その他費用 1]) を使用する場合は、対応するすべてのクラス ([部品]、[ドキュメント]、[製造元部品]、[公表価格]、[見積履歴]、および [ソーシング プロジェクト]) で同じ [その他費用 1] を使用する必要があります。[その他費用 1] を使用して [部品] クラスの人件費を決定したり、[その他費用 2] を使用して [製造元部品クラス] の人件費を決定することはできません。

## プロジェクト分析から公表価格と見積履歴に、回答ユーザー設定フィールドを進める

RFQ 回答には、複数のユーザー設定フィールドを含むことのできるヘッダ エリアがあります。RFQ の [回答] タブにあるユーザー設定フィールドを有効にすると、公表価格および見積履歴の [ユーザー定義 1] フィールドにマップできます。回答を [アイテム マスター] に公表すると、マップするユーザー設定フィールドが更新されます。

**プロジェクトの [分析] タブの回答ユーザー設定フィールドを、公表価格および見積履歴の [ユーザー定義 1] または [価格ライン] フィールドにマップするには:**

1. [ソーシング プロジェクト] クラスの次のユーザー設定フィールドを有効にして設定します。同じセットのユーザー設定フィールドが [見積依頼] クラスでも有効になり、サプライヤは RFQ に回答するときに、これらのフィールドに入力できます。
2. 次の表に示す同様のユーザー設定フィールド (つまり、同じデータ タイプ) を有効にして設定します。フィールドは、関連の [見積依頼] ユーザー設定フィールドで一貫して設定してください。一貫性がない場合は、Product Collaboration と Product Cost Management の間のデータ転送が作動しません。詳細は、前述の「[ユーザー設定フィールド設定時のヒント](#)」を参照してください。

クラス/タブ	属性
[ソーシング プロジェクト] > [分析] > [分析]	resp Date (5) resp List (5) resp Money (10) resp MultiList (2) resp MultiText (2) resp Number (10) resp Text (10)

クラス/タブ	属性
[アイテム]>[ドキュメント]>[価格]	Date (5) List (5) Money (5) MultiList (2) MultiText (2) Number (10) Text (10)
[アイテム]>[部品]>[価格]	
[製造元部品]>[価格]	
[価格]>[公表価格]>[ユーザー定義 1]	
[価格]>[公表価格]>[ユーザー定義 2]	
[価格]>[公表価格]>[価格ライン]	
[価格]>[見積履歴]>[ユーザー定義 1]	
[価格]>[見積履歴]>[ユーザー定義 2]	
[価格]>[見積履歴]>[価格ライン]	

- 最後に、[ソーシング プロジェクト]>[プロジェクト]>[分析]>[分析] タブのユーザー設定フィールドを有効化し、設定します。[データを以下へマップ:] プロパティが指定されていることを確認します。この操作によって、Product Cost Management と Product Collaboration の間のマッピングが確立されます。

## ソーシング プロジェクトからアイテム マスターに、ユーザー設定フィールドのデータを進める

ソーシング プロジェクトのユーザー設定フィールドからアイテム マスターにデータを進めるには、[データを以下へマップ:] フィールドを使用します。このフィールドは、実際にはデータをその場所へ「進める」働きを持ち、値を必要とします。

クラス/タブ	属性	データを進める先
[ソーシング プロジェクト]>[分析]>[分析]	respDate (5) respList (5) respMoney (10) respMultiList (2) respMultiText (2) respNumber (10) respText (10)	[価格.価格ライン] フィールド [価格.ユーザー定義 1] フィールド [ユーザー定義 2] フィールド

## 例: 回答ユーザー設定フィールドをマップする

次の例は、ソーシング プロジェクトの [サプライヤ メモ] という回答ユーザー設定フィールドを有効にして、[公表価格] または [見積履歴] クラスにマップする方法を示しています。以下の手順で、Product Cost Management のその他の RFQ ユーザー設定フィールドを設定することができます。

### ステップ 1: RFQ の [回答] タブの [サプライヤ メモ] ユーザー設定フィールドを有効化する

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [見積依頼]>[見積依頼] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [回答] をダブルクリックします。
5. [属性:回答] をクリックします。
6. [resp MultiText 1] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、[サプライヤ メモ] を入力します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

### ステップ 2: 公表された価格に対し、サプライヤ メモ フィールドを有効化する

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [価格]>[公表価格] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [価格ライン] をダブルクリックします。
5. [属性:価格ライン] タブをクリックします。
6. [MultiText01] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、[サプライヤ メモ] を入力します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

### ステップ 3: 見積履歴に対し、サプライヤ メモ フィールドを有効化する

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [価格]>[見積履歴] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [価格ライン] をダブルクリックします。
5. [属性:価格ライン] タブをクリックします。
6. [MultiText01] をダブルクリックします。

7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、[サプライヤ メモ] を入力します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

#### ステップ 4: 部品に対し、サプライヤ メモ フィールドを有効化する

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [アイテム]>[部品] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [価格] をダブルクリックします。
5. [属性:価格] タブをクリックします。
6. [MultiText01] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、[サプライヤ メモ] を入力します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

#### ステップ 5: ドキュメントに対し、サプライヤ メモ フィールドを有効化する

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [アイテム]>[ドキュメント] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [価格] をダブルクリックします。
5. [属性:価格] タブをクリックします。
6. [MultiText01] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、[サプライヤ メモ] を入力します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

#### ステップ 6: 製造元部品に対し、サプライヤ メモ フィールドを有効化する

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [製造元部品]>[製造元部品クラス] をダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [価格] をダブルクリックします。
5. [属性:価格] タブをクリックします。



6. [MultiText01] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、[サプライヤ メモ] を入力します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
10. [保存] をクリックします。

#### ステップ 7: ソーシング プロジェクトの [分析] タブに対し [サプライヤ メモ] フィールドを有効化する

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [ソーシング プロジェクト]>[ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] をクリックします。
4. [分析] をダブルクリックします。
5. [属性:分析] タブをクリックします。
6. [resp MultiText 1] をダブルクリックします。
7. [名前] フィールドのテキストをコピーし、[説明] フィールドに貼り付けます。この操作は、元の属性名を識別する際に便利です。
8. [名前] フィールドで、[サプライヤ メモ] を入力します。
9. [表示] フィールドで [はい] を選択します。

[データを以下へマップ:] フィールドで、[公表価格.価格ライン.MultiText01] を選択します。ドロップダウン リストには、公表価格と見積履歴の両方のフィールドが表示されますが、選択できるのは 1 つのみです。

これらのユーザー設定フィールドは、[公表価格] クラスの [ユーザー定義 1] タブにあるマルチテキストフィールドにもマップできます。前述の例では、[公表価格] クラスの [価格ライン] タブにマップしています。

---

**注意** このフィールドは [データを以下へマップ:] という名前ですが、この場合は、回答を [アイテム マスター] に公表する際に、データを選択したフィールドに進めます。

---

10. [保存] をクリックします。

## BOM フィルタを設定する

このセクションでは、BOM フィルタの設定方法を説明します。BOM フィルタの概念と使用の詳細は、『Product Cost Management ユーザー ガイド』を参照してください。「ソーシング プロジェクトを使用する」の章には、「プロジェクトにアイテムを追加する」というセクションがあり、ここで Web クライアントにおける BOM フィルタの設定方法を説明しています。

#### ソーシング プロジェクト クラス BOM 属性の設定

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [ソーシング プロジェクト] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース] タブへ進み、リストの [アイテム] をダブルクリックします。
4. [属性:アイテム] タブへ進みます。

5. 属性名リストの [フィルタ] をダブルクリックします。
6. [表示] ドロップダウン リストから [はい] を選択します
7. フィルタ名を任意の名前に変更します。例: 「製造 BOM」。

## BOM フィルタの名前を設定する

インポートのためにフィルタリングする BOM アイテムを識別するには、最初に、インポートする特定の BOM に対して特定の属性を設定し、名前を付ける必要があります。

たとえば、同じ BOM に 2 つのバージョン (1 つは「製品」、もう 1 つは「プロトタイプ」) がある場合は、それぞれの BOM に対してリスト属性を設定する必要があります。リスト属性は、ケース シナリオに基づいて名前を付けることをお勧めします。既存の属性をテンプレートとして使用することもできます。この例では、「BOM List 3」をテンプレートとして使用しています。

**注意** BOM フィルタは [部品] クラスでサポートされていますが、[ドキュメント] クラスではサポートされていません。

**注意** BOM フィルタがサポートしているのは、複数の BOM ユーザー定義フィールドに対するフィルタリングのみです。サポートしているのは、[アイテム.BOM] タブで定義された Text1-5、Numeric1-5、List1-5、および [アイテム.BOM] タブの [数量] のみです。日付フィールド、マルチリスト フィールド、およびマルチテキスト フィールドに対するフィルタリングはサポートされていません。

### [部品] クラスの BOM 属性の設定

1. [データ設定]>[クラス] へ進みます。
2. [部品] クラスをダブルクリックします。
3. [ユーザー インターフェース タブ] タブへ進み、[BOM] をダブルクリックします。
4. [属性: BOM] タブへ進みます。
5. 属性名のリストから、テンプレートとして使用する属性をダブルクリックします。たとえば、「BOM List 3」を使用します。
6. 元の属性名を説明フィールドにコピーし、ケース シナリオに基づいて属性に名前を付けます。例: 「Prod Load」
7. [表示] フィールドで [はい] を選択します。
8. 新規リストを作成するには、[リスト] フィールドの右側にある [新規リスト] ボタンをクリックします。[リスト作成] ウィンドウが表示されます。
9. 新規属性と同じようにリストに名前を付け、説明を入力します。たとえば、「Prod Load」という名前を付け、「Filter」という説明を付けます。
10. [有効] ドロップダウン リストで適切な選択を行って、新規リストを有効または無効にします。
11. カスケード リストを作成するには、[重ねて表示] ドロップダウン リストから [はい] または [いいえ] を選択します。
  - a. [重ねて表示] に対して [いいえ] を選択した場合は、[リスト] ウィンドウ (新規リスト名ウィンドウ) および [新規リスト値の作成] ポップアップ ウィンドウが表示されます。[名前] フィールドに名前を入力して [追加] ボタンをクリックするか、[他の追加] ボタンをクリックして、さらにリスト値を追加します。
  - b. リスト値は後で追加することもできます。リストの追加や設定の詳細は、79 ページの「[リスト](#)」を参照してください。

- c. [重ねて表示] に対して [はい] を選択した場合は、[リスト] ウィンドウ (新規リスト名ウィンドウ) が表示されます。[リスト] タブに、最初のアイテムとして新規リスト名が表示され、これがカスケード リストの基本値になります。[新規作成] ボタンをクリックし、次のウィンドウでカスケード リストの値を追加します。
- d. [新規リスト値の作成] が表示されます。[名前] フィールドに名前を入力して [追加] ボタンをクリックするか、[他の追加] ボタンをクリックして、さらにリスト値を追加します。新規リスト名の下にリスト値が重ねて表示されます。
- e. リスト値は、カスケード リストの任意レベルのリスト値に追加できます。追加するには、リスト値を選択して [新規作成] ボタンをクリックします。前述のステップ 3 から実行します。
- f. [保存] と [閉じる] をクリックして、「BOM List 3」に戻ります。

12. [保存] および [閉じる] をクリックします。

この新しい BOM フィルタを使用してソーシング プロジェクトを作成する方法については、『Product Cost Management ユーザー ガイド』の「プロジェクトを使用する」の章を参照してください。



# Product Portfolio Management の設定

扱うトピックは次のとおりです。

■ PPM 固有の権限 .....	339
■ ユーザー グループで割り当てアクションを有効化する .....	340
■ プロジェクトの要約表示を設定する .....	341
■ ステータス ノード .....	341
■ PPM スマートルールからの自動インストール .....	345
■ Agile PPM ユーザーに自動的に割り当てられるデフォルトの役割 .....	346
■ UI 設定データ .....	347
■ プロパティに適用された、特定ユーザーのアクションを管理する権限マスクを変更する .....	349
■ ガント チャートと Microsoft Project の権限に関する注意事項 .....	354
■ 制限された削除権限を設定する .....	355
■ メニュー コマンド: [アクション]>[キャンセルへ変更] に必要な設定 .....	356
■ [一般情報] タブ [要約] テーブルに表示される差異 .....	356
■ 成果物のオブジェクト クラス .....	357
■ 計算属性を有効化する .....	358
■ Microsoft Project Integration のサポート .....	360
■ Microsoft Project 作業値を Agile PPM に作業日数として転送する .....	361
■ Microsoft Project 2002 と 2003 でカスタム Agile PPM サブクラスを使用する .....	361
■ Microsoft Project/Agile PPM 統合: MSPSyncMapping.プロパティ ファイル .....	362

ここでは、Product Portfolio Management の設定について説明します。

## PPM 固有の権限

次のトピックでは、PPM 固有の権限の詳細を説明します。

### [テンプレートから作成] 権限

この権限を [プログラム管理者] および [プログラム マネージャ] の役割に対して有効にすると、ユーザーは、既存のテンプレートからプログラムを作成できます。いずれのプログラム役割もないユーザーが [テンプレートから作成] 権限を有効にするには、アクセスするテンプレートに対する有効な読み取り権限と、テンプレートのサブクラスを作成するための作成権限が必要です。

### [Microsoft Project] 権限

[Microsoft Project] 権限マスクの [適用先] プロパティに基づいて [Microsoft Project] 権限を使用すると、ユーザーは、Microsoft Project と Agile PPM 間の特定のタスクを実行できます。デフォルトで、この権限マスクは [プログラム管理者] および [プログラム マネージャ] の役割に対して有効です。

[適用先] フィールドには、この権限に関する次の 5 つのプロパティが表示されます。

- 編集モードで起動 - PPM プロジェクトである Microsoft Project を編集モードで起動します。
- 読み取り専用で起動 - PPM プロジェクトである Microsoft Project を読み取り専用モードで起動します。
- MS Project から公表 - Microsoft Project から公表します。
- XML として保存 - 編集 - PPM プロジェクト データを編集モードで XML として保存します。
- XML として保存 - 読み取り専用 - PPM プロジェクト データを読み取り専用モードで XML として保存します。

これらのプロパティを有効化するには、必要なプロパティを [選択肢] リストから [選択済み] リストに追加します。

**注意** PLM 9.2.2 より前のリリースでは、MS Project へのアクセス機能は [変更] 権限に含まれていましたが、現在この機能は [Microsoft Project] 権限に分離されています。この権限以外に、PPM ガントチャートで MS Project にアクセスするために、[変更] 権限で [一般情報.ロック ユーザー] および [一般情報.スケジュール エディタ] を有効化する必要があります。

## [変更] 権限でプログラム コンテンツを追加する

**注意** PLM 9.2.2 では、PPM オブジェクトの [関係] タブは [コンテンツ] タブに名前が変更されました。ただし、プログラム クラスでは、[コンテンツ] タブのプロパティは [属性 | 関係] タブに表示されます。

顧客やファイル フォルダなど、その他のオブジェクトやコンテンツを既存のプログラムに追加できます。この権限を有効化するために、[コンテンツ.名前] と [コンテンツ.ルール] の 2 つのプロパティが追加されています。[変更] 権限マスクの [適用先] プロパティは、ユーザーが、[名前] 属性と [ルール] 属性に基づいてコンテンツを追加 (関係を追加) したり、コンテンツ ルールを追加 (関係にルールを追加) できるように調整できます。これらの属性は、[適用先] プロパティでそれぞれ有効化します。

コンテンツ ([名前] 属性) およびコンテンツ ルール ([ルール] 属性) を追加する機能を有効化するには、[変更] 権限マスクの [適用先] プロパティで、[コンテンツ.名前] と [コンテンツ.ルール] プロパティを [選択肢] リストから [選択済み] リストに移動します。これらのプロパティは、[アクティビティ.コンテンツ.名前] と [アクティビティ.コンテンツ.ルール]、および [ゲート.コンテンツ.名前] と [ゲート.コンテンツ.ルール] として [適用先] プロパティのリストに表示されます (他のクラスでは、[サブスタンス.関係.名前] などの形式で表示されます)。192 ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。

## ユーザー グループで割り当てアクションを有効化する

リソース プール所有者は、Agile Web クライアントで [ツール]>[管理]>[ユーザー グループ]>[割り当て] の順に選択して、保留中の割り当てをリソースに割り当てることができます。

**注意** Java クライアントの設定では、[ユーザー グループ]>[割り当て] タブは使用できません。

[ユーザー グループ]>[割り当て] タブで [割り当て] アクション ボタンを有効化するために、[ユーザー グループ.割り当て.名前] という新しいプロパティが [変更 (ユーザー グループ)] 権限マスクに追加されました。[変更 (ユーザー グループ)] 権限マスクの [適用先] プロパティで、[ユーザー グループ.割り当て.名前] を [選択肢] リストから [選択済み] リストに移動します(詳細は、192 ページの「[適用先機能](#)」を参照してください)。

## プロジェクトの要約表示を設定する

[適用先] の値として PPM 要約ページの設定が含まれる管理者権限が付与されている場合は、[要約] ページのレイアウトとウィジェットを設定できます。この設定は、Agile PLM システム全体のすべてのアクティビティに適用されます。

[要約] ページを設定するには、[ツール]>[管理] に移動します。[Web クライアント設定] で、[プロジェクト要約設定] をクリックします。

[要約] ページには、広い幅と狭い幅の 2 カラムのビューがあります。各カラムには、一連の設定可能なウィジェットが含まれています。

**[要約] ページのウィジェットを設定するには:**

1. [幅の広いカラムの設定] または [幅の狭いカラムの設定] の各見出しの直下に表示される [編集] リンクをクリックします。テーブルのデータが編集可能になります。
2. [表示タイトル] カラムで、デフォルトのタイトルを好みのタイトルに編集します。
3. [表示] カラムで、[はい] または [いいえ] を選択して、そのウィジェットを [要約] ページに表示するかどうかを定義します。
4. [表示順序] カラムで、順序番号を使用してウィジェットの縦方向の表示順序を定義します。1 番目に表示するウィジェットを 1、2 番目に表示するウィジェットを 2 とし、以下同様に定義します。
5. [設定] カラムに [編集] リンクが表示される場合は、さらにウィジェットを設定できます。[編集] をクリックすると、ウィジェット内に表示する値を定義できるダイアログが開きます。
  - a. ダイアログ内で、必要な値を [利用可能な値] リストから複数選択し、右矢印ボタンを使用して [選択された値] 領域に移動します。使用可能なフィルタ オプションを使用してこのリストをフィルタリングすると、すばやく選択できます。
  - b. 選択した値をウィジェット内に表示する順序に並べ替えます。
  - c. [OK] をクリックします。
6. すべてのウィジェットの設定が完了したら、[保存] をクリックして設定を保存するか、または [キャンセル] をクリックしてデフォルトの設定に戻します。保存した設定は [プロジェクトの要約] ページに即時に反映されます。

## ステータス ノード

[ステータス] ノードは、スケジュール、コスト、品質およびリソースの分野で、プロジェクトの目標が現在満たされているか (「1」の値)、現在満たされていないか (「2」の値)、または目標から大きくはずれているか (「3」の値) を表示します。

**注意** アクティビティ オブジェクトの [一般情報] タブにある [ヘルス ロールアップ ステータス] の属性は、アクティビティ オブジェクトがロールアップに含まれるかどうかを決定します。デフォルトでは、リーフ ノード アクティビティ (子のないタスク) からのステータスがプロジェクト構造の高レベルへとロールアップします ([ヘルス ロールアップ ステータス] = 「はい」)。ユーザーは、[一般情報] タブの [ヘルス ステータス ロールアップ] 属性を「いいえ」に編集することで、ロールアップから除外するオブジェクトを決定できます。これによって、ユーザーは、選択したアクティビティをロールアップに含めたり、ロールアップから除外できます。

## エンド ユーザーに対するステータス名の表示を変更する

Agile PPM Web クライアントで、ヘルス ステータスは [一般情報] タブの属性です。これらは、アクティビティ ウィンドウの右上にあるヘルス ステータス インジケータでも表示されています。デフォルトでは以下のような名前になっています。全体のステータス、スケジュール ステータス、コスト ステータス、リソース ステータス、および品質ステータス。

Agile PLM Web クライアントに表示されるラベルや名前を変更するには、[アクティビティ] または [ゲート] クラスの [一般情報] タブでヘルス ステータス属性の名前を修正します。

たとえば、アクティビティ オブジェクトの [コスト ステータス] 属性の名前を [アカウント ステータス] に変更するには、[クラス] ノードでその名前を変更します。71 ページの「[属性を変更する](#)」を参照してください。新しい名前である [アカウント ステータス] がアクティビティ オブジェクトの [一般情報] タブに表示され、アクティビティ ウィンドウの右上のヘルス ステータス インジケータにも表示されます。

## ステータス ノード設定を変更する

[ステータス] ノード (スケジュール、コスト、品質、またはリソース) を開くと、該当の [ステータス] ウィンドウが表示されます。メイン テーブルのプロパティは、[順序] (1、2、3)、[名前]、[説明]、および [有効] です。ボタンは、[作成] と [削除] です。

ステータス テーブルの行をどこかダブルクリックすると、オブジェクトが開き、[一般情報] タブが表示されます。必要に応じて、このウィンドウでフィールドを編集することができます。

---

**注意** [品質] および [リソース] ステータスは Agile PPM によりプログラムで設定されません。これらのフィールドは、[リスク] など、その他のステータスの目的のために名前を変更し、使用することができます。これらは主観的な格付けです。コストとスケジュール ステータスは、しきい値セットに従って常に計算されます。この自動計算をオフにすることはできません。

---

## スケジュール ステータス

[スケジュール ステータス] ウィンドウは、スケジュールに関するプロジェクトのステータスを報告します。

---

**注意** [期限切れの値] は、正または負の数字にできます。

---

[期限切れの値] に、期間の日数またはパーセントを使用できます。

**期限切れタイプ (日数またはパーセント) を設定するには:**

1. Agile 管理者で、[設定 | システム設定 | Product Portfolio Management] の下にある [スケジュール ステータス] ノードを開きます。  
[スケジュール ステータス] ウィンドウが開き、[一般] タブが最前面に表示されます。
2. [一般] タブで、[期限切れのタイプ] ドロップダウン リストから [日数] または [パーセント] を選択します。
3. 入力完了したら、[保存] をクリックします。

**スケジュール ステータス値を変更するには:**

1. Agile 管理者で、[設定 | システム設定 | Product Portfolio Management] の下にある [スケジュール ステータス] ノードを開きます。  
[スケジュール ステータス] ウィンドウが開き、[一般] タブが表示されます。



2. [ステータス] タブをクリックして、スケジュール ステータスを表示します。
3. 変更するステータス行をダブルクリックします。スケジュール ステータス ウィンドウが表示されます。
4. 必要な変更を加えます。

**注意** 343 ページの「[スケジュール ステータスのガイドライン](#)」で説明するガイドラインに従うことが重要です。

5. 入力が完了したら、[保存] をクリックします。

## スケジュール ステータスのガイドライン

次の表に、デフォルトのスケジュール ステータス設定 (期限切れのタイプ = 日数) を示します。

順序	名前	説明	期限切れの値	アイコン
1	オントラック	オントラック	0	緑
2	注意が必要	注意が必要	1	黄
3	オフトラック	オフトラック	5	赤

スケジュール ステータスを正確に評価するために、[期限切れの値] 属性を設定するときに次のルールに従います。

- 3 つのすべてのステータス ([オントラック]、[注意が必要]、[オフトラック]) には、Day\_Overdue の値を設定する必要があります。空白の値は有効ではありませんが、ゼロ (0) は有効な値です。
- [期限切れの値] の各値には、順序に従い昇順の値を設定する必要があります。つまり、[オントラック] (1) は最も低い値に設定し、[注意が必要] (2) は [オントラック] よりも高い値に設定し、[オフトラック] (3) は [注意が必要] よりも高い値に設定する必要があります。
- 前述のルールは、期限切れのタイプ = 日数と期限切れのタイプ = パーセントの両方に適用されます。
- 次の表に、有効な期限切れの値の設定例を示します。

期限切れの値の設定 (日数):

順序	名前	期限切れの値 (日数)	期限切れの値 (日数)	期限切れの値 (日数)	期限切れの値 (日数)
1	オントラック	-10	-5	0	5
2	注意が必要	-5	0	5	10
3	オフトラック	0	5	10	15

期限切れの値の設定 (パーセント):

順序	名前	期限切れの値 (パーセント)	期限切れの値 (パーセント)	期限切れの値 (パーセント)
1	オントラック	-150	-150	0
2	注意が必要	-100	0	50
3	オフトラック	0	75	100

## スケジュール ステータスの決定方法

アクティビティのワークフロー ステータスが [未開始] の場合、スケジュール ステータスは、現在の日付と、スケジュール開始日と期限切れの値の計算を比較して決定されます。

アクティビティのワークフロー ステータスが [進行中] の場合、スケジュール ステータスは、現在の日付と、スケジュール終了日と期限切れの値の計算を比較して決定されます。次の例は、[注意が必要] と [オフトラック] ステータスの決定方法を示しています。

期限切れの値 (日数)	期限切れの値 (期間の パーセント)	タスク 期間	計算	現在の日付が次の場合にスケ ジュール ステータスを変更する
5		10	スケジュール終了日 + 5	スケジュール終了日の 5 日後
-5		10	スケジュール終了日 - 5	スケジュール終了日の 5 日前
0		10	スケジュール終了日 + 5	スケジュール終了日
5		2	スケジュール終了日 + 5	スケジュール終了日の 5 日後
-5		2	スケジュール終了日 - 5	スケジュール終了日の 5 日後 (期間に依存しません)
	-150	10	$-150\% * 10 = -15$ 日	スケジュール終了日の 15 日前
	-100	10	$-100\% * 10 = -10$ 日	スケジュール終了日の 10 日前
	-50	10	$-150\% * 10 = -5$ 日	スケジュール終了日の 5 日前
	0	10	$0\% * 10 = 0$ 日	スケジュール終了日
	50	10	$50\% * 10 = 5$ 日	スケジュール終了日の 5 日後
	100	10	$100\% * 10 = 10$ 日	スケジュール終了日の 10 日後
	150	10	$150\% * 10 = 15$ 日	スケジュール終了日の 15 日後

## コスト ステータス

[コスト ステータス] ウィンドウはコストと予算に関するプロジェクトのステータスを報告します。[合計コスト] は 4 つのコストタイプ(人件費、資産費用、固定費、ユーザー設定コスト) の合計です。[コスト ステータス] のカラー インジケータは、[予定された合計コスト] を [実際の合計コスト] と [予測合計費用] との比較に基づき、[予定された合計コスト] の割合を示すものです。

**注意** [パーセント] 値は、負の数字にはできません。

順序	名前	説明	パーセント	アイコン
1	予算内	予算内	0	緑
2	予算外	予算外	5	黄
3	予算オーバー	予算オーバー	10	赤

## 品質ステータス

[品質ステータス] ウィンドウは品質の問題に関するプロジェクトのステータスを報告します。

順序	名前	説明	アイコン
1	基準品質	基準品質	緑
2	基準以下	基準以下	黄
3	低品質	低品質	赤

## リソース ステータス

[リソース ステータス] ウィンドウは、同等なスキル セットを持つチームまたはユーザーのステータスを報告します。リソース ステータスを使用すると、リソースのプログラムへの割り当てを評価でき、社員の作業負荷の管理に役立ちます。

順序	名前	説明	アイコン
1	人員割り当て済み	人員割り当て済み	緑
2	人員不足	人員不足	黄
3	人員割り当てなし	人員割り当てなし	赤

## PPM スマートルールからの自動インストール

[PPM から自動インストール] は、「可」、「不可」、「警告」に設定することができるスマートルールです。このスマートルールは、Microsoft Project (2002 および 2003) DLL のユーザー システム レジストリへの自動インストールを管理します。DLL のインストールは、Microsoft Project で Agile メニューを使用したシームレスな公表を可能にします。[PPM から自動インストール] は、Java ベースのガント チャートのための Sun JRE インストールも管理しています。ガント チャートを起動するためには JRE が必要です。

[PPM から自動インストール] スマートルールのデフォルト設定は「可」となっています。

現在ご利用のコンピュータで、アプリケーションを自動的にインストールしたくない場合は、この [PPM から自動インストール] スマートルールを「不可」に設定してください。

**注意** PC で管理者権限を持っていないエンド ユーザーは、[PPM から自動インストール] を「不可」に設定し、IT 組織に DLL や JRE の読み込みを依頼してください。

[PPM から自動インストール] が「可」に設定されており、ユーザーが PC で管理者権限を持っていない場合、Agile PPM の [ガント チャート] と [Microsoft Project] ボタンを選択するとインストール プロセスは始まりますが、インストールを完了することはできません。これは、ユーザーがこれらのボタンを選択するたびに起こり、ユーザビリティの問題となります。

IT 部門は、JRE や Microsoft Project DLL のシステム全体のインストールを行うことができます。この場合、Microsoft Project インテグレーションおよびガント チャートの機能は、このスマートルールの設定にかかわらず、完全にサポートされます。[PPM から自動インストール] スマートルールは、JRE や Microsoft Project DLL の自動インストールのみを管理します。これらのアプリケーションの実行については管理しません。

## Agile PPM ユーザーに自動的に割り当てられるデフォルトの役割

[デフォルト役割] ノードは、ユーザーにタスクが委任されたとき、または Microsoft Project とそのユーザーおよび役割が Agile PLM に公表されたときに、どの役割を自動的にユーザーに割り当てるかを指定します。

**注意** [デフォルトの役割] ノードにアクセスするには、管理者ユーザーの [管理者] 権限マスクの [適用先] プロパティで、[PPM のデフォルトの役割] が選択されている必要があります。詳細は、10-6 ページの「管理者権限と適用先機能」および 10-26 ページの「[適用先] プロパティを変更する」を参照してください。

[デフォルト役割] ノードを開くと、[デフォルト役割] ウィンドウが表示されます。ここには、2 つの Agile PPM 役割が表示されます。

- デフォルトの MSP 同期化の役割 - Agile PLM に公表された、Microsoft Project からユーザーに割り当てられた役割を管理します。デフォルトでは、ユーザーには [プログラム チーム メンバー] という役割が割り当てられます。
- デフォルトのオブジェクト所有者の役割 - 他のユーザーにタスクを委譲する場合、このユーザーに割り当てられた役割を管理します。デフォルトでは、ユーザーには [プログラム メンバー] という役割が割り当てられます。

[デフォルトのオブジェクト所有者の役割] は、アクティビティが作成される際に、[チーム] タブのオブジェクト所有者にも割り当てられます。アクティビティが委譲されると、委譲された所有者がこの委譲を受け入れた場合のみ、役割が委譲された所有者に対して割り当てられます。

Microsoft Project 同期化またはタスクの委譲で使用される役割を変更することができます。デフォルトでは、選択可能な役割は以下のとおりです。

- 変更分析者
- プログラム チーム メンバー
- プログラム マネージャ
- リソース プール所有者
- プログラム管理者

---

**注意** Agile PPM の役割を変更したり、Agile PPM の追加役割を定義している場合、[デフォルトの役割] の [役割] に表示される役割のリストは、前述のリストと異なる場合があります。詳細は、次の「利用可能な Agile PPM 役割リストの決定方法」を参照してください。

---

#### Microsoft Project 同期化およびタスク委譲で使用するデフォルト役割を変更するには:

1. [システム設定] > [Product Portfolio Management] で、[デフォルトの役割] をダブルクリックします。[デフォルト役割] ウィンドウが開きます。
2. [デフォルトの MSP 同期化の役割] をダブルクリックし、これを開きます。
3. [役割] リストをクリックし、役割を選択します。
4. [保存] をクリックします。
5. ウィンドウを閉じるには [閉じる] をクリックします。
6. [デフォルト役割] ウィンドウで、[デフォルトのオブジェクト所有者の役割] をダブルクリックし、これを開きます。
7. [役割] リストをクリックし、役割を選択します。
8. [保存] をクリックします。
9. ウィンドウを閉じるには [閉じる] をクリックします。

## 利用可能な Agile PPM 役割リストの決定方法

Agile PLM では、Agile 管理者やエンド ユーザーがリストから Agile PPM の役割を選択することを要求されるアクションがいくつかあります。Agile PPM 役割選択アクションは、次の場合に発生します。

- Agile 管理者が [デフォルトの MSP 同期化の役割] または [デフォルトのオブジェクト所有者の役割] を選択したとき (上述)。
- エンド ユーザーがチームメンバーまたはリソースをアクティビティの [チーム] タブに追加したとき。


これらのリストに表示される Agile PPM の役割は、アクティビティまたはゲートのオブジェクト タイプを持つ権限マスクを少なくとも 1 つ含む役割です。たとえば、Agile 付属の [変更分析者] 役割には、[確認通知 (ゲート クラス)] 権限マスクが含まれます。このため、[変更分析者] 役割は利用可能な PPM 役割のリストに表示されます。[変更分析者] 役割からこの権限マスクを削除すると (つまりすべてのアクティビティおよびゲート権限マスクの削除)、[変更分析者] 役割は利用可能な Agile PPM 役割のリストに表示されなくなります。

---

**注意** これらの役割は特定の Agile PPM オブジェクトでのみ適用されるため、エンド ユーザーにはこれらの PPM 役割をシステム レベル (つまり、ユーザー プロファイルの [役割] プロパティ) で割り当てる必要はありません。

---

## UI 設定データ

Web クライアントのユーザーは、[プロジェクトの要約] ページの [私の割り当て] タブまたは [コンテンツ] タブで、タスクの横にある  アイコンを使用してタスクの詳細を表示できます。このアイコンをクリックするとタスク編集ダイアログが開き、ユーザーは、サブクラスの詳細を表示および編集できます。管理者は、タスク所有者が表示方法を編集および設計する必要がある主要なフィールドを定義できます。タスク所有者は、タスク詳細に移動せずにタスク詳細を編集できます。

表示を設定するには、ダイアログに表示する必要がある各コンポーネント (属性グループ、テーブル、アクションメニューなど) を最初に定義して選択する必要があります。属性グループ、テーブル、アクションをタスク編集ダイアログの構築要素として考慮します。これらの要素を様々な方法で組み合わせて、様々なレイアウトを形成できます。そのために必要なのは、コンポーネントを選択して特定のレイアウトに組み込むことのみです。

1 つのレイアウトは、任意の 1 つのサブクラスに関連付けることができます。

#### タスク編集ダイアログを設定するには:

1. [システム設定] > [Product Portfolio Management] にナビゲートします。
2. [UI 設定データ] をクリックします。[UI 設定] ウィンドウが開きます。
3. 次の内容を設定します。
  - 属性グループ
  - テーブルの設定
  - アクション グループの設定
4. レイアウトを割り当てます。

#### 属性グループを設定するには:

1. [属性グループ] をクリックします。
2. グループの名前を指定します。たとえば、「コスト」や「スケジュール」などです。
3. [利用可能な属性] リストで、表示する属性を選択します。ドロップダウン リストを使用すると、属性をサブクラス別にフィルタリングできます。[名前] フィールドが必ずヘッダに表示されるように、[名前] フィールドが属性グループに含まれていることを確認します。
4. 右矢印ボタンを使用して、選択した属性を [選択された値] 領域に移動します。選択した属性は、矢印ボタンを使用して並べ替えることができます。
5. [追加] をクリックして、選択した属性をダイアログに追加します。

#### テーブルを設定するには:

1. [テーブル] をクリックします。
2. テーブルを選択し、表示名を指定します。たとえば、「関係」などです。
3. [利用可能なカラム] リストで、表示するカラムを選択します。
4. 右矢印ボタンを使用して、選択したカラムを [選択されたカラム] 領域に移動します。選択したカラムは、矢印ボタンを使用して並べ替えることができます。
5. [追加] をクリックして、選択したカラムをダイアログに追加します。

#### アクション グループを設定するには:

1. [アクション グループ] をクリックします。
2. グループの名前を指定します。たとえば、「タスク アクション」などです。
3. [利用可能なアクション] リストで、ワークフローのサインオフに対して表示するアクションを選択します。たとえば、[承認]、[却下]、および [マーク完了] などです。
  - a. プロセス拡張をアクションに追加するには、[新規] をクリックします。表示されたダイアログで、アクション名を指定し、適用するプロセス拡張を選択します。
  - b. 選択したアクションの名前を変更するには、表示されたダイアログで [編集] をクリックし、アクションの新規名を入力します。

- c. 選択したアクションの名前を削除するには、[削除] をクリックします。削除できるのは、作成したアクション名のみです。
4. 右矢印ボタンを使用して、選択したアクションを [選択されたアクション] 領域に移動します。選択したアクションは、矢印ボタンを使用して並べ替えることができます。
5. [追加] をクリックして、選択したアクションをダイアログに追加します。

#### レイアウトを割り当てるには:

1. [レイアウト] をクリックします。
2. [レイアウトの定義] フィールドで、レイアウトを割り当てるオブジェクトを選択します。たとえば、[プログラム] などです。
3. 必要な属性グループ、テーブルおよびアクション グループを選択します。
4. 右矢印ボタンを使用して、選択内容を [フォーム] 領域に移動します。コンポーネントは、矢印ボタンを使用して並べ替えることができます。
5. [追加] をクリックして、特定のオブジェクトにレイアウトを割り当てます。

設定の結果は、[プロジェクトの要約] ページで検証できます。

## ガント チャートにアクセスする

Agile PLM 9.2 では、ガント基本権限が削除されました。ガント機能は [読み取り (プログラム スケジュール)] および [変更 (プログラム スケジュール)] の権限マスクに変換されています。詳細は、次のセクションを参照してください。

## プロパティに適用された、特定ユーザーのアクションを管理する権限マスクを変更する

Agile PLM は [変更] 権限マスクの [適用先] プロパティを使用して、Agile PPM の特定のユーザー動作と機能を決定し、管理します。たとえば、ユーザーがアクティビティの [変更] 権限マスクを含む役割を持っており、[適用先] プロパティに [アクティビティ.スケジュール.名前] 属性が含まれる場合、このユーザーは [スケジュール] タブの [追加] 機能を使用することができます。

Agile PLM の役割と権限マスクは、必要に応じてユーザーによる非常に限定された Agile PPM ユーザー機能の定義付けを許可します。権限マスクの詳細は、185 ページの「[権限と権限マスク](#)」を参照してください。

下表は、[変更] 権限マスクの [適用先] プロパティと、それぞれが管理する PPM 動作を表示しています。

<b>注意</b>	<p>下表は&lt;[オブジェクト]&gt;を [適用先] 属性欄のクラスまたはサブクラスに対するプレースホルダーとして使用しています。権限マスクの実際のクラスまたはサブクラス名は、権限マスクで指定された再利用の条件により決定されます。(208 ページの「<a href="#">権限マスクの構成要素</a>」を参照してください。)[注意] 欄に記載された権限マスク例を見る場合、[適用先] プロパティはその特定の権限マスクに対して適切です (たとえば、[アクティビティ.一般情報.ロック ユーザー])。</p>
-----------	--

提供されるアクション または機能	[適用先] 属性	権限マスクの例/注意
オブジェクト レベルのアクション		
プログラムのロックまたは ロック解除 [ロック] と [ロック解除]	<オブジェクト>.一般情報. ロック ユーザー	例 - 変更 (プログラム スケジュール)
ロックされたプログラムの キャンセル [ロック解除] 別のユーザーによってロック されたプログラムのロック状 態をキャンセルできます。	<オブジェクト>.一般情報.プ ログラムからロック	例 - キャンセル (プログラムのロック)
ガント チャートの編集 ガント チャート	<オブジェクト>.一般情報. ロック ユーザー  および  <オブジェクト>.一般情報.ス ケジュール エディタ	例 - 変更 (プログラム スケジュール) (ロック ユーザー用)  および  例 - 読み取り (プログラム スケジュー ル) (スケジュール エディタ用)  ガント チャートを編集するには、これら 両方の属性に対する変更権限が必要で す。
ガント チャートの読み取り ガント チャート	<オブジェクト>.一般情報.ス ケジュール エディタ  (および <オブジェクト>.一 般情報.ロック ユーザーも 設定されていないユーザー)	例 - 読み取り (プログラム スケジュー ル)  [変更] が [一般情報.スケジュール エ ディタ] に適用されているが、[変更] が [ロック ユーザー] に適用されていない 場合、このユーザーがガント チャート を開き、読み取ることができますが、チャ ートを編集することはできません。
XML として保存 Microsoft® Project > [XML として保存]	<オブジェクト>.一般情報.ス ケジュール エディタ	例 - 読み取り (プログラム スケジュー ル)  これは [変更] タイプの権限マスクであ り、[読み取り] タイプの権限マスクでは ありません。  <b>注意:</b> XML として保存および編集モー ドで起動はスケジュール エディタ属性 を Microsoft Project に設定します。これ により、Agile PPM の日付のロールアッ プが無効になります。
読み取り専用モードの Microsoft Project で起動 Microsoft® Project > [読み取り専用として起動]	<オブジェクト>.一般情報.ス ケジュール エディタ	例 - 読み取り (プログラム スケジュール)  これは [変更] タイプの権限マスクであ り、[読み取り] タイプの権限マスクでは ありません。



提供されるアクション または機能	[適用先] 属性	権限マスクの例/注意
編集専用モードの Microsoft Project で起動  Microsoft® Project > [編集モードで起動]	<オブジェクト>.一般情報.スケジュール エディタ  および <オブジェクト>.一般情報.ロック ユーザー	例 - 読み取り (プログラム スケジュール)  これは [変更] タイプの権限マスクであり、[読み取り] タイプの権限マスクではありません。  および 例 - 変更 (プログラム スケジュール)  <b>注意:</b> XML として保存および編集モードで起動はスケジュール エディタ属性を Microsoft Project に設定します。これにより、Agile PPM の日付のロールアップが無効になります。
Microsoft Project から公表  Microsoft® Project > [Microsoft® Project から公表]	<オブジェクト>.一般情報.ロック ユーザー	例 - 変更 (プログラム スケジュール)
リソースの入れ替え [アクション]>[リソースの入れ替え]	<オブジェクト>.チーム.名前	例 - 変更 (すべてのプログラム、フェーズ、タスク、ゲート)
親の変更 [アクション]>[親の変更]	<オブジェクト>.スケジュール.名前	例 - 追加 (プログラム) 例 - 追加 (フェーズ) 例 - 追加 (タスク)
アーカイブ ステータスの変更 [アクション]>[アーカイブステータスの変更]	<オブジェクト>.一般情報.アーカイブ	例 - 変更 (すべてのプログラム、フェーズ、タスク、ゲート)
委譲 自分が所有者であるアクティビティを他の所有者に委譲 [アクション]>[委譲]	<オブジェクト>.一般情報.委譲された所有者	例 - 変更 (すべてのプログラム、フェーズ、タスク、ゲート)

提供されるアクション または機能	[適用先] 属性	権限マスクの例/注意
<p>削除</p> <p>現在のオブジェクトを削除</p> <p>[アクション]&gt;[削除]</p>	<p>削除動作が Agile PPM に よって行われる場所では、現 在のオブジェクトの [削除] 権限マスクが常に必要です。</p> <p>現在のオブジェクトの [ス ケジュール] タブで、従属す るオブジェクトの [削除] 権 限が必要になります。</p> <p>親オブジェクトがある場合、 現在のオブジェクトの削除 には以下が必要となります。</p> <p>親オブジェクトの [削除] 権 限マスク。</p> <p>親オブジェクトの [変更] 権 限マスク。 &lt;親オブジェクト&gt;.スケ ジュール.名前</p>	<p>現在の PPM オブジェクトが Agile PPM Web クライアントから削除される場合 は、3 つの権限マスクすべてが必要です (親オブジェクトがある場合)。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ 現在のオブジェクトの [削除] 権限</li> <li>□ 子オブジェクトの [削除] 権限</li> <li>□ 親オブジェクトの [削除] 権限</li> <li>□ 親オブジェクトの変更 [スケジュー ル.名前]</li> </ul>
[スケジュール] タブの動作		
<p>アクティビティの追加</p> <p>[追加] ボタン</p>	<オブジェクト>.スケジュー ル.名前	<p>例 - 追加 (プログラム)</p> <p>例 - 追加 (フェーズ)</p> <p>例 - 追加 (タスク)</p>
<p>アクティビティの削除</p> <p>[削除] ボタン</p>	<p>現在の [スケジュール] タブ オブジェクトの &lt;オブジェ クト&gt;.スケジュール.名前。</p> <p>削除されたオブジェクトと 削除されたオブジェクトの 従属するオブジェクトに対 する [削除] 権限が必要で す。</p>	<p>ユーザーは、[削除] アクティビティ ([ス ケジュール] タブ) が実行される場所の オブジェクトに対し、変更 [スケジュー ル.名前] 権限マスクが必要です。また、 削除されたオブジェクトとその子に対し ても [削除] 権限が必要になります。</p> <p>例 - 追加 (プログラム)</p> <p>例 - 追加 (フェーズ)</p> <p>例 - 追加 (タスク)</p> <p><b>注意:</b> 現在のオブジェクトの場合、[削除] 権限は必要ありません。</p>
依存関係 > 編集	<オブジェクト>. 編集されている [スケ ジュール] タブ行のオブ ジェクトの依存関係の依存 対象.名前	例 - 変更 (すべてのプログラム、フェー ズ、タスク、ゲート)
[編集]>[表示順序]	<オブジェクト>.スケジュー ル.名前	<p>例 - 追加 (プログラム)</p> <p>例 - 追加 (フェーズ)</p> <p>例 - 追加 (タスク)</p>

提供されるアクション または機能	[適用先] 属性	権限マスクの例/注意
[編集]>[再スケジュール]	<オブジェクト>.一般情報ス ケジュール開始日  および  <オブジェクト>.一般情報ス ケジュール終了日	ユーザーは、再スケジュール動作 ([スケ ジュール] タブ ) が実行される場所の オブジェクトに対して、[スケジュール開 始日] および [スケジュール終了日] 属 性を変更する変更権限マスクを持ってい る必要があります。  例 - 変更 (すべてのプログラム、フェー ズ、タスク、ゲート)
[編集]>[チームの追加]	<オブジェクト>.チーム.名前	例 - 追加 (プログラム) 例 - 追加 (フェーズ) 例 - 追加 (タスク)
基準の作成	<オブジェクト>.スケジュー ル.名前	例 - 追加 (プログラム) 例 - 追加 (フェーズ) 例 - 追加 (タスク)
基準の削除	<オブジェクト>.スケジュー ル.名前	例 - 追加 (プログラム) 例 - 追加 (フェーズ) 例 - 追加 (タスク)
[依存関係] タブの動作		
アクティビティの追加 [追加] ボタン	<オブジェクト>.スケジュー ル.名前	例 - 追加 (プログラム) 例 - 追加 (フェーズ) 例 - 追加 (タスク)
依存関係の追加または削除 [追加] ボタン [削除] ボタン	<オブジェクト>. 依存関係の依存対象.名前	例 - 変更 (すべてのプログラム、フェー ズ、タスク、ゲート)
[チーム] タブ動作		
チームメンバーの追加 [追加] ボタン	<オブジェクト>.チーム.名前	例 - 変更 (すべてのプログラム、フェー ズ、タスク、ゲート)  属性 [チーム.名称] の変更権限は、ユー ザーにチーム メンバーの追加と削除の みを許可します。  [チーム] テーブルを編集するには、ユー ザーは特定の [チーム] テーブル属性に 対する追加変更権限を持っている必要が あります。下の行を参照してください。

提供されるアクション または機能	[適用先] 属性	権限マスクの例/注意
チーム メンバーの変更 [編集] ボタン	<オブジェクト>.チーム.%_ 割り当て  <オブジェクト>.チーム.実際の時間  <オブジェクト>.チーム.割り当て元  <オブジェクト>.チーム.役割	[チーム] テーブルを編集するには、ユーザーは編集の必要な特定の [チーム] テーブル属性に対して、明確な [適用先] プロパティのある変更権限マスク ([実際の時間] など) を持っている必要があります。

## ガント チャートと Microsoft Project の権限に関する注意事項

前述の表には、ユーザーに次の機能を付与するために必要な [変更] 権限マスクの定義が含まれています。

- ガント チャートで Agile PPM アクティビティを開く機能、およびアクティビティとその子を編集する機能 (新しい子を作成する操作を含む)。
- Microsoft Project で Agile PPM アクティビティを起動し、さらにアクティビティとその子を編集する機能 (新しい子を作成する操作を含む)。

ガントまたは Microsoft Project でアクティビティを編集する場合、特定フィールドの内容の編集に関連する Agile の [作成] 権限マスクと [編集] 権限マスクは、ガントまたは Microsoft Project アプリケーション内ではチェックできません。たとえば、Agile PPM で作業中に特定の Agile PPM サブクラスを作成できないユーザーが、ガントまたは Microsoft Project ではそのサブクラスを作成できる場合があります。同様に、Agile PPM で作業中に特定の Agile PPM オブジェクト属性の内容を編集できないユーザーが、ガントまたは Microsoft Project ではそのフィールドを編集できる場合があります。

**注意** 一部のユーザーの作成および変更の属性権限を正確に制限したい場合、これらのユーザーにはガントおよび Microsoft Project での編集権限を付与しないでください。ガントおよび Microsoft Project の編集機能は、幅広い作成および変更機能を必要とする Agile PPM ユーザーに対して付与するのが適切です。

## ガント チャートと Microsoft Project のオブジェクト権限を削除する

ユーザーがガント チャートで Agile PPM プログラムを編集するとき、または Microsoft Project で [Microsoft Project] > [編集モードで起動] を使用して編集するとき、オブジェクト (アクティビティまたはゲート) の削除、親の変更、日付の変更または依存関係の追加を含め、多くのアクションを実行できます。

ユーザーが自分の変更を Agile PPM サーバに更新するとき (ガント チャートの [更新] 機能、Microsoft Project で [Agile] > [PPM に公表])、Agile PLM はユーザーが削除したアクティビティやゲートに対する適切な削除権限マスクを持っていることを確認します。ユーザーがガント チャートまたは Microsoft Project で削除したオブジェクトに対して適切な削除権限マスクを持っていない場合、行った変更は Agile データベースに書き込まれません。ユーザーに、必要な削除権限がないことを通知するエラー メッセージが表示されます。

そのため、ユーザーは Agile PPM で指示されるアクティビティ、つまりプログラムから削除できない活動を定義することができます。この操作は、ユーザーに指示されたアクティビティの削除を許可しない [削除] 権限マスクを設定することによって実行されます。355 ページの「[制限された削除権限の設定](#)」を参照してください。

## 制限された削除権限を設定する

Agile 付属の [削除] 権限マスクは非常に幅広く、たとえば、削除 (すべてのプログラム、フェーズ、ゲート) により、ユーザーはプログラム基本クラスのオブジェクトを、制限なしに削除することができます。制限された [削除] 権限マスクを作成するには、ユーザーが削除できるようなオブジェクトを定義する再利用条件を作成し、その条件を使用して [削除] 権限マスクを作成します。(再利用の条件の詳細は、99 ページの「[条件](#)」を参照してください。権限マスクの詳細は、185 ページの「[権限と権限マスク](#)」を参照してください。

ユーザーがガント チャートまたは Microsoft Project の PPM プログラムを変更するとき、Agile PPM に更新または再公表すると制限された [削除] 権限マスクが適用されます。

制限された [削除] 権限マスクの設定および使用方法について、以下にいくつかの例を紹介します。

- 削除する権限のない、指定されたアクティビティ用の特定サブクラスを作成します。指定されたサブクラスを除外する、または指定されたサブクラス以外のすべてのサブクラスを含める再利用条件を作成できます。

- オブジェクト タイプ：アクティビティ  
一般情報.アクティビティ タイプ、等しくない、指定されたタスク

指定されたタスクが、削除できないタスクに対して使用するために作成したサブクラスの場合。これにより、他のすべての [アクティビティ] サブクラスを削除することができますが、[指定されたタスク] は削除できません。

- それぞれのサブクラスに対して個別条件および個別の [削除] 権限を作成することはできますが、[指定されたタスク] のサブクラスに対して [削除] 権限マスクを作成したり割り当てることはできません。たとえば、再利用条件を使用して [削除] 権限マスクを作成することができます。

オブジェクト タイプ：プログラム

オブジェクト タイプ：フェーズ

オブジェクト タイプ：タスク

([指定されたタスク] に対して [削除] 権限タスクは作成されません)。

- タスクが指定されているかいないかを判断するオブジェクト属性を定義します。これにより、ユーザーはケースバイケースで指定されたタスクを定義することができます。この指定はテンプレートで設定可能で、テンプレートからコピーされた新しいプログラムは値を継承します。

属性を定義すると、その属性の内容を評価する再使用条件を作成することができます。例:

指定された条件に等しくないユーザー定義 1.List01

ユーザー定義 1.List01 は、アクティビティが指定されているかいないかを設定するために定義したリストフィールドです。これには、以下も必要です。

- ユーザー定義 1.List01 属性のリスト、たとえば、リスト選択 [指定済み] および [未指定] を定義する必要があります。

79 ページの「[リスト](#)」および特に 80 ページの「[カスタムリストを作成し、リストに追加する](#)」を参照してください。

- ユーザー定義 1.List01 属性を編集する人を制限するために、タスクが指定されているかいないかにかかわらず、変更する機能を有効または無効にする [変更] 権限マスクを作成して割り当てる必要があります。[変更] 権限マスクの [適用先] プロパティにユーザー定義 1.List01 を含めることにより、ユーザーはこの属性を変更することができます。一般的に、この属性の変更権限を与えられるユーザーはかなり限定されることになるでしょう。

**注意** Agile PPM の制限された [削除] 権限を使用するつもりであれば、Agile PPM の役割から広く定義された [削除] 権限マスクを削除します。

Agile 権限マスクは付加機能です。ユーザーが [指定されたタスク] サブクラス オブジェクトの削除権限を制限する [削除] 権限マスクを持っているが、削除 (すべてのプログラム、フェーズ、ゲート) 権限マスク (プログラム基本クラスのすべてのオブジェクトを削除を許可する) も同様に持っている場合、ユーザーは [指定されたタスク] サブクラス オブジェクトを削除することができます。

## メニュー コマンド: [アクション] > [キャンセルへ変更] に必要な設定

[アクション] > [キャンセルへ変更] メニュー コマンドを使用すると、ユーザーは、表示されたプログラム オブジェクトをキャンセルし (ワークフロー ステータスを [キャンセル] に変更)、そのすべての子を自動的にキャンセルできます。また、[ステータスの変更] ボタンを使用して、リーフ ノード オブジェクトもキャンセルできます。

選択する方法に関係なく、ユーザーが PPM プロジェクトのワークフロー ステータスを変更 (PPM オブジェクトのキャンセルを含む) できるかどうかは、ワークフロー ステータス プロパティ [手動による次の有効なステータス] の設定と、ユーザーに割り当てられた [ステータスの変更] 権限マスクによって決まります。

PPM オブジェクトに対する Agile 付属のデフォルトの [ステータスの変更] 権限マスクを使用すると、任意のステータスから別のステータスに変更できる権限が与えられます。PPM オブジェクトに対してカスタムの [ステータスの変更] 権限マスクを使用する場合は、それらをレビューして、エンドユーザーがトップレベル キャンセルを実行できることを確認してください。詳細は、203 ページの「[ステータスの変更](#)」および 126 ページの「[手動による次の有効なステータス](#)」を参照してください。

## [一般情報] タブ [要約] テーブルに表示される差異

次の差異計算は、[アクティビティ] オブジェクトおよび [ゲート] オブジェクトの [一般情報] タブ上部にある要約テーブルに表示されます。[クラス] ノードを使用し、属性を有効にすることによって、要約テーブルに表示される差異計算を行えます。稼働日数は、作業のスケジュールされた日の差異を示します。暦日数は、暦の日数に従った差異を示します。4 週間の差異は、20 の稼働日数と 28 の暦日数として表示されます。

実際の日付フィールドと推定日付フィールドが空白の場合、これらの属性に対して差異計算は実行されません。

[クラス] ノードを使用し、属性を有効または無効にすることによって、要約テーブルに表示される差異を選択します。さらに、PPM オブジェクト読み取り権限マスクの [適用先] プロパティを使用してこれらの属性を読み取れるユーザーを制御できます。

差異属性	違い
予測開始差異稼働日数	開始予定日 - スケジュール開始日 (稼働日数)
予測期間差異稼働日数	予測期間 - 予定期間 (稼働日数)
予測終了差異稼働日数	終了予定日 - スケジュール終了日 (稼働日数)

差異属性	違い
予測開始差異暦日数	開始予定日 - スケジュール開始日 (暦日数)
予測間隔差異暦日数	予測期間 - 予定期間 (暦日数)
予測終了差異暦日数	終了予定日 - スケジュール終了日 (暦日数)
実際の開始差異稼働日数	実際の開始日 - スケジュール開始日 (稼働日数)
実際の間隔差異稼働日数	実際の期間 - 予定期間 (稼働日数)
実際の終了差異稼働日数	実際の終了日 - スケジュール終了日 (稼働日数)
実際の開始差異暦日数	実際の開始日 - スケジュール開始日 (暦日数)
実際の間隔差異暦日数	実際の期間 - 予定期間 (暦日数)
実際の終了差異暦日数	実際の終了日 - スケジュール終了日 (暦日数)

## 成果物のオブジェクト クラス

ユーザーが成果物として指定できるオブジェクトは、次のいくつかの要因によって決定されます。

- 適切な Agile ソリューションがサイトにインストールされている場合。たとえば、[デklarレーション] を選択するためには、Agile PG&C をサイトにインストールする必要があります。
- ユーザーがオブジェクトの適切なディスカバリ権限と読み取り権限を持っているかどうか。

クラス	ターゲット イベント 属性	メモ	[成果物] タブ テーブル	追加元
アイテム基本クラス	ライフサイクル	Agile 管理者 [クラス] ノード、[ライフサイクル フェーズ] タブで定義されています。  Agile 変更プロセスで制御されています。	影響元	検索 新規作成
変更基本クラス	ワークフロー ステータス	ターゲット ステータス リストは、指定されたプロジェクトに対して選択されたワークフローに依存します。	影響元 影響先	検索 新規作成

クラス	ターゲット イベント 属性	メモ	[成果物] タブ テーブル	追加元
製造元部品クラス	ライフサイクル	Agile 管理者 [クラス] ノード、[ライフサイクル フェーズ] タブで定義されています。  Agile 変更プロセスで制御されていません。	影響元	検索 新規作成
製造元クラス	ライフサイクル	Agile 管理者 [クラス] ノード、[ライフサイクル フェーズ] タブで定義されています。  Agile 変更プロセスで制御されていません。	影響元	検索 新規作成
ファイル フォルダ基本クラス	ライフサイクル	Agile 管理者 [クラス] ノード、[ライフサイクル フェーズ] タブで定義されています。  Agile 変更プロセスで制御されていません。	影響元	検索 新規作成
製品サービス依頼基本クラス	ワークフロー ステータス	ターゲット ステータス リストは、指定されたプロジェクトに対して選択されたワークフローに依存します。	影響元 影響先	検索 新規作成
品質変更依頼基本クラス	ワークフロー ステータス	ターゲット ステータスは、指定されたプロジェクトに対して選択されたワークフローに依存します。	影響元 影響先	検索 新規作成

## 計算属性を有効化する

デフォルトでは、すべてのコストが計算されます。ただし、[一般情報] タブの [計算] 属性を有効にすることで、エンド ユーザーは計算されたコストを使用するか、またはユーザーが入力したコスト値を使用するかを選択することができます。[計算] 属性は「はい」/「いいえ」の選択リストを使用したリスト タイプの属性です。[計算] 属性が無効化 (非表示) されると、デフォルト設定は「はい」(計算する) となります。コストの計算方法の詳細は、『Product Portfolio Management ユーザー・ガイド』を参照してください。

人件費は例外ですが、次の表に示す各費用フィールドには、関連する [計算] 属性があります。すべての [計算] 属性を有効化するか、または使用する [計算] 属性のみを有効化することができます。

[計算] 属性が表示されている場合、その属性を変更する権限があるエンド ユーザーは、「はい」または「いいえ」を選択できます。

- 「はい」 - 現在のアクティビティのコストをその親のアクティビティヘロールアップする場合、現在のアクティビティの子の計算済みコストを使用します。



- 「いいえ」 - 現在のアクティビティのコストをその親のアクティビティへロールアップする場合、計算されたコストは使用せず、費用フィールドに入力された値を使用します。この場合は、ロールアップがありません。かわりに、親アクティビティに指定された値に基づいてコストが計算されます。

[計算] 属性を使用するには:

- オブジェクトの [一般情報] タブで適切な [計算] 属性を有効化します。([設定]>[データ設定]>[クラス])
- [計算] 属性を権限マスクの [適用先] プロパティへ追加し、適切な [変更] 権限マスクを編集します。([設定]>[権限]>[変更])

たとえば、[アクティビティ] の [一般情報] タブで [資産コストの計算 - 予算] の「はい」/「いいえ」選択リストを使用するには、[適用先] プロパティに [アクティビティ.一般情報.資産コストの計算 - 予算] を含むアクティビティの [変更] 権限マスクが必要です。

下表は、コストの属性、それに関連する [計算] 属性、および [変更] 権限マスクの [適用先] プロパティに追加する必要のある [変更] 権限マスクの属性を示しています。

[一般情報] タブ [コスト] 属性	関連する [一般情報] タブの [計算] 属性の有効化:	適切な [変更] 権限マスクの [適用先] プロパティへの追加:
実際の人件費	実質人件費と予算人件費は常に計算されています。  推定人件費は完了するまで [一般情報] タブで編集できますが、計算されることはありません。  人件費に提供される [計算] 属性はありません。	(該当なし)
予定された人件費		
完成までの予測人件費		
実際の資産コスト	資産コストの計算 - 実際	<オブジェクト>.一般情報.資産コストの計算 - 実際
予定された資産コスト	資産コストの計算 - 予算	<オブジェクト>.一般情報.資産コストの計算 - 予算
完成までの推定資産コスト	資産コストの計算 - EAC	<オブジェクト>.一般情報.資産コストの計算 - EAC

[一般情報] タブ [コスト] 属性	関連する [一般情報] タブの [計算] 属性の有効化:	適切な [変更] 権限マスクの [適用先] プロパティへの追加:
実際の固定コスト	固定コストの計算 - 実際	<オブジェクト>.一般情報.固定コストの 計算 - 実際
予定された固定コスト	固定コストの計算 - 予算	<オブジェクト>.一般情報.固定コストの 計算 - 予算
完成までの予測固定費	固定コストの計算 - EAC	<オブジェクト>.一般情報.固定コストの 計算 - EAC
実際のユーザー設定コスト	ユーザー設定コストの計算 - 実際	<オブジェクト>.一般情報.ユーザー設定 コストの計算 - 実際
予定されたユーザー設定コスト	ユーザー設定コストの計算 - 予算	<オブジェクト>.一般情報.ユーザー設定 コストの計算 - 予算
完成までの推定ユーザー設定コスト	ユーザー設定コストの計算 - EAC	<オブジェクト>.一般情報.ユーザー設定 コストの計算 - EAC

## Microsoft Project Integration のサポート

**注意** Agile PLM 9.2.1 で、Microsoft Project 98 と 2000 プロジェクト ファイルの統合はもはやサポートされていません。Microsoft は、これらのバージョンのサポートを終了しています。ユーザーが Microsoft Project 98 または 2000 プロジェクト ファイルで作業する場合、プロジェクトファイルを適切なフォーマットに自動的に変換するには、Microsoft Project 2002 または 2003 でファイルを開く必要があります。詳細は、Microsoft Project 2002 または 2003 メニューのヘルプ > Microsoft Project ヘルプを選択してください。

Microsoft Project 2002 と 2003 はサポートされています。適切な DLL の自動インストールの詳細は、345 ページの「[PPM スマートルールからの自動インストール](#)」を参照してください。

次の説明も参照してください。

- Microsoft Project 統合機能へのアクセスを制御する権限マスクのプロパティの変更に関する情報については、349 ページの「[プロパティに適用された、特定ユーザーのアクションを管理する権限マスクの変更](#)」
- 361 ページの「[Microsoft Project 作業値を Agile PPM に作業日数として転送する](#)」
- 361 ページの「[Microsoft Project 2002 と 2003 でカスタム Agile PPM サブクラスを使用する](#)」
- 362 ページの「[Microsoft Project/Agile PPM 統合: MSPSyncMapping.propertiesファイル](#)」

## Microsoft Project 作業値を Agile PPM に作業日数として転送する

Agile では、作業日数は常に % 割り当てと長さに基づいて計算されます。Agile は、作業日数を作成するために、リソースおよびリソース プールへの割り当てを必要とします。作業地が入力された Microsoft Project からタスクの公表表を処理するには、一般的なリソース プールを設定し、作業日数値を保存しておくことができます。一般的なリソース プールを設定する場合、これらの状況を満たすタスクには、[チーム] タブでこれらに関連付けられた一般的なリソース プールがあることがわかります。

### グローバル リソース プールを設定するには:

1. MSPSyncMapping.properties ファイルにリソース プール名を入力します。
2. サーバを再起動します。
3. 以下を確認しながら、リソース プールを作成します。
  - a. MSPSyncMapping.properties ファイルで入力した名前を使用します。
  - b. リソース プールはグローバル リソース プールです。マッピングが行えるようにするには、リソース プールをグローバルとして作成します。

**重要** 以下のいずれかに符合する場合、このマッピングは無視され、作業値は放棄されます。

リソース プール名がプロパティ ファイルで設定されているにもかかわらず、リソース プールが存在しない場合 (作成されていない場合)。

リソース プール名がプロパティ ファイルで設定されており、リソース プールが作成されているにもかかわらず、条件を満たしていない場合。グローバル リソース プールではない場合。

## Microsoft Project 2002 と 2003 でカスタム Agile PPM サブクラスを使用する

カスタム Agile PPM サブクラスを定義した場合、ユーザーは Microsoft Project 列 Text29 を使用して Microsoft でこれらのサブクラスを指定できます。

### Microsoft Project 2002 または 2003 でカスタム Agile PPM サブクラスの使用を有効化するには:

1. Microsoft Project で列見出しを右クリックします。
2. [列の挿入] を選択します。
3. フィールド名に [Text29] を選択します。デフォルトの Agile PPM サブクラス名が表示されます。
4. 新しいタスクを作成して入力すると、このフィールドに任意のカスタム Agile PPM アクティビティ サブクラスの名前を入力できます。このフィールドを空白のままにしておくと、Agile PPM のデフォルト サブクラスが使用されます。

**注意** サブクラス名は正しく入力してください。名前が間違っていると、デフォルトのサブクラス名が表示されます。

# Microsoft Project/Agile PPM 統合: MSPSyncMapping.properties ファイル

Agile 付属の MSP/Agile PPM マッピング ファイル (Agile サーバの MSPSyncMapping.properties) は、Agile PPM オブジェクトと Microsoft Project の間の同期マッピングを提供します。

アクティビティおよびゲート別マッピングについては、以下に示しています。

[TEXT]、[DATE EXTENDED ATTRIBUTES]、[DEADLINE] 属性 (タスク レベルの属性) のみサポートされています。これらは、[ユーザー定義 1] でデフォルトの [TEXT]、[DATE FLEX FIELDS] にマップすることができます。[ユーザー定義 2] の属性はマップできません。

属性マッピングは以下の形式となります。

**<key> = [<Mapping 1>],[<Mapping 2>],[<Mapping 3>],...[<Mapping n>]**

ここで、

- a. <key> は属性マッピングが定義されるクラスを表します。以下の値のみ有効です。
  - アクティビティ クラスの場合 "msp.pe.attribute.activities.map"
  - ゲート クラスの場合 "msp.pe.attribute.gates.map"
- b. <Mapping 1>,<Mapping 2>,<Mapping 3>,...,<Mapping n> は 1 つの属性マッピング定義を表します。

上で示す、すべての個別属性マッピング定義は、次のような形式となります。例: すべての <Mapping n>

**<Field Name> | ExtendedAttribute.<Field Name> = PAGE\_TWO.<DB Column Name>|**

ここで、

- c. <フィールド名> は以下の表記法で MSP 属性名を表します。
  - <フィールド名> 表記法を使い、MSP タスク レベル属性を指定します (現在は [Deadline] のみサポートされています)。
  - ExtendedAttribute.<フィールド名> 表記法を使い、MSP 拡張属性を指定します。
- d. <DB カラム名> は、Agile データベースの「PAGE\_TWO」テーブルの列名を示します。これは、[データ設定]>[クラス] ノードの Java クライアント管理者における属性の属性プロパティで利用できます。

MSP 側からマップされた各拡張属性については、これに関連するフィールド ID を指定する必要があります。マッピング定義に使用される各 MSP 拡張属性のフィールド ID は、次の形式で指定します。

**msp.attribute.ExtendedAttribute.<Field Name>.id = <Field ID>**

ここで、

- e. <フィールド名> は MSP 拡張属性名を表します。
- f. <Field ID> は拡張属性に関連付けられた MSP で定義される一意の整数 (ID) を表します。MSP の拡張属性を有効化した後、プロジェクト要素の拡張属性タグから、.xml ファイルでフィールド ID を取得することができます。

---

**注意**      マッピング定義で指定された上述の形式に符合しないものは無視され、サーバ コンソールではエラー メッセージが印刷されます。ユーザーの例外は表示されません。

---

以下はサンプル形式です。MSP からより多くの拡張属性をマップする場合は、これを拡張する必要があります。

```
msp.pe.attribute.activities.map=[ExtendedAttribute.Text1 = PAGE_TWO.TEXT11], ¥  
[ExtendedAttribute.Date1 = PAGE_TWO.DATE01], ¥  
[Deadline = PAGE_TWO.DATE02]
```

```
msp.pe.attribute.gates.map=[ExtendedAttribute.Text1 = PAGE_TWO.TEXT11], ¥  
[ExtendedAttribute.Date1 = PAGE_TWO.DATE01], ¥  
[Deadline = PAGE_TWO.DATE02]
```

```
msp.attribute.ExtendedAttribute.Text1.id = 188743731
```

```
msp.attribute.ExtendedAttribute.Date1.id = 188743945
```



# Agile Content Service を設定する

扱うトピックは次のとおりです。

▪ Agile Content Service について .....	365
▪ Agile Content Service のしくみ .....	365
▪ Agile Content Service を設定する .....	366
▪ 転送用のワークフロー .....	368
▪ 公表されたデータを追跡する .....	369
▪ 送信先を設定および編集する .....	369
▪ イベントを設定および編集する .....	378
▪ フィルタを設定および編集する .....	381
▪ 確認通知受信者を設定および編集する .....	384
▪ パッケージ サービスを設定および編集する .....	387
▪ 回答サービスを設定および編集する .....	389
▪ 回答とプロセスの拡張 .....	391
▪ Agile 対 Agile の公表に必要な設定 .....	391
▪ セキュリティについての考察事項 .....	396

この章では Agile Content Service の設定方法について説明します。

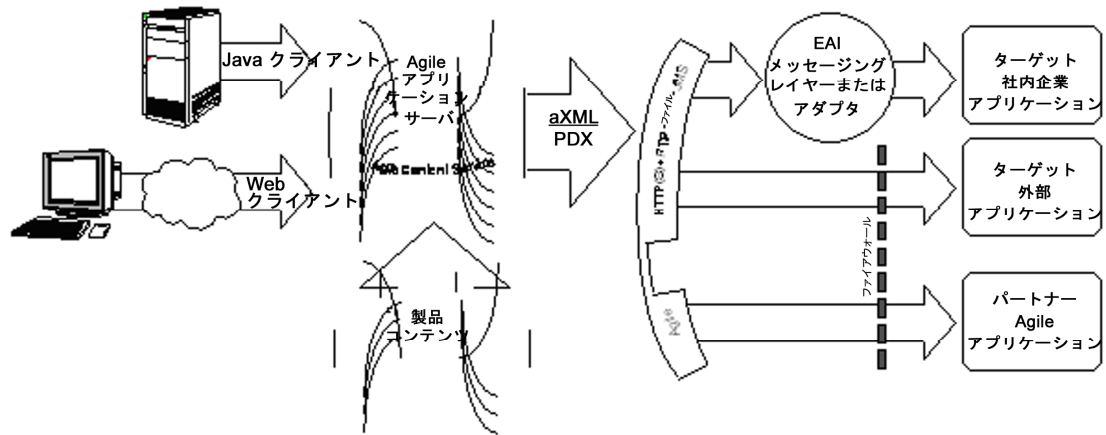
## Agile Content Service について

Agile Content Service™ は、XML ベースのイベント起動型公表サービスです。これにより、ユーザーは社内と外部のグローバルな製造ネットワークにおいて、広範囲なビジネス アプリケーションでプロダクト レコードを使用できます。Agile Content Service では、従業員やサプライ チェーン パートナーがプロダクト レコードの公表機能にオンデマンドでアクセスできるだけでなく、製品ライフサイクルのどのフェーズでも複数の送信先に対してアイテム マスター、BOM と AML の変更を自動的に公表するように設定できるため、すべてのユーザーが最新の情報に基づいて作業を進めることができます。

## Agile Content Service のしくみ

Agile Content Service では製品内容を公表するたびに転送依頼が作成され、転送される製品内容の情報、場所と日時を追跡します。Agile Content Service ではコンテンツの送信先を指定することができるため、外部エンティティは、そのエンティティがアクセスできる情報のみを受け取るようになります。適切な情報が送信されるように、役割と権限マスクを設定できます。

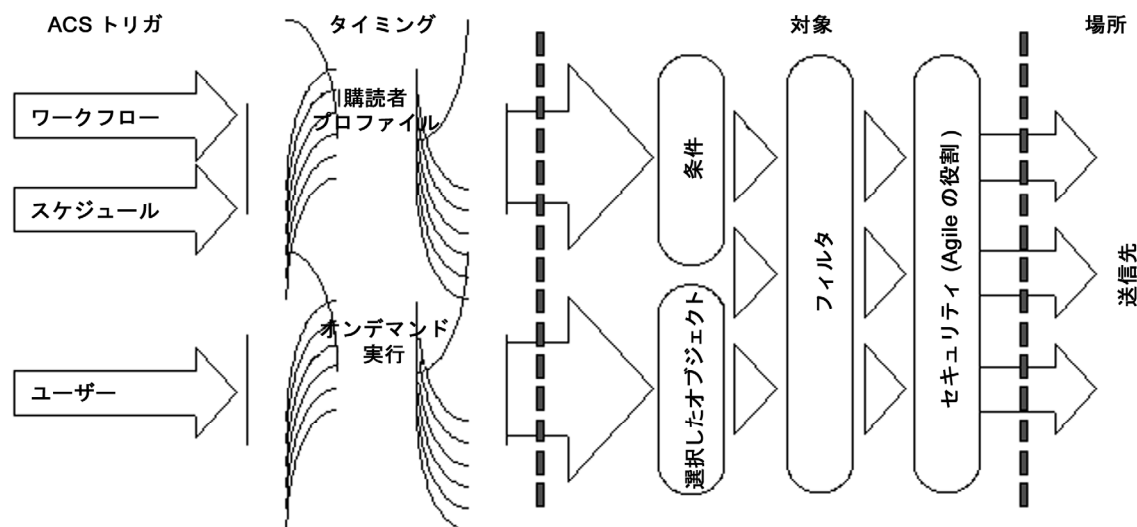
Agile PLM ユーザーは、コンテンツ転送 (CTO) によって製品内容をリアルタイムで公表したり、スケジュールに基づいて、またはワークフローのステータス変更をきっかけとして自動転送 (ATO) を自動的に作成するように確認通知受信者を設定することができます。Agile Content Service は簡単に設定することができ、ファイル、HTTP、HTTPS、FTP と JMS、別の Agile PLM システムを含む、様々な送信先への転送プロトコルをサポートしています。



## Agile Content Service を設定する

コンテンツを公表する前に、Agile Content Service はどのコンテンツが転送されるのか、いつ、どこへ転送されるのかなどを知る必要があります。





Agile Content Service は、次のコンポーネントで構成されています。

□ 送信先 (場所)

送信先には、製品内容を公表する場所を定義します。Agile PLM では、ファイル、FTP、HTTP(S)、JMS キューと Agile システムを送信先タイプとして指定できます。ユーザーは、これらのタイプの複数の送信先に対して製品内容を公表することができます。

ファイル送信先タイプは、ユーザーが内部のシステムに対して公表するときに便利です。FTP および HTTP(S) 送信先タイプは、ユーザーが外部のシステムに対して公表するときに便利です。JMS キュー送信先タイプは、ユーザーが EAI システムに対して公表するときに便利です。Agile 送信先タイプは、サプライチェーン パートナーの Agile PLM システムに対して公表するときに使用します。

□ イベント (タイミング)

イベントには、いつ自動転送によって製品内容を自動的に公表するかを定義します。イベントは、スケジュールまたは指定のワークフロー ステータスへのオブジェクトの移動のいずれかに基づくことができます。

□ フィルタ (対象)

フィルタによって、どのデータ要素を公表するかが決定されます。フィルタ機能を使用することで、公表されるデータの要素を設定できます。Agile Content Service には、すべてのオブジェクトに対するフィルタ機能がデフォルトで用意されています。

□ 条件 (対象)

ATO については、条件を設定することにより、確認通知受信者は、どのオブジェクトを処理する必要があるかを自動的に判断できるようになります。CTO については、CTO の [選択されたコンテンツ] タブでオブジェクトを選択し、処理するオブジェクトを決定することができます。

□ 確認通知受信者

確認通知受信者は Agile PLM 管理者によって作成されます。特定の製品内容へのアクセスが必要なすべてのアプリケーションおよび外部システムは、確認通知受信者として定義されます。確認通知受信者は、設定された送信先、フィルタ、条件、イベント、割り当てられた役割、および自動転送による作成データによって定義されます。

□ パッケージ サービス

パッケージ サービスには、Agile 対 Agile の転送用に Agile PLM ターゲット システムでパッケージを作成するための設定が含まれます。パッケージ サービスは、Agile 対 Agile の転送において、ターゲット Agile PLM システムで定義されます。ACS サービス ライセンスはパッケージ サービスの設定には必要ありません。

□ 回答サービス

回答サービスでは、回答を自動的に送信する宛先が定義されます。それらは、データのリモート受信者からの受信通知の一部になります。回答サービスは、Agile 対 Agile の転送において、ターゲット Agile PLM システムで定義されます。ACS サービス ライセンスは回答サービスの設定には必要ありません。

## 転送用のワークフロー

Agile PLM には、自動転送用のデフォルトのワークフローとコンテンツ転送用のデフォルトのワークフローが用意されています。自動転送とコンテンツ転送は自動プロセスを使用するため、これらのワークフローにはいくつかの制限が適用されます。

### デフォルトの自動転送のワークフロー

自動転送の処理は完全に自動化されるため、デフォルトの自動転送のワークフローは読み取り専用であり、変更することはできません。別のワークフローを使用した場合、自動転送の処理が正しく動作しないことがあります。

**注意** 自動転送の処理には、デフォルトの自動転送のワークフローのみを使用してください。

### デフォルトのコンテンツ転送のワークフロー

デフォルトの自動転送のワークフローとは異なり、デフォルトのコンテンツ転送のワークフローではレビュー用のコンテンツを送付することができます。コンテンツ転送の処理には、デフォルトのコンテンツ転送のワークフローを使用することをお勧めします。

コンテンツ転送で使用するワークフローは、次の制限事項に適合している必要があります。使用するワークフローが制限事項に適合していない場合、コンテンツ転送の処理が正しく動作しないことがあります。

**注意** CTO が [リリース済み] タイプのステータスに入ると、これが CTO を処理する準備が整ったことを ACS に告げるシグナルとなります。CTO が [リリース済み] タイプのステータスに入ると、ACS は自動的にリリース済み CTO を検出し、自動的にこれを処理し、そして自動的に [完了] タイプ ステータスへと移動します。[リリース済み] または [完了] タイプのステータスの変更は、正しい CTO 処理を妨げることになります。

- コンテンツ転送のワークフローの [リリース済み] タイプのステータスは 1 つのみ。
- [リリース済み] タイプのステータスの直後に [完了] タイプのワークフロー ステータスが続く。
- [リリース済み] タイプのステータスで、承認者が指定されていない。したがって、このワークフロー ステータスを変更してステータスに自動的に承認者を追加しないよう注意してください。また、このステータスの [アドホック承認者/オブザーバ] プロパティが [いいえ] に設定されていることを確認してください。

別のコンテンツ転送のワークフローが必要な場合は、デフォルトのコンテンツ転送のワークフローを開き、[名前を付けて保存] を使用して新しいコンテンツ転送のワークフローを作成することをお勧めします。新規コンテンツ転送のワークフローでは、[リリース済み] および [完了] タイプのステータスを変更しないでください。

ただし、[提出] および [レビュー] タイプのステータスは必要な数だけ追加することができ、これらのステータスの設定を適宜変更することができます。

## 公表されたデータを追跡する

完了した転送（自動転送とコンテンツ転送の両方）に対しては、製品内容の転送内容、場所、日時、および送信の成否が記録されます。これにより、公表された製品内容のすべてのデータの検証記録を保持できます。

自動転送を使用して製品内容データが自動的に公表された場合、**Agile Content Service** では、どのデータが自動転送で送信されたかを追跡できます。次回、自動転送でオブジェクト データを同じ送信先に公表した場合には、**Agile PLM** システムによって、新たな自動転送で抽出用に指定されたオブジェクト データが、前回転送されたデータの自動転送記録と比較されます。すでに転送済みのオブジェクトは同じ送信先に再転送されません。

対照的に、コンテンツ転送では、同じ送信先に以前送信されたかどうかに関係なく、指定されたデータが常に公表されます。自動転送で指定されたデータを再公表する必要がある場合、自動転送を開き、[名前を付けて保存] を使用すると簡単にコンテンツ転送を作成できます。作成したコンテンツ転送の [選択されたコンテンツ] タブを編集して、再公表が必要なオブジェクトのみを指定することができます。

## 送信先を設定および編集する

送信先によって、抽出されたコンテンツがどのリソースで受け入れられるかが定義されます。これらは、[送信先] ノードから管理されます。**Agile Content Service** では、次の送信先プロトコルを定義できます。

- Agile
- FTP
- ファイル
- HTTP/HTTPS
- JMS キューまたはトピック

ファイル名の拡張子は、送信先レベルで指定できます。つまり、特定の送信先に送信する抽出物には、指定のファイル拡張子が使用されます（指定されている場合）。拡張子が指定されていない場合、デフォルトでは、抽出の形式に基づきます。

ユーザーは、送信先を作成することはできません。送信先は、ユーザーが転送を作成する前に管理者によって作成され、割り当てられている必要があります。送信先の作成時には、接続をテストして、送信先が検索できるかどうかを確認することもできます。

[送信先] ウィンドウの [ステータス] 欄には、その送信先に対して最後に試行されたデータ送信のステータスが示されます。送信先が作成またはリセットされたときのデフォルトのステータスは、送信がまだ実行されていないか [成功] になっています。

**Agile PLM** には、ファイル プロトコルを使用した送信先の例が用意されています。この送信先では、アプリケーション サーバのルート ディレクトリに転送ファイルが保存されます。プロパティが社内の要件に適合する場合は、確認通知受信者やコンテンツ転送を作成する際に、この送信先の例を使用できます。

## Agile 送信先


**Agile Content Service** では、別の **Agile PLM** システムに対する公表が可能です。**Agile Content Service** は、Web サービスを使用してターゲット システム内にパッケージを作成します。パッケージが承認されると、データは

パッケージの [添付ファイル] タブから直接インポートすることができます。データを直接インポートする必要がある場合は、必ず aXML 形式を使用してください。


**注意** 送信元の Agile PLM システムで Agile 送信先を作成するためには、ターゲットの Agile PLM システムに関する次の情報が必要です。サーバの URL (ホスト名、仮想パス名、およびポート番号)、ターゲットの Agile PLM システムで使用する適切なユーザー名およびパスワード、ターゲットの Agile PLM システムで選択するパッケージ サービスの名前。この情報の入手方法については、ターゲット Agile PLM システムの管理者にお問い合わせください。

別の Agile PLM システムからデータを受信できるように Agile PLM システムを設定する方法は、387 ページの「[パッケージ サービスを設定および編集する](#)」を参照してください。(ソース Agile PLM システムとターゲット Agile PLM システムの両方に対する ACS 設定については、391 ページの「[Agile 対 Agile の公表に必要な設定](#)」を参照してください。)

### Agile 送信先を作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[送信先の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] および [説明] フィールドに送信先の名前と説明を入力します。
4. [プロトコル] リストから [Agile] を選択します。
5. [予期される回答] リストから [はい] または [いいえ] を選択します。

回答を送信先から送信するように Agile PLM システムを設定する方法は、389 ページの「[回答サービスを設定および編集する](#)」を参照してください。

6. [通知ユーザー] フィールドの隣の  ボタンをクリックして、利用可能なユーザーのリストを表示します。転送が失敗した場合に通知するユーザーを選択します。
7. サーバ URL のドロップダウン リストから HTTP または HTTPS のいずれかを選択します。
8. ホスト フィールドとポート フィールドにそれぞれ、ターゲットの Agile PLM アプリケーション サーバの URL とポートを入力します。仮想パス フィールドに仮想パス名を入力します。これが最後のフィールドです。

**注意** 仮想パスは、Agile PLM システムのインストール時に決まります。たとえば、ターゲットの Agile アプリケーション サーバ上の Web クライアントへのログインに次のような URL が使用される場合を仮定します。

<http://www.clapton.com/Agile/PLMServlet>

9. URL 情報を前述のように入力します。ここで、[www.clapton.com](http://www.clapton.com) はホスト名、Agile は仮想パス名です。コロン (:) の後のフィールドにはポート番号を指定します。HTTP には通常 80、HTTPS には通常 443 が使用されます。80 または 443 以外のポートが使用されている場合、そのポート番号は、Agile Web クライアントへのログインに使用される URL 内に示されます。PLMServlet は省略します。これは、アプリケーション名です。使用する URL については、対象の Agile PLM アプリケーション サーバの Agile 管理者にお問い合わせください。
10. [ユーザー名] フィールドと [パスワード] フィールドに、ターゲットの Agile PLM アプリケーション サーバのユーザー名とパスワードを入力します。[パッケージ サービスの入手] をクリックします。  
リモートの Agile PLM システムと正常に接続している場合、ターゲットの Agile PLM サーバからのパッケージ サービスがリストに表示されます。

---

**注意** ターゲットの Agile PLM システムでユーザーのパスワードが変更された場合は、必ず新しいパスワードを使用して送信先を編集してください。

---

11. ドロップダウン リストから適切なパッケージ サービスを選択します。

---

**注意** どのパッケージ サービスを選択するかの詳細は、ターゲット Agile PLM システムの Agile 管理者にお問い合わせください。

---

12. 必要に応じて、次の送信先パラメータを編集します。

- [ファイル名の接頭辞] (デフォルトは TO)
- [ファイル番号] (デフォルトは 000001)
- ファイル名の拡張子

転送ファイルの名前は、[ファイル名の接頭辞] パラメータに続く [ファイル番号] パラメータと [ファイル名の拡張子] パラメータの拡張子で構成されます。[ファイル番号] パラメータは、ファイルが転送されるたびに 1 ずつ増加します。

[ユーザー定義のファイル名拡張子の有効化] を選択して、[ファイル名の拡張子] フィールドを有効にします。ファイル名の拡張子には、.pdx または .axml を指定します。この送信先で抽出されたすべてのファイルには、同じファイル拡張子を設定します。拡張子が指定されていない場合、デフォルトでは、抽出の形式に基づきます。

13. [OK] をクリックします。

## FTP 送信先



FTP サイトに対してデータを公表することができます。Agile Content Service は、ユーザー名とパスワード (設定されている場合) を使用して FTP サーバにログインします。送信先の作成中にサイトへの接続を検証して、アクセスを確認することもできます。

---

**注意** 転送を公表した時点で FTP サイトに同じ名前のファイルが存在する場合には、そのファイルは上書きされます。

---

### FTP 送信先を作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[送信先の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] および [説明] フィールドに送信先の名前と説明を入力します。
4. [プロトコル] リストから [FTP] を選択します。
5. [通知ユーザー] フィールドの隣の  ボタンをクリックして、利用可能なユーザーのリストを表示します。転送が失敗した場合に通知するユーザーを選択します。
6. [URL またはターゲット パス] フィールドに、送信先の FTP サイトの URL を入力します。必要に応じて、ポート番号も入力します。

---

**注意** FTP サイトの URL を入力する際は、[ftp://](#) を入力する必要はありません。

---

7. 必要に応じて、[ユーザー名] フィールドと [パスワード] フィールドに、FTP サイトのユーザー名とパスワードを入力します。

8. 必要に応じて、次の送信先パラメータを編集します。

- [ファイル名の接頭辞] (デフォルトは TO)
- [ファイル番号] (デフォルトは 000001)
- ファイル名の拡張子

転送ファイルの名前は、[ファイル名の接頭辞] パラメータに続く [ファイル番号] パラメータと [ファイル名の拡張子] パラメータの拡張子で構成されます。[ファイル番号] パラメータは、ファイルが転送されるたびに 1 ずつ増加します。

[ユーザー定義のファイル名拡張子の有効化] を選択して、[ファイル名の拡張子] フィールドを有効にします。ファイル名の拡張子には、.pdx または .axml を指定します。この送信先で抽出されたすべてのファイルには、同じファイル拡張子を設定します。拡張子が指定されていない場合、デフォルトでは、抽出の形式に基づきます。

9. [転送モード] リストから [バイナリ] を選択します。

10. 送信先を検証するには、[テスト] をクリックします。

送信先への接続をテストする際に、送信先でテンポラリ ファイルが作成されます。テンポラリ ファイルは、接続の検証後に削除できます。

11. [OK] をクリックします。

## ファイル送信先


ファイル システムに対してデータを公表することができます。転送を適切に行うためには、ファイルが存在する場所への完全修飾パスに Agile Content Service がアクセスできなければなりません。ファイルを送信先に書き込むには、十分なディスク容量が必要です。送信先の作成中にパスへの接続を検証して、アクセスを確認することができます。

**注意** 転送を公表した時点で送信先に同じ名前のファイルが存在する場合には、そのファイルは上書きされます。

### ファイル送信先を作成するには


1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。



2.  をクリックします。[送信先の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。

3. [名前] および [説明] フィールドに送信先の名前と説明を入力します。

4. [プロトコル] リストから [ファイル] を選択します。

5. [通知ユーザー] フィールドの隣の  ボタンをクリックして、利用可能なユーザーのリストを表示します。転送が失敗した場合に通知するユーザーを選択します。

6. [URL またはターゲット パス] フィールドに、転送先を指定する完全修飾パスを入力します。

**注意** Agile アプリケーション サーバが正常に書き込みできるネットワーク上の任意のディレクトリを指定できます。

指定されたターゲット パスは、Agile PLM アプリケーションがインストールされているコンピュータにあります。ログオンしているユーザーのコンピュータにはありません。たとえば、「C:\temp」と指定した場合、転送ファイルは、Agile PLM アプリケーションがインストールされているコンピュータの C ドライブの「temp」というディレクトリに書き込まれます。転送ファイルは、ユーザー自身のコンピュータの C:\temp ディレクトリには書き込まれません。

Solaris: ファイルの送信先は /opt/Agile フォルダとそのサブフォルダに設定することができます。ユーザーはその他のフォルダには書き込み権限がない場合があります。パスでは、バックスラッシュ (\) ではなく、スラッシュ (/) を使用してください。

7. 必要に応じて、次の送信先パラメータを編集します。

- [ファイル名の接頭辞] (デフォルトは TO)
- [ファイル番号] (デフォルトは 000001)
- ファイル名の拡張子

転送ファイルの名前は、[ファイル名の接頭辞] パラメータに続く [ファイル番号] パラメータと [ファイル名の拡張子] パラメータの拡張子で構成されます。[ファイル番号] パラメータは、ファイルが転送されるたびに 1 ずつ増加します。


[ユーザー定義のファイル名拡張子の有効化] を選択して、[ファイル名の拡張子] フィールドを有効にします。ファイル名の拡張子には、.pdx または .axml を指定します。この送信先で抽出されたすべてのファイルには、同じファイル拡張子を設定します。拡張子が指定されていない場合、デフォルトでは、抽出の形式に基づきます。

8. 送信先を検証するには、[テスト] をクリックします。
9. [OK] をクリックします。

## HTTP および HTTPS 送信先


Agile Content Service では、POST メソッドを使用して HTTP サーバにデータを公表できます。[URL またはターゲット パス] フィールドに入力された正確な URL によってサーバの場所が指定されます。

### HTTP または HTTPS 送信先を作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[送信先の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] および [説明] フィールドに送信先の名前と説明を入力します。
4. [プロトコル] リストから [HTTP] または [HTTPS] を選択します。
5. [予期される回答] リストから [はい] または [いいえ] を選択します。

[はい] を選択した場合、この送信先で確認通知を受信した転送のステータスは、この送信先から送信成功の回答が返されるまで、[完了] に変更されません。送信成功の回答が着信しない場合、その送信先に、追加の転送は送信されません。

回答を送信先から送信するように Agile PLM システムを設定する方法は、389 ページの「[回答サービスを設定および編集する](#)」を参照してください。

6. [通知ユーザー] フィールドの隣の  ボタンをクリックして、利用可能なユーザーのリストを表示します。転送が失敗した場合に通知するユーザーを選択します。
7. [URL またはターゲット パス] フィールドに、送信先の HTTP(S) サイトの URL を入力します。

**注意** URL を入力する際には、「http://」または「https://」を入力する必要はありません。

8. [依頼ファイルのフィールド] で、ファイル データを含む MIME 部品 (セクションなど) で使用する名前を入力します。

(HTTP POST の構成方法に関する情報が必要な場合は、Agile サポートにお問い合わせください。)


9. 必要に応じて、次の送信先パラメータを編集します。

- [ファイル名の接頭辞] (デフォルトは TO)
- [ファイル番号] (デフォルトは 000001)
- ファイル名の拡張子

転送ファイルの名前は、[ファイル名の接頭辞] パラメータに続く [ファイル番号] パラメータと [ファイル名の拡張子] パラメータの拡張子で構成されます。[ファイル番号] パラメータは、ファイルが転送されるたびに 1 ずつ増加します。

[ユーザー定義のファイル名拡張子の有効化] を選択して、[ファイル名の拡張子] フィールドを有効にします。ファイル名の拡張子には、.pdx または .axml を指定します。この送信先で抽出されたすべてのファイルには、同じファイル拡張子を設定します。拡張子が指定されていない場合、デフォルトでは、抽出の形式に基づきます。

**注意** これらのパラメータを削除することはできません。

10. [追加パラメータ] フィールドの隣の  ボタンをクリックし、ダイアログ ボックスを表示します。URL を提示する際に、名前/値のペアを追加する必要がある場合は、[追加] ボタンをクリックして入力します。[OK] をクリックします。

これらのパラメータは生成された MIME メッセージの命名部品として含まれます。

11. 送信先を検証するには、[テスト] をクリックします。

12. [OK] をクリックします。

## サンプル HTTP 送信先

次の例における HTTP 送信先は、送信先設定が HTTP POST の構成でどのように使用されるかを示しています。

送信先パラメータ	設定
名前	HTTP 1
説明	HTTP 送信先のテスト
プロトコル	HTTP
通知ユーザー	
URL またはターゲット パス Http:	localhost:9522
依頼ファイルのフィールド	ACS ファイル データ
ファイル名の接頭辞	TO
ファイル番号	00001
追加パラメータ	foo=bar



```

POST / HTTP/1.1
Content-Length: 7414
Content-Type: multipart/form-data; boundary=----AlQiUnIdLaEvS-f2a7b238
Cache-Control: no-cache
Pragma: no-cache
User-Agent: Java/1.4.2
Host: localhost
Accept: text/html, image/gif, image/jpeg, *, q=.2, */*; q=.2
Connection: keep-alive

-----AlQiUnIdLaEvS-f2a7b238
content-disposition: form-data; name="foo"

bar
-----AlQiUnIdLaEvS-f2a7b238
content-disposition: form-data; name="ACS File Data"; filename="TO00001.AXML"
Content-type: Application/Octet-stream;
Content-Transfer-Encoding: binary

...

-----AlQiUnIdLaEvS-f2a7b238--

```

## JMS 送信先

Agile Content Service では、Java Messaging Service (JMS) に対してデータを公表することができます。TIBCO Enterprise™ for JMS は、Agile Content Service で現在サポートされている唯一の JMS キューです。


JMS 送信先を設定する前に、Agile Content Service に接続できるようにするために、JMS のインストールにいくつかの変更が必要になる場合があります。詳細は、該当するアプリケーション サーバの『Agile PLM Installation Guide』を参照してください。

### JMS 送信先を作成するには:

---

**注意** JMS 送信先の [接続ファクトリ] パラメータと [送信先名] パラメータの設定に応じて、JMS キュー処理または JMS トピック処理を実行することができます。次の手順 8 と 10 を参照してください。


---

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[送信先の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] および [説明] フィールドに送信先の名前と説明を入力します。
4. [プロトコル] リストから [JMS] を選択します。

5. [予期される回答] リストから [はい] または [いいえ] を選択します。

[はい] を選択した場合、この送信先で確認通知を受信した転送のステータスは、この送信先から送信成功の回答が返されるまで、[完了] に変更されません。送信成功の回答が着信しない場合、その送信先に、追加の転送は送信されません。

回答を送信先から送信するように Agile PLM システムを設定する方法は、389 ページの「[回答サービスを設定および編集する](#)」を参照してください。

6. [通知ユーザー] フィールドの隣の  ボタンをクリックして、利用可能なユーザーのリストを表示します。転送が失敗した場合に通知するユーザーを選択します。

**注意** [プロバイダ コンテキストのファクトリ]、[接続ファクトリ]、および [デフォルトのプロバイダ URL] の各パラメータ (次の手順 7、8、9) については、Agile PLM システムによって、サーバ固有のデフォルト情報が各フィールドに入力されます。たとえば、Oracle Application Server 上で Agile PLM システムを実行している場合は、Oracle のデフォルト情報が適用されます。これらのデフォルト情報が Agile PLM のインストールに適合しているかどうかを確認し、必要であれば変更を加えます。

7. [プロバイダ コンテキストのファクトリ] フィールドに、JMS サーバのコンテキスト ファクトリ クラスの名前を入力します。コンテキスト ファクトリ クラスの名前は、次の例のような形式にする必要があります (これは TIBCO で使用されている適切な値です)。

`com.tibco.tibjms.naming.TibjmsInitialContextFactory`

8. [接続ファクトリ] フィールドに、JNDI ツリーから取得される接続ファクトリの名前を入力します。これは JMS 接続ファクトリが登録されている名前です。キュー処理が使用されているか、トピック処理が使用されているかどうかは、[接続ファクトリ] フィールドで指定された接続ファクトリのタイプにより決定されます。

たとえば、デフォルトの TIBCO インストールは次の 2 つのサンプル接続ファクトリを提供します。

QueueConnectionFactory (キュー処理の場合)

TopicConnectionFactory (トピック処理の場合)

9. [デフォルトのプロバイダ URL] フィールドに、ホストの URL をアドレスとポートを含めて入力します。このフィールドに表示されるデフォルト値は、アプリケーション サーバの内蔵型 JMS プロバイダに対して有効です。詳細は JMS のマニュアルをご覧ください。

TIBCO については、URL を下記の例のような形式にする必要があります。

`tibjmsnaming://JMS_ServerName:7222`


10. [送信先名] フィールドに、キューまたはトピックの名前を入力します。キューまたはトピックの名前は、JMS サーバの設定方法により異なります。キューとトピックの作成や設定方法については、JMS の説明書をご覧ください。

たとえば、TIBCO は次のサンプル キューとトピックを提供しています。

`queue.sample`

`topic.sample`

11. [ユーザー名] フィールドと [パスワード] フィールドに、キューへのアクセスに必要なユーザー名とパスワードを入力します。

12. [追加パラメータ] フィールドの隣の  ボタンをクリックし、ダイアログ ボックスを表示します。[追加] ボタンをクリックし、追加名/値のパラメータ ペアを入力します。[OK] をクリックします。

---

**注意** これらのパラメータは、JMS 送信先にコンテンツを配布する際、JMS ヘッダ プロパティとして送信されます。

---

13. 送信先を検証するには、[テスト] をクリックします。
14. [OK] をクリックします。

## 送信先を編集する

送信先のパラメータは、[プロトコル] を除いてすべて編集することができます。それ以降の転送では編集した送信先が参照され、更新後の設定が適用されます。

有効な確認通知受信者によって参照されている送信先は、編集することができません。送信先に変更を加える前に、確認通知受信者を無効にする必要があります。詳細は、386 ページの「[確認通知受信者を有効または無効にする](#)」を参照してください。

### 送信先を編集するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。
2. 編集する送信先の名前をダブルクリックします。
3. 送信先の [一般情報] タブを編集して、必要なフィールドに変更を加えます。
4. [保存] および [閉じる] をクリックします。


## 送信先をリセットする

送信先への送信が失敗すると、転送の [送信先] タブと [送信先] ウィンドウの [送信ステータス] カラムに、その失敗が示されます。転送の [送信先] タブには、送信ステータスが示され、[送信メモ] カラムにエラー メッセージが表示されます。

[送信先] ウィンドウでは、送信先の [履歴] タブに、どの転送で失敗が発生したかを示す詳細が表示されます。転送または送信先に必要な変更を加えて問題を修正した後は、送信先をリセットして送信を再試行することができます。

ある送信先で一度転送に失敗すると、その送信先をリセットするまで同じ送信先へ他の転送を送信することはできません。その送信先への転送は、送信スケジュールの順にキューに入ります。[送信メモ] の欄には、転送依頼が別の送信先を保留している状態の説明が示されます。送信先がリセットされると、転送はキュー内での順序に従って送信されます。


### 送信先をリセットするには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。
2. リセットする送信先を選択します。
3.  をクリックします。

## 送信先を削除する

送信先は、転送や確認通知受信者に現在割り当てられていない場合にのみ削除することができます。

### 送信先を削除するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[送信先] をダブルクリックします。[送信先] ウィンドウが表示されます。
2. 削除する送信先を選択します。
3.  をクリックします。

## イベントを設定および編集する

イベントによって、いつコンテンツが送信先に転送されるかが決定されます。これらは [イベント] ノードから処理されます。



イベントは、スケジュールまたは指定のワークフロー ステータスへのオブジェクトの移動のいずれかに基づくことができます。たとえば、特定の定義に一致するオブジェクトの検索を毎晩午前 0 時に実行する場合、スケジュールされたイベントを作成します。また、すべての変更が [リリース済み] ステータスに移行するのを待機する場合は、ワークフロー イベントを作成します。

### スケジュールされたイベント

スケジュールされたイベントは、指定された期間の経過後、または毎時、毎日、毎週などの特定の時刻に繰り返されます。スケジュールされたイベントが処理される際には、確認通知受信者に指定された定義に一致する Agile PLM オブジェクトのうちの、まだ処理されていないものがすべて抽出されます。

Agile PLM には、土曜日および日曜日の午前 0 時に開始するように設定された、スケジュール済みイベントの例が用意されています。スケジュール プロパティが社内の要件に適合する場合は、確認通知受信者を作成する際に、このイベントを使用できます。(確認通知受信者の詳細は、384 ページの「[確認通知受信者を設定および編集する](#)」を参照してください。)

### スケジュールされたイベントを作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[イベント] をダブルクリックします。[イベント] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[イベントの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. 指定されたフィールドに、イベントの名前と説明を入力します。
4. [イベント タイプ] リストから [スケジュール済み] を選択します。
5. [頻度] フィールドの  をクリックして、イベントのスケジュールを設定します。
6. 次のスケジュール プロパティを確認し、必要に応じて変更します。

デフォルトの設定は、[時間単位 0 時間 0 分] です。このデフォルトを使用する場合は、時間間隔を選択する必要があります。

設定	アクション
1 日に 1 度	1 日に 1 度、指定した開始時刻に自動的に抽出が実行されます。

設定	アクション
時間単位 X 時間 Y 分	抽出が実行される時間間隔を指定します ([開始] フィールドの時刻に基づいて計算されます)。 <ul style="list-style-type: none"> <li>前の抽出が終了していない場合は、その抽出が終了した後に、次の抽出が実行されます。</li> <li>最小の時間間隔は「0 時間 5 分ごと」です。各フィールドの最大の時間間隔は「11 時間 59 分」です。</li> </ul>
開始	確認通知受信者の条件のチェックを開始する時刻を指定します。  開始時刻と終了時刻が同じ場合、確認通知受信者の条件は 24 時間チェックされます。
終了	確認通知受信者の条件のチェックを停止する時刻を指定します。
日数	スケジュール時刻に従って抽出を実行する日数を指定します。

[OK] をクリックします。

## ワークフロー イベント


ワークフロー イベントによって、確認通知受信者はオブジェクトのステータス変更に基づいてデータを公表することができます。オブジェクトのワークフロー ステータスが変更され、その特定の変更に対して確認通知受信者が設定されていると、データが公表されます。確認通知受信者は、ワークフローの最初のステータス ([保留中] など) に対してアクションを実行することはできません。

Agile PLM には、変更がリリースされた時点で開始するように設定された、ワークフロー イベントの例が用意されています。ワークフロー プロパティが社内の要件に適合する場合は、確認通知受信者を作成する際に、このイベントを使用できます。

**注意** ワークフローにより管理されているオブジェクトのみが抽出されます。たとえば、[例 - ワークフロー イベント] は [デフォルトの設計変更] ワークフローと [リリース済み] ステータスを使用します。きっかけとなるイベントは、[デフォルトの設計変更] ワークフローを使用するルーティング可能オブジェクトが [リリース済み] ステータスへとステータスを変更するときです。ルーティング可能オブジェクトと関連オブジェクト (対象アイテムなど) および添付ファイルは抽出され、公表されます。

Agile Content Service を起動して処理した後にオブジェクトに変更があった場合、抽出プロセスの開始前に行われた変更であれば、抽出されるコンテンツに反映されます。たとえば、[レビュー] ステータスの時点で ECO を公表するように確認通知受信者を設定したが、直後に [リリース済み] ステータスに昇格したときには、その ECO の抽出後のステータスは [リリース済み] になります。

### ワークフロー イベントを作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[イベント] をダブルクリックします。[イベント] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[イベントの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. 指定されたフィールドに、イベントの名前と説明を入力します。
4. [イベント タイプ] リストから [ワークフロー] を選択します。
5. [ワークフロー] リストからワークフローを選択します。


6. [ワークフロー ステータス] フィールドで、選択したワークフローに基づいた使用可能な値のリストからステータスを選択します。
7. [OK] をクリックします。

## イベントを編集する

イベントを作成した後にイベント タイプを変更することはできませんが、スケジュールされたイベントの [頻度] フィールドとワークフロー イベントのワークフロー タイプを変更することは可能です。

有効な確認通知受信者によって参照されているイベントは、編集することができません。イベントに変更を加える前に、確認通知受信者を無効にする必要があります。詳細は、386 ページの「[確認通知受信者を有効または無効にする](#)」を参照してください。

### スケジュールされたイベントを編集するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[イベント] をダブルクリックします。[イベント] ウィンドウが表示されます。
2. 編集するスケジュールされたイベントをダブルクリックします。
3. イベントの [一般情報] タブを編集します。
4. 必要に応じて、[名前] フィールドと [説明] フィールドを変更します。
5. [頻度] フィールドの隣の  ボタンをクリックします。
6. スケジュールに必要な変更を加えます。
7. [OK] をクリックします。
8. [保存] をクリックします。


### ワークフロー イベントを編集するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[イベント] をダブルクリックします。[イベント] ウィンドウが表示されます。
2. 編集するワークフロー イベントをダブルクリックします。
3. イベントの [一般情報] タブを編集します。
4. 必要に応じて、[名前] フィールドと [説明] フィールドを変更します。
5. 必要に応じて、[ワークフロー] リストから別のワークフローを選択します。
6. 必要に応じて、[ワークフロー ステータス] フィールドで別のワークフロー ステータスを選択します。
7. [保存] をクリックします。

## イベントを削除する

イベントは、確認通知受信者に割り当てられていない場合にのみ削除することができます。

### イベントを削除するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[イベント] をダブルクリックします。[イベント] ウィンドウが表示されます。
2. 削除するイベントを選択します。
3.  をクリックします。

## フィルタを設定および編集する

フィルタによって、転送時にどのコンテンツが公表されるかが定義されます。これらは、[フィルタ] ノードから管理されます。

---

**注意** Agile Content Service ノードに保存されたフィルタは、Agile PLM エクスポート ウィザードでも使用することができます。詳細は、『Agile PLM インポートおよびエクスポート・ガイド』を参照してください。

---

フィルタは、基本クラス内のウィンドウに限定されます。特定のクラスのフィルタが、サブクラスでは表示されないタブを表示状態にしている場合、そのタブは抽出データから省略されます。たとえば、ECO の [ユーザー定義 2] タブが非表示の場合でも、設計変更クラスのフィルタによって [ユーザー定義 2] タブの抽出が許可されます。このフィルタを使用して ECO が抽出される時、[ユーザー定義 2] タブのデータはサブクラスでは表示されないため、スキップされます。

同じ基本クラスに対して複数のフィルタを持つことができますが、フィルタ名は変える必要があります。Agile Content Service には、次のクラスに対するデフォルトのフィルタが用意されています。(このリストに含まれていないオブジェクト クラスは、Agile Content Service でサポートされていません。)



- 変更
  - 設計変更
  - 設計変更依頼
  - 期限付き設計変更
  - 製造元変更
  - 価格変更
  - 拠点毎変更
  - 出荷停止
- デクラレーション
  - 均質材のデクラレーション
  - IPC 1752-1 デクラレーション
  - IPC 1752-2 デクラレーション
  - JGP のデクラレーション
  - 部品のデクラレーション
  - 適合のサプライヤ デクラレーション
  - サブスタンスのデクラレーション
- アイテム
  - 部品
  - ドキュメント
- 製造元
- 製造元部品
- パッケージ
- 部品グループ

- 価格
  - 公表価格
  - 見積履歴
- プログラム
  - アクティビティ
  - ゲート
- 含有基準
- サブスタンス
  - サブスタンス
  - サブスタンス グループ
  - サブパート
  - マテリアル
- サプライヤ
- 転送依頼
  - コンテンツ転送
- ユーザー
- ユーザー グループ

プロパティが社内の要件に適合する場合は、確認通知受信者やコンテンツ転送を作成する際にデフォルトのフィルタを使用できます。また、新規フィルタを作成する際にテンプレートとして使用できます。

**注意** 自動転送オブジェクトに対するフィルタは必要ありません。自動転送オブジェクトに関するデータを aXML ファイルに抽出するには、自動転送オブジェクトの表示をユーザーに許可する権限マスクを含む役割を指定します。選択した役割で自動転送オブジェクトへのアクセスが許可されている場合には、自動転送オブジェクト自体に関するデータが抽出され、aXML ファイルに含められます。この情報は、送信に関する問題を解決する際に使用されます。


### フィルタを作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[フィルタ] をダブルクリックします。[フィルタ] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[フィルタの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. 指定されたフィールドに、フィルタ名と説明を入力します。
4. [オブジェクト タイプのフィルタ] リストからオブジェクト クラスまたは基本クラスを選択します。
5. [表示可能なタブ] フィールドの隣にある  ボタンをクリックして、選択したクラスに基づいた使用可能なタブのリストを表示します。

**注意** 最初のタブ ([タイトル ブロック]、[一般情報]、または [カバー ページ]) はすべてのフィルタで必要になるため、各オブジェクト タイプですでに選択されています。

6. フィルタに必要なその他のタブを選択します。
  7. [OK] をクリックします。
- 選択したクラスやそのクラスで表示可能なタブに応じて、タブ オプションが有効になり、[フィルタの作成] ダイアログ ボックスの下部に表示されます。



8.  ボタンをクリックして、使用可能なタブ フィルタ オプションのドロップダウン リストを表示します。

- a. [BOM オプション] リストから次のオプションの 1 つを選択します。

**注意** このフィールドは、アイテムまたはアイテム関連のクラスの [表示可能なタブ] フィールドで [BOM] タブが選択されているクラスに対してのみ表示されます。

- タブのみ: 表示されたテーブルの値のみを抽出します。
- タブとアイテム: BOM から抽出するレベル数を示す数値を指定するか、すべてのレベルを示すボックスを選択できます。

- b. [添付ファイル オプション] リストから次のオプションの 1 つを選択します。

**注意** このフィールドは、[表示可能なタブ] フィールドで [添付ファイル] タブが選択されているクラスに対してのみ表示されます。

- タブのみ: 添付ファイル情報のみが抽出データとともにパッケージ化されます。
- タブとファイル: すべての添付ファイルが抽出データとともにパッケージ化されます。

- c. [対象アイテム オプション] リストから次のオプションの 1 つを選択します。

**注意** このフィールドは、変更または変更関連のクラスの [表示可能なタブ] フィールドで [対象アイテム] タブが選択されているクラスに対してのみ表示されます。

- タブのみ: 対象アイテム情報のみが抽出データとともにパッケージ化されます (レッドライン BOM および AML レッドライン データを含む)。
- タブとアイテム: すべてのアイテムが抽出データとともにパッケージ化されます。

- d. [AML オプション] リストから次のオプションの 1 つを選択します。

**注意** このフィールドは、アイテムまたはアイテム関連のクラスの [表示可能なタブ] フィールドで [製造元] タブが選択されているクラスに対してのみ表示されます。

- タブのみ: 製造元情報のみが抽出データとともにパッケージ化されます。
- タブと製造元部品: すべての AML タブと製造元部品情報が抽出データとともにパッケージ化されます。

- e. [一般情報オプション] リストから次のオプションの 1 つを選択します。

**注意** このフィールドは、製造元部品クラスに対してのみ表示されます。

- タブのみ: 製造元情報のみが抽出データとともにパッケージ化されます。
- タブと製造元: すべての製造元が抽出データとともにパッケージ化されます。

- f. [関連価格オプション] リストから次のオプションの 1 つを選択します。

**注意** このフィールドは、価格クラスまたは価格関連のクラスに対してのみ表示されます。

- タブのみ: 価格情報のみが抽出データとともにパッケージ化されます。
- タブと価格: すべての価格が抽出データとともにパッケージ化されます。

9. [OK] をクリックします。

## フィルタを編集する

フィルタが転送に割り当てられていない場合、または有効な確認通知受信者によって参照されていない場合には、フィルタの内容を変更することができます。

フィルタが転送に割り当てられている場合は、その転送が完了すると編集が可能になります。フィルタが有効な確認通知受信者によって参照されている場合、フィルタを編集するには確認通知受信者を無効にする必要があります。詳細は、386 ページの「[確認通知受信者を有効または無効にする](#)」を参照してください。

## フィルタを編集するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[フィルタ] をダブルクリックします。[フィルタ] ウィンドウが表示されます。
2. 編集するフィルタの名前をダブルクリックします。
3. [一般情報] タブで [名前] と [説明] フィールドを編集します。
4. [フィルタ] タブでその他のフィルタに詳細変更を加えます。

**注意** フィルタ作成時に [対象アイテム] タブを選択した場合、[フィルタ] タブの [レッドライン変更のみ] というドロップダウン リストから BOM と AML レッドラインの変更のみを送信するよう選択することができます。

**注意** フィルタの作成時に、[タブとファイル] 添付ファイル オプションとともに [添付ファイル] タブを選択した場合、エクスポート時には、特定タイプのファイルのみを対象として選択できます。選択するには、[ファイル拡張子を含める] フィールドに、ファイル拡張子のカンマ区切りリストを入力します。

5. [保存] をクリックします。


フィルタを編集するときに、添付ファイル オプションが [タブとファイル] の場合は、[ファイル拡張子を含める] フィールドを設定して、抽出に含めるファイル拡張子を示すことができます。拡張子が指定されていない場合は、すべての拡張子が含まれます。拡張子が指定されている場合は、示された拡張子のファイルのみが含まれます。

たとえば、拡張子として .doc (ピリオドは必須ではありません) を指定し、抽出する部分に .doc と .gif ファイルが添付されている場合は、.doc ファイルのみが抽出に含まれます。このオプションは、フィルタの編集時にのみ使用でき、作成時には使用できません。

## フィルタを削除する

フィルタは、既存の転送や確認通知受信者に現在割り当てられていない場合にのみ削除することができます。

### フィルタを削除するには


1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[フィルタ] をダブルクリックします。[フィルタ] ウィンドウが表示されます。
2. 削除するフィルタを選択します。
3.  をクリックします。

## 確認通知受信者を設定および編集する



イベント、フィルタ、送信先、役割、条件を設定した後で、確認通知受信者の必要条件がすべて満たされている場合は、データを公表する確認通知受信者を自動的に作成できます。1 人の確認通知受信者は 1 つのイベントおよび条件のみに関連付けられますが、複数の送信先、フィルタ、役割を含めることができます。これらは、[確認通知受信者] ノードから管理されます。

Agile PLM には、スケジュール済み確認通知受信者の例とワークフロー確認通知受信者の例が用意されています。確認通知受信者の例には、別の Agile Content Service 設定例が組み込まれており、会社の必要条件に合わせて確認通知受信者を作成する際にテンプレートとして使用できます。

### 確認通知受信者を作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[確認通知受信者] をダブルクリックします。[確認通知受信者] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[確認通知受信者の作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] および [説明] フィールドに確認通知受信者の名前と説明を入力します。
4. [サブクラス] リストからサブクラスを選択します。  
これは、その確認通知受信者のすべてのプロパティに適合するイベントが発生した場合に Agile Content Service によって作成される自動転送のサブクラスです。
5. [ワークフロー] リストからデフォルトの [自動転送] ワークフローを選択します。  
ワークフローの詳細は、『Agile PLM ユーザー・ガイドおよびスタート・ガイド』を参照してください。
6. [自動採番] リストから [自動転送番号] を選択し、選択したサブクラスの自動採番ソースを選択します。  
デフォルトの自動採番ソースは自動転送番号です。自動採番の詳細は、第 5 章「自動採番」を参照してください。自動転送は自動的に処理されるため、自動採番ソースが必要です。
7. [条件] リストから利用可能な条件を選択して、処理するオブジェクトを選択します。条件および新規条件の作成方法の詳細は、第 6 章「条件」を参照してください。

**注意** スケジュールされたイベント確認通知受信者を作成する場合は、条件をできるだけ具体的に定義し、転送において不要なデータが受信されないようにしてください。たとえば、「2003 年 8 月 18 日以降にリリースされたすべての変更」という条件によって返されるのは、特定のグループの変更です。システム内のすべての変更が返される「すべての変更」とは異なります。

8. [イベント] リストから、その確認通知受信者に固有のイベントを選択します。
9. [OK] をクリックします。新しい確認通知受信者のウィンドウが表示されます。
10. [変更オブジェクトを含む] のドロップダウン リストから [はい] または [いいえ] を選択します。(スケジュールされた確認通知受信者のみ)  
[はい] の場合、確認通知者の最後処理以降に新規または変更されたオブジェクトが公表されます。[いいえ] の場合、確認通知受信者の初期処理後に作成され、確認通知受信者により指定された [条件] に合うオブジェクトのみが公表されます。
11. [確認通知受信者の詳細] タブをクリックして送信先、フィルタ、役割を追加し、転送ファイルの形式を選択します。
12.  をクリックして [確認通知受信者の詳細] ダイアログ ボックスを表示します。
13.  をクリックして、この確認通知受信者に利用可能なオプションのリストから [送信先]、[フィルタ]、[役割] フィールドの値を選択します。データ抽出をさらに詳細に設定または定義するために役割が適用されます。役割の詳細は、第 9 章「役割」を参照してください。
14. [データ形式] ドロップダウン リストから、転送ファイルのファイル タイプ [PDX] または [aXML] を選択します。

PDX (Product Definition Exchange) パッケージには、アイテムまたは変更の詳細、BOM データ、製造元情報、図面、および他の添付ファイルといった、製品内容が含まれています。PDX パッケージは、XML フォーマットの構造化データをエンコードするための業界標準フォーマットに基づいています。この標準では、アプリケーションに依存せずに製品内容を説明することができます。PDX は Agile Content Service によりサポートされているすべてのオブジェクト タイプには対応していません。

Agile Extensible Markup Language (aXML) 形式は、Agile PLM ビジネス スキーマの XML 表現です。aXML には、Agile PLM で管理するすべての製品コンテンツが含まれています。この製品コンテンツには、アイテム、変更詳細、製造元情報、問題レポート、コスト、描写、その他のファイルが含まれます。aXML は、Agile Content Service がサポートするすべてのオブジェクト タイプをサポートしています。aXML ファイルは ZIP ファイルです。これには、Agile PLM コンテンツと関連添付ファイルを表す XML が含まれています。

15. [言語] ドロップダウン リストから、使用する言語を選択します。


言語の設定によって転送ファイル内のデータが影響されたり変換されたりすることはありません。この設定は、オブジェクトの属性 (フィールド名やカラム名など) のラベルに使用する言語を決定するためのものです。

16. [拠点] ドロップダウン リストから、使用する拠点を選択します。

拠点の設定によって、データ抽出がさらに詳細に定義されます。たとえば、香港の拠点を選択した場合には、香港の拠点に対して表示可能な BOM 情報のみが抽出されます。

17. [保存] をクリックします。

[確認通知受信者の詳細] タブの 1 行に、送信先の詳細が表示されます。

18. 追加する詳細の行ごとに  をクリックして、[確認通知受信者の詳細] ダイアログを表示します。前述の手順 13 から 17 の説明に従ってください。

## 確認通知受信者を検証する

確認通知受信者を作成した後は、転送を成功させるために設定を確認する必要があります。少なくとも次の設定を確認してください。

- 送信先 - この設定が正しい場所を示していること、および接続が検証済みであることを確認します。通知に関しては適切な担当者を送信先に指定してください。
- イベント - スケジュールされたイベントの場合は、適切なスケジュールが設定されていることを確認します。ワークフロー イベントの場合は、適切なワークフローおよびステータスに設定されていることを確認します。
- フィルタ - 転送するオブジェクトごとに 1 つのフィルタがあることを確認します。
- 役割 - 正しいフィールドが抽出されることを確認します。

確認通知受信者に対して条件、イベント、フィルタが適切に定義されていない場合、Agile Content Service によって自動転送が開始されなかったり、自動転送の結果が予期していたものとは異なったりすることがあります。



## 確認通知受信者を有効または無効にする

確認通知受信者を作成した時点では、デフォルトで無効になります。これにより、確認通知受信者のすべてのフィールドを使用前に変更することができます。Agile Content Service によって認識されるようにするには、確認通知受信者を有効にする必要があります。

確認通知受信者が有効になると、その確認通知受信者の詳細を編集することはできず、参照されている送信先、イベント、またはフィルタの編集もできません。これらの設定のいずれかを変更する場合には、確認通知受信者を無効にする必要があります。

### 確認通知受信者を有効または無効にするには


1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[確認通知受信者] をダブルクリックします。[確認通知受信者] ウィンドウが表示されます。

2. 有効または無効にする確認通知受信者を選択します。
3. [有効化]  または [無効化]  をクリックします。

## 確認通知受信者を削除する

確認通知受信者は、無効化されており、かつ転送オブジェクトに現在割り当てられていない場合にのみ削除することができます。

### 確認通知受信者を削除するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[確認通知受信者] をダブルクリックします。[確認通知受信者] ウィンドウが表示されます。
2. 削除する確認通知受信者を選択します。
3.  をクリックします。

## パッケージ サービスを設定および編集する

**注意** Agile 対 Agile の公表については、ターゲット Agile PLM システムにパッケージ サービスを作成する必要があります。パッケージ サービスは、ソース Agile PLM システムには必要ありません。ソース Agile PLM システムとターゲット Agile PLM システムの両方に必要な Agile 対 Agile の通信設定に関する概要は、391 ページの「[Agile 対 Agile の公表に必要な設定](#)」を参照してください。

パッケージ サービスを使用すると、Agile の送信先を経由してリモート システムからコンテンツを受信する際に使用されるパッケージ サブクラス、自動採番ソース、ワークフローを定義することができます。Agile 対 Agile の通信を有効にする場合は、適切な自動採番ソースを使用してパッケージ オブジェクトを正しく作成し、それを適切なプログラム マネージャに送信するように、ターゲット Agile PLM システムを設定する必要があります。ソースごとに固有の方法で複数のソースからのデータを処理する場合は、1 つのターゲット Agile PLM システムに複数のパッケージ サービスを設定することができます。ただし、ソースごとにパッケージ サービスを作成する必要がない場合は、複数のソースで同じパッケージ サービスを使用できます。

パッケージ サービスを正常に定義および使用するためには、次のような修正または設定も必要です。


- パッケージ オブジェクト クラスの [カバー ページ] タブで、次のパッケージ オブジェクト フィールドが表示状態になっている必要があります。
  - 予期される回答
  - ソース GUID
  - XFER 命令ロケータ
- パッケージ オブジェクトを作成、変更、削除する権限と、パッケージ オブジェクトのステータスを必須のワークフロー ステータスに変更する権限を与える役割を持つユーザーを、作成または識別します。このユーザーのユーザー名とパスワードを、ソース Agile システムの管理者に提示する必要があります。ソース Agile PLM システムで送信先を定義する際に必要です (369 ページの「[送信先を設定および編集する](#)」を参照)。パッケージ サービスによってパッケージ オブジェクトが [提出] ステータスに移行する際に、[適用先] プロパティの [選択済み] リストに次のフィールドを追加して、[保留中のパッケージの変更] 権限マスクを変更する場合は、デフォルトのパートナーの役割内の権限マスクで十分です。
  - パッケージ.カバー ページ.プログラム マネージャ
  - パッケージ.カバー ページ.予期される回答

- パッケージ.カバー ページ.ソース GUID
- パッケージ.カバー ページ.XFER 命令ロケータ

この権限マスクを変更したくない場合は、パートナーの役割と権限マスクをガイドとして、必要な役割を作成してください。

**注意** パッケージ オブジェクトの設定、パッケージ ワークフローの設定、およびログイン ユーザーの役割によってパッケージ サービスが正常に機能するかどうかを確認してください。詳細は、394 ページの「[Agile 対 Agile の公表を確認する](#)」を参照してください。

## パッケージ サービスを作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[パッケージ サービス] をダブルクリックします。[パッケージ サービス] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[パッケージ サービスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] および [説明] フィールドに確認通知受信者の名前と説明を入力します。
4. [サブクラス] リストから [パッケージ] を選択します。

**注意** パッケージ サービスで使用するための特定のパッケージ サブクラスを定義済みの場合は、そのサブクラスをリストから選択します。

5. [番号ソース] リストから、自動採番として [パッケージ番号] を選択します。
6. [ワークフロー] リストから [デフォルトのパッケージ] を選択します。

**注意** パッケージ サービスで使用するための特定のパッケージ ワークフローを定義済みの場合は、そのワークフローをリストから選択します。

7. [ワークフロー ステータス] ドロップダウン リストからワークフロー ステータスを選択します。

[提出済み] ワークフロー ステータスを使用して、受信側のプログラム管理者にパッケージについて通知してください。

Agile 対 Agile の転送が発生すると、ターゲットの Agile PLM システム上でパッケージ オブジェクトが作成され、パッケージのワークフロー ステータスは、パッケージ サービスの [ワークフロー ステータス] フィールドに指定されたステータスに設定されます。

**注意** [保留中] 以外のターゲット パッケージ ワークフロー ステータスでパッケージ サービスを作成する場合は、ターゲット ワークフローが直接 [保留中] ステータスから使用されるステータスへ変更可能であることを確認してください (使用されるステータスがワークフローの [保留中] の次のステータスでない場合、[保留中] ステータスの [手動による次の有効なステータス] プロパティにより決定されます)。また、ターゲット Agile PLM システムの送信先で指定されたログイン ユーザーが、ターゲット Agile PLM システムにおいて変更の権限 (パッケージに対するステータス変更 (CS) 権限) を持っているかどうか確認してください。

8. [OK] をクリックします。

## パッケージ サービスを編集する

パッケージ サービスのパラメータは、[サブクラス] フィールドを除いてすべて編集することができます。



### パッケージ サービスを編集するには


1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[パッケージ サービス] をダブルクリックします。[パッケージ サービス] ウィンドウが表示されます。
2. 編集するパッケージ サービスをダブルクリックします。
3. サービスの [一般情報] タブを編集して、必要な変更を加えます。
4. [保存] および [閉じる] をクリックします。

### パッケージ サービスを削除する

パッケージ サービスはいつでも削除できます。パッケージ サービスは、ACS の他の設定を制限したり定義したりすることではなく、データベース オブジェクトとの関係もないため、サービスを削除する権限に制限はありません。

**注意** ソース Agile PLM システムが削除済みパッケージ サービスに対しコンテンツを送信しようとした場合、コンテンツの送信はエラーとなります。

### パッケージ サービスを削除するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[パッケージ サービス] をダブルクリックします。[パッケージ サービス] ウィンドウが表示されます。
2. 削除するパッケージ サービスを選択します。
3.  をクリックします。

## 回答サービスを設定および編集する

リモートのターゲット Agile PLM システム、HTTP/S 送信先または JMS 送信先は、予期したデータを受信した後に、承認または却下のメッセージをソース Agile PLM システムに伝達できます。これらのメッセージを回答といいます。回答は、回答する送信先に対応した転送（ソース Agile PLM システムの転送）の [送信先] タブにある [回答] 欄に記録されます。ターゲット Agile PLM システムでは、回答サービスおよび事前に構築されたプロセスの拡張機能を使用して、ソース Agile PLM システムに回答します。プロセスの拡張機能は、回答を開始する際のパッケージのワークフロー ステータスを決定するために使用します。回答サービスは、回答方法と回答先を定義するために使用します。


回答サービスを定義するためには、プロセスの拡張を有効にし、[プロセス拡張] ノードで [起動先] プロパティを定義する必要があります。また、[ワークフロー] ノードで、回答を開始する際のパッケージのワークフロー ステータスを定義する必要があります。86 ページの「[プロセスの拡張](#)」を参照してください。回答の送信先は [回答サービス] ノードから管理されます。

**注意** パッケージ サービスと回答サービスは、Agile 対 Agile のデータを受信する Agile PLM システムで定義します。（詳細は、391 ページの「[Agile 対 Agile の公表に必要な設定](#)」を参照してください。）

回答サービス ノードの GUID (Global Unique ID) 属性は、ソース Agile PLM サーバを一意に定義します。このテキスト フィールドは編集できません。この属性を使用することで、パッケージの送信側への回答方法が決定されます。ターゲットシステムは GUID を検索し、該当する回答サービスを検出します。この回答サービスは、パッケージ送信者と通信するために必要な情報（ユーザー名、パスワード、プロトコル、ホストなど）を持ちます。

新しい回答サービスを作成する際、ソース Agile PLM システムからの GUID が自動的に読み取られます。サーバ、ポート、プロトコル、コンテキストの値を設定した後、ソース Agile PLM システムへの連絡が行われます。連絡に成功すると、GUID が取り出され、回答サービスの GUID プロパティが自動的に設定されます。

### 回答サービスを作成するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[回答サービス] をダブルクリックします。[回答サービス] ウィンドウが表示されます。
2.  をクリックします。[回答サービスの作成] ダイアログ ボックスが表示されます。
3. [名前] および [説明] フィールドに送信先の名前と説明を入力します。
4. [サーバ URL] のドロップダウン リストから HTTP または HTTPS のいずれかを選択します。
5. ホスト フィールドとポート フィールドにそれぞれ、ターゲットの Agile PLM アプリケーション サーバの URL とポートを入力します。仮想パス フィールドに仮想パス名を入力します。これが最後のフィールドです。

**注意** 仮想パスは、Agile PLM システムのインストール時に決まります。たとえば、ターゲットの Agile PLM アプリケーション サーバ上の Web クライアントへのログインに次のような URL が使用される場合を仮定します。

<http://www.clapton.com/Agile/PLMServlet>

6. URL 情報を前述のように入力します。ここで、[www.clapton.com](http://www.clapton.com) はホスト名、Agile は仮想パス名です。コロン (:) の後のフィールドにはポート番号を指定します。HTTP には通常 80、HTTPS には通常 443 が使用されます。80 または 443 以外のポートが使用されている場合、そのポート番号は、Agile Web クライアントへのログインに使用される URL 内に示されます。PLMServlet は省略します。これは、アプリケーション名です。使用する URL については、対象の Agile PLM アプリケーション サーバの Agile 管理者にお問い合わせください。
7. [ユーザー名] および [パスワード] フィールドに、ソース Agile PLM アプリケーション サーバのユーザー名とパスワードを入力します。
8. 送信先を検証するには、[GUID 取得] をクリックします。  
送信先が検証されると、[GUID] フィールドは自動的に入力されます。
9. [OK] をクリックします。

## 回答サービスを編集する

回答サービスのパラメータは、すべて編集することができます。

### 回答サービスを編集するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[回答サービス] をダブルクリックします。[回答サービス] ウィンドウが表示されます。
2. 編集する回答サービスをダブルクリックします。
3. [一般情報] タブを編集し、必要な変更を加えます。

**注意** [サーバ URL]、[ユーザー名]、または [パスワード] フィールドを変更する場合、[回答サービスの検索] をクリックし、[GUID] フィールドを検証ならびに更新してください。

4. [保存] および [閉じる] をクリックします。




## 回答サービスを削除する

回答サービスはいつでも削除できます。回答サービスは有効/無効の設定ができないため、削除する権限に制限はありません。

**注意** 回答サービスを削除すると、ターゲット Agile PLM システムは参照されたソース Agile PLM システムに回答できなくなります。

### 回答を削除するには

1. [システム設定] > [Agile Content Service] で、[回答サービス] をダブルクリックします。[回答サービス] ウィンドウが表示されます。
2. 削除する回答を選択します。
3.  をクリックします。

## 回答とプロセスの拡張

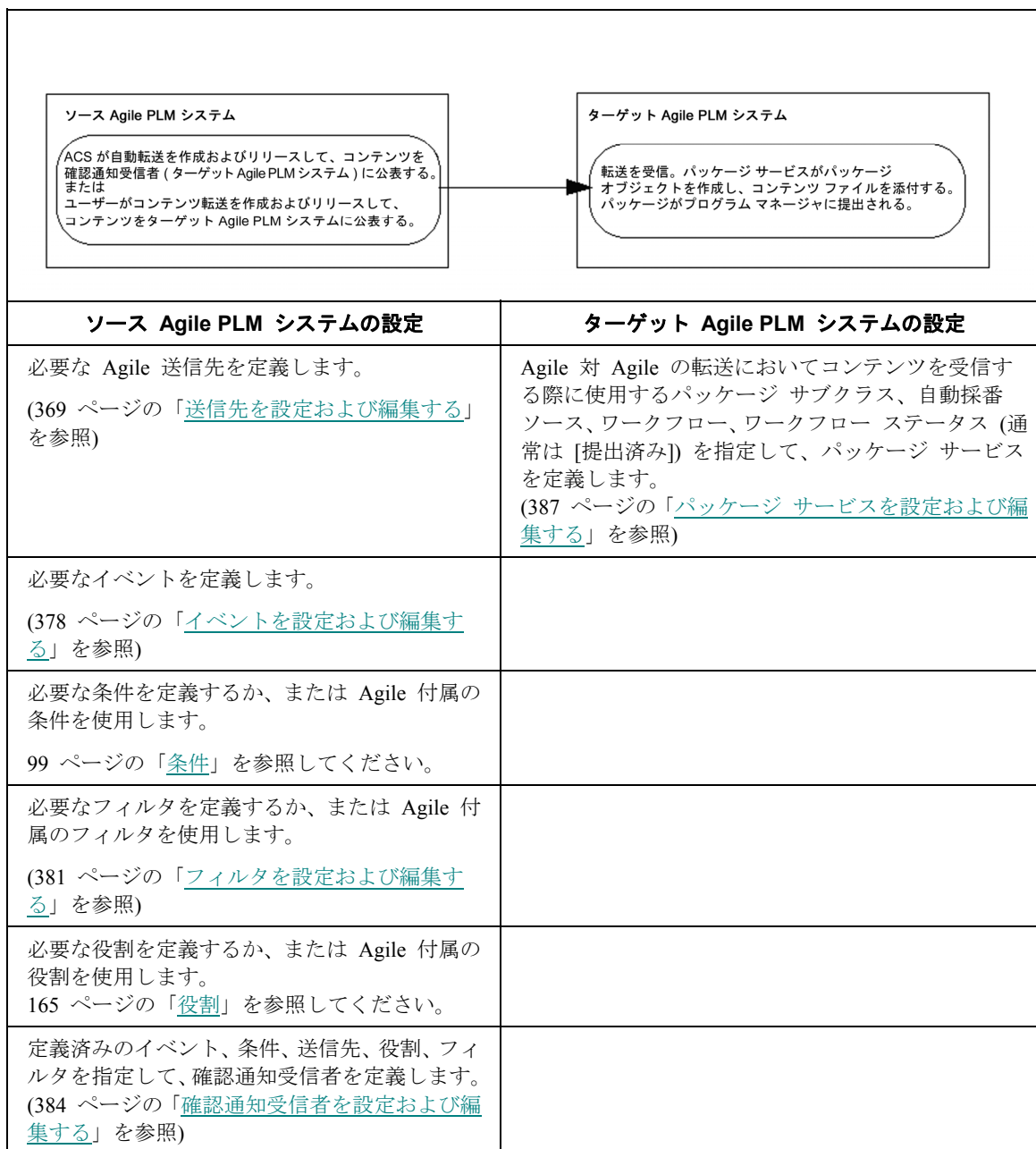
承認および却下の回答は、プロセスの拡張機能によって作成されます。Agile PLM には、ソース Agile PLM システムに承認回答または却下回答を送信するために使用できる 2 種類のプロセスの拡張機能が用意されています。Agile 付属のプロセスの拡張機能を適切に使用するには、次の処理を実行する必要があります。

- [クラス] ノードで、パッケージ基本クラスの [プロセスの拡張] タブを表示し、このタブに一覧表示する承認および却下プロセスの拡張機能を割り当てる必要があります。
- [プロセス拡張] ノードで、承認および却下プロセスの拡張機能を有効にする必要があります。
- [プロセス拡張] ノードで、2 種類のプロセスの拡張を開き、プロセスの拡張の [一般情報] タブにある [起動先] フィールドを変更する必要があります。[ワークフロー状態] (特定のワークフロー ステータスに移行した時点でプロセスの拡張を開始する場合) または [アクション] メニュー ([アクション] メニューから手動でプロセスの拡張を開始する場合) を選択します。必要に応じて、両方を選択することもできます。([ツール メニュー] の選択は、転送の回答には適していません。)
- [ワークフロー] ノードで、パッケージ サービスに指定されているパッケージ サブクラスのワークフローを変更する必要があります。

プロセスの拡張機能を選択して有効にする方法と、ワークフローを適切に変更する方法の詳細は、86 ページの「[プロセスの拡張](#)」を参照してください。

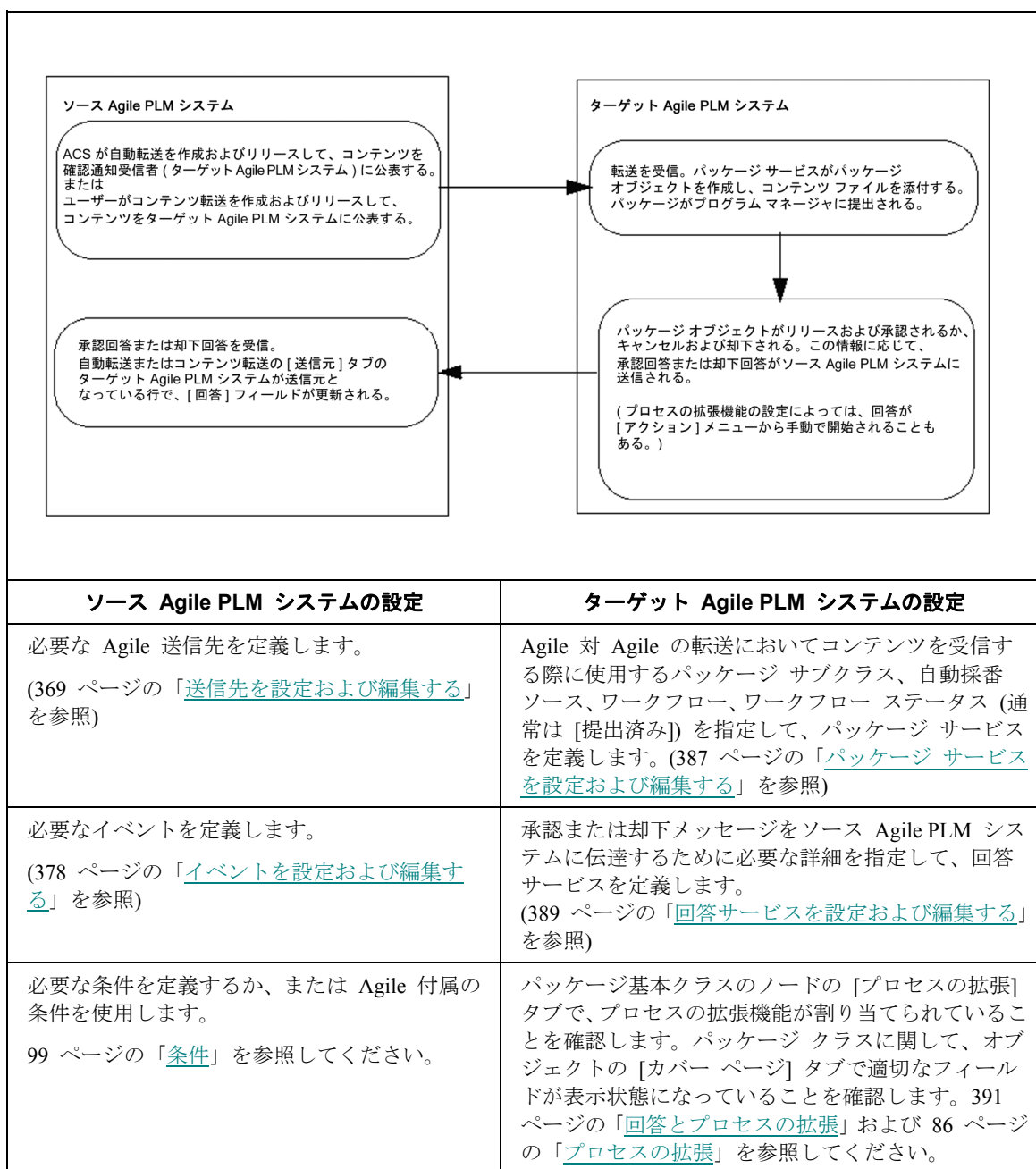
## Agile 対 Agile の公表に必要な設定

あるソース Agile PLM システムから別のターゲット Agile PLM システムにコンテンツ データを正常に公表するには、適切な Agile Content Service の設定とプロセスの拡張機能の設定が定義されていなければなりません。ソースとターゲットの両方のシステムで同じ設定は必要ありません。次の 2 つの図と表では、ソース Agile PLM システムが回答を要求しないときに必要な設定と、ソース Agile PLM システムが回答を要求するときに必要な設定の要約を示しています。



ソース Agile PLM システムが回答を要求する場合、ターゲット Agile PLM システムでは回答サービスも定義する必要があり、プロセスの拡張機能とパッケージ オブジェクトのワークフローに対する設定も必要になります。次の図と表をご覧ください。

必要な設定の詳細は、次の表および章の各セクションを参照してください。



<p>必要なフィルタを定義するか、または Agile 付属のフィルタを使用します。</p> <p>(381 ページの「<a href="#">フィルタを設定および編集する</a>」を参照)</p>	<p>承認および却下のパッケージ回答プロセスの拡張機能が適切に設定されていることを確認します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□ プロセスの拡張機能が有効になっていなければなりません。</li> <li>□ プロセスの拡張を自動的に開始するためには、プロセスの拡張の [起動先] フィールドに [ワークフロー状態] が含まれていなければなりません。</li> <li>□ プロセスの拡張を手動で開始するためには、プロセスの拡張の [起動先] フィールドに [アクション] メニュー が含まれていなければなりません。</li> </ul> <p>(86 ページの「<a href="#">プロセスの拡張</a>」を参照)</p>
<p>必要な役割を定義するか、または Agile 付属の役割を使用します。</p> <p>165 ページの「<a href="#">役割</a>」を参照してください。</p>	
<p>定義済みのイベント、条件、送信先、役割、フィルタを指定して、確認通知受信者を定義します。</p> <p>(384 ページの「<a href="#">確認通知受信者を設定および編集する</a>」を参照)</p>	<p>パッケージのワークフロー ステータス条件を変更して、承認回答と却下回答が開始されるステータス (通常は [リリース済み] および [キャンセル] ステータス) を指定します。</p> <p>(86 ページの「<a href="#">プロセスの拡張</a>」を参照)</p>

## Agile 対 Agile の公表を確認する

Agile 対 Agile の転送を試行する前に、次の簡単なテストを実施して、パッケージ サービスで指定されたアクションをターゲット Agile PLM システムのログイン ユーザーが実行可能かどうかを確認することができます。このテストによって、パッケージ オブジェクトおよびワークフローが正しく設定されているかどうか、およびログイン ユーザーに必要な権限があるかどうかを確認できます。次の手順に従って実行してください。

### パッケージ サービス、パッケージ オブジェクト、パッケージ ワークフロー、ログイン ユーザーの設定を確認するには

1. ターゲット Agile PLM システムに対する送信先 (ソース Agile PLM システム上に定義されている) に指定されたユーザー名とパスワードを使用して、ターゲット Agile PLM システムにログインします。(369 ページの「[送信先を設定および編集する](#)」を参照してください。)

**注意** ソース Agile PLM システムのユーザー (ソース Agile PLM システムの管理者など) がターゲット Agile PLM システムにログインしてこのテストを実施する場合は、ソース Agile PLM システムがターゲット Agile PLM システムのファイヤウォールの外側から自動的にログインできるかどうかを確認することになります。ただし、ターゲット Agile PLM システムのユーザーも、このテストを実施して、パッケージ オブジェクトおよびワークフローの設定とログイン ユーザーの権限が正しいことを確認できます。

2. パッケージ オブジェクトを作成します。ターゲット Agile PLM システムのパッケージ サービスで指定されたパッケージ サブクラスを使用してください。
3. パッケージ オブジェクトを削除します。この操作によって、パッケージ オブジェクトを削除する権限がユーザーにあるかどうかを確認できます。

4. 別のパッケージ オブジェクトを作成します。ターゲット Agile PLM システムのパッケージ サービスで指定されたパッケージ サブクラスを使用してください。
5. パッケージ オブジェクトの [カバー ページ] タブで、次のフィールドが変更可能であることを確認します。テキストの入力やドロップダウン リストまたはダイアログ ボックスからの選択ができなければなりません。
  - [作成者] (別のユーザーを選択します。)
  - [作成日] (別の日付を選択します。)
  - [説明] (テキストを入力します。)
  - [ワークフロー] (ターゲット Agile PLM システムのパッケージ サービスで指定されたワークフローを選択します。)
  - 次の 3 つのフィールドを変更します。Agile 対 Agile のコンテンツ転送では、これらのフィールドは自動的に入力されますが、コンテンツ転送が正常に実行されるには、[カバー ページ] タブで表示状態かつ変更可能でなければなりません。これらのフィールドを手動で変更できる場合、ログイン ユーザーがこれらのフィールドに対して必要な権限マスクを持つことを確認しており、このため、Agile 対 Agile 転送時に自動的にフィールド入力することができます。
  - [予期される回答] (ドロップダウン リストから設定を選択します。)
  - [ソース GUID] (テキストを入力します。)
  - [XFER 命令ロケータ] (テキストを入力します。)
6. [保存] をクリックします。
7. [添付ファイル] タブをクリックして表示します。
8. ログイン ユーザーがパッケージ オブジェクトにファイルを添付できることを確認します。

[追加 | ファイル] を選択して、[添付ファイル] タブにファイルを追加します。任意のファイル タイプを使用します。単純なテキスト ファイルで十分です。

9. [ワークフロー] タブをクリックして表示します。
10. ログイン ユーザーがパッケージ オブジェクトのワークフロー ステータスを、パッケージ サービスで指定されたワークフロー ステータスに変更できることを確認します。

ワークフロー フローチャートで、パッケージ サービスで指定されたワークフロー ステータスをクリックします。(387 ページの「[パッケージ サービスを設定および編集する](#)」を参照してください。)

たとえば、パッケージ サービスで [レビュー] ステータスが指定されている場合は、フローチャートのこのステータスのボックスをクリックしてパッケージ オブジェクトのワークフロー ステータスを変更できなければなりません。[レビュー] ステータスが有効でなく、クリックできない場合は、使用するワークフローで [保留中] ステータスから [レビュー] ステータスへ直接変更が可能かどうかを確認します。これは、[保留中] ステータスの [手動による次の有効なステータス] プロパティによって決定されます。さらに、[保留中] から [レビュー] にステータスを変更するために適切な権限がログイン ユーザーの役割に含まれていることを確認します。詳細は、次の表を参照してください。

<b>注意</b>	デフォルトのパッケージ ワークフローおよび Agile 付属のパートナーの役割 (387 ページの「 <a href="#">パッケージ サービスを設定および編集する</a> 」の説明のように変更されています) を使用すると、ログイン ユーザーは、パッケージを [保留中] ステータスから [提出] ステータスに直接移動できます。デフォルトのパッケージ ワークフローおよびパートナーの役割を使用しており、さらにパッケージ サービスで [提出] 以外のワークフロー ステータスを選択した場合には、パッケージ ワークフローとログイン ユーザーの役割に適切な変更を加える必要があります。
-----------	--

前述の手順を正常に実行できた場合、ログイン ユーザーはパッケージ オブジェクトを作成し、特定フィールド

ドを変更し、ファイルを添付し、指定されたワークフロー ステータスにパッケージ オブジェクトを移行させることができます。これらは、パッケージ サービスで指定されたとおりのアクションです。

問題	考えられる原因	解決策
ソース Agile PLM システムで、自動転送の [送信先] タブに「権限不足」というエラーが表示される。	ソース Agile PLM システムの送信先にログイン ユーザーとして指定されたターゲット Agile PLM システムのユーザーが、ターゲット システムでパッケージ オブジェクトを作成する権限を持っていないか、または指定されたワークフロー ステータスにパッケージ オブジェクトを移行させる権限を持っていません。	ターゲット Agile PLM システムで、ログイン ユーザーの役割を変更して、必要な権限を割り当てます。(389 ページの「 <a href="#">回答サービスを設定および編集する</a> 」を参照)
ターゲット Agile PLM システムで、パッケージ オブジェクトが作成されたが、正しいワークフロー ステータスに移行しない。「権限不足」というエラーが表示される。	ターゲット Agile PLM システムのログイン ユーザーが必要な権限 (前項参照) を持っている場合には、ターゲット システムのパッケージ ワークフローが、パッケージ サービスで指定されたワークフロー ステータスにパッケージ オブジェクトを直接移行させることを許可していないことが考えられます。	ログイン ユーザーが必要なステータスの変更権限 (前項参照) を持っている場合は、使用するパッケージ ワークフロー (ターゲット システム上) で、[保留中] タイプのステータスからパッケージ サービスで指定されたステータスに直接変更できるかどうかを確認します。これは、ワークフローの [保留中] ステータスの [手動による次の有効なステータス] プロパティによって決定されます。詳細は、「 <a href="#">回答サービスを設定および編集する</a> 」の手順 7 にある注意を参照してください。
ターゲット Agile PLM システムで、パッケージ オブジェクトが重複している。	ターゲット システム上のパッケージ オブジェクトをパッケージ サービスで指定されたワークフロー ステータスに移行できない場合 (ログイン ユーザーの権限不足などの理由から)、ターゲット Agile PLM システムでは、そのパッケージ オブジェクトの削除が試行されます。ログイン ユーザーが適切な削除権限マスクを持っていないと、削除は失敗し、パッケージ オブジェクトが重複する場合があります。	ターゲット Agile PLM システムで、ログイン ユーザーがパッケージ オブジェクトに対する削除権限マスクを含む役割を持っているかどうかを確認します。持っていない場合は、役割を変更するか、適切な役割を割り当てます。さらに、パッケージ サービスで指定されたワークフロー ステータスにパッケージ オブジェクトを移行させるために必要な権限を含む役割をログイン ユーザーが持っているかどうかを確認します。(389 ページの「 <a href="#">回答サービスを設定および編集する</a> 」を参照)

## セキュリティについての考察事項

役割および権限は、転送によって抽出される Agile PLM コンテンツを制限および定義する上で重要な機能を果たします。

## コンテンツ転送の [作成者] フィールド

コンテンツ転送の [カバー ページ] タブにある [作成者] フィールドは、コンテンツ転送のセキュリティを保護する重要な構成要素です。[作成者] フィールドに指定されているユーザーの役割および拠点の割り当ては、抽出されるデータをさらに定義するために使用します。自動転送では、データの抽出に使用する役割は確認通知受信者で定義します。対照的にコンテンツ転送では、データの抽出に使用する役割は [作成者] フィールドに指定されているユーザーの役割によって定義します。

たとえば、作成者であるユーザーに、Libra 製品ラインに割り当てられているアイテムを表示するための権限がない場合、Libra 製品ラインのアイテムは、BOM アイテムの抽出時に抽出されません。

同様に、作成者であるユーザーが香港拠点に割り当てられていない場合、[送信先] タブの [拠点] カラムで香港が選択されていても、香港の BOM データは抽出されません。

デフォルトでは、コンテンツ転送が作成されると、コンテンツ転送の作成者の名前が [作成者] フィールドに入力されます。Agile 付属のコンテンツ マネージャの役割を使用すると、コンテンツ マネージャのユーザーは [作成者] フィールドで別のユーザーを選択することができます。また、コンテンツ転送をリリースして、コンテンツ マネージャがアクセスできない製品内容を公表することができます。コンテンツ マネージャの役割をユーザーに割り当てる前に、その機能が社内の要件に適しているかどうかを確認してください。

コンテンツ転送の作成者に本人がアクセスできないデータを公表させたくない場合、1 つの方法として、既存のコンテンツ マネージャの役割を変更するか、それと同様の役割を作成することができます。その役割には、コンテンツ転送に対するステータスの変更権限マスクが含まれるようにし、コンテンツ転送のステータスを変更するユーザーは強制的にコンテンツ転送の [作成者] フィールドに名前が表示されているユーザーにするという条件（「カバー ページ.作成者、等しい、\$USER」）を指定します。このような制限付き権限マスクを含む役割を作成して割り当てる場合は、コンテンツ転送の [作成者] フィールドに表示されているユーザー（デフォルトではコンテンツ転送の作成者）も、ステータスを変更してコンテンツ転送をリリースするユーザーでなければなりません。

コンテンツ転送オブジェクトに対して追加の役割や権限を作成する場合は、この強力なセキュリティ機能に留意してください。[作成者] フィールドの変更とコンテンツ転送のリリースの両方をユーザーに許可すると、コンテンツ転送の作成者は、作成ユーザーよりも強力な役割のユーザーを指定できるようになり、その結果、社内のセキュリティの方針に違反する可能性があります。

## Agile PLM の役割を使用して、自動転送における送信先固有のコンテンツを定義する

確認通知受信者を定義するときには、[確認通知受信者の詳細] タブで（各送信先に対して指定された [フィルタ] および [確認通知受信者の拠点] 設定と組み合わせて）各送信先に対して指定した役割によって、どの製品内容が抽出されるかが決定されます。Agile PLM の役割、権限マスク、条件には柔軟性があるため、必要に応じて送信先ごとの役割を作成することができます。Agile PLM のディスカバリおよび読み取り権限マスクによって、どのオブジェクトを抽出できるかが決定されます。これら権限マスクの [適用先] のプロパティは、どのオブジェクト タブとフィールドが抽出されるかを決定します。権限マスクの [適用先] プロパティの個々のフィールドを指定することで、抽出可能な特定の製品内容をフィールドごとに定義することができます。

役割、権限マスク、および条件の詳細は、第 9 章「役割」、第 10 章「権限と権限マスク」および第 6 章「条件」をそれぞれ参照してください。





# Product Governance & Compliance の設定

扱うトピックは次のとおりです。

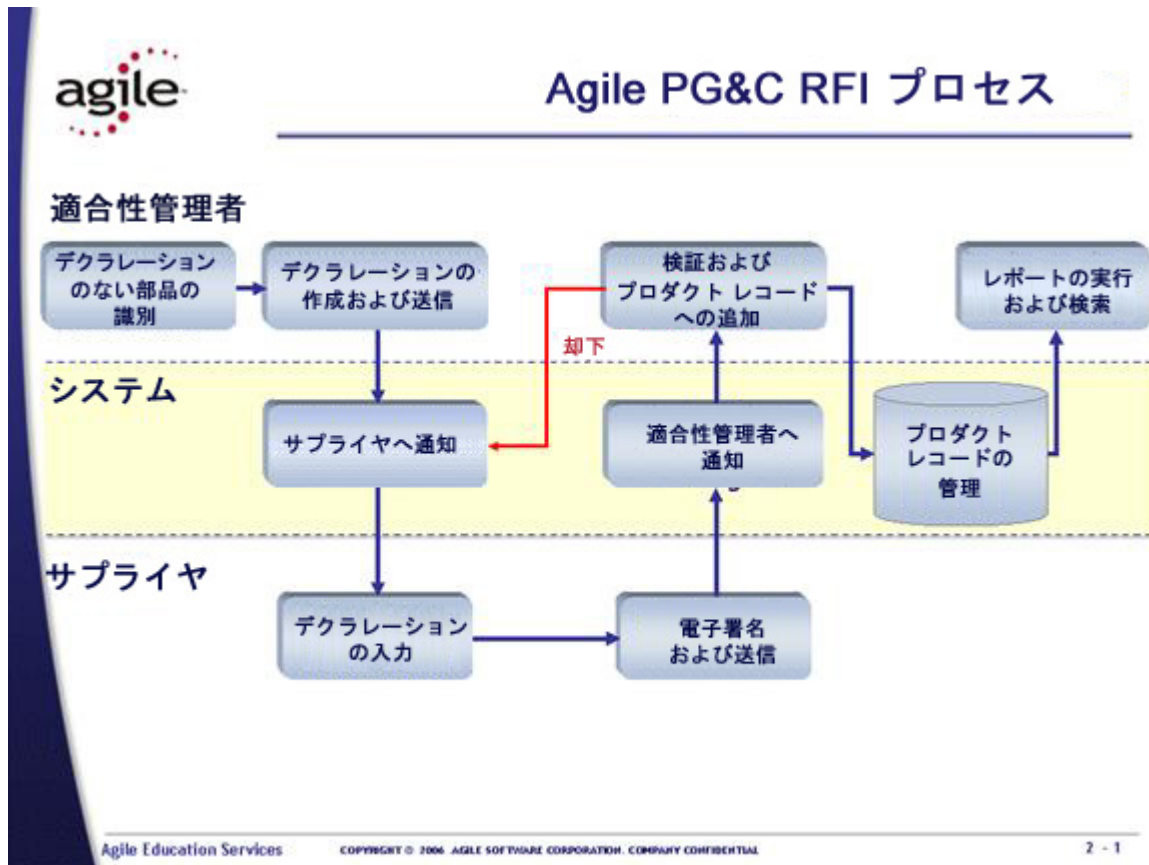
▪ Agile PG&C を設定する.....	399
▪ PG&C 設定チェックリスト.....	401
▪ デklarেশョン クラスの概要.....	403
▪ PG&C の統合コンポーネント.....	404
▪ PG&C 固有の管理者ノードの設定.....	408
▪ PG&C クラスを設定する .....	415
▪ PG&C で PG&C ユーザーの役割と権限を定義する .....	421
▪ デklarেশョン ワークフローを RFI で使用する.....	423

この章では、Product Governance & Compliance の設定に関する情報をご紹介します。

## Agile PG&C を設定する

次の設定チェックリストおよびこの章では、管理者の設定の概要および PG&C ソリューションに関連する概念を説明します。PG&C を設定する際には、『PG&C ユーザー・ガイド』が役立ちます。このマニュアルでは、PG&C ビジネス オブジェクトと組成、設定された PG&C ソリューションの仕組み (自動化された適合性ロールアップなど)、および Agile PG&C 適合性プロセスに関する他の重要なコンポーネントと概念について説明しています。

Agile PLM のアップグレード ユーザーの場合は、付録 A 「アップグレード データベースの PG&C オブジェクト、役割および権限への変更」の内容が非常に重要です。この付録には、PG&C の各リリースの新規属性が記載されています。



## Agile PG&C リリース 9.2.2.2 の新機能

PLM リリース 9.2.2.2 の Agile PG&C に追加された機能は、次のとおりです。

- サブスタンス編集 - (未公表の) デklarレーションにサブスタンスを直接追加、削除および編集できます。「サブスタンス編集」を参照してください。
- 適合性状態 [該当なし] - これは、システムで適合性を評価しないように部品/PG に付けるラベルです。「適合性状態」を参照してください。
- アーカイブ済組成のアクティブ化 - ユーザーは、アーカイブ済の非アクティブな組成をアクティブとして再開することを決定できます。「[組成を非アクティブ化および再アクティブ化する](#)」を参照してください。
- IPC バージョン 1.1 のサポート - 「このリリースでサポートされている IPC フォーマット」を参照してください。

## PLM リリース 9.2.2.1 の PG&C に追加された機能

PLM リリース 9.2.2.1 の Agile PG&C に追加された機能は、次のとおりです。

- 含有基準のマッピング - ユーザーは、部品、ドキュメントおよび製造元部品の [ユーザー定義 1] で含有基準ごとに適合性の結果を参照できます。この章では、管理者のノード ([システム設定] > [Product Governance & Compliance] フォルダ) について説明します。『PG&C ユーザー・ガイド』の「部品と部品グループ」では、エンドユーザーの機能についても説明しています。

- 一括含有基準の削除 - 管理者の設定またはノードで制御されません。詳細は、『PG&C ユーザー・ガイド』の「部品と部品グループ」の章を参照してください。

## PLM リリース 9.2.2 の PG&C に追加された機能

PLM リリース 9.2.2 の Agile PG&C に追加された機能は、次のとおりです。

- サブスタンスおよびサブスタンス グループ クラスに対するサブスタンス エイリアスの割り当て。
- 含有基準、デklarレーション、アイテム、製造元部品および部品グループのサブスタンスのデータでの [意図的な追加] フラグのサポート。
- サブスタンスと均質材組成のマテリアル完全開示は、次によってサポートされています。
  - [完全公表]、[一部公表] および [未公表] の一括開示タイプ
  - 一部公表組成の未報告 (システム) サブスタンス
  - 一括許容度%と呼ばれる管理者の適合性ロールアップ設定
- 変更番号に基づいたアイテムへの組成、BOS (サブスタンス構成表)、含有基準およびサプライヤのインポート
- デklarレーションへのローカル サブスタンスのインポート
- IPC バージョン 1.02 のサポート

リリース 9.2.2 の新規属性の完全なリストは、425 ページの「[アップグレード データベースの PG&C オブジェクト、役割および権限への変更](#)」を参照してください。

## PG&C 設定チェックリスト

次のチェックリストを使用し、PG&C に対して Agile PLM サーバを設定します。

- 管理者権限を設定する - [UOM] ノードと [Product Governance & Compliance] ノード フォルダの両方が [システム設定] の下に表示されていることを確認します。不足している要素がある場合は、[管理者] 権限を設定します。詳細は、193 ページの「[管理者権限と適用先機能](#)」を参照してください。
- log.xml ファイル (インストール時に設定される) とこのファイルに追加される ComplianceRollup.log を確認する - このファイルは、デフォルトで有効になるため、通常は設定する必要はありませんが、PLM 9.2.2 では格納場所が変更されています。404 ページの「[Log.xml ファイルの ComplianceRollup.log](#)」を参照してください。
- Microsoft Excel ベース クライアントが正しくインストールされていることを確認する - 会社では統合された Microsoft Excel ベース クライアントを使用できます。これによって、サプライヤが特定のデklarレーションを完了するプロセスが容易になります。405 ページの「[Microsoft Excel ベース クライアントが正しくインストールされていることを確認する](#)」を参照してください。
- プロセス拡張を設定する - PG&C に適用可能なデフォルトのプロセス拡張は 8 つあります。404 ページの「[PG&C の統合コンポーネント](#)」で説明しているとおり、PG&C 拡張を適切なクラスに割り当てます。86 ページの「[プロセスの拡張](#)」も参照してください。
- 適合性状態の名前を必要に応じて変更する - 適合性状態の 5 つの名前は、会社の要件にあわせて変更できます。「[適合性状態の名前を変更する](#)」を参照してください。

- 管理者の PG&C ノードを設定する - 次の設定があります。
    - [システム設定]>[UOM] ノード - 408 ページの「[単位 \(UOM\) を設定する](#)」を参照してください。
    - システム設定 > Product Governance & Compliance ノード フォルダ。これには次のノードが含まれます。
    - [サインオフ メッセージ] ノード - 408 ページの「[サインオフ メッセージを設定する](#)」を参照してください。
    - [適合性ロールアップのスケジュール] ノード - 408 ページの「[適合性ロールアップのスケジュール](#)」を参照してください。
    - [適合性ロールアップのルールの設定] ノード - 409 ページの「[\[AML ロールアップ\] ルールと \[組成 ロールアップ\] ルール](#)」、409 ページの「[\[BOM ロールアップで適合として免除として免除を処理\] ルール](#)」、および 410 ページの「[\[一括許容度%\] 設定](#)」を参照してください。
    - [サプライヤ デクラレーションのプロセス拡張] ノード フォルダ - 412 ページの「[サプライヤ デクラレーションのプロセス拡張](#)」を参照してください
    - 含有基準のマッピング (リリース 9.2.2.1 で追加) - 「[含有基準のマッピング](#)」を参照してください。
  - PG&C 関連クラスを設定する - サブスタンス、含有基準、部品/ドキュメント、製造元部品、部品グループおよびデクラレーションの各クラス - 403 ページの「[デクラレーション クラスの概要](#)」、および 415 ページの「[PG&C クラスを設定する](#)」を参照してください。次に示すアイテムについては後述します。
    - [子レベル] 属性を設定する - サブスタンスと重量のロールアップを Excel で適切に実行するには、[子レベル] 属性が必須です。アイテムと製造元部品のその他の属性も有効にする必要があります。415 ページの「[アイテムおよび製造元部品: サブスタンスと重量のロールアップと \[子レベル\] 属性](#)」を参照してください。
    - [組成タイプ] 属性を設定する - 部品または部品グループでは、部品にインポートする組成に対する [組成タイプ] 属性が必須です。この属性は、[表示] および [必須] に設定する必要があります。アイテム、製造元部品および部品グループの [組成] テーブルで [サブスタンスの表示] リンクを有効にするには、ユーザーにその属性に対する読み取り権限が必要です。417 ページの「[部品と部品グループ: 組成タイプ](#)」を参照してください。
    - マッピング機能を使用してユーザー設定フィールドを設定する - 部品および部品ファミリの一部の [ユーザー定義 1]/[ユーザー定義 2] 属性では属性のマッピングが必要です。これによって、部品に関連する公表済みデクラレーションの変更された値が配布されます。418 ページの「[部品と部品グループ: マッピング機能](#)」を参照してください。
    - 適用可能な免除サブスタンスを [除外規定] リスト ([リスト] ノード) から含有基準に追加する - 含有基準の [一般情報] の [除外規定] フィールドには [除外規定] リストから選択したサブスタンスを入力できます。
    - [部品グループ] クラスを設定して部品ファミリを作成する - 会社が Product Cost Management (PCM) と PG&C ソリューションの両方を購入している場合は、[部品グループ] クラスの設定方法を決定する必要があります。420 ページの「[部品グループ: 部品ファミリを設定する](#)」を参照してください。
    - スマートルールを設定する - PG&C と PCM ソリューションの両方を使用している場合は、[部品分類と部品ファミリを同一にする] [スマートルール](#) (420 ページ) を適切に設定する必要があります。
- 注意** PG&C では、重複した BOM (サブアセンブリの名前自体がそのサブアセンブリの BOM に含まれている BOM) の適合性ロールアップをサポートしていないことに注意してください。重複した BOM を回避するには、[BOM 多段階重複] スマートルールを [不可] に設定してください。
- PG&C ユーザーを定義して適切な役割を割り当てる - 適合性プロジェクト、RFI および PG&C オブジェクトを作成および管理する社内のユーザーを定義します。ユーザーを [適合性検索] および [レポート] に追加します (詳細は、『PG&Cユーザー・ガイド』を参照)。これらのユーザーに適切な役割を割り当てま

す。421 ページの「[PG&C で PG&C ユーザーの役割と権限を定義する](#)」を参照してください。新規ユーザーの設定の詳細は、141 ページの「[ユーザーとユーザー グループ](#)」を参照してください。

---

**注意** ユーザーによる組成のアーカイブを可能にする方法を理解する必要があります。また、あまりにも多くのユーザーに適切な権限を割り当てることの危険も理解してください。416 ページの「[アイテムおよび製造元部品: 組成を非アクティブ化および再アクティブ化する](#)」を参照してください。

---

- PG&C サプライヤ サブクラスを定義して PG&C サプライヤ企業を作成する - 特定のサプライヤ企業を定義する前に、デフォルトのサプライヤ サブクラスを検証してください。これらのサブクラスは見積依頼およびソーシング プロセス (PCM) 用に調整されています。たとえば、これらのオブジェクトが [部品ファミリ] タブのかわりに、[部品グループ] クラスの PCM 関連サブクラスである、[部品分類] を持っていることにご注意ください。既存のサプライヤ サブクラスの名前を変更して再設定できます。あるいは、自社の具体的な適合性要件を満たすようにサプライヤの適合性指向サブクラスを作成できます。

---

**注意** 管理者がデklarレーションのクラス (またはすべてのデklarレーション) の [サプライヤ] フィールドをオプションのフィールドとして定義しないかぎり、アクティブなサプライヤはデklarレーションを作成するユーザーが指定する必要があります。現在、サプライヤは Web サプライヤ、つまり、サプライヤ オブジェクトで [Web サプライヤ] フィールド = [はい] である必要はありません。[Web サプライヤ] フィールド = [いいえ] の場合、そのサプライヤは非 Web サプライヤと呼ばれます。PLM では、デklarレーションでどちらかのサプライヤを指定できます。ただし、Web サプライヤには、関連するコンタクト ユーザーを少なくとも 1 人指定する必要がありますが、非 Web サプライヤは、関連するコンタクト ユーザーなしでデklarレーションに指定できます。

---

サプライヤの作成および管理の詳細は、『PG&Cユーザー・ガイド』の第 9 章「サプライヤを管理する」を参照してください。162 ページの「[サプライヤ グループ](#)」も参照してください。

- サプライヤ企業にコンタクト ユーザーを入力する - 最も重要なことは、[制限付き] サプライヤ ユーザーが、標準の Web クライアントを使用しているか、基本サプライヤ インターフェースを使用しているかを判別することです。Web クライアントの簡略バージョンは、[回答編集モード] ユーザー プリファレンスが [基本] に設定されている [制限付き] ユーザーで使用されます。[回答編集モード] ユーザー プリファレンスが [詳細テーブル編集] または [詳細ウィザード編集] に設定されている場合、そのユーザーには完全な Web クライアントが表示されます。

---

**注意** コンタクト ユーザーを作成するとき、その [承認用パスワード] が [ログイン パスワード] と同じであるかどうかを判断します。

---

- デklarレーションのデフォルト ワークフローを設定する - 423 ページの「[デklarレーション ワークフローを RFI で使用する](#)」を参照してください。

[私のオープン状態のデklarレーション] 条件は、サプライヤがカスタム ワークフローを受信できるように変更する必要があります。423 ページの「[PG&C でカスタム ワークフローを配置する](#)」を参照してください。

## デklarレーション クラスの概要

PG&C ビジネス クラス (サブスタンス、含有基準、部品グループ、デklarレーション) の詳細は、『PG&C ユーザー・ガイド』で説明されています。ここで説明するデklarレーション クラスの概要は、管理者用のリファレンスです。

デklarレーションは PG&C ソリューションのレコードのメイン オブジェクトです。デklarレーションは、部品および部品グループに含まれるすべてのサブスタンスおよびマテリアルを追跡します。デklarレーションがリリースされると、収集した情報がプロダクト レコードに公表され、デklarレーションに記載された組成データが更新されます。

[デクラレーション] 基本クラスには、デクラレーションのデフォルトのクラスが 7 つあり、それぞれに 1 つの子となるサブクラスが付いています。次の表は、PG&C におけるデクラレーションのクラスを定義しています。

デクラレーション クラス	定義	含有基準タイプ
サブスタンスのデクラレーション	サプライヤは含有基準内のサブスタンスごとに適合性情報を提供するように要求されます。	部品レベルの含有基準でなければなりません
均質材のデクラレーション	サプライヤは部品の完全な BOS 内訳を準備し、均質材レベルで適合性情報を提供するように要求されます。	均質材レベルの含有基準でなければなりません
部品のデクラレーション	部品レベルの適合性情報とその他の組成見出しレベルの情報 (製造元パラメータ) を受信します。	任意のタイプの含有基準を追加できます
JGPSSI デクラレーション	サプライヤは JGP 標準に従って適合性情報 (重量) を用意するように要求されます。  JGPSSI デクラレーションを作成するための JGPSSI テンプレートの日本語バージョンも完全にサポートされています。管理者にお問い合わせください。	部品レベルの含有基準でなければなりません
適合のサプライヤ デクラレーション	サプライヤの適合性を顧客と政府機関の含有基準で評価するアンケート。調査は、一般の会社レベルで適合性に対処します。CSR タイプのデクラレーションで使用できます。	任意のタイプの含有基準を追加できます
IPC 1752-1 デクラレーション	電子製品のジョイント インダストリ ガイドライン (JIG) サブスタンス デクラレーション。	含有基準は部品レベルでなければなりません
IPC 1752-2 デクラレーション	電子製品のジョイント インダストリ ガイドライン (JIG) 均質材デクラレーション。	含有基準は均質材レベルでなければなりません

**注意** サブスタンスとサブスタンス グループは、[サブスタンス デクラレーション] でのみ事前作成されています。(PLM 9.2 ではサブスタンスは JGPSSI デクラレーションでも事前作成されていましたが、この機能はなくなりました)

## PG&C の統合コンポーネント

このセクションでは、PG&C におけるプロセス拡張およびその他の統合コンポーネントの設定を説明しています。一部のケースでは、下記のとおりインストール中にコンポーネントが統合される場合もあります。

### Log.xml ファイルの ComplianceRollup.log

ComplianceRollup.log というログは log.xml ファイルのコンポーネントであり、インストール時に設定されます。これらのファイルは、PLM 9.2.1.x とは異なる場所に格納されることに注意してください。格納場所が必要に応じて変更できます。

Log.xml は、<AgileInstallFolder>% AgileDomain % config にあります。



ComplianceRollup.log はデフォルトで有効になります。スケジュールされた適合性ロールアップが開始されると、このログ セッションは次の場所に書き込まれます。

- OAS 環境の場合: <OracleInstallFolder> ¥ j2ee ¥ home ¥ log
- WebLogic 環境の場合: <AgileInstallFolder> ¥ AgileDomain ¥ log

このログでは、適合性移行タスクに関する 1 回かぎりの特別なログ (PG&C アップグレードについては、283 ページの「[適合性ロールアップ タスク](#)」および 426 ページの「[適合性移行タスクと一括許容度%](#)」を参照) と夜間にスケジュールされたロールアップのログの両方が取得されます。

このログに書き込まれる情報は、次の 2 つのログ タイプのいずれかに設定できます。Info[rmation] (詳細な情報) または Error (エラーに関する情報のみ) です。オフにすることもできます。

ロールアップが開始されると、ログ セッションが進行します。Info 設定では、ロールアップに存在する部品数、処理された部品数、および実行中の部品数などの要素についてレポートされます。

ComplianceRollup.log の内容の具体例は次のとおりです (「フラグ付き」は、オブジェクトの [適合性の確認が必要] 属性の [いいえ] から [はい] への変更を意味するため、ロールアップ時に適合性が検証されます)。

パート 1: a. 最新のリリース済み出荷可能アイテム b. 保留中のお荷可能アイテム

パート 2: a. フラグ付き部品グループ b. フラグ付きアイテム c. フラグ付き製造元部品

ロールアップの各パートについて、適合性ロールアップ ログには次の内容が追加されます。処理ログ – 全 1000 部品、大量の BOM 情報、ロールアップ失敗の原因

---

**注意** AXML スキーマは、<http://support.agile.com/misc/axml/2006/03/> から次の場所に変更されました。

**注意** <http://support.agile.com/misc/axml/2007/03/>

---

## Microsoft Excel ベース クライアントが正しくインストールされていることを確認する

Agile PLM が全体として正常にインストールされた場合でも、ユーザーが後で問題に遭遇しないようにこの特定コンポーネントの結果を確認するようにお勧めします。Agile PLM は、自社のアプリケーション サーバの種類に応じて、次のインストール ガイドのいずれかを使用してインストールされています。

- 『Installing Agile PLM with Oracle Application Server』
- 『Installing Agile PLM with WebLogic Server』
- 『Installing Agile PLM with IBM Websphere Application Server』

該当するインストール ガイドを参照し、「PG&C に対し Microsoft Excel ベースのクライアントを設定する」の章をレビューしてください。PG&C ソリューションによる Agile と Microsoft Excel の統合では、最初に、JGPSSI 製造規制をサポートし、サプライヤが JGPSSI デklarレーションを速やかに完了できるようにしています。ユーザーとサプライヤでできるように、Excel で内部テンプレートを作成する可能性について検討する必要もあります。

現在、サブスタンスと重量テンプレートの日本語バージョンが完全にサポートされています。サブスタンスと重量テンプレートのローカライズ版は、簡体字中国語、フランス語、およびドイツ語でサポートされています。さらに、JGPSSI テンプレートの日本語バージョンも完全にサポートされています。

**重要** 新しい日本語テンプレートは、日本語サーバ ライセンスを購入した顧客のみご利用になれます。ローカライズ版は適切なライセンス キーも必要となります。

Excel 関連のプロセス拡張の変更については、前述のインストール ガイドの「Excel」の章で詳しく説明されています。

また、Agile クライアントのユーザー インターフェイスでユーザーの言語で作業するには、管理者がユーザー プリファレンスで言語とエンコードを適切に設定する必要があります。

## PG&C のプロセス拡張を設定する

PG&C に固有のデフォルトのプロセス拡張を、次に一覧表示します。1 つは [Excel でロールアップ] で、これはアイテムにのみ適用されます。それ以外は、様々な [デklarレーション] クラスに適用されます。これらの特別なエクスポートとインポート コマンドにより、サプライヤはデklarレーション要求のデータを他の Agile PLM システムと統合したり、Microsoft Excel や Adobe Reader などの、他のクライアントの要求を完了したりすることができます。

各プロセス拡張は適切なクラスに割り当てる必要があります。この操作はインストール中に完了されます。まだ完了していない場合は、86 ページの「[プロセスの拡張](#)」、特に、89 ページの「[プロセスの拡張をクラスに割り当てる](#)」を参照してください。つまり、[データ設定]>[プロセスの拡張] で、プロセス拡張の URL を検証する必要があります。URL ベースのプロセス拡張のサーバ名は、ログイン URL のサーバ名と一致する必要があります。アプリケーション サーバが異なるデータベースを指し示している場合は、これらの URL を手動で (次のように) 設定する必要があります。

**[Excel でロールアップ]、[aXML をインポート]、および [aXML をエクスポート] の各プロセス拡張を手動で設定するには、次の値を設定します。**

<http>://<server>.<domain>.com:<port>/<virtual\_path>/ の場合

- SSL が有効になっている場合は、<http> を https に置き換える必要があります。
- <server> はサーバの名前です。
- <domain> は完全修飾ドメインです。
- <port> は、Web サーバのポート番号です (ポート 80 が使用される場合は、ポートを省略できます)。
- <virtual\_path> は、アプリケーション サーバの仮想パスです。デフォルトは Agile です。

次に、[aXML をエクスポート] と [aXML をインポート] の例を示します。

aXML をエクスポート:

<http://pgcdemo.agile.agilesoft.com:8888/Agile/MDOServlet?action=getData&filetype=AXML&internalurl=true&height=220&width=365>

aXML をインポート:

<http://pgcdemo.agile.agilesoft.com:8888/Agile/default/MDOImportPX.jsp?filetype=AXML&internalurl=true&height=190&width=350>

PG&C プロセス拡張を効率的に設定するためには、オラクル社コンサルティングの Agile 担当または Oracle | Agile サポートに相談して作業する必要がある場合があります。このマニュアルの「はじめに」を参照してください。



**注意** 412 ページの「[サプライヤ デklarレーションのプロセス拡張](#)」はプロセス拡張設定の別の側面、つまり、デklarレーション要求でどのプロセス拡張がサプライヤに表示されるかを示しています。

プロセスの拡張	割り当て先
Excel でロールアップ	部品クラス ドキュメント クラス
Excel で開く JGPSSI のインポート JGPSSI のエクスポート	JGPSSI デklarレーション クラス
aXML をインポート aXML をエクスポート これら 2 つのプロセス拡張は、デフォルトでデklarレーションの 3 つのクラスに割り当てられますが、他のデklarレーション クラスに割り当てることもできます。	均質材のデklarレーションのクラス 部品デklarレーションのクラス サブスタンス デklarレーションのクラス
IPC XML のインポート IPC XML のエクスポート	IPC 1752-1 デklarレーション クラス IPC 1752-2 デklarレーション クラス

**注意** [Excel で開く] はデklarレーション クラスに追加できますが、カスタムの Excel テンプレートを開発し、Excel 統合フレームワークを使用して Agile PLM と統合する必要があります。

これらのエクスポートおよびインポート コマンドに対するデータ フォーマットは Agile XML (aXML) フォーマット、JGPSSI テンプレート、および IPC 1752-1 および IPC 1752-2 形式により事前定義されています。システムが aXML ファイルをエクスポートおよびインポートするように設定するには、[Agile Content Service](#) (365 ページを参照) または Agile Integration Services (AIS) (『AIS Developer Guide』を参照) で作業する必要があります。これらのプロセス拡張は、一般には PG&C と同様、すべて ACS または AIS サーバ ライセンスなしで機能することにご注意ください。

## Excel 統合でサブスタンスと重量ロールアップを設定する

ユーザーは Microsoft Excel を使用して、アセンブリのサブスタンス構成表 (BOS) 情報の分析を実行することができます。[Excel でロールアップ] と [シナリオの実行] プロセス拡張を使用すると、統合された Excel スプレッドシートでアセンブリのサブスタンスと重量をロールアップできます。次に、[Excel でロールアップ] プロセス拡張に関する簡単なチェックリストを示します。

- デフォルトでは、[Excel でロールアップ] プロセス拡張は無効になっています。
- [Excel でロールアップ] プロセス拡張は、部品クラスとドキュメント クラスに割り当てる必要があります (リリース 9.2.1.3 より前のリリースのドキュメント クラスでは、このプロセス拡張が適切に動作しない可能性があることに注意してください)。
- [Excel でロールアップ] プロセス拡張の [起動先] が [[アクション] メニュー] に設定されていることを確認します。
- システム全体のプリファレンス [プロダクティビティ コンポーネントのダウンロードを可能にする] が有効であることを確認します。

## PG&C 固有の管理者ノードの設定

このセクションでは、次のノードの設定について説明しています。

- システム設定 > UOM ノード
- システム設定 > Product Governance & Compliance ノード フォルダ。これには次のノードが含まれます。
  - サインオフ メッセージ ノード - サプライヤが (電子的に) 署名するサインオフ メッセージを設定します
  - 適合性ロールアップのスケジュール ノード - [ロールアップ時間] と [周期パターン] を設定します
  - 適合性ロールアップ ルールの設定ノード - [AML ロールアップ] ルール、[組成ロールアップ] ルール、[BOM ロールアップで適合として免除を処理] ルールおよび [一括許容度%] 設定を設定します。
  - サプライヤ デklarレーションのプロセス拡張ノード フォルダ - [デklarレーション] ベース クラスの各クラスに対して、情報サプライヤに対するデklarレーション要求において、どのプロセス拡張を表示するかを設定します。
  - 含有基準のマッピング (リリース 9.2.2.1 で追加) - 部品、ドキュメント、製造元部品の各クラスについて、各含有基準と [ユーザー定義 1] フィールド間のマッピングを設定します。[ユーザー定義 1] フィールドには、部品と含有基準の組み合わせごとに適合性の結果が表示されます。

### 単位 (UOM) を設定する

[UOM] ノードは、Agile PLM で別の単位を使用するよう指定することができます。PG&C ソリューションでは、製品に含まれる制限サブスタンスの重量と数量が非常に重要視されているため、単位は重要です。詳細は、246 ページの「[単位 \(UOM\)](#)」を参照してください。

### サインオフ メッセージを設定する

[サインオフ メッセージ] ノードは、ユーザーの拠点で設定された法的放棄声明を提供します。メッセージ フィールドは、無制限の文字数を許可します。サインオフ メッセージは、会社の適合性管理者からデklarレーションを受け取る各サプライヤに対して表示されます。サプライヤは、「署名」し、デklarレーションを適合性管理者に返します。テキストは、サプライヤにより提供された情報が正しいことを確認し、そのサプライヤは返されたデklarレーションにおけるすべての「誤った声明」に対し責任を持ちます。

**注意** サプライヤはデklarレーションを 1 回だけサインオフする傾向にありますが、ルールとしては、サプライヤはワークフローで変更したステータスに対し、サインオフする必要があります。サプライヤが 1 つ以上のステータスを変更することが想定されるカスタム デklarレーション ワークフローを作成する場合は、この要素を考慮してください。リリース 9.2.1 まではこの可能性が制限されていましたが、リリース 9.2.2 時点で、サプライヤは、デフォルトのデklarレーション ワークフローのみでなく、カスタムのデklarレーション ワークフローに回答できます。423 ページの「[PG&C でカスタム ワークフローを配置する](#)」を参照してください。

### 適合性ロールアップのスケジュール

このノードは、システムで周期的な、スケジュール済みロールアップが実行される開始時刻と期間を管理します。これによって、出荷可能アイテムとしてマークが付けられたアイテムと、[適合性の確認が必要] 属性が [はい] に切り替えられた含有基準が設定されたすべての部品/部品グループがロールアップされます。

機能へのロールアップ スケジュールについては、[サーバ設定]>[タスク設定] の適合性ロールアップ タスクが有効化されている必要があります。283 ページの「[タスクの設定](#)」を参照してください。

[ロールアップ時間] 設定では、通常ロールアップの開始時刻 (時間:分) を設定します。[周期パターン] 設定では、毎日 (または毎晩) もしくは毎週の定期的なロールアップ スケジュールを選択することができます。

## 適合性ロールアップのルールを設定する

このノードは、適合性ロールアップ時に機能するルールを手動または自動で開始するかどうかを設定します。

### [AML ロールアップ] ルールと [組成ロールアップ] ルール

[AML ロールアップ] および [組成ロールアップ] ルールでは、これら 2 つのタイプの適合性ロールアップに対して [簡易] または [厳格] を選択できます。これら両方のルールのデフォルトは [厳格] (「最低」ケース) です。これは、現在のすべての要素が適合する必要があることを意味します。[簡易] 設定 (「最良」ケース) は、存在する 1 つの要素のみが適合する必要があることを意味します([簡易] または [厳格] は、「最良」/「最低」とも呼ばれます)。適合性ロールアップについては、『PG&C ユーザー・ガイド』の第 8 章に記載されています。

- [AML ロールアップ] は、アイテムに関連付けられた製造元部品の適合性に基づいてアイテムの適合性を判断する方法に対して、最良/最低のガイドラインを設定します。たとえば、アイテムに 2 つの製造元部品がある場合、[厳格] 設定では、アイテムが適合とみなされるのは、両方の製造元部品が適合である場合のみです。[簡易] 設定では、1 つの製造元部品が適合であるかぎり、アイテムは適合とみなされます。
- [組成ロールアップ] は、サプライヤの存在を示す部品/PG の組成の適合性に基づいて部品または部品ファミリの適合性を判断する方法に対して、最良/最低のガイドラインを設定します。したがって、部品の組成に 4 つのサプライヤが存在する場合、[厳格] 設定では、4 つのすべてのサプライヤが、部品は組成ロールアップに適合し、[適合] 状態であることを宣言する必要があることを意味します。

ロールアップ ルールは、[免除] 適合性状態の特別な使用を管理します。

### [BOM ロールアップで適合として免除を処理] ルール

[BOM ロールアップで適合として免除を処理] は [はい/いいえ] 設定で ([いいえ] がデフォルトです)、会社は一部のコンポーネントに [免除] のフラグが立っている場合でも、BOM (つまり、アセンブリまたは製品) を宣言することができます。

[免除] は「不適合」適合性状態の 1 つであるため、[免除] と宣言された 1 つの部品によってアセンブリ全体を [免除] にすることもできます。このルールを [はい] に設定し、部品が免除されると、[免除] 状態がアセンブリの上部にロールされなくなります。

もちろん、アセンブリの他の部品にはより深刻な不適合問題があるため、この設定はロールアップされているこれらの状態をバイパスしません。

また、デフォルトの適合性状態の名前を変更する管理者の機能によって、[適合] を、たとえば「可能性のある除外規定に適合」に変更できます。

## [一括許容度%] 設定

一括許容度% (MTP) は、わずかな差異がある場合でも、組成を完全公表とみなすかどうか決定するために使用されます(一括許容度%は、適合性ロールアップ ルール サブノードに保存されますが、この値によって適合性ロールアップの結果が他のルールと同じ方法で管理されないため、設定と呼んでいます)。MTP 設定によって、組成の開示タイプと、未報告のサブスタンスを組成に追加する必要があるかどうかをシステムで判断できます (詳細は、他の概念を紹介した後で説明します)。

一括許容度%は、エラー修正を容易にするための設定で、通常は 0.1% などの非常に小さい値を設定します。デフォルトは 0% (差異の許容度なし) です。差異は最大 5% に設定できます。5% より大きい値は許可されません。値は小数 (桁数の制限なし) で表すことができます。

一括許容度の概念は、リリース 9.2.2 で導入された他の機能 (一括開示を含む) と未報告 (システム) サブスタンスとともに使用されます。管理者がこれらの機能を設定する必要はありませんが、ここでは概要を説明します。詳細は、『PG&C ユーザー・ガイド』を参照してください。

**注意** [一括許容度%] 設定と未報告 (システム) サブスタンス機能は、部品質量とサブスタンス質量間のわずかな差異に対応するために使用されます。この機能を使用して、製造元製品において独占権を持つ製法 (配合法) としてみなされるデklarেশョン内の一部のサブスタンスを非公表にすることはできません。独占による非公表については、PG&C の将来のリリースで追加される予定ですが、リリース 9.2.2 ではサポートされません。

### システムによる一括許容度%の使用方法

たとえば、一括許容度% が 1% に設定され、部品 P1 の質量が 90 g であるとしします。この組成は、そのマテリアルの合計 (BOS (サブスタンス構成表) の質量) が少なくとも 89.1 (90 の 1% は 0.9 であるため) の場合は完全公表として識別されます。(この例は、MTP を説明するための単純な例です。組成が完全公表とみなされるには、前述したマテリアルの重量のみでなく、各マテリアルのサブスタンスもチェックされます。)

一括許容度%は、サブスタンスの質量の合計が直接の親の質量より低い場合のみ、サブスタンスの組成または均質材組成に対して使用されます。

サブスタンスの質量の合計が親の質量よりも高い場合、その組成は自動的に完全公表としてみなされます。

均質材組成では、MPT が実際には 2 回使用されることに注意してください。

- 1 回目は、マテリアル (サブスタンスの親) の合計が部品の質量よりも低い場合。このケースでは、差異が MTP 値よりも大きい場合、組成は一部公表になります (未報告マテリアルはありません)。
- 2 回目は、サブスタンスの質量の合計がマテリアル (またはサブパート) の質量よりも低い場合。このケースでは、差異が MTP 値内にある場合は、未報告サブスタンスが追加されません。差異が MTP 値よりも大きい場合は、システムによって未報告サブスタンスが追加され、そのマテリアルまたはサブパートの下位の質量の差異に対応します。

MTP 設定は、[管理者] で設定された以降にユーザーが計算する組成に対して機能します。MTP 値を変更すると、次の警告が発生します。[[一括許容度%] 値を変更しても、既存の組成に対して計算済みのロールアップ結果には、自動的に反映されません。既存の組成のロールアップ結果を再計算するには、デklarেশョンで [適合性の算出] を実行します。値を変更するには [はい] をクリックします。]

PLM 9.2.2 にアップグレードしている企業は、426 ページの「[適合性移行タスクと一括許容度%](#)」を参照してください。

## 一括開示 (完全、一部、未公表) と未報告サブスタンス

[一括開示] 管理リストには、次の 3 つの値があります。[完全公表]、[一部公表]、および [未公表] です。適切な値は、組成ロールアップ時にシステムによって生成されます。この属性は、部品と部品グループの [組成] タブ、およびデクラレーションの [部品]/[部品グループ] タブに表示されます。

- 完全公表または完全公表された組成:
  - 部品の質量と、すべてのサブスタンスの質量の合計との差異が [一括許容度%] 設定以下の場合、サブスタンス組成は完全公表とみなされます。
  - 次の 2 ステップ プロセスが満たされる場合、均質材組成は完全公表です。(1) 各マテリアル (サブスタンスの直接の親) の質量と、そのマテリアルの下位にあるサブスタンスの質量の合計との差異が [一括許容度%] 設定以下である場合。(2) 部品の質量と、サブスタンスの親の質量の合計との差異が [一括許容度%] 以内である場合。
- 一部公表または一部公表された組成: 差異が [一括許容度%] よりも大きい場合。この場合は、不明質量を満たすためにシステムによって未報告サブスタンスが追加されます。
- 未公表または未公表の組成: 部品、サブスタンス、またはサブスタンスの直接の親の質量が不明の場合、組成は未公表とみなされます。

したがって、部品とすべてのサブスタンス/マテリアルに質量があり、それらの質量の合計が正確に一致しない場合は、システムによって、マテリアル質量の合計が部品の質量の許容度 (%) 内にあるかどうかチェックされます。

### 一部公表組成における未報告サブスタンス

PLM リリース 9.2.2 では、システムで生成されるエンティティまたはオブジェクトも追加されており、これによって、部品またはアセンブリの合計質量とそのすべての構成要素サブスタンス間の不明差異が満たされます。アプリケーションにおけるこのエンティティの名前は「未報告 (システム)」であり、これは単に、報告されていないサブスタンスを意味します。未報告サブスタンスはアプリケーション内で検索可能です。ユーザーは、未報告サブスタンスの [ページ 1] または [ユーザー定義 1] の任意のフィールドを編集したり、名前を除外できます。ただし、未報告サブスタンスを削除することはできません。組成ロールアップによって組成に適合のマークが付けられ、部品とそのサブスタンスの重量が一致しない場合、その組成には未報告サブスタンスが含まれていることを意味します。

---

**注意** 未報告サブスタンスをユーザーが手動で追加することはできません。つまり、「未報告サブスタンス」やこれに類似する名前のオブジェクトを作成して代用として使用すると、未報告サブスタンスの目的が妨げられます。未報告サブスタンスは、システムで計算を実行し、必要に応じてそのエンティティを作成するために使用されます。

---

## 適合性状態の名前を変更する

ロールアップで有効になっている適合性状態、適合性ロールアップ、ビジネス ロジックについては、『PG&C ユーザー・ガイド』(第 10 章) で詳細に説明しています。デフォルトの適合性状態は [該当なし]、[適合]、[除外]、[棄権済み]、[情報不明]、および [不適合] です。最後の 4 つはすべて不適合な適合性状態です。

適合性状態の名前は、自社の要件にあわせて変更できます。ただし、適合性状態を追加または削除したり、その本質的な意味を変更したりすることはできません。たとえば、[適合] を [承認] に、また [不適合] を [却下] に変更することはできます。元の名前の意味に一致していない名前を割り当てると、適合性ロールアップの信頼性が損なわれることがあります。

適合性状態には、3 つの [管理者] リストがあります ([データ設定]>[リスト])。適合性状態の名前がリスト (下記参照) で変更されると、既存のすべてのビジネス オブジェクトでも変更されます。整合性を持たせてユーザーが理解しやすいように、名前の変更は 3 つのリストにすべてに対して行うことをお勧めします。リストは次のとおりです。

- 部品適合性リスト
- 適合性判断値リスト
- 適合性宣言値リスト

**重要** これらのリストに整合性を持たせることに加えて、[適合性宣言値] フィールドで元の名前を使用するプロセス拡張も調整する必要があります。Microsoft Excel ベース クライアントを使用している場合、Excel スタイル シートにも整合性を持たせる必要があります。

管理者リストの詳細は、79 ページの「[リスト](#)」を参照してください。

## サプライヤ デklarレーションのプロセス拡張

Product Governance & Compliance ノード フォルダの下には、サプライヤ デklarレーションのプロセス拡張と呼ばれるノード フォルダがあります。このサブノードは、プロセス拡張を設定する場所ではありません (86 ページの「[プロセスの拡張](#)」を参照してください)。現在のサブノードで、制限付きコンタクト ユーザーが受け取るデklarレーション要求の各タイプに対して、表示するプロセス拡張を設定します。この設定は、基本サプライヤ インターフェースに関係しています。つまり、Web クライアントの簡易バージョンは、[回答編集モード] ユーザー プリファレンスが [基本] に設定されている制限付きユーザーに表示されます。

たとえば、PG&C ソリューションが aXML を使用していない場合、サプライヤを混乱させることがないように、すべてのデklarレーションから [aXML をエクスポート] および [aXML をインポート] のプロセス拡張を削除できます。

**重要** [選択済み] フィールドで最初にリストされているプロセス拡張が (そのタイプの) 各デklarレーションに表示されます。このプロセス拡張は、[基本] サプライヤのホームページのデklarレーション名の横にライブ リンクとして表示されます。他の選択済みプロセス拡張は、サプライヤがデklarレーション自体を開いたときに表示されます。

プロセス拡張が [プロセス拡張] ノードで無効になっている場合、その名前は [サプライヤ デklarレーション プロセス拡張] サブノードに表示されることにご注意ください。これらのサブノードには、制限付きサプライヤ ユーザーに表示される可能性があるプロセス拡張が設定されています。これらのサブノードでは、管理者が [選択肢] フィールドで選択しなかったプロセス拡張は、すべての制限付きユーザーに対して表示されません。サプライヤ ユーザーにもユーザー側他ユーザーにも、無効にされたプロセス拡張は表示されません。

**注意** JGPSSI プロセス拡張をデklarレーションの非 JGPSSI クラスに割り当てることは有意義ではありませんが、サプライヤが使用されると思われる方法の予測に基づいて、aXML プロセス拡張を JGPSSI デklarレーション クラスに割り当てることができます。実際に、aXML プロセス拡張はすべてのデklarレーション クラスに適用できます。ただし、JGPSSI ベースの RFI を完成させるために、すでに 3 つのプロセス拡張が利用可能であり、これらは aXML ファイルを使用するよりもきわめてシンプルなため、通常は JGPSSI デklarレーション クラスに aXML プロセスを追加する必要はありません。

### プロセス拡張でデklarレーションのクラスを設定するには:

1. [システム設定] > [Product Governance & Compliance] > [サプライヤ デklarレーションのプロセス拡張] ノード フォルダを開きます。
2. デklarレーション クラスのいずれかをダブルクリックします。[選択肢 - 選択済み] ダイアログが表示されます。
3. [右に移動] および [左に移動] 矢印を使って、プロセス拡張を [選択肢] または [選択済み] に移動します。
4. [上に移動] または [下に移動] 矢印を使って、プロセス拡張の順序を [選択済み] に設定します。
5. [保存] をクリックします。[選択済み] フィールドの最初のプロセス拡張は、[基本] サプライヤ インターフェースのライブ リンクとして、デklarレーションのこれらのタイプに対して表示されます。したがって、[Excel で開く] が JGPSSI デklarレーションの [選択済み] フィールドの最初にある場合、[限定] サプライヤが JGPSSI デklarレーションを開くと、[Excel で開く] というリンクをクリックすることができます。システムは、そのデklarレーションに対して Microsoft Excel と JGPSSI テンプレートを開きます。

## 含有基準のマッピング

[含有基準のマッピング] は [Product Governance & Compliance] ノード フォルダの新規サブノードです。管理者はこのサブノードを使用して、部品、ドキュメント、製造元部品の各クラスについて、各含有基準と [ユーザー定義 1] フィールド間のマッピングを設定できます。[ユーザー定義 1] フィールドには、部品と含有基準の組み合わせごとに適合性の結果が表示されます。このマッピングによって、ユーザーは、[適合性] タブ > [含有基準] テーブルに移動するかわりに、部品の [ユーザー定義 1] で含有基準の適合性の結果を簡単に表示できます。

PG&C システムの各含有基準について、管理者は、部品、ドキュメント、製造元部品の各クラスの [ユーザー定義 1] でリスト タイプの属性を選択したり、ユーザー定義のユーザー設定フィールドを作成できます。フィールドの値は、[適合性の結果] フィールド ([適合性] タブ > [含有基準] テーブル > [適合性の結果]) からコピーされます。

同じ含有基準を異なるクラスの異なる [ユーザー定義 1] 属性にマップできます。

適合性について部品がロールアップされ、その [含有基準] テーブルの [適合性の結果] フィールドに値 (適合性状態) が設定されると、その値は、その部品の [ユーザー定義 1] のマップ済み属性にもコピーされます。具体的には、含有基準の [適合性の結果] (RC) 値は、次のイベントのいずれかが発生した場合に、マップ済みの [ユーザー定義 1] フィールドにコピーされます。

- ロールアップが、部品またはドキュメントの最新のリリース済みリビジョン (LRR) で実行された場合。
- ロールアップが製造元部品で実行された場合。
- ロールアップが BOM で実行された場合。子が LRR の場合、その RC 値はその子の [ユーザー定義 1] フィールドにコピーされます。
- ロールアップが製造元部品に関連付けられているアイテムで実行された場合。製造元部品の RC 値は、製造元部品の [ユーザー定義 1] フィールドにコピーされます。



### 含有基準を (アイテムまたは製造元部品内の) [ユーザー定義 1] フィールドにマップするには:

1. [含有基準のマッピング] ノードをダブルクリックすると、ページが開きます。PG&C ソリューションで入力したすべての含有基準のリストが表示されます。
2. 含有基準の行を選択し、[部品]、[ドキュメント] または [製造元部品] タブを選択します (これらのクラスのそれぞれに異なるマッピング設定できます)。
3. [選択したマッピングの編集] ボタンをクリックします。[PGC 含有基準マッピングの更新] ダイアログが表示されます。
4. [含有基準] フィールドはすでに選択されており、このダイアログでは変更できません。[属性] フィールドで、ドロップダウン リストを使用してマップする属性の名前を選択します。(属性が表示されるのは、[適合性の結果] リストにすでにマップされているためです。このマッピングの詳細は後述します。)
5. [OK] をクリックします。これで、[部品]、[ドキュメント] または [製造元部品] に対して選択した含有基準の行にも、ここで選択した属性が表示されます。
6. その後、部品 (アイテムの最新のリリース済みリビジョンまたは製造元部品) の適合性ロールアップが完了すると、その値が部品の [ユーザー定義 1] のマップ済み属性に表示されます。

### [PGC 含有基準マッピングの更新] ダイアログの [属性] ドロップダウン リストに表示する [ユーザー定義 1] 属性は、次のすべての条件を満たしている必要があります。

- a. リスト属性であること。
- b. 有効化されていること ([表示] = [はい])。
- c. [適合性判定値] 管理者リストを指し示すこと。

[適合性の結果] と [適合性判定値] の両方のフィールドが、[適合性判定値] 管理者リストを指し示すことに注意してください。

## 変更されたマッピングとシステム クリーンアップに関する注意

マッピングはノードで編集できます。変更されたマッピングは、それ以降のロールアップに影響を与えます。変更されたマッピングによって影響を受ける可能性のあるオブジェクトは、それらがロールアップされないかぎり変更されません。

マップ済み属性を新しいマッピングに変更するたびに、マップ済み属性が削除され、古い値も [ユーザー定義 1] フィールドから消去されます。また、([適合性判定値] リストではなく) 別のリストを指し示すように属性を変更する場合は、マッピングが削除され、古い値も [ユーザー定義 1] フィールドから消去されます。

エンドユーザーが (マップ済み) [ユーザー定義 1] フィールドの値を手動で変更し、その変更が [含有基準] テーブルに反映されない場合は、潜在的な不整合が発生する可能性があります。この懸念がある場合、解決策は、[ユーザー定義 1] フィールドに対する [変更] 権限をオフにすることです。

[適合性の結果] から部品の [ユーザー定義 1] へのコピーは、部品の LRR に対してのみ実施されます。これは、[ユーザー定義 1] が常に LRR に対して適用されるためです。したがって、ロールアップによって、以前のリリース済みリビジョン (または保留中のリビジョン) の RC が変更された場合、その値はマップ済みの [ユーザー定義 1] フィールドにコピーされません。同様に、その [ユーザー定義 1] フィールドがアイテムの [BOM] タブで有効になっている場合は、アイテムの LRR に対応する値のみが表示されます。

含有基準がシステムから削除された場合に、管理者がクラスのクリーンアップを実行する必要はありません。次回 Java クライアントで [含有基準のマッピング] ノードを開くときに、クリーンアップが自動的に実行されます。



## PG&C クラスを設定する

この章では、PG&C ソリューションの設定方法の概要を示し、管理者に役立つ特定の手順を説明します。この章では、PG&C ソリューションの完全な設定方法に関する包括的な説明は提供しません。クラス、ユーザー、役割などの設定方法については、この管理者ガイドの他の箇所を参照してください。デklarレーション、含有基準、部品グループ、サブスタンスの各ビジネス オブジェクトの使用方法については、『PG&C ユーザー・ガイド』を参照してください。

PG&C 関連クラスをカスタマイズするとき、そのサブクラスすべてが影響を受けます。アイテムと製造元部品は会社の Product Collaboration ソリューションにすでに含まれている可能性があるため、これらのビジネス オブジェクトのクラス レベルで作業するときは注意が必要です。同様に、[部品グループ] クラスは Product Cost Management ソリューション、および PG&C (これについては、420 ページの「[部品グループ: 部品ファミリーを設定する](#)」で扱います) に含まれている可能性があります。[アイテム]、[製造元部品] と [部品グループ] タブの属性は、その他の部品および部品グループから値を取り出します。

## PG&C ビジネス オブジェクトにおける [全体適合性] と [適合性の要約]

ここでは、様々なオブジェクトやタブ内に、多少異なる名前が指定された同じ属性が存在していることを明らかにします。

[全体適合性] は、ワーストケース シナリオを使用し、部品に関連付けられているすべての含有基準全体と照合して部品の適合性状態を示します。この属性は、次のオブジェクトに表示されます。

アイテム > [タイトル ブロック] タブ > [全体適合性]

製造元部品および部品グループ > [一般情報] タブ > [全体適合性]

また、[全体適合性] 属性は、次のオブジェクトにも表示されます。ただし、この場合、属性の名前は [適合性の要約] です。したがって、前述のタブに加えて、次のタブでもこの属性が有効になります。

アイテム基本クラス (部品とドキュメント) > [BOM] タブおよび [製造元] タブ > [適合性の要約]

変更基本クラス (ECO、MCO など) > [対象アイテム] タブ > [適合性の要約]

## アイテムおよび製造元部品: サブスタンスと重量のロールアップと [子レベル] 属性

サブスタンスと重量のロールアップを正常に計算するには、システムで、BOM (サブアセンブリと部品のレベル) と BOS (部品に含まれるサブスタンスのレベル) の両方が正しく識別される必要があります。BOS (サブスタンス構成表) については、『PG&C ユーザー・ガイド』を参照してください。[子レベル] 属性を有効にすると ([表示] に設定)、システムとユーザーの両方が、サブスタンス構成表のレベルでサブスタンスを識別しやすくなります。

特に、Microsoft Excel ベースのクライアントを介してロールアップを実行する場合は、管理者が、[部品]、[ドキュメント] および [製造元部品] の各クラスで次の属性を有効にすることが重要です ([部品グループ] は Excel 統合を使用しないため考慮する必要はありません)。

- アイテムおよび製造元部品 > [適合性] タブ > [組成] テーブル > 属性:[含有基準名]、[デklarレーション名]、[重量宣言値]、[サプライヤ]
- アイテムおよび製造元部品 > [適合性] タブ > [サブスタンス] テーブル > 属性:[子レベル]、[サブスタンス名]、[サブスタンス タイプ]、[質量]、[PPM 宣言値]、[CAS 番号]、[換算係数]

- アイテム > [BOM] タブ > 属性:[アイテム番号]、[アイテムの説明]、[アイテム リビジョン]、[アイテム リビジョン]、[数量]
- アイテム > [製造元] タブ > 属性:[製造元部品番号]、[製造元部品説明]、[製造元名]

これらの属性のすべては有効にする必要があります。つまり、[有効] プロパティを [はい] に設定します。

## 含有基準: 除外規定を追加する

管理者または適合性管理者が新しい含有基準を作成するとき、その含有基準は、規制当局に関連するサブスタンスに関連付けることができます。含有基準に除外規定を追加 (含有基準の [一般情報] の [除外規定] フィールド) するには、最初に、免除されたサブスタンスを [除外規定] リストに追加します。これで、含有基準オブジェクトを作成するユーザーがリストから選択できるようになります。79 ページの「リスト」を参照してください。

**注意** 含有基準名を付加した除外規定を各アイテムに追加して、ユーザーが該当する除外規定を容易に選択できるようにすることをお勧めします。たとえば、グローバル [除外規定] リストの RoHS 関連のすべての除外規定は「RoHS-」で始まります。

デklarレーションにも [除外規定] フィールドがあります (<[部品/PG]> タブおよびデklarレーションの <[部品/PG]> [サブスタンス] テーブル)。デklarレーションの [除外規定] の値は、対応する含有基準から表示されます。

## デklarレーション: デklarレーション名の長さ

長い名前でデklarレーションを開く際の問題を避けるために、Microsoft Excel ベース クライアントを有効にしているすべてのクラスに対して、デklarレーション名を 50 文字未満に制限する必要があります。この操作は、自動採番を必須にすることによって (自動採番シーケンスの各番号が 50 文字未満であることが必要)、または [カバー ページ] > [参照番号] 属性の最大の長さを調整することによって行うことができます。

## アイテム : [適合性の確認が必要] 属性の削除

現在、[適合性の確認が必要] フィールドはアイテムに表示されません。ただし、システムはこのフィールドを認識し、ロールアップ中にアイテム内のこのフィールドに反応します(このフィールドは、製造元部品および部品グループの [適合性] タブ > [含有基準] テーブルでは引き続き表示されます)。その理由は、Product Collaboration ソリューションの中心となるアイテムに関係しています。PC 固有の設計変更では、[適合性の確認が必要] 値 ([はい] または [いいえ]) によって実際の適合性状態が一貫して反映されない場合があります。このフィールドが [いいえ] の場合も、アイテムに対する非-PG&C 関連の変更がその適合性に影響を与える可能性があるため、システムでロールアップを実行する必要があります。

## 部品と部品グループ: 最後のロールアップ属性が追加されてからの経過時間

[最後のロールアップからの経過時間] フィールドは、前回の適合性計算が実行されてからの経過時間を示します。このフィールドを設定する必要はありません。部品および部品グループの [適合性] タブにこの情報を示すことで、他ユーザーを援助できます。また、このフィールドの使用により、ユーザー自身のロールアップ設定および関連オブジェクトに影響が及ぶ場合があります。

## アイテムおよび製造元部品: 組成を非アクティブ化および再アクティブ化する

アイテムおよび製造元部品の [含有基準] テーブルには [アーカイブ] ボタンがあります。このボタンは、ユーザーがその部品の [適合性] タブ > [含有基準] テーブルの [適合性宣言値] 属性に対して適切な [変更] 権限を持っている場合のみ有効になります。

[アーカイブ] ボタンの使用ケースは、公表時に、不適合デklarレーションが [不適合] 状態でトップレベル アセンブリ全体をレンダリングする可能性のあることを考慮します。ユーザーは、問題のある組成をプロダクトレコードから取り除くために不適合部品を購入しないことを決定する権限を持つ他のユーザーを有効化する必要があります。[アーカイブ] ボタンを使用し、問題のある組成を非アクティブ化する (つまり、[アクティブ] ステータスから削除する) と、その部品を含むアセンブリが適合状態になる可能性があります。

一方、誤りが見つかり、アーカイブ済みの非アクティブな組成をアクティブとして再開することを決定する場合もあります。再開するには、[組成] テーブルの [履歴] リンクをクリックして組成を選択 (行を選択) し、[アクティブにする] ボタンをクリックします。組成の再アクティブ化は、アイテムおよび製造元部品にのみ適用されます。

システムによって組成がアクティブ化されると、一致するアクティブな組成 (同じサプライヤと含有基準を持つ組成) が自動的にアーカイブされます。ある組成は [アクティブ] テーブルにあり、別の組成は [履歴] テーブルにあるために、1 つのアイテムに対して同じ含有基準と同じサプライヤを持つ複数の組成がある場合は、[履歴] テーブルから [アクティブにする] をクリックすると、アクティブな組成が自動的にアーカイブされます。この動作は、組成のインポート時のシステムの動作と一貫しています。アイテムまたは製造元部品の [履歴] タブでは、[アクティブにする] と [アーカイブ] の両方のアクションが記録されることに注意してください。

<b>注意</b>	アーカイブ (非アクティブ化) と (再) アクティブ化の両方のプロセスによって、[適合性の確認が必要] フィールドが [はい] に再設定されます。この変更は製造元部品には表示されますが、アイテムにはこのフィールドが表示されません。また、アーカイブおよびアクティブ化アクションによって、部品またはアセンブリのすべての含有基準に対する適合性状態が変更される場合があります。組成の非アクティブ化またはアクティブ化状態を変更した場合は、部品または関連アセンブリで適合性ロールアップを実行することをお勧めします。
-----------	--

## 部品と部品グループ: 組成タイプ

ユーザーが組成とサブスタンスを部品または部品グループにインポートできるようにするには、[組成タイプ] 属性が不可欠です (次のトピックを参照してください)。デklarレーションが公表されるとき、このフィールドにはデklarレーションのタイプに対応する値があります。組成が製造元部品にインポートされる場合は、次の 3 つのタイプのいずれかにマーク付けされます。

[組成タイプ] にはこの値があります...	...組成がこのタイプのデklarレーションからもたらされた場合:
部品組成	部品のデklarレーション
サブスタンス組成	サブスタンス デklarレーション、JGPSSI デklarレーション、IPC 1752-1 デklarレーション
均質材組成	均質材デklarレーション、IPC 1752-2 デklarレーション

また、組成が指定されていない含有基準と照合して適合性ロールアップを実行する場合は、その含有基準の検証レベルと同じ組成タイプの、含有基準が指定されていない組成を参照します。

[組成タイプ] はリスト属性で ([管理者]>[データ設定]>[リスト])、次のエントリがあります。

- 部品組成
- サブスタンス組成
- 均質材組成

[クラス]><[部品/PG]> クラス >[ユーザー インターフェース タブ]>[適合性] タブ >[組成] テーブル >[組成タイプ] 属性が表示され ([表示]=[はい])、必須 ([必須]=[はい]) であることを確認する必要があります。次に、属性が適切な [読み取り] および [変更] 権限マスク (つまり、読み取り (製造元部品)、読み取り (アイテム) など) の [適用先] プロパティに含まれていることを確認してください。[組成タイプ] のデフォルト値はありません。192 ページの「[適用先機能](#)」を参照してください。

デklarレーションから公表された組成の場合は、[デklarレーション] クラスに基づいて組成タイプが判断されます。部品にインポートする組成の場合は、ユーザーが [組成タイプ] を指定する必要があります。

## アイテムおよび製造元部品: 組成とサブスタンスをインポートする

PG&C を使用すると、ユーザーは組成とサブスタンスをアイテムと製造元部品にインポートできます ([適合性] タブ >[組成] テーブルを使用)。ユーザーは含有基準 ([適合性] タブ >[含有基準] テーブル) およびサプライヤ ([サプライヤ] タブ) をアイテム、製造元部品および部品グループにインポートすることもできます。

ユーザーの会社が PartMiner または Total Parts Plus を使ってサブスタンス情報をダウンロードする場合、これらのコンテンツ プロバイダからデータを引き出すために Agile Product Interchange を使用できます。Agile PI は必要な aXML ファイル (Agile XML) を作成し、それを PLM システムにインポートします。

ユーザーの会社が Part Miner や TPP を使用しない場合でも、組成と組成サブスタンスで aXML 形式のファイルを作成する必要があります。その後、Agile Import を使用して、組成と組成サブスタンスをシステムにインポートします。

PG&C データをインポートする必要があるユーザーは、アイテムと製造元部品を含め、PG&C オブジェクトのそれぞれの種類に対して [作成]、[ディスカバリ]、[読み取り]、[変更] 権限を割り当てられる必要があります。

次の Agile マニュアルを参照してください。

- ユーザーに組成をインポートする: 『PG&C ユーザー・ガイド』の第 8 章「PG&C でデータをインポートおよびエクスポートする」
- インポートとエクスポート ツールを使用する: 『インポートおよびエクスポート・ガイド』
- Product Interchange を使用する: 『Product Interchange Administrator Guide』および『Product Interchange User Guide』

---

**注意** Agile XML (aXML) 形式およびインポート手順を改良する情報については、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。

---

## 部品と部品グループ: マッピング機能

部品 (アイテムまたは製造元部品) および部品グループの一部の [ユーザー定義 1]/[ユーザー定義 2] 属性では属性のマッピングが必要です。これによって、部品に関連する公表済みデklarレーションの変更された値が配布されます。

部品の [適合性] タブの属性をマップする例

[部品]>[適合性] タブ >[組成] テーブルの属性 >[Date02] フィールド

前述のフィールドを次のフィールドにマップします。

[部品]>[ユーザー定義 1]>[Date05]

これは、[ユーザー定義 1](クラス レベル) または [ユーザー定義 2](サブクラス レベル) で有効化することができます。重要な属性は [データのマップ先] です。この部品がデklarレーションに追加されると、システムは [Date02] フィールドの値を次のフィールドへ取り出します

[デklarレーション]>[アイテム] タブ >[Date05]

[部品]>[ユーザー定義 1]>[Date05] および [部品]>[適合性]>[組成]>[Date02] の有効化およびマップが完了した場合、この 2 つのフィールドは true になります。

1. [デklarレーション]>[アイテム] タブ >[部品](リンク)>[ユーザー定義 1] タブ >[Date02] 属性を有効にしている場合、[部品]>[ユーザー定義 1]>[Date02] の値はこの属性に取り込むことができますが、この属性は読み取り属性であるため編集することはできません。
2. [デklarレーション]>[アイテム]>[部品(リンク)]>[ユーザー定義 1]>[Date02] (それぞれ [部品]>[適合性]>[組成]>[Date02] に対応) を有効にしている場合、この属性を編集することができます。値は [部品]>[ユーザー定義 1]>[Date05] に再び公表されます。

デklarレーションを完了する間に、サプライヤが [Date02] フィールドを変更したとします。デklarレーションが戻され、リリースされ、データがシステムに公表されると、この新しい値は自動的に次のフィールドへ引き継がれます。

[部品]>[ユーザー定義 1]>[Date05]

マッピングは次の 2 つの方法で動作します。このアイテムをデklarレーションに追加するとき、システムはアイテムの [ユーザー定義 1]/[ユーザー定義 2] から値を引き出してデklarレーションの <[部品/PG]> テーブルのマップ済み属性に置きます。

## 使用ケース

次に、使用ケースを示します。PG&C には、組成を保持する 6 つのデklarレーション クラスがあります ([適合のサプライヤ デklarレーション] のみではありません)。List01 というリスト フィールドを、部品 >[適合性]>[組成] で有効化し、[部品]>[ユーザー定義 1] にマップします。デklarレーション >[アイテム] タブに対応する [List01] フィールドがあり、マッピングはデklarレーションの 6 つのすべてのクラスで設定する必要がありますに注意してください。したがって、部品 >[適合性]>[組成]>[List01] が [大陸] リストを指し示すように設定する場合は、デklarレーション >[アイテム] タブのすべてで [List01] が [大陸] リストを指し示す必要があります。

## マッピング機能を有効にする

**特定の部品/部品グループに対してマッピングを有効化するには:**

1. すべての部品に関して、[ユーザー定義 1](クラス レベル) または [ユーザー定義 2](サブクラス レベル) の一部の属性を有効化します。
2. 部品の [適合性] タブで、[組成] テーブルの一部の属性を有効化します。
3. 該当するフィールドをマップします。

[適合性] タブ >[組成] テーブル >[ユーザー定義 1]/[ユーザー定義 2] 属性のユーザー設定ページ。

4. 関連するデklarレーションの部品および部品ファミリ テーブルの該当フィールドを有効化します。

5. 前述の使用ケースで示したように、リスト/マルチリスト属性をマッピングする際は、次の対応するリスト/マルチリスト属性がすべて同じリストを指し示す必要があります。

- 部品または部品グループ > [適合性] タブ > [組成] テーブル
- 部品または部品グループ > [ユーザー定義 1]/[ユーザー定義 2] タブ、および
- デklarレーション > [アイテム]、[製造元部品] または [部品グループ] タブ

たとえば、サプライヤが「国」を指し示すリスト属性を編集し、デklarレーションがリリースされたときに値が [ユーザー定義 1]/[ユーザー定義 2] にコピーされるようにするには、上に一覧表示したすべてのリスト属性が [国] リストを指し示していることを確認します。

同じ部品に関する複数のデklarレーションが別々のサプライヤに送信された場合、Agile のルールは「最後のリリースが残る」です。つまり、マップされた属性の値は、後からのデklarレーションにより変更されます。新しいデklarレーションに、マップ済み属性のいずれかの値がない場合は、デklarレーションのリリース時にアイテムの [ユーザー定義 1]/[ユーザー定義 2] のマップ済み属性の値は削除されません。

## 部品グループ: 部品ファミリを設定する

[部品グループ] 基本クラスと [部品グループ] クラスのオブジェクトは、デフォルト サブクラスで反映されているように、Agile PLM では 2 つの目的で使用されています。部品ファミリと部品分類。部品と製造元部品間の関係性から、[部品グループ] クラスは Product Collaboration サーバ ライセンスによってライセンスを供与されていますが、[部品グループ] クラスのオブジェクトは PG&C および Product Cost Management (PCM) ソリューションでより頻繁に使用されます。

会社が PG&C と PCM の両方を購入している場合、部品ファミリと部品分類が同じように動作するように (デフォルト) 設定するか、または異なる動作をするように設定することができます。PCM 部品分類と PG&C 部品ファミリで異なるビジネス ルールを使用する場合は、次のタスクの手順を完了する必要があります。

**注意** これらの設定手順は、会社が PG&C と PCM ソリューションの両方を購入している場合のみ適用できます。そうでない場合は、このセクションは無視してください。

PG&C ソリューションでは、部品ファミリは、適合性管理者とサプライヤが部品を素早く分類し、部品のグループまたはファミリの制限サブスタンスに関する適合性情報を収集するために使用されます。PCM ソリューションでは、部品分類はプロダクトソーシングの部品分類化に使用されます。RFI はサプライヤの提供する部品ファミリにより配布されるため、システムで部品ファミリを定義しておくことは重要です。

**注意** [部品グループ] クラスが無効になっている場合は、各 [デklarレーション] クラスで [部品グループ] タブを非表示にする必要があります。非表示にしないと、Microsoft Excel ベース クライアントでこれらのデklarレーションが適切に処理されません。[クラス] > それぞれの [デklarレーション] クラス > [ユーザー インターフェース タブ] > [部品グループ] にジャンプし、[表示プロパティ] を [いいえ] に設定します。

## 部品分類と部品ファミリを同一のスマートルールにする

[部品分類と部品ファミリを同一にする] スマートルールは [はい] または [いいえ] に設定できます ([強制/同一] スマートルール)。会社が PG&C も PCM も持っていない場合、設定には何の効力もありません。会社がこれら両方のソリューションを持つことを想定し、会社が [部品グループ] クラスからどのようにオブジェクトを使用するかを決定する必要があります。この後、[利用可能にする] の属性を表示または非表示にします。

[強制/同一] スマートルールが [いいえ] に設定されている場合、ユーザーが作成した部品分類の種類を選択できる理由があれば、[利用可能にする] 属性は表示されます。[強制/同一] スマートルールが [はい] に設定されている場合、[利用可能にする] 属性は通常非表示となります。

## [利用可能にする] 属性

[利用可能にする] 属性が表示されていると ([強制/同一] スマートルールが [いいえ] に設定されていると想定)、[部品グループ] クラスからオブジェクトを作成したユーザーは、[部品グループ] オブジェクトを次の 3 つの形式のひとつで利用可能にするかどうかを尋ねられます。

- 部品分類と部品ファミリ (デフォルト) - 部品グループ オブジェクトは適合性コンテキスト (PG&C) の類似サブスタンスで部品を収集したり、ソーシング コンテキスト (PCM) の類似部品を収集するために使用されます。

<b>注意</b>	[強制/同一] スマートルールが [はい] に設定されている場合 (つまり 2 つのソリューションが [部品グループ] クラスを共有している場合) で、ユーザーが [アイテム.部品分類] と [アイテム.部品ファミリ] 属性の両方を更新した場合、このユーザーは [部品分類] と [部品ファミリ] の属性の両方に同じ値を入力しなければなりません。値が異なる場合、Agile システムは [部品ファミリ] 属性を無視します。
-----------	---

- 部品分類のみ - 部品グループオブジェクトは、ソーシング コンテキストの類似部品を収集するために使用されます。アイテムのみを [コンテンツ] タブに追加することができます。この設定で、部品分類オブジェクトはデklarationで使用することはできません。
- 部品ファミリのみ - 部品グループオブジェクトは、ソーシング コンテキストの類似サブクラスで部品を収集するために使用されます。アイテムと製造元部品の両方を [コンテンツ] タブに追加することができます。

### PCM と PG&C で部品グループ オブジェクトに異なる動作をさせるには

1. [システム設定] で [スマートルール] ノードをダブルクリックします。[スマートルール] ウィンドウが表示されます。
2. [部品分類と部品ファミリを同一にする] で [いいえ] を選択し、[保存] をクリックします。
3. [データとワークフロー設定] で [クラス] ノードをダブルクリックします。[クラス] ウィンドウが表示されます。
4. [部品グループ]>[部品グループ] クラスを開いて、[ユーザー インターフェース タブ] タブをクリックします。
5. [一般情報] をダブルクリックして開き、[属性]|[一般情報] タブをクリックします。
6. [利用可能にする] の属性をダブルクリックします。[利用可能にする] の属性は、PG&C ライセンスがある場合のみ利用可能です。
7. [表示] を [はい] に設定します。
8. [デフォルト値] で、ユーザーが新規部品分類を作成する際に表示されるデフォルトとして、オプションの 1 つを選択することができます。どれがデフォルトとして選択されていたかにかかわらず、ユーザーは常に 3 つのオプションのうち好きなものを選択することができます。
9. [保存] をクリックします。

## PG&C で PG&C ユーザーの役割と権限を定義する

**重要** PG&C を使用していて、PLM の新規リリースにアップグレードしている場合は、役割と権限が完全に更新されていることを確認する必要があります。これには、手動で新規属性を追加する操作も含まれます。425 ページの「[アップグレード データベースの PG&C オブジェクト、役割および権限への変更](#)」を参照してください。



**重要** 新規リリースの PLM にアップグレードしているが、PG&C をこれまで使用したことがない場合、新しい属性は PG&C クラスと関連する権限に含まれますが、この場合は、Product Collaboration 関連のクラスと権限を手動で更新して、PG&C によって PC オブジェクトに導入された属性を含める必要があることに注意してください。

[インポート] という権限は、Agile Import で作業するユーザーに必要です。この権限は、既存の役割および特定の制限付き役割に追加する必要があります(付録 A を参照)。制限付き役割は、Java クライアントでは変更できないため、Agile サポートに連絡してください。

**注意** 『Installing Agile PLM with OAS / WebLogic』の PG&C 設定の章で、「Setting Privileges for PG&C Objects」のセクションを参照してください。

## ユーザーを [適合性管理者リスト] および [適合性検索] に追加する

PG&C に対してユーザーを設定する際は、次の 2 点に注意してください。[適合性管理者] の資格で作業するユーザーは、各自の [リスト] ユーザー プロパティで [適合性管理者リスト] を選択しておく必要があります。これによって、ユーザーがデklarレーションを作成するときに、各自の名前がドロップダウン リストに表示されます。また、ユーザーは Web クライアントで適合性検索のフォルダを見るためにその [検索] ユーザー プロパティで選択された [適合性検索] を持つ必要があります。

PG&C 特定のデフォルトの役割は 2 つ用意されています。

- 適合性管理者 (バイヤー側) - PG&C オブジェクトを作成および管理し、PG&C レポートを実行する権限を提供します。また、この役割は部品への読み取り専用アクセスもあります (アイテムと製造元部品)。適合性管理者はサプライヤーへデklarレーションを送信する役割を果たします。

**注意** ユーザーがデklarレーションを作成して適合性管理者を選択すると、次の属性の値がただちに追加されます。役職、電話番号、電子メール アドレス、ファックス番号です。

[適合性管理者] 役割は拡張されて、[読み取り] および [変更] 権限で [適用先] フィールドを設定することができるようになりました。これは、次に説明する [サプライヤー読み取りアイテム] 権限に関連します。

- (限定) マテリアル プロバイダ (サプライヤー側) - デklarレーションの作成、変更、完成、および PG&C オブジェクトのその他すべてのタイプの読み取りに必要な権限を提供します。この役割は、通常、Agile PLM システムに制限付きのアクセスを持つサプライヤー ユーザーに割り当てられます。

**注意** [(限定) マテリアル プロバイダ] 役割には [(限定) 読み取り (アイテム)] 権限マスクがありましたが、[サプライヤー読み取りアイテム] 権限マスクに置き換えられました。

**注意** [(限定) マテリアル プロバイダ] 役割を [変更 (私のオープン状態のデklarレーション)] 権限マスク ([使用箇所] タブ) から削除できますが、復元できないため、不適切な状況になる場合があります。この状況が起きた場合は、[役割の例] をスタートさせて [マテリアル プロバイダ] を新規インストールに保存します。これには [変更 (私のオープン状態のデklarレーション)] 権限マスクが含まれません。

## サプライヤー読み取りアイテム権限

[サプライヤー読み取りアイテム] と呼ばれる新しい権限が次の制限付き役割に追加されています。マテリアル プロバイダ、RFQ の回答およびサプライヤー マネージャです。サプライヤーが表示できる属性を決定できます。これまでは、[限定読み取りアイテム] 権限はこれらの役割の一部で、一部の情報を管理することができませんでした。



## デクラレーション ワークフローを RFI で使用する

調査回答依頼 (RFI) プロセスは適合性管理者 – つまり適合性管理者の役割を与えられた Agile ユーザーにより開始されます。このユーザーは新規デクラレーションを作成するか、または既存のデクラレーションを変更し、部品アセンブリのコンポーネントを指定します。

次の表は、デフォルトのデクラレーション ワークフローを介して展開する RFI プロセスを示しています。

ステータス	アクション
保留中	<ul style="list-style-type: none"> <li>適合性管理者は新規デクラレーションを作成、または既存のデクラレーションを変更し、新規アイテム、製造元部品、部品分類を追加します。</li> <li>デクラレーションに含有基準を追加します。</li> <li>これらの部品のサプライヤに、これらが指定された規定に符合していることを確認するよう求めます。</li> </ul>
サプライヤへ開示	<ul style="list-style-type: none"> <li>サプライヤはサプライヤ企業におり、(限定) マテリアル プロバイダの役割を割り当てられた Agile ユーザーでもあります。</li> <li>サプライヤはこれらの部品が規定に符合するかどうかを確認します。</li> <li>また、サプライヤは、規定に符合する、またはより優れた代替部品を提案します。</li> <li>電子「署名」を行い、デクラレーションを適合性管理者に返します。</li> </ul>
マネージャに送信	適合性管理者はデクラレーションの内容がサプライヤによって完成されたことを検証し、デクラレーションを承認者およびオブザーバに送信します。
レビュー	承認者およびオブザーバはデクラレーションを承認、または却下します。
リリース済み	ワークフローを [リリース済み] ステータスにすることにより、適合性管理者はマテリアルをプロダクト レコードへ公表します。一度公表されると、マテリアルは [アイテム] タブ、[組成] タブ、[製造元部品の組成] タブで表示されます。
実行済み	適合性管理者は、デクラレーションが製造され、フィールドで配布されると、デクラレーションのステータスを [実行済み] に変更します。

デクラレーションは製品アセンブリで部品を一覧表示し、これらの部品に含まれるサブスタンスとマテリアルを表示します。これは 1 つ以上の含有基準にリンクされ、製品アセンブリが含むことのできる特定サブスタンスの量を制限します。デクラレーションは常に 1 つのサプライヤにのみ送信されます。

デクラレーションが適合性管理者へ戻され、レビューされ、リリースされると、デクラレーションのデータが公表され、システムをリセットします。その他の Agile 変更とは異なり (ワークフローを通して移動するルーティング可能オブジェクトなど)、デクラレーションは未リリースとすることができません。ただし、コンテンツに影響を与えることなく、前のステータスに戻すことはできます。

## PG&C でカスタム ワークフローを配置する

サプライヤは、以前はデフォルトのデクラレーション ワークフローにのみアクセスできましたが、PG&C では、カスタム デクラレーションが適切に設定されている場合、カスタム デクラレーションへのアクセスが許可されます。カスタム ワークフローへのアクセスを許可するには、[私のオープン状態のデクラレーション] を変更する必要があります。

デクラレーション カバー ページ.ステータス、等しい、デフォルト デクラレーション.サプライヤへ開示  
AND

カバー ページ.サプライヤ、等しい、\$USERORG

次のように変更します。

(デklarレーション カバー ページ.ステータス、等しい、デフォルト デklarレーション.サプライヤへ開示  
OR

カバー ページ.ステータス、等しい、カスタム ワークフロー <名前>.サプライヤへ開示) AND

カバー ページ.サプライヤ、等しい、\$USERORG

## デklarレーション通知

デklarレーション通知は Agile の変更のように動作します。デklarレーションがサプライヤに送信されると、(正しく設定されているサプライヤ ユーザーに基づいて) [サプライヤ] タブのデフォルトの受信者に通知されます。デklarレーションがバイヤーに戻されると、適合性管理者が通知されます。

他の PG&C オブジェクトは、Product Collaboration のオブジェクトに類似した通知に対応しています。

# アップグレード データベースの PG&C オブジェクト、役割および権限への変更

扱うトピックは次のとおりです。

PG&C ビジネス オブジェクト、役割、および権限マスクをアップグレードする .....	425
PG&C をアップグレードする (リリース 9.2.2) .....	425
PG&C ビジネス オブジェクトに追加される属性 (リリース 9.2.2) .....	427
PG&C をアップグレードする (リリース 9.2.1.3) .....	429
PG&C ビジネス オブジェクトに追加される属性 (リリース 9.2.1) .....	430
適合性管理者役割に追加される権限マスク (リリース 9.2) .....	431
読み取り権限マスクに追加される属性、基本クラス別 (リリース 9.2) .....	431
変更権限マスクに追加される属性、基本クラス別 (リリース 9.2) .....	438

## PG&C ビジネス オブジェクト、役割、および権限マスクをアップグレードする

Agile PLM データベースをアップグレードすると、データベース アップグレード ツール (AUT) のスクリプトによって、以前のリリースからの PGC 関連データがシステムに存在しているかどうかを確認されます。これまで PG&C ソリューションを所有していなかった場合、Agile PLM 設定をアップグレードすると、現在のリリースで導入されたすべての PG&C 属性がデータベースに自動的に追加されます。ただし、使用している既存の Agile PLM の役割と権限マスクは自動的に更新されません。つまり、9.2.1 で PG&C を使用していた場合、9.2.2 リリースで追加された権限と属性は、アップグレード中に既存の役割に追加されません。Java クライアントにそれらを手動で追加する必要があります。

Agile PLM には独自の役割を変更するために使用できる数々の「役割の例」が含まれています ([Java クライアント] > [管理] > [例] ノード フォルダ > [役割の例])。役割の例は読み取り専用であるため、変更することはできません。ただし、[名前を付けて保存] を使用して役割の例のコピーを作成し、コピーされた役割を変更することができます。

役割の例には、権限マスクの例が含まれます ([例] > [権限の例])。[名前を付けて保存] を使用して役割の例のコピーを作成した場合、システムは権限マスクとともに新規役割を作成します。

Product Collaboration 関連の権限は手動で更新する必要があることに注意してください。

## PG&C をアップグレードする (リリース 9.2.2)

以前のバージョンの PG&C を PLM リリース 9.2.2 にアップグレードする際の最も重要な部分は、適合性移行タスクの実行です。

## 適合性移行タスクと一括許容度%

リリース 9.2.2 より前に PG&C を使用していたユーザーは、適合性移行タスクを有効にして 1 回実行する必要があります。実行後、このタスクは不要になり無効にできます。従来の組成に関するデータ移行を完了するためには、このタスクの実行が非常に重要です。実行しない場合は、ロールアップ結果の信頼性が低下します。

ただし、このタスクを実行するには、その前に、組成内のサブスタンスに対してエラー許容度を設定する必要があります。この設定によって、開示レベルの値が指定されます。

1. 適切な[一括許容度%](#)を設定します (410 ページの「[一括許容度%] 設定」を参照)。
2. 次に、[適合性移行タスク](#)を実行します (426 ページの「適合性移行タスクと一括許容度%」を参照)。

ステップ 1 では、一括許容度%設定の説明を読み、会社の従来の組成にとって適切な許容度のレベルについて検討してください。この内容は、システムによる適合性移行タスクの実行時に、組成に適用されます。

一括許容度%の値は、後で変更できますが、変更した値は将来の組成に対してのみ適用されます。一括許容度%を変更した後で、従来のデクラレーションとそれによって線引きされた組成を評価するには、個々のデクラレーションの適合性を 1 つずつ手動で確認する必要があります。

---

<b>注意</b>	アイテムまたは製造元部品の重量が、換算係数が 1 の部品グループとの関連付けによるものである場合は、質量に換算係数が考慮されません。この問題が発生した場合の解決については、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。
-----------	---

---

ステップ 2 では、適合性移行タスクが次のタスクを実行します。

パート 1: すべてのデクラレーションおよび手動でインポートされた製造元部品の組成に対してロールアップを実行します。

パート 2: 一括開示タイプが設定されていない従来のすべての組成に対して、完全なマテリアル開示チェックを実行し、次の 3 つのカテゴリに分類します。[完全公表]、[一部公表]、または [未公表] です。

## 部品グループと換算係数に関する既知の問題

この問題は、リリース 9.2.2 については修正されていますが、アップグレード ユーザーの場合は対処が必要です。つまり、この問題は、9.2.2 アップグレードや前述の適合性移行タスクでは未解決の状態です。

アイテムまたは製造元部品の組成が部品グループからコピーされ、換算係数が 1 でない場合、コピーされた組成の質量で換算係数が考慮されません。この問題が発生した場合の解決については、オラクル社コンサルティングの Agile 担当にお問い合わせください。

次に、この問題を詳細に説明します。組成がすでに公表されている部品グループに部品が追加され、換算係数が 1 より大きい場合、質量が部品グループから関連するアイテムまたは製造元部品にコピーされるときにその換算係数が考慮されなくなります。換算係数が 1 または 1 未満の場合 (これが通常のケースです) は問題ありませんが、たとえば、換算係数が 2 で、部品グループの質量が 10 g の場合は、関連する部品の質量が 10 g としてコピーされる可能性があります。これは、正しくは  $2 \times 10 \text{ g} = 20$  である必要があります。

このため、返されたデクラレーション内のデータを公表する前にレビューして、部品の質量が正しくコピーされていることを確認してください。手動によるデータの入力が必要になる場合があります。

## 組成タイプと従来の組成

PLM 9.2.2 にアップグレードする際は、既存 (従来) の組成の組成タイプを識別する必要があります。移行中に、組成が再使用可能と識別された場合、その組成の [適合性の結果] は、[情報不明] から [免除] や [適合] などの、より適合性の高い値に変更されます。後でユーザーがアセンブリに対して [適合性の算出] を手動で実行したり、スケジュール済みロールアップによってそのアセンブリが評価されると、ロールアップ結果が変更される可能性があります。

含有基準のない組成が再使用可能として識別され、他に再使用可能な (含有基準がある) 組成がある場合は、再使用できるすべての組成を使用して含有基準の適合性の計算が試行されます。このとき、組成ロールアップルール (18-8 ページを参照) が [厳格] に設定されている場合、再使用可能なすべての組成は、含有基準に適合するために、[適合] 状態である必要があります(これは、リリース 9.2.1 における [すべての含有基準] 組成とは対照的です。詳細は、『PG&C ユーザー・ガイド』を参照してください)。

## PG&C ビジネス オブジェクトに追加される属性 (リリース 9.2.2)

### [サブスタンス]>[一般情報] タブ

エイリアス

### [デklarレーション]>[カバー ページ] タブ

無効なサブスタンスあり

ロールアップが必要

### [デklarレーション]>[アイテム]/[製造元部品]/[部品グループ] タブ

一括開示

### [デklarレーション]>[アイテム組成]/[製造元部品の組成]/[部品グループの組成] テーブル

ユーザー入力の CAS 番号

意図的な追加

算出された質量

結果 PPM

結果質量

意図的に追加された含有基準

## [含有基準] > [サブスタンス] タブ

意図的な追加の禁止

## アイテム/製造元部品/部品グループ

次の属性は、いくつかの部品クラスに適用され、タブによって編成されます。

### [組成] タブ

一括開示

### [サブスタンス] タブ

ユーザー入力の CAS 番号

意図的な追加

算出された質量

結果 PPM

結果質量

意図的に追加された含有基準

ソース (アイテム オブジェクトの場合のみ)

### [BOM] タブ (アイテム オブジェクトの場合のみ)

適合性の要約

変更オブジェクト

### [対象アイテム] タブ

適合性の要約

## デフォルトの読み取り権限/変更権限

### 読み取り権限

前述のすべての新規 (9.2.2) 属性は、対応する次の Agile クラスの権限マスクに追加する必要があります。たとえば、[読み取り (アイテム)] および [(限定) 読み取り (アイテム)] は、前述の「アイテム/製造元部品/部品グループ」にリストされているすべての属性に追加する必要があります。

読み取り (アイテム)

(限定) 読み取り (アイテム)

読み取り (製造元部品)

(限定) 読み取り (製造元部品)

読み取り (部品グループ)

(限定) 読み取り (部品グループ)

読み取り (含有基準)

読み取り (サブスタンス)

読み取り (デklarレーション)

読み取り (オープン状態で提出済みの私のデklarレーション)

サプライヤが作成したデklarレーションの読み取り

## 変更権限

次の新規 (9.2.2) 属性は、指定の権限マスクに追加する必要があります。

変更 (すべてのアイテム): ユーザー入力の CAS 番号、意図的な追加、ソース

変更 (プレリミナリ アイテム): ユーザー入力の CAS 番号、意図的な追加、ソース

変更 (リリース済みアイテム): ユーザー入力の CAS 番号、意図的な追加、ソース

変更 (製造元部品): ユーザー入力の CAS 番号、意図的な追加、ソース

変更 (サブスタンス): エイリアス

変更 (含有基準): 意図的な追加の禁止

変更 (デklarレーション): ユーザー入力の CAS 番号、意図的な追加

変更 (私のオープン状態のデklarレーション): ユーザー入力の CAS 番号、意図的な追加

変更 (サプライヤ作成済みデklarレーション): ユーザー入力の CAS 番号、意図的な追加

## PG&C をアップグレードする (リリース 9.2.1.3)

アップグレード ユーザーは、作成した役割および Agile Import を使用する必要があるユーザーに対して、新しいインポート権限を手動で追加する必要があります。[(限定) マテリアル プロバイダ] 役割は、Java クライアントでは変更できないため、Agile サポートに連絡してください。

# PG&C ビジネス オブジェクトに追加される属性 (リリース 9.2.1)

## デklarレーション - カバー ページ

適合性管理者の役職

適合性管理者の電話番号

適合性管理者の電子メール

適合性管理者のファックス番号

サプライヤの DUNS 番号

サプライヤの住所

サプライヤ担当者の役職

サプライヤ担当者の電話番号

サプライヤ担当者の電子メール

サプライヤ担当者のファックス番号

サプライヤ担当者名

## アイテム - [適合性] タブ - [組成] テーブル

ソース

組成タイプ

サプライヤによる提出日

リリース日

## 製造元部品 - [適合性] タブ - [組成] テーブル

ソース

組成タイプ

サプライヤによる提出日

リリース日

## 部品グループ - [適合性] タブ - [組成] テーブル

ソース

組成タイプ



サプライヤによる提出日

リリース日

## 適合性管理者役割に追加される権限マスク (リリース 9.2)

エクスポート

読み取り (アイテム)

読み取り (製造元部品)

読み取り (サプライヤ)

## 読み取り権限マスクに追加される属性、基本クラス別 (リリース 9.2)

### サブスタンス

サブスタンス.組成.換算係数

サブスタンス.一般情報.基本サブスタンス

### 含有基準

含有基準.一般情報.除外規定

含有基準.一般情報.検証タイプ

### 部品グループ

部品グループ.組成.適合性判定値

部品グループ.組成.組成

部品グループ.組成.デklarレーション タイプ

部品グループ.組成.適合性宣言値

部品グループ.組成.重量宣言値

部品グループ.組成.有効開始日

部品グループ.組成.除外規定失効日  
部品グループ.組成.除外規定  
部品グループ.組成.適合性の結果  
部品グループ.組成.含有基準  
部品グループ.組成.サブライヤ  
部品グループ.コンポジション.タイプ (イメージ)  
部品グループ.部品ファミリ タイトル ブロック.適合判定日付  
部品グループ.部品ファミリ タイトル ブロック.全体適合性  
部品グループ.含有基準.適合性判定値  
部品グループ.含有基準.適合性宣言値  
部品グループ.含有基準.説明  
部品グループ.含有基準.除外規定失効日  
部品グループ.含有基準.除外規定  
部品グループ.含有基準.管轄権  
部品グループ.含有基準.ライフサイクル フェーズ  
部品グループ.含有基準.適合性の確認が必要  
部品グループ.含有基準.適合性の結果  
部品グループ.含有基準.含有基準  
部品グループ.含有基準.含有基準 タイプ  
部品グループ.含有基準.タイプ (イメージ)  
部品グループ.含有基準.検証タイプ  
部品グループ.サブスタンス.適合性判定値  
部品グループ.サブスタンス.PPM 算出値  
部品グループ.サブスタンス.子のレベル  
部品グループ.サブスタンス.換算係数  
部品グループ.サブスタンス.除外規定失効日  
部品グループ.サブスタンス.除外規定  
部品グループ.サブスタンス.レポート  
部品グループ.サブスタンス.適合性の結果  
部品グループ.サブスタンス.含有基準  
部品グループ.サブスタンス.閾値 (PPM)

## デクラレーション

デクラレーション.アイテム組成.適合性判定値

デクラレーション.アイテム組成.PPM 算出値

デクラレーション.アイテム組成.子レベル

デクラレーション.アイテム組成.換算係数

デクラレーション.アイテム組成.除外規定失効日

デクラレーション.アイテム組成.除外規定

デクラレーション.アイテム組成.適合性の結果

デクラレーション.アイテム組成.含有基準

デクラレーション.アイテム.適合性判定値

デクラレーション.アイテム.適合性宣言値

デクラレーション.アイテム.有効開始日

デクラレーション.アイテム.除外規定失効日

デクラレーション.アイテム.除外規定

デクラレーション.アイテム.適合性の結果

デクラレーション.アイテム.含有基準

デクラレーション.製造元部品の組成.適合性判定値

デクラレーション.製造元部品の組成.PPM 算出値

デクラレーション.製造元部品の組成.子レベル

デクラレーション.製造元部品の組成.換算係数

デクラレーション.製造元部品の組成.除外規定失効日

デクラレーション.製造元部品の組成.除外規定

デクラレーション.製造元部品の組成.適合性の結果

デクラレーション.製造元部品の組成.含有基準

デクラレーション.製造元部品.適合性判定値

デクラレーション.製造元部品.適合性宣言値

デクラレーション.製造元部品.有効開始日  
デクラレーション.製造元部品.除外規定失効日  
デクラレーション.製造元部品.除外規定  
デクラレーション.製造元部品.適合性の結果  
デクラレーション.製造元部品.含有基準  
デクラレーション.部品グループの組成.適合性判定値  
デクラレーション.部品グループの組成.PPM 算出値  
デクラレーション.部品グループの組成.子レベル  
デクラレーション.部品グループの組成.換算係数  
デクラレーション.部品グループの組成.除外規定失効日  
デクラレーション.部品グループの組成.除外規定  
デクラレーション.部品グループの組成.適合性の結果  
デクラレーション.部品グループの組成.含有基準  
デクラレーション.部品グループ.適合性判定値  
デクラレーション.部品グループ.適合性宣言値  
デクラレーション.部品グループ.有効開始日  
デクラレーション.部品グループ.除外規定失効日  
デクラレーション.部品グループ.除外規定  
デクラレーション.部品グループ.適合性の結果  
デクラレーション.部品グループ.含有基準  
デクラレーション.参照.説明  
デクラレーション.関係 - 影響元.タイプ (イメージ)  
デクラレーション.関係 - 影響先.適合した条件  
デクラレーション.関係 - 影響先.現在のステータス  
デクラレーション.関係 - 影響先.説明  
デクラレーション.関係 - 影響先.イベント  
デクラレーション.関係 - 影響先.通知  
デクラレーション.関係 - 影響先.番号  
デクラレーション.関係 - 影響先.結果  
デクラレーション.関係 - 影響先.タイプ (イメージ)

## アイテム

アイテム.組成.適合性判定値  
アイテム.組成.組成  
アイテム.組成.デklarレーション説明  
アイテム.組成.デklarレーション ライフサイクル フェーズ  
アイテム.組成.デklarレーション タイプ  
アイテム.組成.適合性宣言値  
アイテム.組成.重量宣言値  
アイテム.組成.有効開始日  
アイテム.組成.除外規定失効日  
アイテム.組成.除外規定  
アイテム.組成.適合性の結果  
アイテム.組成.含有基準  
アイテム.組成.サプライヤ  
アイテム.製造元.適合性の要約  
アイテム.含有基準.適合性判定値  
アイテム.含有基準.適合性宣言値  
アイテム.含有基準.説明  
アイテム.含有基準.除外規定失効日  
アイテム.含有基準.除外規定  
アイテム.含有基準.管轄権  
アイテム.含有基準.ライフサイクル フェーズ  
アイテム.含有基準.適合性の確認が必要  
アイテム.含有基準.適合性の結果  
アイテム.含有基準.含有基準  
アイテム.含有基準.含有基準 タイプ  
アイテム.含有基準.検証タイプ

アイテム.サブスタンス.CAS 番号  
アイテム.サブスタンス.適合性判定値  
アイテム.サブスタンス.PPM 算出値  
アイテム.サブスタンス.子レベル  
アイテム.サブスタンス.換算係数  
アイテム.サブスタンス.デクラレーション  
アイテム.サブスタンス.適合性宣言値  
アイテム.サブスタンス.PPM 宣言値  
アイテム.サブスタンス.除外規定失効日  
アイテム.サブスタンス.除外規定  
アイテム.サブスタンス.ライフサイクル フェーズ  
アイテム.サブスタンス.質量  
アイテム.サブスタンス.レポート  
アイテム.サブスタンス.適合性の結果  
アイテム.サブスタンス.含有基準  
アイテム.サブスタンス.サブスタンス名  
アイテム.サブスタンス.サブスタンス タイプ  
アイテム.サブスタンス.閾値 (PPM)  
アイテム.サブスタンス.タイプ (イメージ)  
アイテム.サプライヤ.ライフサイクル フェーズ  
アイテム.サブスタンス.サブスタンス タイプ  
アイテム.サブスタンス.サプライヤ  
アイテム.サプライヤ.拠点  
アイテム.サプライヤ.サプライヤ  
アイテム.サプライヤ.タイプ (イメージ)  
アイテム.タイトル ブロック.適合判定日付  
アイテム.タイトル ブロック.ロールアップから除外  
アイテム.タイトルブロック.全体適合性  
アイテム.タイトルブロック.出荷可能アイテム

## 製造元部品

製造元部品.含有基準.適合性宣言値

製造元部品.組成.適合性宣言値

製造元部品.組成.重量宣言値

製造元部品.含有基準.説明

製造元部品.組成.有効開始日

製造元部品.含有基準.除外規定失効日

製造元部品.組成.除外規定失効日

製造元部品.サブスタンス.除外規定失効日

製造元部品.含有基準.除外規定

製造元部品.組成.除外規定

製造元部品.サブスタンス.除外規定

製造元部品.含有基準.管轄権

製造元部品.含有基準.ライフサイクル フェーズ

製造元部品.含有基準.適合性の確認が必要

製造元部品.含有基準.適合性の結果

製造元部品.組成.適合性の結果

製造元部品.サブスタンス.適合性の結果

製造元部品.含有基準.含有基準

製造元部品.組成.含有基準

製造元部品.サブスタンス.含有基準

製造元部品.組成.サプライヤ

製造元部品.含有基準.含有基準 タイプ

製造元部品.含有基準.タイプ (イメージ)

製造元部品.組成.タイプ (イメージ)

製造元部品.含有基準.検証タイプ

製造元部品.組成.デklarレーション タイプ

製造元部品.一般情報.適合判定日付

製造元部品.一般情報.全体適合性

製造元部品.サブスタンス.子レベル

製造元部品.サブスタンス.閾値 (PPM)

## 変更権限マスクに追加される属性、基本クラス別 (リリース 9.2)

### 変更 (デクラレーション)

デクラレーション.アイテム組成.CAS 番号

デクラレーション.アイテム組成.換算係数

デクラレーション.アイテム組成.除外規定失効日

デクラレーション.アイテム組成.除外規定

デクラレーション.アイテム組成.サブスタンス名

デクラレーション.アイテム組成.サブスタンス タイプ

デクラレーション.アイテム.適合性宣言値

デクラレーション.アイテム.有効開始日

デクラレーション.アイテム.除外規定失効日

デクラレーション.アイテム.除外規定

デクラレーション.アイテム.アイテム リビジョン

デクラレーション.アイテム.含有基準

デクラレーション.製造元部品の組成.CAS 番号

デクラレーション.製造元部品の組成.換算係数

デクラレーション.製造元部品の組成.除外規定失効日

デクラレーション.製造元部品の組成.除外規定

デクラレーション.製造元部品の組成.サブスタンス名

デクラレーション.製造元部品の組成.サブスタンス タイプ

デクラレーション.製造元部品.適合性宣言値

デクラレーション.製造元部品.有効開始日



デクラレーション.製造元部品.除外規定失効日  
デクラレーション.製造元部品.除外規定  
デクラレーション.製造元部品.製造元名  
デクラレーション.製造元部品.含有基準  
デクラレーション.製造元部品の組成.CAS 番号  
デクラレーション.部品グループの組成.換算係数  
デクラレーション.部品グループの組成.除外規定失効日  
デクラレーション.部品グループの組成.除外規定  
デクラレーション.部品グループの組成.サブスタンス名  
デクラレーション.部品グループの組成.サブスタンス タイプ  
デクラレーション.部品グループ.適合性宣言値  
デクラレーション.部品グループ.有効開始日  
デクラレーション.部品グループ.除外規定失効日  
デクラレーション.部品グループ.除外規定  
デクラレーション.部品グループ.製造元名  
デクラレーション.部品グループ.含有基準  
デクラレーション.参照.通知  
デクラレーション.参照.番号  
デクラレーション.関係 - 影響元.イベント  
デクラレーション.関係 - 影響元.通知  
デクラレーション.関係 - 影響元.番号  
デクラレーション.関係 - 影響元.結果  
デクラレーション.関係 - 影響先.イベント  
デクラレーション.関係 - 影響先.通知  
デクラレーション.関係 - 影響先.番号  
デクラレーション.関係 - 影響先.結果  
デクラレーション.デクラレーション 含有基準.対応  
デクラレーション.デクラレーション 含有基準.含有基準

## 変更 (製造元部品)

製造元部品.含有基準.適合性宣言値

製造元部品.サブスタンス.適合性宣言値

製造元部品.サブスタンス.PPM 宣言値

製造元部品.含有基準.除外規定失効日

製造元部品.含有基準.除外規定

製造元部品.サブスタンス.質量

製造元部品.含有基準.含有基準

## 変更 (私のオープン状態のデklarレーション)

デklarレーション.カバー ページ.適合性管理者

デklarレーション.カバー ページ.説明

デklarレーション.カバー ページ.締切日

デklarレーション.カバー ページ.名前

デklarレーション.カバー ページ.ワークフロー

デklarレーション.アイテム組成.CAS 番号

デklarレーション.アイテム組成.換算係数

デklarレーション.アイテム組成.除外規定失効日

デklarレーション.アイテム組成.除外規定

デklarレーション.アイテム組成.サブスタンス名

デklarレーション.アイテム組成.サブスタンス タイプ

デklarレーション.アイテム.適合性宣言値

デklarレーション.アイテム.有効開始日

デklarレーション.アイテム.除外規定失効日

デklarレーション.アイテム.除外規定

デklarレーション.アイテム.含有基準

デklarレーション.アイテム.テキスト 10

デklarレーション.製造元部品の組成.CAS 番号

デklarレーション.製造元部品の組成.換算係数

デklarレーション.製造元部品の組成.除外規定失効日

デクラレーション.製造元部品の組成.除外規定  
デクラレーション.製造元部品の組成.サブスタンス名  
デクラレーション.製造元部品の組成.サブスタンス タイプ  
デクラレーション.製造元部品.適合性宣言値  
デクラレーション.製造元部品.有効開始日  
デクラレーション.製造元部品.除外規定失効日  
デクラレーション.製造元部品.除外規定  
デクラレーション.製造元部品.製造元名  
デクラレーション.製造元部品.含有基準  
デクラレーション.製造元部品.テキスト 10  
デクラレーション.部品グループの組成.CAS 番号  
デクラレーション.部品グループの組成.換算係数  
デクラレーション.部品グループの組成.説明  
デクラレーション.部品グループの組成.除外規定失効日  
デクラレーション.部品グループの組成.除外規定  
デクラレーション.部品グループの組成.サブスタンス名  
デクラレーション.部品グループの組成.サブスタンス タイプ  
デクラレーション.部品グループ.適合性宣言値  
デクラレーション.部品グループ.有効開始日  
デクラレーション.部品グループ.除外規定失効日  
デクラレーション.部品グループ.除外規定  
デクラレーション.部品グループ.製造元名  
デクラレーション.部品グループ.含有基準  
デクラレーション.デクラレーション 含有基準.対応  
デクラレーション.デクラレーション 含有基準.含有基準

## 変更 (プレリミナリ アイテム)

アイテム.含有基準.適合性宣言値

アイテム.含有基準.除外規定失効日

アイテム.含有基準.除外規定

アイテム.含有基準.含有基準

アイテム.サブスタンス.適合性宣言値

アイテム.サブスタンス.PPM 宣言値

アイテム.サブスタンス.質量

## 変更 (リリース済みアイテム)

アイテム.含有基準.適合性宣言値

アイテム.含有基準.除外規定失効日

アイテム.含有基準.除外規定

アイテム.含有基準.含有基準

アイテム.サブスタンス.適合性宣言値

アイテム.サブスタンス.PPM 宣言値

アイテム.サブスタンス.質量

## 変更 (含有基準)

なし

## 変更 (サブスタンス)

サブスタンス.添付ファイル.添付ファイル タイプ

サブスタンス.添付ファイル.ファイル説明

サブスタンス.添付ファイル.ファイル名

サブスタンス.添付ファイル.フォルダ説明

サブスタンス.添付ファイル.フォルダ バージョン

サブスタンス.添付ファイル.通知

サブスタンス.組成.換算係数

サブスタンス.組成.名前

サブスタンス.一般情報.基本サブスタンス

サブスタンス.一般情報.CAS 番号

サブスタンス.一般情報.説明

サブスタンス.一般情報.ライフサイクル フェーズ

サブスタンス.一般情報.名前

